

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第171集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集

矢田遺跡 V

古墳時代住居跡編 (2)

1 9 9 4

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第171集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第24集

矢田遺跡 V

古墳時代住居跡編 (2)

1 9 9 4

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団



矢田遺跡（現 吉井インターチェンジ）と周辺の地形（北から）



第39号住居跡竈（西から）



第49号住居跡竈（西から）



第150号住居跡竈（東から）



第152号住居跡西竈（東から）



第445号住居跡竈（南から）



第485号住居跡北竈（南から）



第510号住居跡竈（西から）



第521号住居跡竈（西から）

序

上信越自動車道は群馬、長野両県の期待のなかで平成5年3月開通致しました。関越自動車道新潟線に続いての高速自動車道の開通は群馬県に取りまして、本格的な高速自動車道の時代にはいったといえましょう。これらの高速自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査をとおしまして、県民の期待に答えられました事は当事業団といたしましても多くの喜びとするところでございます。

矢田遺跡は吉井インターチェンジに在り、面積は広く、各時代にわたり多くの遺構が出現したことから、発掘調査は昭和61年度から平成3年度半ばに及ぶ長期間にわたるものでした。したがって、整理事業も平成元年度よりのべ9年という長い期間が設定されました。この間既に報告書を4巻刊行し、本年度は第5巻の刊行の運びとなりました。

今回の報告では古墳時代の住居跡が対象となっており、以下のことにはふれていませんが、矢田遺跡を含むこの地域は国指定史跡の「多胡碑」や「続日本紀」の関連記事から、「上野国多胡郡八(矢)田郷」にあたるのではないかと推定されておりました。発掘調査の結果、「八田郷」と刻書された紡錘車をはじめ数々の文字資料の出土があり、当初の推定が証明されたという貴重な遺跡であります。

本報告書が県民各位・研究者・各教育機関等で広く活用され、この地域の歴史を解明していく一助となることを期待しております。

また、発掘調査・整理事業を行うにあたり、日本道路公団・群馬県教育委員会・吉井町教育委員会をはじめ多くの方々からいただきました御指導・御援助に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

- 1 本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「矢田遺跡」の発掘調査報告書である。本書は、古墳時代住居跡編（2）で、矢田遺跡の調査成果の分冊の5である。
- 2 矢田遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田606・607番地ほかの周辺に所在し、大字名を遺跡名に採用している。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査及び整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。
- 5 調査期間及び担当者

- (1) 発掘調査 調査期間 昭和61年4月1日～平成2年8月27日、平成3年11月5日～11月26日
調査担当者 鬼形芳夫(昭和61年度、専門員、現高崎市教育委員会事務局文化財保護係長)
依田治雄(平成3年度、専門員、平成3年度以降課長)
中沢 悟(昭和61～平成3年度、専門員)
春山秀幸(昭和62・63年度、調査研究員、現藤岡市立東中学校教諭)
関口功一(昭和63・平成元年度、調査研究員、現桐生市立商業高等学校教諭)
内木真琴(昭和61・62年度、調査研究員、現群馬県立高崎北高等学校教諭)
富田一仁(平成元・2年度、調査研究員、現群馬県立境高等学校教諭)
関口博幸(平成2年度、調査研究員)
- (2) 整理 整理期間 平成5年4月1日～平成6年3月31日、整理担当者 中沢 悟
- (3) 事務 常務理事 白石保三郎(昭和61～63年度)、邊見長雄(平成元～4年度)、中村英一
事務局長 井上唯雄(昭和61・62年度)、松本浩一(昭和63～平成3年度)、近藤 功
管理部長 大沢秋良(昭和61年度)、田口紀雄(昭和62～平成2年度)、佐藤 勉
調査研究部長 上原啓巳(昭和61～63年度)、神保侑史
関越道上越線調査事務所所長 井上 信(昭和61～63年度)、高橋一夫(平成元・2年度)
阿部千明(平成3年4月～11月)、松本浩一(平成3年12月～3月)、吉田 肇
総括次長 片桐光一(昭和61～平成元年度)、大澤友治(平成2・3年度)
次長 原田恒弘(昭和62年度)、徳江 紀(昭和63～平成2年度)
課長 長谷部達雄(昭和61年度)、鬼形芳夫(昭和62～平成2年度)、依田治雄
庶務課 係長代理 黒澤重樹(昭和61～63年度)、宮川初太郎(平成元～2年度)
主任 国定 均(昭和63～平成元年度)、笠原秀樹(平成2・3年度)、吉田有光
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、秋山友衛、松井留男、町田康子、本城美樹、
後閑玲子、田中智恵美、高田千恵、吉田登志子、高橋あゆみ

6 報告書作成関係者

編 集 中沢 悟

本文執筆 依田治雄(第1章 第1節)、中沢 悟(第1章 第1節以外)

遺構写真	鬼形芳夫、依田治雄、中沢 悟、内木真琴、春山秀幸、関口功一、富田一仁、 関口博幸
遺物保存処理	関 邦一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師） 小材浩一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員） 樋口一之（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員） 土橋まり子（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団非常勤嘱託員）
遺物写真	佐藤元彦（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団技師）
遺物観察	中沢 悟
整理補助	遠藤栄子、柿田順子、酒井史恵、下山弥生、堀米弘美、峯岸貞子、上原明子
委託関係	【航空写真】 藍青高館、たつみ写真スタジオ 【遺構測量、遺構・遺物トレース】 藍測設 【石材鑑定】 陣内主一

- 7 出土遺物・凶面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターの収蔵庫に保管してある。
- 8 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。（敬称略、50音順）

吉井町教育委員会 井上 太、小林昌二、小安和順、関 和彦、陣内主一、堤 隆、津野 仁、
永嶋正春、仲山英樹、平川 南、茂木由行、矢島健一、矢島 浩、渡辺 一

9 発掘調査従事者

青木いせ、天田文子、(故)新井克巳、新井幸子、新井すみ子、新井高子、新井まつ子、新井 緑、
新井富貴子、新井真弓、飯塚和良、飯塚初代、飯塚 房、伊倉茂登子、井田松寿、今井 好、
浦野千代子、江原まさ子、遠藤秀子、大木みさ子、大木みつ、落合君子、鬼形田鶴子、加藤節子、
金井すみ江、金井はる、金沢友次、神戸ハツエ、神戸 啓、喜多川源造、木村ハナ子、工藤きみよ、
栗原 清、黒沢敦子、黒沢京子、黒沢 治、小嶋八重子、小林愛子、小林きよ子、小林善三、小林初美、
佐藤八千代、斎藤友枝、斎藤初子、斎藤英子、斎藤政宏、斎藤美知子、志賀シゲ子、志賀 大、
紫藤カヲル、紫藤 孝、篠崎とよ、柴崎太郎、島田八千代、清水桂子、清水千代、白井精一、神保恵子、
神保すみ江、神保 進、杉田きくの、鈴木ふさ子、鈴木幸男、高田 嵩、高田三枝子、高橋千恵子、
高橋ちよ子、高橋春代、滝沢利子、竹内栄子、建部すみ子、田中みき江、田端春治、佃 満、寺尾克代、
中村いち、櫛島静子、(故)櫛島豊統、野口節郎、野口照子、野中正江、長谷川良一、長谷川高子、
林 敏子、原口葉子、平田 昇、藤本ひろ子、本間敏子、松本タツノ、松本良子、三ヶ島富二郎、
三木時一、宮下憲子、村上繁代、望月登代子、百瀬美子、森 利子、森 基司、矢田部喜代美、
山崎孝子、湯浅安代、吉田良子、吉田たづ子、(故)吉田一子、若林さく子、若林てい子、若林トヨ子

（敬称略、50音順）

上記以外にも、周辺地域の多くの方々のご協力を受けた。

凡 例

- 1 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。

住居跡 1/60、竈 1/30を原則に、基準としてスケールを配している。

- 2 遺構実測図に記した断面基準線等は、いずれも海拔標高を表す。

- 3 遺構実測図の方位記号は、座標北を示す（国土座標第IX系）。


- 4 遺物実測図の縮尺は、次の通りである。

甗・甑・壺・鉢1/4、高坏・坏・蓋1/3、石製品・鉄製品1/2

を基本としており、それ以外はその都度縮尺を示した。

- 5 遺構実測図中のスクリーントーンは下記のことを示す。

(遺構)  焼土  粘土

(遺物)  表面磨き後黒色処理  内面漆又は吸炭、外面吸炭

その他の場合はその都度示す。

遺構図面に関しては、必要に応じ遺物分布のドット図を作成したが、シンボル・マークは下記のことを示す。

● 土器類 △ 石器類 ▲ 鉄器類 ★ 紡錘車

- 6 出土遺物については、遺物観察表を用いて記した。遺物の残存は図示できた部分の比率である。なお遺物番号は、遺物実測図・遺構実測図内遺物番号・遺物観察表遺物番号・写真図版遺物番号に一致する。

- 7 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修(財)日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」1988年度版を使用している。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次
図版目次
抄 録

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過	3
第1節 発掘調査に至る経緯	3
第2節 調査の方法と経過	4
1 調査の方法	4
2 調査の経過	5
第2章 地理的環境及び歴史的環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3節 基本層序	12
第3章 古墳時代の遺構と遺物	15
第4章 調査成果の整理とまとめ	268
第1節 住居の時期決定について	268
第2節 ま と め	277

発掘報告書抄録

写真図版

付図 矢田遺跡全体図

挿 図 目 次

第 1 図	矢田遺跡調査区及びグリッド配置図	4	第 59 図	65号住居跡・出土遺物実測図	64
第 2 図	矢田遺跡と周辺の遺跡分布図	8	第 60 図	67号住居跡実測図	65
第 3 図	矢田遺跡周辺図	9	第 61 図	68号住居跡実測図(1)	66
第 4 図	基本層序概念図	12	第 62 図	68号住居跡実測図(2)	67
第 5 図	本報告住居周辺遺構分布図	13	第 63 図	68号住居跡出土遺物実測図	67
第 6 図	5号住居跡実測図	15	第 64 図	100号住居跡実測図	68
第 7 図	5号住居跡床下・出土遺物実測図	16	第 65 図	100号住居跡出土遺物実測図	69
第 8 図	6号住居跡実測図	17	第 66 図	102号住居跡・竈実測図	70
第 9 図	6号住居跡竈実測図	18	第 67 図	102号住居跡出土遺物実測図	71
第 10 図	6号住居跡出土遺物実測図	18	第 68 図	104号住居跡・竈実測図	72
第 11 図	7号住居跡実測図	20	第 69 図	104号住居跡出土遺物実測図	73
第 12 図	7号住居跡新東竈・旧北竈実測図	21	第 70 図	106号住居跡実測図(1)	73
第 13 図	7号住居跡出土遺物実測図(1)	21	第 71 図	106号住居跡実測図(2)	74
第 14 図	7号住居跡出土遺物実測図(2)	22	第 72 図	106号住居跡出土遺物実測図	75
第 15 図	34号住居跡実測図	23	第 73 図	111号住居跡実測図	76
第 16 図	34号住居跡竈・出土遺物実測図	24	第 74 図	111号住居跡竈実測図	77
第 17 図	38号住居跡実測図(1)	25	第 75 図	111号住居跡出土遺物実測図(1)	77
第 18 図	38号住居跡実測図(2)	26	第 76 図	111号住居跡出土遺物実測図(2)	78
第 19 図	38号住居跡竈実測図	26	第 77 図	150号住居跡実測図(1)	79
第 20 図	38号住居跡出土遺物実測図(1)	27	第 78 図	150号住居跡(2)・旧北竈実測図	80
第 21 図	38号住居跡出土遺物実測図(2)	28	第 79 図	150号住居跡床下実測図	81
第 22 図	39号住居跡実測図	30	第 80 図	150号住居跡新西竈実測図	82
第 23 図	39号住居跡竈実測図	31	第 81 図	150号住居跡出土遺物実測図(1)	83
第 24 図	39号住居跡出土遺物実測図	32	第 82 図	150号住居跡出土遺物実測図(2)	83
第 25 図	41号住居跡実測図	33	第 83 図	152号住居跡・旧北竈実測図	85
第 26 図	41号住居跡新北竈・旧東竈実測図	34	第 84 図	拡張以前に想定される152号住居跡実測図	86
第 27 図	41号住居跡出土遺物実測図	35	第 85 図	152号住居跡新西竈実測図	87
第 28 図	44号住居跡実測図(1)	36	第 86 図	152号住居跡出土遺物実測図(1)	88
第 29 図	44号住居跡実測図(2)	37	第 87 図	152号住居跡出土遺物実測図(2)	89
第 30 図	44号住居跡床下実測図	38	第 88 図	153号住居跡実測図	90
第 31 図	44号住居跡新東竈・旧東竈実測図	39	第 89 図	153号住居跡竈・出土遺物実測図	91
第 32 図	44号住居跡旧北竈実測図	40	第 90 図	155号住居跡・出土遺物実測図	92
第 33 図	44号住居跡出土遺物実測図(1)	40	第 91 図	432号住居跡実測図	93
第 34 図	44号住居跡出土遺物実測図(2)	41	第 92 図	432号住居跡竈・出土遺物実測図	94
第 35 図	45号住居跡実測図	42	第 93 図	433号住居跡実測図	95
第 36 図	45号住居跡竈実測図	43	第 94 図	433号住居跡床下実測図	96
第 37 図	45号住居跡出土遺物実測図	43	第 95 図	433号住居跡新東竈実測図	97
第 38 図	49号住居跡実測図(1)	44	第 96 図	433号住居跡旧北竈実測図	98
第 39 図	49号住居跡実測図(2)	45	第 97 図	433号住居跡出土遺物実測図	98
第 40 図	49号住居跡竈実測図	45	第 98 図	437号住居跡実測図(1)	99
第 41 図	49号住居跡出土遺物実測図(1)	46	第 99 図	437号住居跡(2)・竈実測図	100
第 42 図	49号住居跡出土遺物実測図(2)	47	第100 図	441号住居跡実測図	101
第 43 図	53号住居跡実測図	48	第101 図	442号住居跡実測図	102
第 44 図	53号住居跡出土遺物実測図(1)	49	第102 図	442号住居跡床下・竈実測図	103
第 45 図	53号住居跡出土遺物実測図(2)	50	第103 図	442号住居跡出土遺物実測図	104
第 46 図	56号住居跡実測図	52	第104 図	443号住居跡実測図	106
第 47 図	56号住居跡竈実測図	53	第105 図	443号住居跡竈・出土遺物(1)実測図	107
第 48 図	56号住居跡出土遺物実測図(1)	53	第106 図	443号住居跡出土遺物実測図(2)	108
第 49 図	56号住居跡出土遺物実測図(2)	54	第107 図	443号住居跡出土遺物実測図(3)	109
第 50 図	58号住居跡実測図	56	第108 図	444号住居跡実測図(1)	111
第 51 図	58号住居跡床下・出土遺物実測図	57	第109 図	444号住居跡実測図(2)	112
第 52 図	59号住居跡実測図(1)	58	第110 図	444号住居跡新北竈実測図	113
第 53 図	59号住居跡実測図(2)	59	第111 図	444号住居跡旧東竈実測図	113
第 54 図	59号住居跡竈実測図	59	第112 図	444号住居跡出土遺物実測図	114
第 55 図	59号住居跡出土遺物実測図	60	第113 図	445号住居跡実測図	117
第 56 図	62号住居跡実測図	62	第114 図	445号住居跡新北竈実測図	118
第 57 図	62号住居跡出土遺物実測図(1)	62	第115 図	445号住居跡出土遺物実測図(1)	119
第 58 図	62号住居跡出土遺物実測図(2)	63	第116 図	445号住居跡出土遺物実測図(2)	120

第117图	445号住居跡出土遺物実測図(3)	121	第180图	508号住居跡実測図(1)	182
第118图	446号住居跡実測図	124	第181图	508号住居跡実測図(2)	183
第119图	446号住居跡竈実測図	125	第182图	508号住居跡竈実測図	184
第120图	446号住居跡出土遺物実測図	126	第183图	508号住居跡出土遺物実測図	184
第121图	448号住居跡実測図	128	第184图	509号住居跡実測図(1)	186
第122图	448号住居跡床下・出土遺物実測図	129	第185图	509号住居跡実測図(2)	187
第123图	448号住居跡竈実測図	129	第186图	509号住居跡新東竈・旧北竈・出土遺物実測図	188
第124图	456号住居跡実測図(1)	131	第187图	510号住居跡実測図	190
第125图	456号住居跡実測図(2)	132	第188图	510号住居跡床下実測図	191
第126图	456号住居跡新北竈実測図	132	第189图	510号住居跡竈実測図	191
第127图	456号住居跡旧東竈・旧西竈実測図	133	第190图	510号住居跡出土遺物実測図	192
第128图	456号住居跡出土遺物実測図(1)	133	第191图	518号住居跡実測図	194
第129图	456号住居跡出土遺物実測図(2)	134	第192图	518号住居跡竈実測図	194
第130图	456号住居跡出土遺物実測図(3)	135	第193图	518号住居跡出土遺物実測図	195
第131图	460号住居跡実測図	137	第194图	520号住居跡実測図	196
第132图	460号住居跡床下実測図	138	第195图	520号住居跡床下実測図	197
第133图	460号住居跡竈実測図	138	第196图	520号住居跡新東竈実測図	198
第134图	460号住居跡出土遺物実測図	139	第197图	520号住居跡旧北竈実測図	199
第135图	471号住居跡・出土遺物実測図	141	第198图	520号住居跡出土遺物実測図(1)	199
第136图	471号住居跡竈実測図	141	第199图	520号住居跡出土遺物実測図(2)	200
第137图	485号住居跡実測図(1)	142	第200图	521号住居跡実測図	203
第138图	485号住居跡(2)・床下実測図	143	第201图	521号住居跡竈実測図	204
第139图	485号住居跡新北竈実測図	144	第202图	521号住居跡出土遺物実測図(1)	204
第140图	485号住居跡旧東竈実測図	145	第203图	521号住居跡出土遺物実測図(2)	205
第141图	485号住居跡出土遺物実測図(1)	145	第204图	523号住居跡実測図(1)	207
第142图	485号住居跡出土遺物実測図(2)	146	第205图	523号住居跡実測図(2)	208
第143图	486号住居跡実測図	148	第206图	523号住居跡出土遺物実測図	208
第144图	486号住居跡竈実測図	149	第207图	524号住居跡実測図	210
第145图	486号住居跡出土遺物実測図(1)	149	第208图	524号住居跡床下実測図	211
第146图	486号住居跡出土遺物実測図(2)	150	第209图	524号住居跡新北竈・旧東竈実測図	212
第147图	489号住居跡実測図(1)	152	第210图	524号住居跡旧北竈実測図	213
第148图	489号住居跡実測図(2)	153	第211图	524号住居跡出土遺物実測図(1)	213
第149图	489号住居跡新東竈実測図	153	第212图	524号住居跡出土遺物実測図(2)	214
第150图	489号住居跡旧北竈実測図	154	第213图	528号住居跡実測図	216
第151图	489号住居跡出土遺物実測図(1)	154	第214图	528号住居跡新西竈実測図	217
第152图	489号住居跡出土遺物実測図(2)	155	第215图	528号住居跡旧北竈実測図	218
第153图	491号住居跡実測図(1)	156	第216图	528号住居跡出土遺物実測図(1)	218
第154图	491号住居跡実測図(2)	157	第217图	528号住居跡出土遺物実測図(2)	219
第155图	491号住居跡新東竈・旧北竈実測図	158	第218图	529号住居跡実測図	220
第156图	491号住居跡出土遺物実測図(1)	159	第219图	533号住居跡実測図	221
第157图	491号住居跡出土遺物実測図(2)	160	第220图	533号住居跡竈・出土遺物実測図	222
第158图	491号住居跡出土遺物実測図(3)	161	第221图	580号住居跡・旧北竈実測図	224
第159图	492号住居跡実測図	163	第222图	580号住居跡新東竈実測図	225
第160图	492号住居跡竈実測図	164	第223图	580号住居跡出土遺物実測図	225
第161图	492号住居跡出土遺物実測図	165	第224图	637号住居跡実測図(1)	226
第162图	500号住居跡実測図	166	第225图	637号住居跡実測図(2)	227
第163图	500号住居跡床下実測図	167	第226图	637号住居跡竈実測図	227
第164图	500号住居跡竈実測図	167	第227图	637号住居跡出土遺物実測図(1)	228
第165图	500号住居跡出土遺物実測図	168	第228图	637号住居跡出土遺物実測図(2)	229
第166图	501号住居跡実測図	169	第229图	638号住居跡実測図	231
第167图	501号住居跡床下実測図	170	第230图	638号住居跡出土遺物実測図	231
第168图	501号住居跡竈実測図	171	第231图	640号住居跡実測図	232
第169图	501号住居跡出土遺物実測図	171	第232图	640号住居跡床下実測図	233
第170图	502号住居跡実測図(1)	172	第233图	640号住居跡出土遺物実測図	234
第171图	502号住居跡実測図(2)	173	第234图	666号住居跡実測図(1)	235
第172图	502号住居跡竈実測図	173	第235图	666号住居跡実測図(2)	236
第173图	502号住居跡出土遺物実測図	174	第236图	666号住居跡床下実測図	236
第174图	504号住居跡実測図	176	第237图	666号住居跡出土遺物実測図	237
第175图	504号住居跡出土遺物実測図	177	第238图	669号住居跡実測図	238
第176图	506号住居跡実測図(1)	179	第239图	669号住居跡床下実測図	239
第177图	506号住居跡実測図(2)	180	第240图	669号住居跡竈実測図	239
第178图	506号住居跡新北竈・旧北竈実測図	180	第241图	669号住居跡出土遺物実測図(1)	240
第179图	506号住居跡出土遺物実測図	181	第242图	669号住居跡出土遺物実測図(2)	241

第243図	669号住居跡出土遺物実測図(3)	242
第244図	669号住居跡出土遺物実測図(4)	243
第245図	669号住居跡出土遺物実測図(5)	244
第246図	677号住居跡実測図	246
第247図	677号住居跡竈・出土遺物実測図	247
第248図	678号住居跡(1)・旧北竈実測図	249
第249図	678号住居跡実測図(2)	250
第250図	678号住居跡床下実測図	250
第251図	678号住居跡新東竈実測図	251
第252図	678号住居跡出土遺物実測図(1)	251
第253図	678号住居跡出土遺物実測図(2)	252
第254図	680号住居跡実測図(1)	254
第255図	680号住居跡実測図(2)	255
第256図	680号住居跡新北竈実測図	255

第257図	680号住居跡旧北竈実測図	256
第258図	680号住居跡出土遺物実測図	256
第259図	681号住居跡実測図	257
第260図	681号住居跡竈実測図	258
第261図	681号住居跡出土遺物実測図(1)	258
第262図	681号住居跡出土遺物実測図(2)	259
第263図	682号住居跡実測図	260
第264図	682号住居跡出土遺物実測図	261
第265図	683号住居跡実測図	262
第266図	683号住居跡床下・竈・出土遺物実測図	263
第267図	686号住居跡実測図	264
第268図	686号住居跡新西竈・旧東竈実測図	265
第269図	686号住居跡出土遺物実測図	266
第270図	口縁部の高さと同径を基準とした模倣環変遷図	268

図 版 目 次

巻頭図版	矢田遺跡(現 吉井インターチェンジ)と周辺の地形 39・49・150・152・445・485・510・521号住居跡竈
図版1	矢田遺跡全景航空写真
図版2	第3次調査区北西部住居群 第7次調査区南東部・第9次調査区北東部住居群
図版3	5・6・7号住居跡
図版4	7・34・38号住居跡
図版5	38・39・41号住居跡
図版6	41・44号住居跡
図版7	45・49号住居跡
図版8	53・56・58・59号住居跡
図版9	59・62・65・67・68号住居跡
図版10	100・102・104号住居跡
図版11	104・106号住居跡
図版12	111・150号住居跡
図版13	150・152号住居跡
図版14	152・153・155・432号住居跡
図版15	432・433・437号住居跡
図版16	437・441・442号住居跡
図版17	443・444号住居跡
図版18	444・445号住居跡
図版19	445・446号住居跡
図版20	448・456号住居跡
図版21	456・460・471号住居跡
図版22	471・485号住居跡
図版23	486・489号住居跡
図版24	489・491号住居跡
図版25	491号住居跡
図版26	492・500号住居跡
図版27	500・501・502号住居跡
図版28	504・506・508号住居跡
図版29	508・509・510号住居跡
図版30	510・518・520号住居跡
図版31	520・521・523号住居跡
図版32	524・528号住居跡
図版33	528・529・533・580号住居跡
図版34	580・637号住居跡
図版35	638・640・666・669号住居跡
図版36	669号住居跡
図版37	677・678号住居跡

図版38	678・680・681号住居跡
図版39	681・682・683号住居跡
図版40	683・686号住居跡
図版41	6・7・34・38号住居跡出土土器
図版42	38・39号住居跡出土土器
図版43	41・44・49号住居跡出土土器
図版44	49・53号住居跡出土土器
図版45	53・56・58・59号住居跡出土土器
図版46	59・62・65・68号住居跡出土土器
図版47	100・102・104・106・111号住居跡出土土器
図版48	111・150号住居跡出土土器
図版49	150・152・153号住居跡出土土器
図版50	155・432・433・442号住居跡出土土器
図版51	443・444号住居跡出土土器
図版52	444・445号住居跡出土土器
図版53	445・446号住居跡出土土器
図版54	446・456号住居跡出土土器
図版55	456・460・471・485号住居跡出土土器
図版56	485・486・489号住居跡出土土器
図版57	489・491号住居跡出土土器
図版58	491・492号住居跡出土土器
図版59	500・501・502・504号住居跡出土土器
図版60	504・506・508・509号住居跡出土土器
図版61	510・518・520号住居跡出土土器
図版62	520・521号住居跡出土土器
図版63	523・524・528号住居跡出土土器
図版64	528・533・580・637号住居跡出土土器
図版65	637・638号住居跡出土土器
図版66	640・666・669号住居跡出土土器
図版67	669号住居跡出土土器
図版68	669・677・678号住居跡出土土器
図版69	678・680・681・682・686号住居跡出土土器
図版70	鉄製品・石製模造品等
図版71	石製模造品・紡錘車・土玉
図版72	土玉・支脚・砥石
図版73	442・443・444・445号住居跡出土こも編み石
図版74	456・460・486・504・506・669号住居跡出土こも編み石
図版75	508・509・510・520号住居跡出土こも編み石
図版76	521・523・528・637・678号住居跡出土こも編み石

抄 録

1 遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字矢田に位置する。本遺跡の発掘調査は、昭和61年4月1日から開始され、平成3年11月26日を以て終了した。鑄川によって生成された東西方向に連なる河岸段丘面は、群馬県下でも有数の遺跡地帯として知られており、本遺跡に隣接する地域にも各時代の遺跡の存在が知られ、徐々にその内容が明らかになりつつある。

本遺跡は、旧石器、縄文、古墳、奈良、平安、中世の遺構が検出された複合遺跡である。これまで本遺跡付近は、北方2.5kmにある「多胡碑」や『続日本紀』との関連から、『和名類聚抄』郷名の「上野国多胡郡八(矢)田郷」に比定されてきた。今回の調査は、史料上の問題としての「八(矢)田郷」について、より具体的に考古学的アプローチが行われたという意義がある。調査の成果には、これに対応する集落の存在、「八田郷」「物部郷長」の線刻のある紡錘車をはじめとする各種の文字資料出土などがあり、調査規模の大きさと相俟って、今後分析が進展すれば、当地の古代史研究の発展に寄与するところ大となるであろう。

2 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
石器ブロック	旧石器	1	黒曜石製・台形様石器他総数12点
礫群	旧石器	1	5点の礫により構成される
竪穴住居跡	縄文中期	4	加曾利E3、埋甕(屋外)7、土坑が検出されている
	古墳前期	5	遺物は少量である
	古墳中期	2	
	古墳後期～平安	約 740	
掘立柱建物跡		約 20	
住居状遺構		約 30	
溝		約 70	
井戸		約 20	
この他、土器廃棄場2、粘土採掘坑1、小鍛冶3、方形居館址1、ピット多数などがある。また、整理作業の進捗に伴って、総量に若干の上下はあるものと予想される。			

◎本報告は、古墳時代の竪穴住居跡74軒を対象としている。

3 ま と め

調査範囲からは、旧石器時代の遺構・遺物を始め、縄文時代中期の集落の存在が判明した。弥生時代の遺構は知られていないが、古墳時代前期には再び集落が形成される。安定的に集落が営まれるのは同後期からで、奈良・平安時代まで継続する。同様の所見は、吉井町教育委員会調査の隣接する椿谷戸遺跡・柳田遺跡でも得られており、集落の範囲はさらに広がるものと思われる。

今後の整理の成果も含め、より詳細な地域史研究にとっての、膨大な基礎資料の一端が提示されるものと期待される。

や た い せき
矢 田 遺 跡 V

第1章 発掘調査に至る経緯及び経過

第1節 発掘調査に至る経緯

上信越自動車道(関越自動車道上越線)は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道で、東京練馬～群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線との併用、藤岡J Cから藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経て長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280kmの自動車道である。

藤岡市～長野市間の基本計画が昭和47年に決定してから、整備計画策定のための関連公共事業調査(昭和49年)をはじめとし、文化財に関係する調査は昭和55～56年に行われている。昭和49年には基本計画ルートに対する文化財の基本的な考え方、即ち文化財保護法の遵守・指定文化財の扱い・文化財に対しては県教委と協議すること等を示し、昭和55～56年にかけての調査は想定されるルートを中心に埋蔵文化財包蔵地の面積を約100万㎡とした。以後、日本道路公団による計画は進捗し、昭和56～57年にかけて路線の発表があった。昭和59年11月、道路公団より県教委に対し分布調査の依頼があり、それをうけ文化財保護課は調査を実施、同60年3月、発掘想定面積を約100万㎡とする回答を行っている。その後、上越線地域埋蔵文化財調査計画の策定が行われ、調査実施年度は昭和61～66年の6年間(後、修正があり昭和65年度＝平成2年度までの5年間に変更)、藤岡市～富岡市の約76万㎡を群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、他は市町村で調査会を組織し実施することになった。

昭和61年4月、県埋蔵文化財調査事業団は多野郡吉井町南陽台に、上越線の埋蔵文化財発掘調査を担当する「関越道上越線調査事務所」を開所し調査に入った。

矢田遺跡は、羽田倉遺跡・田篠遺跡・内匠下高瀬遺跡と同じく昭和61年当初から調査を行っている。吉井インターチェンジにあたる当遺跡は、インター中心部・それにつながる東側本線部分と西側本線部分及び料金所方向に向かう北側部分の約90,000㎡にわたる広大な面積を占めるが、地形等からみて一つの遺跡としたものである。調査期間は約5年を見込み、インター中心部から北側方面、そしてインター東側本線部分へと進む大まかな計画を立て、建設工事の進展があればそれぞれに対応することで公団と協議を行った。

調査はS T A No.109～111にかけてのインターにつながる東側部分から開始された。進捗につれ次々と住居跡が出現し、大規模な集落跡が展開することが確実となった。最終的に古墳時代後期から平安時代に至る堅穴住居跡を中心に740軒余を調査した。

矢田遺跡の整理は遺物・遺構ともに膨大な量であることから、のべ9年の期間が必要であるとし、平成元年度より毎年継続して行うこととした。整理の基本方針として、地域を区切ることが困難なため、時代別(地域を加味する)に実施し、最終整理で全体をまとめることとしている。

今年度で5年間整理作業を実施し、本年度は昨年度に引き続き、古墳時代の住居跡が対象となっている。

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

本調査区は、吉井インターチェンジ予定地域及び、その前後の本線部分よりなる。建設工事用測量杭のS T A No.106～113がほぼ矢田遺跡の調査範囲に該当する。この範囲内を、調査区南西端の国家座標X = +26.800, Y = -75.000を原点として5m四方のグリッドを設定した。グリッドの設定水準点の移動は、(株)測設が実施した。なお発掘調査は、地形及び道路等の条件から、便宜的に第1次調査区～第12次調査区に区分し、ほぼこれに応じて進行した。

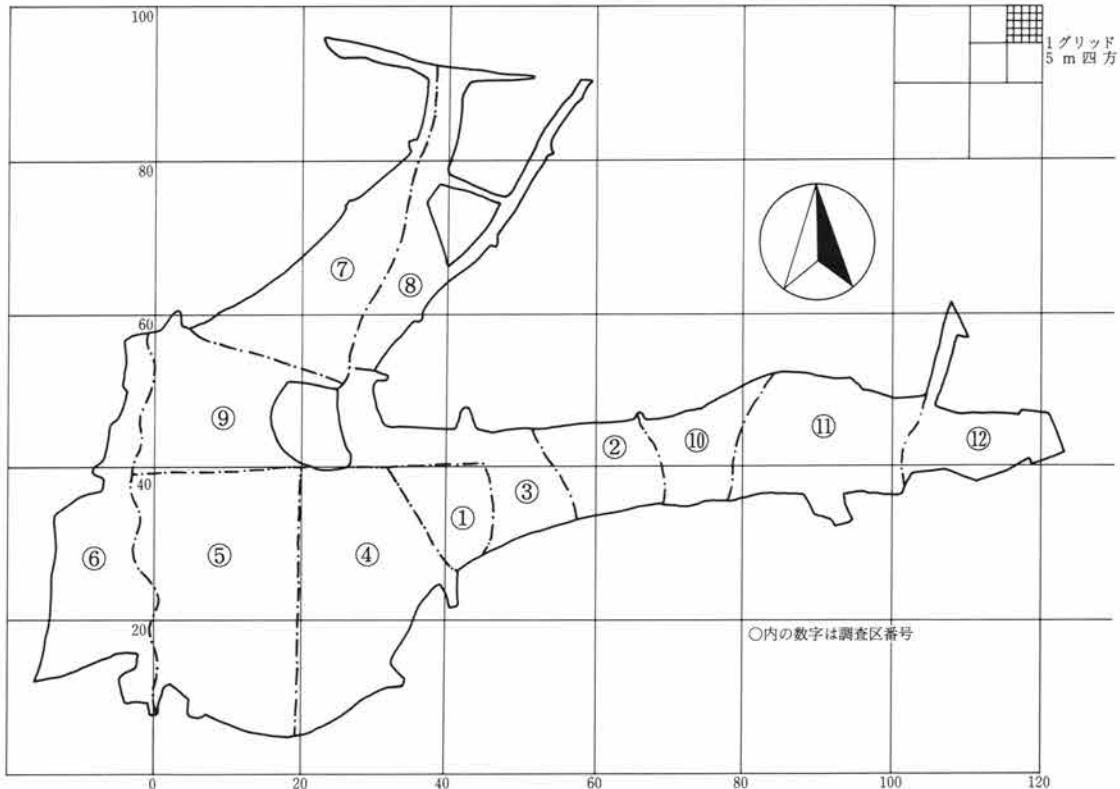
2 調査の経過

発掘調査は1986～91年度の都合六年度に亘って行われたが、未買収地の取得状況との関連や、全体の調査工程との関係で若干の前後関係があり、調査を一時中断し中山（多胡蛇黒）遺跡等の調査を行っていた時期などもある。そのため調査自体に丸六年を費やした訳ではない。調査の経過を記した「調査日誌」はB5ファイル5冊にもなり、経過報告では残念ながらかなりの部分を削除せざるを得なかった。以下、「調査日誌（抄録）」を掲出してみる。

調査日誌（抄）

◎1986年度の調査

- 5月21日 現場作業の開始、第1次調査区の表土掘削開始。
- 29日 発掘作業員の雇用を始める。
- 6月2日 第1次調査区の調査を開始する。
- 7月1日 第1次調査区と並行して、第2次調査区の調査を開始する。
- 9月10日 第1・2次調査区の空撮を行う。



第1図 矢田遺跡調査区及びグリッド配置図

第2節 調査の方法と経過

- 22日 第4次調査区の調査を開始する。
- 10月6日 第3次調査区の調査を開始する。
- 24日 第2次調査区の調査を終了する。
- 12月11日 第3・4次調査区の空撮を行う。
- 1月9日 第4次調査区79号住居跡から「八田郷」と線刻された石製紡錘車が出土する。
- 3月12日 第4次調査区の空撮を行う。
 - 14日 現地見学会(～15日)、2日間で1200名程の見学者が訪れる。
 - 25日 1986年度の調査を終了する。
- ◎1987年度の調査
 - 4月15日 1987年度の調査を開始する。
 - 5月8日 第4次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 6月11日 第4次調査区188号住居跡から「八中寸」の文字瓦が出土する。
 - 10月2日 第4次調査区の空撮を行う。
 - 7日 第5次調査区の調査を開始する。
 - 11月6日 吉井町郷土資料館特別展開催に伴い、矢田遺跡出土の文字瓦を展示する。
 - 1月21日 第4次調査区の調査を終了する。
 - 3月8日 第5次調査区の空撮を行う。
 - 12日 現地見学会(～13日)、2日間で655人程が見学を訪れる。
 - 25日 1987年度の調査を終了する。
- ◎1988年度の調査
 - 4月15日 1988年度の調査を開始する。
 - 6月7日 第6次調査区の調査を開始する。
 - 7月19日 第7次調査区の調査を開始する。
 - 10月8日 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団創立10周年記念事業の一環として、本遺跡において遺跡見学会を実施する。
総数7685名にのぼる見学者が訪れる。
 - 27日 第5次調査区の空撮を行う。
 - 11月7日 第5次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 14日 第6次調査区の旧河川・石組遺構の調査を終了する。
 - 12月1日 第5次調査区の調査を進める。
 - 18日 第10次調査区の調査を開始する。
 - 2月13日 第8次調査区の表土掘削を開始する。
 - 23日 第7次調査区の空撮を行う。
 - 28日 第9次調査区の表土掘削を開始する。
 - 3月24日 1988年度の調査を終了する。
- ◎1989年度の調査
 - 4月10日 1989年度の調査を開始する。
 - 7月10日 第7次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 9月26日 第8次調査区(北側部分)の空撮を行う。
 - 12月21日 第8次調査区の空撮を行う。
 - 22日 第9次調査区の679号住居跡から「物ア(部)・一八」と線刻された石製紡錘車が出土する。
 - 1月8日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 2月27日 第11次調査区の表土掘削を開始する。
 - 3月9日 第9次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 23日 1989年度の調査を終了する。
- ◎1990年度の調査
 - 4月9日 1990年度の調査を開始する。
 - 5月1日 第11次調査区の728号住居跡から「八田」と線刻された石製紡錘車が検出される。
 - 11日 第8・10次調査区の空撮を行う。
 - 14日 矢田遺跡の調査と並行して中山遺跡の表土掘削を開始する。
 - 16日 第8次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 21日 第10次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 6月18日 第11次調査区の空撮を行う。
 - 20日 第11次調査区の旧石器試掘調査を開始する。
 - 21日 第11次調査区の50-88グリッドA T層下から、矢田遺跡で初めて黒耀石製の台形様石器が1点検出される。
 - 7月2日 第11次調査区に330㎡の旧石器本調査区を設定して、本日より6日まで調査を行う。
A T層下からチャート・安山岩製の台形様石器2点を含む総数12点の石器が検出された。
 - 8月27日 第12次調査区の空撮を行う。未買収地関連で調査不能の地点を残して調査を中断し、多胡蛇黒(中山)遺跡の調査に入る。
- ◎1991年度の調査
 - 11月5日 未買収地関連の調査を開始する。
 - 12日 旧石器試掘調査を開始する。
 - 26日 空撮を行う。矢田遺跡の全調査を終了する。

第2章 地理的環境及び歴史的環境

第1節 地理的環境

群馬県は関東地方北西部の内陸に位置しており、周囲に新潟県・長野県・埼玉県・栃木県・福島県が接している。地形的には、北部及び西部が山地をなしており、中央部から東部にかけてが平野部である。

矢田遺跡は、群馬県南西部の多野郡吉井町大字矢田字天王原他に所在する。本遺跡の北方には鑓(かぶら)川が東流する。この鑓川は長野県境に源を発し、甘楽郡南牧村・下仁田町・富岡市・甘楽町・多野郡吉井町を経て、藤岡市上落合付近で鮎川を合わせ、高崎市倉賀野町で利根川支流の烏(からす)川に合流する。鑓川右岸域においては顕著な河岸段丘が発達しており、大きく分けて上位と下位の段丘面に分けられる。河床面からの比高は、下位段丘面で10～15mを、上位段丘面で50～60mを測る。この段丘面は各時代を通じて様々な土地利用がなされてきたが、現在は下位段丘面が水田として、上位段丘面が主に桑畑として耕地利用されている。

本遺跡は上位段丘面上の多胡(たご)丘陵東部に位置し、西は西谷川、東は土合川に挟まれた南北にのびる台地上に存在し、標高は150～160m前後を測る。この台地も実際には細かい侵食をうけ、南北や東西方向の小支谷が形成され、複雑な地形を呈している。なお調査の結果、西谷川の旧河川流路が確認されている。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺は、上野三碑の一つである「多胡碑」の存在や多くの古墳等が知られ、古くから地域の歴史に深い関心もたれている。最近では開発に伴い多くの遺跡が発掘調査され、調査報告書も多く刊行されている。それらの研究成果から地域史における当遺跡の位置付けがなされる必要がある。ここでは、他の報告書等を参考にしつつ周辺遺跡を簡単にまとめた。

旧石器時代

吉井町周辺においての調査例は少ない。発掘調査された遺跡として当矢田遺跡をはじめ神保富士塚遺跡・多胡蛇黒遺跡・多比良追部野遺跡等がある。始良・丹沢火山灰(AT)を含む時期の粘土層中を中心として多くの石器が出土している。特に甘楽町の天引向原遺跡・白倉下原遺跡で大量の石器の出土が認められた。また、藤岡市内では北山遺跡が良好な内容を示し、緑野遺跡群でAT層に伴う剥片が確認されている。

縄文時代

当遺跡からは中期の住居跡が3軒と埋甕や土坑が検出されており、旧石器とともにすでに「矢田遺跡IV」で報告されている。他に遺構の発掘調査された遺跡として多比良追部野遺跡・入野遺跡・神保植松遺跡・神保富士塚遺跡・長根安坪遺跡等が知られる。しかし吉井町内においては大きな集落遺跡は発掘調査されていない。

弥生時代

当遺跡からこの時代の遺物はわずかに出土しているが、遺構は確認されていない。この地域で多く発掘調査されている遺跡の中で、黒熊遺跡から多くの住居と方形周溝墓が、川内遺跡からは20軒の住居と方形周溝墓、長根安坪遺跡から36軒の住居が、さらに甘楽町天引狐崎遺跡で40軒の住居と4基の方形周溝墓、また天

引狐崎遺跡の西に接する白倉下原・天引向原遺跡では58軒の住居と2基の方形周溝墓が検出されている。このように規模の大きな集落が点在する一方、当遺跡や長根羽田倉遺跡では大規模調査にもかかわらず遺構は全く検出されず、また他の多比良追部野遺跡や神保植松遺跡等の遺跡では検出されても極めて少ない。このように、大きな集落遺跡と小規模な遺跡が分布するといった遺跡の様子が想定される。

古墳時代

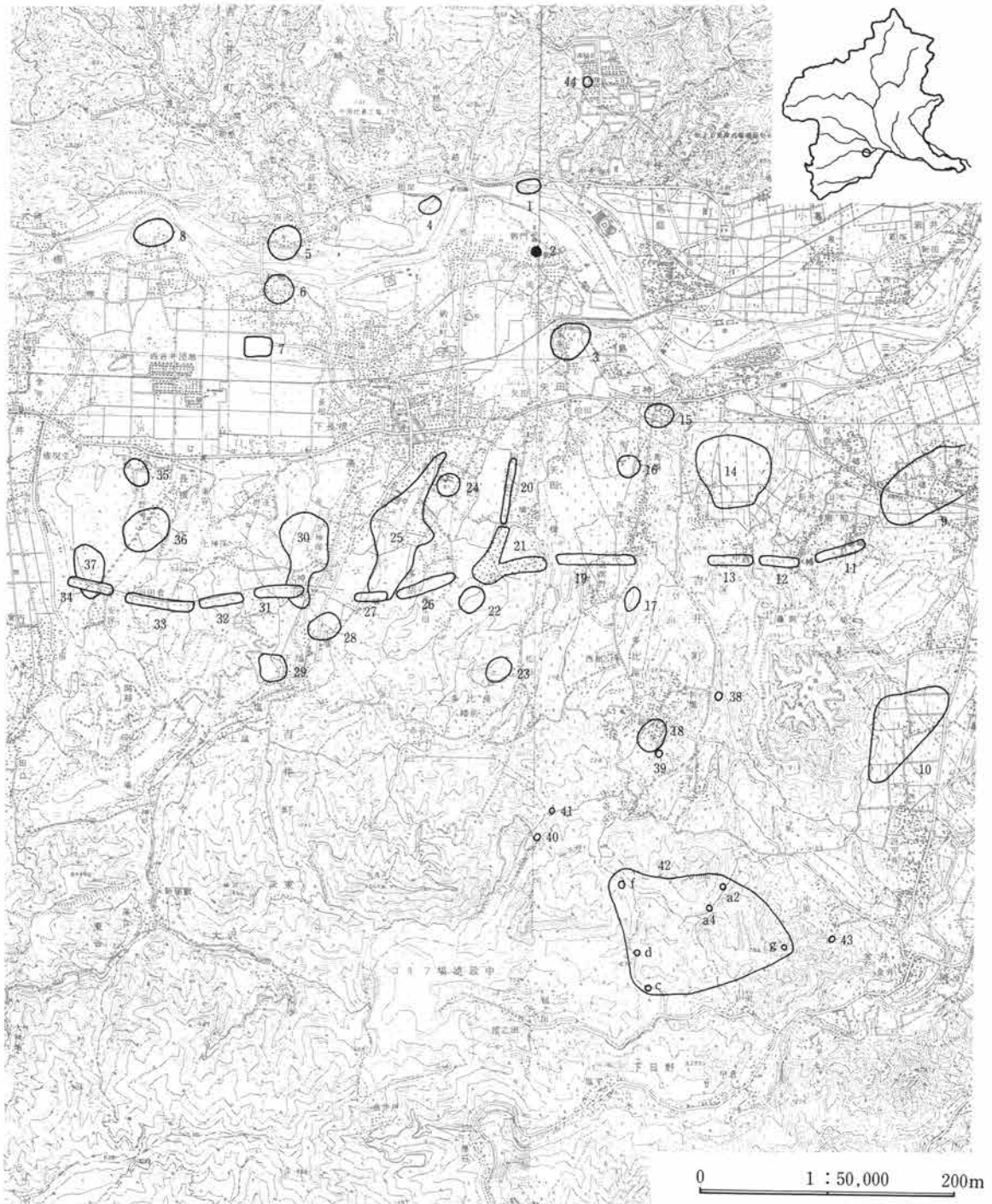
前期～中期に於ける集落遺跡の規模は甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡から31軒の住居と1基の方形周溝墓が調査されているが、他の遺跡での検出例は少ない。近くの遺跡としては神保下條遺跡や神保富士塚遺跡、また長根羽田倉遺跡等で知られるがいずれも2～4軒と少ない。しかし後期になると集落遺跡の数と住居数は爆発的に拡大してくるようである。当遺跡ではこの時期よりおおくの住居が造られるようになり、隣の多胡蛇黒遺跡や多比良追部野遺跡等でもこの時期をもって一気に集落が大規模に形成されて行く。また入野遺跡や黒熊遺跡群においてもこの時期に多くの集落が営まれている。墳墓としての古墳も群集墳として多胡古墳群・塩Ⅰ・Ⅱ古墳群・山の神古墳群をはじめとして多く認められるようになる。なおこの地域の古墳に関しては右島和夫「遺跡の立地と環境」『神保下條遺跡』1992に詳しい。

また、当遺跡でも出土の認められる石製模造品を出土する遺跡が、この時期から多く認められるようになる。特に甘楽の谷では、原石の滑石や蛇紋岩が鑄川の上流の雄川や大沢川から採集されるため石製模造品を製作する遺跡も多く確認されている。報告書の刊行されている石製模造品を製作した主な遺跡として、甘楽町教育委員会『甘楽条里遺跡』1989、梅沢重昭「笹遺跡—鑄川流域の滑石製品出土遺跡の研究」『群馬県立博物館研究報告』第一集・第三集 1963・1966、藤岡市教育委員会『F-1竹沼遺跡』1978等があげられる。

奈良時代・平安時代

古墳時代後期の大きな集落遺跡は、多比良追部野遺跡のように奈良時代・平安時代になると住居数が減少する遺跡も認められるが、当遺跡や隣の多胡蛇黒遺跡のように多くの遺跡では住居数が大きく増減することなく、継続的につくられ続けているようである。住居以外の遺構として黒熊中西遺跡において平安時代の寺院跡が検出されている。礎石建物が6～7棟、テラス遺構9面からなり、礎石建物は寺院の主体となる堂宇、テラス遺構は付属的な施設や工房あるいは空間面等と考えられている。また黒熊八幡遺跡・多比良追部野遺跡・長根羽田倉遺跡では、天仁元年(1108)に降下した浅間噴出のB軽石下の水田遺構が調査されている。「多胡碑」は当遺跡北方約2.5kmに位置する。この碑は多胡郡設置に関する記念碑とされ多くの研究がなされている。古代律令制下における動きの一つとして上野国分寺に供給した瓦生産に見られるような古代窯業生産もこの地域で開始される。県内の須恵器生産窯はそれ以前の限定された地域での生産と異なり、8世紀前後をもって各地で窯が築かれて多くの製品が生産されるようになってゆく。この地域では吉井町多比良から藤岡市下日野・藤岡市金井の一带にかけての山林部分を中心として多くの窯が築かれるようになる。この地域では8世紀前後から10世紀にかけて11箇所27基前後の窯が確認または想定されている。その中の21基が発掘調査されており、この地区には更に多くの窯の存在が想定される。これらの窯は須恵器と瓦を生産し、金山瓦窯跡で焼成された瓦は上野国分寺創建時に築かれ、また滝の前窯跡においては国分寺補修段階において多く瓦が生産された事が指摘されている。

第2章 地理的環境及び歴史的環境



(国土地理院 1:25,000「富岡」「上野吉井」「高崎」「藤岡」を縮小して使用)

- 1 川福遺跡 2 多胡碑 3 塚原古墳群 4 富岡遺跡 5 東吹上遺跡 6 本郷古墳群 7 道六神遺跡 8 片山古墳群
- 9 白石古墳群 10 竹沼遺跡 11 黒熊栗崎遺跡 12 黒熊八幡遺跡 13 黒熊中西遺跡 14 黒熊遺跡群 15 祝神古墳群
- 16 入野遺跡 17 東沢遺跡 18 中ノ原古墳群 19 多比良追部野遺跡 20 椿谷戸遺跡 21 矢田遺跡 22 柳田遺跡
- 23 山の神古墳群 24 川内遺跡 25 多胡古墳群 26 多胡蛇黒遺跡 27 神保下條遺跡 28 塩I古墳群 29 塩II古墳群
- 30 神保古墳群 31 神保植松遺跡 32 神保富士塚遺跡 33 長根羽田倉遺跡 34 長根安坪遺跡 35 長根宿遺跡 36 西場脇遺跡
- 37 安坪古墳群 38 下五反田窯跡 39 滝の前窯跡 40 末沢I窯跡 41 末沢II窯跡 42 下日野・金井窯跡群 43 金山瓦窯跡
- 44 南陽台窯跡 (推定)

第2図 矢田遺跡と周辺の遺跡分布図



第3図 矢田遺跡周辺図

第2章 地理的環境及び歴史的環境

周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献その他
1	川福遺跡 (吉井町馬庭)	奈良・平安時代の住居跡5軒、溝2条等、土器集中地点あり。8世紀前後の須恵器蓋を多く出土。	吉井町教育委員会1986『川福遺跡調査報告書』
2	多胡碑 (吉井町池)	吉井町大字池字御門に所在。日本三碑の一つに数えられる。和銅4年(711)多胡郡設置に関する記念碑とされる。	『吉井町誌』1974『群馬県史・資料編4』1985ほか
3	塚原古墳群 (吉井町池)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。	平成元年、蛇塚を調査。
4	富岡遺跡 (吉井町岩崎)	縄文時代中期の遺物包含層。平安時代住居跡4軒、浅間B軽石の純層堆積。	吉井町教育委員会1989『富岡遺跡』
5	東吹上遺跡 (吉井町岩崎)	縄文時代前期、中期、弥生中期、後期包含層。古墳時代後期住居跡1軒、平安時代1軒。	群馬県立博物館研究報告第8集1973『東吹上遺跡』
6	本郷古墳群 (吉井町本郷)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基あげている。	
7	道六神遺跡 (吉井町本郷)	平安時代住居跡1軒、溝6条等。	吉井町教育委員会1986『道六神遺跡』
8	片山古墳群 (吉井町片山)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
9	白石古墳群 (藤岡市白石)	古墳時代中期から後期にかけての大型前方後円墳と後期の大群集墳からなり、終末古墳も含む。	
10	竹沼遺跡(藤岡市西平井・緑埜)	旧石器時代の石器、縄文時代中期住居跡3軒、弥生時代後期から古墳時代前期4軒、古墳時代後期17軒、滑石工房址9軒ほか。	藤岡市教育委員会1978『F1群馬県藤岡市竹沼遺跡』
11	黒熊栗崎遺跡 (吉井町黒熊)	古墳時代と平安時代の住居跡と小鍛冶、掘立柱建物跡、平地神社跡等。	『群馬県埋蔵文化財調査事業団1989『年報7』
12	黒熊八幡遺跡 (吉井町黒熊)	旧石器時代の石器、縄文時代埋設土器、奈良・平安時代の住居跡130軒以上、礎石建物、掘立柱建物跡等検出。	『群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
13	黒熊中西遺跡 (吉井町黒熊)	古墳～奈良・平安時代住居跡78軒、平安時代の礎石建物跡6棟、平安時代の道路遺構7条、井戸、土坑、鬼瓦、経軸端等出土。寺院跡を特色とする遺跡。	『群馬県埋蔵文化財調査事業団1992『黒熊中西遺跡』
14	黒熊遺跡群 (吉井町黒熊)	縄文・古墳・奈良・平安時代の大集落。	吉井町教育委員会1981～85『黒熊遺跡群調査報告書』(3)(4)等
15	祝神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では11基をあげている。	
16	入野遺跡 (吉井町石神)	縄文時代前期、古墳時代前期・後期の住居跡、中世の墓壇。	尾崎喜左雄1962『入野遺跡』他吉井町教育委員会1985.1986
17	東沢遺跡 (吉井町多比良)	古墳時代後期、奈良・平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1987『東沢遺跡・折茂東遺跡』
18	中ノ原古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
19	多比良追部野遺跡 (吉井町多比良)	旧石器時代の石器類430点出土。縄文・古墳・平安時代の住居跡、平安時代の水田、江戸時代の溜池等。	『群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『年報10』
20	椿谷戸遺跡 (吉井町矢田)	縄文時代中期、古墳前後期、奈良・平安時代の住居、中世土坑等。	吉井町教育委員会1989『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』
21	矢田遺跡 (吉井町矢田)	本報告。	『群馬県埋蔵文化財調査事業団1990～94『矢田遺跡I～V』
22	柳田遺跡 (吉井町矢田)	古墳～平安時代の住居跡。	吉井町教育委員会1989『柳田遺跡』
23	山の神古墳群 (吉井町多比良)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では7基をあげている。	
24	川内遺跡 (吉井町吉井)	縄文時代中期の土壌、弥生～平安時代の住居跡、弥生時代の方形周溝墓。中世の井戸。	吉井町教育委員会1982『川内遺跡一図版編一』
25	多胡古墳群 (吉井町多胡)	古墳時代後期を中心とした群集墳。上毛古墳総覧では91基をあげている。下條1～3号墳を含む。	

第2節 歴史的環境

番号	遺跡名 (所在地)	遺跡の概要	文献その他
26	多胡蛇黒遺跡 (吉井町多胡)	旧石器時代の石器・礫、古墳時代後期～平安時代の住居跡174軒、掘立柱建物跡、溝など。	静岡県埋蔵文化財調査事業団 1993『多胡蛇黒遺跡』
27	神保下條遺跡 (吉井町神保)	5基の古墳、古墳時代前期3軒・奈良3軒の住居跡。中世の館跡・溝等。大量の埴輪・古墳時代前期の住居跡より鏡・鉄斧・鎌・管玉・ガラス玉等出土。	静岡県埋蔵文化財調査事業団 1992『神保下條遺跡』
28	塩Ⅰ古墳群 (吉井町塩)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	
29	塩Ⅱ古墳群 (吉井町塩)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では12基をあげている。	
30	神保古墳群 (吉井町神保)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では63基をあげている。	
31	神保植松遺跡 (吉井町神保)	縄文～平安時代の住居、中世を主とした掘立柱建物跡・土壇・井戸・城の堀、古墳時代の方形周溝墓等。遺物として板碑・石臼・五輪塔・陶磁器等出土。	静岡県埋蔵文化財調査事業団 1990『年報8』
32	神保富士塚遺跡 (吉井町神保)	縄文・古墳・奈良・平安時代の住居跡。掘立柱建物跡・溝・土坑・土器集積祭祀跡等。出土遺物として石器・紡錘車・勾玉等。	静岡県埋蔵文化財調査事業団 1993『神保富士塚遺跡』
33	長根羽田倉遺跡 (吉井町長根)	古墳～平安時代の住居跡133軒、掘立柱建物跡11棟、井戸11基、土坑93基、溝18条、祭祀遺構2基等。出土遺物として滑石製模造品・紡錘車等の滑石製品。	静岡県埋蔵文化財調査事業団 1990『長根羽田倉遺跡』
34	長根安坪遺跡 (吉井町長根)	縄文～平安時代の住居跡、古墳時代の方形周溝墓、古墳、土坑、配石遺構等。遺物として勾玉・紡錘車・鉄鏃・ガラス小玉・金環等。	静岡県埋蔵文化財調査事業団 1990『年報8』
35	長根宿遺跡 (吉井町長根)	中世の溝2条検出。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
36	西場脇遺跡 (吉井町長根)	古墳・平安時代の住居跡、奈良時代の遺物集中地点等。	吉井町教育委員会1987『西場脇・長根宿遺跡』
37	安坪古墳群 (吉井町長根)	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。古墳群南側の一部を、長根安坪遺跡で平成元年に発掘調査。	
38	下五反田窯跡 (吉井町多比良)	3基あったと思われる、2基発掘。1号窯は全長7mの地下式無段無階登窯、2号窯は、全長5.5mの地下式無段登窯。坏・甕・瓦・風字硯・羽釜等出土。9～10世紀。	国士館大学文学部考古学研究室 1984『考古学研究室発掘調査報告書』
39	滝の前窯跡 (吉井町多比良)	窯跡あるいは灰原の一部と思われる部分が露出。坏・甕・文字瓦出土。9世紀末～10世紀前半、瓦は上野国分寺に供給されており、国分寺補修期の瓦生産窯。	須田茂1989『吉井町・滝の前窯跡の採集遺物とその性格』「群馬文化」
40	未沢Ⅰ窯跡 (吉井町多比良)	2～3基あったと思われる。林地設置で一部切断されている。1基を発掘調査。窯体の北約4は無い。地下式無段無階登窯と思われる。蓋・坏・盤・甕・瓦・土鈴等。8世紀前半代を中心としている。	国士館大学文学部考古学研究室 1984『考古学研究室発掘調査報告書』
41	未沢Ⅱ窯跡 (吉井町多比良)	Ⅰと同様に、道路拡張により窯体の一部が2基、灰原と思われる一個所が確認されている。	
42	下日野・ 金井窯跡群 (藤岡市下日野・ 金井)	藤岡市教育委員会により、ゴルフ場建設に先だって分布調査が行われ、地点ごとにa2・a4・c・d・f・gと表記され、発掘調査が行われた。a2地点で3基、a4地点で1基、c地点で4基、他に2～3基の窯体が存在していると思われる。d地点で1基、他に製鉄遺構3基調査、g地点で5基の計16基の窯跡が調査された。8～10世紀。	近日中に報告書が刊行される予定である。発掘担当者、古郡正志氏の御教示による。
43	金山瓦窯跡 (藤岡市金井)	3基の窯体が存在し、2基が発掘調査されている。1・2号窯ともトンネル式無段登窯で、全長4.4～4.5m。鏝・宇・男・女瓦・文字瓦のほか、須恵器甕等出土。上野国分寺の建造に伴って開窯されたものと考えられている。	坂詰秀一1966『上野・金山瓦窯跡』
44	南陽台窯跡群(推定) (吉井町南陽台)	南陽台団地造成時に、大量の須恵器坏・蓋・甕が出土。山間地であり集落遺跡ではなく、窯の存在が考えられる。8世紀代を中心としている。	

第3節 基本層序

矢田遺跡は、前章で述べたように鑄川右岸の上位段丘上に位置している。南から北へ向かって緩やかな傾斜で下る段丘面では、表土の耕作土の堆積が薄く、これを除去すると直ちにいわゆる関東ローム層が現れる。これは段丘を浸食・分断する谷部への土砂の流出に加えて、広い段丘上は通年日照度が高く、冬季は西方から甘楽の谷を吹き抜ける「浅間おろし」の影響による、風化・浸食作用が大きいことに起因している。

本遺跡の基本土層は以下に示すとおりである。

第I層 いわゆる表土。黒褐色を呈する耕作土であり、多量の浅間A軽石(As-A)を含有する。層厚は地点により大きく異なり、尾根上では50cm以上を測るが、傾斜部では10cm以下である。

第II層～第VII層は、いわゆる関東ローム層である。

第II層 明黄褐色ローム層。層厚は平均20cmほどである。浅間板鼻黄色軽石(As-Yp)を含み、特に下部では密度が高く一部ブロック状を成す。全体に粒子は粗く、粘性は弱い。

第III層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均40cmである。白色細粒子(径2～3mm)を若干含む。第II層に比して粒子は細かく粘性をもつ。

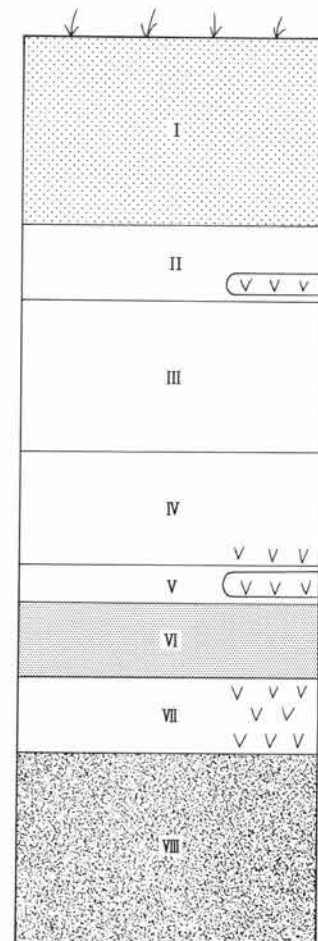
第IV層 暗黄褐色ローム層。層厚は平均30cmを測る。第III層に比較して粒子が粗く、下部には浅間板鼻褐色軽石(As-Bp)を含む。

第V層 明黄褐色ローム層。浅間板鼻褐色軽石がブロック状に多量に含まれ、非常に堅緻である。層厚は平均10cmである。

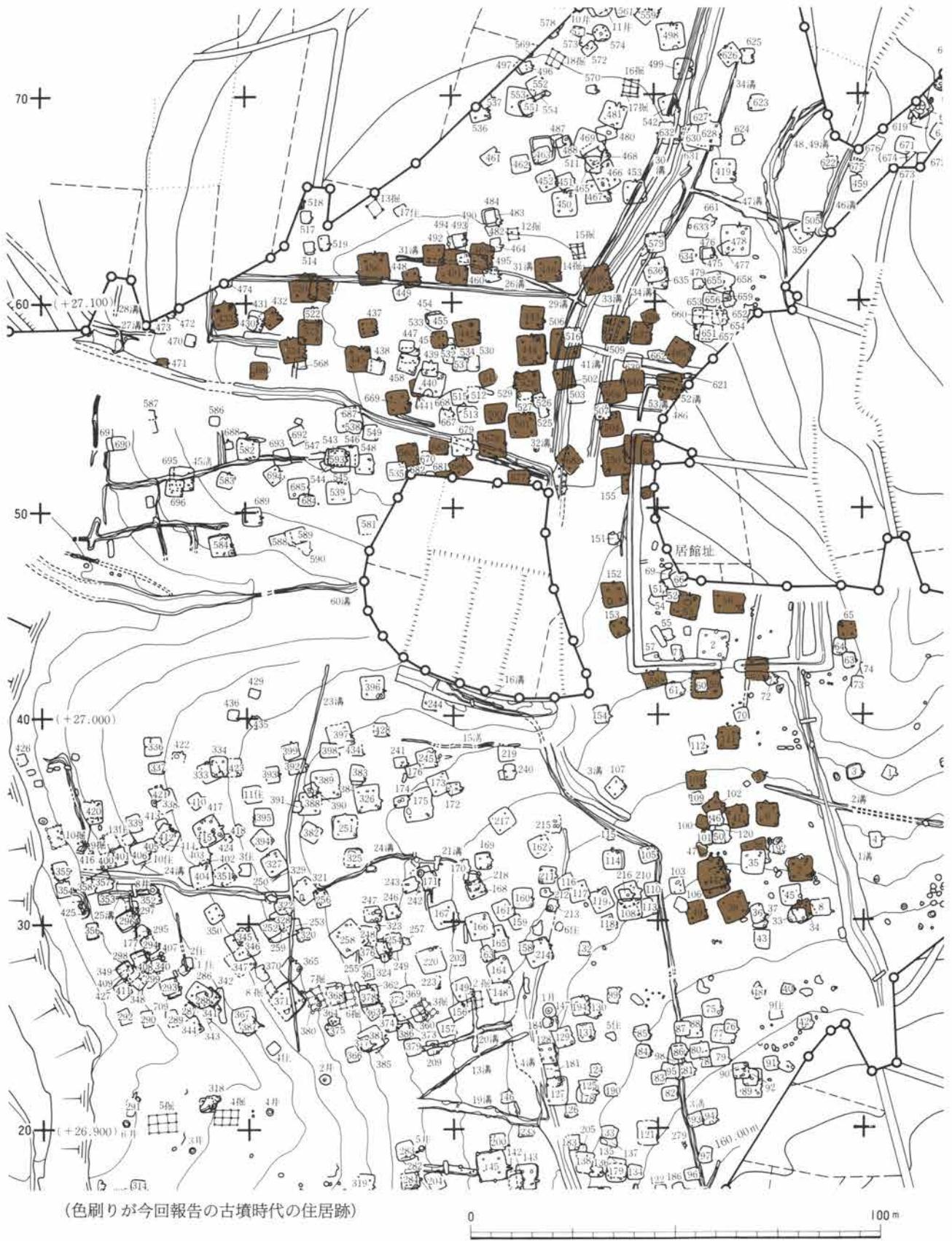
第VI層 暗褐色ローム層。層厚は平均20cmを測る。少量の浅間室田軽石(As-Mp)を含みやや粘性をもつ。いわゆる暗色帯に類する状況を示すが赤城山麓の暗色帯とは対応しない。

第VII層 浅間室田軽石を主とする層である。上半部は橙褐色、下半部は乳白色を呈する。通水層であり、非常に多量の水分を含む。層厚は30cmほどである。

第VIII層 灰白色粘土層。本層は、非常に厚く堆積しており、下部は基盤層になる。本層上部に始良丹沢パミスとみられるガラス質の火山灰が認められる。



第4図 基本層序概念図



(色刷りが今回報告の古墳時代の住居跡)



第5図 本報告住居周辺遺構分布図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

5号住居跡 (第6・7図、図版3)

位置 本住居跡は、第1次調査区の西端にあり、37・38—35・36グリッドに位置する。

概要 残りが悪く、床面の多くと壁面の大部分が削り取られて残っていなかった。また2本の耕作溝により床下まで掘り込まれていた。

構造 床面は竈手前に僅かに残っていたのみであった。柱穴はなく、貯蔵穴が竈右側に2個掘られていた。壁面コーナーに位置し、ほぼ円形を呈する貯蔵穴が最終段階で使われていたものと思われ、新貯蔵穴とし、西側の貯蔵穴を旧貯蔵穴として扱った。

規模 東西2.80m、南北2.80mである。床面上からの壁高はほとんどなく、南壁部分の掘り方床面からの高さで27cmである。新貯蔵穴は径30cm深さ26cmで、旧貯蔵穴は径62×48cm深さ41cmである。

遺物 土師器の坏と破片が僅かに出土している。

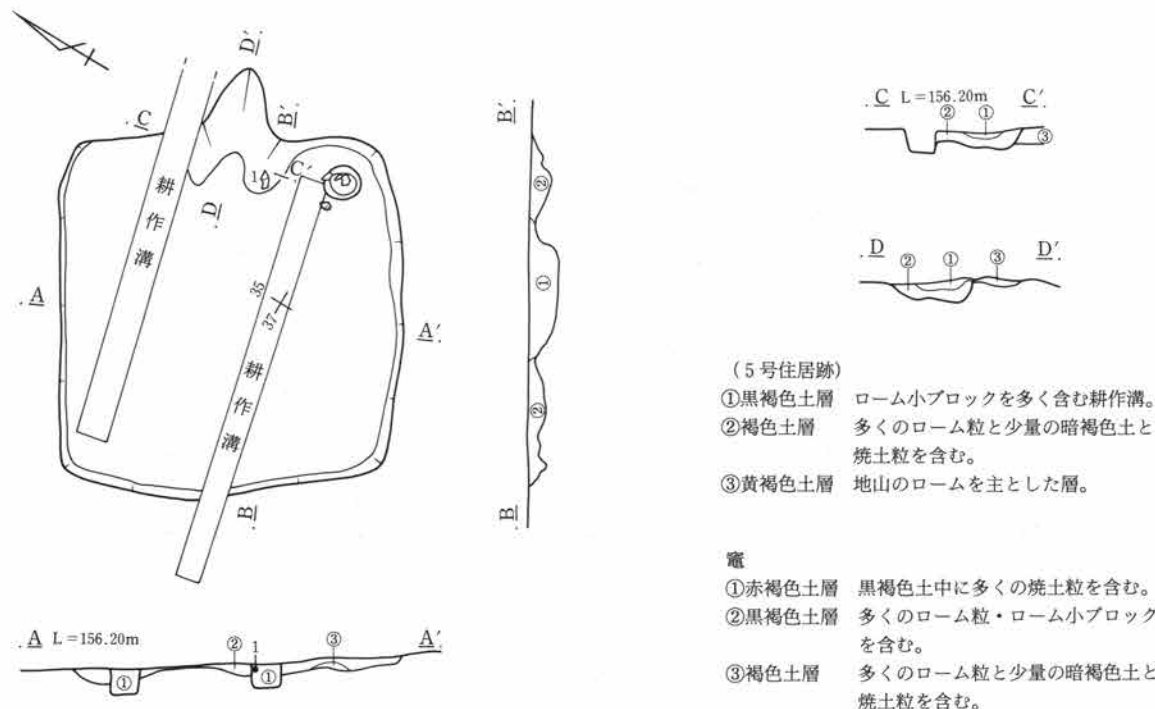
床下 床面中央部のロームを1.7×2.1mの範囲で掘り残し、壁面に近い周辺部を10~16cm程深く掘っている。

(竈)

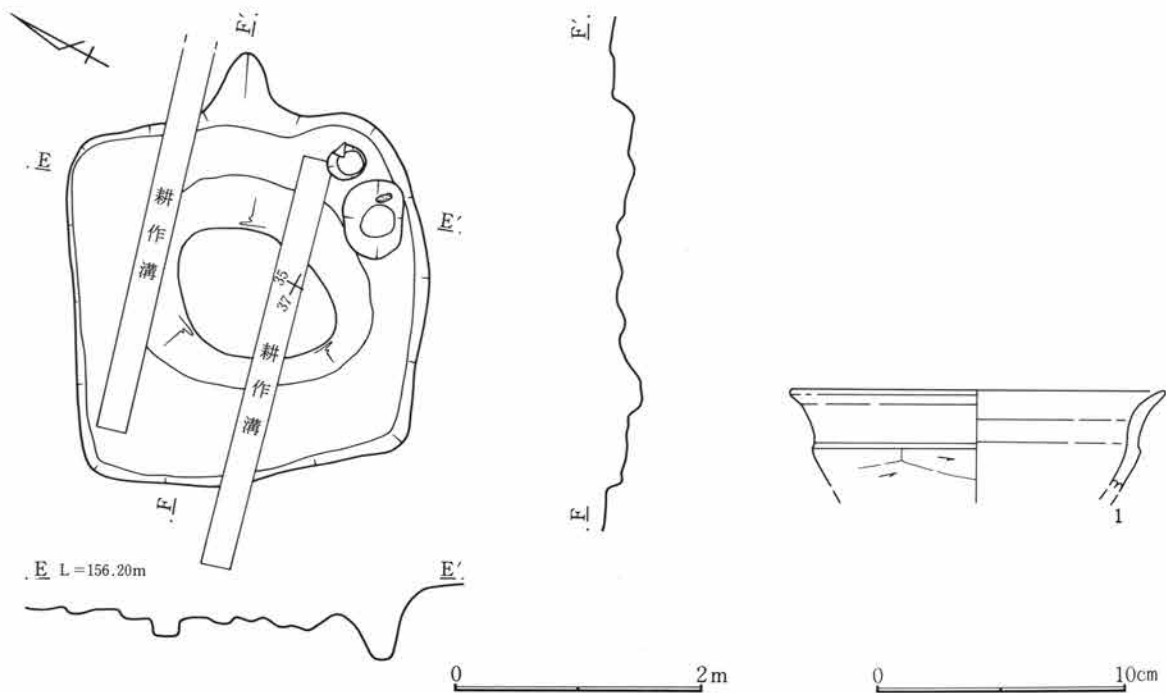
位置 住居東壁中央部に造られている。大部分が削り取られており燃烧部下半と煙道部の一部が残っていた。

構造 残りが悪く多くの部分が明らかでない。竈内より多くの焼土粒と焼土小ブロックが検出された。

規模 多くの部分が残っていないが、現状で両袖方向90cm、煙道方向95cmである。



第6図 5号住居跡実測図



第7図 5号住居跡床下・出土遺物実測図

5号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
7-1	土師器 鉢	竈内直上 破片	口(20.0) 高— 底—	①1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデ。

6号住居跡 (第8～10図、図版3・41・70・71)

位置 本住居跡は、第1次調査区の西端にあり、36-35・36グリッドに位置する。

概要 住居の覆土上を今日の農道が斜めに横切っている。この農道を掘り込み水道の本管と鑄川用水から引かれた用水が埋められた。そのため住居東側が斜めに掘り込まれ攪乱を受けている。用水は浅いため床下までは掘られていなかったが、水道管は深く完全に床下まで掘り抜いていた。

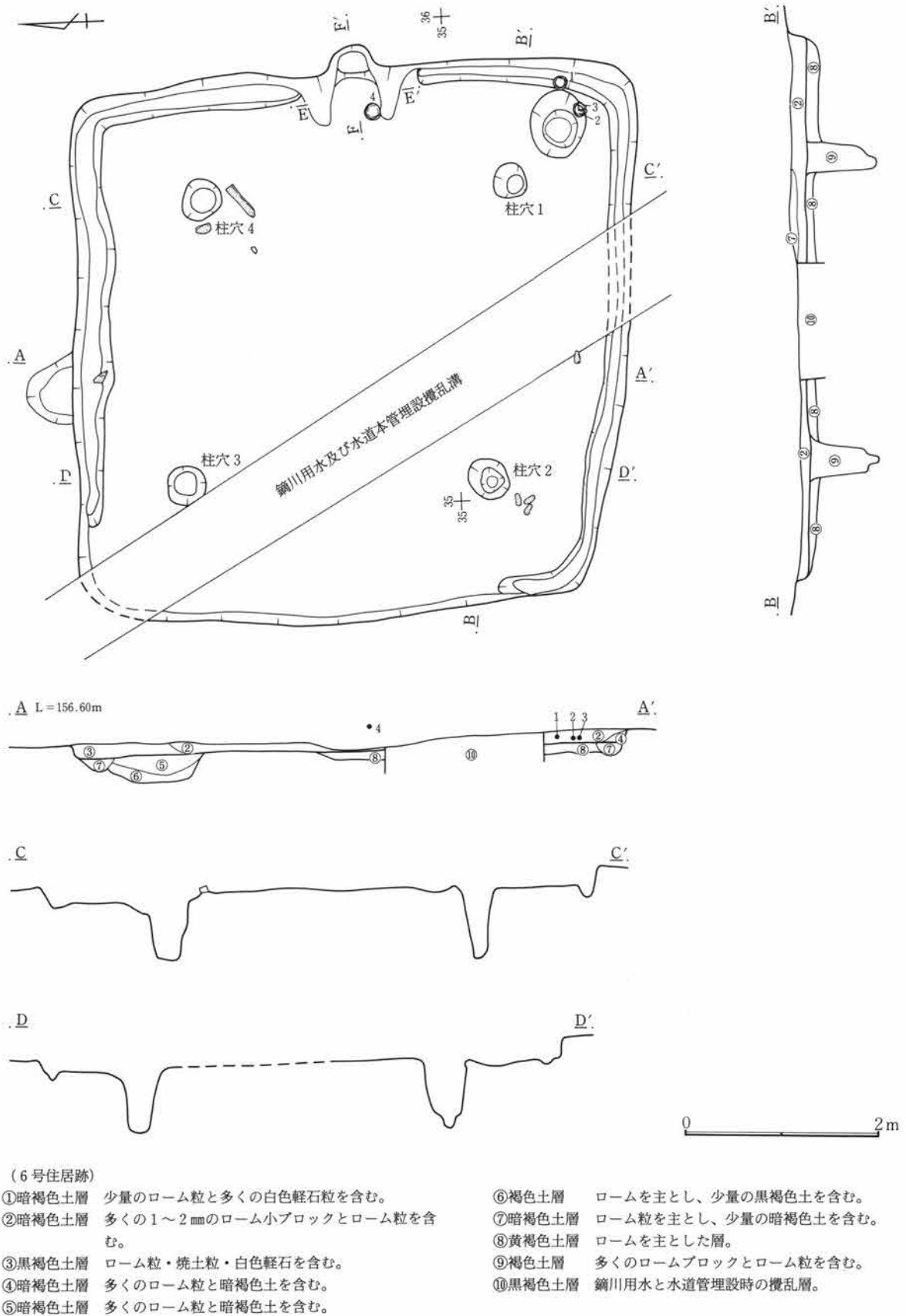
住居の残りは北東部分が悪かった。竈は東壁中央部に造られていたが、北壁中央部の壁面も掘り込まれており、僅かながら焼土粒が検出されているため旧竈が造られていた可能性がある。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は少し不均衡であるが、ほぼ方形に配置され4本確認された。貯蔵穴が竈右側の南東コーナーに掘られていた。壁溝が西側壁面以外の壁面下で確認された。

規模 東西5.68m、南北5.80mである。壁高は残りの良い南壁部分で21cmである。壁溝は幅30cm前後で深さは床面から18～25cmである。柱穴1は径34cm深さ72cm、柱穴2は径44cm深さ56cm、柱穴3は径38cm深さ72cm、柱穴4は径40cm深さ72cmである。貯蔵穴は、径45cm深さ78cmで円形を呈する。

遺物 土師器の坏や甕と紡錘車が出土し、須恵器の坏や甕の破片も出土している。

床下 床面中央部のロームを4.0×3.2mの範囲で掘り残して、壁面に近い周辺部を8～12cmほど深く掘っている。また竈手前の部分に径1.05×0.85m、床面からの深さ30cmの床下土坑が掘られていた。



第8図 6号住居跡実測図

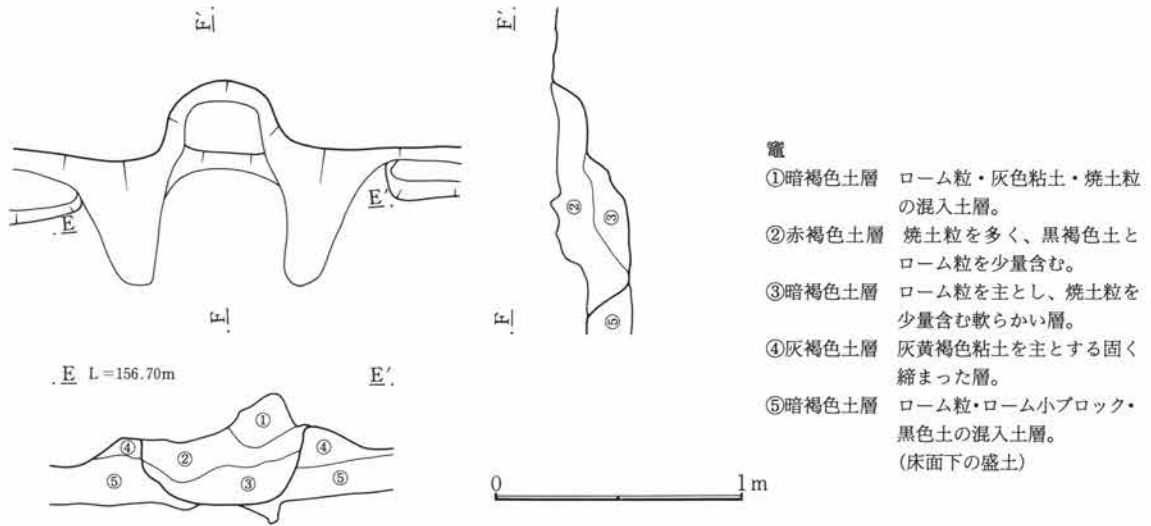
第3章 古墳時代の遺構と遺物

(竈)

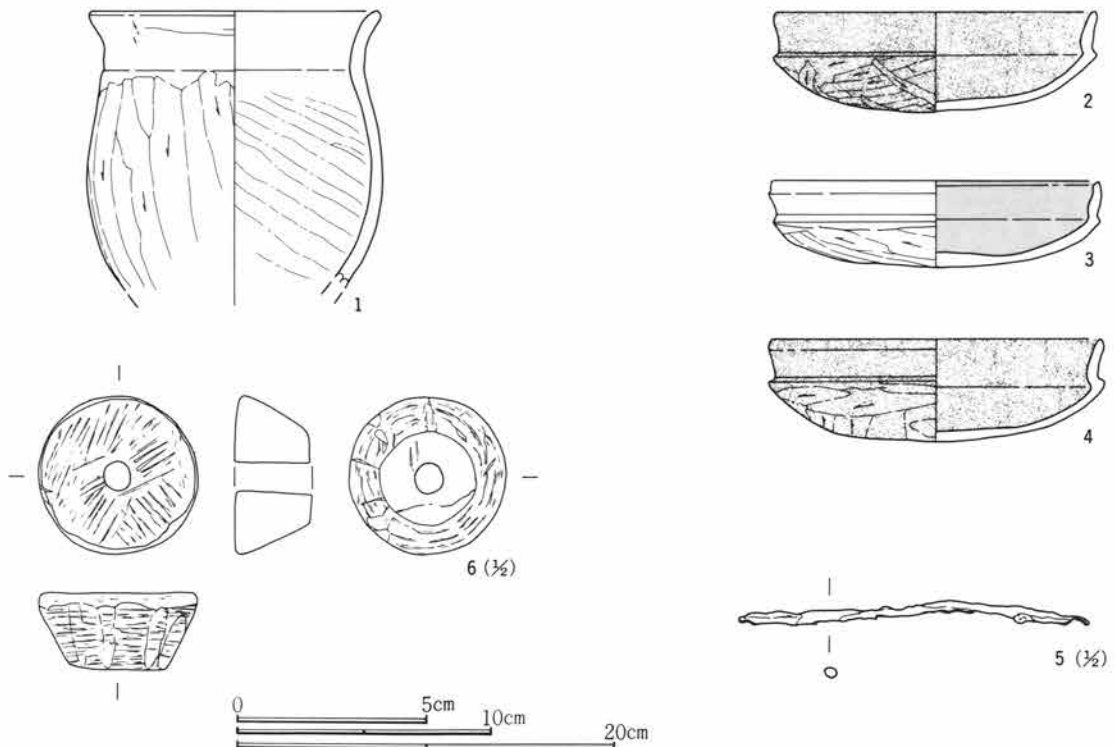
位置 住居東壁中央部に造られている。全体に残りが悪い。燃焼部の大部分は床面に位置し、煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 ロームと灰黄褐色粘質土を主体とした灰褐色土で造られていた。燃焼部床面に多くの焼土粒が確認され、奥壁部分と右袖上面は焼けて焼土化していた。

規模 両袖方向95cm、煙道方向84cmである。



第9図 6号住居跡竈実測図



第10図 6号住居跡出土遺物実測図

6号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
10-1 41	土師器 小型甕	床面直上 残存	口(15.7) 高— 底—	①粗、5~8mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へラ削り。砂粒や胎土が移動し、器表面が極めて粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
10-2 41	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.7 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。
10-3 41	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.0 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を含む。②酸化焰、硬質③内面黒色・断面と外面にぶい黄橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部上半がわずかに内傾し口唇部が削られている。内面の黒色は吸炭による。
10-4 41	土師器 坏	竈内+14 ほぼ完形	口 13.1 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。器表面密で削りの単位は明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。
10-5 70	鉄製品	覆土	長 9.3 幅 0.4 厚 0.35 重 3.5		名称と用途不明。 細長い鉄製品であり錆が進んでいる。
10-6 71	石製品 紡錘車	覆土 完形	径 4.2/2.5 孔径 0.7 厚 2.0 重 55.2		表面全体に目の細かい削り痕が残る。仕上げ砥に近い砥石で仕上げているものと思われる。側面に削りの単位が一定の幅で残る。蛇紋岩。

7号住居跡 (第11~14図、図版3・4・41)

位置 本住居跡は、第1次調査区の中央部にあり、33-37・38グリッドに位置する。

概要 6号住居同様に、住居の上に今日の農道が斜めに横切っている。水道の本管と竈川用水の敷設により、住居西側が斜めに掘り込まれ攪乱を受けている。用水は浅いため床下の一部までの掘り込みであったが、水道管は深く完全に床下まで掘り抜いていた。

竈は東壁中央部やや南側と北壁ほぼ中央部に造られていた。いずれも残りは悪く、北側の竈は袖や燃烧部がはっきり区別できなく、全体に焼土粒が散乱している。また竈周辺に土器や石の出土もない。東竈も残りは悪いが、両袖の存在や袖の芯材として使われたと思われる2個の石や竈右側に置かれた甕の口縁部の出土等から北竈が使われなくなって壊された後に、新しく東竈がつけられたものと思われる。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が少し混入した土で造られており、床面下の掘り込みは少なかった。柱穴は少し不均衡であるがほぼ3.2m間隔で方形に配置され4本確認された。貯蔵穴が新旧それぞれの竈の右側に掘られていた。周溝が住居西側のほぼ半分の範囲で確認された。

規模 東西5.82m、南北5.78mである。壁高は残りの良い南壁部分で25cmである。周溝は幅20cm前後で深さは床面から16cm前後である。柱穴1は径52cm深さ57cm、柱穴2は径62cm深さ57cm、柱穴3は径58cm深さ57cm、柱穴4は径45cm深さ60cmである。新貯蔵穴は径70cm深さ64cmで浅い。旧貯蔵穴は径52cm深さ53cmで円形を呈する。

遺物 土師器の坏と甕や鉢等が出土し、甕の破片も大量に出土している。

床下 掘り込みは浅く、床下土坑は掘られていなかった。

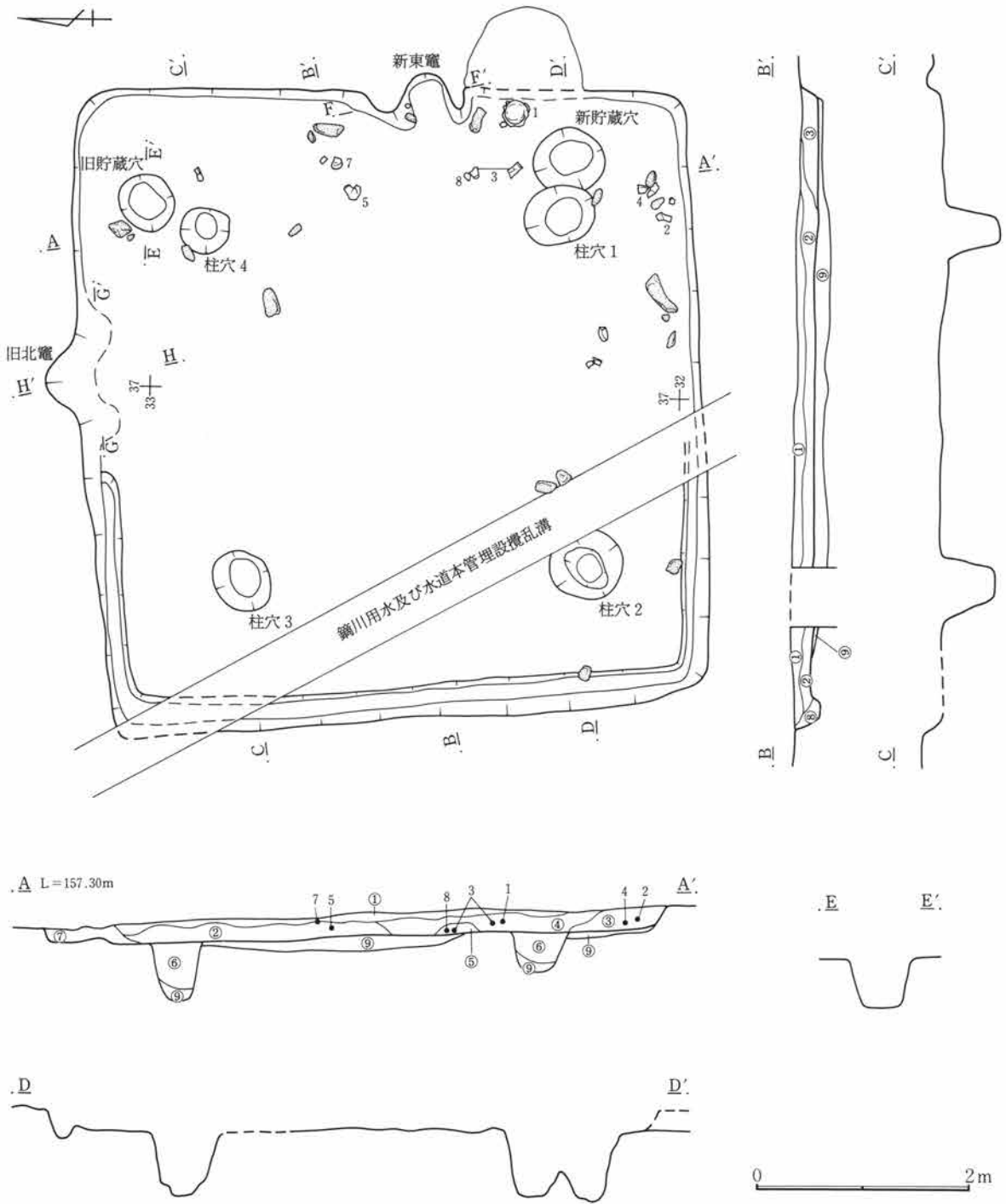
(新東竈)

位置 住居東壁中央部やや南側に造られている。燃烧部の大部分は床面に位置し、煙道部はほとんど残っていないが壁面を掘り込んで造られていたものと思われる。

構造 袖はローム小ブロックとローム粒を用いて造られており、焚口の両袖部に天井石を支えたと思われる各1個の石が出土し、左袖部付近より土師器甕の胴部小破片が出土した。燃烧部や覆土中より焼土粒が出土したが量は多くない。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

規模 両袖方向82cm、煙道方向52cmである。



A L=157.30m

(7号住居跡)

- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|----------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くの白色軽石粒を含む。 | ⑤茶褐色土層 | 多くのローム粒と焼土粒を含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム小ブロックと少量の炭化物及び焼土粒を含む。 | ⑥褐色土層 | 多くのローム小ブロックとローム粒を含む。 |
| ③茶褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑦茶褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 |
| ④暗褐色土層 | 多量のローム小ブロック(径1cm)と少量の焼土粒及び炭化物を含む。 | ⑧褐色土層 | ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。 |
| | | ⑨黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |

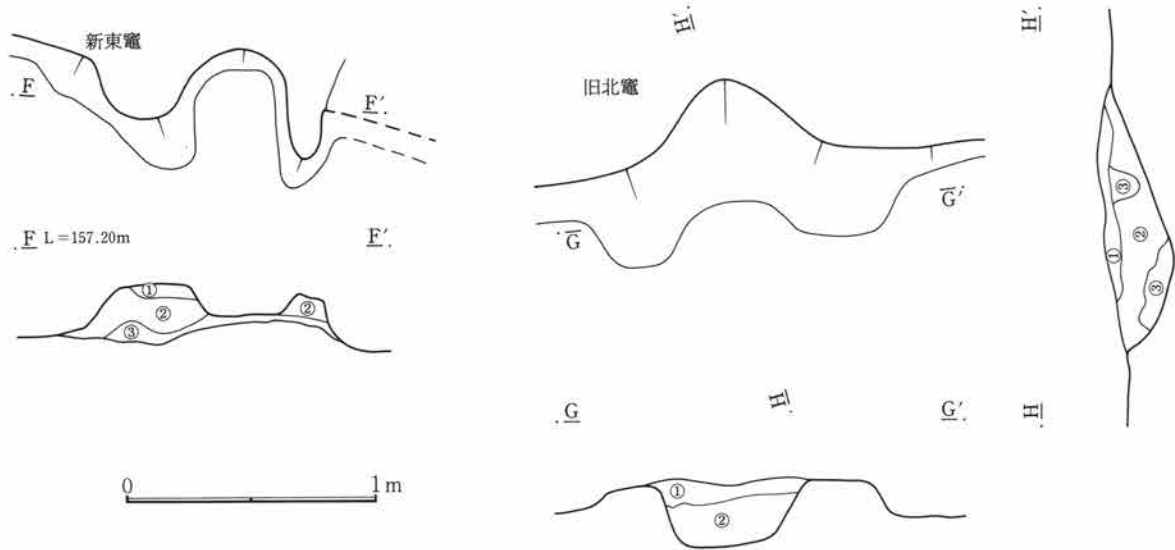
第11図 7号住居跡実測図

(旧北竈)

位置 住居北壁中央部に造られている。多くの部分が残っていないが燃焼部の大部分は床面に位置し、煙道部は壁面を掘り込んで造られていたものと思われる。

構造 ローム小ブロックとローム粒を多く用いて造られていたものと思われる。竈内や周辺より石の出土はなかった。覆土全体より焼土粒が出土したが量は多くない。

規模 両袖方向98cm、煙道方向68cmである。



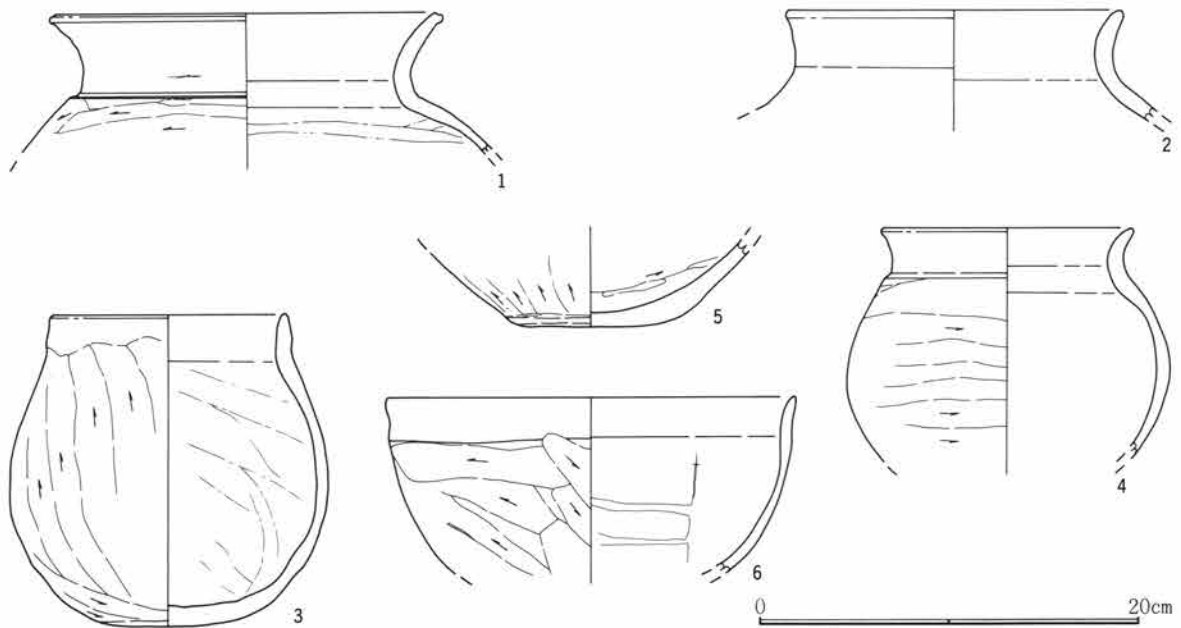
新東竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 ローム小ブロック・ローム粒を多く含む。
- ③褐色土層 ロームを主とした層。

旧北竈

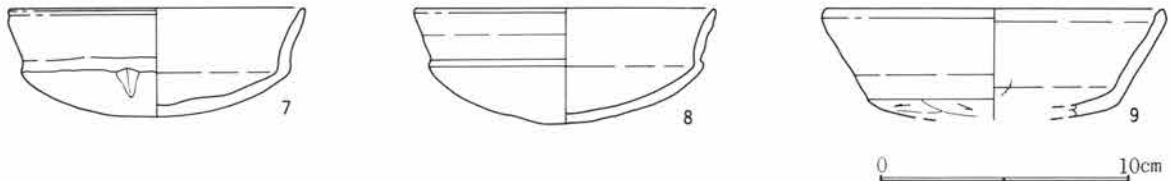
- ①暗褐色土層 灰褐色粘土と白色軽石を多く含む固い層。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒・ローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 焼土粒と焼土小ブロックを含む。

第12図 7号住居跡新東竈・旧北竈実測図



第13図 7号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第14図 7号住居跡出土遺物実測図(2)

7号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
13-1 41	土師器 壺	新竈内+11 口縁部のみ ほぼ完形	口 20.3 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	肩部ヘラ削り。口縁部横ナデ。口唇部中央に1条の沈線。内面ナデ。胴部の器肉が薄い。
13-2	土師器 壺	床面+14 破片	口(17.6)	①粗、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	口縁部横ナデ。器表面に多くの砂粒が浮き出ている。
13-3 41	土師器 甕	床面直上 %残存	口(12.2) 高 16.4 底 7.4	①粗、1mm前後の石英粒を大量に含む。片岩粒も少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が極めて粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
13-4 41	土師器 甕	床面直上 %残存	口 13.1 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面密。頸部の器肉が厚い。
13-5	土師器 甕	床面+5 破片	底 8.2	①粗、3~5mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。器表面は比較的密。内面ナデ。
13-6	土師器 鉢	覆土 破片	口(21.8) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。大きな鉢の小破片か。
14-7 41	土師器 坏	床面+11 %残存	口(11.7) 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面の胎土が粉状を呈し削りの単位が不明瞭。胎土が粉状を呈し手に多く付着する。
14-8 41	土師器 坏	床面直上 %残存	口(12.0) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部中央に1条の弱い沈線がある。胎土がやや粉状を呈し手に付着する。
14-9 41	土師器 坏	覆土 %残存	口(13.5)	①密、雲母を含む。 ②酸化焰硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口唇部は鋭角となる。

34号住居跡 (第15・16図、図版4・41)

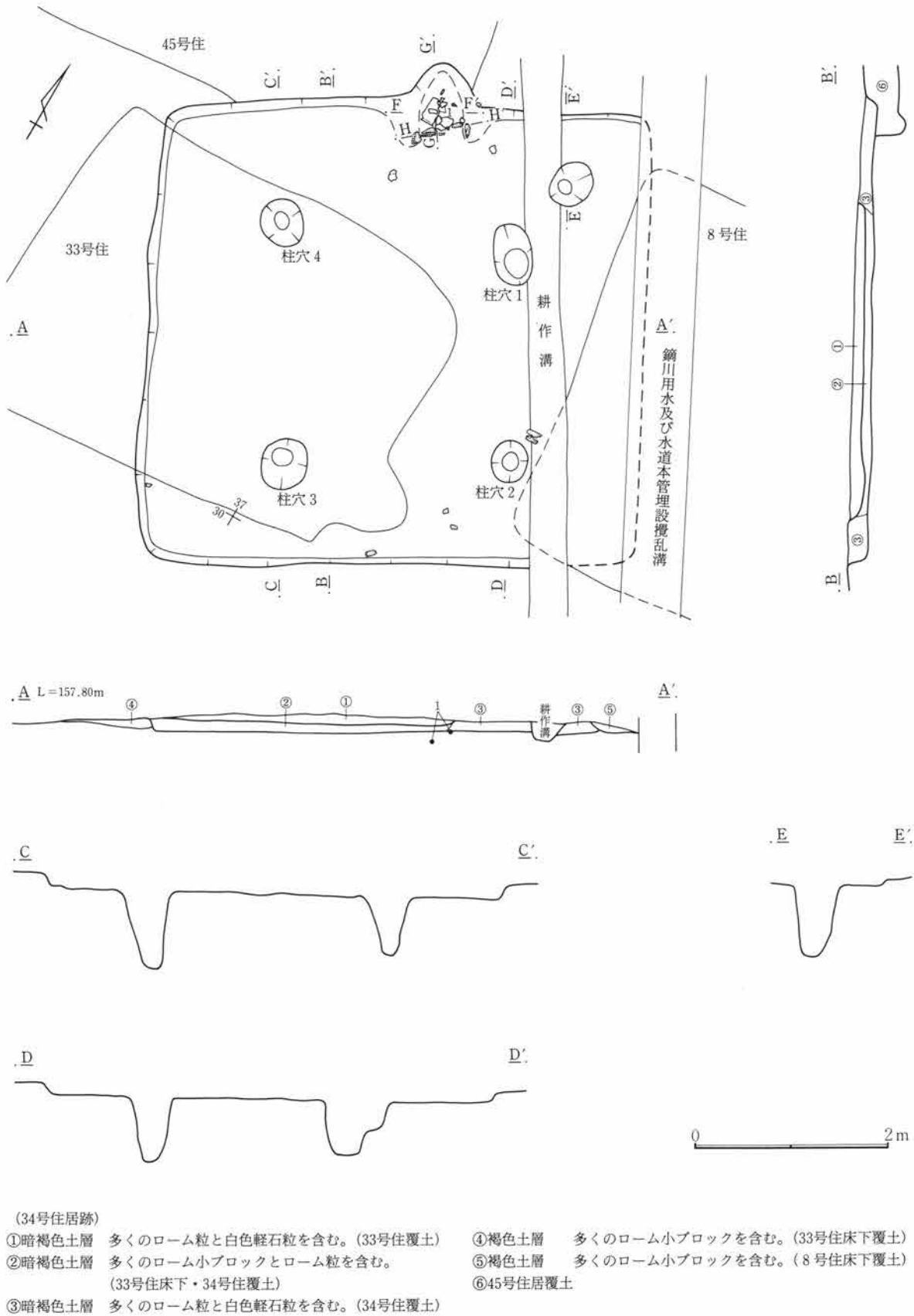
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31-37・38グリッドに位置する。

概要 住居の東部分を今日の農道が横切っている。この農道を掘り込み、水道の本管と鍋川用水から引かれた用水が埋められた。この工事により住居の東壁部分が壊されていた。また住居東側を平安時代の8号住居に、また中央部から西側を同じく平安時代の33号住居の覆土の多くが掘り込まれていた。さらに本住居跡は、北側に位置する古墳時代の45号住居の南東コーナーを掘り込み、竈が造られていた。このように4軒の重複する住居の1軒であり、新旧関係は45→34→33→8号住居の順である。床下土坑等の掘り込みは認められなかった。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は少し不均衡であるが、ほぼ方形に配置され4本確認された。貯蔵穴が竈右側の北東コーナーに掘られていた。明瞭な壁溝は確認されなかった。

規模 東西不明、南北4.80mである。壁高は残りの良い南壁部分で18cmである。柱穴1は径42cm深さ60cm、柱穴2は径44cm深さ64cm、柱穴3は径50cm深さ78cm、柱穴4は径46cm深さ64cmである。貯蔵穴は、径45cm深さ78cmでほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甕が出土している。



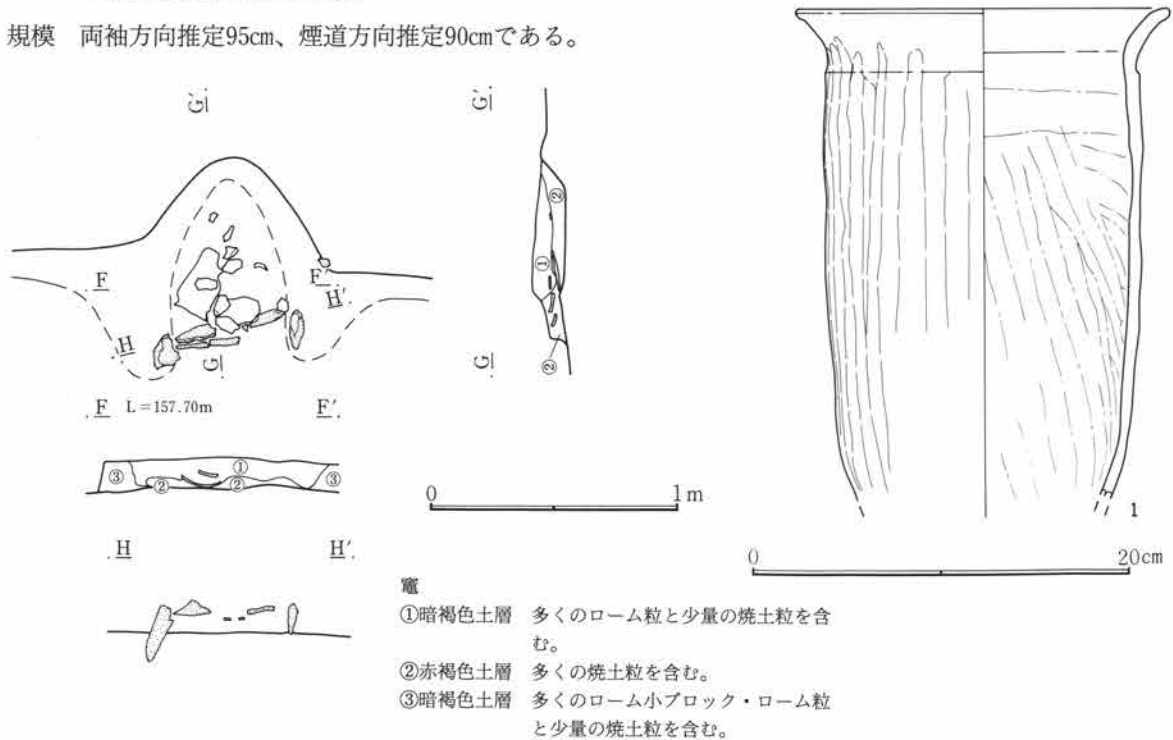
第15図 34号住居跡実測図

(竈)

位置 住居北壁中央部に造られている。

構造 両袖と天井に石が使用されており、袖石はほぼ使用時の位置から出土し、天井石は割れて焚口に落ちていた。石以外にロームやロームブロックを用いて造られていたと思われるが、残りが悪く良好な状態で検出できなかった。燃焼部より大きな土師器の甕と小さな破片が出土している。燃焼部床面に多くの焼土粒が確認された。

規模 両袖方向推定95cm、煙道方向推定90cmである。



第16図 34号住居跡竈・出土遺物実測図

34号住居跡出土遺物観察表

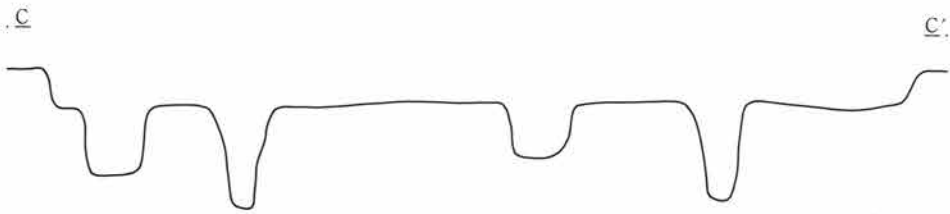
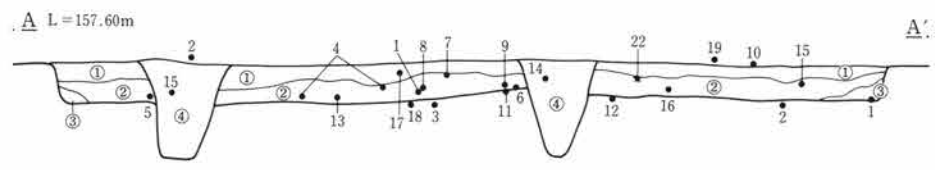
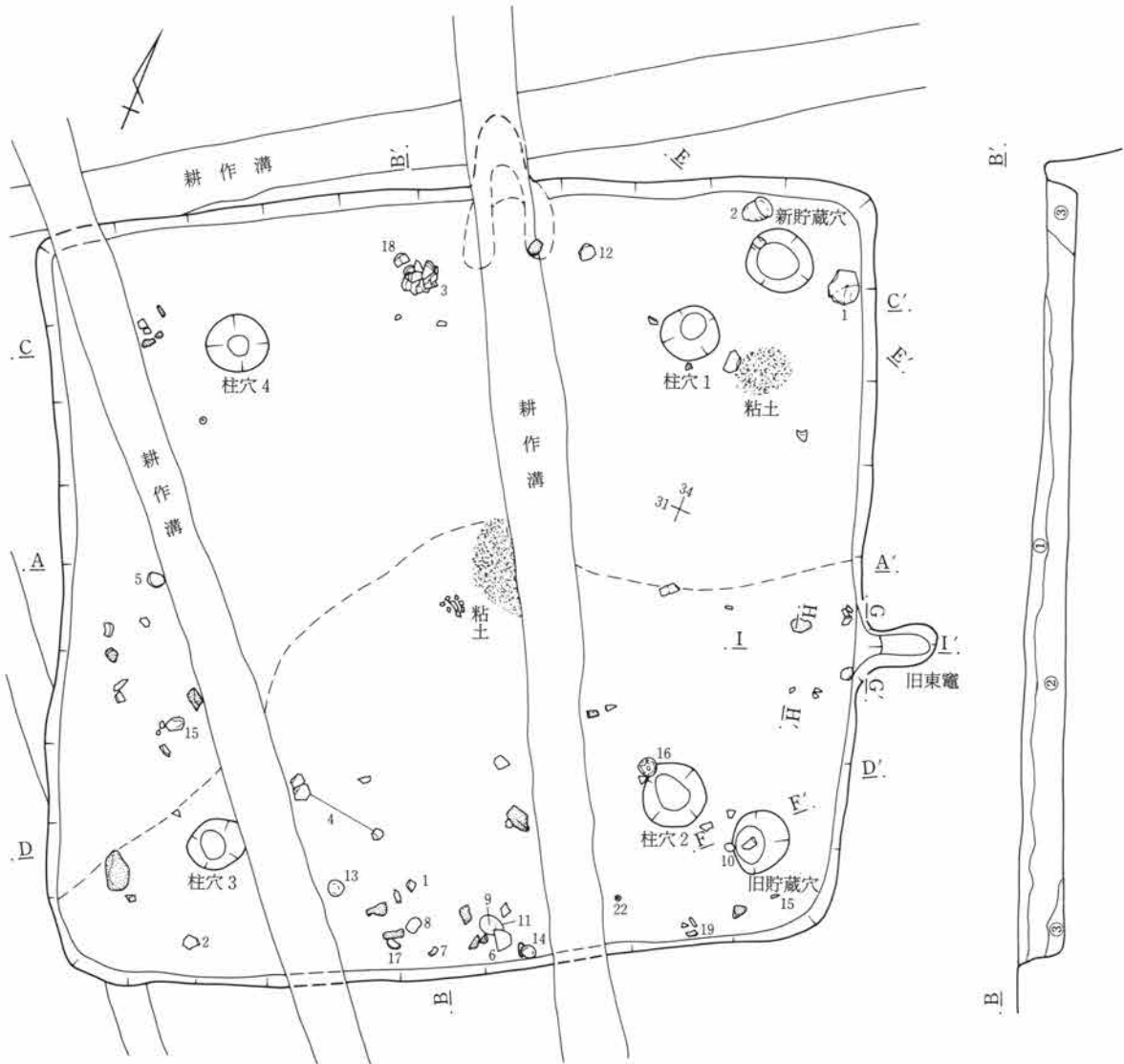
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
16-1 41	土師器 甕	竈内-9 片残存	口(19.5) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焙、硬質 ③橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 口縁部は短かく外反する。 胴外面は比較的密である。

38号住居跡 (第17~21図、図版4・5・41・42・70・71)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31・32-34グリッドに位置する。

概要 南北方向の2本の耕作溝により床面下まで、また北壁の一部が東西方向の耕作溝により掘り抜かれていた。床面は南側の残りは良いが、北側が悪く良好な状態で確認できなかった。明らかに床面として確認できた部分との境を点線で図上に表示した。耕作溝により掘られている住居北壁中央部分から大量の焼土粒が検出された。この部分の床面や壁面にも焼土粒が多く認められることから、この位置に竈が造られていたものと考えられる。竈は東壁にも検出されたが、住居使用段階において両袖から燃焼部の大部分が削り取られていたため旧竈であり、耕作溝により掘り抜かれた北竈が新竈であったと思われる。床面中央部と新竈南側から青灰色の粘土が出土した。

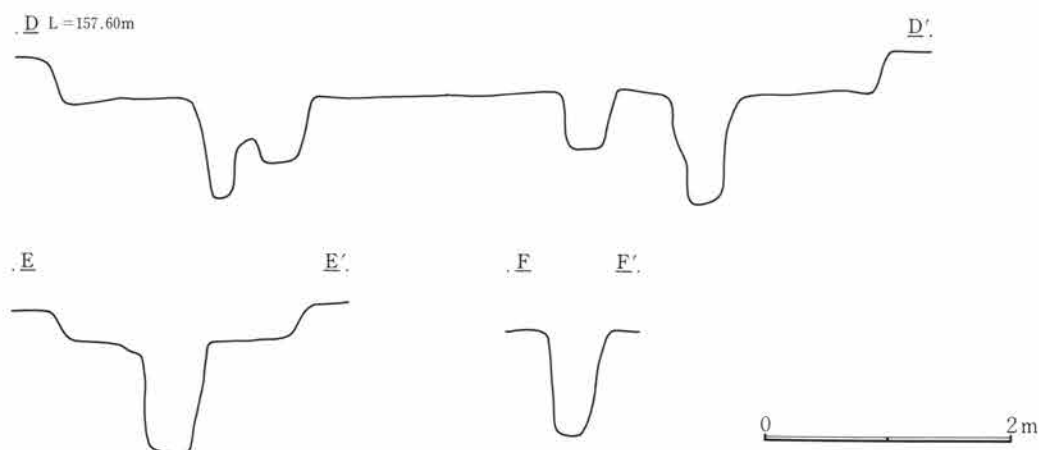
構造 床面はロームブロックと黒褐色土が少し混入した土で造られていた。柱穴は少し不均衡であるが、ほ



- (38号住居跡)
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ③褐色土層 ローム粒とローム小ブロックを主とした層。
 - ④耕作溝覆土

第17図 38号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第18図 38号住居跡実測図(2)

ほぼ3.9m間隔で方形に配置され4本確認された。貯蔵穴が新旧それぞれの竈の右側に掘られていた。周溝は確認されなかった。

規模 東西6.96m、南北6.45mである。壁高は残りの良い南壁部分で43cmである。柱穴1は径48cm深さ79cm、柱穴2は径54cm深さ88cm、柱穴3は径44cm深さ78cm、柱穴4は径53cm深さ78cmである。新貯蔵穴は径58cm深さ90cm、旧貯蔵穴は径48cm深さ84cmで円形を呈する。

遺物 土師器の坏や甕が多く出土し、須恵器の坏や甕の破片も少量出土している。

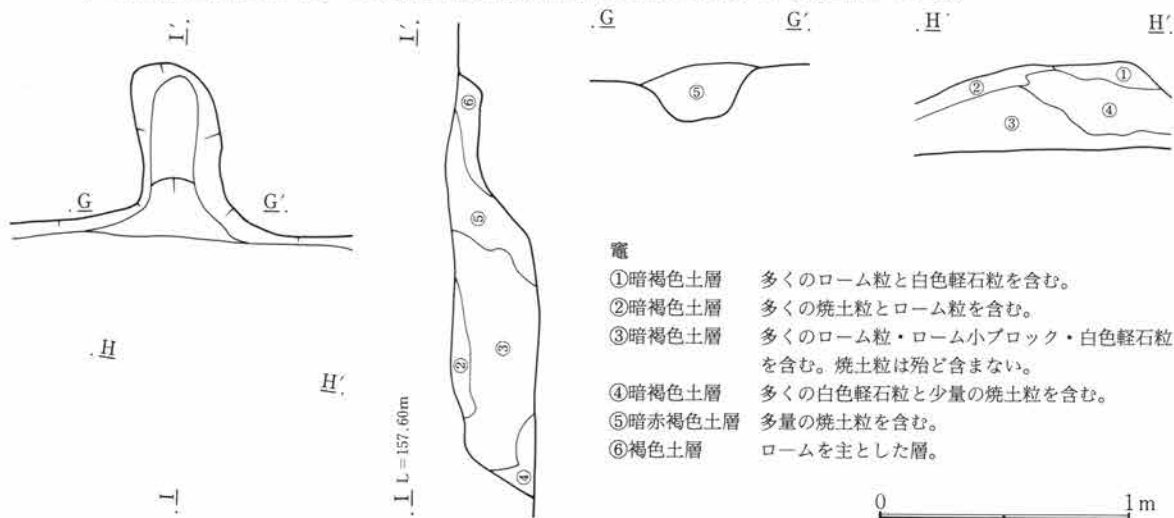
床下 掘り込みは浅く、床下土坑は掘られていなかった。

(新北竈)

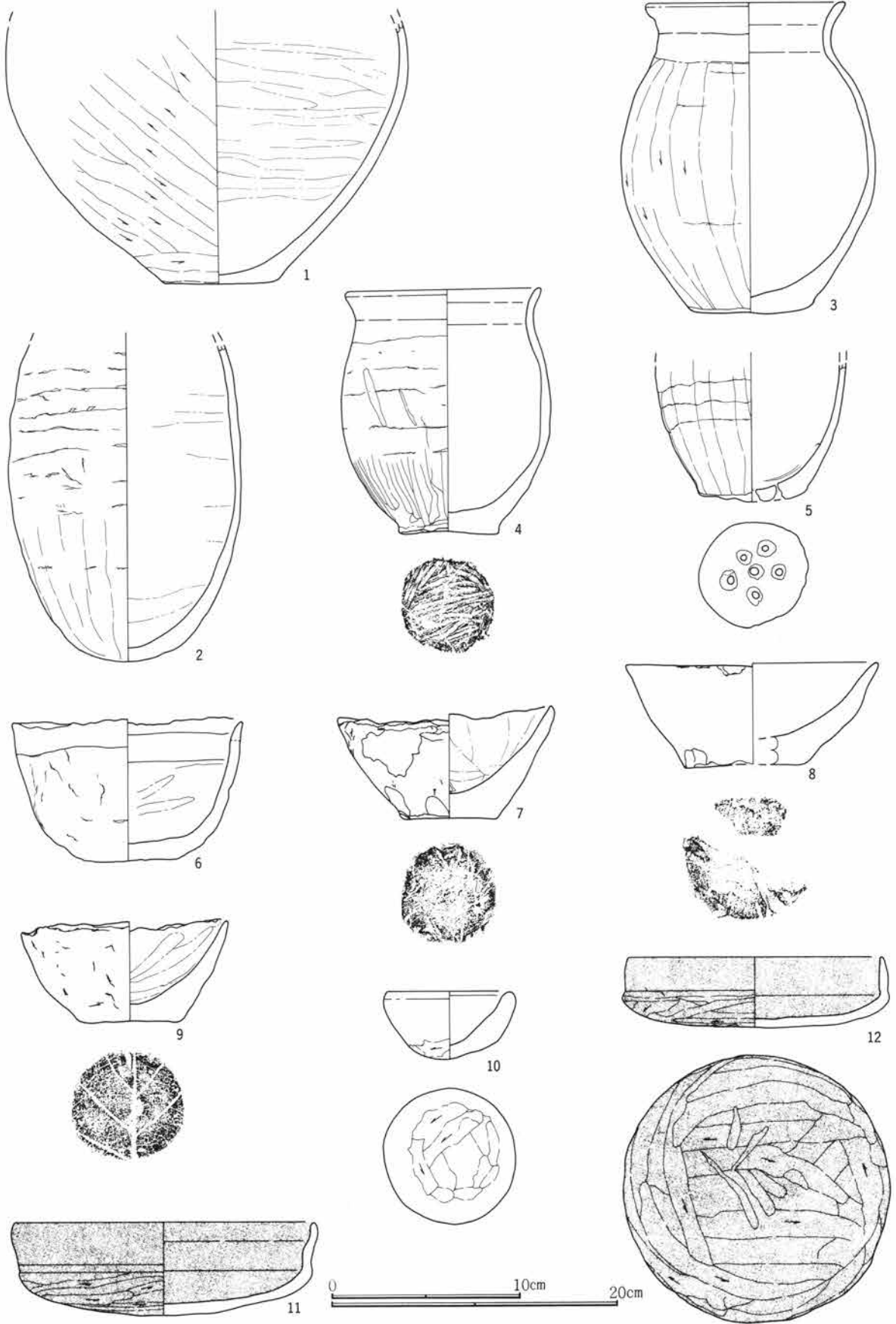
概要 東壁に築かれた竈が旧竈であることから他の位置に竈が築かれた事が考えられ、前述のように北竈の存在が想定されこの北竈を新竈とした。そっくり削り取られているため規模や構造も不明である。

(旧東竈)

概要 住居東壁中央部やや南よりに造られている。竈の焚口から煙道部にかけての土層断面から、住居使用段階において床面上に位置する袖部や燃烧部は削り取られたことが明らかであり、実際両袖部分と燃烧部の多くは検出されなかった。竈として確認されたのは壁面部の燃烧部の一部と煙道部であり、多くの焼土粒が出土した。この焼土粒は燃烧部床面と覆土上面からも出土している。

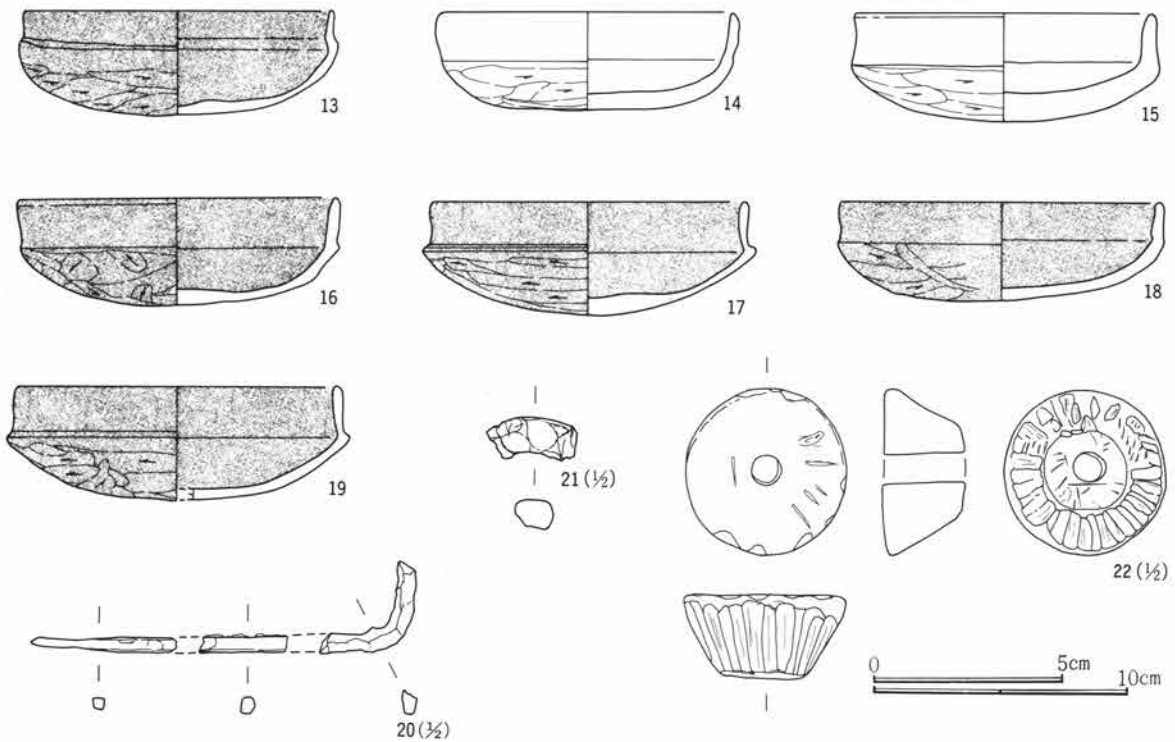


第19図 38号住居跡竈実測図



第20図 38号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第21図 38号住居跡出土遺物実測図(2)

38号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
20-1 41	土師器 壺	床面直上 %残存	口 — 高 — 底 7.8	①粗、1~3mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部ヘラ削り。砂粒の移動少なく、器表面密。 内面ナデで器表面密。
20-2 41	土師器 甕	床面直上 実測部 ほぼ完形	口 — 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	丸底の底部ヘラ削り。胴外面下半ヘラ削り。中央部ナデで、多 くの輪積痕が残る。内面ナデで器表面密。
20-3 41	土師器 小型甕	床面-6 %残存	口 13.7 高 21.7 底 8.4	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ヘラ削り。胴外面ナデ後、弱いヘラ削り。一部輪積痕が残 る。口縁部横ナデ。内面ナデ器表面密。胴外面に多くの砂粒が 目立つ。
20-4 41	土師器 小型甕	床面直上 %残存	口 13.4 高 17.1 底 7.1	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄橙色	底面丸棒状の工具で、ナデつけている。胴外面下半部も同じ。 胴外面上半ナデで、輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデ。 底部の整形が異質である。
20-5 41	土師器 甕	床面直上 胴下半% 底部完形	口 — 高 — 底 7.6	①粗、1~5mmの砂粒を多く片 岩粒を少量含む。 ②酸化焰、 硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外側に弱いヘラ削り。多くの輪積痕が残る。 内面ナデで器表面密。底部に6個の穴を持つ。底部の穴は、内 側から外側へ向かって穿孔か。
20-6 42	土師器 小型甕	床面-20 ほぼ完形	口 16.2 高 9.8 底 5.6	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 硬質 ③橙色	ヘラ削りは全く認められない。外面ナデ。口縁部横ナデ。内面 ナデ。内面の器表面密。全体的にゆがんでいる。
20-7 42	土師器 坏	床面+19 ほぼ完形	口 11.0 高 5.8 底 5.1	①やや粗、1~2mmの砂粒を含 む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	ヘラ削りは全く認められない。底面複数の木葉痕。外面ナデ。 内面ヘラナデにより器表面密。 内面底部にヘラの工具痕あり。
20-8 42	土師器 坏	床面+7 %残存	口 13.2 高 5.3 底 6.4	①やや粗、1~2mmの砂粒を少 量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	ヘラ削りは全く認められない。底面木葉痕。外面ナデ。内面ナ デにより器表面密。7、8、9の坏がほぼ同類。
20-9 42	土師器 坏	床面+10 %残存	口 10.9 高 5.3 底 5.7	①やや粗、1~2mmの砂粒を少 量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	ヘラ削りは全く認められない。底面木葉痕。外面ナデ。内面ナ デにより器表面密。7、8、9の坏がほぼ同類。
20-10 42	土師器 坏	床面+2 完形	口 6.6 高 3.5 底 丸底	①密、雲母を含む。 ②酸化焰 硬質 ③浅黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部~内面横ナデ。 器肉が厚く小さな器であり、異質である。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
20-11 42	土師器 坏	床面+7 完形	口 15.8 高 4.8 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色外 面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ、口縁部内 側の中央に一条の沈線を持つ。浅く口径の大きな坏である。 内面の黒色は黒漆か。
20-12 42	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.4 高 3.7 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色外 面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面はていねいなナデ。浅い坏 である。内面の黒色は黒漆か。
21-13 42	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.2 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。稜の下部はヘラ削りなし。口縁部横ナデ。内面 ていねいなナデ。
21-14 42	土師器 坏	床面+15 ほぼ完形	口 11.8 高 3.8 底 丸底	①やや粗、1~3mmの砂粒を少 量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面わずかなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭で ない。
21-15 42	土師器 坏	床面+7 ほぼ完形	口 11.8 高 4.3 底 丸底	①やや粗、雲母粒をわずかに含 む。1mm以下の砂粒を多量に含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。器内の厚 い坏である。
21-16 42	土師器 坏	床面+6 %残存	口 12.6 高 4.2 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・ 一部黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
21-17 42	土師器 坏	床面+21 %残存	口 12.4 高 4.5 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。② 酸化焰・硬質 ③表面黒褐色・ 断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は高く 明瞭である。内面の黒褐色は漆か。
21-18 42	土師器 坏	床面-6 %残存	口 12.6 高 3.9 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面の一部 黒色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。 稜は低い。内面の黒色は黒漆か。
21-19 42	土師器 坏	床面+30 %残存	口 12.8 高 一 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐 色・断面にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は高く 明瞭である。内面の黒褐色は漆か。
21-20 70	鉄製品	覆土	長 10.1 幅 0.6 厚 0.4 重 5.2		鉄鎌の茎部分か。細く、残りは比較的良好である。
21-21	鉄製品	覆土	長 2.3 幅 1.0 厚 1.1 重 7.7		名称と用途不明、断面はほぼ方形を呈する。
21-22 71	石製品 紡錘車	床面+15 完形	径 4.3/2.2 孔径 0.8 厚 2.2 重 55.0		側面荒砥削り後、刀子等の鉄製工具を用いて削る。 広面の一部に同心円状の工具痕、狭面に弱い工具痕。蛇紋岩。

39号住居跡（第22~24図、図版5・42）

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、34-35グリッドに位置する。

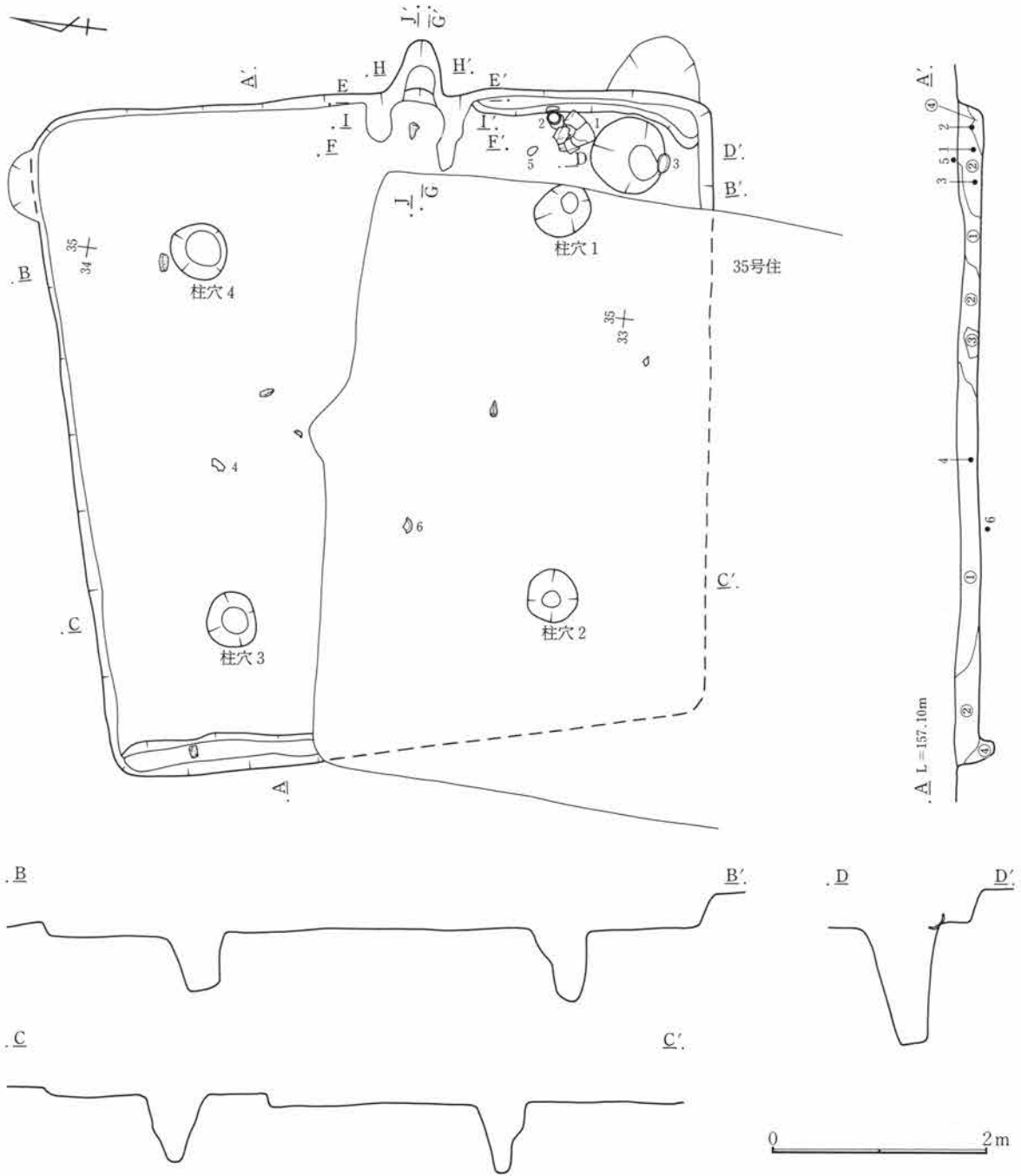
概要 南側約半分が奈良時代の35号住居と重複しており、35号住居により一部床面まで掘り取られている。
竈の残りが良く、竈材として使用された多くのロームが検出された。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が少し混入した土で造られており、床面下の掘り込みは少なかった。
柱穴は少し不均衡であるが、ほぼ3.3m間隔で方形に配置され4本確認された。貯蔵穴が竈右側の住居
南東コーナーに掘られていた。壁溝は竈右側と西壁北側の壁面下で一部確認された。

規模 東西6.12m、南北6.22mである。壁高は残りの良い南壁部分で32cmである。柱穴1は径50cm深さ64cm、
柱穴2は径50cm深さ54cm、柱穴3は径44cm深さ58cm、柱穴4は径53cm深さ53cmである。貯蔵穴は径66
cm深さ112cmで円形を呈する。壁溝は幅28cm前後、深さ10~15cmである。

遺物 土師器の甑や甕や坏が出土しているが、破片を含めて出土量は少ない。

床下 床面からの掘り込みは10~15cmで、床下土坑は掘られていなかった。



(39号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックと白色軽石粒を含む。
- ③褐色土層 ロームブロックを主とし、多くの炭化物を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒を含む。

第22図 39号住居跡実測図

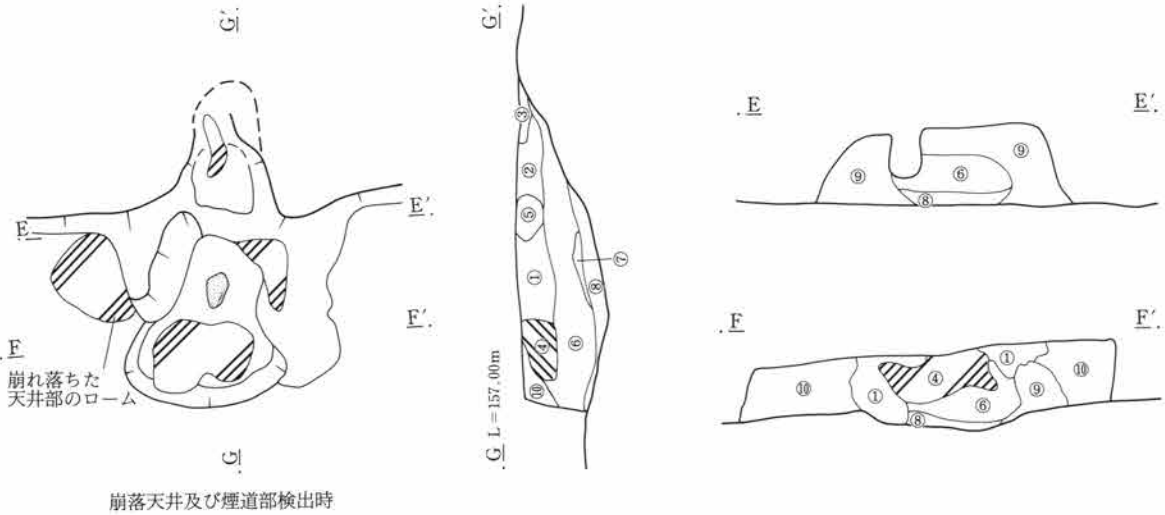
(竈)

位置 東壁南寄りの壁面に造られており、燃烧部の大部分が床面上に位置する。

構造 竈材としてのロームが多くが残っていたが、石や土師器の甕は竈材として使用されていないため、すべてロームを用いて築かれたものと考えられる。焚口部分・左袖外側・燃烧部右奥部分・煙道部に崩

れ落ちた天井部のロームが残っており、燃焼部に接する煙道部天井がほぼ使用時の状態で残っていた。右袖部分のロームは良く残っていたが、左袖部分のロームは手前約半分が取り除かれていた。燃焼部中央の床面に支脚石と思われる石が倒れた状態で残っていた。これらのことよりこの竈は住居とともに放棄される段階で、天井部と左袖手前部分が意図的に一部壊された可能性もある。燃焼部や煙道部から多くの焼土粒が出土した。

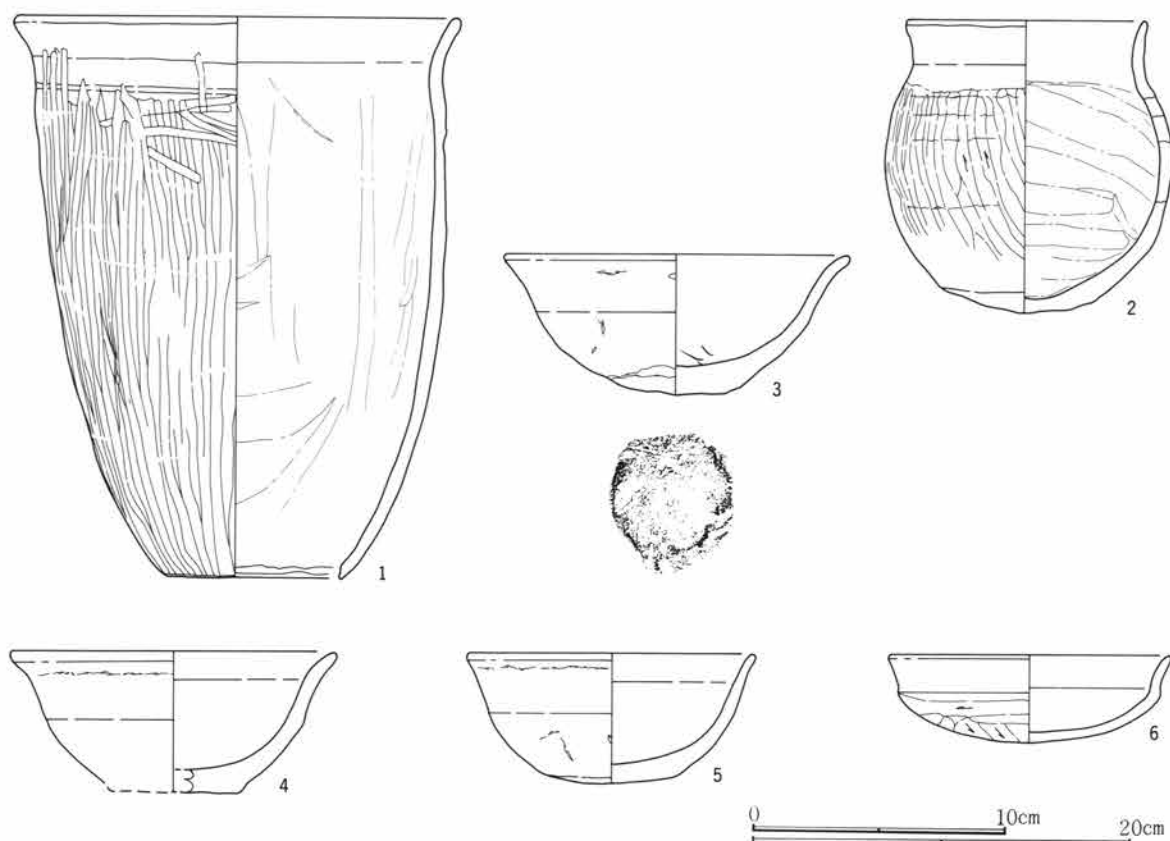
規模 煙道部先端が壊されていたが、両袖方向81cm、煙道部方向120cmであった。



- 竈
- | | | | |
|--------|-----------------------------------|--------|-------------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。 | ⑥暗褐色土層 | 多くのローム粒と焼土粒を含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒・白色軽石粒と少量の焼土粒を含む。 | ⑦灰褐色土層 | 多くの灰と炭を含む。 |
| ③茶褐色土層 | 少量のローム粒と焼土粒を含む。 | ⑧暗褐色土層 | 多くのローム・暗褐色土と少量の焼土粒を含む。 |
| ④褐色土層 | ロームブロックを主とし、下半部に多くの焼土粒を含む。 | ⑨黄褐色土層 | ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 |
| ⑤褐色土層 | ロームを主とし、下半部に多くの焼土粒を含む。
(煙道天井部) | ⑩暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 |

第23図 39号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第24図 39号住居跡出土遺物実測図

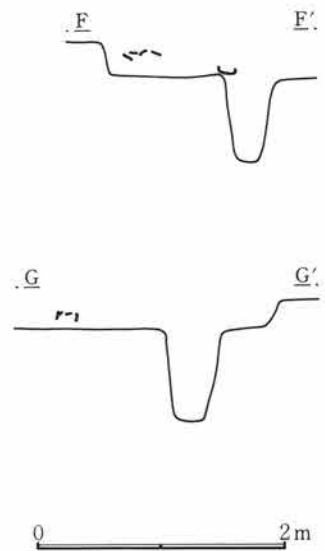
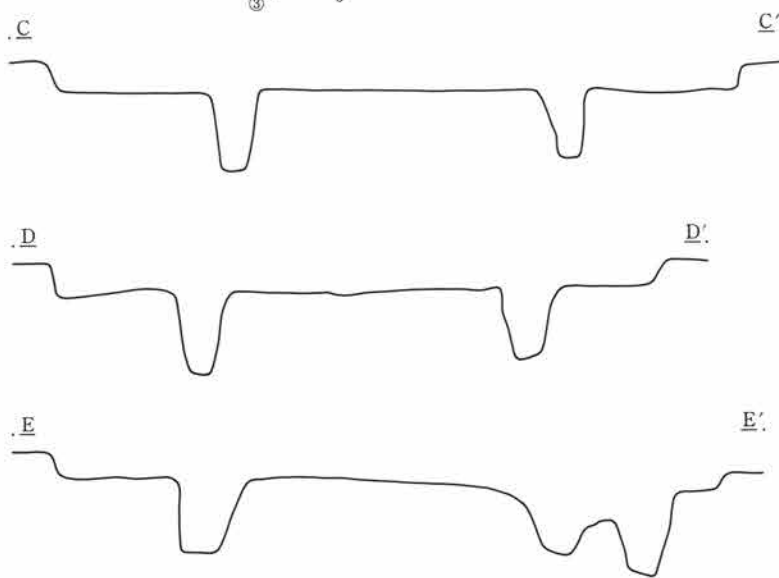
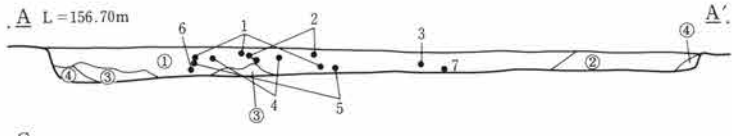
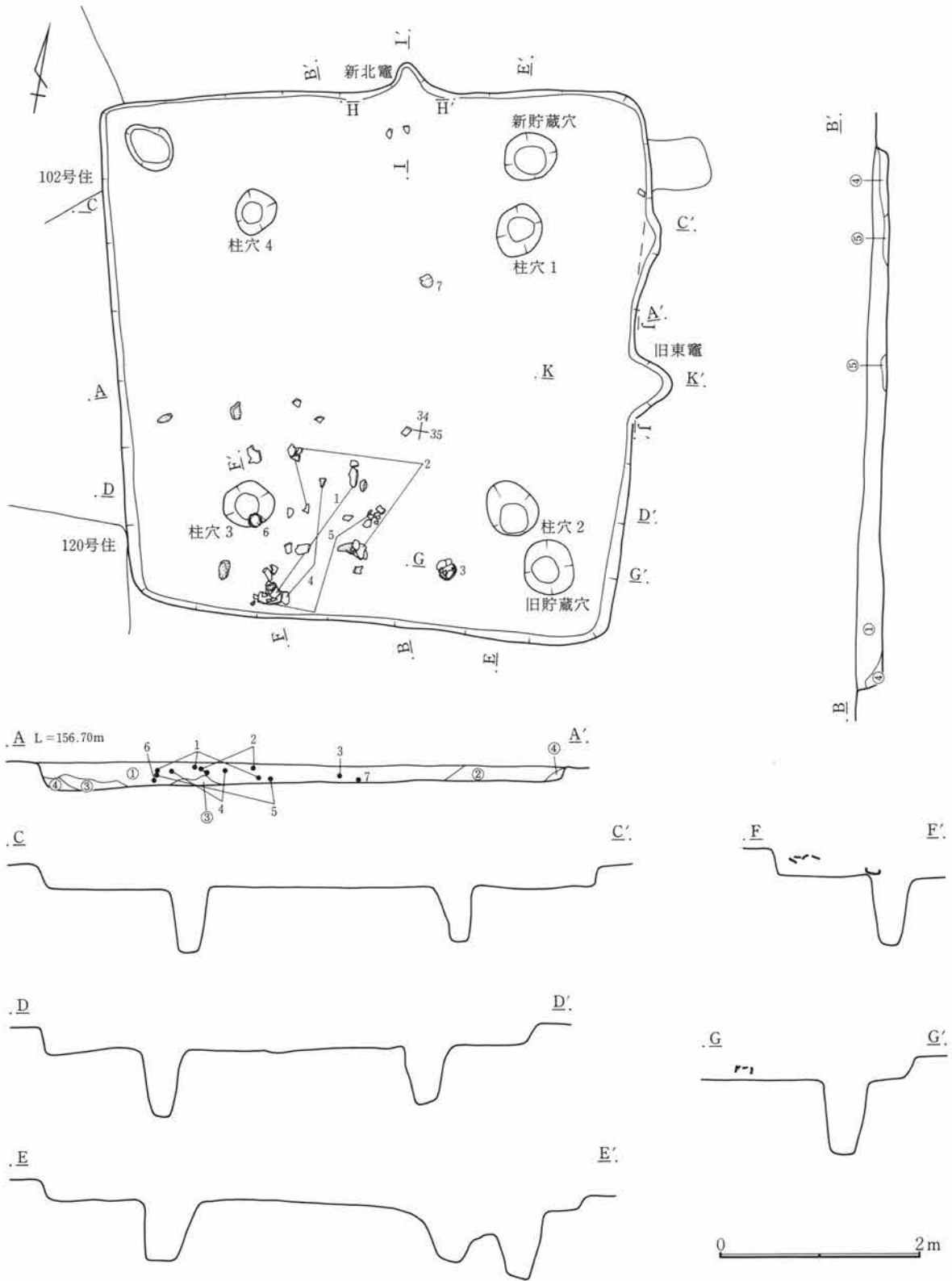
39号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
24-1 42	土 師 器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 23.6 高 29.6 底 9.5	①粗、1～3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③浅黄橙色	胴外面細かい単位のヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ていねいなナ デ、胴下端ヘラ削り。胴外面に多くの砂粒が目立つ。
24-2 42	土 師 器 小型甕	床面+5 ほぼ完形	口 12.6 高 15.4 底 8.4	①粗、1～3mmの砂粒を多く、 3～4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 胴外面に輪積痕あり。
24-3 42	土 師 器 坏	貯蔵穴内 床面直上 完形	口 13.8 高 4.5 底 4.7	①やや粗、1mm以下の砂粒を少 量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 底部にわずかな台を持ち、胴部にヘラ削りなしの異質土器。
24-4 42	土 師 器 坏	床面+4 1/2残存	口 12.8 高 — 底 —	①やや粗、1mm以下の砂粒を少 量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ナデ。口縁部横ナデ。内面横ナデ。 底部にわずかな台を持ち、胴部にヘラ削りなしの異質土器。
24-5 42	土 師 器 坏	床面+21 1/2残存	口(11.3) 高 5.1 底 5.0	①やや粗、1mm以下の砂粒を少 量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ナデ。口縁部横ナデ。内面横ナデ。 底部にわずかな台を持ち、胴部にヘラ削りなしの異質土器。
24-6 42	土 師 器 坏	床面-12 1/2残存	口(11.1) 高 3.4 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面横ナデ。 浅く小さな坏である。

41号住居跡及び新旧竈 (第25～27図、図版5・6・43)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、35・36—34・35の4グリッドに位置する。

概要 北東部分で古墳時代の102号住居と僅かに重複しており、明瞭でないが当住居が102号住居の南東部分
を掘り込んでいるようである。また重複はしていないが南西部分に奈良時代の120号住居が近接して造



- (41号住居跡)
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
 - ②黒褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。
 - ③暗褐色土層 ロームブロックを主とした層。
 - ④暗褐色土層 ロームブロックと暗褐色土の混入層。
 - ⑤黄褐色土層 ロームブロックを主とした固い層。

第25図 41号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

られている。大きな住居であるが、壁面や竈の残りは良好でない。竈は北壁と東壁面に造られていたが、両方とも袖や燃焼部の残りが悪かった。土層断面の観察から北竈の焼土粒は煙道部から床面上の燃焼部の位置まで一定の厚さで堆積していたが、東竈の焼土粒は床面上にほとんど確認されなかったため、東竈は使用段階において両袖や燃焼部が取り除かれたものと判断し、北竈が新竈で東竈が旧竈とした。規模は両竈とも残りが悪く明らかでない。

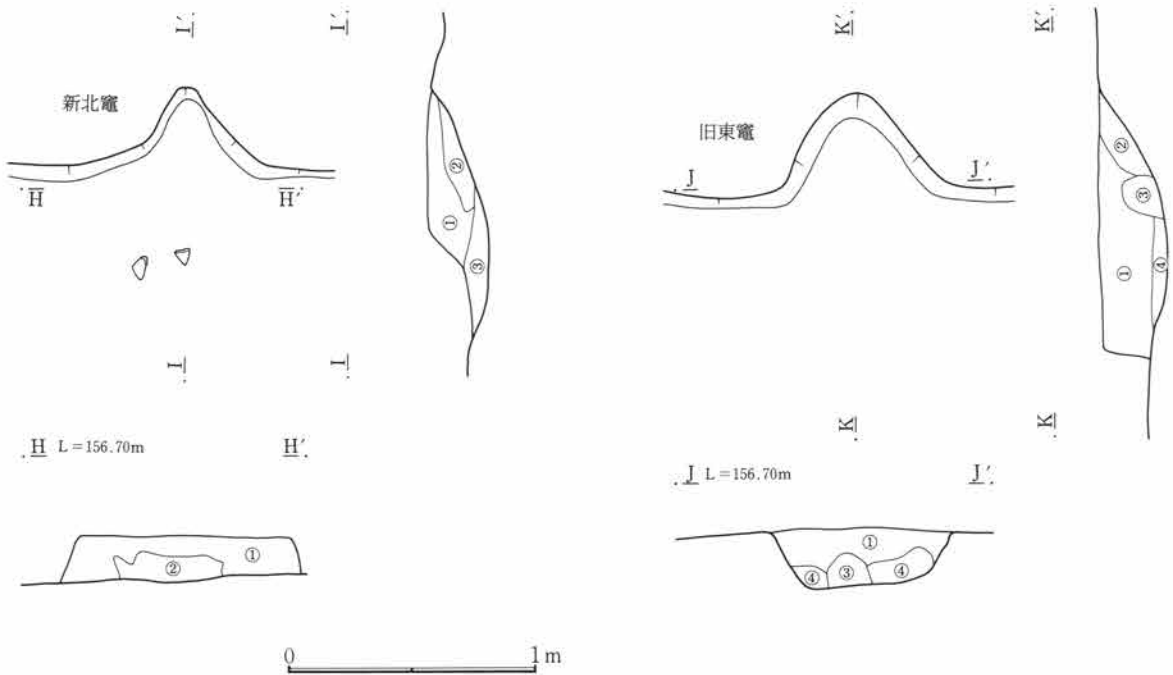
平面形は南壁面と西壁面が他の壁面より狭くなるやや歪んだ台形状を呈する。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が少し混入した土で造られており、床面下の掘り込みは10~18cmであった。柱穴は少し不均衡であるが4本確認された。貯蔵穴が新旧それぞれの竈の右側に掘られていた。壁溝は確認されなかった。

規模 平面形はやや不定形を呈し、東西方向は北壁面で5.4m、南壁面で4.3m、南北方向は西壁面で4.9m、東壁面で5.4mである。壁高は残りの良い南壁部分で27cmである。柱穴1は径42cm深さ62cm、柱穴2は径48cm深さ58cm、柱穴3は径48cm深さ68cm、柱穴4は径43cm深さ72cmである。新貯蔵穴は径52cm深さ80cm、旧貯蔵穴は径50cm深さ74cmで円形を呈する。

遺物 土師器の甑や甕や坏等が出土しているが、破片を含めて出土量は少ない。

床下 明瞭な床下土坑は検出されなかったが、北側と西側の床面が深く掘り込まれていた。



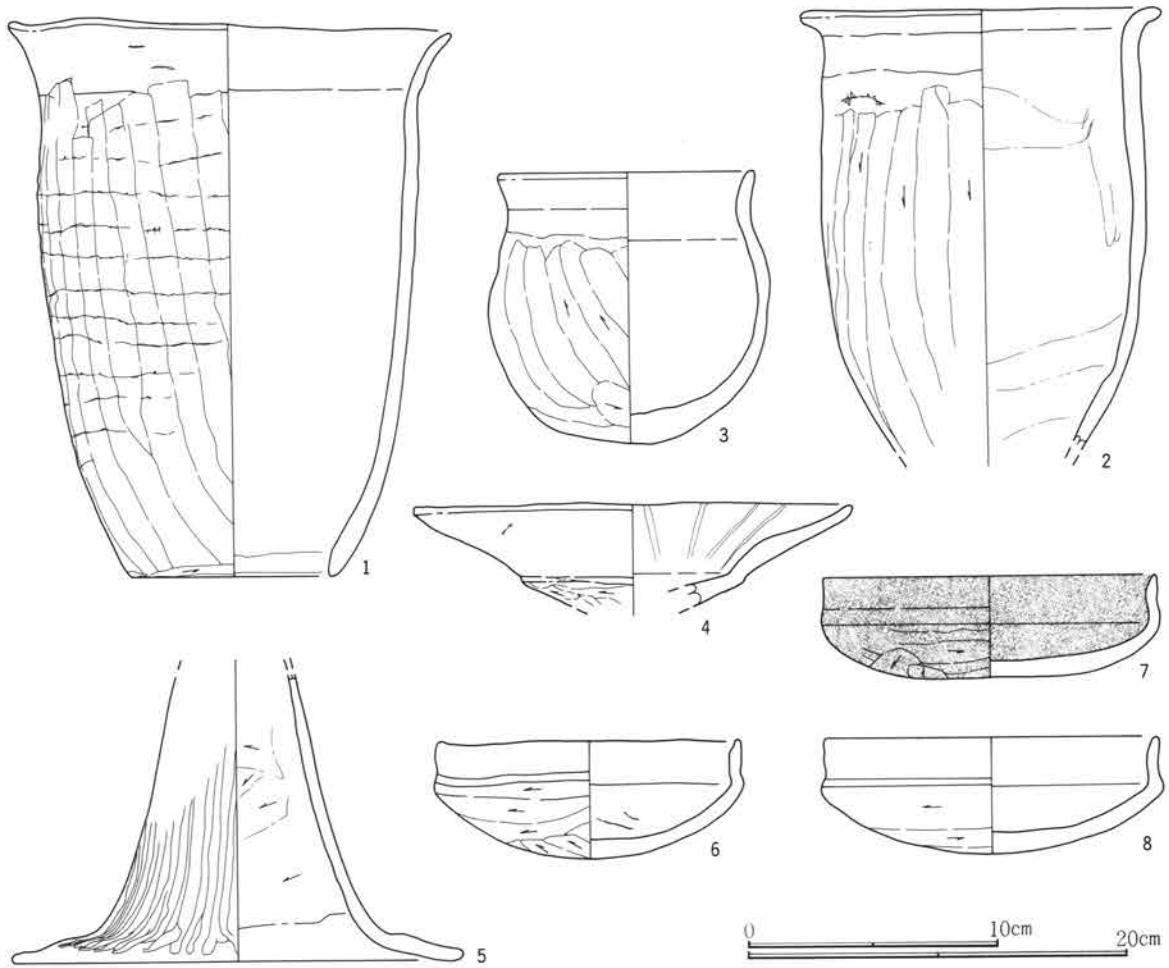
新北竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗赤褐色土層 多量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒・ローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。

旧東竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ③黄灰色土層 ロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 暗褐色土とロームブロックの混在層。

第26図 41号住居跡新北竈・旧東竈実測図



第27図 41号住居跡出土遺物実測図

41号住居跡出土遺物観察表

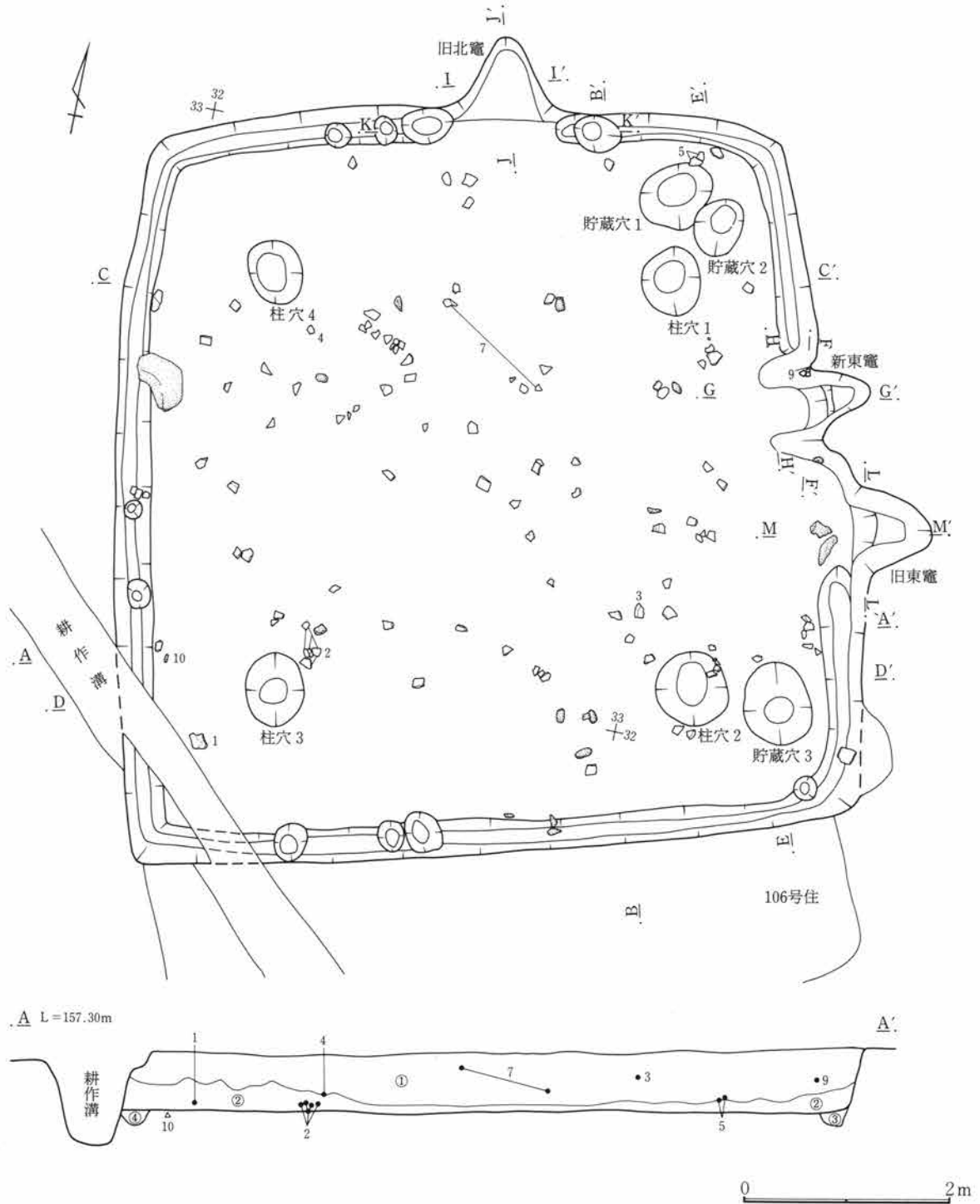
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
27-1 43	土師器 甕	床面直上 ¾残存	口 23.4 高 29.5 底 11.0	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの片岩粒と長石粒を少 量含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面ヘラによるわずかなナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴外面に多くの輪積痕が残る。
27-2	土師器 甕	床面+8 ¾残存	口 18.2	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデで器表面密。
27-3 43	土師器 小型甕	床面直上 ほぼ完形	口 13.4 高 14.3 底 丸底	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 5~6mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面ナデ。胴外面弱いヘラ削り。多くの砂粒が目立ち、器表面粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
27-4	土師器 高坏	床面直上 坏部¾残存	口 17.4	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	坏底面ヘラ削り。口縁部内外面とも横ナデ。口縁部内側に放射状のヘラ磨き。
27-5	土師器 高坏	床面直上 脚部¾残存	口 — 高 — 底 (17.9)	①密、砂粒ほとんど含まず、多 くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面密なヘラナデ。内面はヘラ削りにより、輪積痕を削りとり、器肉を薄く仕上げている。4と同一個体か？
27-6 43	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.2 高 4.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず、や や粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜がゆがんでいる。
27-7	土師器 坏	床面直上 ¾残存	口 (13.0) 高 4.0 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐 色・一部黒色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。内面の黒色は黒漆か。
27-8 43	土師器 坏	覆土 ¾残存	口 (13.2) 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

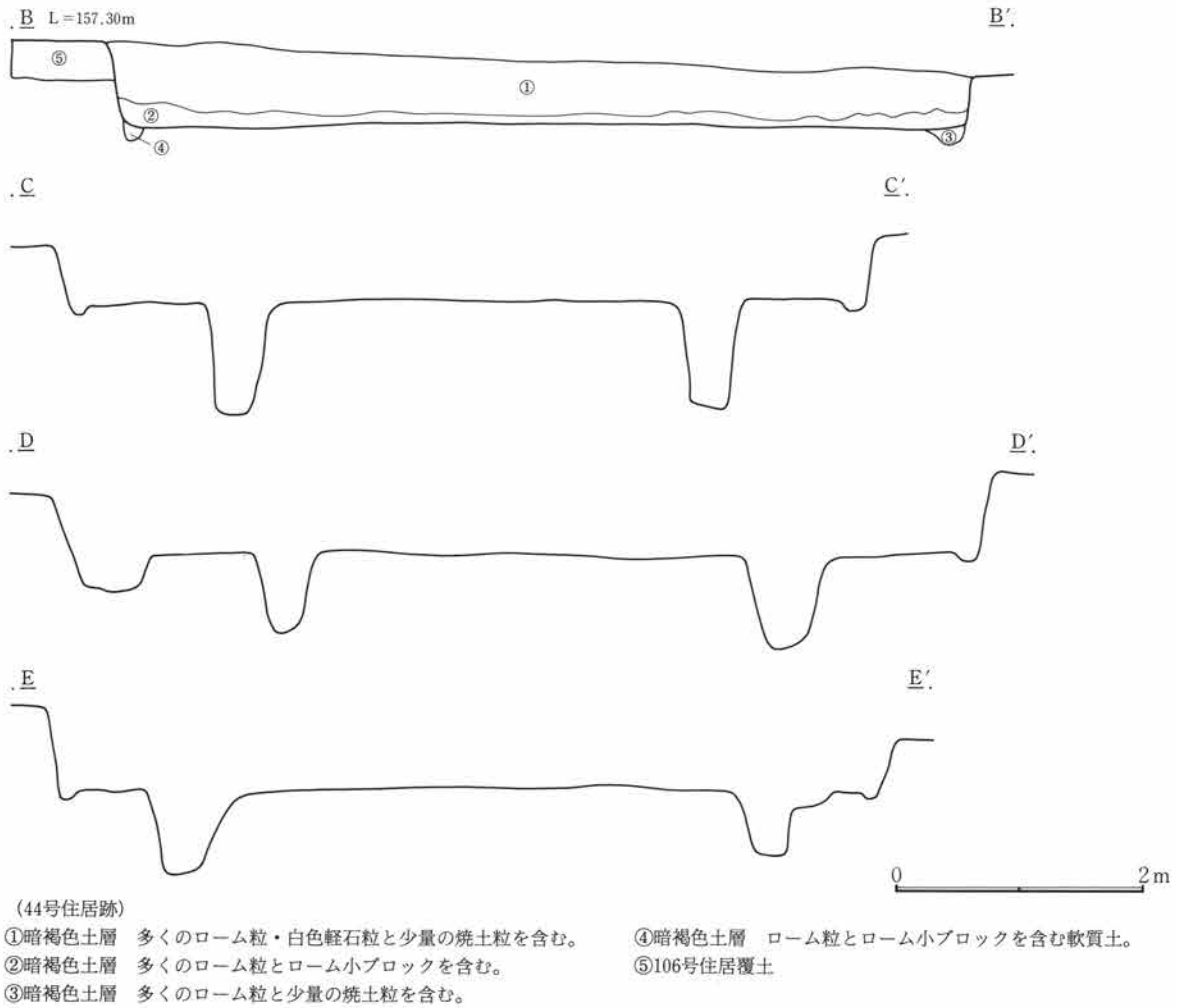
44号住居跡 (第28~34図、図版6・43・70・72)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、33-33・34グリッドに位置する。

概要 古墳時代の106号住居と重複しており、106号住居の北側約2/3を床面下まで深く掘り込んで住居が造られている。竈が北壁で1箇所・東壁で2箇所の計3基確認された。東壁の北寄りに造られていた竈のみ床面上に位置する両袖と燃烧部が検出され、多くの焼土粒も出土している。他の2基の竈は住居使用段階において、いずれも床面上に位置する袖部と燃烧部が削り取られている。また東壁の北寄りの



第28図 44号住居跡実測図(1)



第29図 44号住居跡実測図(2)

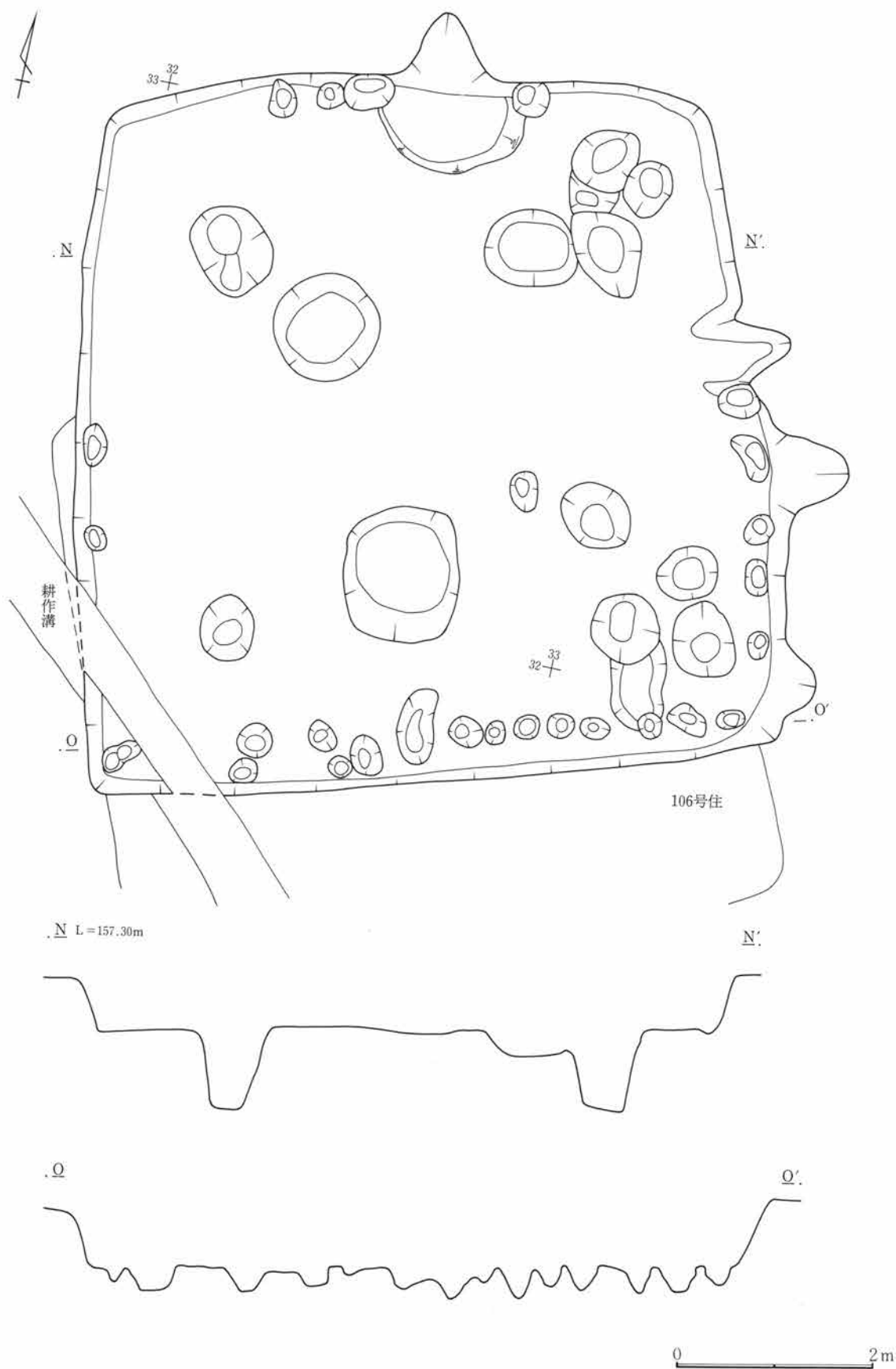
竈は他の住居に見られない不自然な位置からも、南側に位置する竈を避けている事が窺われる。このようなことから東壁北寄りの竈は最終段階まで使われていた新竈である。他の2基の旧竈にも新旧関係は存在すると思われるが、いずれも壊されているため明確でない。北壁の竈を旧北竈、東壁南寄りの竈を旧東竈と呼称する。住居は北側の少し狭くなる平面形を呈している。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が少し混入した土で造られており、床面下の掘り込みは少なかった。柱穴は少し不均衡であるが、ほぼ4m間隔で方形に配置され4本確認された。貯蔵穴が3個確認され3基それぞれの竈に伴う可能性を示している。北から貯蔵穴1～3と呼称した。位置関係から貯蔵穴1は旧北竈に、貯蔵穴2は新東竈に、貯蔵穴3は旧東竈に伴うことも考えられるが明らかでない。壁溝は竈部分以外で全面にわたり掘られていた。

規模 東西は北壁付近で6.1m、南壁付近で7.2mで南側が広い。南北は7.1mである。壁高は残りの良い南壁部分で68cmである。柱穴1は径54cm深さ84cm、柱穴2は径64cm深さ76cm、柱穴3は径64cm深さ62cm、柱穴4は径62cm深さ94cmである。貯蔵穴1は径68cm深さ86cm、貯蔵穴2は径52cm深さ56cm、貯蔵穴3は径62cm深さ61cmである。壁溝は幅28cm前後、深さ7～10cmである。

遺物 土師器の甕や坏、また砥石や白玉等が出土し、坏や甕の破片が200片以上出土している。

床下 掘り込みは浅く、床下土坑は掘られていなかったが、小さな掘り込みが数多く掘られていた。



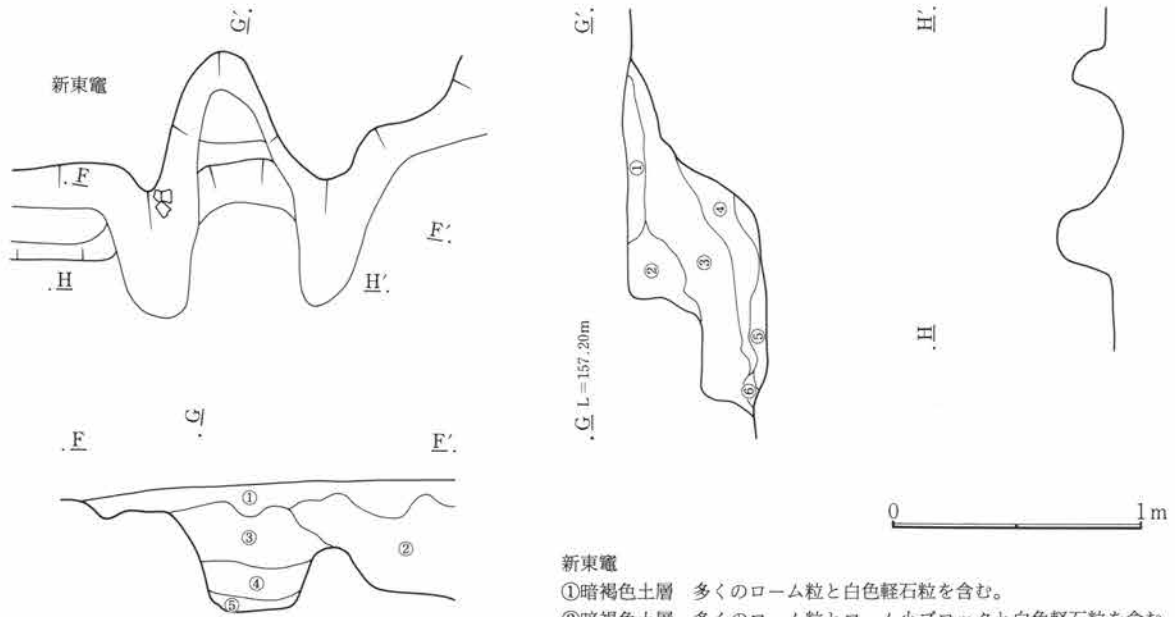
第30図 44号住居跡床下実測図

(新東竈)

位置 東壁北寄りの壁面に造られており、旧東竈の北に接する。

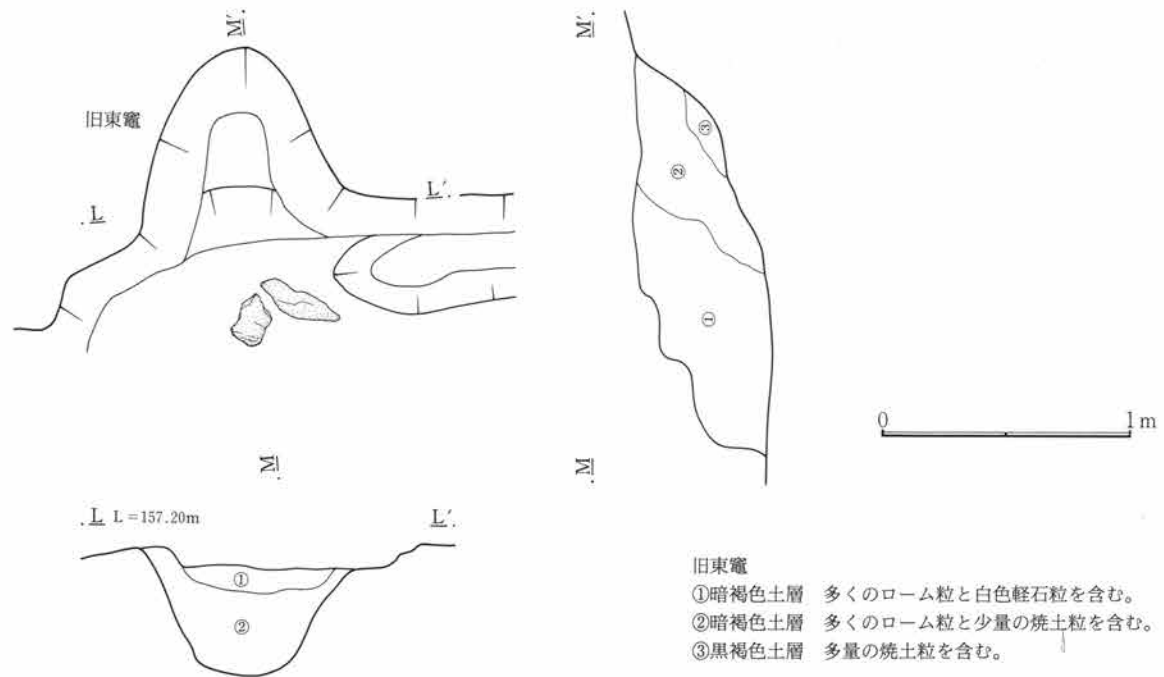
構造 竈材としてのロームが多くが残っていたが、石や土師器の甕は竈材として使用されていなかった。すべてロームを用いて築かれたものと考えられる。燃烧部床面付近より多くの焼土粒が確認された。

規模 両袖方向98cm、煙道部方向102cmであった。



新東竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックと白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームと焼土粒を含む。
- ④茶褐色土層 多くの焼土粒とローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑤赤褐色土層 大量の焼土粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒と微量の焼土粒を含む。



旧東竈

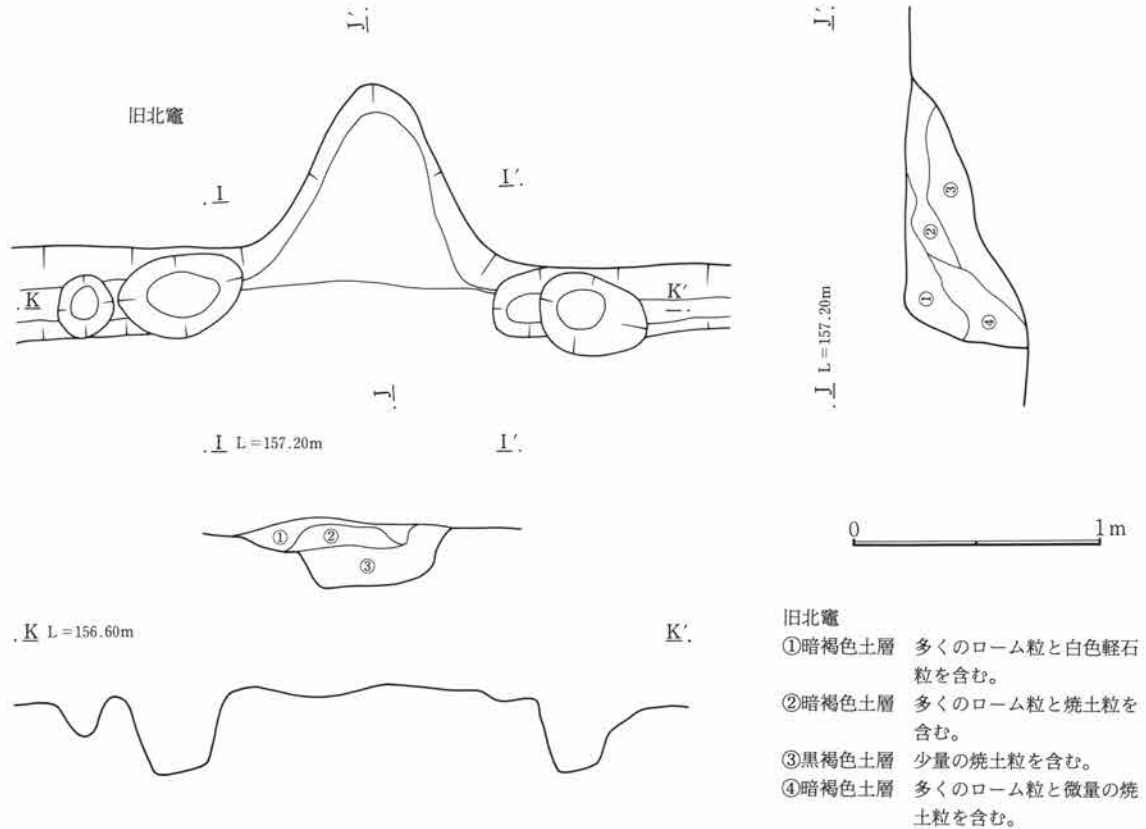
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③黒褐色土層 多量の焼土粒を含む。

第31図 44号住居跡新東竈・旧東竈実測図

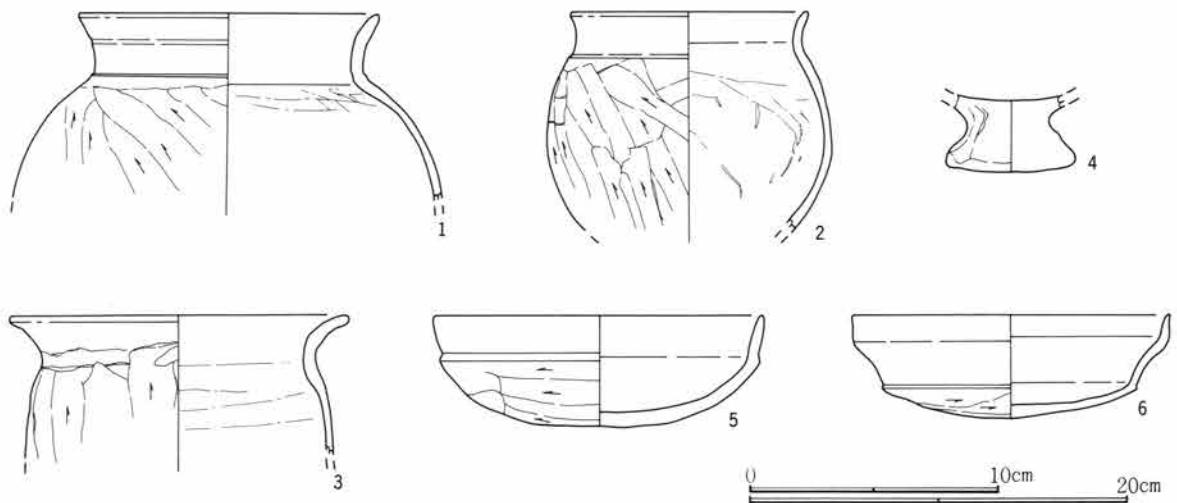
第3章 古墳時代の遺構と遺物

(旧北竈・旧東竈)

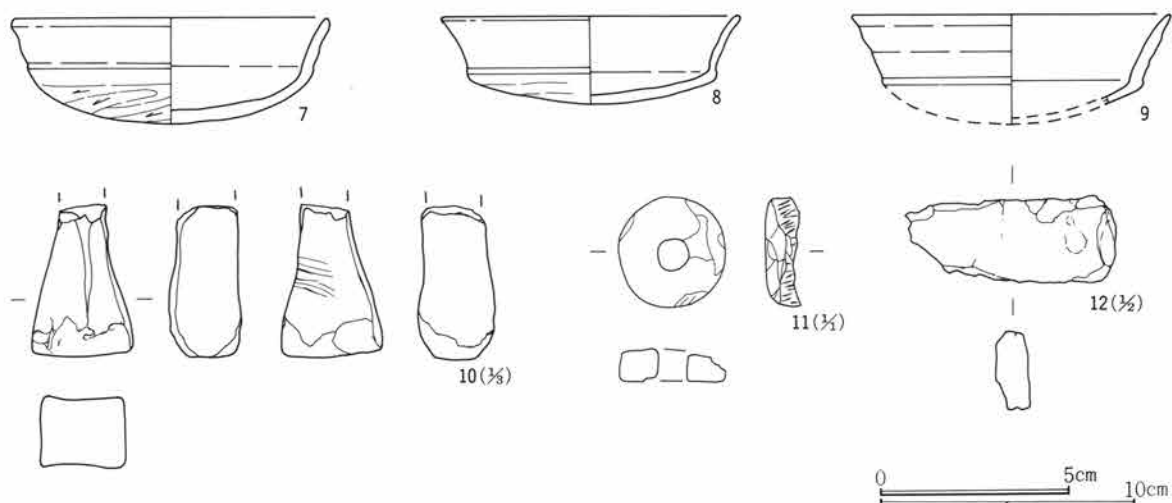
概要 旧北竈は北壁ほぼ中央に、旧東竈は東壁やや南寄りに造られ、いずれも燃焼部と両袖部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘って造られている。床面上に位置する燃焼部と両袖部分は住居使用時において竈が使われなくなった段階で削り取られて残っていない。それは煙道方向の土層断面からも明確に確認できた。竈の規模も不明である。



第32図 44号住居跡旧北竈実測図



第33図 44号住居跡出土遺物実測図(1)



第34図 44号住居跡出土遺物実測図(2)

44号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
33-1	土 師 器 甕	床面+8 破片	口(15.6) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内外面とも器表面は密である。
33-2 43	土 師 器 小型甕	床面+6 1/2残存	口(12.3) 高 — 底 —	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面にていねいなへらナデ。内面にへらナデのへらの痕跡あり。
33-3	土 師 器 甕	床面+34 破片	口(17.8) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を多く、3~4mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
33-4 43	土 師 器	床面+15	底 5.2	①粗、砂粒ほとんど含まず赤色粒多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面へら削り。脚部へら削り。
33-5 43	土 師 器 坏	床面+14 1/2残存	口 13.1 高 4.4 底 丸底	①密、多くの赤色粒と雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。
33-6 43	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口 12.4 高 4.0 底 丸底	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部が長く上半が直立する。底部が浅い。
34-7 43	土 師 器 坏	床面+21 1/2残存	口(12.6) 高 4.1 底 丸底	①密、多くの赤色粒と雲母粒を含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	底面細長いへら削り。砂粒や胎土の移動少なく、器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ。
34-8 43	土 師 器 坏	覆土 1/2残存	口 11.7 高 4.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に器肉が薄く、稜は明瞭である。表面が粉状を呈する。
34-9 43	土 師 器 坏	新東竈内+33 1/2残存	口 12.6 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部に2本の弱い沈線を持つ。
34-10 72	石 製 品 砥 石	床面直上	長 6.0 幅 4.0 厚 2.8 重 85.0g		4側面とも砥石として使用。幅広の2面に線刻状の工具痕あり。底面は自然面。石英粗面岩。
34-11 70	石 製 品 白 玉	覆土	径 1.4 孔径 0.4 厚 0.5 重 1.5		側面荒砥削り。上下面加工痕なし。滑石片岩。
34-12 30	鉄 製 品	覆土	長 5.6 幅 2.3 厚 0.9 重 28.1		名称と用途不明。肉厚であり刃部はない。

45号住居跡 (第35~37図、図版7)

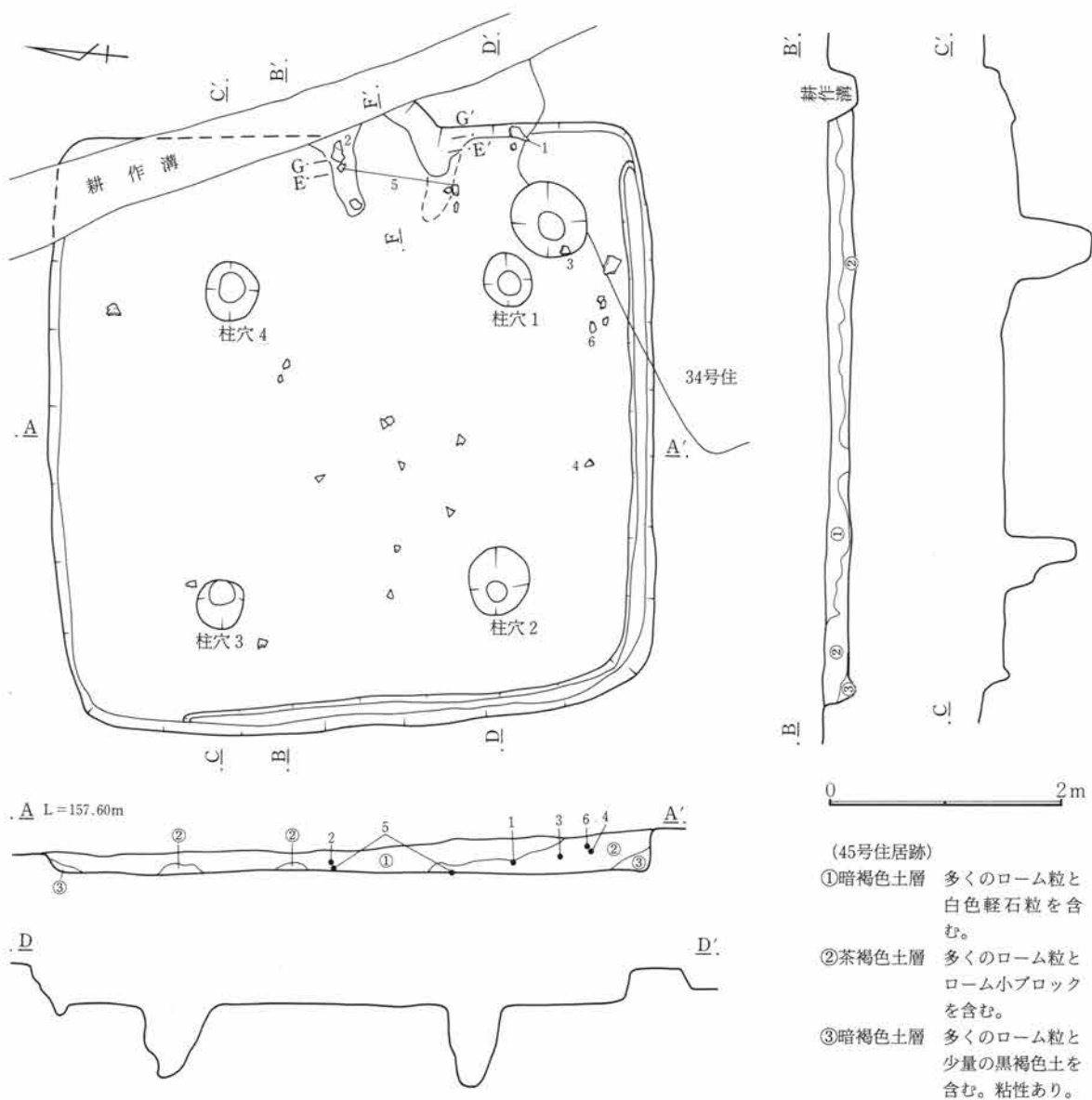
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、32-37グリッドに位置する。

概要 南側に位置する古墳時代の34号住居により南東コーナーを一部掘り込まれている。また耕作溝により竈煙道部から住居北東部分を深く掘り込まれている。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は少し不均衡であるが東西方向で2.6m、南北方向で2.4mの柱間に配置され4本確認された。貯蔵穴が竈右側の南東コーナーに掘られていた。壁溝が西と南壁面で確認された。

規模 東西5.1m、南北5.15mである。壁高は残りの良い南壁部分で38cmである。柱穴1は径44cm深さ70cm、柱穴2は径54cm深さ62cm、柱穴3は径43cm深さ62cm、柱穴4は径52cm深さ75cmである。貯蔵穴は径65cm深さ54cmでほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の壺や甑や坏が出土しているが、破片も含めて出土量は少ない。



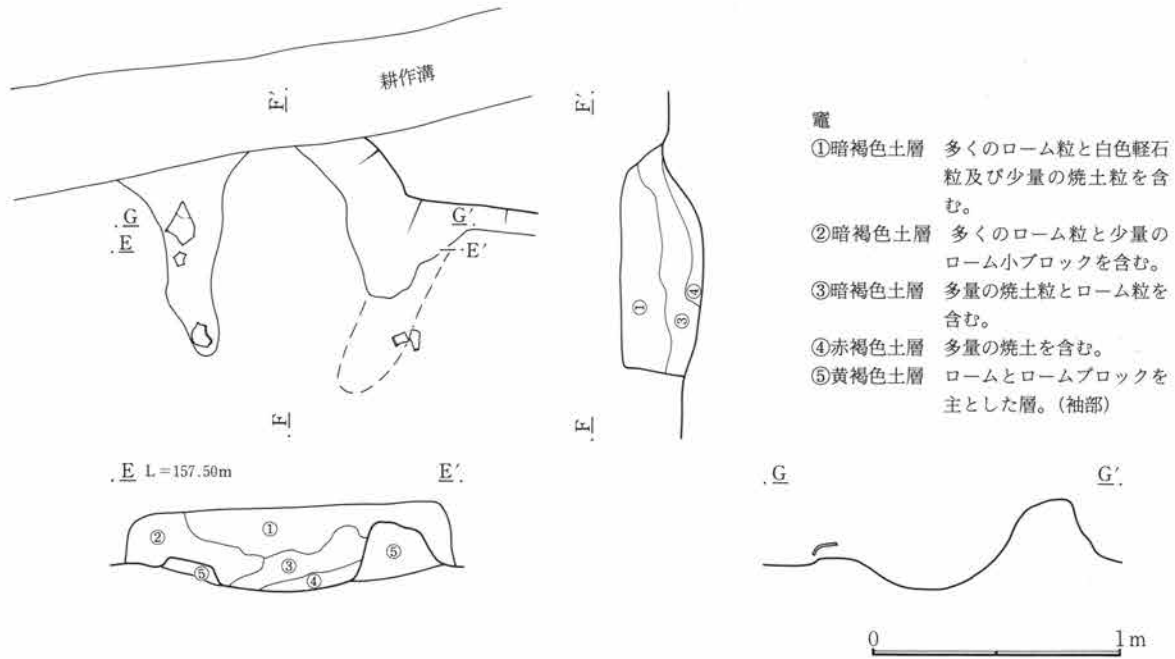
第35図 45号住居跡実測図

(竈)

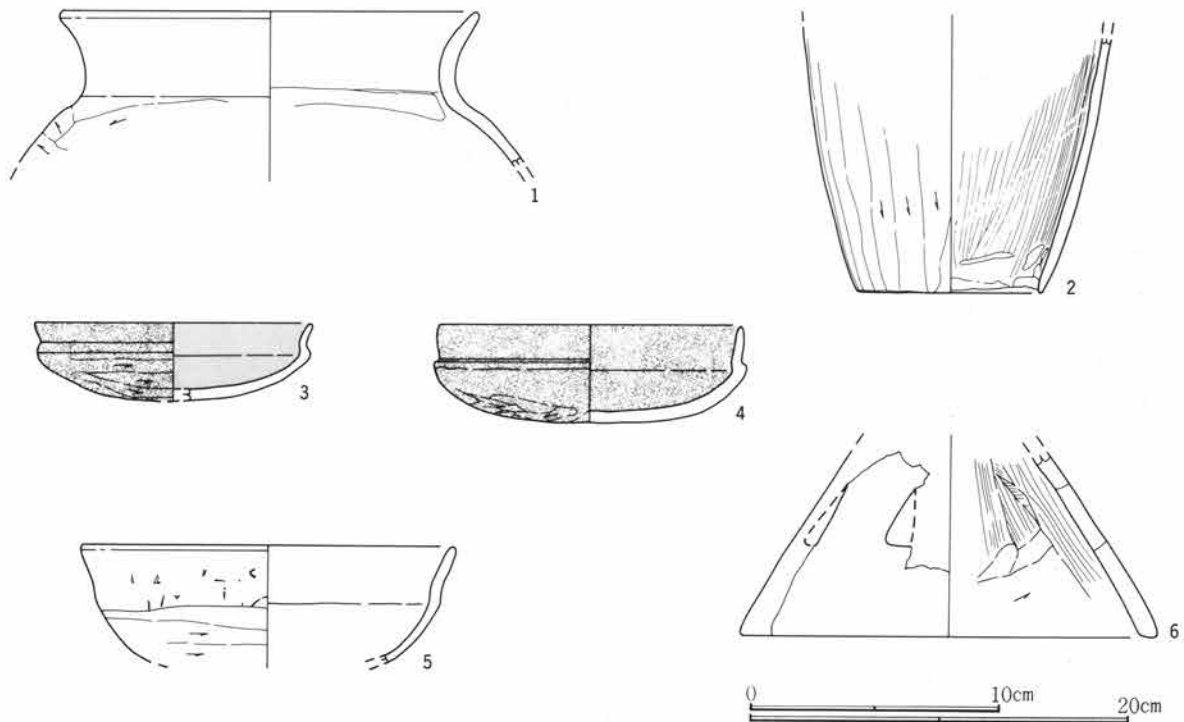
位置 住居東壁中央部やや南寄りに造られている。

構造 両袖の手前部分は削り取られ、残された袖の上部分も多くが削り取られているため残りの悪い竈である。袖はロームを用いて造られていた。燃焼部より多量の焼土粒が出土した。

規模 両袖方向推定108cm、煙道方向不明である。



第36図 45号住居跡竈実測図



第37図 45号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

45号住居跡出土遺物観察表

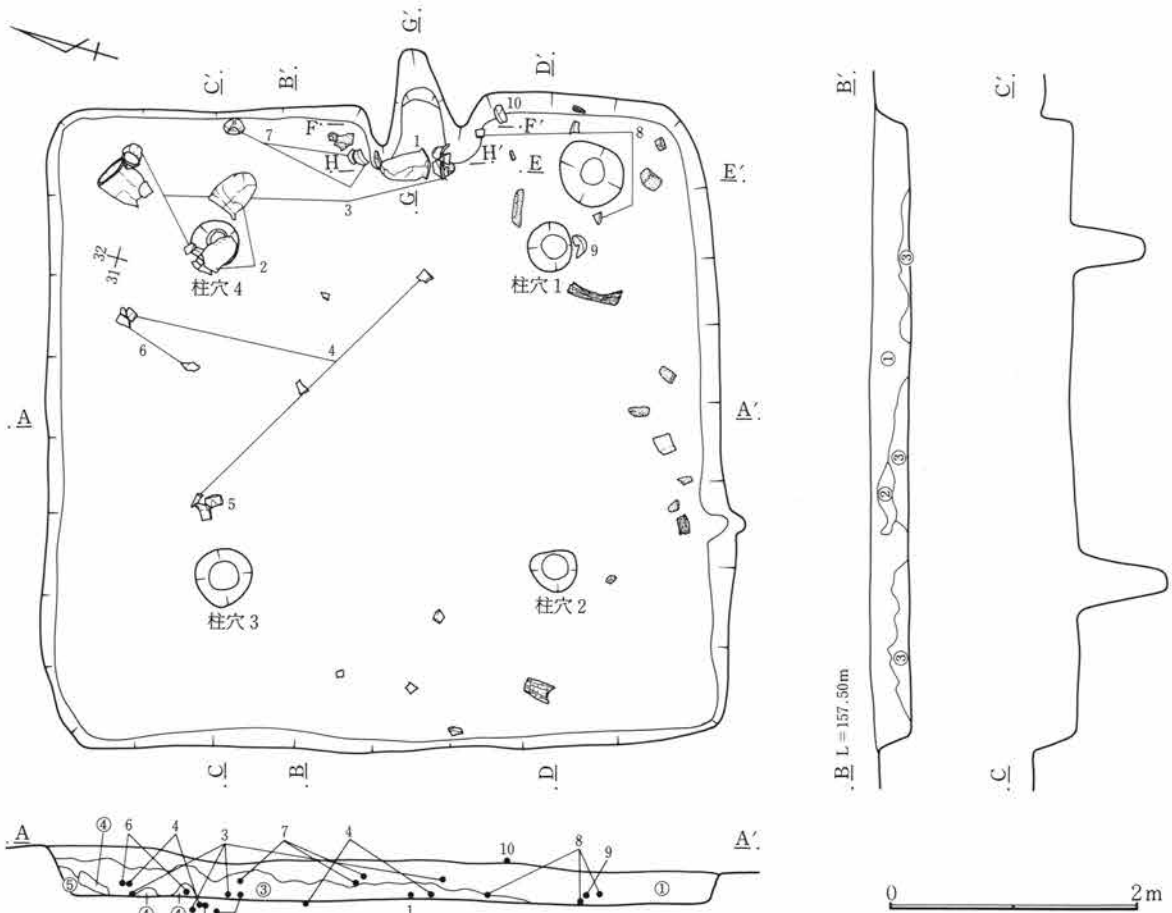
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
37-1	土師器 壺	床面+8 破片	口(23.0)	①粗、片岩粒を含む②酸化焰、 硬質③外面にふい橙色内面黒色	肩部弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 内面の黒色は吸炭による。
37-2	土師器 甔	竈内+9 破片	口— 高— 底(9.6)	①密、1mm前後の砂粒を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	外面ヘラ削り。器表面の砂粒の移動少なく密。 内面ヘラ磨きで、少し光沢を持つ。底面ヘラ削り。
37-3	土師器 坏	床面+14 破片	口(11.0)	①密、砂粒を少量含む②酸化焰 硬質③内面黒色・他にふい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。稜は明瞭 である。内面の黒色は吸炭による。
37-4	土師器 坏	床面+18 破片	口12.0 高3.8 底丸底	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 稜は高く明瞭である。
37-5	土師器 坏	竈内直上 破片	口(14.8)	①密、雲母を含む。②酸化焰、 硬質 ③にふい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面にていねいなナデ。稜は明瞭 でない。
37-6	土師器 高坏	床面+23 脚部破片	口— 高— 底(18.5)	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面橙色・赤色	外面ヘラ磨き後赤色塗彩。内面上半刷毛目、下半ヘラ削り。 2箇所三角形と思われる透しあり。弥生時代の高坏と思われる。

49号住居跡 (第38~42図、図版7・43・44)

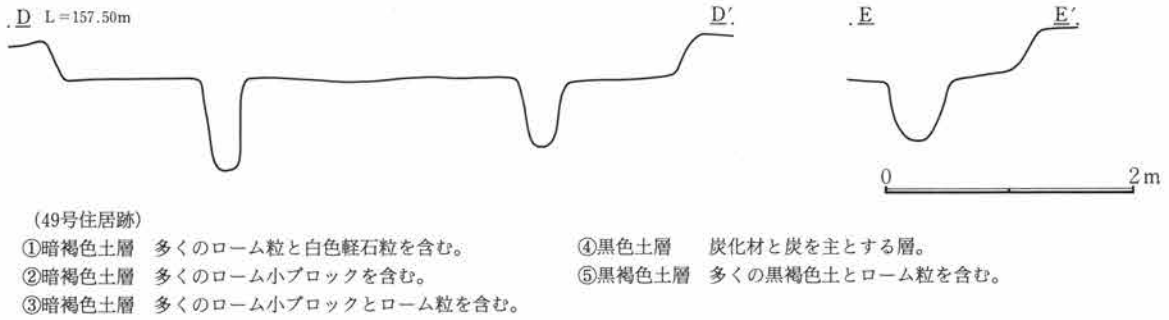
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、31-32・33グリッドに位置する。

概要 他の遺構と重複のない、比較的残りの良い住居である。覆土中より炭化材が少量出土した。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は約2.7m間隔の正方形で4本確認された。貯蔵穴が竈右側の南東コーナーに掘られていた。壁溝は確認出来なかった。



第38図 49号住居跡実測図(1)



(49号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム小ブロックとローム粒を含む。
- ④黒色土層 炭化材と炭を主とする層。
- ⑤黒褐色土層 多くの黒褐色土とローム粒を含む。

第39図 49号住居跡実測図(2)

規模 東西5.2m、南北5.3mである。壁高は残りの良い南壁部分で40cmである。柱穴1は径36cm深さ56cm、柱穴2は径32cm深さ72cm、柱穴3は径48cm深さ78cm、柱穴4は径36cm深さ62cmである。貯蔵穴は径50cm深さ48cmでほぼ円形を呈する。

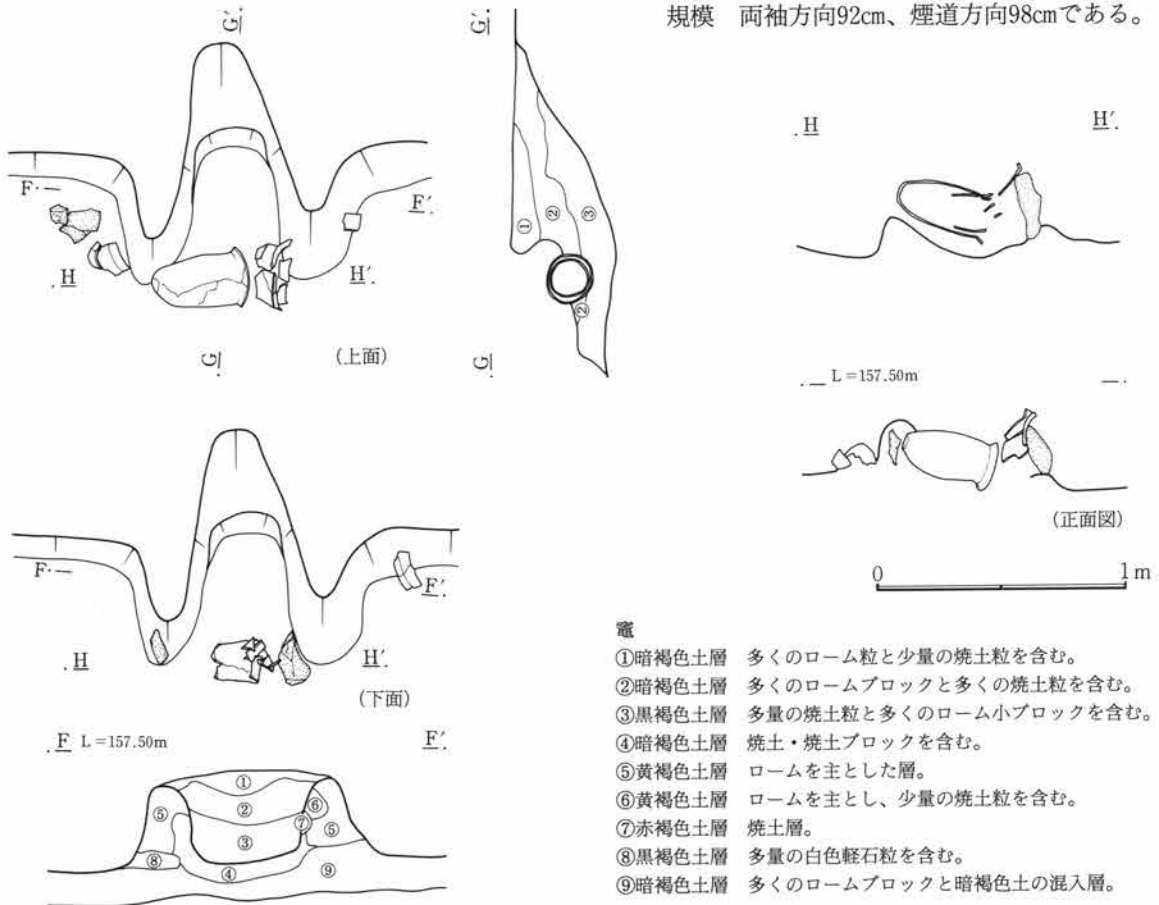
遺物 竈の天井石として利用されていた甕や左側の壁面近くより甕が出土し、坏類も少量出土している。

(竈)

位置 住居東壁中央部やや南寄りに造られている。

構造 両袖部分に2石がほぼ使用時の状態で出土した。さらにこの袖石の上に乗る鳥居状の天井部に、2つの長甕が連結し使用されており、差し込んである一方の甕が割れて焚口部分に落ち込んでいる。他の部分はロームを使用して造られている。崩落したと思われる焼土化した天井部が確認された。

規模 両袖方向92cm、煙道方向98cmである。

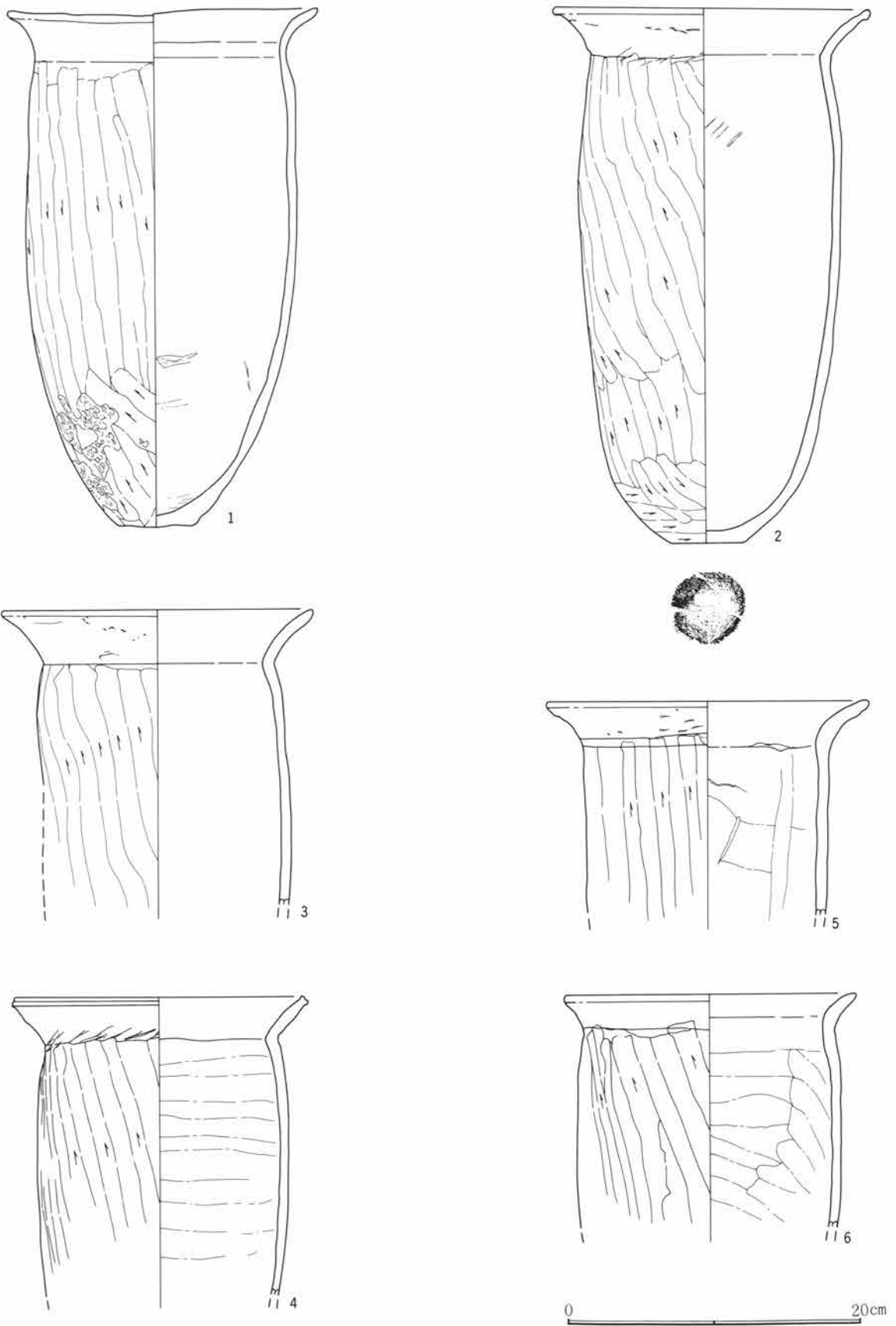


竈

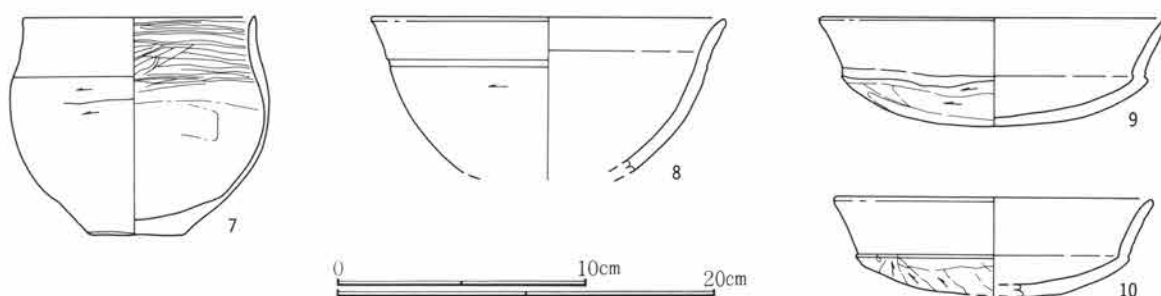
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのロームブロックと多くの焼土粒を含む。
- ③黒褐色土層 多量の焼土粒と多くのローム小ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 焼土・焼土ブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 ロームを主とした層。
- ⑥黄褐色土層 ロームを主とし、少量の焼土粒を含む。
- ⑦赤褐色土層 焼土層。
- ⑧黒褐色土層 多量の白色軽石粒を含む。
- ⑨暗褐色土層 多くのロームブロックと暗褐色土の混入層。

第40図 49号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第41図 49号住居跡出土遺物実測図(1)



第42図 49号住居跡出土遺物実測図(2)

49号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
41-1 43	土器 甕	竈内 完形	口 21.1 高 35.3 底 5.1	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの片岩と長石粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴外面ヘラ削り。砂粒の移動は少なく比較的器表面密。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面密。胴下半部に焼けた土が一部付着。
41-2 43	土器 甕	ピット-8 ピット+5 ほぼ完形	口 21.2 高 36.5 底 5.1	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの長石と片岩粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	底面木葉痕。胴外面強いヘラ削り。ヘラが頸部に当たり工具痕あり。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴外面に多くの砂粒が目立つ。
41-3 44	土器 甕	ピット+18 ピット-8 1/4残存	口 21.2 高 - 底 -	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面ヘラ削りで、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
41-4 44	土器 甕	床面直上 1/2残存	口 19.8 高 - 底 -	①粗、1~2mmの砂粒を多く3~4 mmの片岩粒を少量含む②酸化 焰、硬質③橙色・一部黒褐色	胴外面ヘラ削り。頸部にヘラの当たった痕跡あり。口唇部中央にわずかな沈線あり。内面ナデ。
41-5	土器 甕	床面直上 破片	口(22.0) 高 - 底 -	①粗、3~6mmの片岩粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③内面灰褐色・外面黒褐色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部の器肉が厚い。
41-6 44	土器 甕	床面+7 1/2残存	口(20.0) 高 - 底 -	①粗、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴外面の器表面は、砂粒の移動少なく比較的密。
42-7 44	土器 小型甕	竈内+14 床面+15 ほぼ完形	口 12.3 高 11.4 底 5.2	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削りが一部残るが、表面剥離のため多くは不明。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部内面ヘラ磨き。
42-8	土器 鉢	竈内+6 床面直上	口(18.8)	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。表面が細かく剥離しているため削りの単位不明。口縁部横ナデ。内面ナデ。1/2残存。
42-9 44	土器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 13.8 高 4.2 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。
42-10 44	土器 坏	竈内+33 1/2残存	口(12.5)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。

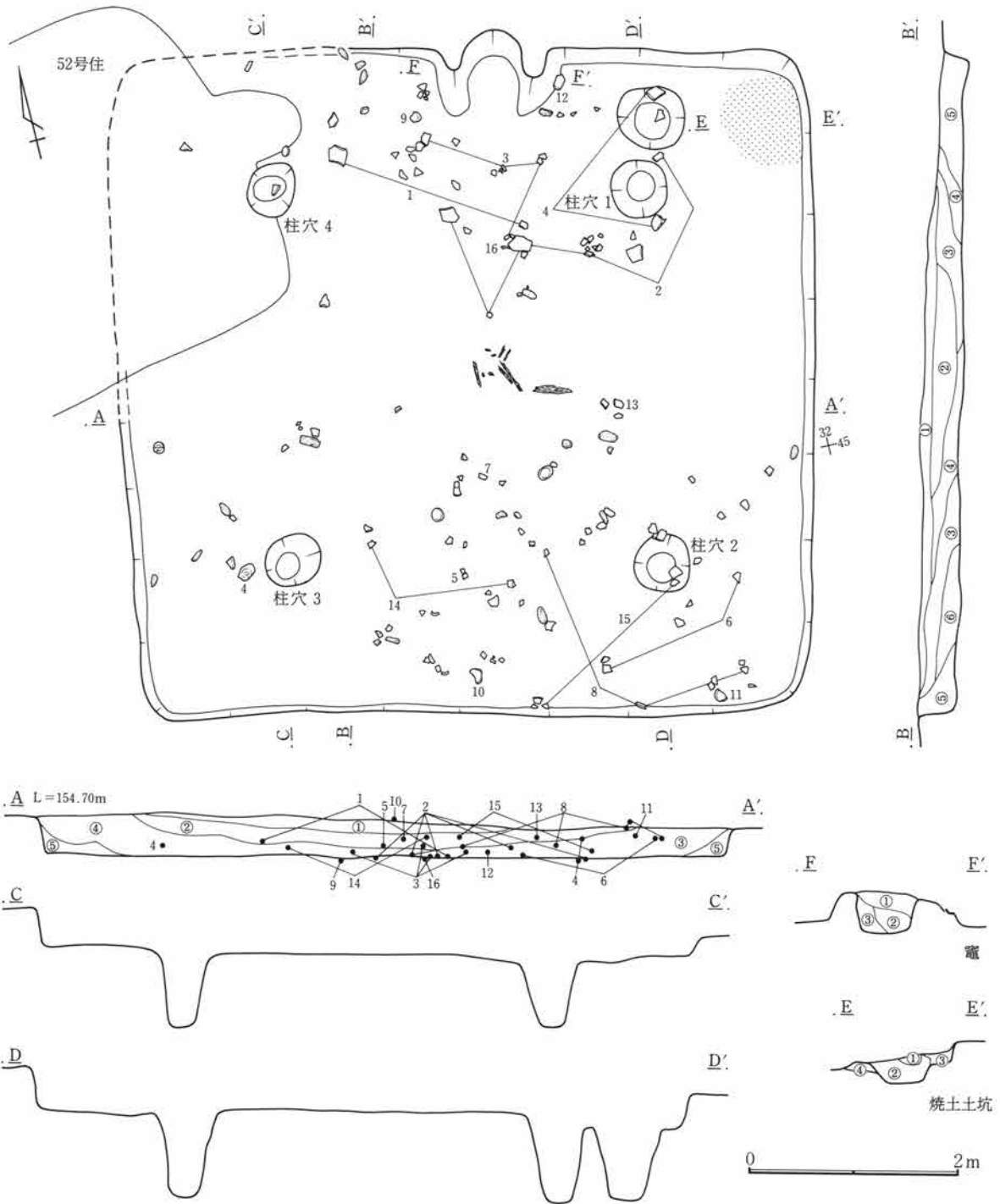
53号住居跡 (第43~45図、図版8・44・45・72)

位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、46-32グリッドに位置する。

概要 北西に位置する平安時代の52号住居により、北西部分を床面近くまで掘り込まれている。52号住居の床面は本住居跡より約10cm高い位置に造られている。住居北東コーナーに大量の焼土粒の堆積した土坑が確認された。幅は90cmで中央部の最も深いところでは深さ40cmである。多くの部分は床面下に位置するため、床面を一部掘り大量に火を焚いたものと思われる。住居使用段階でこのような事が行われたら、恐らく住居は燃えてしまうため住居放棄後に行なわれたものと思われる。また床面中央部から床面より10cm前後高い位置で炭化材が多く出土している。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は3.6mの柱間でほぼ正方形に配

第3章 古墳時代の遺構と遺物



(53号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒・炭の小ブロックを含む。
- ③褐色土層 多量のローム粒と1×2cm前後のローム小ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 ローム粒とローム小ブロックの混入土。
- ⑥暗褐色土層 ④層に近いが、④層より少し多くローム粒を含む。

竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と焼土粒と少量の黒褐色を含む。
- ③赤褐色土層 多量の焼土粒と焼土ブロックを含む。

焼土土坑

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と焼土粒を含む。
- ②赤褐色土層 焼土粒と焼土ブロックを主とした層。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ④暗褐色土層 ロームを主とし、少量の焼土粒を含む。

第43図 53号住居跡実測図

置され4本確認された。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。壁溝は確認されなかった。

規模 東西6.5m、南北6.2mである。壁高は残りの良い南壁部分で41cmである。柱穴1は径52cm深さ80cm、柱穴2は径55cm深さ81cm、柱穴3は径48cm深さ72cm、柱穴4は径58cm深さ72cmである。貯蔵穴は径62cm深さ82cmでほぼ円形を呈する。

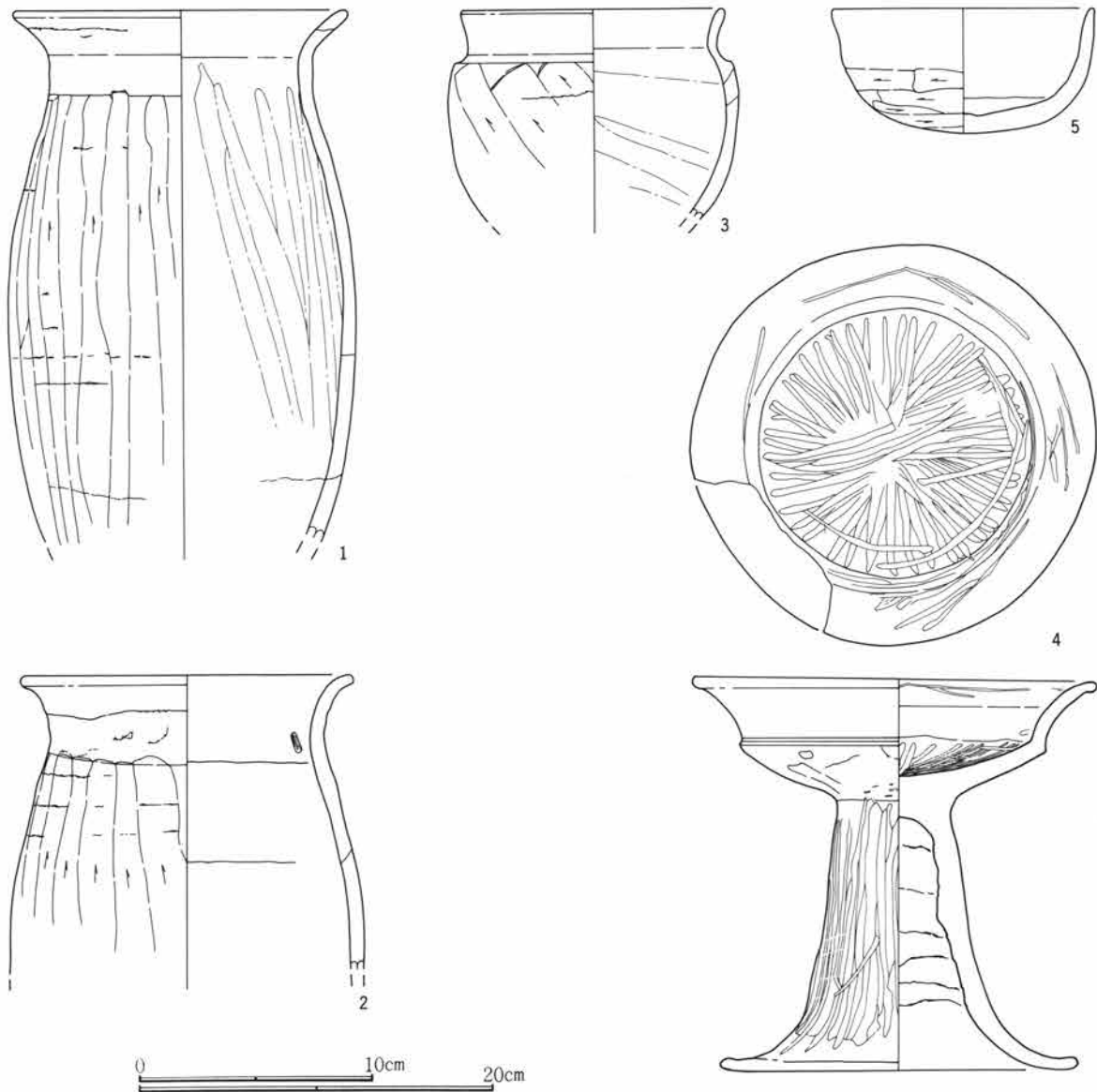
遺物 土師器の甕や坏と9個の小さな土玉が出土している。また破片ではあるが、木葉形をした坏2個が出土し注目される。

(竈)

位置 住居北壁中央部やや東寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

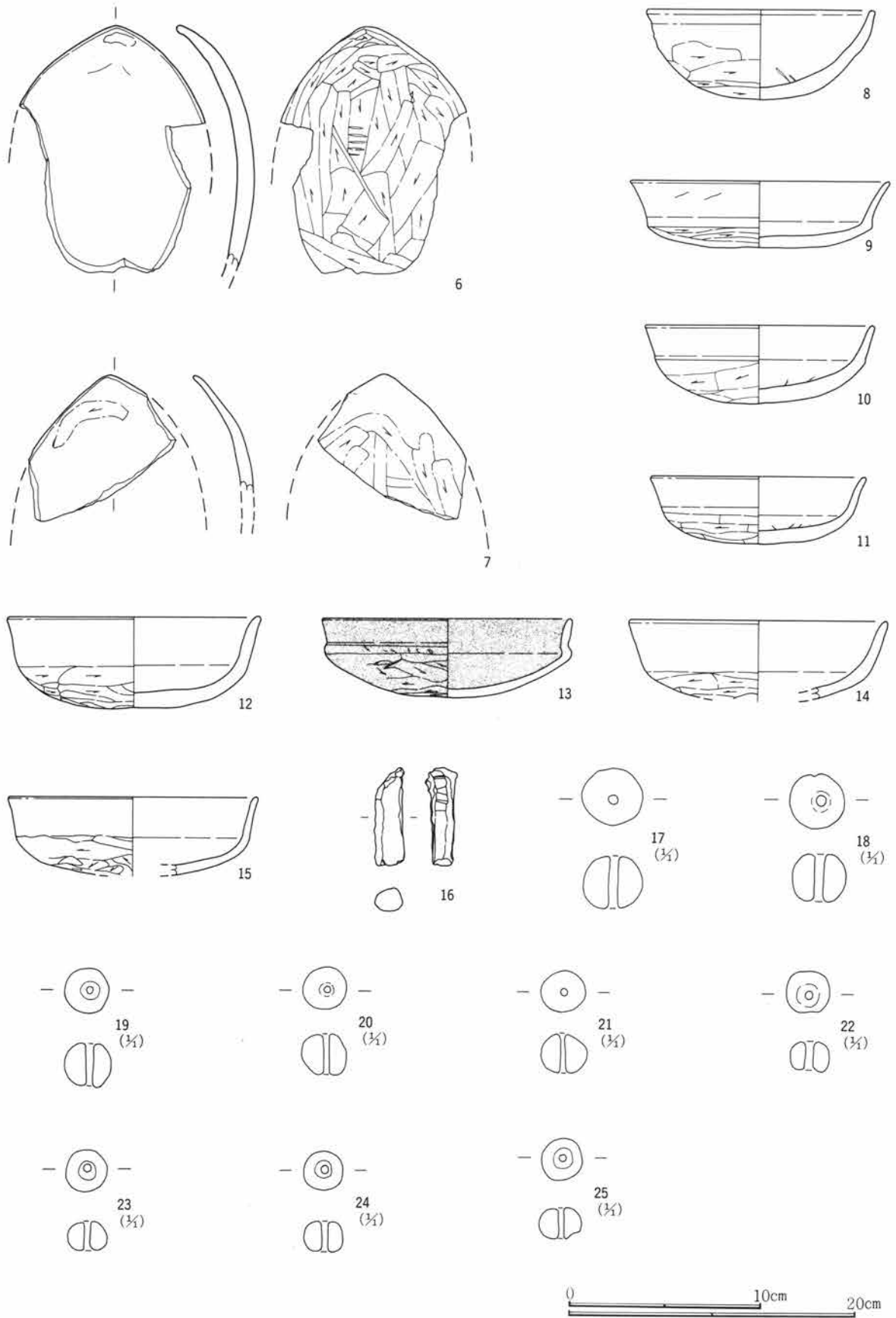
構造 両袖部分はほぼ良好に残っており、袖はロームを用いて造られていた。袖石や天井石は出土しなかった。燃烧部より多量の焼土粒が出土した。

規模 両袖方向82cm、煙道方向110cmである。



第44図 53号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



0 10cm 20cm

第45図 53号住居跡出土遺物実測図(2)

53号住居跡出土遺物観察表

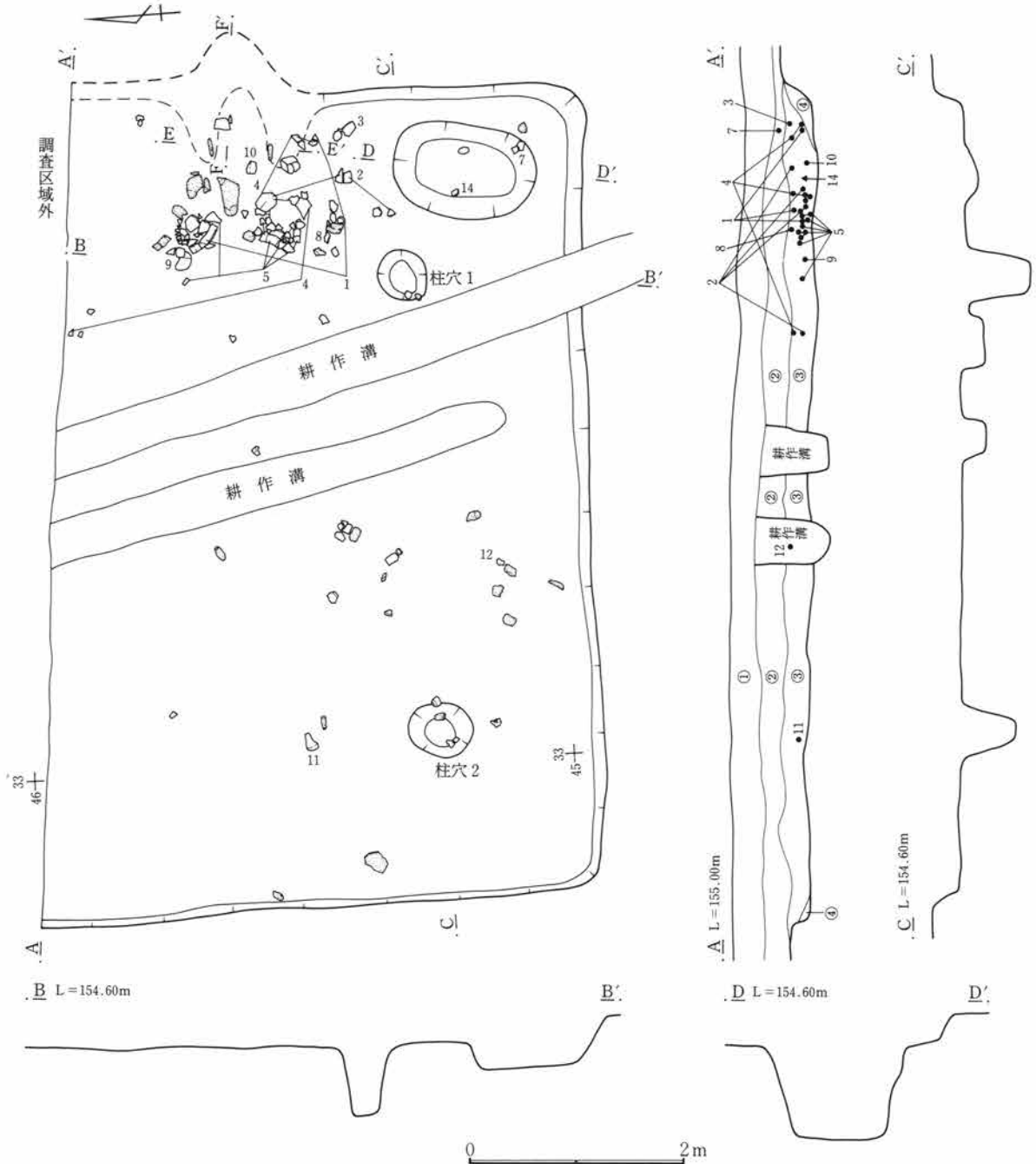
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
44-1 44	土 師 器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口 18.8 高 — 底 —	①粗、3~4mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部輪積後でいねいで密なヘラナデ。内面は指によるでいねいなナデで、輪積痕は残らず。
44-2 44	土 師 器 甕	床面直上 $\frac{1}{4}$ 残存	口 18.6	①粗、3~4mmの片岩を多く含む。 ②酸化焰、硬質③浅黄橙色	胴外面に輪積痕が残る。外面ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面はでいねいなナデ。ナデの単位不明。
44-3 44	土 師 器 小型甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口(15.0)	①粗、2~4mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	幅広いヘラ削り。胴表面全体の器表面が粗い。口縁部横ナデ。胴内面でいねいなナデ。
44-4 44	土 師 器 高 杯	床面-8 ほぼ完形	口 16.7 高 16.6 底 15.0	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラ磨きで光沢を持つ。脚内面に輪積痕が残る。杯底部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。杯内面全体に放射状ヘラ磨き。
44-5 44	土 師 器 杯	床面+9 ほぼ完形	口 11.0 高 5.2	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面もでいねいなナデ。丸底。
45-6 44	土 師 器 杯	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部周辺は、削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。内面でいねいなナデ。出土例の少ない木の葉型の杯である。
45-7	土 師 器 杯	床面+16 破片	— —	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は主にナデで、ヘラ削りの痕跡を消している。内面もでいねいなナデ。出土例の少ない木の葉型の杯である。
45-8 45	土 師 器 杯	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.8 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。内側底面にヘラの工具痕あり。
45-9 45	土 師 器 杯	床面-5 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.6) 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部はヘラ削り後、でいねいなヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。
45-10 45	土 師 器 杯	床面+33 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.1 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は削り幅の狭いでいねいなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。
45-11 45	土 師 器 杯	床面+22 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.4) 高 3.4 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	稜は明瞭でない。底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底部にヘラの工具痕あり。
45-12 45	土 師 器 杯	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.2) 高 4.7 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部幅の狭いヘラナデ。口縁部横ナデ。内面底部ナデ。稜は明瞭でない。
45-13 45	土 師 器 杯	床面+19 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 4.1	①密、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	明瞭な稜を持つ。底部幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面に黒漆か。
45-14 45	土 師 器 杯	床面+5 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.5)	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部表面は剝離しているため、不明な点も多いが幅の狭いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面底部ナデ。
45-15 45	土 師 器 杯	床面+6 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0)	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部表面は幅が狭く長さの短かいヘラ削り。口縁部横ナデ。底部内面ナデ。
45-16	土 師 器 甕	床面直上 棧状片	— —	①粗、砂粒をほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	断面長方形に近い形にヘラ削り。
45-17 72	土 製品 土 玉	覆土	径 1.0 孔径 0.15 厚 0.9 重 1.0	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
45-18 72	土 製品 土 玉	覆土	径 1.0 孔径 0.15 厚 0.8 重 0.8	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
45-19 72	土 製品 土 玉	覆土	径 0.8 孔径 0.15 厚 0.8 重 0.5	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
45-20 72	土 製品 土 玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.7 重 0.4	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
45-21 72	土 製品 土 玉	覆土	径 0.8 孔径 0.1 厚 0.7 重 0.4	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
45-22 72	土 製品 土 玉	覆土	径 0.7 孔径 0.15 厚 0.5 重 0.3	①密	色調 表面黒色・断面にぶい赤褐色。 小さな土玉であり、一部欠損している。
45-23 72	土 製品 土 玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.5 重 0.3	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
45-24 72	土 製品 土 玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.5 重 0.3	①密 ③黒色	小さな土玉であり、ほぼ球形を呈する。
45-25 72	土 製品 土 玉	覆土	径 0.7 孔径 0.1 厚 0.5 重 0.3	①密	色調 表面黒色・断面にぶい赤褐色。 小さな土玉であり、一部欠損している。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

56号住居跡及び竈（第46～49図、図版8・45・70）

位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、46—34グリッドに位置する。

概要 住居北側は調査区域外のため、その部分の調査はできなかった。南北に掘られた2本の耕作溝により一部床面下まで掘り抜かれていた。竈は東壁に造られ、焚口付近に多くの遺物が出土している。竈の残りは悪く、両袖は残っていないため範囲の確認はできなかった。しかし両袖の芯材として使用されたとされる2個の石が、床面に埋められた状態で出土し、この2石の間より多くの焼土粒が検出さ



- (56号住居跡)
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
 - ③褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロック及び少量の炭を含む。
 - ④褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む軟質な層。

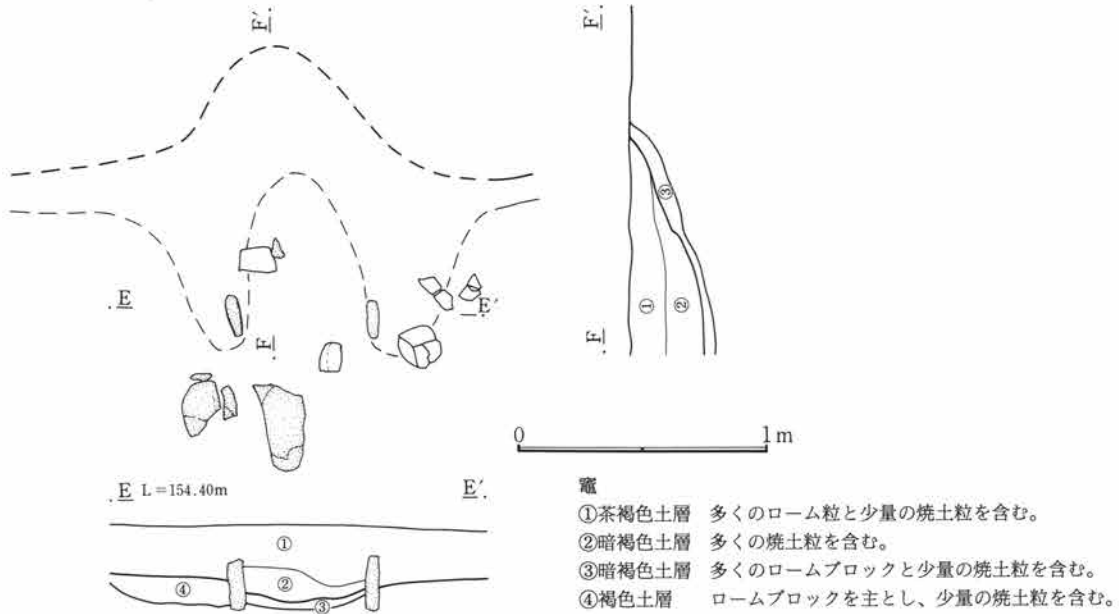
第46図 56号住居跡実測図

れたため、この部分が竈と思われ竈の範囲を点線で推定復元した。

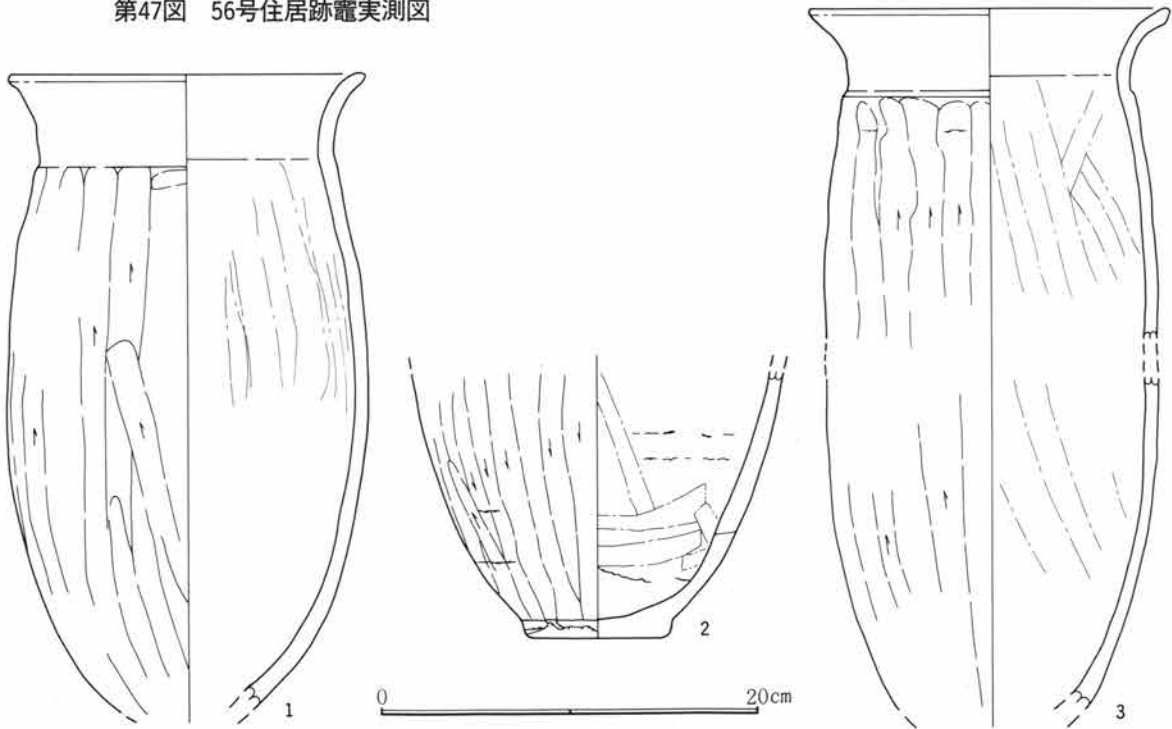
構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は調査出来た範囲内で2個、貯蔵穴は竈右側に掘られていた。壁溝は確認されなかった。

規模 東西7.4m、南北は不明である。壁高は残りの良い南壁部分で30cmである。柱穴1は径50cm深さ66cm、柱穴2は径53cm深さ52cmである。貯蔵穴は径132×86cmの楕円形を呈し深さ85cmである。

遺物 焚口付近を中心として、土師器の甕や甔等が出土しているが、坏類は少ない。また須恵器の坏蓋の完成品が出土しており注目される。

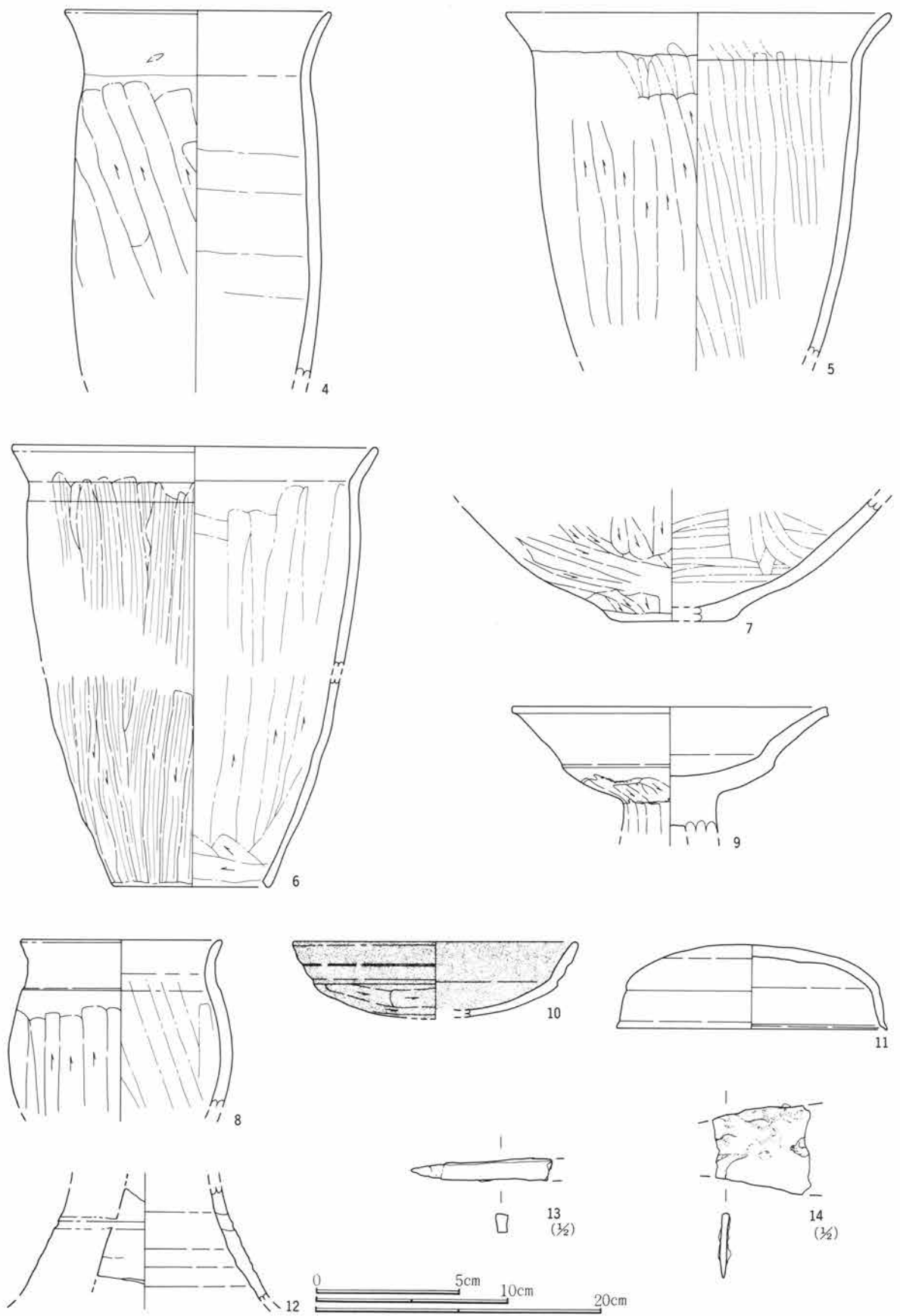


第47図 56号住居跡竈実測図



第48図 56号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第49図 56号住居跡出土遺物実測図(2)

56号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
48-1 45	土 師 器 甕	竈内+8 床面+7 1/2残存	口 18.4 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの片岩粒と長石粒を少 量含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴外面やや強いヘラ削り。砂粒の移動は少ないが、砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
48-2	土 師 器 甕	床面+4 1/2残存	口(19.0) 高 — 底 —	①粗、5mm前後の長石粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	胴部ヘラ削りにより砂粒が目立ち粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
48-3 45	土 師 器 甕	床面+19 1/2残存	口 — 高 — 底 (7.0)	①粗、5mm前後の長石と片岩粒 を含む。②酸化焰、硬質 ③ 内面黒褐色・外側にぶい黄橙色	底部ナデ。胴部外側ヘラ削りにより砂粒が目立ち粗い。内面ていねいなナデ。一部に輪積痕が残る。
49-4	土 師 器 甕	竈内+8 床面直上 1/2残存	口(18.4) 高 — 底 —	①粗、2mm前後の砂粒を大量に 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面にヘラ削りが観察できるが、明瞭でない。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
49-5 45	土 師 器 甕	床面-4 口縁部1/2 胴部1/2残存	口(27.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒をわずかに 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削りであるが、砂粒が少ないため粗さは少ない。口縁部横ナデ。胴部内面ナデで器表面密。
49-6	土 師 器 甕	覆土 1/2残存	口(25.4) 高 — 底(11.0)	①やや粗、3~5mmの長石と片 岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③にぶい黄橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
49-7	土 師 器 壺	床面+28 1/2残存	口 — 高 — 底 (9.0)	①粗、3mm前後の砂粒を大量に 含む。②酸化焰、硬質 ③外 側にぶい黄褐色・内側黒褐色	底部ナデ。胴部外面幅の狭く細かいヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。胴部内面ナデによりていねいに整形。器表面密。
49-8	土 師 器 小型甕	床面+17 1/2残存	口(14.2) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削りで砂粒が目立ち、器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
49-9	土 師 器 高 坏	床面直上 坏部完形 脚部欠	口 16.5 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒をわずかに 含む。②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	脚部へ坏底部ヘラナデ。坏口縁部横ナデ。器表面はすべて密である。坏口縁上端部は平である。
49-10	土 師 器 坏	竈内+4 1/2残存	口(15.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底部外面は幅が広く長いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。有段口縁。
49-11 45	須 惠 器 蓋	床面+10 1/2残存	高 4.4 口 14.2	①密、2mm前後の砂粒をわずかに 含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部中央のみヘラ削り。天井部と口縁部とをわける突出部の稜はほとんどなく、沈線をめぐらす。口縁端部は外側に開く。
49-12	須 惠 器 高 坏 破片	床面+18 破片	— —	①密、砂粒含まず。 ②還元焰、硬質 ③灰色	2段透しの高坏脚部か。
49-13 70	鉄 製 品 刀子	覆土	長 5.0 幅 0.8 厚 0.45 重 3.0		刀子の茎部分か。残りは比較的良好である。
49-14 70	鉄 製 品 鎌 ?	床面+4	長 (3.4) 幅 3.1 厚 0.6 重 7.8		鎌の破片と思われる。錆がひどい。

58号住居跡及び竈（第50・51図、図版8・45）

位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、42-30・31グリッドに位置する。

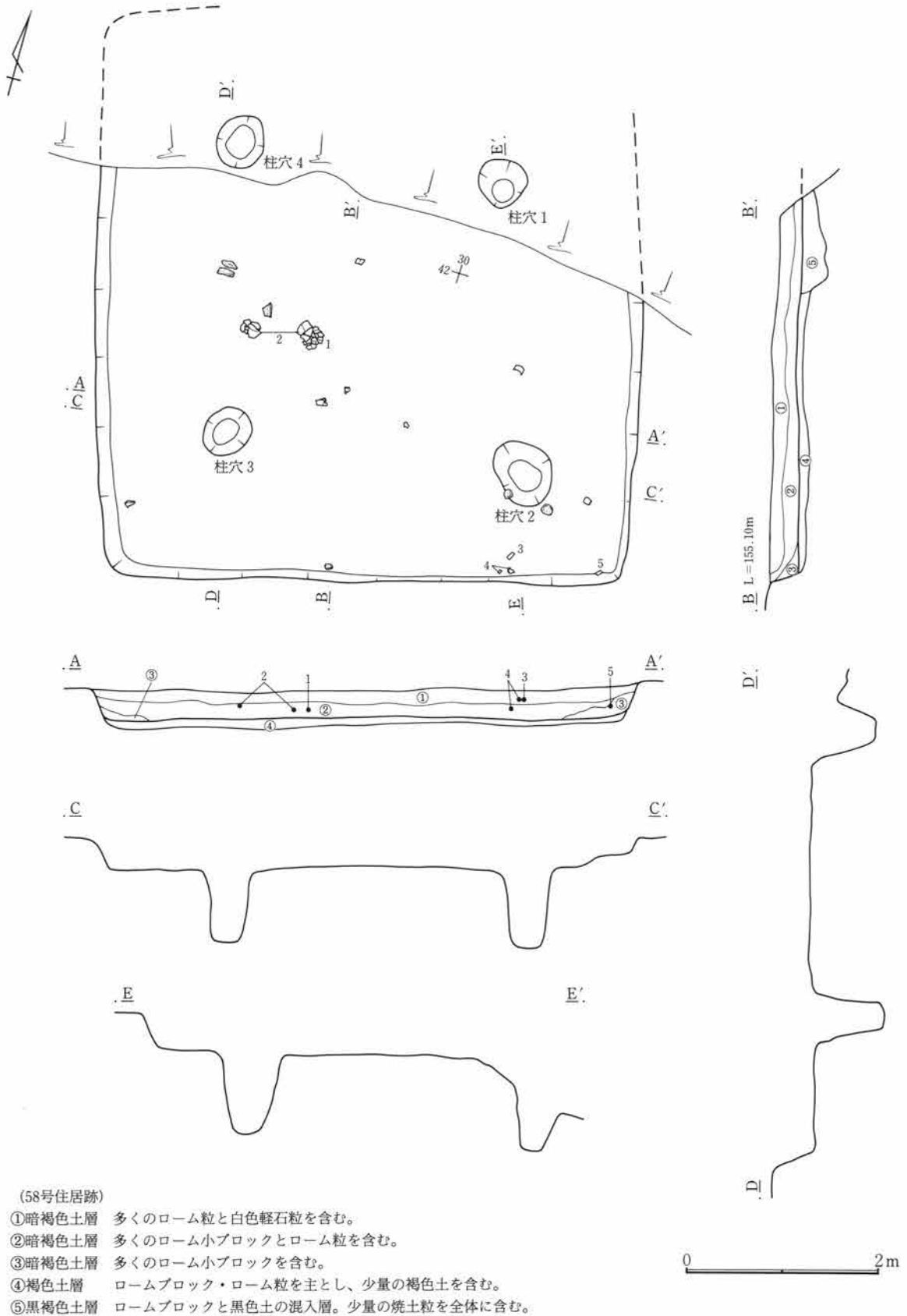
概要 住居北側は中世末期の館の大きな堀により削り取られている。竈は残存する東壁中央部から南の部分には造られていない。北側の2柱穴の内側に焼土粒の混入した床下土坑が検出されているため、竈は北壁に造られていたものと思われる。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は南側の床面で2個、北側は館の堀に上部分が削られているが2個確認された。貯蔵穴は削り取られたためか確認できなかった。壁溝は確認されなかった。

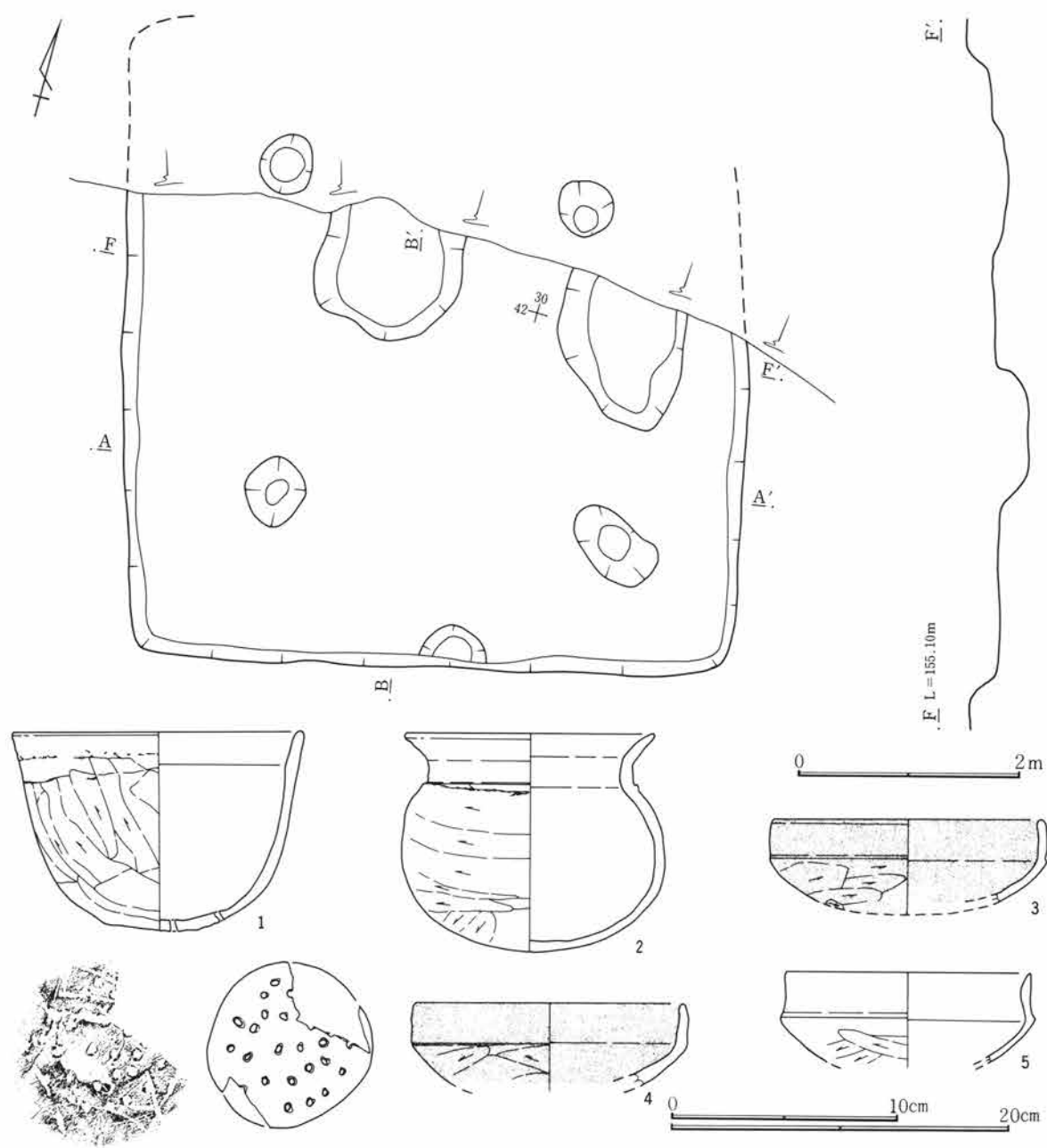
規模 東西5.62m、南北は不明である。壁高は残りの良い南壁部分で35cmである。柱穴1は径50cm深さ98cm、柱穴2は径52cm深さ88cm、柱穴3は径48cm深さ78cm、柱穴4は径48cm深さ71cmである。

床下 床下に2つの床下土坑が掘られていた。北側の土坑から焼土粒が多く検出された。

遺物 土師器の坏や甕や壺と小破片ではあるが坏と甕が多く出土している。



第50図 58号住居跡実測図



第51図 58号住居跡床下・出土遺物実測図

58号住居跡出土遺物観定表

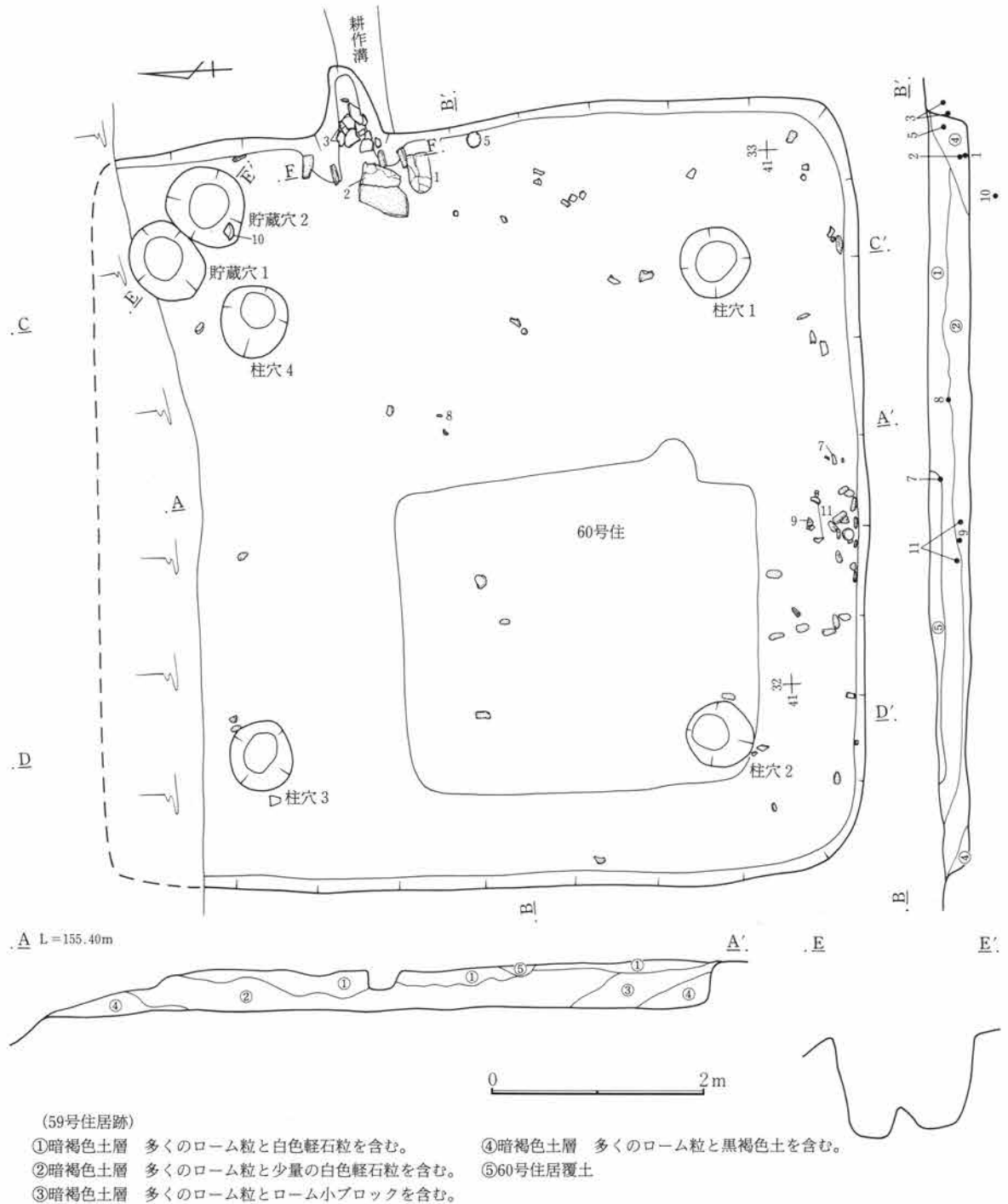
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
51-1 45	土器 小型甑	床面+9 1/2残存	口 17.2 高 6.8 底 6.7	①粗、1~3mmの赤色粒を多く 2~3mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴部外面幅広く深いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。底部はヘラ削り後、多くの小穴を開けている。
51-2 45	土器 小型壺	床面+9 ほぼ完形	口 14.9 高 12.9 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③明黄褐色	底~胴部外側ていねいなヘラ削り。器表面は密であるが、多くの部分で表面剥離。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
51-3 45	土器 器坏	床面+19 1/2残存	口(12.0)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は明瞭である。
51-4	土器 器坏	床面+10 破片	口(12.0)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
51-5	土器 器坏	床面+12 破片	口(10.8)	①密、砂粒含まずきわめて密。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は明瞭である。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

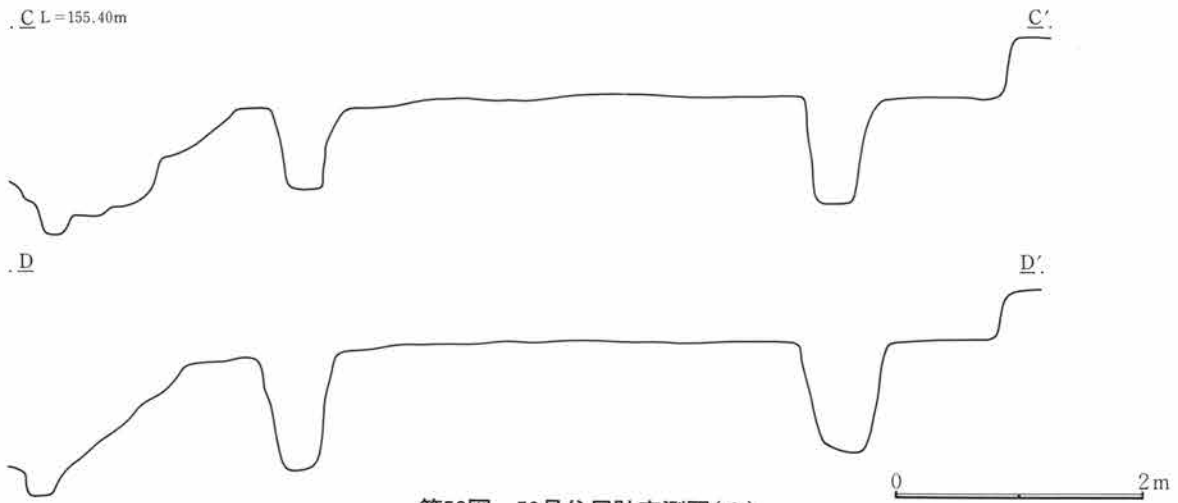
59号住居跡 (第52~55図、図版8・9・45・46)

位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、42—33グリッドに位置する。

概要 住居北側は中世末期の館の大きな堀により削り取られている。さらに西側の覆土上面を掘り込んで平安時代の60号住居が造られていた。60号住居の床面は本住居跡より約25cm高い位置である。竈は東壁北側に造られており、貯蔵穴が竈左側に2基掘られていた。2基のうち西側の貯蔵穴は位置的に北竈に伴う例が多いため、中世末期の堀により削りとられている北壁にも竈の造られていた可能性がある。



第52図 59号住居跡実測図(1)



第53図 59号住居跡実測図(2)

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が竈左側の北東コーナーに2基掘られていた。壁溝は確認されなかった。

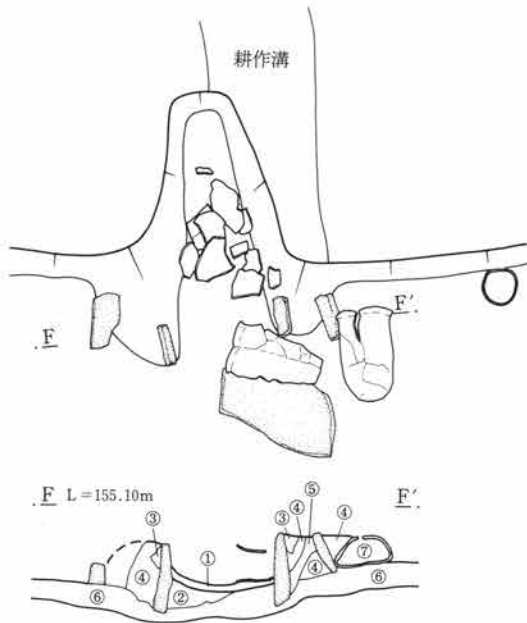
規模 東西7.1m、南北推定7.2mである。壁高は残りの良い南壁部分で40cmである。柱穴1は径66cm深さ88cm、柱穴2は径65cm深さ86cm、柱穴3は径62cm深さ76cm、柱穴4は径62cm深さ102cmである。貯蔵穴1は径78cm深さ102cm、貯蔵穴2は径76cm深さ96cmで一部重なり形はほぼ円形を呈する。

遺物 竈付近と南壁付近に土師器の甕や坏が、また覆土中より須恵器の坏や甕の破片も少量出土している。

(竈)

位置 住居東壁の北寄りに造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 両袖の芯材として使用された袖石がほぼ据えられた状態で残っていた。また焚口の床面上に脆弱な状態となった砂岩が落ちていた。さらに両袖の外側に2石が出土した。このような状態から両袖と天井部に石を使用し、他の部分はロームを用いて竈は造られていたものと思われる。しかし残念ながら袖部は良好な状態での検出はできなかった。焚口や右袖外側にほぼ完形の甕が、また燃烧部から煙道部にかけての覆土中から多くの甕の破片が出土した。燃烧部床面付近より多量の焼土粒が出土した。



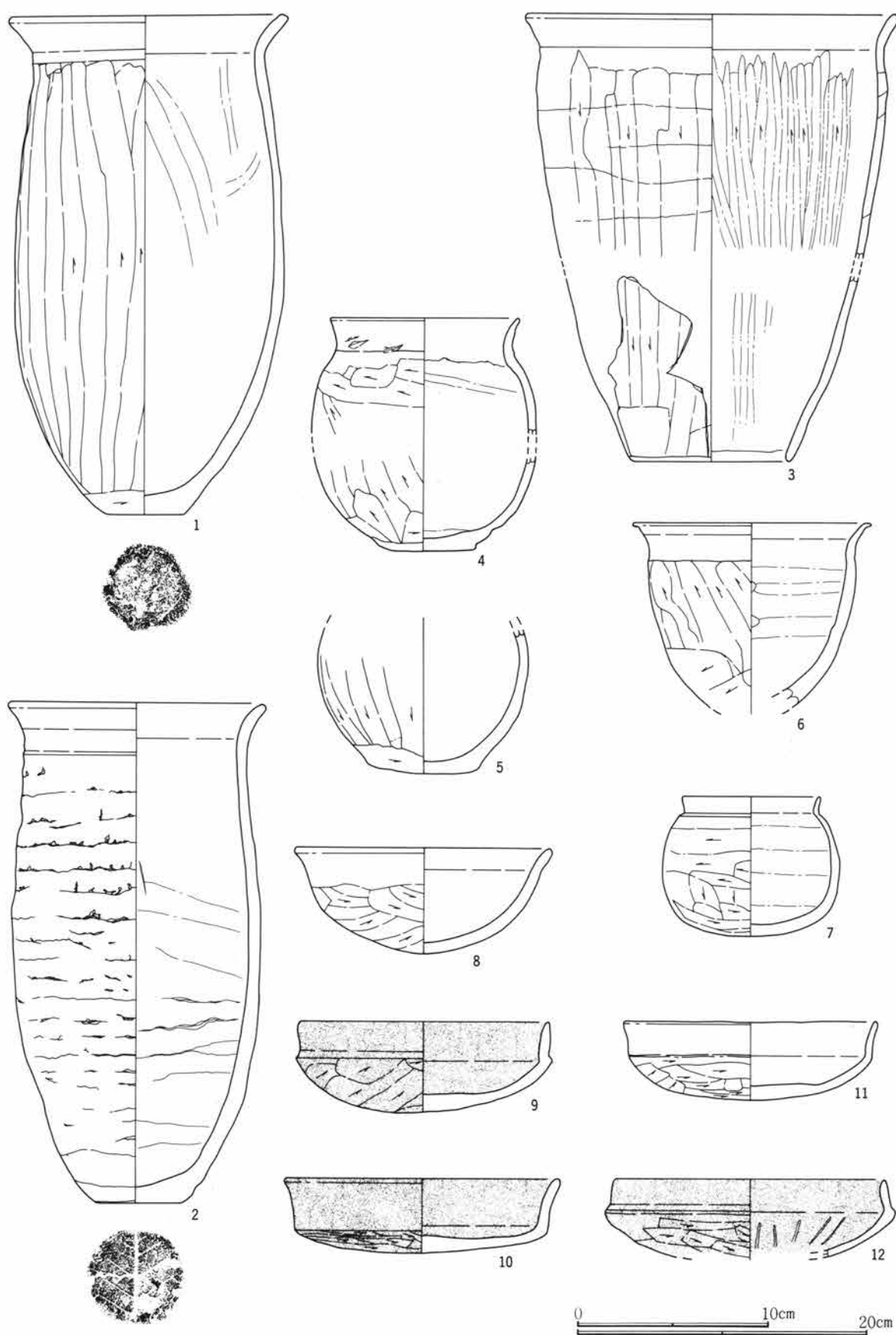
規模 両袖方向89cm、煙道方向112cmである。

竈

- ①赤褐色土層 多くの焼土ブロックと焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒とロームブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 暗褐色土に少量のロームブロックを含む。
- ⑤褐色土層 ロームを主とした層。
- ⑥暗褐色土層 暗褐色土とロームブロックを主とした層。
- ⑦暗褐色土層 土器中の覆土。

0 1m

第54図 59号住居跡竈実測図



第55図 59号住居跡出土遺物実測図

59号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
55-1 45	土師器 甕	竈内直上 ほぼ完形	口 18.8 高 34.5 底 5.5	①粗、1～3mmの砂粒を多く3～5mmの片岩粒と長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。胴外面弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
55-2 46	土師器 甕	竈内+5 %残存	口 17.4 高 34.4 底 5.9	①粗、1～3mmの砂粒を多く3～5mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。胴外面弱いナデ。多くの輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
55-3 46	土師器 甕	竈内+19 口～胴部% 胴下半破片	口 25.6 高(30.8) 底(10.7)	①粗、1～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	胴部外面ヘラ削り。砂粒は多いが、器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
55-4	土師器 小型甕	ピット覆土 口～胴部% 底部完形	口(13.0) 高(16.0) 底 6.8	①やや粗、5mm前後の長石と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③表面にふい赤褐色・断面橙色	底部ヘラ削り。胴部は、幅の広いヘラ削りにより表面に砂粒が多く粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
55-5 45	土師器 小型甕	竈内+19 胴下半% 底部完形	口 — 高 — 底 7.6	①粗、5mm前後の大きな長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③淡赤橙色	底部ナデ。胴下端横方向ヘラ削り。胴部ヘラ削りにより、器表面の砂粒が目立つ。内面ていねいなナデで器表面密。
55-6	土師器 小型甕	覆土 %残存	口 16.6 高 — 底 —	①粗、5mm前後の長石粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にふい黄褐色	胴部ヘラ削りにより、器表面の砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
55-7 45	土師器 小型甕	床面+25 %残存	口 9.6 高 9.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底～胴部は、幅の狭い細かいヘラ削り。器表面は粗くない。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面密。
55-8 46	土師器 坏	床面+11 ほぼ完形	口 13.2 高 5.4 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は、幅の狭いヘラ削り。口縁部横ナデ。内側底部ナデ。稜は明瞭でない。
55-9 46	土師器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 13.0 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にふい黄褐色	底部は、幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面底部はていねいなナデ。
55-10 46	土師器 坏	床面-25 %残存	口 14.2 高 4.8 底 丸底	①密、砂粒をほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。浅い坏である。
55-11 46	土師器 坏	床面+7 %残存	口(13.0) 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部は、幅が狭く短い単位のヘラ削り。口縁部横ナデ。内側底部ナデ。稜は低いが、明瞭である。
55-12	土師器 坏	ピット覆土 %残存	口(14.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③断面浅黄褐色・内面黒褐色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面底部ナデ。内面底部に、放射状ヘラ磨き。内面は黒漆か。

62号住居跡及び竈（第56～58図、図版9・46・71）

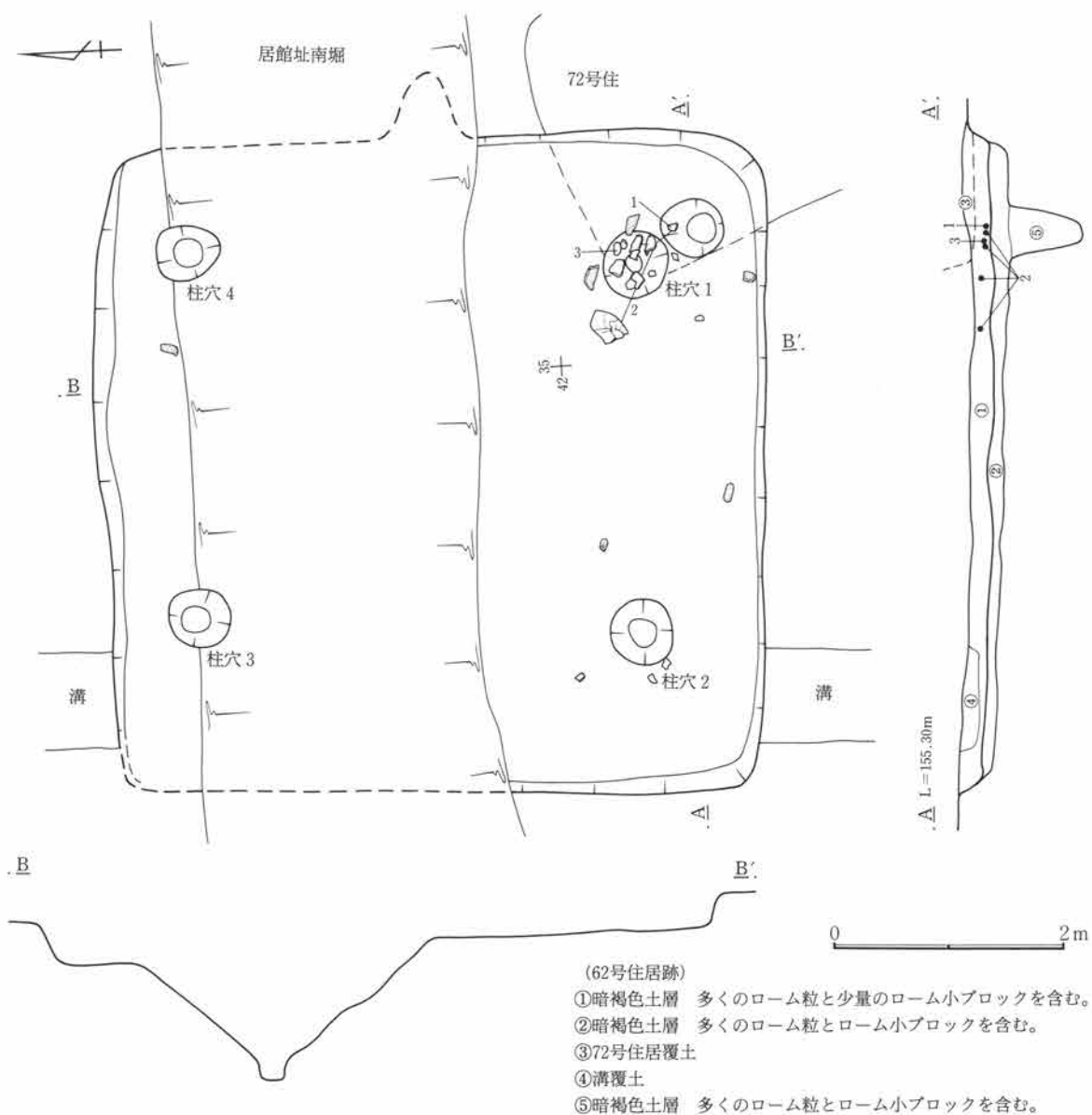
位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、43-35グリッドに位置する。

概要 住居中央部は中世末期の館の大きな堀により大きく削り取られている。また西壁付近を南北に走る小さな溝により、床面近くまでの覆土が掘り取られている。さらに南東側の覆土上面を掘り込んで平安時代の72号住居が造られていた。72号住居の床面は本住居跡より約20cm高い位置である。竈は北壁には造られていなく、また堀により削られていない東壁部分にも確認されなかった。しかし南東コーナーに柱穴のほか貯蔵穴と考えられる掘り込みが確認されていることから、おそらく堀により削り取られた東壁中央部付近に竈が造られていたものと考えられる。

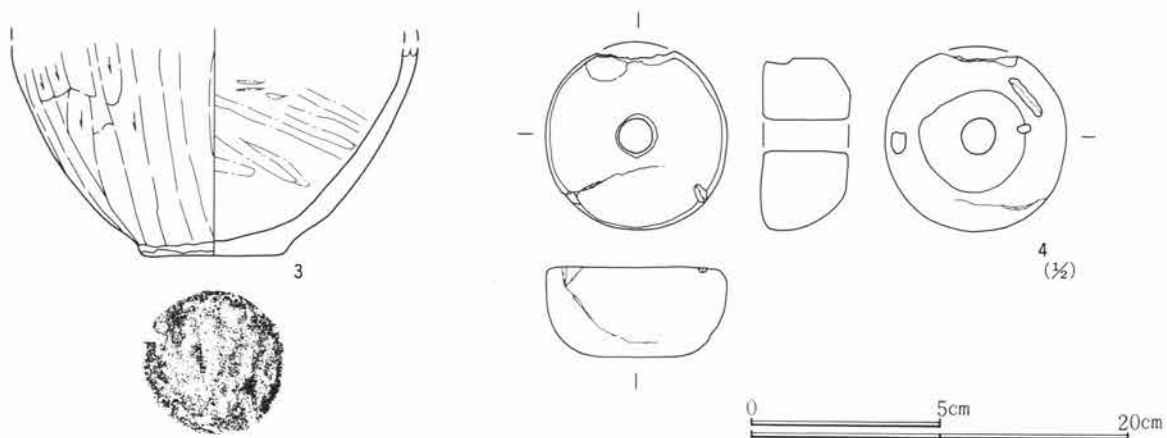
構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴と思われる掘り込みが南東コーナーに掘られていた。壁溝は確認されなかった。

規模 東西5.58m、南北5.62mである。壁高は残りの良い南壁部分で31cmである。柱穴1は径53cm深さ87cm、柱穴2は径52cm深さ87cm、柱穴3は径52cm深さ73cm、柱穴4は径56cm深さ98cmである。貯蔵穴は径56cm深さ80cmでほぼ円形を呈する。

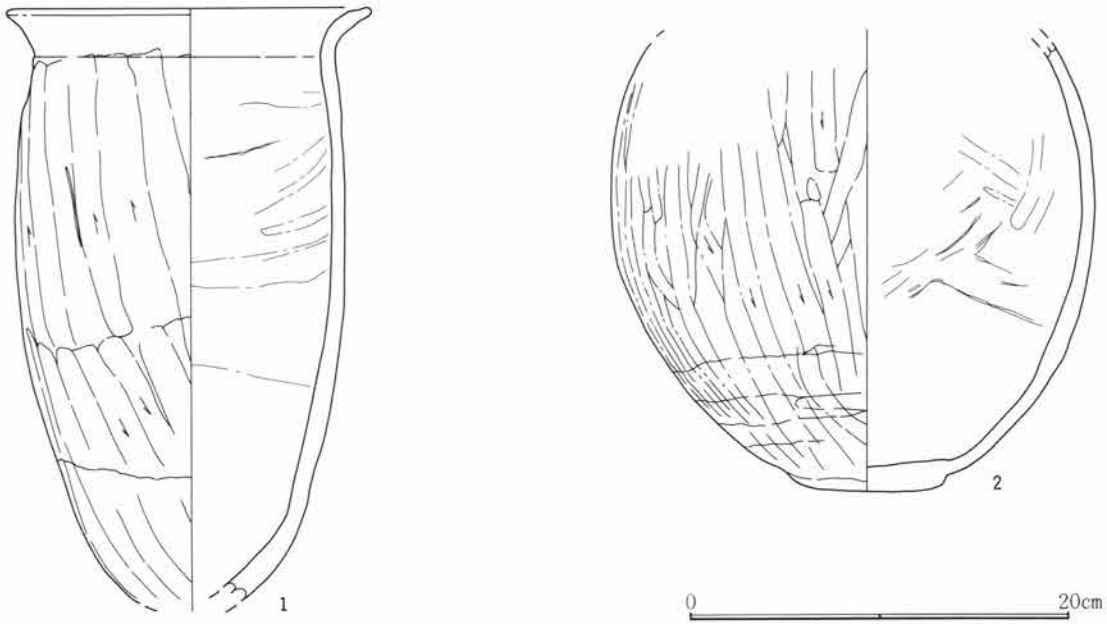
遺物 貯蔵穴付近を中心に土師器の甕や壺が、また覆土中より土製の紡錘車が出土している。



第56図 62号住居跡実測図



第57図 62号住居跡出土遺物実測図(1)



第58図 62号住居跡出土遺物実測図(2)

62号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
58-1 46	土師器 甕	床面+3 %残存	口 18.8 高 — 底 —	①粗、3~7mmの石英と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	胴外面弱いヘラ削り。砂粒の移動は多くない。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデにより、器表面密。外面の一部が吸炭により、黒褐色を呈する。
58-2 46	土師器 壺	床面直上 %残存	口 — 高 — 底 8.0	①粗、1mm前後の砂粒を多く、2~10mmの片岩や長石を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下部に輪積痕が残る。胴外面ヘラナデ後指によるナデで、器表面の砂粒の動き少ない。胴内面ていねいなナデ。
57-3	土師器 甕	床面+3 胴下半% 底部完形	口 — 高 — 底 7.2	①粗、10mm前後の小石と片岩を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部ヘラ削り後ナデ。胴部外側ヘラ削り後ヘラナデ。器表面の砂粒の動きは少なく、比較的密。内面ナデ。
57-4 71	土製品 紡錘車	覆土	径 4.8/- 孔径 0.9 厚 2.4 重 63.5		胎土中に、1mm前後の砂粒を多量に含む。表面は、にぶい黄褐色を呈する。表面ナデにより器表面密。

65号住居跡及び竈 (第59図、図版9・46)

位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、45-40グリッドに位置する。

概要 住居の東側には浅い谷があり、当住居の柱穴から東側はこの谷の覆土中に位置している。後世に谷と平地との境を削り土手を築いており、おそらくこのときに住居の一部が削り取られたものと思われる。また住居南西側の覆土上面を平安時代の64号住居により掘り込まれており、さらに64号住居は南東部に位置する同じ平安時代の63号住居の北西部を掘り込んでいる。3軒重複の住居であり、新旧関係は65→63→64号住居である。64号住居の床面は本住居跡より約12cm高い位置である。竈は北壁に造られていたが、大部分が削平されており壁面の一部の掘り込みと燃焼部を中心とすると思われる焼土の範囲が確認できた。またその部分より焼けた石が出土している。全体に残りの悪い住居である。

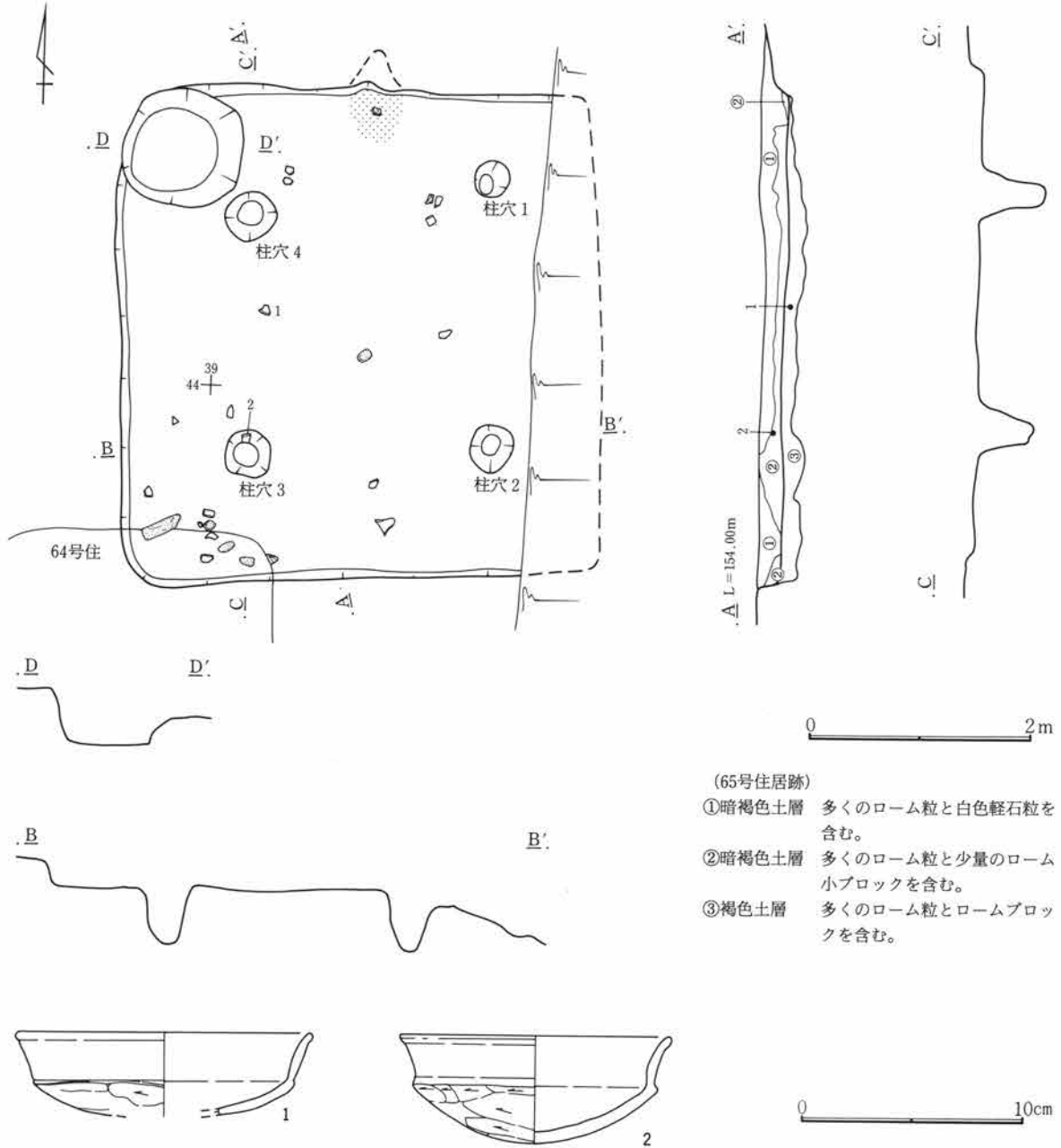
構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたものと思われるが、良好な状態では確認できなかった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴と思われる掘り込みが北東コーナーに掘られていた。壁溝は確認されなかった。

規模 東西推定4.3m、南北4.4mである。壁高は残りの良い西壁部分で25cmである。柱穴1は径30cm深さ86

第3章 古墳時代の遺構と遺物

cm、柱穴2は径36cm深さ57cm、柱穴3は径43cm深さ53cm、柱穴4は径46cm深さ59cmである。貯蔵穴は径105cm深さ28cmで浅くほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の坏が少し、甕の破片が多く出土している。



- (65号住居跡)
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量のローム小ブロックを含む。
 - ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第59図 65号住居跡・出土遺物実測図

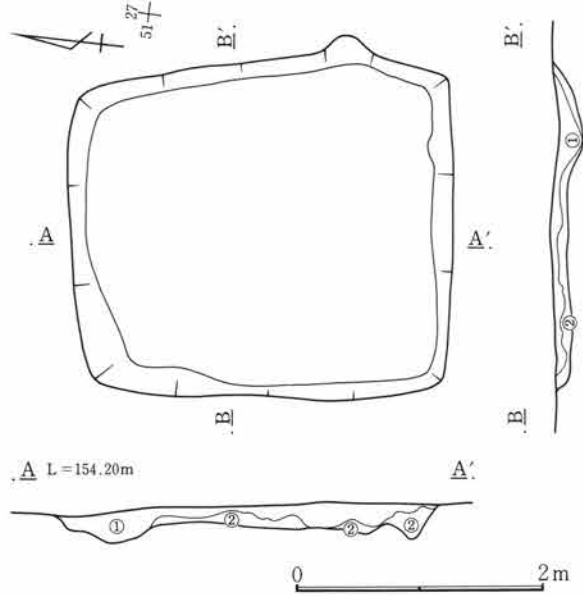
65号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
59-1 46	土師器 坏	床面-9 片残存	口(12.8) 高 4.7 底 -	①密、1mm前後の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部はヘラ削りであるが、砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面はナデで器表面密。
59-2	土師器 坏	床面+5 破片	口(13.0) 高 - 底 -	①密、器表面全体が粉状を呈する。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内側底部ナデ。ヘラ削りの単位不明瞭。

67号住居跡及び竈（第60図、図版9）

位置 本住居跡は、第1次調査区にあり、51-27グリッドに位置する。

概要 残りの悪い小さな住居であり、床面はほとんど残っていなかった。そのため床下部分の調査で住居範囲の確認を行う。竈も明確でないが東壁南寄りの壁面が掘り込まれており、わずかに焼土粒が検出されたため、この部分に竈が築かれていたものと思われる。



構造 床面はほとんど残っていなかったが、ロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていたものと思われる。柱穴や貯蔵穴さらに壁溝も確認されなかった。

規模 東西2.7m、南北3.08mである。

遺物 覆土中より少量の土師器の坏と甕の破片が出土した。

(67号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ②黄褐色土層 地山のロームを主とする層。

第60図 67号住居跡実測図

68号住居跡（第61～63図、図版9・46）

位置 本住居跡は、第1次調査区と第4次調査区にまたがる、53-30グリッドに位置する。

概要 調査区域内の農道確保のため住居東側や館の堀をはじめに調査し、埋め戻してその部分に道路を移動し住居西側の調査を行う。

本住居は館の堀により中央部を南北に掘り取られ、さらに堀が住居北壁周辺で直角に東に曲がっているため北壁周辺も掘り取られている。また東西方向に走る耕作溝により南側を床面下まで掘り込まれていた。さらに西堀の西側に位置する部分は同じ古墳時代の150号住居と重複している。両住居の新旧関係は明確に確認できなかったが、68号住居が古いものと思われる。床面の高さは両住居ともほぼ同じであるが、本住居跡が約5cmほど低い。床面に数箇所、焼土粒のまとまりが確認された。

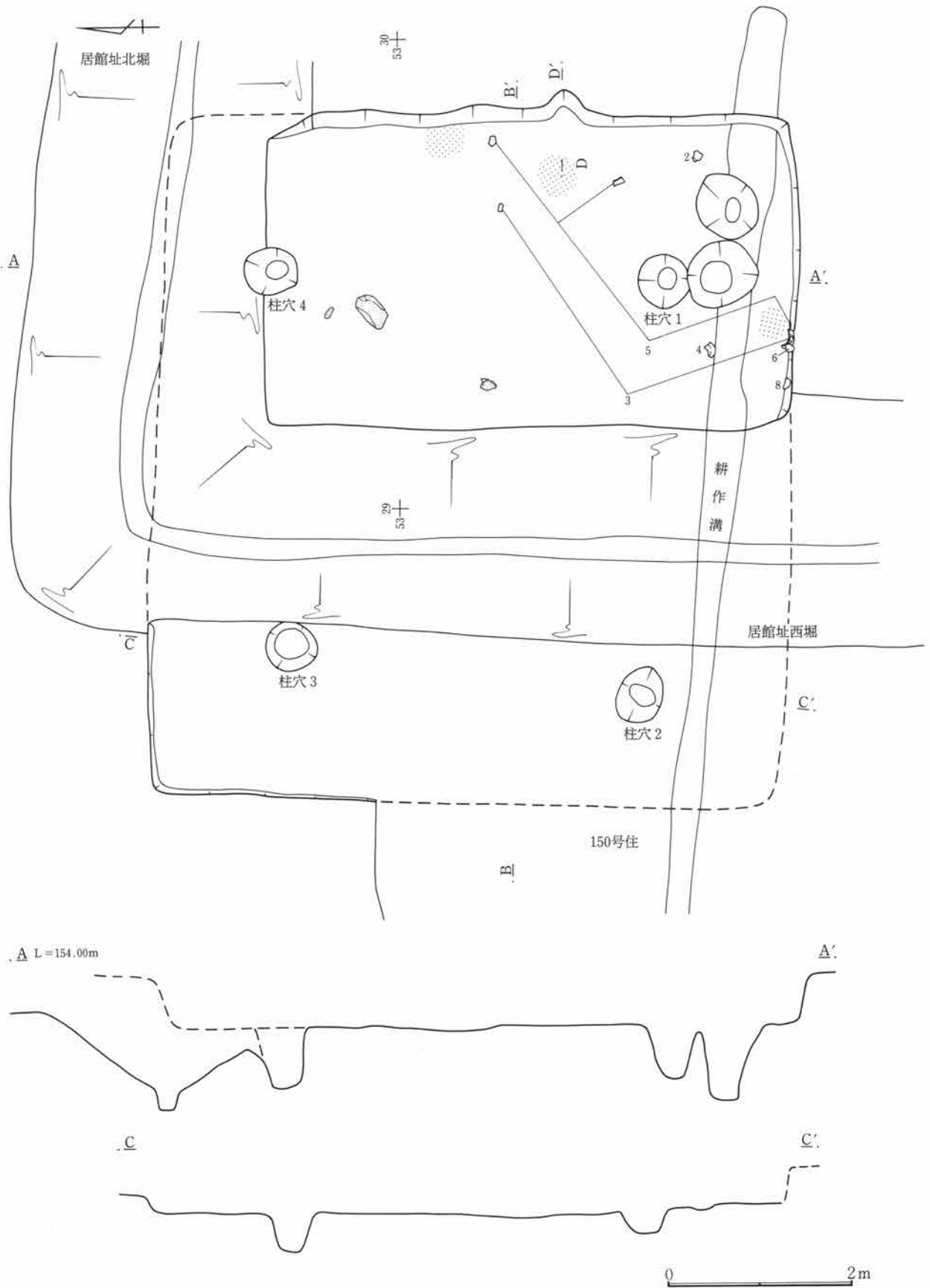
構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は配置が少し歪んでいるが4本確認された。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。この貯蔵穴の西に接して、ほぼ同じ規模の掘り込みが確認されており、貯蔵穴とも考えられるが用途は不明である。

規模 東西7.3m、南北推定6.5mである。壁高は残りの良い南壁部分で52cmである。柱穴1は径56cm深さ60cm、柱穴2は径52cm深さ25cm、柱穴3は径54cm深さ44cm、柱穴4は径56cm深さ68cmである。貯蔵穴は径66cm深さ88cmでほぼ円形を呈する。

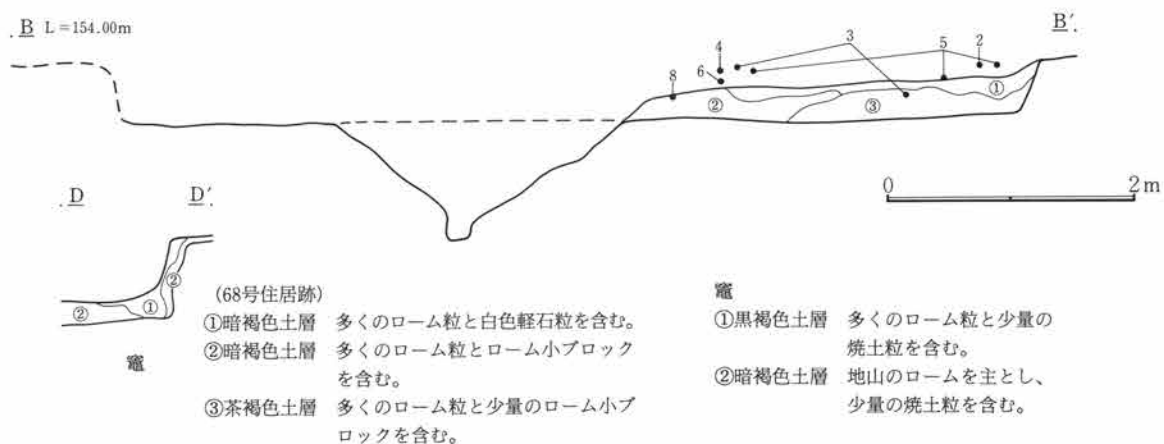
遺物 土師器の甕や坏が出土している。

(竈)

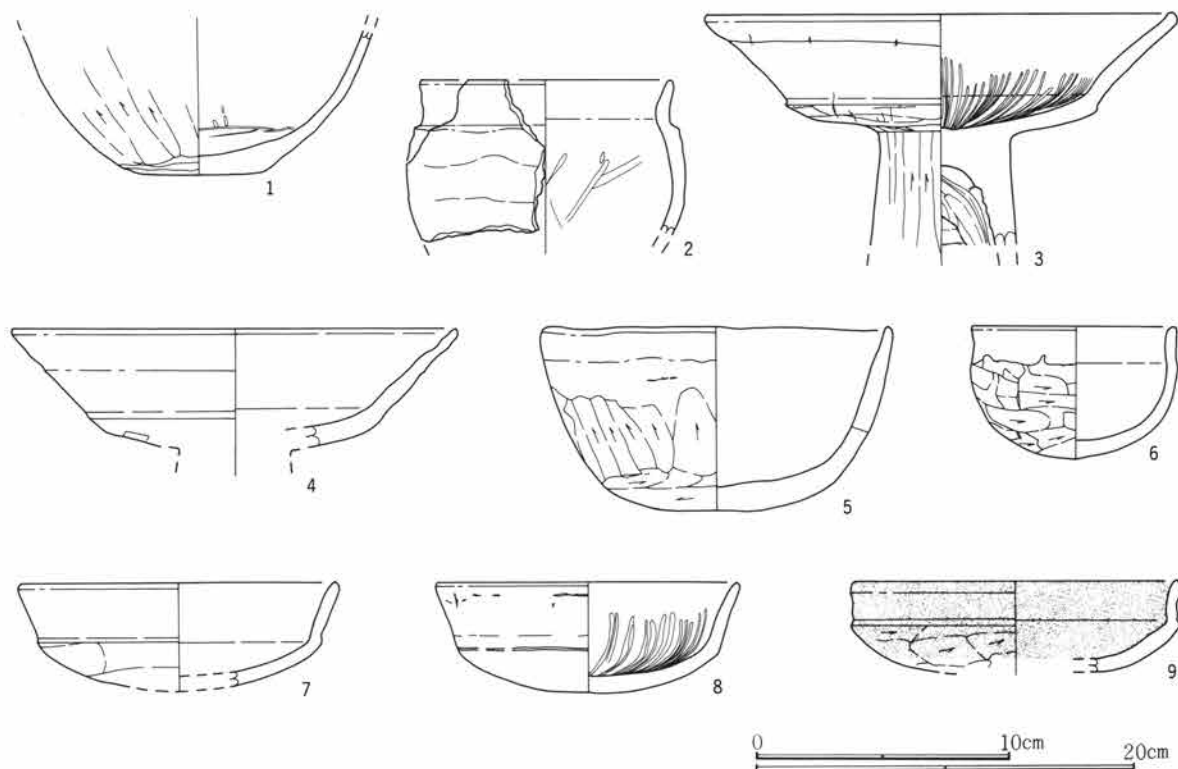
概要 住居東壁中央部やや南寄りに造られている。壁面を掘り込んでいる燃焼部の一部と煙道部以外は残っていなかった。床面上に位置する燃焼部分から焼土粒の検出はなかったため、この竈は旧竈の可能性も考えられる。その場合の新竈は堀により深く削り取られた北壁部分となる。



第61図 68号住居跡実測図(1)



第62図 68号住居跡実測図(2)



第63図 68号住居跡出土遺物実測図

68号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
63-1	土師器 壺	覆土 胴下半壊 底部完形	口 — 高 — 底 7.5	①粗、2~3mmの長石粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	底部ナデ。胴部はヘラ削りにより、多くの砂粒が目立ち器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。
63-2	土師器 小型甕	床面+42 破片	口(13.2)	①粗、2mm前後の長石粒を多含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	胴部外面ナデ。口縁部横ナデ。内面はていねいなナデで、器表面密。内面胴部にヘラの工具痕あり。
63-3 46	土師器 高坏	床面+20 坏部残存	口 18.5 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外側ヘラナデ。内面ヘラ削り。坏底部ヘラ削り。口縁部~坏内面ていねいなナデ。坏内面底部に密な放射状ヘラ磨き。
63-4	土師器 高坏	床面+8 坏部残存	口(17.6)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	坏底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。坏内側はていねいなナデにより、口縁部同様に器表面が密。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
63-5 46	土師器 坏	床面+33 1/2残存	口(13.6) 高 5.2 底(6.0)	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部周辺へら削り。底部中央ナデ。口縁部上半横ナデ。下半へら削り。内側胴部ナデにより器表面密。
63-6 46	土師器 坏	床面+33 完形	口 8.1 高 5.2 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部中央ナデ。他の底部は細く短い単位でのへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面は内外面とも密。
63-7 46	土師器 坏	覆土 1/2残存	口 12.6	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部外面へら削りであるが、表面の剥離が多く削りの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内側全面にわたりブロック状の表面剥離。
63-8 46	土師器 坏	床面+19 1/2残存	口(12.0) 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部外側へら削りであるが、削りの単位不明。口縁部横ナデ。内面密な放射状のへら磨き。
63-9	土師器 坏	覆土 破片	口(12.8)	①密 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底部外側幅の広いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。胎土中に砂粒ほとんど含まず。

100号住居跡及び竈（第64・65図、図版10・47）

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、35-33グリッドに位置する。

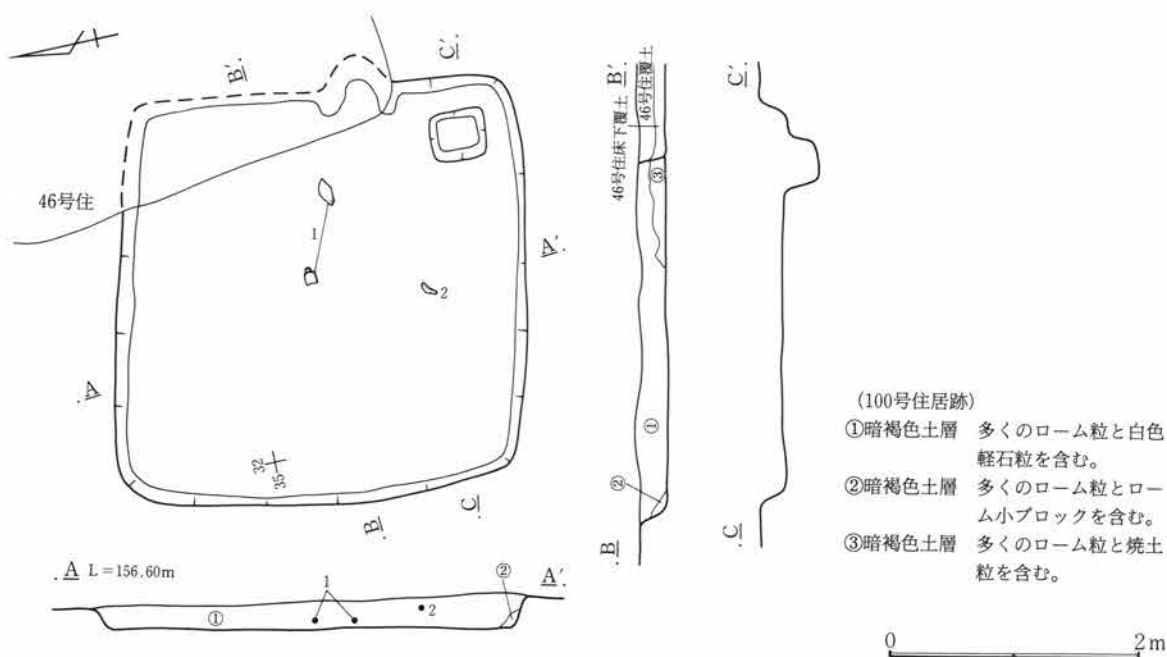
概要 小さな住居であり、東側の床面の一部と竈が平安時代の46号住居により削り取られていた。しかし本住居跡の床面の高さが約10cm程低いため、床下調査の段階で46号住居により削り取られた床下や壁面部分と竈の下部が確認できた。南側に近接して壁面の101号住居が造られている。

竈は大部分が削り取られていたが、右袖の一部が残っており、また燃焼部付近より多くの焼土粒が出土した。

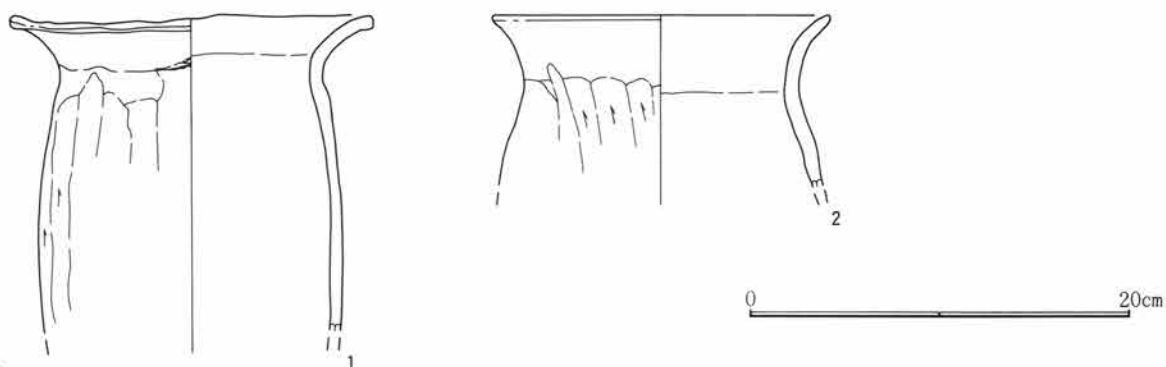
構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。貯蔵穴は竈右側の南東コーナーに掘られていたが、柱穴は掘られていなかった。

規模 東西3.3m、南北3.3mである。貯蔵穴は東西42cm、南北44cmの方形を呈し、深さ26cmである。壁高は残りの良い南壁部分で30cmである。

遺物 土師器の甕が出土している。



第64図 100号住居跡実測図



第65図 100号住居跡出土遺物実測図

100号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
65-1 47	土師器 甕	床面+4 1/3残存	口(19.0) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 5~6mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へラ削り。口縁部横ナデ。内面横ナデ。胴外面の砂粒が 多く移動し器表面が粗い。 口縁が大きく外反する長胴の甕である。
65-2	土師器 甕	床面+14 破片	口(18.1) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く、 5~6mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。

102号住居跡 (第66・67図、図版10・47)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、36-33グリッドに位置する。

概要 4軒の重複している住居の中の一軒である。南東コーナー部分を古墳時代の41号住居により、床面上約10cmから上の覆土を掘り取られ、南側を平安時代の46号住居により同じく床面上約10cmの覆土を掘り取られている。更に西壁の南部分で古墳時代の100号住居と重複しているが、この部分は46号住居床下部分に当たるため、切り合い関係は確認できなかった。以上の切り合い関係から新旧関係は102→100→41→46号住居と思われる。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴と思われる小穴が3本、さらに可能性として1本の計4本確認されたが、いずれも浅いため疑問も残る。貯蔵穴や壁溝は掘られていなかった。

規模 東西4.55m、南北4.34mである。壁高は残りの良い南壁部分で25cmである。柱穴1は径36cm深さ30cm、柱穴2は径40cm深さ49cm、柱穴3は不明、柱穴4は径38cm深さ37cmである。

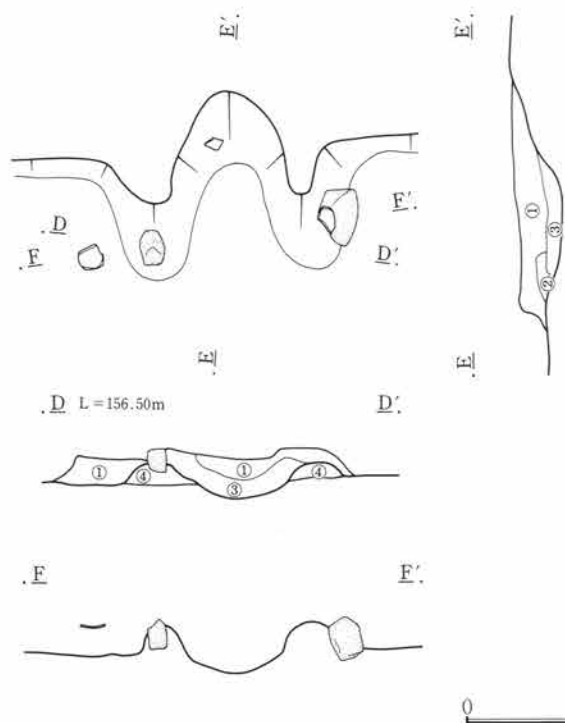
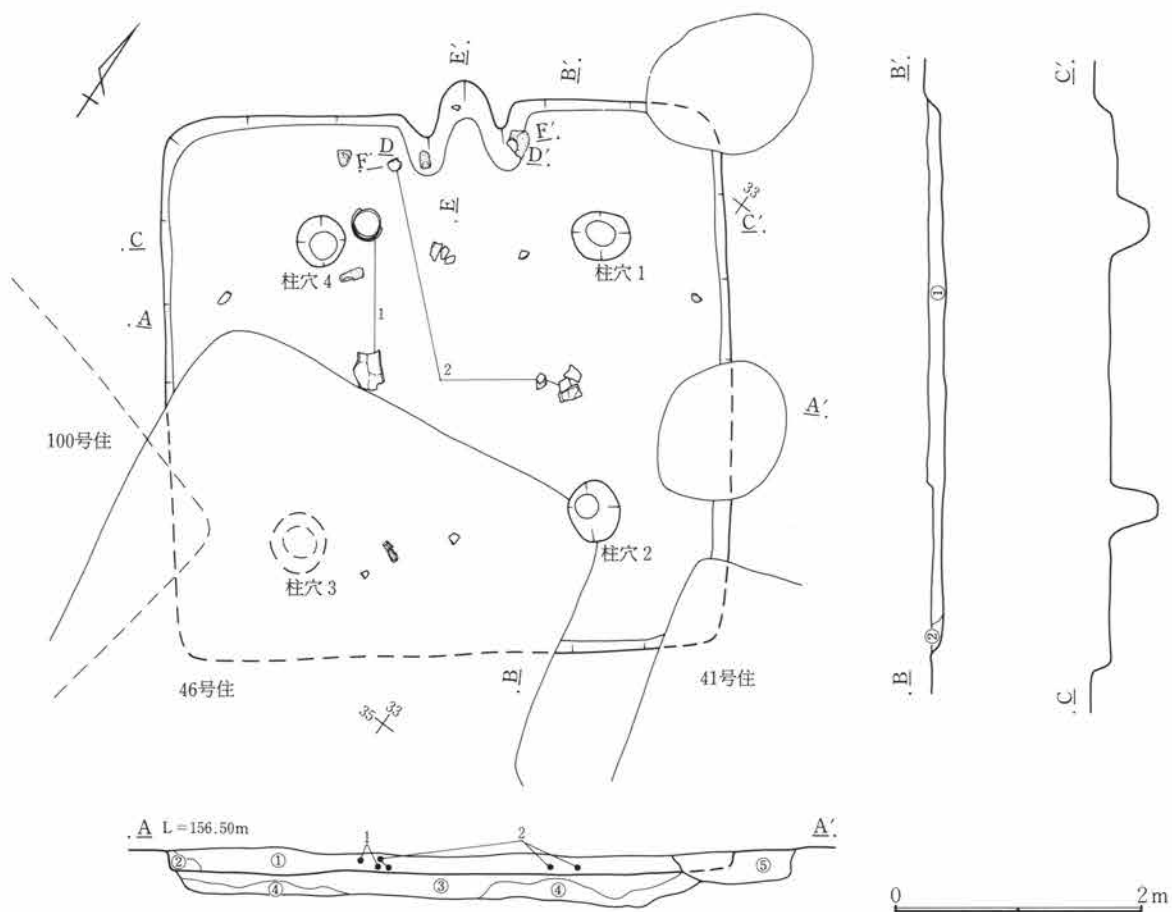
遺物 土師器の甕と坏が出土している。

(竈)

位置 住居北壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 左袖石がほぼ使用時の状態を示しているが、右袖の石は少し外側に移動されていた。天井部として使われた部材は不明である。竈覆土上面には住居の覆土が多く堆積しているため、竈上面は多くの部分が削り取られていた。そのため燃烧部床面付近には焼土粒が検出されたが、覆土全体の焼土粒の出土量は少なかった。

規模 両袖方向95cm、煙道方向75cmである。



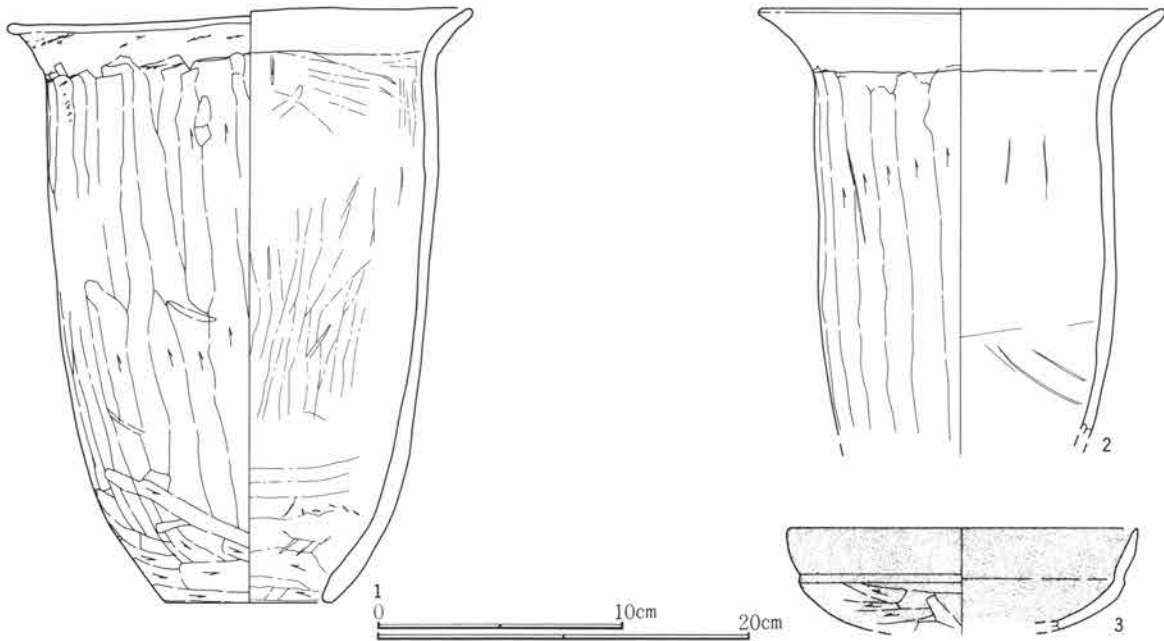
(102号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ④褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑤褐色土層 土坑覆土。

竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒・ローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

第66図 102号住居跡・竈実測図



第67図 102号住居跡出土遺物実測図

102号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
67-1 47	土師器 甕	床面+4 ほぼ完形	口 24.4 高 31.7 底 9.0	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端へら削り。胴外面強いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内外面とも器表面密。
67-2 47	土師器 甕	床面+4 %残存	口 21.4	①粗、4~6mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。胴外面多くの砂粒が目立ち粗い。
67-3	土師器 坏	覆土 破片	口(13.8)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。稜は高く明瞭である。

104号住居跡 (第68・69図、図版10・11・47)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、37-32・33グリッドに位置する。

概要 他の住居とは重複していないが、北壁や北東コーナーの一部を後世の掘り込みにより削り取られている。床下中央部分に1.2×1.7m深さ25cmの南北方向に長い床下土坑が掘られていた。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が柱間約2.2m間隔で正方形に4本確認された。貯蔵穴が竈右側に掘られていたが、壁溝は掘られていなかった。

規模 東西4.45m、南北4.65mである。壁高は残りの良い南東コーナーの壁面部分で44cmである。柱穴1は径40cm深さ58cm、柱穴2は径46cm深さ56cm、柱穴3は径49cm深さ68cm、柱穴4は径39cm深さ61cmである。貯蔵穴は径70cm深さ85cmである。

遺物 土師器の坏が出土しており、甕も破片として多く出土している。

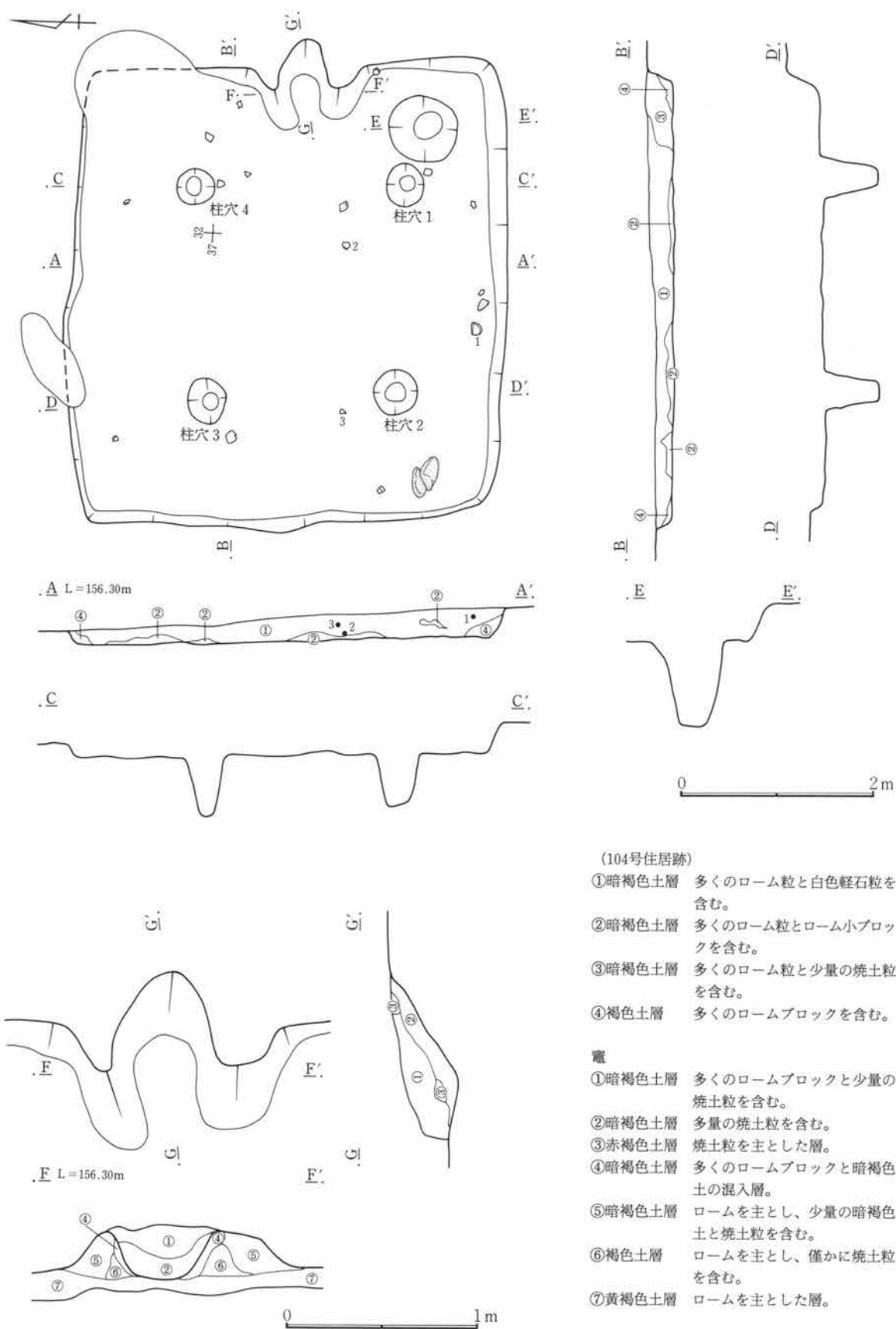
(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃烧部の多くは床面上に位置する。

構造 右袖の残りが少し悪いが、両袖とも多くのロームを使い造られており、袖石は使われていなかったようである。壁面に対し主軸が少し傾いているようである。燃烧部付近より多くの焼土粒が出土した。一部に天井部に使われていたと思われる焼土ブロックも確認された。

規模 両袖方向105cm、煙道方向91cmである。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



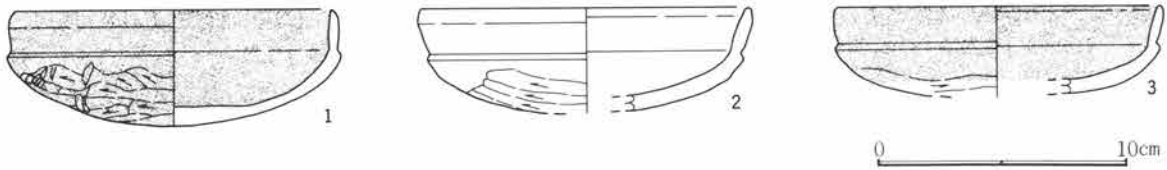
(104号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ④褐色土層 多くのロームブロックを含む。

竈

- ①暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多量の焼土粒を含む。
- ③赤褐色土層 焼土粒を主とした層。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックと暗褐色土の混入層。
- ⑤暗褐色土層 ロームを主とし、少量の暗褐色土と焼土粒を含む。
- ⑥褐色土層 ロームを主とし、僅かに焼土粒を含む。
- ⑦黄褐色土層 ロームを主とした層。

第68図 104号住居跡・竈実測図



第69図 104号住居跡出土遺物実測図

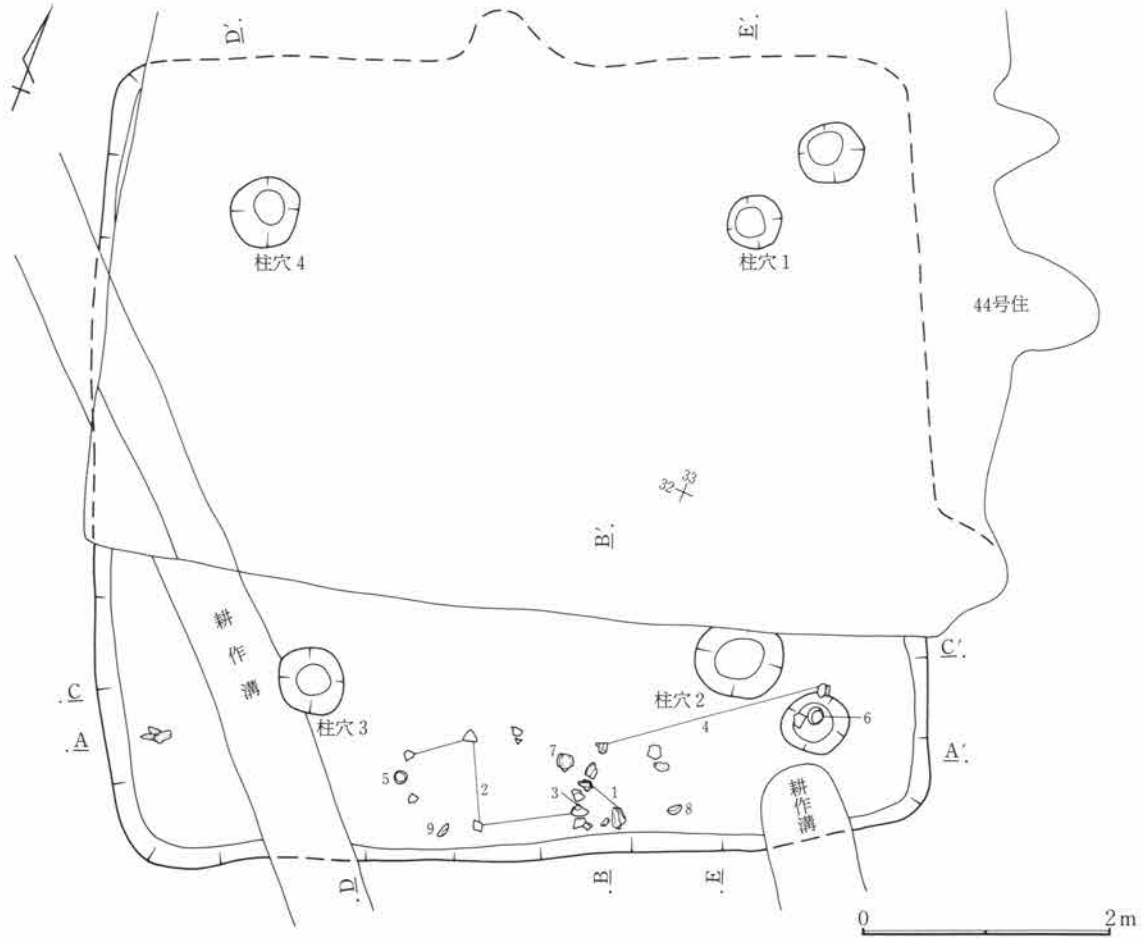
104号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
69-1 47	土師器 坏	床面+25 %残存	口(12.2) 高 4.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず、やや粉状を呈する ②酸化焰、硬質 ③内面黒色外面黒褐色断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は高く明瞭である。内面は黒漆か。
69-2 47	土師器 坏	床面+7 %残存	口(13.1) 高 — 底 —	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。口縁部上端が細い。
69-3	土師器 坏	床面+16 破片	口(13.0) 高 — 底 —	①密、雲母を含む。 ②酸化焰、硬質。 ③内外面黒色・断面橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は高く明瞭である。内外面の黒色は吸炭による。

106号住居跡 (第70~72図、図版11・47)

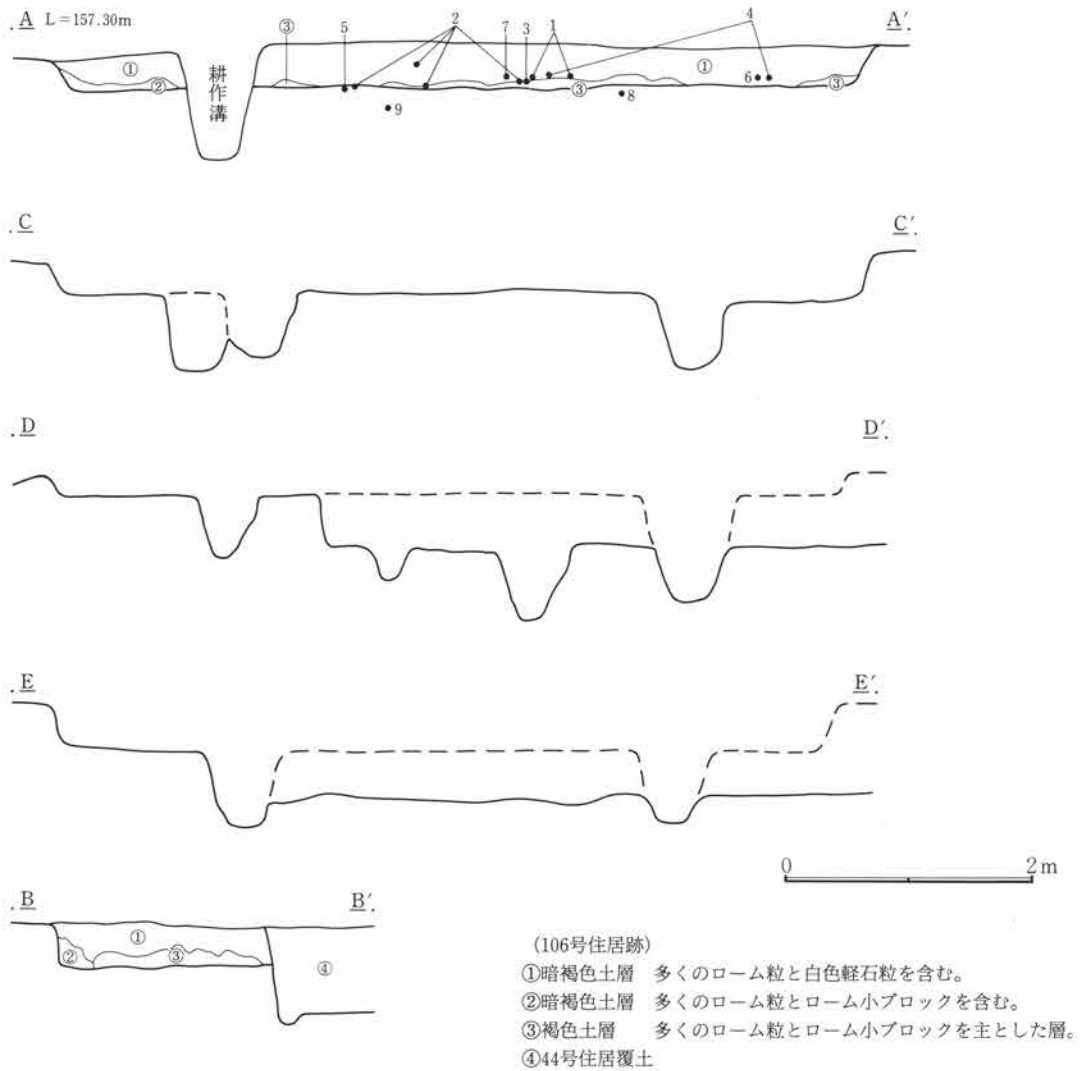
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、32・33-33グリッドに位置する。

概要 古墳時代の44号住居と重複しており、44号住居により北側約2/3を床面下まで深く掘り込まれている。



第70図 106号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第71図 106号住居跡実測図(2)

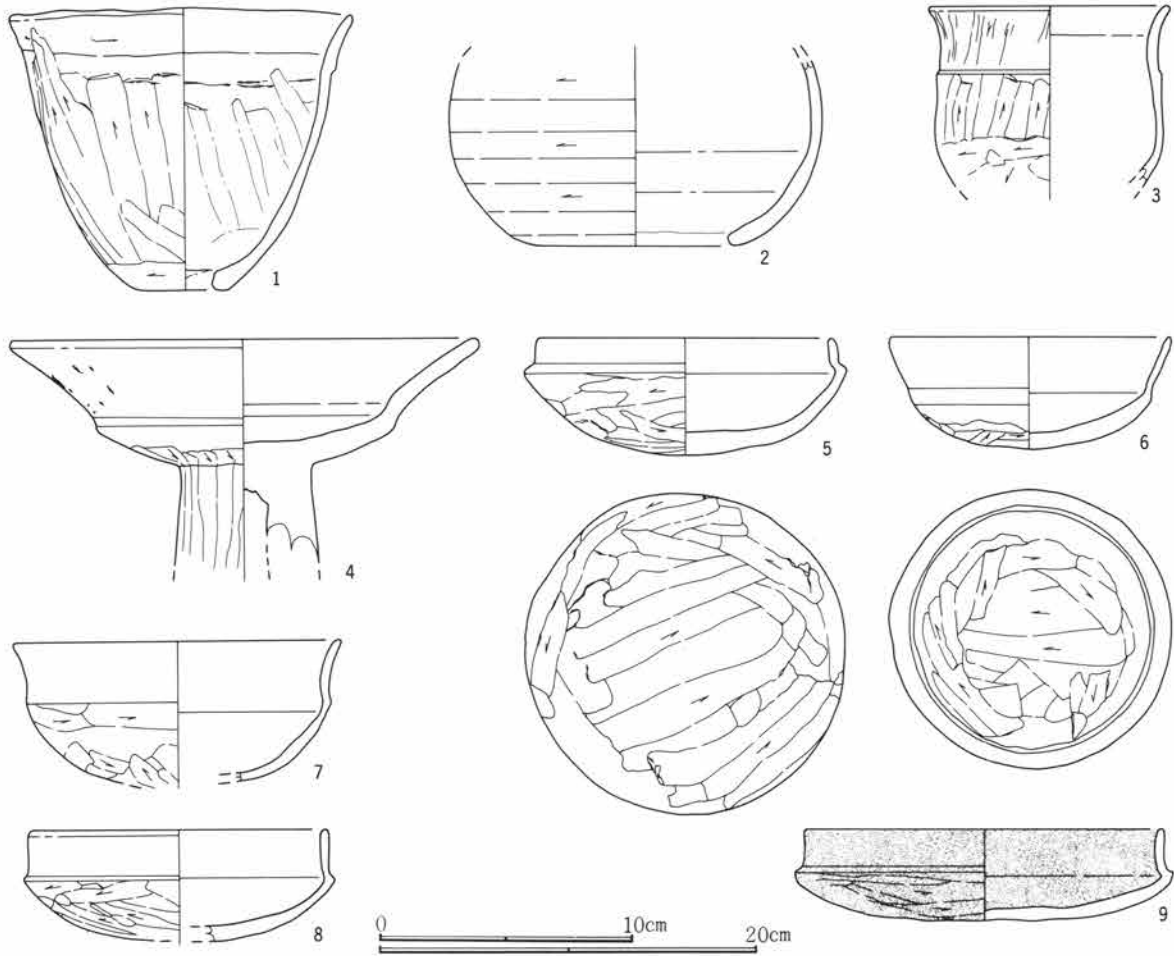
西壁はかろうじて北西部まで確認され、また44号住居の床面下に残された柱穴や貯蔵穴と思われる掘り込みにより、住居規模と竈の状態について推定可能である。柱穴1の北東部と柱穴2の南東部に貯蔵穴と思われる掘り込みが確認されているため、竈は北壁と東壁に造られていたことが考えられる。2つの貯蔵穴の新旧関係は不明である。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が少し混入した土で造られており、床面下の掘り込みは少なかった。柱穴は少し不均衡であるが、ほぼ3.7m間隔で方形に配置され4本確認された。貯蔵穴が2個確認された。北から貯蔵穴1～2と呼称した。壁溝は確認されなかった。

規模 東西6.5m、南北約6.3mである。壁高は残りの良い南壁部分で34cmである。柱穴1は径43cm深さは推定床面から58cm、柱穴2は径55cm深さ60cm、柱穴3は径53cm深さ52cm、柱穴4は径52cm深さ推定床面から85cmである。貯蔵穴1は径52cm深さ推定床面から75cm、貯蔵穴2は径53cm深さ65cmである。

遺物 南壁に近い床面上を中心として、土師器の甕、甑や坏が出土した。

床下 掘り込みは浅く、柱穴3の東側に径80cm床面からの深さ37cmの床下土坑が確認された。覆土中に少量の焼土粒が含まれていた。



第72図 106号住居跡出土遺物実測図

106号住居跡出土遺物観察表

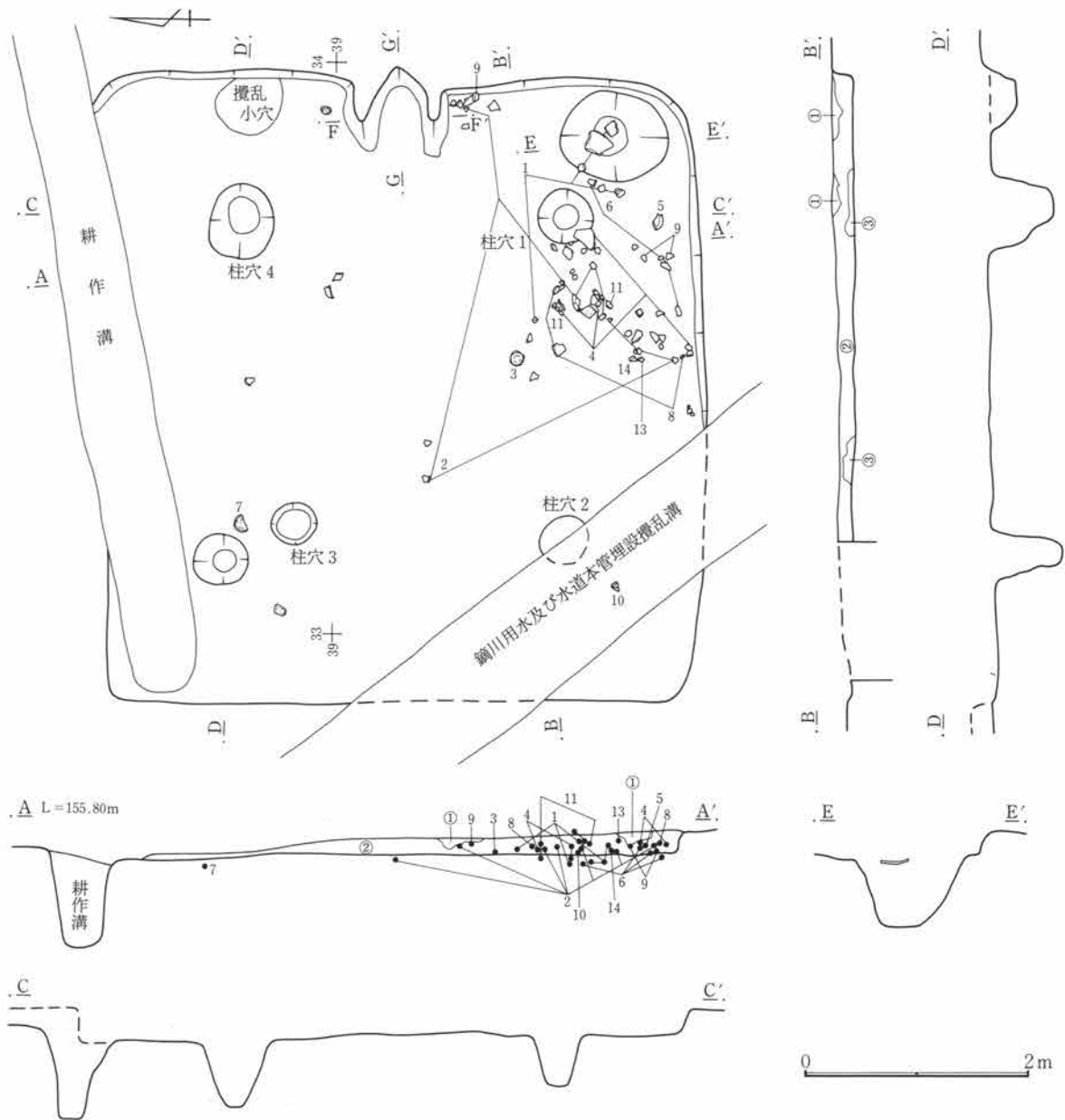
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
72-1 47	土 師 器 小型 甕	床面+6 %残存	口 18.6 高 14.8 底 4.6	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴外面は多くの砂粒が移動し粗い。底部中央に穿孔あり。少し全体がゆがんでいる。
72-2	土 師 器	床面直上	底 10.4	①密、1mm以下の砂粒を多く含む ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	器種不明。底面と思われる部分は、へら削りにより削り取られている。外面へら削り。内面ナデ。
72-3	土 師 器 小型 甕	床面+4 %残存	口(12.3)	①やや粗、1~2mmの砂粒少量含む ②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部外側に縦方向にへら工具痕あり。
72-4 47	土 師 器 高 坏	床面+6 坏部%残存 脚部破片	口(18.6) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面へら削り。坏底面中央へら削り。坏口縁部横ナデ。器表面が部分的に剥離している。
72-5 47	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 11.6 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③浅黄色	底部へら削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。稜は高く明瞭である。
72-6 47	土 師 器 坏	床面+6 完形	口 11.0 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・内面一部黒色	底面中央部へら削り、周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面の黒色は黒漆か。
72-7 47	土 師 器 坏	床面+10 %残存	口(13.0)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央へら削り、周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面の黒色は吸炭による。
72-8 47	土 師 器 坏	床面+5 %残存	口(11.8)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。
72-9 47	土 師 器 坏	床面-17 口縁部破片 底部%残存	口 14.1 高 3.5 底 丸底	①やや粗、1~2mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。浅い坏である。

111号住居跡 (第73~76図、図版12・47・48)

位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、39・40—34グリッドに位置する。

概要 他の住居とは重複していないが、北壁部分を耕作溝に南西部分を水道管や用水の敷設工事に伴い深く掘り込まれている。床面や壁面は住居南東部分で良好に確認されたが、北西部分と西側の残りは悪く、壁面はほとんど残っていなかった。またその部分の床面も多くが削られており、良好な床面の確認はできなかった。竈左側に攪乱による小穴が一つ掘られていた。

構造 南東部分の床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が柱間約3m間隔で正方形に4本確認されたが、柱穴2は水道管と用水敷設工事の時に大部分が削り取られていた。貯蔵



(111号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石と焼土粒を含む。
- ③褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第73図 111号住居跡実測図

穴が竈右側の南東コーナーに掘られていたが、壁溝は掘られていなかった。

規模 東西5.45m、南北5.25mである。壁高は残りの良い南東コーナーの壁面部分で26cmである。柱穴1は径48cm深さ44cm、柱穴2は不明、柱穴3は径43cm深さ72cm、柱穴4は径56cm深さ62cmである。貯蔵穴は径78cm深さ58cmである。

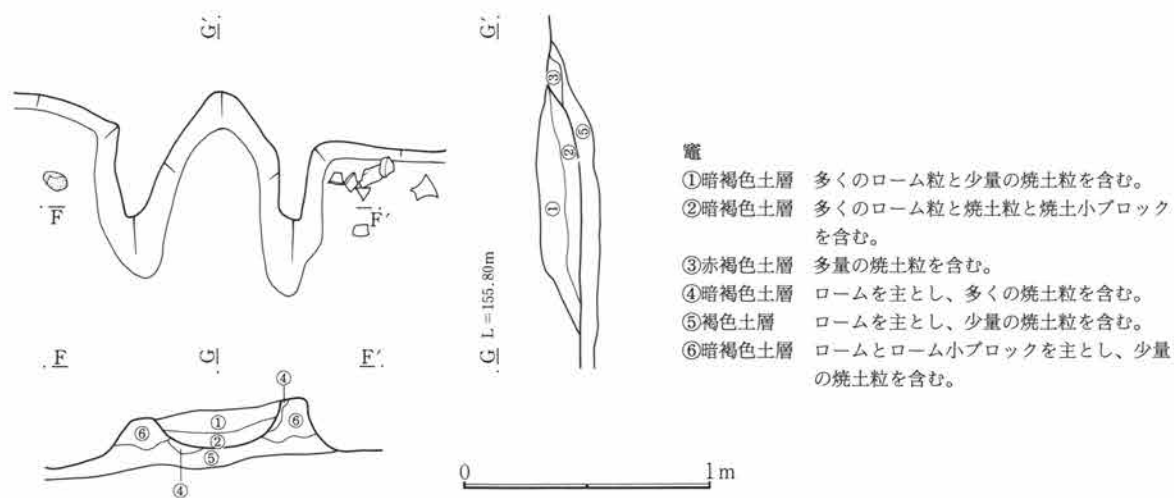
遺物 床面の残っていた南東部分を中心に土師器の甕や坏が多く出土した。

(竈)

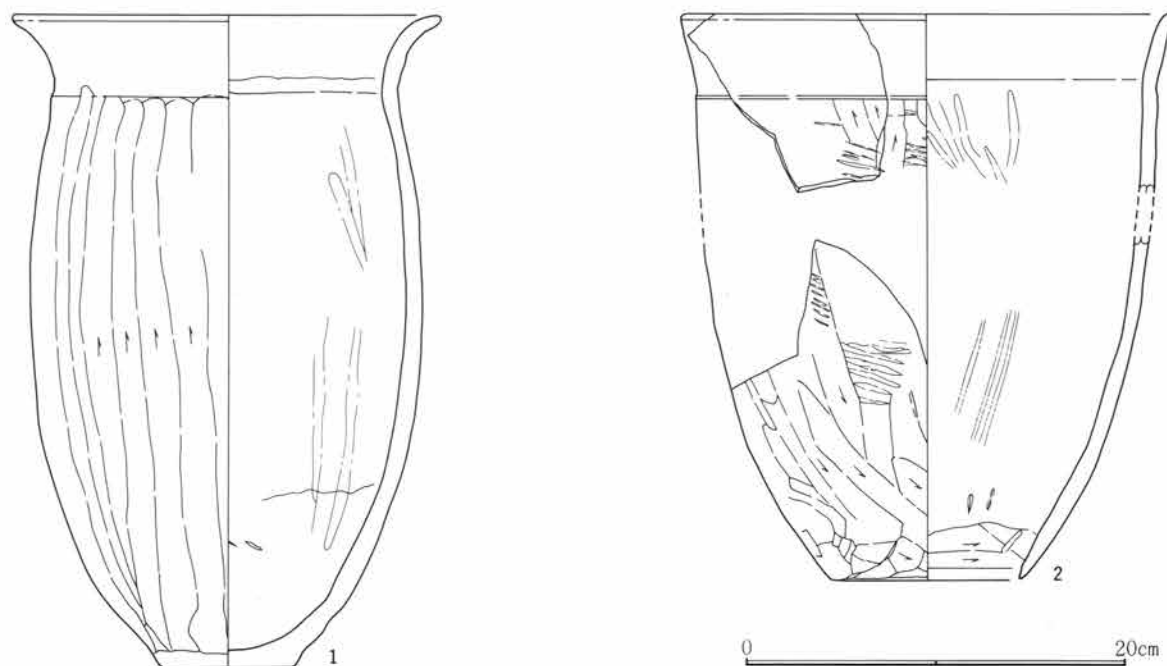
位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 両袖とも多くのロームを使い造られており、袖石は使われていなかったようである。燃焼部付近より多くの焼土粒が出土した。一部に天井部に使われていたと思われる焼土ブロックも確認された。

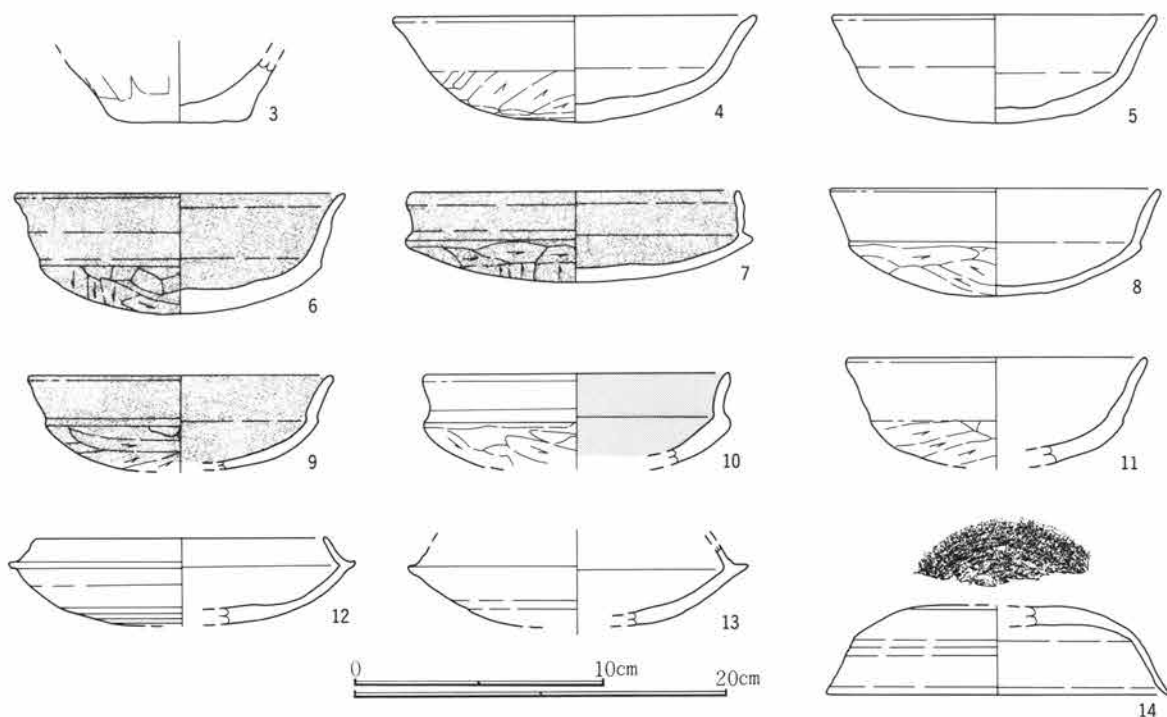
規模 両袖方向90cm、煙道方向78cmである。



第74図 111号住居跡竈実測図



第75図 111号住居跡出土遺物実測図(1)



第76図 111号住居跡出土遺物実測図(2)

111号住居跡出土遺物観察表

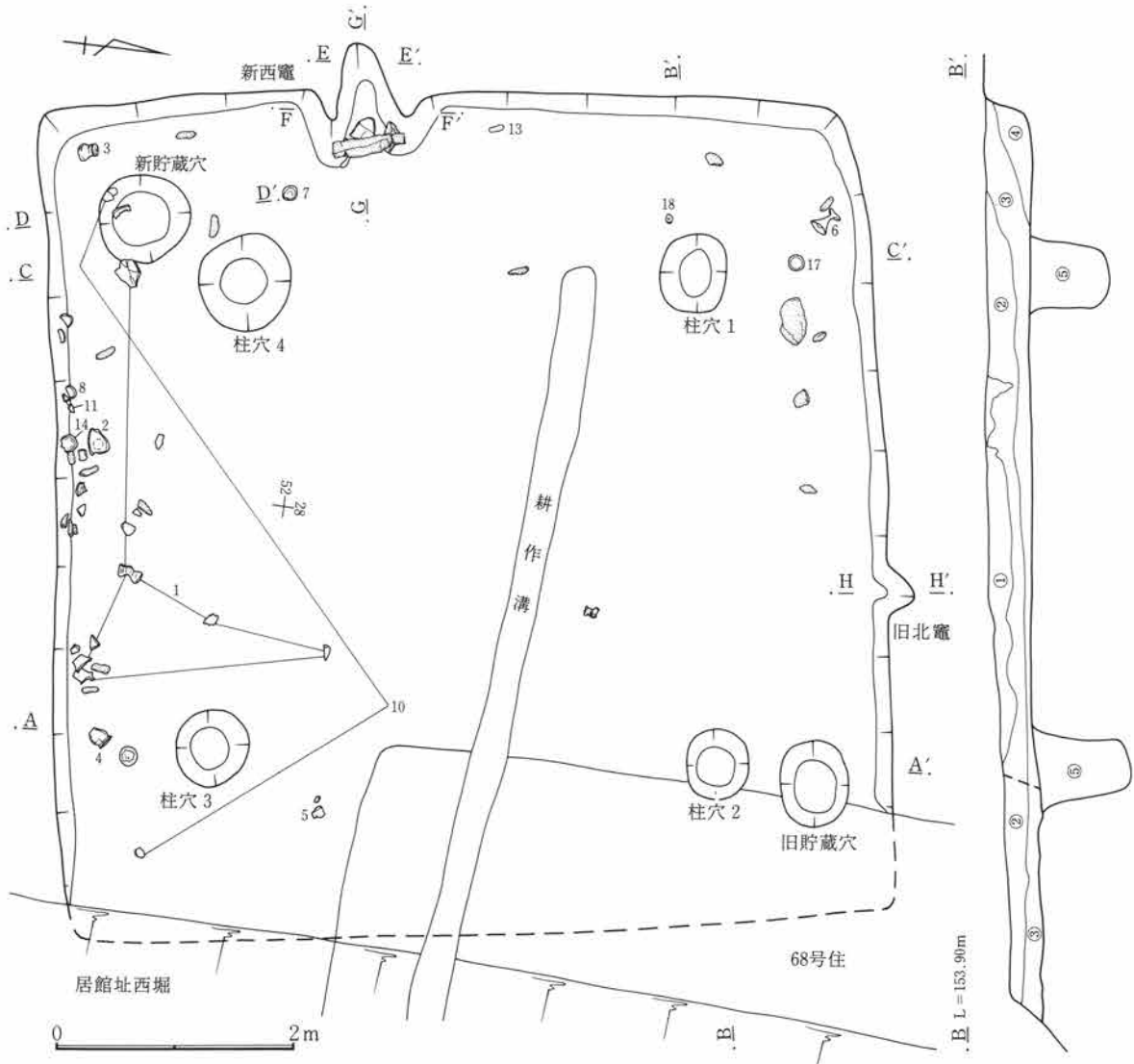
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
75-1 47	土師器 甕	貯穴内-7 床面+5 1/2残存	口(22.2) 高 35.4 底(6.8)	①粗、3~5mmの長石と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色・一部黒褐色	底面ヘラ削り。胴外面弱いヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデにより器表面密。
75-2	土師器 甕	竈内+10 床面-4 破片	口(25.8) 高(30.0) 底(10.0)	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。胴部内側下部横方向ヘラ削り。内面ていねいなナデ。
76-3	土師器 甕	床面+2 底部完形	底 7.3	①粗、2~3mmの長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。内面ていねいなナデ。外面に多くの土が付着。
76-4 47	土師器 坏	床面-3 1/2残存	口 14.6 高 4.2 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質③橙色	底面ていねいなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
76-5 47	土師器 坏	床面+7 1/2残存	口 12.8 高 4.2 底 丸底	①粗、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面全体の表面剝離のため、整形不明。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
76-6 47	土師器 坏	貯穴内-7 床面直上 1/2残存	口(13.2) 高 4.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面は幅が狭く短かいていねいなヘラ削り。一部ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。
76-7 48	土師器 坏	床面-11 1/2残存	口 13.0 高 3.6 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面幅広く長いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は鋭く明瞭である。内側内面黒漆か。
76-8 48	土師器 坏	床面+9 1/2残存	口(13.1) 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削りで砂粒が目立ち、器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
76-9 48	土師器 坏	竈内+10 床面+4 1/2残存	口(12.2) 高 - 底 -	①密、1mm以下の砂粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質③橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
76-10 48	土師器 坏	床面+2 破片	口(12.2) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③内面吸炭による黒色・外面橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面を密にし吸炭。炭素は、一部断面にも及ぶ。底部の器肉が厚い。
76-11 48	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(12.0) 高 - 底 -	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削りであるが、器表面の砂粒は目立たない。口縁部ナデ。内面ていねいなナデ。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
76-12	須恵器 環	覆土 残存	口(11.5) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底部中央回転ヘラ削り。底部周辺回転ナデ。口縁部～底部内面回転ナデ。稜は明瞭で端部鋭利。
76-13	須恵器 環	床面+12 破片	口— 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③表面灰色・断面の一部にふい橙色	底部中央回転ヘラ削り。底部周辺回転ナデ。受部は鋭利。
76-14	須恵器 蓋	床面+3 破片	摘— 高— 口(13.6)	①密、1～3mmの砂粒を少量含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井中央部回転ヘラ削り。口縁部横ナデ。稜は退化し明瞭でない。口縁部は器肉は薄い。

150号住居跡 (第77～82図、図版12・13・48・49・71)

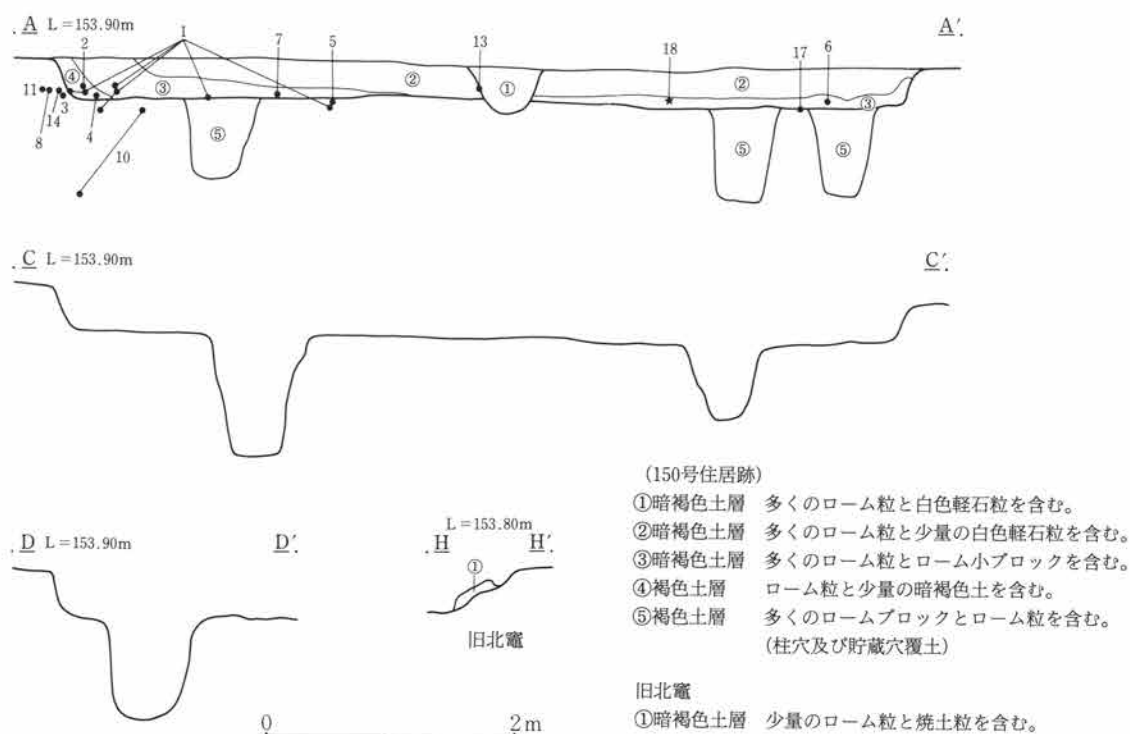
位置 本住居跡は、第4次調査区北端にあり、53-28・29グリッドに位置する。

概要 本住居は館の堀により南東の一部を掘り取られ、また東西方向に走る耕作溝により中央部を床面下まで掘り込まれていた。さらに北東部で東側に位置する同じ古墳時代の68号住居と重複している。両住



第77図 150号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第78図 150号住居跡(2)・旧北竈実測図

居の新旧関係は明確に確認できなかったが、68号住居が古いものと思われる。床面の高さは両住居ともほぼ同じである。竈が西壁と北壁で2基確認され、北側が旧竈で西側が新竈である。旧竈は北壁東寄りに造られていたが、掘り込まれた壁面に僅かに痕跡を留めているだけで、床面上に位置する両袖部や燃焼部はすべて取り外されて残っていなかった。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は配置が少し歪んでいるが、4本確認された。貯蔵穴が新竈の左側と旧竈の右側にそれぞれ掘られていた。

規模 東西推定7.0m、南北6.9mである。壁高は残りの良い南壁部分で42cmである。柱穴1は径59cm深さ66cm、柱穴2は径55cm深さ78cm、柱穴3は径58cm深さ58cm、柱穴4は径78cm深さ96cmである。新貯蔵穴は径76cm深さ76cm、旧貯蔵穴は径68cm深さ73cmでいずれもほぼ円形を呈する。

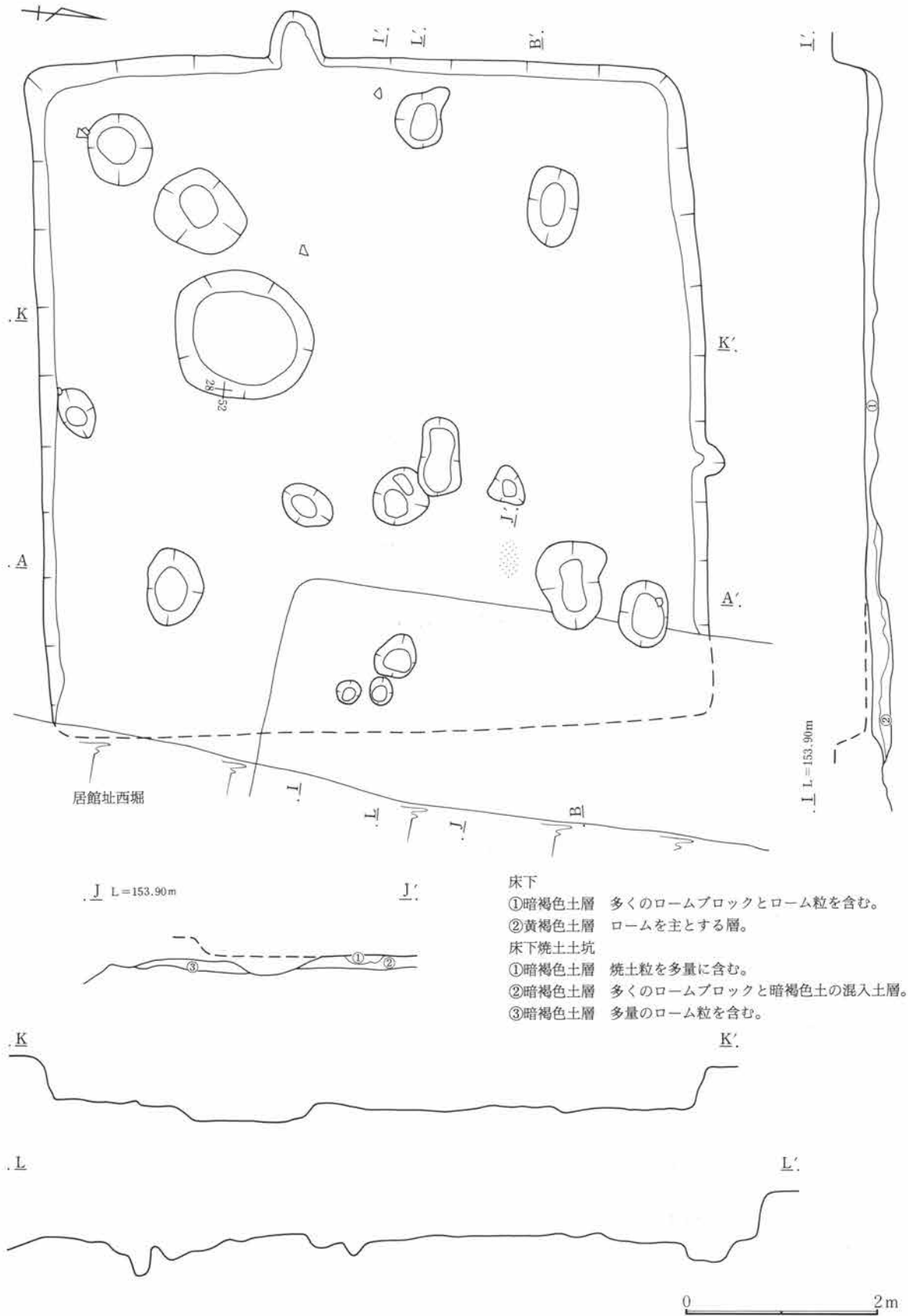
遺物 南壁面に近い床面上を中心に土師器の甕や坏が多く出土し、紡錘車も柱穴1近くから出土している。

床下 床下より土坑をはじめとした小穴が多く確認された。

(新西竈)

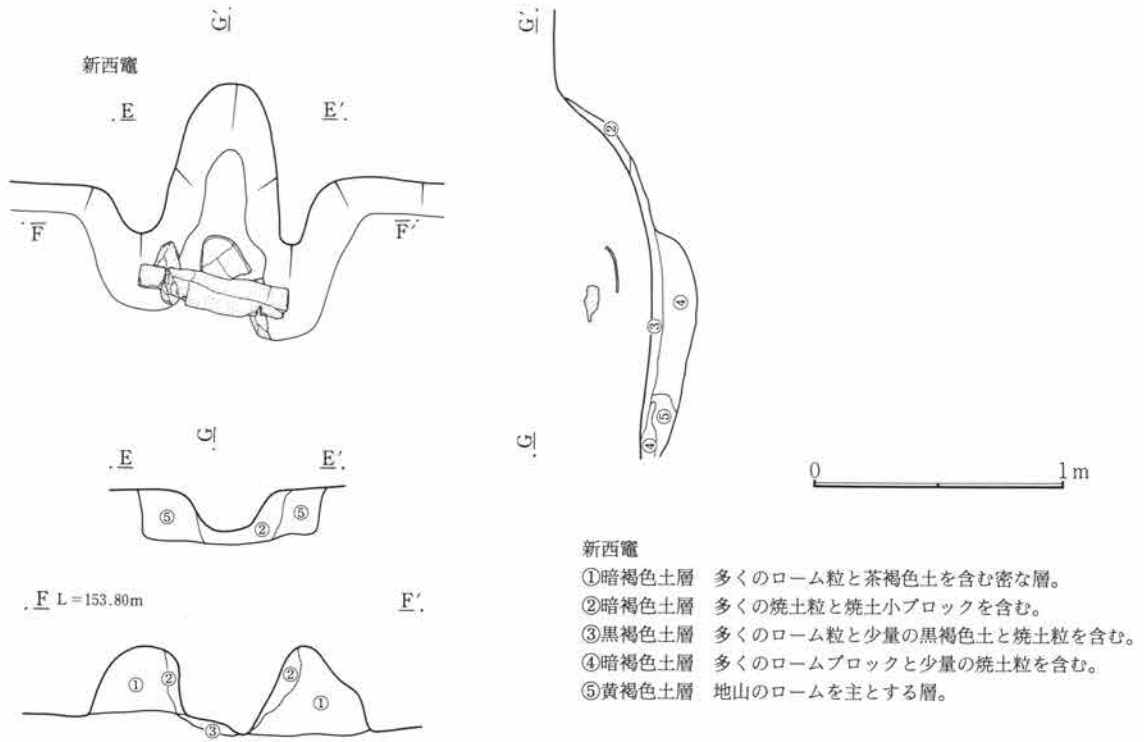
概要 竈が住居西壁の南寄りに造られている珍しい住居である。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。残りが良く両袖の石とその上に載る天井石が割れて少し崩れ落ちてはいたが、ほぼ使用時の状態に近い形で検出された。竈内より他に石は出土していないため、他の部分はロームを用いて造られていたものと思われる。

規模 両袖方向70cm、煙道方向102cmである。

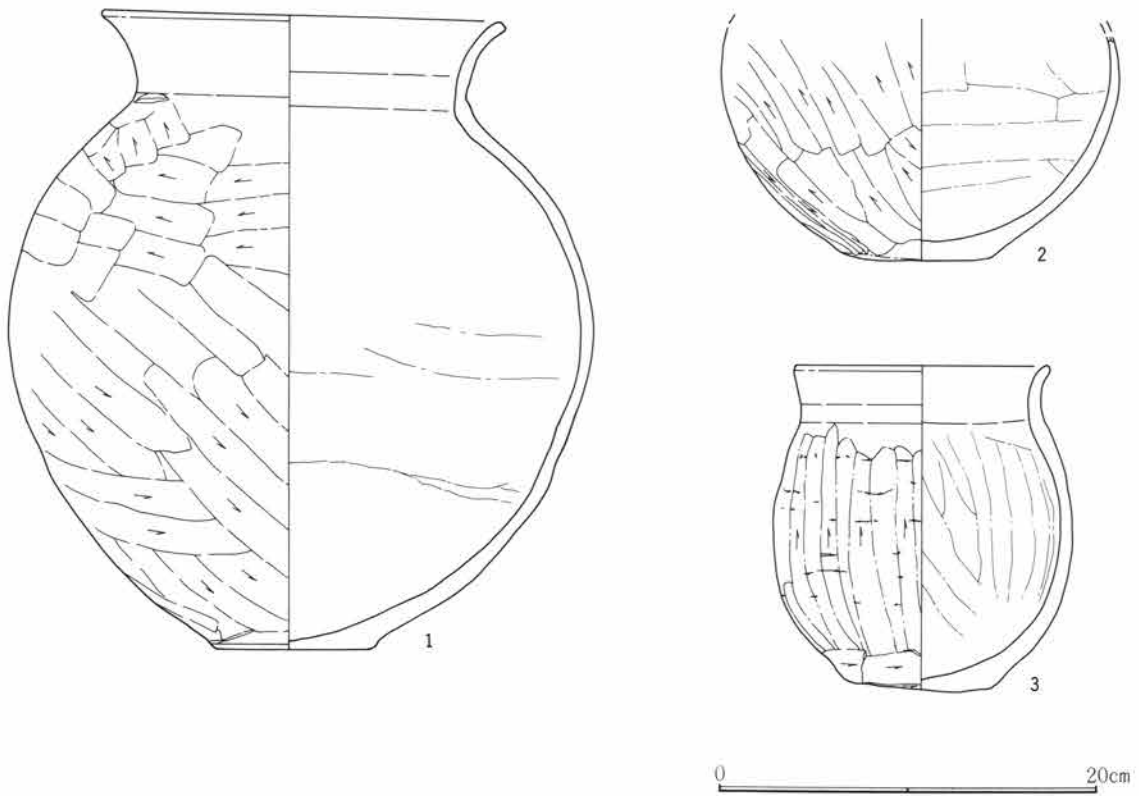


第79図 150号住居跡床下実測図

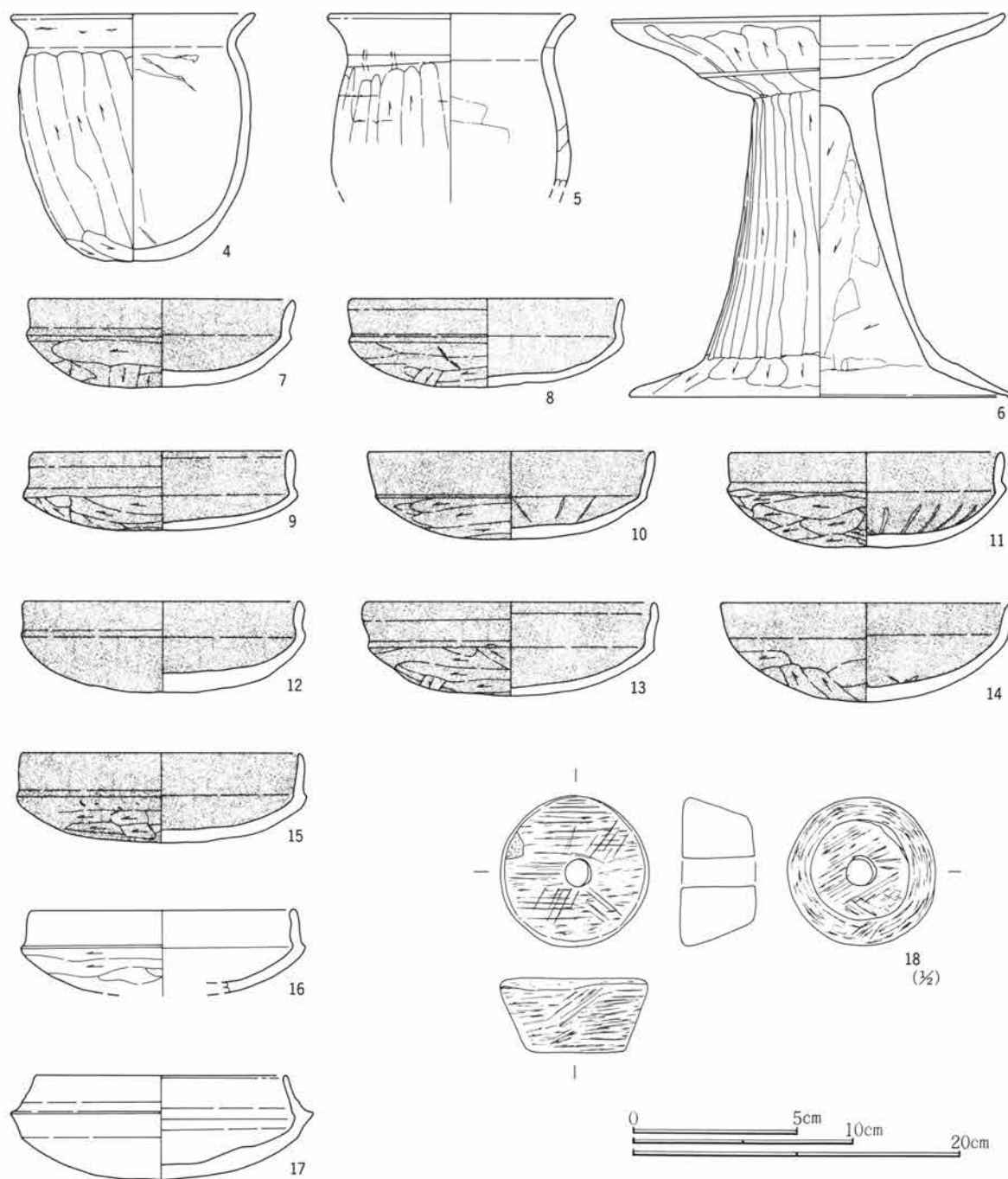
第3章 古墳時代の遺構と遺物



第80図 150号住居跡新西竈実測図



第81図 150号住居跡出土遺物実測図(1)



第82図 150号住居跡出土遺物実測図(2)

150号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
81-1 48	土 節器 壺	床面直上 口~胴部 底部完形	口(20.8) 高 33.6 底 7.8	①粗、1~3mmの砂粒と長石粒を多く、片岩粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胴外面の緻密なへら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面はナデにより器表面密。吸炭による黒斑は、ほとんど認められない。
81-2 48	土 節器 壺	床面+13 胴下半部 底部完形	口 — 高 — 底 5.0	①粗、1mm以上の砂粒を多く、3mm前後の砂粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部外側ナデ。胴部外側へら削り。砂粒は多いが小さいため粗れていない。内面はナデにより器表面密。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
81-3 48	土器 小型甕	床面+6 完形	口 13.4 高 17.2 底 7.6	①粗、1~2mmの長石粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	外面底~胴下半へら削り。胴縦方向ナデ。口縁部横ナデ。外面胴部に多くの輪積痕が残る。内側の胴~底部ナデ。器表面密。
82-4 48	土器 小型甕	床面+6 完形	口 14.9 高 15.1 底 6.5	①粗、1mm以下の砂粒を多く3mm前後の長石粒と片岩を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部へら削り。胴外側へら削りにより器表面が粗い。口縁部横ナデ。内側の底~胴部でいねいなナデにより器表面密。
82-5	土器 小型甕	床面直上 %残存	口(14.8) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の石英と長石粒を多く、3mm前後の片岩粒を少量含む②酸化焰、硬質③鈍い橙色	胴部外側へら削り。器表面は粗れている。一部に輪積痕が残る。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
82-6 48	土器 高坏	床面直上 坏部% 脚部完形	口(18.0) 高 17.5 底 17.4	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面へら削りとへらナデ。脚部内面へら削りで輪積痕を削りとしている。坏部外面へら削り。内面ナデ。坏底部の径が小さい。
82-7 48	土器 坏	床面+7 ほぼ完形	口 12.2 高 4.0 底 丸底	①密、赤色粒をわずかに含むが砂粒は少ない。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底部外側へら削り。器表面に砂粒が少なく粗れは少ない。口縁部横ナデ。内側底部でいねいなナデにより器表面密。
82-8 48	土器 坏	床面+10 %残存	口 12.5 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面にぶい橙色	底部外側へら削り、周辺の一部ナデ。口縁部横ナデ。底部内側でいねいなナデにより器表面密。稜は明瞭。
82-9 48	土器 坏	竈覆土 %残存	口(12.0) 高 3.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず、赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部外側幅の広いへら削り。口縁部横ナデ。底部内側はナデにより器表面密。稜は明瞭である。器肉が全体に薄い。
82-10 49	土器 坏	新野蔵穴 内+72 %残存	口(13.2) 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底部外側へら削り。器表面の砂粒の動きはほとんどなく密。口縁部横ナデ。内面横ナデで器表面密。へらの工具痕あり。内面に黒漆か。
82-11 49	土器 坏	床面+11 %残存	口(12.4) 高 4.3 底 丸底	①密、少量の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底部外側幅の広く長いへら削り。口縁部横ナデ。底部内側ナデで器表面密。多くの放射状の磨きあり。
82-12	土器 坏	掘り方覆土 口縁部破片 底部%残存	口(12.8) 高 4.1 底 丸底	①密、1mm内外の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部外側はへら削りであるが、表面全体が磨耗により削りの単位不明。口縁部の短い坏である。
82-13 49	土器 坏	床面+11 %残存	口 13.4 高 4.3 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明赤褐色、一部黒褐色	底部外側へら削り。砂粒の移動が多く認められる。口縁部横ナデ。内側底部ナデにより器表面密。
82-14 49	土器 坏	床面+11 %残存	口 13.4 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面黒褐色・外面と断面橙色	底部外面へら削りであるが、磨耗がはげしく削りの単位不明な部分多い。口縁部横ナデ。底部内側ナデで器表面密。底部内側は黒漆か。
82-15	土器 坏	覆土 %残存	口(12.8) 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底部外面へら削り。砂粒の動きは少なく器表面は粗れていない。口縁部横ナデ。底部内側ナデにより器表面密。
82-16	土器 坏	竈覆土 %残存	口(12.2) 高 — 底 —	①密、赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。
82-17 49	須恵器 坏	床面-4 完形	口 11.5 高 4.7 底 丸底	①密、5mm前後の砂粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	底面のほぼ全体右回転へら削り。受部は端部が丸い。口唇部は丸く平面は持たない。
82-18 71	石製品 紡錘車	床面直上 完形	径 4.6/3.0 孔径 0.9 厚 2.2 重 71.2		表面全体に目の細かい削り痕が残る。仕上げ砥に近い砥石で仕上げているものと思われる。蚊紋岩。

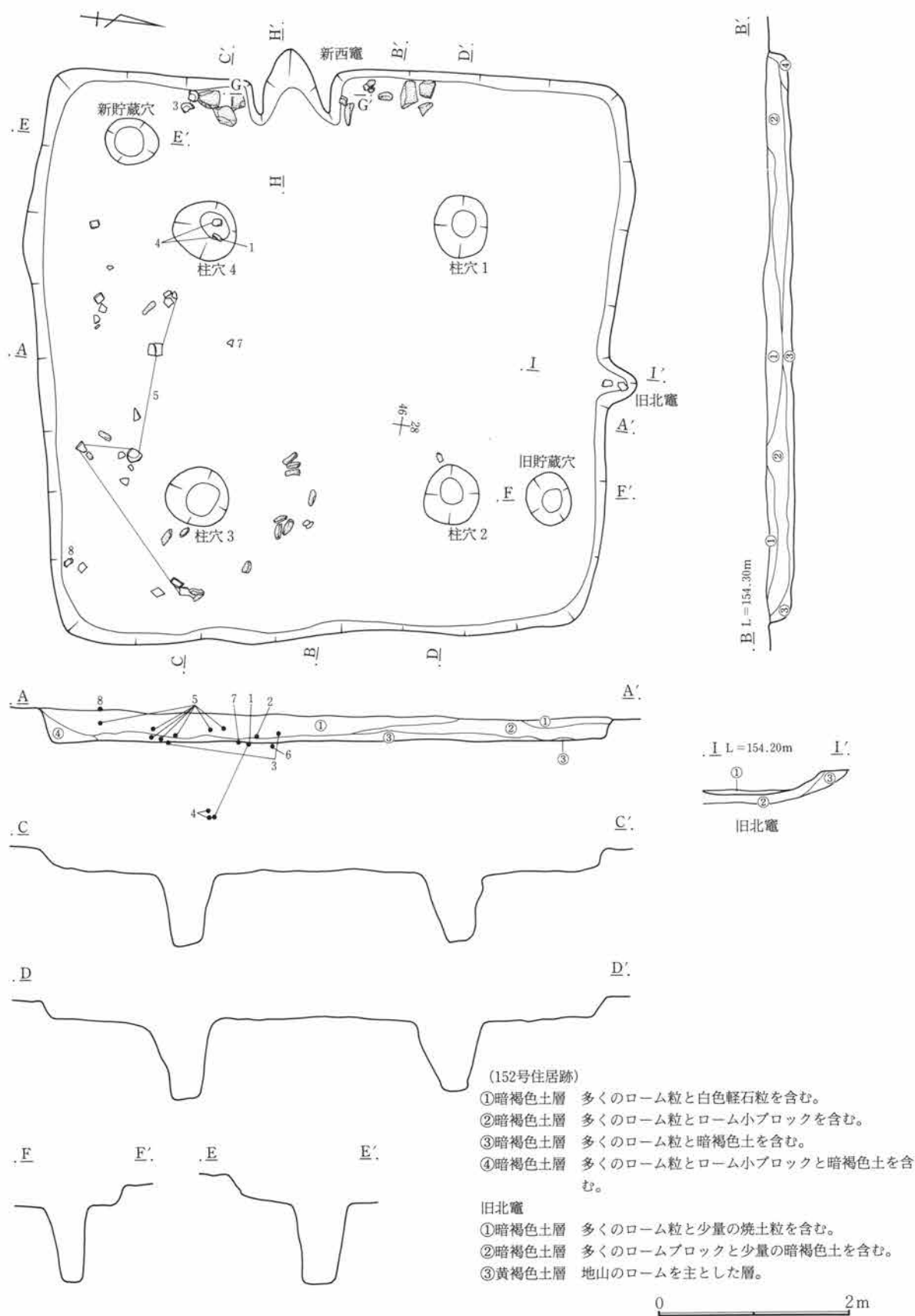
152号住居跡 (第83~87図、図版13・14・49)

位置 本住居跡は、第4次調査区北端にあり、46・47-28・29グリッドに位置する。

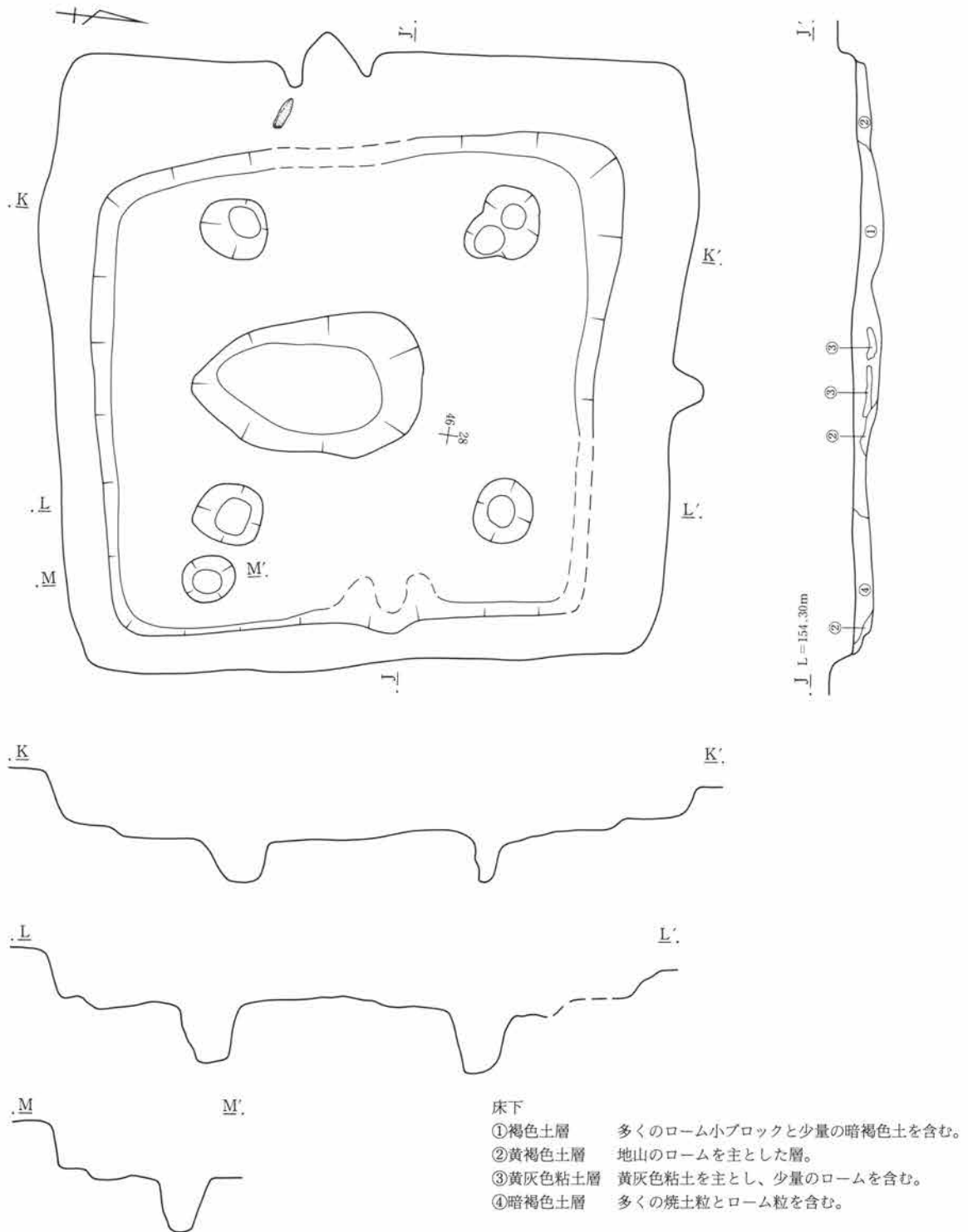
概要 本住居は拡張の考えられる住居である。竈は北→西壁に造り替えられているが、拡張以前の竈として東壁にも造られていたようである。そのため拡張以前の段階を第1段階、拡張され北壁に竈の造られた段階を第2段階、北壁の竈を壊して西壁に竈を造った段階を第3段階と呼称して説明を行う。

《第1段階》

概要 第2・3段階の住居は、第1段階の住居の壁面や竈を壊し、全面にわたり拡張したものと思われる。



第83図 152号住居跡・旧北竈実測図



第84図 拡張以前に想定される152号住居跡実測図

そのため第2・3段階の調査終了後、床下の調査により第1段階の住居の存在が想定された。その根拠は、①住居の内側に一回り小さな掘り込みが認められること ②東壁中央部に大量の焼土粒が出土し、煙道と想定される部分の壁面が掘り込まれていること ③竈の想定される東壁面の南側(右側)に貯蔵穴と思われる掘り込みが認められること等である。規模は明確でないが東西方向4.6m、南北方向

4.8mが想定される。壁高は不明である。柱穴は第2・3段階と区別できなかった。貯蔵穴は径52cm深さ73cmであった。この段階に属する遺物は不明である。

《第2・3段階》

概要 第1段階の住居を壊し拡張して造られている。竈は始めに北壁に造られ床面上に位置する部分はすべて取り壊されて、西壁に新たに築かれていた。壁面に残された煙道部から2個の土師器甕の破片が、またその部分と床面に位置する燃烧下部から少量の焼土粒が確認された。

構造 柱穴が4本確認された。貯蔵穴が新西竈の左側と旧北竈の右側に掘られていたようである。壁溝は確認できなかった。

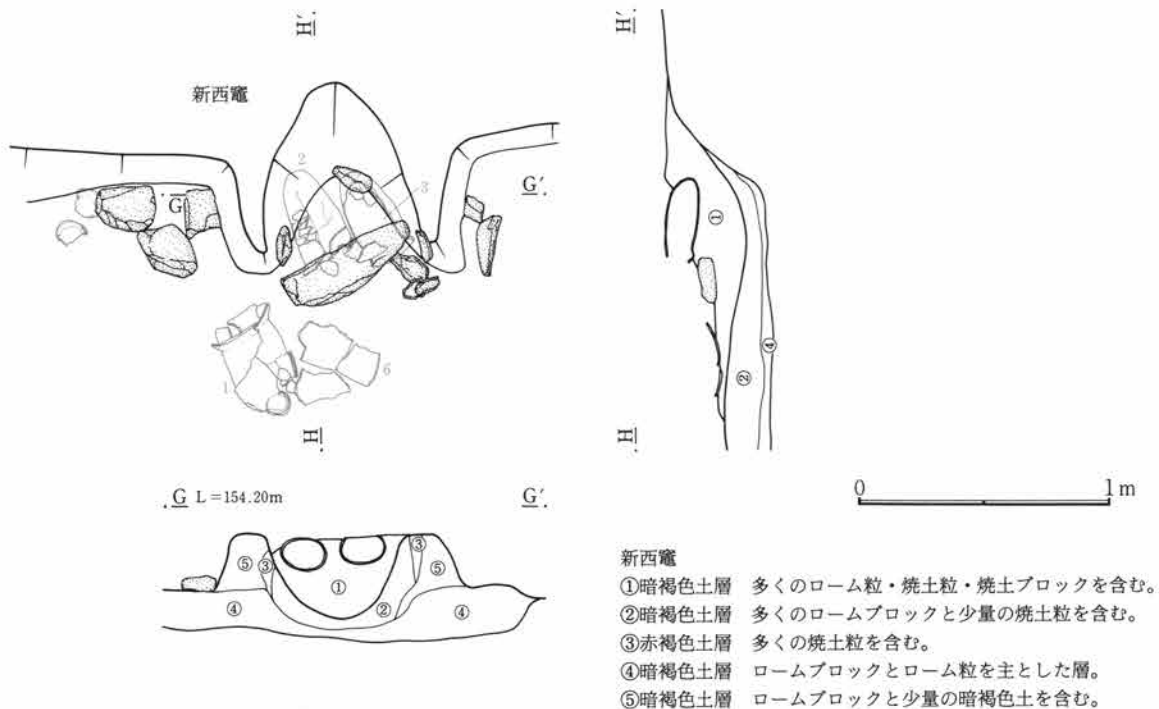
規模 東西5.8m、南北6.0mである。壁高は残りの良い南壁部分で37cmである。柱穴1は径55cm深さ73cm、柱穴2は径58cm深さ79cm、柱穴3は径62cm深さ73cm、柱穴4は径68cm深さ73cmである。

遺物 竈内より2個、焚口部より1個のほぼ完形の土師器甕が出土している。また住居南側の床面付近より少量の土師器の坏とこも編み石が出土した。

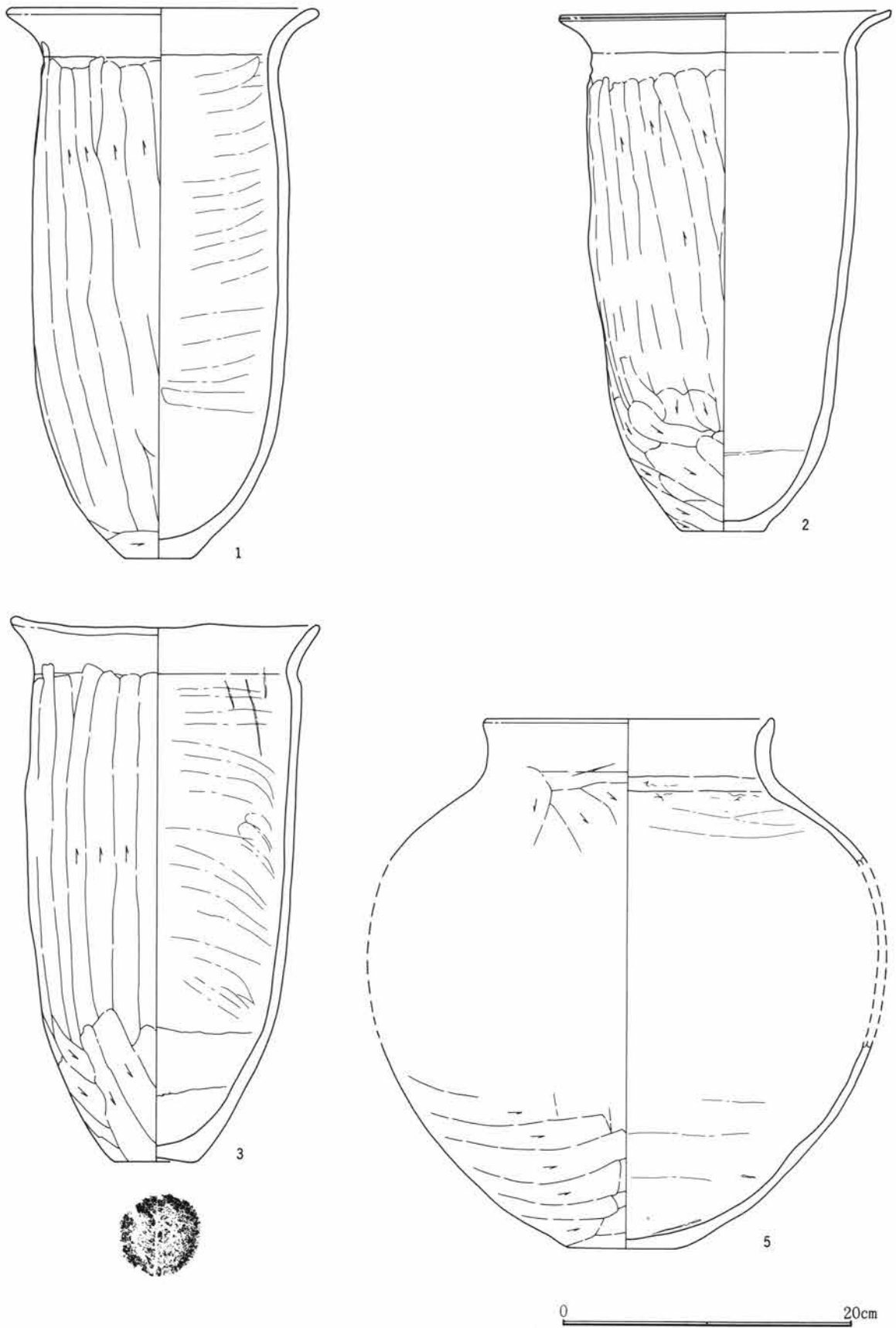
(新西竈)

概要 150号住居同様に、住居西壁の南寄りに造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。残りが良く両袖の石がほぼ使用時の状態で残り、その上に載る天井石が焚口部分に落ちていた。この天井石の上に2個のほぼ完形の甕がもたれ掛かるように倒れていた。左袖の外側には平らで大きな3個の石が壁面に向かうコの字形に配置されていた。右袖部から外側にかけて5個の細長い石が出土した。竈内に支脚石は残されていなかった。このように使用時の状態を良好に残した竈である。焚口部分以外の他の部分はロームを用いて造られていたものと思われる。竈内より多くの焼土粒が出土した。

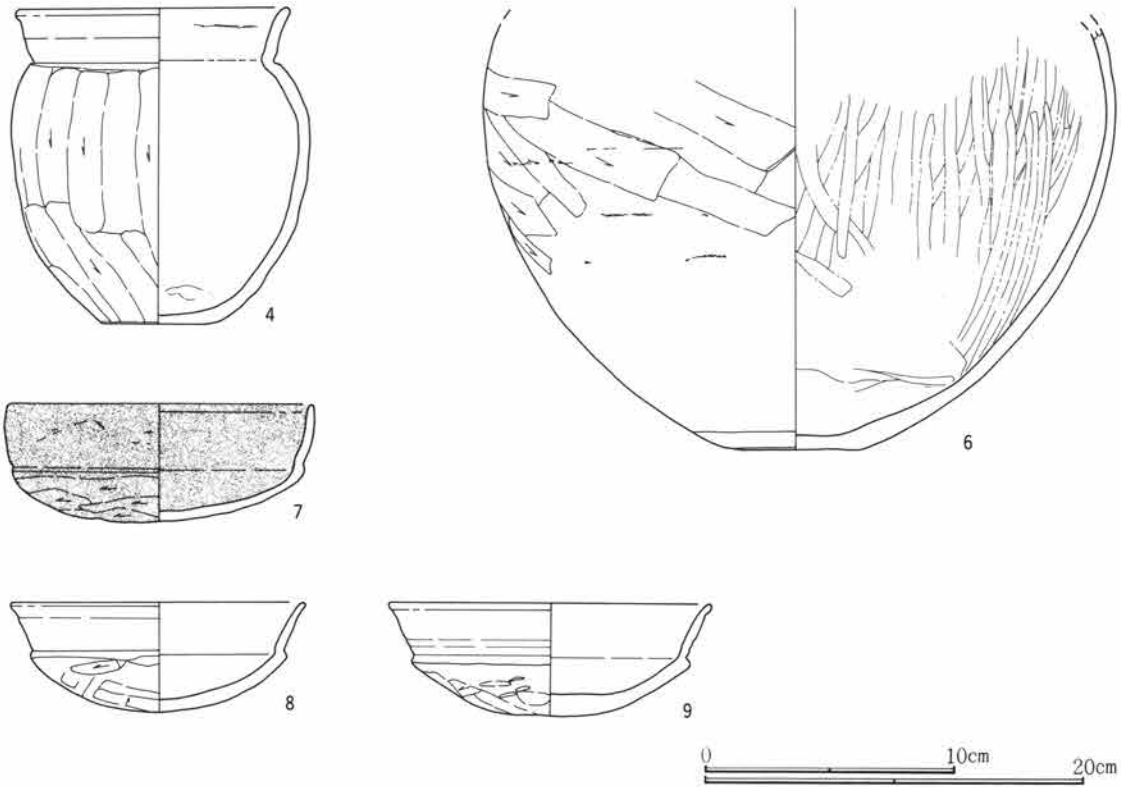
規模 両袖方向98cm、煙道方向75cmである。



第85図 152号住居跡新西竈実測図



第86図 152号住居跡出土遺物実測図(1)



第87図 152号住居跡出土遺物実測図(2)

152号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
86-1 49	土 師 器 甕	新西竈直上 ビット-77 %残存	口 20.8 高 37.5 底 4.3	①粗、3~5mmの多くの片岩粒 と長石粒を含む。 ②酸化焰、 硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ナデ。胴外面へら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナ デ。内面ナデにより器表面密。大量の大きな砂粒を含む。
86-2 49	土 師 器 甕	竈内+6 %残存	口 22.5 高 35.1 底 5.7	①粗、3~5mmの多くの片岩粒 と長石粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	底面ナデ。胴外面へら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナ デ。内面ナデにより器表面密。
86-3 49	土 師 器 甕	新西竈直上 胴部%残存 他完形	口 20.8 高 37.0 底 5.6	①粗、3~5mmの片岩粒と長石 粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。胴外面弱いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデに より器表面密。表面全体に少量の焼けた土が付着している。
87-4 49	土 師 器 小型 甕	ビット内- 77 ほぼ完形	口 14.3 高 16.7 底 6.0	①粗、1~3mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、軟質 ③赤褐色	外面へら削りにより器面が粗い。口縁部と内面ナデでやや密。 底部へら削り後ナデ。
86-5	土 師 器 壺	床面+5 %残存	口(20.0) 高(36.0) 底 8.0	①粗、5~8mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	外側全面へら削り。内面ナデ。器肉は均一でいいいに整形。
87-6 49	土 師 器 壺	新西竈内- 4 %残存	口 - 高 - 底 7.0	①粗、5~7mmの片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	外側全面へら削り。わずかに輪積痕を残す。内面下から上方向 ナデ。底部内側に胴部との接合痕あり。
87-7 49	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.0 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	口縁部が深い。底部手持へら削り。口縁部横ナデ。 内面横ナデ。口縁部中央がわずかに内傾する。
87-8 49	土 師 器 坏	床面+34 %残存	口(11.8) 高 4.3 底 丸底	①密、粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③黄褐色	底部へら削り。口縁部横ナデ。内面いいいなナデ。 明瞭な稜を持つ。
87-9	土 師 器 坏	覆土 %残存	口(12.8) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部中央の器肉が厚い。底部へら削り。口縁部横ナデ。 内面いいいなナデ。明瞭な稜を持つ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

153号住居跡 (第88・89図、図版14・49・70)

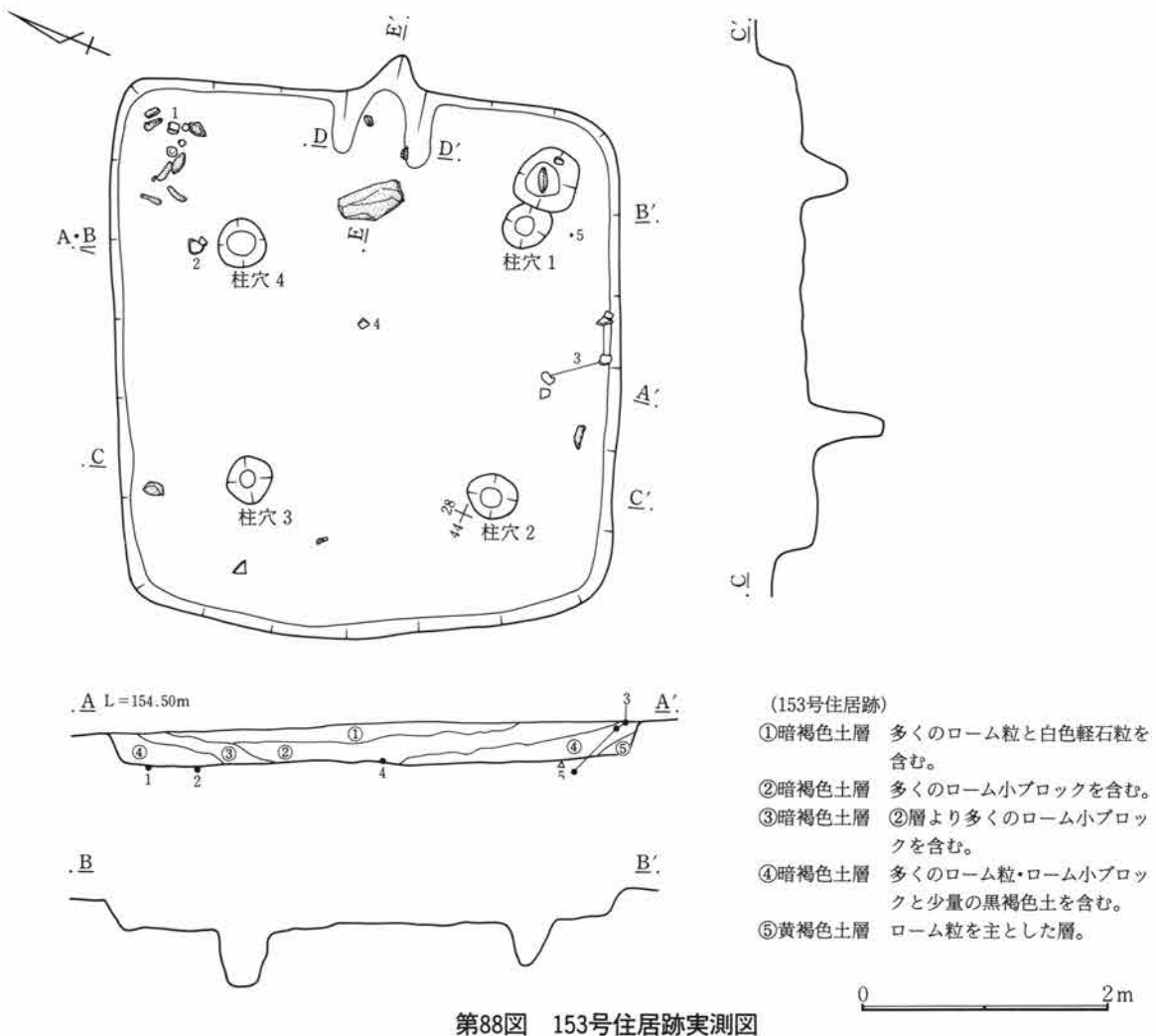
位置 本住居跡は、第4次調査区にあり、45-29グリッドに位置する。

概要 確認面から床面までが浅く、良好な状態で発掘できなかった。

構造 南東部分の床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で造られていた。柱穴が4本、貯蔵穴が竈右側に確認された。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西4.36m、南北4.06mである。壁高は残りの良い南壁面部分で34cmである。柱穴1は径38cm深さ35cm、柱穴2は径40cm深さ37cm、柱穴3は径38cm深さ67cm、柱穴4は径42cm深さ50cmである。貯蔵穴は径46cm深さ43cmである。

遺物 南壁に近い床面上より土師器の甕や坏が出土し、北東コーナー部分からこも編み石が多く出土した。



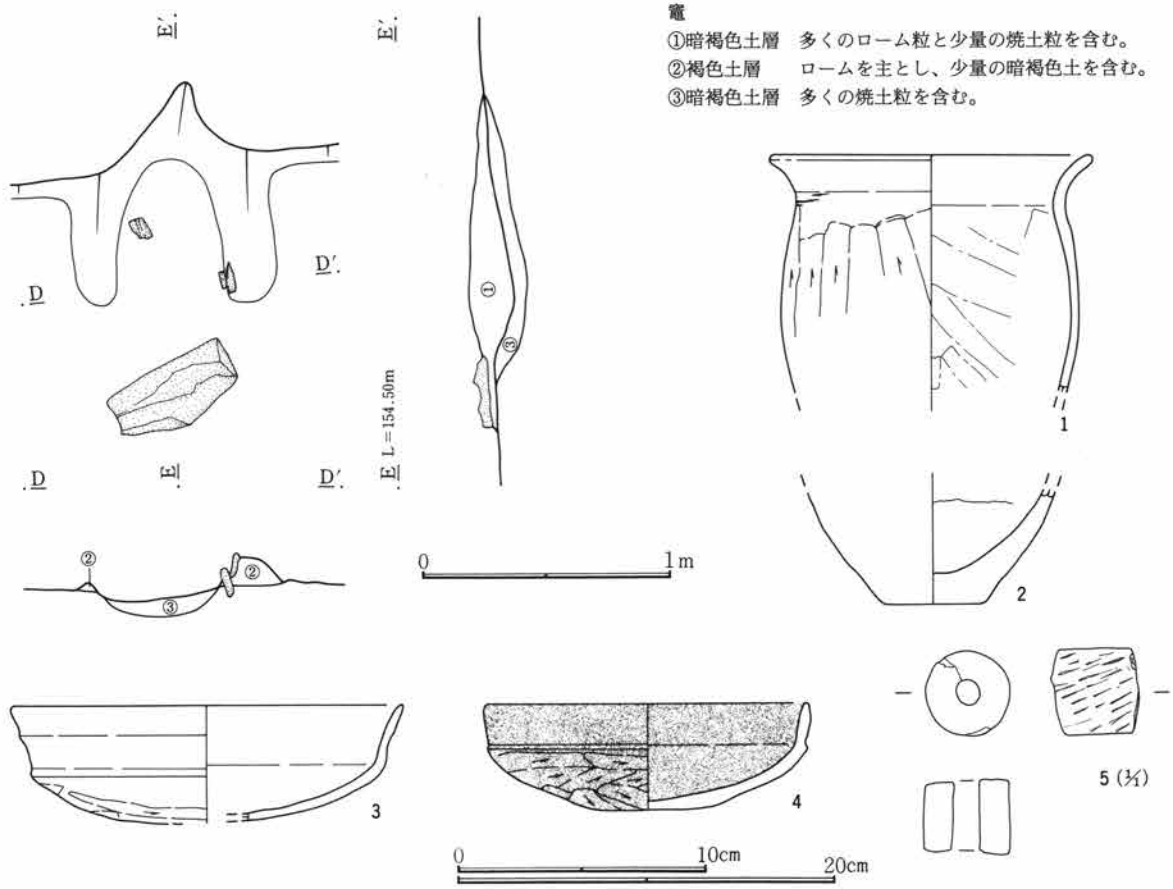
第88図 153号住居跡実測図

(竈)

位置 住居東壁に造られている。袖と燃焼部の多くは床面上に位置する。

構造 多くの部分が壊されており残りが悪い。焚口部分の床面上から天井石に使われていた大きな石が出土した。他に竈内より小さな石が1個出土しているが、袖石は残っていなかった。燃焼部床面付近より多くの焼土粒が出土した。

規模 両袖方向88cm、煙道方向90cmである。



第89図 153号住居跡竈・出土遺物実測図

153号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
89-1	土師器 甕	床面直上 1/2残存	口(16.4) 高— 底—	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外側ヘラ削りにより、砂粒が目立ち粗い。口縁部横ナデ。 胴部内側ナデにより器表面密。
89-2	土師器 甕	床面-4 胴下半1/2 底部完形	口— 高— 底 5.2	①粗、1mm前後の石英と長石粒 を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部ナデ。胴部はヘラ削りの痕跡を残すが、表面が剝離している ため削りの単位不明。内側ナデにより器表面密。
89-3 49	土師器 坏	床面-6 1/2残存	口 15.5 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部外側ヘラ削り。削り幅が広い。口縁部横ナデ。 底部内側ナデで器表面密。
89-4	土師器 坏	床面直上 破片	口(13.2) 高 4.2 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含むが、 砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部外側細長いヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。 内面ナデで器表面密。明瞭な稜を持つ。
89-5 70	石製品 臼玉	掘り方覆土	径 1.1 厚 1.2	孔径 0.3 重 2.7	側面荒砥削り。上下面に加工痕なし。滑石。

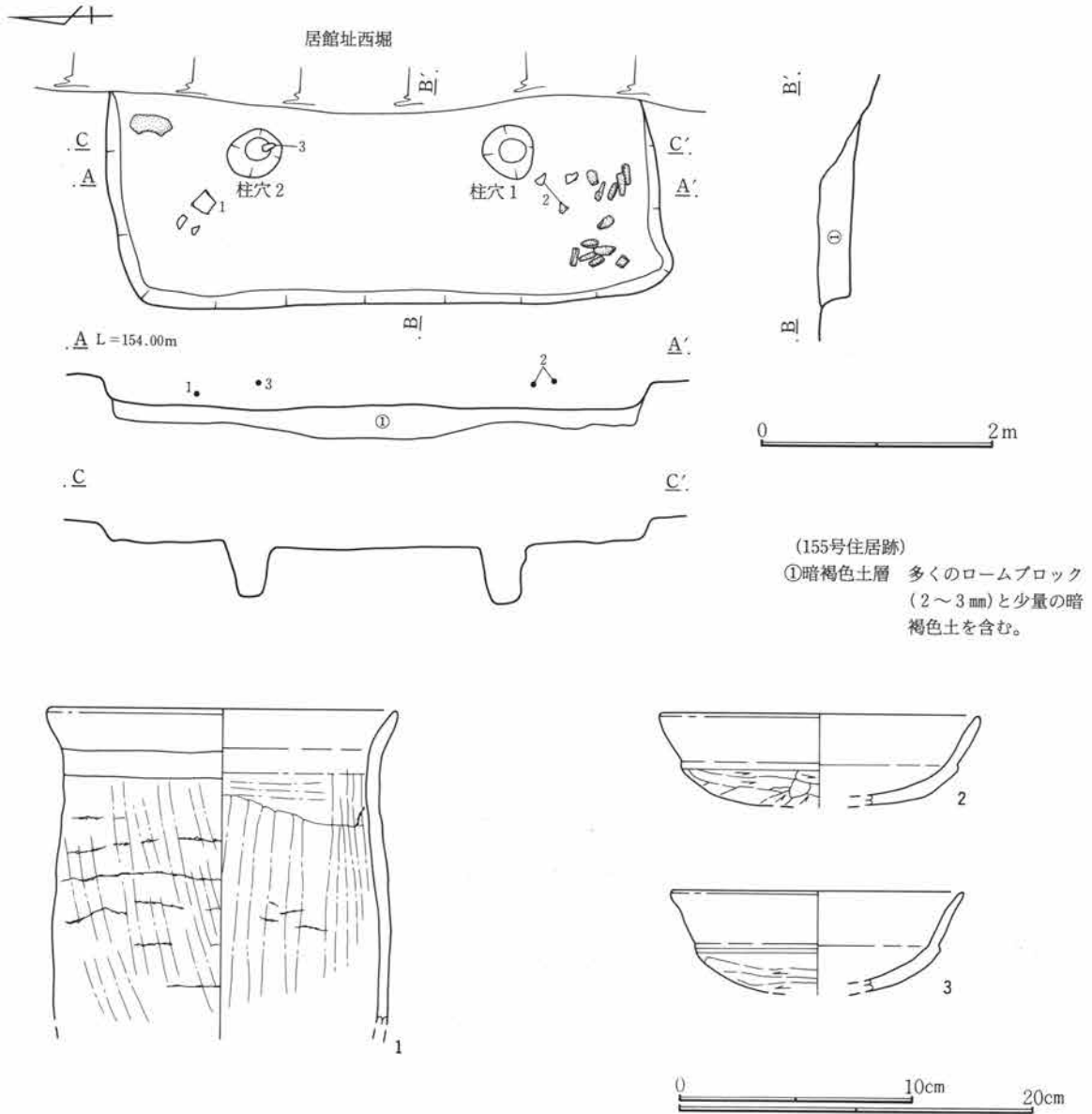
155号住居跡 (第90図、図版14・50)

位置 本住居跡は、第4次調査区北端にあり、52-29グリッドに位置する。

概要 本住居は館の堀により東側を掘り取られているため、住居西側部分のみの調査であり、竈や貯蔵穴等は不明である。調査できた範囲で2本の柱穴が確認された。規模は東西不明、南北4.6mである。壁高は西壁部分で25cmである。柱穴1は径45cm深さ48cm、柱穴2は径48cm深さ45cmである。

遺物 土師器の甕や坏と南西コーナーの床面より多くのこも編み石が出土した。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第90図 155号住居跡・出土遺物実測図

155号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
90-1	土 節 器 甕	床面+10 1/3残存	口(19.5) 高 — 底 —	①粗、3mm前後の長石と片岩を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面に明瞭な輪積痕。輪積後ナデ整形。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ整形で輪積痕なし。
90-2 50	土 節 器 坏	床面+20 1/3残存	口(13.5) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く、2mm前後の片岩を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	底部外面へら削り。器表面の砂粒は少なく粗くない。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は比較的明瞭である。
90-3	土 節 器 坏	床面+21 1/3残存	口(12.4) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部外側細長いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面は内外面とも密である。稜は明瞭である。

432号住居跡 (第91・92図、図版14・15・50)

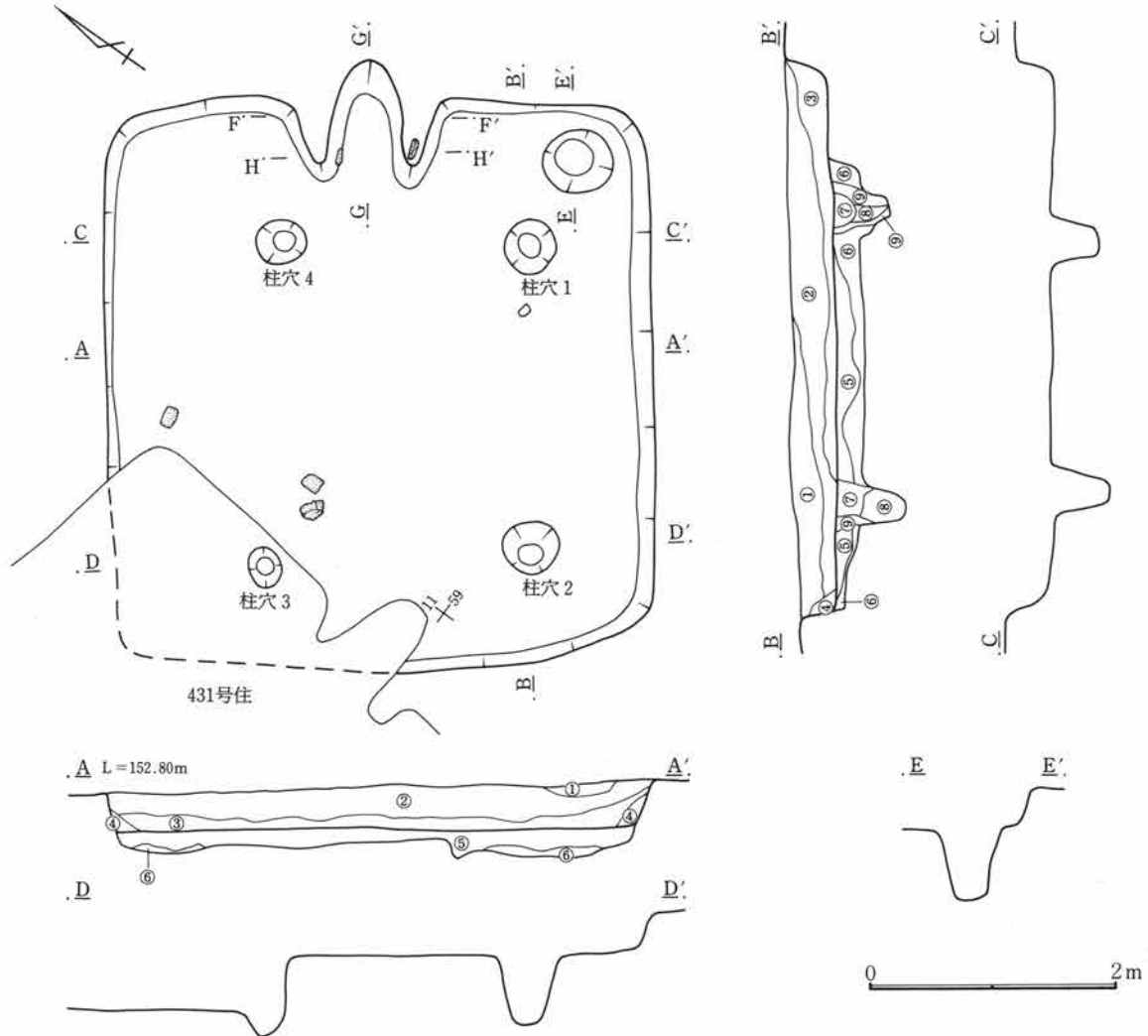
位置 本住居跡は、第7次調査区南西端部にあり、60-12グリッドに位置する。

概要 北西部で奈良時代の431号住居と重複しており、床面の高さは431号住居が約18cmほど低いため、その部分は深く掘り込まれている。竈が東壁中央部に掘られている。

構造 床面はロームを主とした土で固めてあり、少量の焼土粒が認められた。柱穴は4本確認されたが、431号住居と重複している北西側の1本は少しずれていた。貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西4.52m、南北4.42mである。壁高は残りの良い南壁面で40cmである。柱穴1は径45cm深さ42cm、柱穴2は径44cm深さ56cm、柱穴3は径33cm深さ66cm、柱穴4は径38cm深さ37cmである。貯蔵穴は径50cm深さ64cmでほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甕と坏が少量出土した。



(432号住居跡)

- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|---------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 | ⑥黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム小ブロックと白色軽石粒を少量含む。 | ⑦暗黄褐色土層 | 多くのローム粒と少量の暗褐色土を含む。 |
| ③暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑧暗黄褐色土層 | 多くのロームブロックを含む。 |
| ④暗黄褐色土層 | ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑨黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ⑤暗黄褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒と灰を含む。 | | |

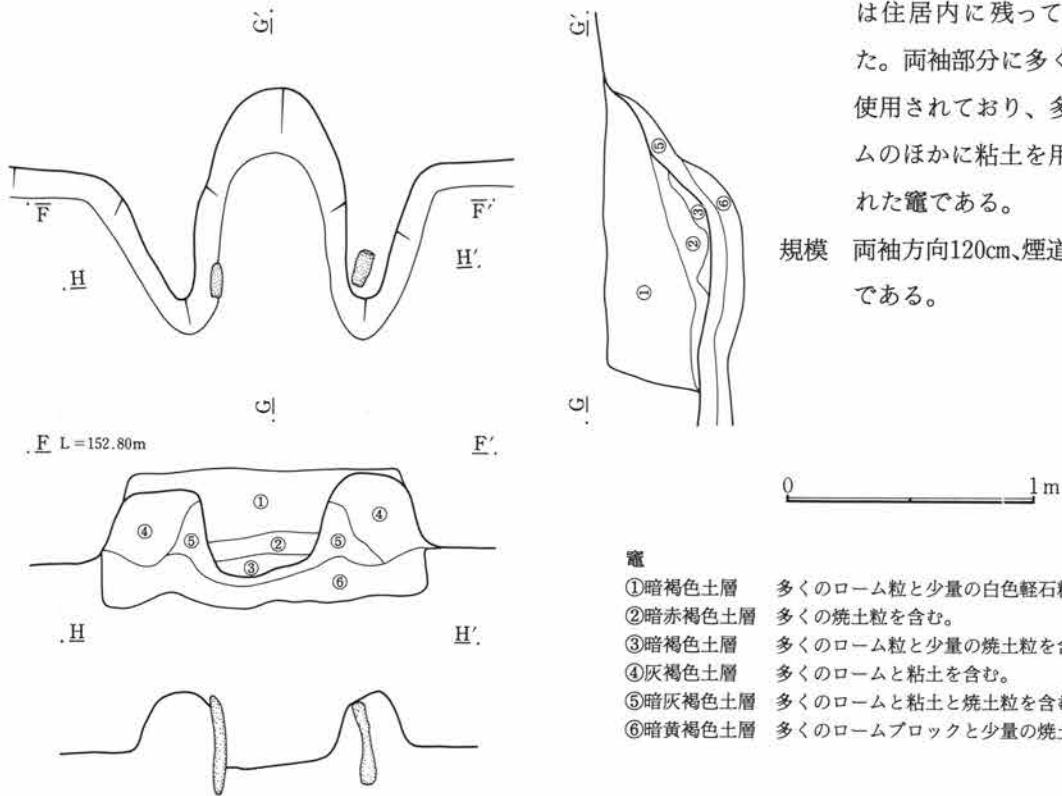
第91図 432号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(竈)

概要 住居東壁の中央部に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。焚口部に左右の袖石がほぼ使用時の状態を保って残っていた。天井石等は住居内に残っていなかった。両袖部分に多くの粘土が使用されており、多くのロームのほかに粘土を用いて造られた竈である。

規模 両袖方向120cm、煙道方向90cmである。



竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ④灰褐色土層 多くのロームと粘土を含む。
- ⑤暗灰褐色土層 多くのロームと粘土と焼土粒を含む。
- ⑥暗黄褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。

第92図 432号住居跡竈・出土遺物実測図

432号住居跡出土遺物観察表

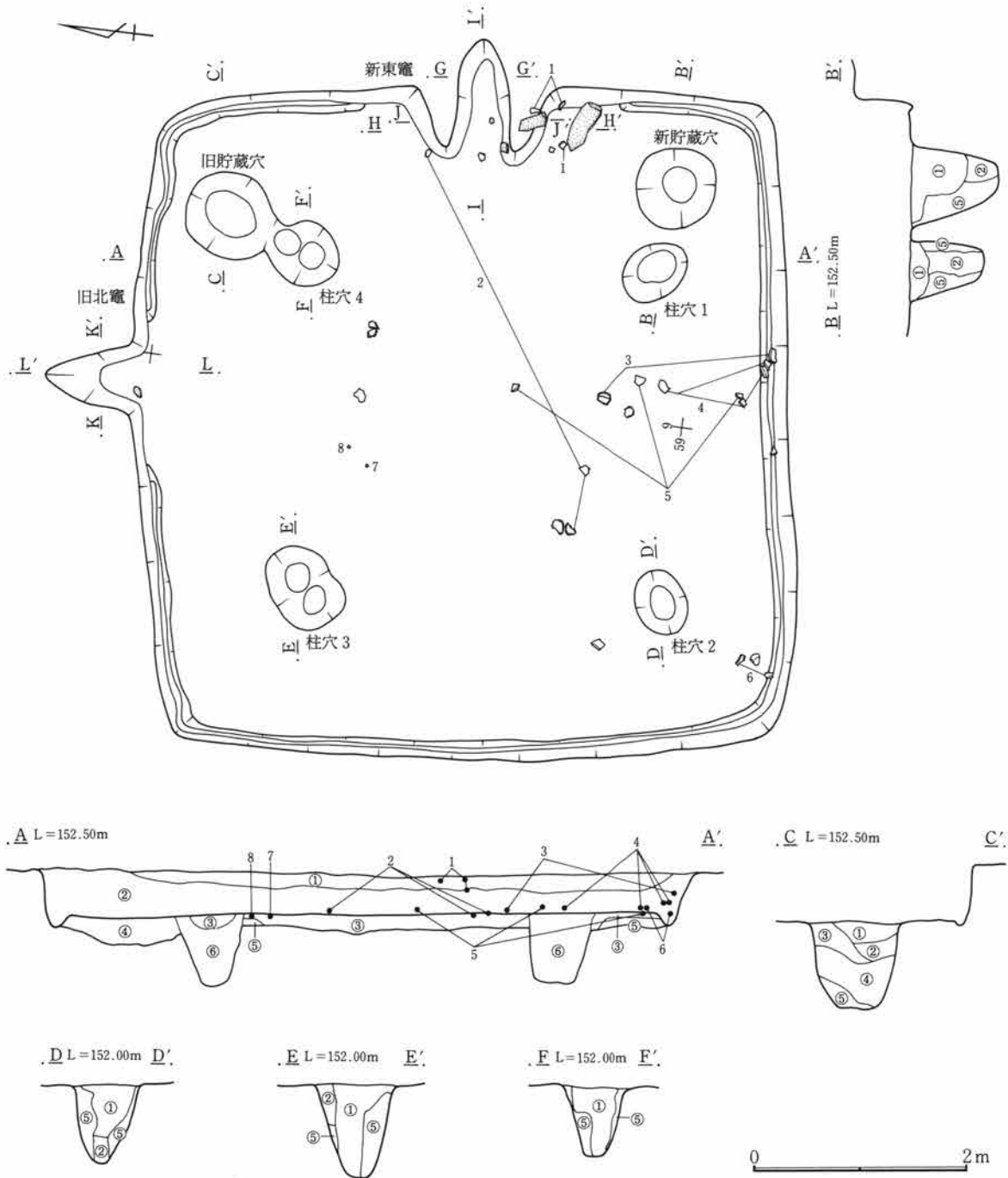
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
92-1 50	土師器 小型甕	覆土 1/2残存	口(12.9) 高 11.5 底 —	①やや粗、1~3mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胴外面強いへら削り。多くの砂粒が移動し、器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
92-2	土師器 甕 破片	竈覆土 破片	口(12.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は低いが明瞭である。全体に少しゆがんでいる。

433号住居跡 (第93~97図、図版15・50・71)

位置 本住居跡は、第7次調査区南西端部にあり、60-9・10グリッドに位置する。

概要 竈が東壁と北壁で2基確認され、北壁が旧竈で東壁が新竈である。旧竈は床面上に位置する両袖部や
 燃焼部はすべて取り外されて残っていなかったが、壁面を掘り込んで造られていた燃焼部の一部と煙
 道部は良好に残っていた。

構造 床面はロームブロックと暗褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は4本確認されたが、北側の2
 本の外側に1本ずつ柱穴らしき掘り込みが確認されたため、柱穴の掘り直しがあつた可能性もある。



第93図 433号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(433号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗黄褐色土層 多くのロームブロックを含む固い層。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑥柱穴覆土

柱穴・新旧貯蔵穴

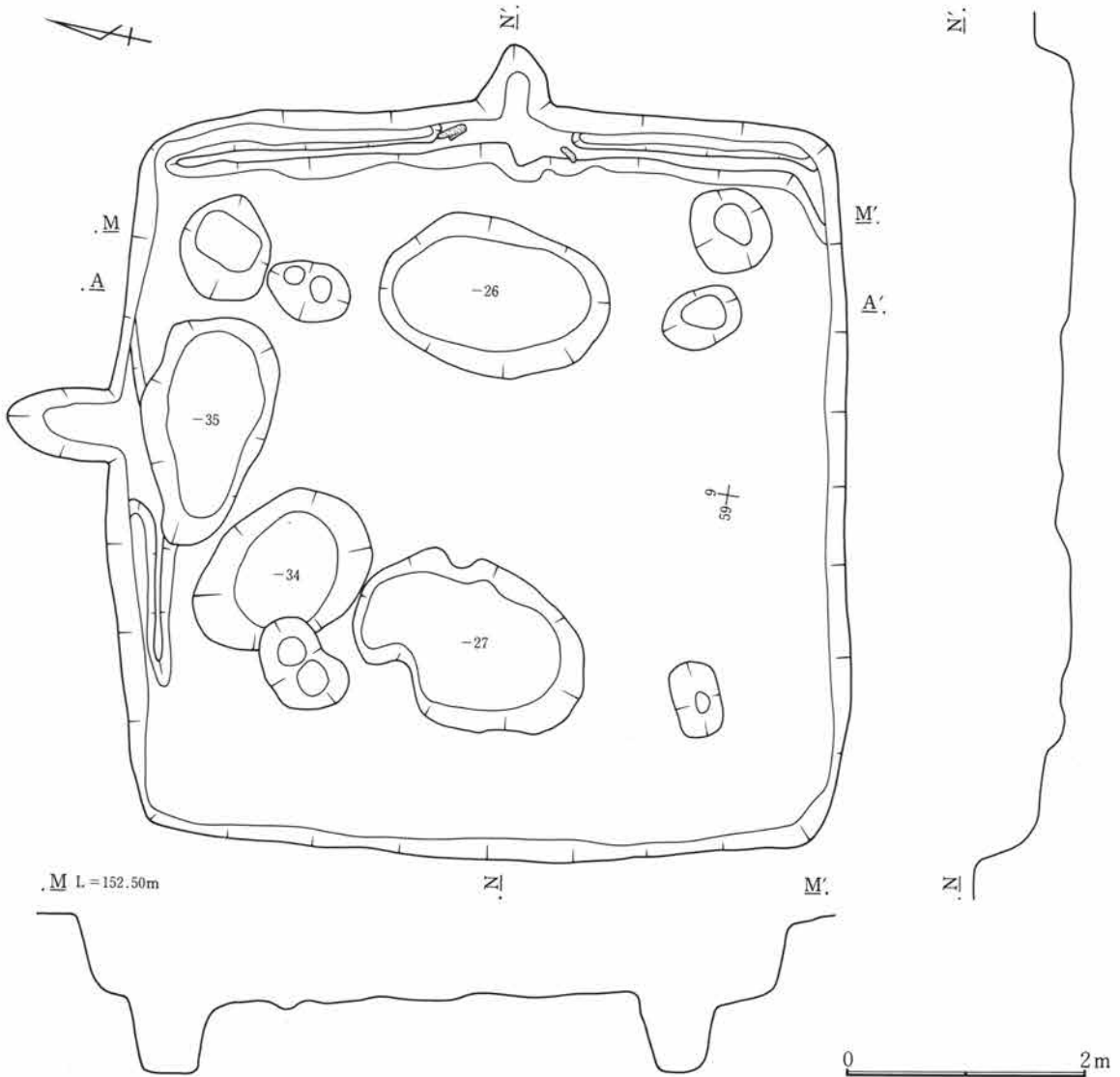
- ①暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ②暗黄褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗黄褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④暗黄褐色土層 褐色土を主とし、多量にロームブロックを含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする層。

貯蔵穴がそれぞれの竈の右側に掘られていた。竈周辺以外の部分で壁溝が掘られていた。

規模 東西6.1m、南北6.08mである。壁高は残りの良い南東コーナーの壁部分で51cmである。柱穴1は径58cm深さ82cm、柱穴2は径54cm深さ85cm、柱穴3は径62cm深さ88cm、柱穴4は径58cm深さ70cmである。新貯蔵穴は径72cm深さ83cm、旧貯蔵穴は径79cm深さ88cmでいずれもほぼ円形を呈する。壁溝は幅13cm深さ11cmである。

遺物 南側の床面上を中心に、土師器の甕や坏と土玉が出土している。

床下 床下は中央部分が全体に深く掘り込まれていた。床下より土坑が確認され、床面からの深さは数字で示した。



第94図 433号住居跡床下実測図

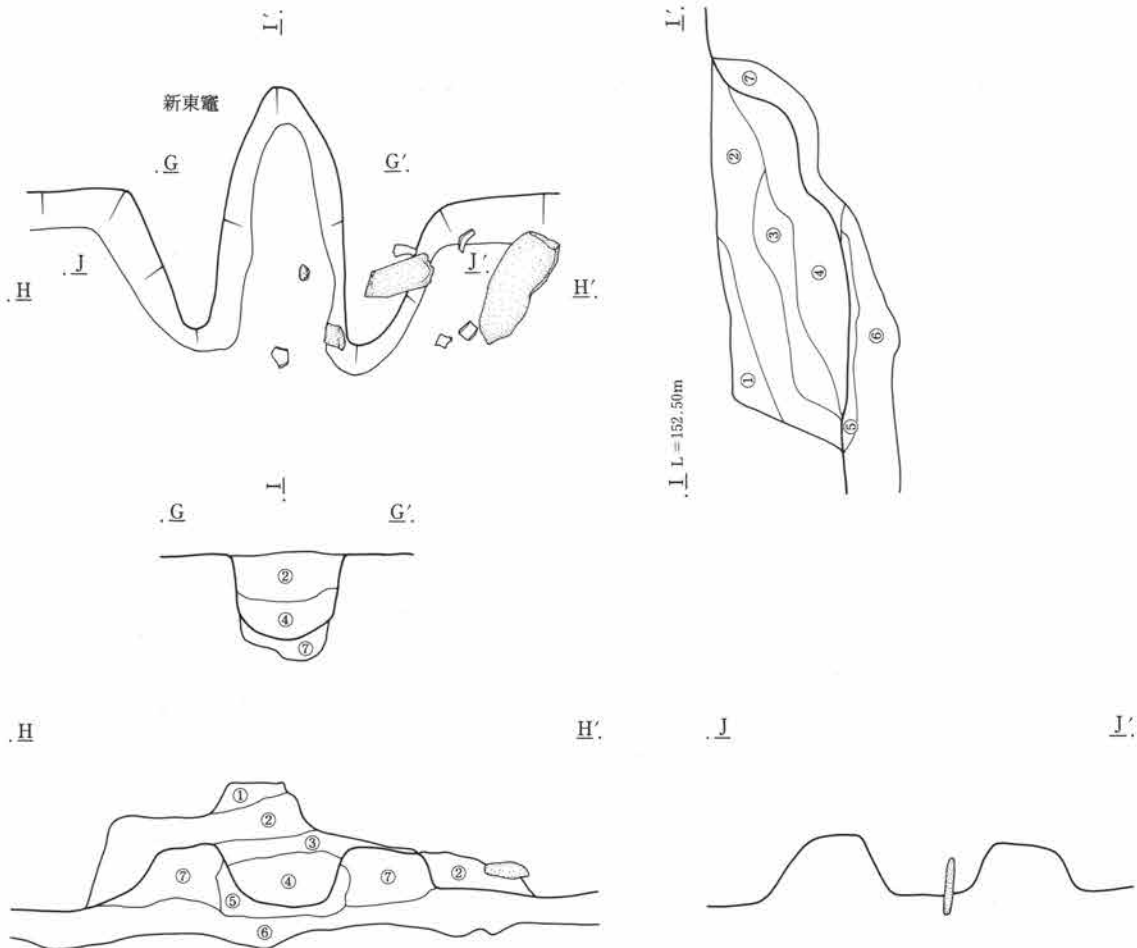
(新東竈)

概要 住居東壁の中央部に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。特に煙道部は旧竈同様に壁面を深く掘り込んでいた。燃焼部中央のやや右寄りに支脚石が据えられた状態で出土し、右袖の石もほぼ使用時の状態を保っていた。しかし左袖の石は残っていない、天井石もはずされて、右袖外側の壁面に立て掛けるような状態で置かれていた。また右袖上に焼けた平たい石が置かれていた。このような状態からこの竈は住居放棄段階において、意図的に壊された可能性を示す。

規模 両袖方向120cm、煙道方向110cmである。

(旧北竈)

概要 住居北壁の中央部に造られている。床面上に位置する袖部と燃焼部はすべて取り外されている。燃焼部の一部と煙道部が壁面を深く掘り込んでおり、その部分が良く残っている。煙道部方向の土層断面の観察から燃焼部が削り取られ、一部焼土粒が住居内まで流れ込んでいるが、燃焼部に当たる部分に住居の覆土が、堆積していることが確認できる。

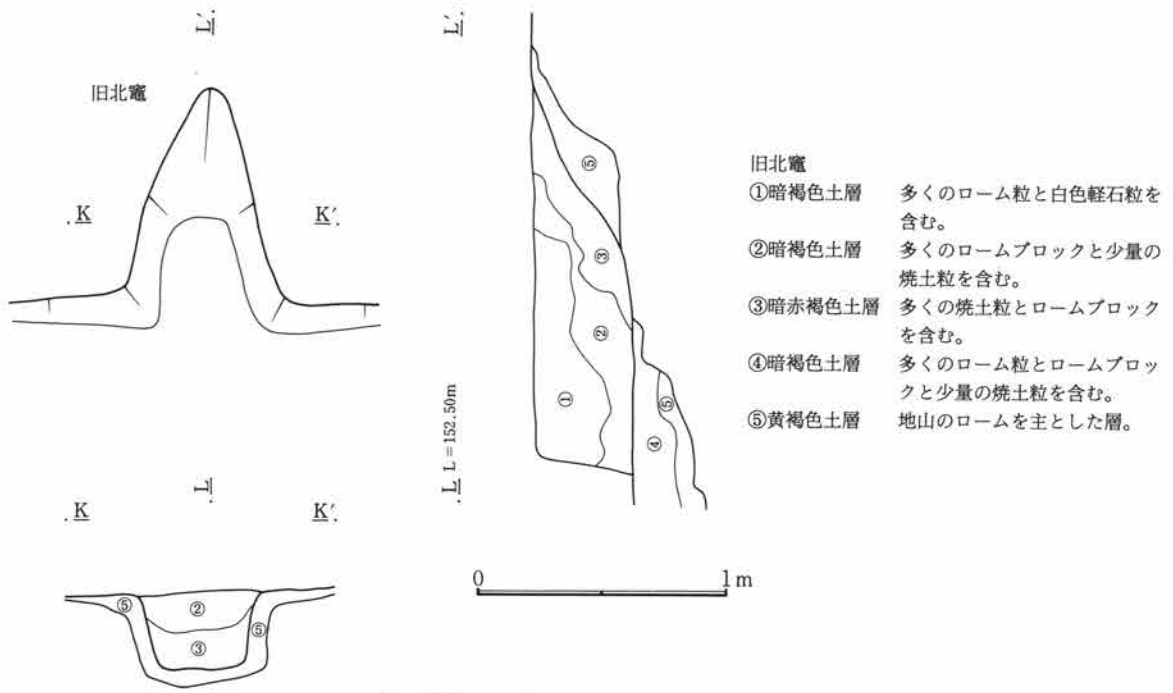


新東竈

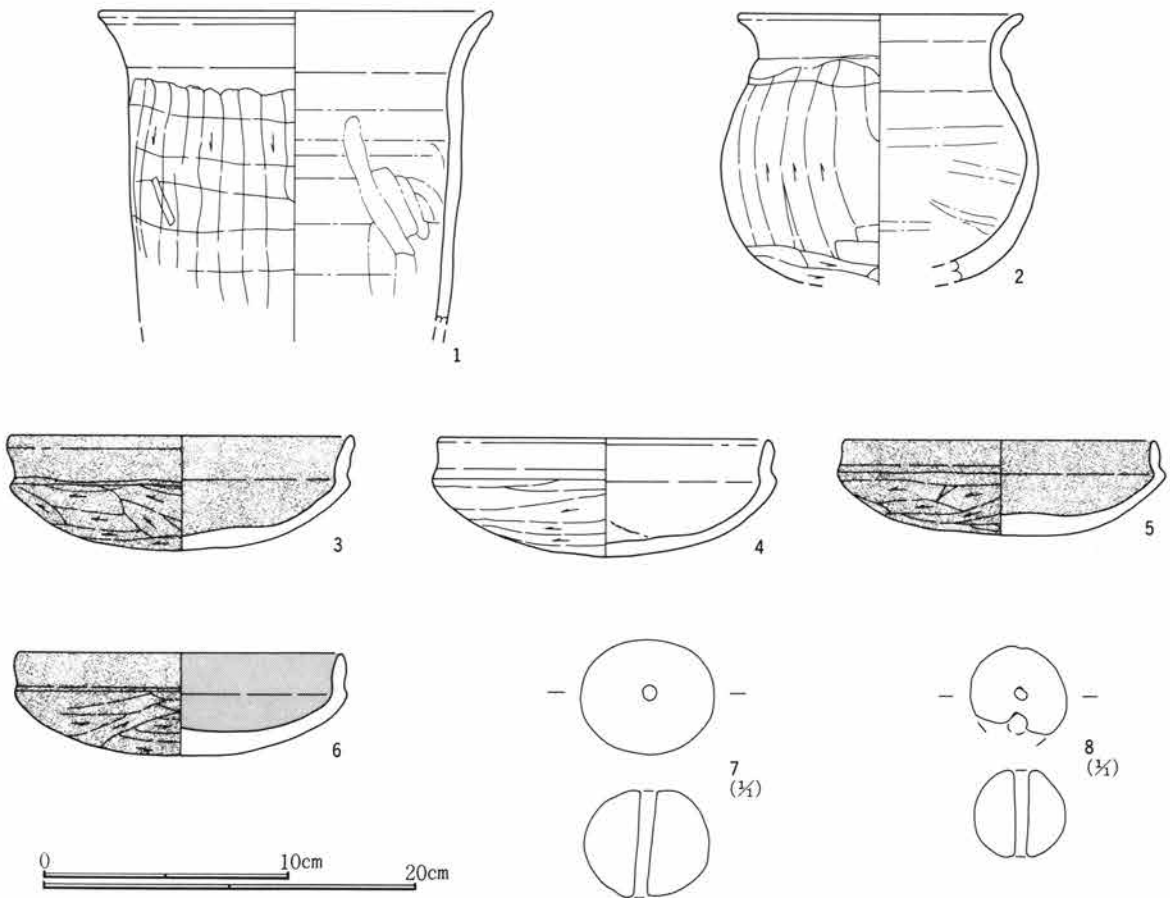
- | | | | |
|---------|--------------------|--------|-------------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 | ⑤暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 | ⑥暗褐色土層 | ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 |
| ③暗黄褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 | ⑦褐色土層 | ローム粒とロームブロックを主とした層。 |
| ④暗赤褐色土層 | 多くの焼土粒と少量の暗褐色土を含む。 | | |

第95図 433号住居跡新東竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第96図 433号住居跡旧北竈実測図



第97図 433号住居跡出土遺物実測図

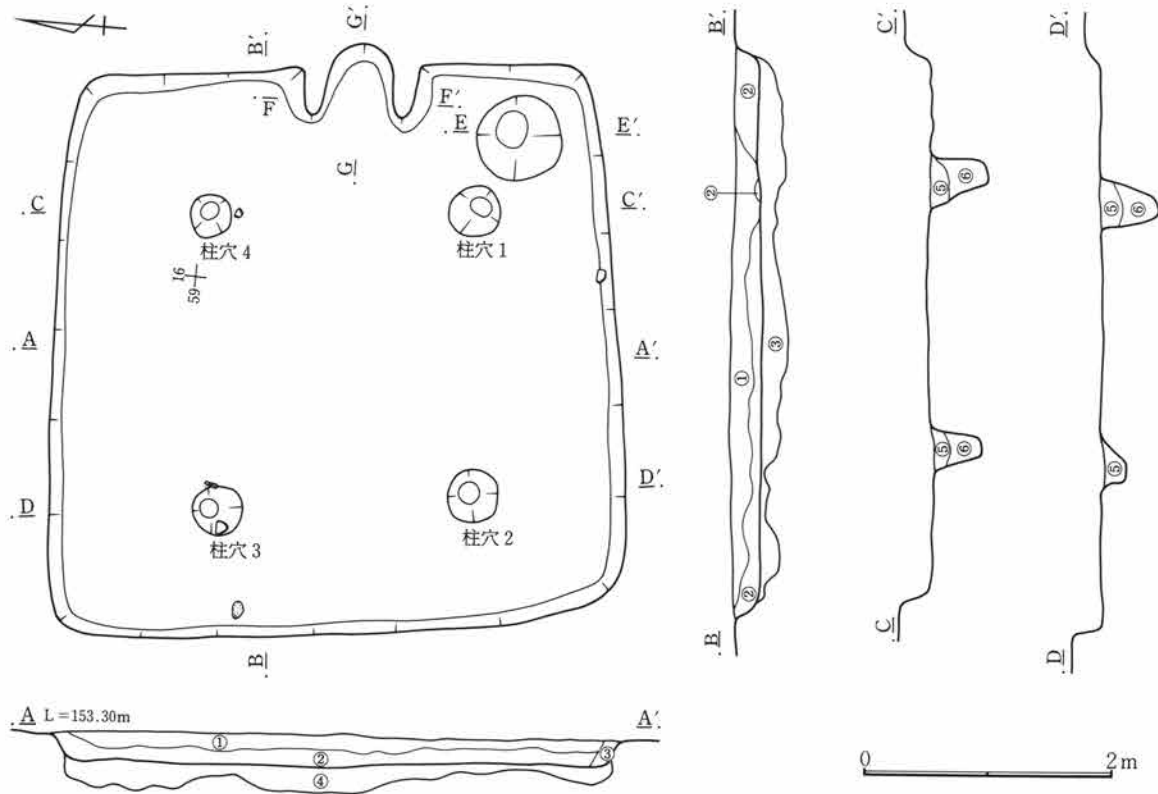
433号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
97-1 50	土 師 器 甕	新竈内+23 %残存	口(20.8) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の長石粒を多く 5~8mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へら削り後、ナデで器表面比較的密。口縁部横ナデ。 内面ナデで器表面密。
97-2 50	土 師 器 小型 甕	床面直上 %残存	口(15.0) 高 — 底 —	①やや粗、1mm前後の砂粒を多 く3~5mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面横方向へら削り。胴外面口縁部に向かう縦方向へら削り。 砂粒の動きが多く器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
97-3 50	土 師 器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 13.6 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く、 赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部へら削りで、ささら状を呈し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデ。後は高く明瞭である。
97-4 50	土 師 器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 13.0 高 4.6 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 底面が少しささら状に剝離している。
97-5 50	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口 12.4 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③内面一部黒色・他橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。
97-6 50	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口(12.8) 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・他にぶい黄橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部外面吸炭によっ て器表面がより緻密になっている。 内面吸炭により黒色を呈する。
97-7 71	土 製 品 土 玉	床面直上	径 1.7 孔径 0.2 重 3.6		①密、赤色粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒色。 表面ナデで密。
97-8 71	土 製 品 土 玉	床面直上	径 1.3 孔径 0.2 重 1.3		①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・ 内面にぶい橙色 一部欠損。

437号住居跡 (第98・99図、図版15・16)

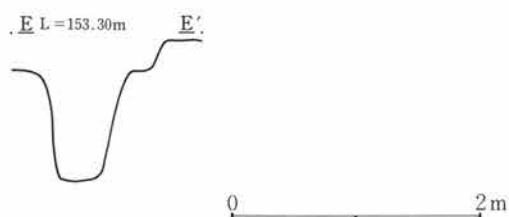
位置 本住居跡は、第7次調査区南西部にあり、59-16・17グリッドに位置する。

構造 床面はロームを主とした土で4柱穴内側が、特に強く踏み固めてあった。柱穴は4本確認されたが、



第98図 437号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



(437号住居跡・柱穴)

- | | |
|---------|-----------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム小ブロックを含む。 |
| ③暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の黒褐色土を含む。 |
| ④暗黄褐色土層 | ロームブロックとローム粒を主とする固い層。 |
| ⑤暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 |
| ⑥明褐色土層 | ローム粒とロームブロックを主とする層。 |

北西部の柱穴3は浅かった。貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西4.45m、南北4.54mである。壁高は残りの良い南壁面で25cmである。柱穴1は径40cm深さ48cm、柱穴2は径42cm深さ46cm、柱穴3は径38cm深さ20cm、柱穴4は径30cm深さ43cmである。貯蔵穴は径70cm深さ86cmでほぼ円形を呈する。

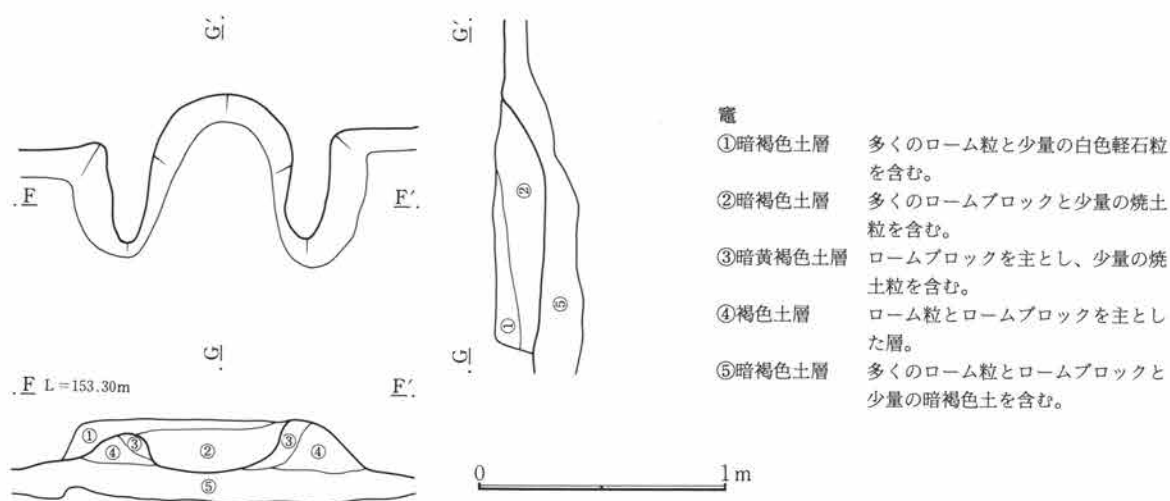
床下 中央部床下から東西方向1.6m、南北方向1.2m、床面からの深さ24cmの床下土坑が確認された。

遺物 覆土中より土師器の坏と甕の胴部の小破片が各1個出土したのみであり、図示できなかった。

(竈)

概要 住居東壁の中央部に造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が僅かに壁面を掘り込んで造られていたようであるが、残りが悪い。袖石や天井石等は全く残されず、燃烧部の焼土粒も多く残っていなかった。袖は多くのロームを用いて造られていた。

規模 両袖方向110cm、煙道方向70cmである。



第99図 437号住居跡(2)・竈実測図

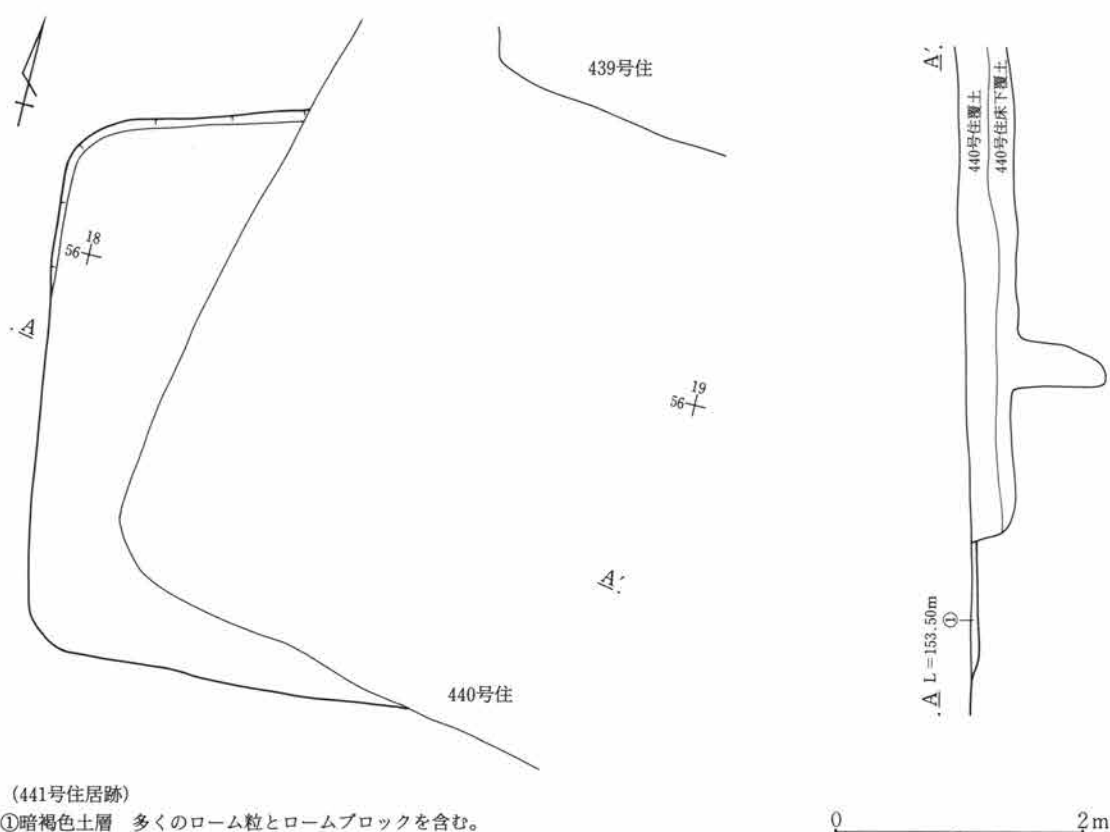
441号住居跡 (第100図、図版16)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、56-19グリッドに位置する。

概要 本住居跡は3軒重複の住居中の1軒であり、最も古い段階の住居である。本住居の東側の大部分を奈良時代の440号住居により床下まで深く削り取られ、440号住居は同じ奈良時代の439号住居により住居北側を床面部分まで掘り込まれ、その部分にあった北竈の大部分も削り取られていた。新旧関係は441→440→439号住居である。本住居跡は掘り込みも浅く、柱穴や竈等も不明である。

規模 東西不明、南北4.52mである。壁もほとんどは残っていないが、北壁面で5cmである。

遺物 覆土中より古墳時代の土師器坏と甕の破片が出土しているが、図示できる遺物の出土はなかった。



(441号住居跡)
①暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

第100図 441号住居跡実測図

442号住居跡 (第101～103図、図版16・50・73)

位置 本住居跡は、第7次調査区南東部にあり、59-21グリッドに位置する。

概要 他の遺構と重複しない住居であり、掘り込みも深く残りの良好な住居である。

構造 床面はロームブロックと少量の黒褐色の土で造られ、中央部付近を中心に踏み固められていた。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。貯蔵穴の西と北側に貯蔵穴を囲むように僅かな土塁状の高まりが認められた。

規模 東西6.38m、南北6.30mである。壁高は残りの良い東壁面で38cmである。柱穴1は径48cm深さ80cm、柱穴2は径40cm深さ61cm、柱穴3は径38cm深さ75cm、柱穴4は径52cm深さ79cmである。貯蔵穴は径58cm深さ82cmでほぼ円形を呈する。

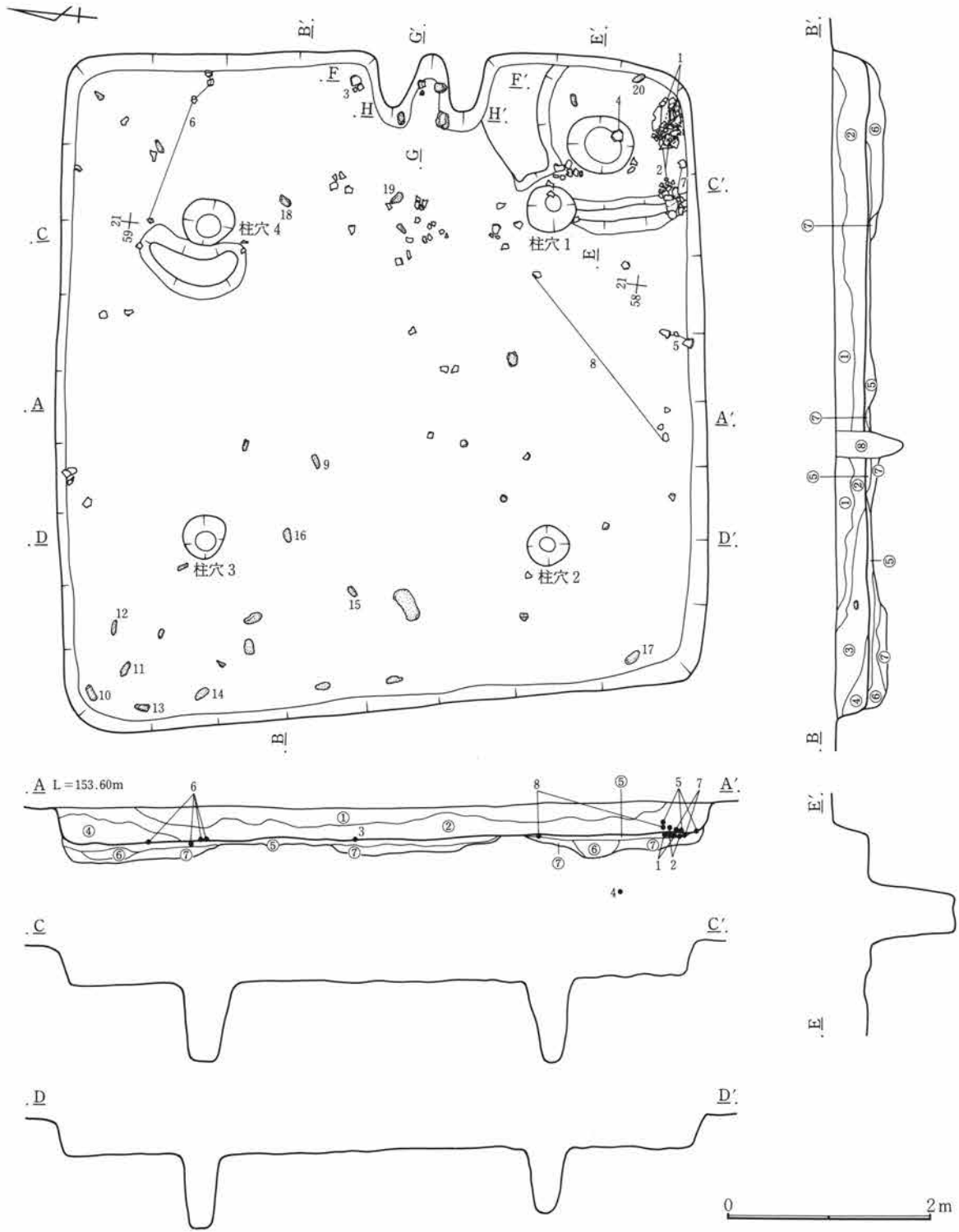
遺物 東側の床面付近を中心に土師器の甕や坏が出土した。

(竈)

概要 住居東壁のやや南寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 焚口部の両側に、袖石がほぼ据えられたままの状態、また燃焼部左奥に支脚石が据えられた状態で出土した。燃焼部右奥壁寄りに火を受けて焼けた石も出土した。しかし天井石は住居内から出土しなかった。このような状況からこの竈は一部に石を用い、多くのロームを使用して造られたものと思われる。燃焼部を中心とした竈内より多くの焼土粒が出土した。

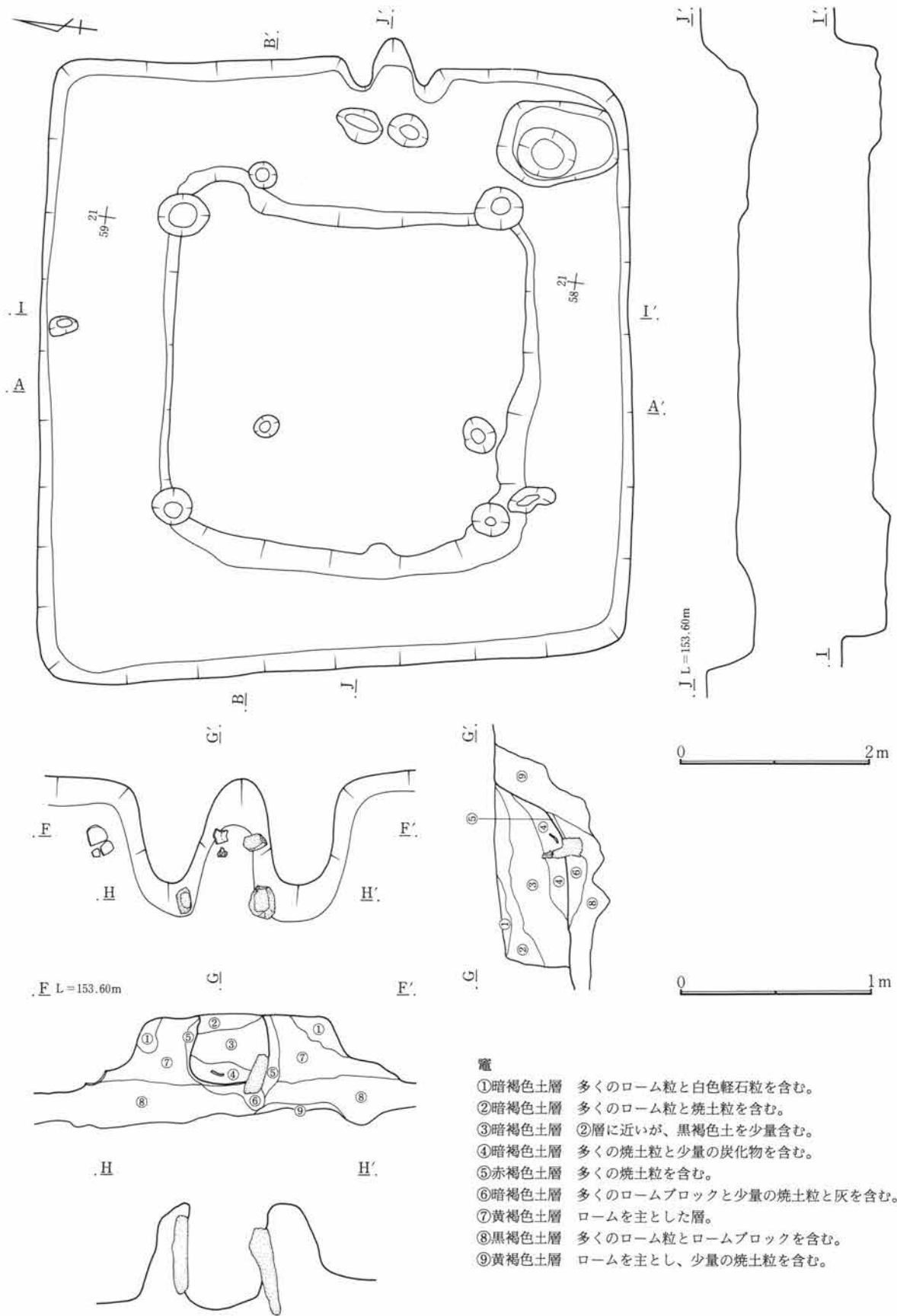
規模 両袖方向118cm、煙道方向74cmである。



(442号住居跡)

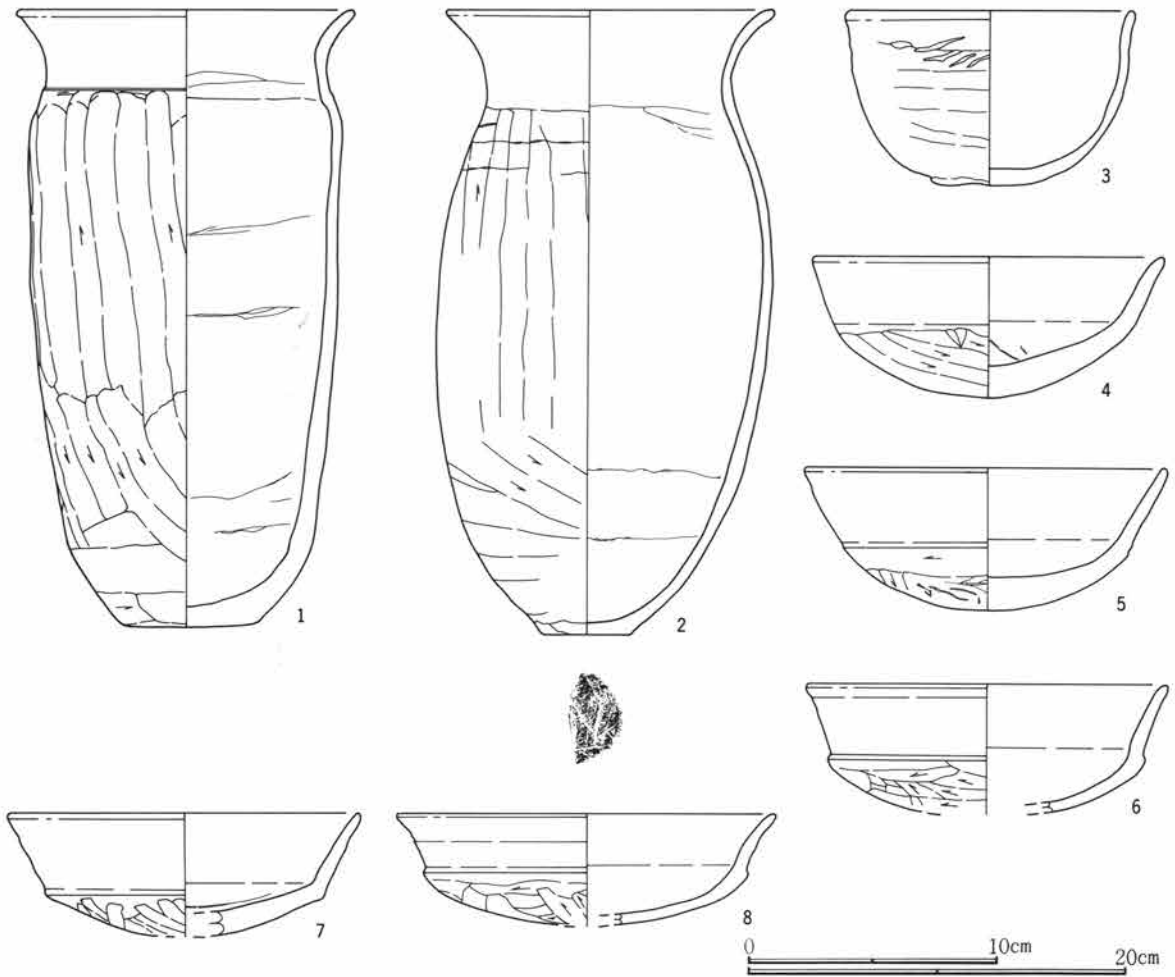
- | | |
|--|--|
| <p>①黒褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒及び少量の焼土粒と炭化物を含む。</p> <p>②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロック及び少量の焼土粒と炭化物を含む。</p> <p>③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。</p> | <p>④暗褐色土層 多くのローム粒と少量の黒褐色土を含む。</p> <p>⑤暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の黒褐色土を含む。</p> <p>⑥暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。</p> <p>⑦黄褐色土層 地山のロームを主とした層。</p> <p>⑧攪乱小穴覆土</p> |
|--|--|

第101図 442号住居跡実測図



第102図 442号住居跡床下・竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第103図 442号住居跡出土遺物実測図

442号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
103-1 50	土 師 器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 17.6 高 32.9 底 7.0	①粗、3～6mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質	底面ナデ。胴外面へら削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。底径が大きい。 色調、胴上部が橙色・下部が黒褐色・内面橙色。
103-2 50	土 師 器 甕	床面直上 %残存	口(16.8) 高 33.0 底 (4.8)	①粗、3～5mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質	底面木葉痕。胴外面弱いへら削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。口縁部が長く大きく外反する。 色調、胴上部が橙色・下部が黒褐色・内面橙色。
103-3 50	土 師 器 小型甕	床面直上 %残存	口(15.3) 高 9.1 底 6.5	①粗、2～5mmの長石粒と片岩 粒を含む②酸化焰、硬質③外面 黒褐色・内部底面にぶい橙色	底面ナデ。胴外面へら削りで器表面が非常に粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。粗雑な感じの作りである。
103-4 50	土 師 器 坏	貯蔵穴内- 52 ほぼ完形	口 13.3 高 5.4 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に器肉が厚い。 稜はなし。
103-5 50	土 師 器 坏	床面+7 %残存	口 14.3 高 5.6 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に器表面密で、 器肉が厚い。
103-6 50	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口(14.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面細かいへら削り。口縁部横ナデ。内面へらナデ。 稜は高く明瞭である。
103-7 50	土 師 器 坏	床面+5 %残存	口(14.0) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。底部周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 稜は明瞭である。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
103-8 50	土師器 坏	床面直上 3/4残存	口(14.9) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 稜は高く明瞭である。
9 73	こも編み 石	床面+25	長 14.0 幅 5.2 厚 3.3 重 300		絹雲母石墨片岩。細長い石である。両側面中央部打ち欠かれた ような凹状部あり。
10 73	こも編み 石	床面直上	長 15.2 幅 6.2 厚 5.3 重 750		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状部を呈して いる。
11 73	こも編み 石	床面直上	長 17.1 幅 7.1 厚 4.9 重 700		絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部を呈している。
12 73	こも編み 石	床面直上	長 16.7 幅 4.6 厚 3.0 重 300		絹雲母石墨片岩。細長い石である。胴中央部がわずかに凹状を 呈している。
13 73	こも編み 石	床面-4	長 14.2 幅 6.0 厚 3.6 重 400		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部で打ち欠かれた凹状部 が認められる。
14 73	こも編み 石	床面-4	長 15.8 幅 7.5 厚 3.6 重 600		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面が凹状を呈 している。
15 73	こも編み 石	床面直上	長 17.6 幅 8.0 厚 4.9 重 780		絹雲母緑泥石墨片岩。片側の側面は凸状を呈し、他の側面は段 とわずかな凹状部を持つ。
16 73	こも編み 石	床面直上	長 14.5 幅 7.3 厚 3.9 重 600		緑簾緑泥片岩。片側の側面はゆるやかな凹状を呈し、他の側面 は小さな凹状部を持つ。
17 73	こも編み 石	床面+5	長 15.5 幅 7.6 厚 4.3 重 780		緑簾緑泥片岩。片側の側面がわずかな凹状を呈している。
18 73	こも編み 石	床面直上	長 14.2 幅 7.2 厚 4.5 重 600		絹雲母石墨片岩。両側面にわずかな凹状部が認められる。
19 73	こも編み 石	床面+8	長 15.1 幅 6.8 厚 6.1 重 1,000		緑簾緑泥片岩。厚い石である。側面中央部のみわずかな凹状部 が認められる。
20 73	こも編み 石	床面直上	長 14.6 幅 7.5 厚 4.4 重 620		点紋絹雲母石墨片岩。側面中央部が幅広い石である。明瞭な凹 状部は認められない。

443号住居跡（第104～107図、図版17・51・73）

位置 本住居跡は、第7次調査区南東部にあり、60-24・25グリッドに位置する。

概要 他の遺構と重複しない住居であり、壁面の残りも掘り込みも深く残りの良好な住居である。

構造 床面は地山のロームを主とした土で造られており、床下の掘り込みは少なかった。4柱穴内側が特に堅く踏み固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西5.58m、南北5.52mである。壁高は残りの良い南壁面で57cmである。柱穴1は径42cm深さ67cm、柱穴2は径43cm深さ63cm、柱穴3は径42cm深さ65cm、柱穴4は径40cm深さ62cmである。貯蔵穴は径82cm深さ71cmでほぼ円形を呈する。

遺物 竈右袖外側に完形の土師器甕が袖にもたれ掛かるように置かれており、左袖外側の床面上に完形の土師器甕が倒れた状態で坏とともに出土した。また左袖外側にほぼ完形の土師器の坏や甕の破片が出土した。また西壁面に近い床面上より多くのこも編み石がまとまって出土した。

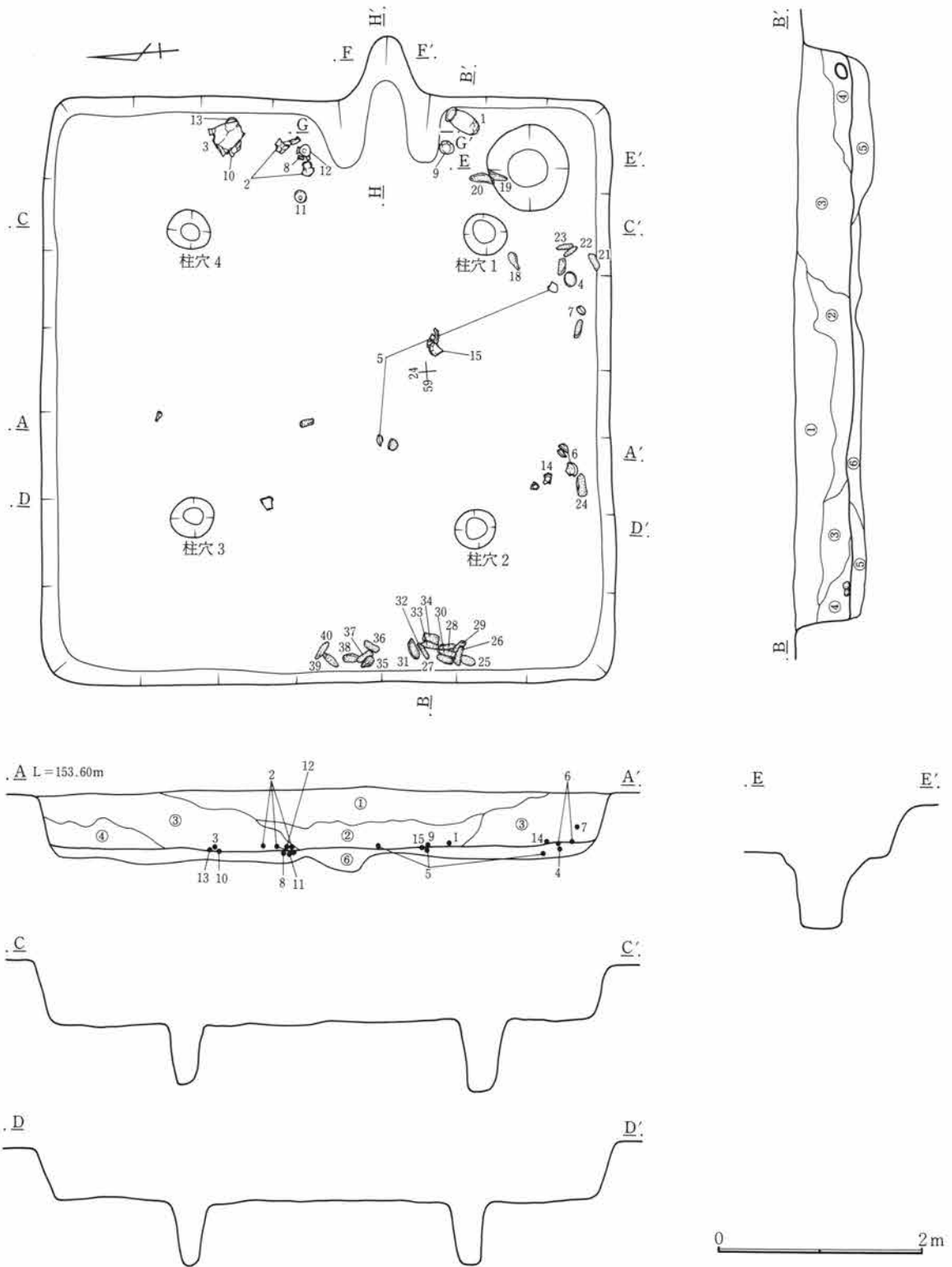
(竈)

概要 住居東壁の南寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られている。

構造 竈材として使われた多くのロームが残っており、比較的残りの良好な竈であった。袖石や天井石は使用しないで造られた竈と思われる。燃焼部を中心とした竈内より多くの焼土粒が出土した。

規模 両袖方向120cm、煙道方向125cmである。

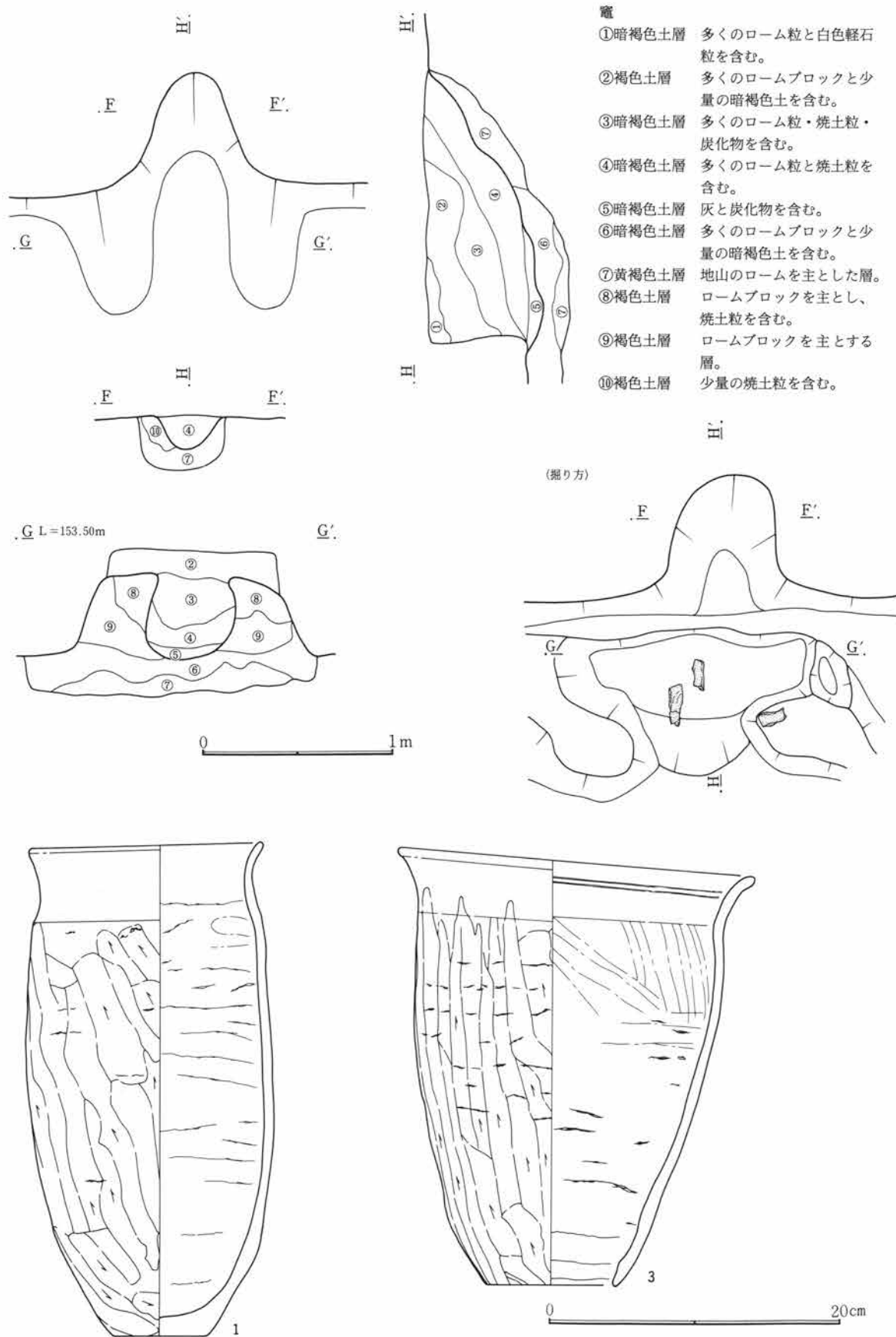
第3章 古墳時代の遺構と遺物



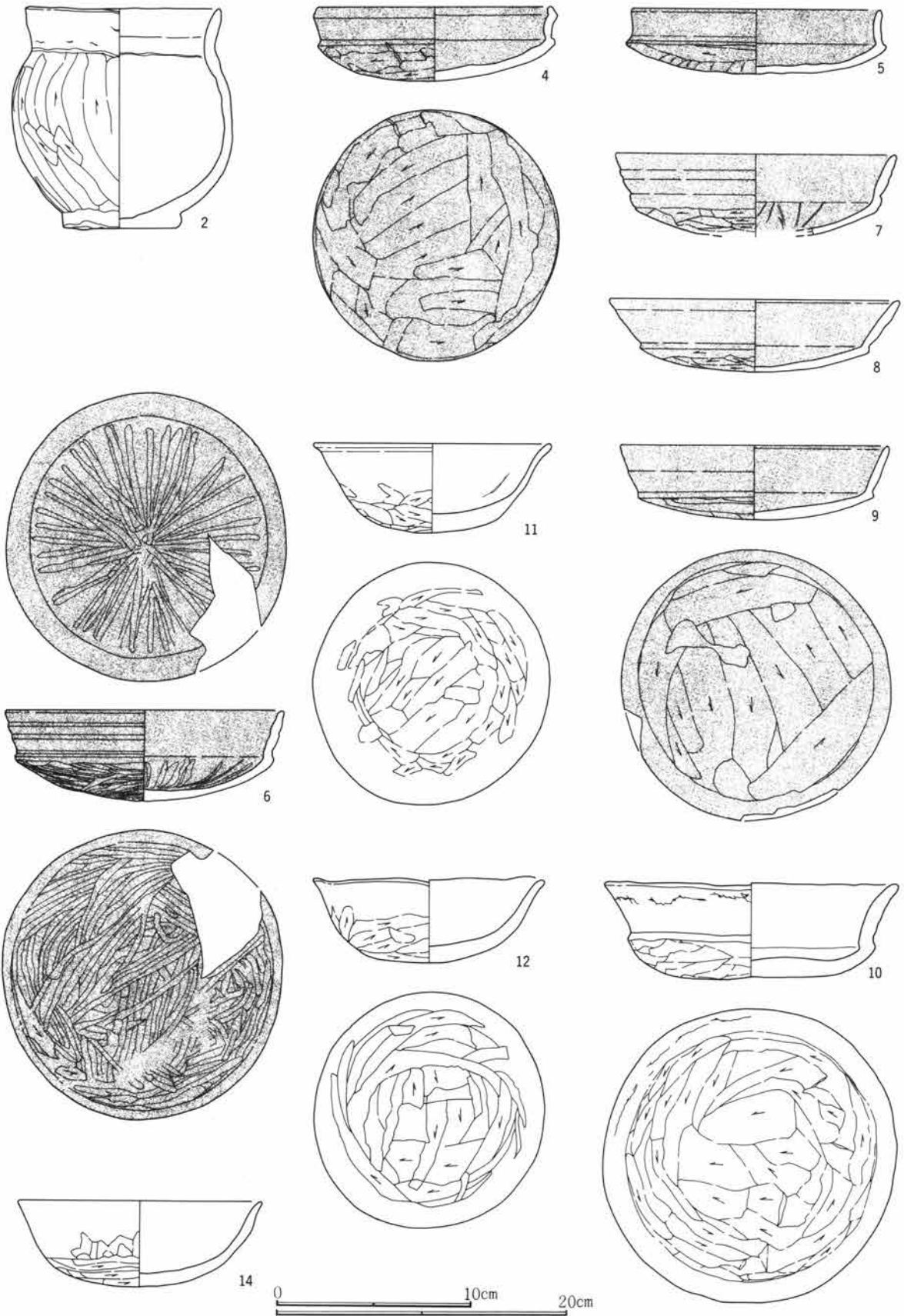
- (443号住居跡)
- | | |
|---------------------------------|-----------------------------|
| ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 | ④暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 |
| ②暗褐色土層 ローム小ブロック (1~3mm) を多く含む。 | ⑤暗褐色土層 ロームブロックを主とした層。 |
| ③暗褐色土層 多くのロームブロック (1~10mm) を含む。 | ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とした層。 |

第104図 443号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第105図 443号住居跡竈・出土遺物(1)実測図



第106図 443号住居跡出土遺物実測図(2)



第107図 443号住居跡出土遺物実測図(3)

443号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
105-1 51	土器 甕	床面+7 ほぼ完形	口 15.8 高 33.9 底 6.2	①粗、1~3mmの長石粒を多く 6~8mmの片岩を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ で器表面密。外面に少し、内面に多くの輪積痕が残る。
106-2 51	土器 小型甕	床面直上 ほぼ完形	口 13.5 高 15.0 底 7.6	①粗、2~4mmの長石粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りとナデ。胴外面ヘラ削りとヘラナデで、器表面の 砂粒の動きは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。
105-3 51	土器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 24.2 高 29.8 底 9.2	①粗、3~5mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで 器表面密。口縁部内側に2本の沈線あり。内外面に輪積痕が残 る。
106-4 51	土器 杯	床面直上 完形	口 12.1 高 3.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面~口縁 部外面黒色・底面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。 内面から口縁部外側にかけて黒漆か。底面は吸炭による黒褐色。
106-5 51	土器 杯	床面直上 ほぼ完形	口 12.7 高 3.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。 口縁部から底部が浅い杯である。内面に黒漆か。
106-6 51	土器 杯	床面+5 ほぼ完形	口 14.2 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず、少 量の赤色粒を含む。②酸化焰、 硬質 ③表面黒色・断面橙色	底面全体にわたりヘラ磨きで、光沢を持ち器表面密。 口縁部横ナデ。内面放射状ヘラ磨き。 内面黒漆か。外面の黒色は吸炭によるものと思われる。
106-7 51	土器 杯	床面+24 欠残存	口(14.5) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面暗赤褐色	底面細かい単位のヘラ削り。口縁部横ナデ。中央部に2本の沈 線がある。内面に多くの放射状ヘラ磨き。 内面黒漆か。外面の多くは吸炭による黒色。
106-8 51	土器 杯	床面直上 欠残存	口(14.9) 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③内外面橙色・一部黒褐色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。口唇部中 心に弱い沈線あり。稜は明瞭で鋭角を持つ。内面の多くは剥が れているが、黒漆の塗られている可能性がある。
106-9 51	土器 杯	床面+4 ほぼ完形	口 13.8 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。口唇部は 平らに整形。稜は明瞭である。
106-10 51	土器 杯	床面直上 完形	口 14.8 高 4.9 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。 器肉が厚く重量感がある。黒斑は全く認められない。
106-11 51	土器 杯	床面直上 完形	口 12.1 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面細かい多くのヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部が 外反する。底部と口縁部との境が明瞭でない。12の杯に近い。
106-12 51	土器 杯	床面直上 完形	口 11.8 高 4.3 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色・一部黒褐色	底面細かい多くのヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部が ゆがんでいる。底部と口縁部との境は不明。11の杯に近い。
107-13 51	土器 杯	床面直上 完形	口 11.4 高 4.8 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面ヘラ削り。底面周辺部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。 稜はなし。半球形を呈している。
106-14 51	土器 杯	床面+8 欠残存	口 12.6 高 4.4 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面細かいヘラ削り。口縁部横ナデ。内面底部中央にヘラの工 具痕あり。稜はなし。半球形を呈しており、口縁部がわずかに 外反する。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

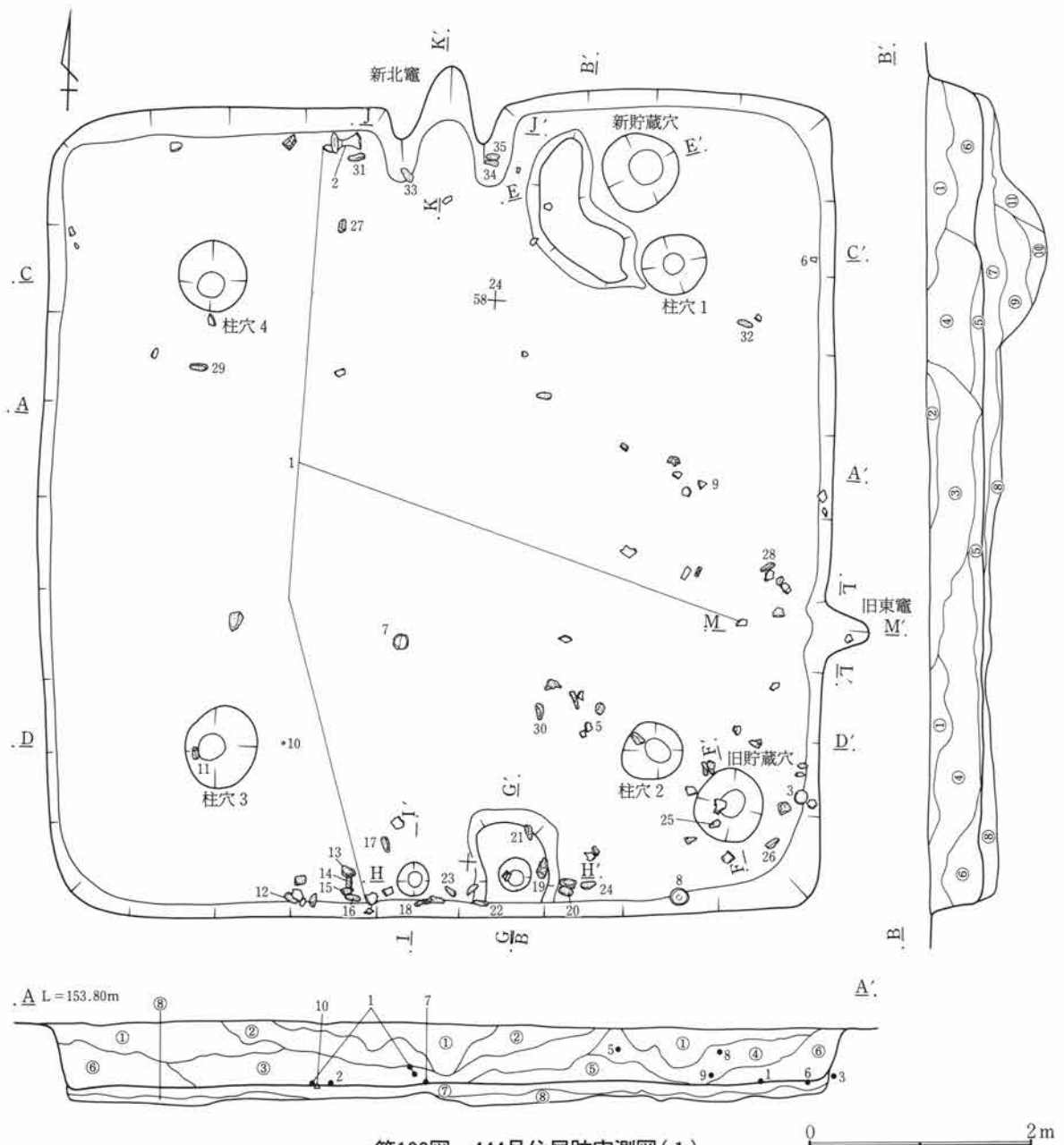
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
107-15 51	土師器 坏	床面直上 %残存	口(14.6) 高 4.4 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面にふい橙色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜はなし。口縁部が大きく外反する。
107-16 51	土師器 坏	覆土 %残存	口(12.5) 高 4.2 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にふい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面は内外面とも密である。
107-17	土師器 坏	覆土 %残存	口(11.5) 高 一 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にふい黄橙色	底面～胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部は波状を呈し平でない。全体にゆがんでいる。
18 73	こも編み 石	床面+50	長 20.1 幅 7.4 厚 5.0 重 830		絹雲母石墨片岩。両側面中央部が大きく凹状を呈する。
19 73	こも編み 石	床面直上	長 20.5 幅 6.5 厚 5.1 重 700		緑簾緑泥片岩。断面三角形を呈する。側面中央部に明瞭な凹状部は認められない。
20 73	こも編み 石	床面+4	長 21.6 幅 7.7 厚 4.1 重 1,020		緑簾緑泥片岩。薄く偏平な石である。片側の側面がわずかに凹状を呈するが、他の側面は凸状である。
21 73	こも編み 石	床面直上	長 18.9 幅 6.2 厚 2.8 重 500		緑泥片岩。薄く偏平な石である。両側面中央部に小さくわずかな凹状部が数個認められる。
22 73	こも編み 石	床面直上	長 19.0 幅 6.0 厚 3.0 重 500		点紋緑泥片岩。薄く偏平な石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
23 73	こも編み 石	床面直上	長 18.3 幅 5.3 厚 4.5 重 650		点紋緑泥片岩。断面三角形に近い肉厚の石である。側面に明瞭な凹状部は認められない。
24 73	こも編み 石	床面+6	長 17.3 幅 8.0 厚 4.7 重 930		点紋石墨緑泥片岩。やや偏平な石である。側面に明瞭な凹状部は認められない。
25 73	こも編み 石	床面+6	長 16.8 幅 7.1 厚 3.2 重 600		石墨緑泥片岩。やや偏平な石である。側面に明瞭な凹状部は認められない。
26 73	こも編み 石	床面+7	長 18.3 幅 6.8 厚 3.3 重 770		点紋緑泥片岩。両側面に小さくわずかな凹状部が数個認められる。
27 73	こも編み 石	床面+5	長 17.4 幅 5.7 厚 5.3 重 740		点紋絹雲母石墨片岩。上下の幅が同一でない。側面の中央部に小さくわずかな凹状部が数個認められる。
28 73	こも編み 石	床面直上	長 17.7 幅 6.7 厚 5.5 重 1,100		緑泥片岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈し、横断面が菱形となっている。
29 73	こも編み 石	床面+4	長 18.5 幅 8.0 厚 5.5 重 700		緑簾緑泥片岩。両側面中央部がわずかに凹状を呈し、一部は打ち欠かされている。
30 73	こも編み 石	床面+4	長 19.7 幅 6.7 厚 4.5 重 900		緑簾緑泥片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈し、他の側面は凸状を呈する。
31 73	こも編み 石	床面+4	長 20.6 幅 7.7 厚 4.0 重 950		点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部が小さな複数の凹状部を持つ。一部欠損。
32 73	こも編み 石	床面直上	長 17.1 幅 5.2 厚 2.0 重 300		緑泥片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈し、薄く偏平な石である。
33 73	こも編み 石	床面+4	長 17.0 幅 6.8 厚 4.1 重 680		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面が凸状を呈し、中央部が肉厚である。
34 73	こも編み 石	床面+4	長 16.2 幅 9.0 厚 2.8 重 700		緑簾緑泥片岩。偏平な石である。両側面がわずかに凹状を呈する。
35 73	こも編み 石	床面直上	長 15.8 幅 8.3 厚 4.3 重 700		点紋緑泥片岩。残存している側面中央部に数個の小さな凹状部を持つ。一部欠損。
36 73	こも編み 石	床面直上	長 14.9 幅 6.2 厚 2.5 重 400		点紋緑泥片岩。偏平な石である。両側面がわずかに凹状を呈する。
37 73	こも編み 石	床面直上	長 17.7 幅 6.5 厚 3.9 重 750		点紋絹雲母石墨片岩。両側面がわずかに凹状を呈する。
38 73	こも編み 石	床面直上	長 17.0 幅 8.0 厚 3.3 重 750		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面に小さくわずかな凹状部を持つが、全体的に凸状を呈する。
39 73	こも編み 石	床面直上	長 19.0 幅 5.3 厚 5.0 重 750		点紋絹雲母石墨片岩。断面台形を呈し、肉厚である。側面の一部が凹状を呈するが、側面の多くは凸状である。
40 73	こも編み 石	床面直上	長 18.2 幅 5.7 厚 4.8 重 670		緑泥片岩。断面台形を呈し、肉厚である。

444号住居跡 (第108~112図、図版17・18・51・52・70・73)

位置 本住居跡は、第7次調査区南東部にあり、58-24・25グリッドに位置する。

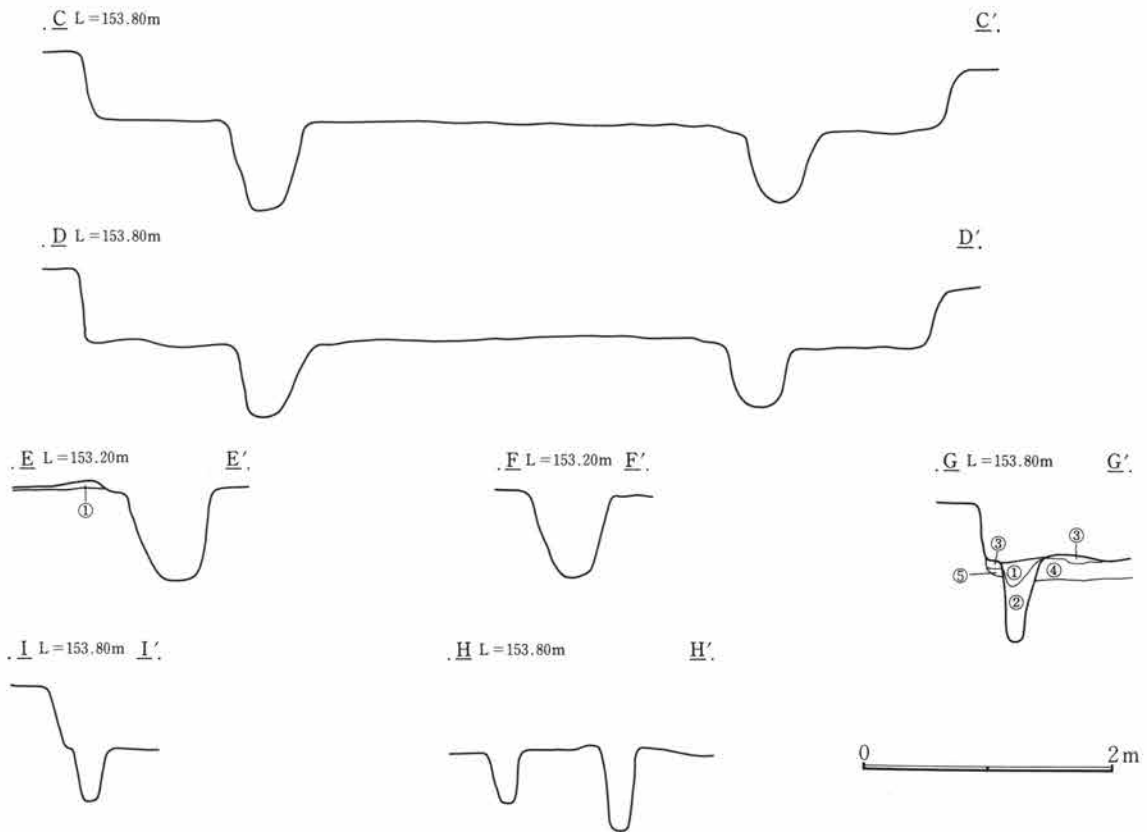
概要 他の住居と重複してなく、残りも良好な住居である。竈が東壁と北壁で確認され、北壁の竈が最後まで使われていた新竈である。旧竈の床面上に位置する両袖部や燃烧部はすべて取り外されて残っていなかったが、壁面を掘り込んで造られていた燃烧部の一部と煙道部は残っていた。南壁中央部に近い床面に2箇所柱穴状の小穴が確認された。特に東側の小穴周辺は堅く踏み固められた僅かな高まりが認められた。この2つの小穴は深さに違いが認められるが、出入口に関する施設の可能性を考えたい。

構造 床面はロームブロックを主とした土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴がそれぞれの竈に伴い掘られていた。新竈に伴う貯蔵穴の西側に土塁状の僅かな高まりが確認された。壁溝は掘られて



第108図 444号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



(444号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多量のロームブロック (1~3mm) を含む。
- ③暗褐色土層 多量の黒褐色土をブロック状に含む。多量のロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロック (1cm) を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 多量のローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのロームブロック (1~2cm) と少量の焼土粒と炭化物を含む。
- ⑧褐色土層 ロームブロックを主とする層。
- ⑨暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑩黒褐色土層 少量のロームを含む。
- ⑪黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

新貯蔵穴

- ①褐色土層 ローム小ブロック (0.5~1cm) を主とし、強くたたき締めている。少量の暗色土と炭化物を含む。(突帯)

出入口施設

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の炭化物を含む。
- ②暗褐色土層 ①層に比較して、ロームを含む量が少なく暗色を呈する。
- ③褐色土層 ロームを主とし、固く締まっている。
- ④暗褐色土層 多くのロームブロックとローム粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。

第109図 444号住居跡実測図(2)

いなかった。

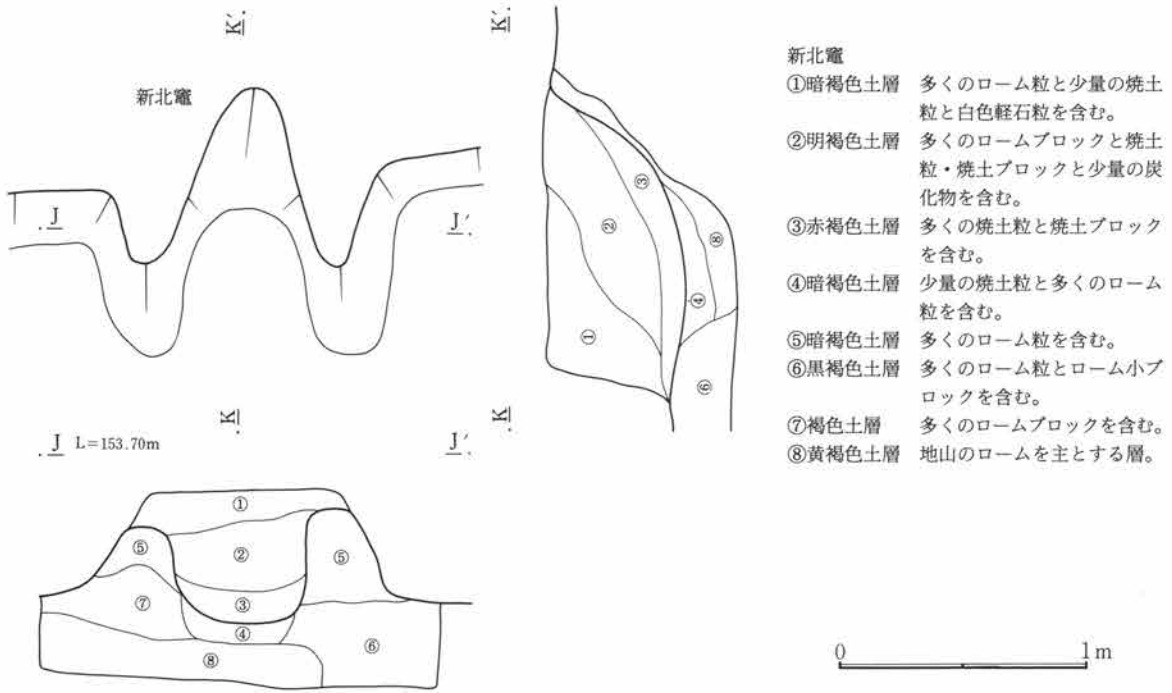
規模 東西7.05m、南北7.30mである。壁高は残りの良い西壁部分で60cmである。柱穴1は径56cm深さ62cm、柱穴2は径55cm深さ52cm、柱穴3は径64cm深さ59cm、柱穴4は径60cm深さ69cmである。新貯蔵穴は径68cm深さ74cm、旧貯蔵穴は径67cm深さ69cmでいずれもほぼ円形を呈している。

遺物 竈左袖部に高坏が、また南壁付近の床面上より多くのこも編み石が出土した。

(新北竈)

概要 住居北壁の中央部に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。袖石や天井石等は全く出土していないため、ロームを主として造られた竈であると思われる。

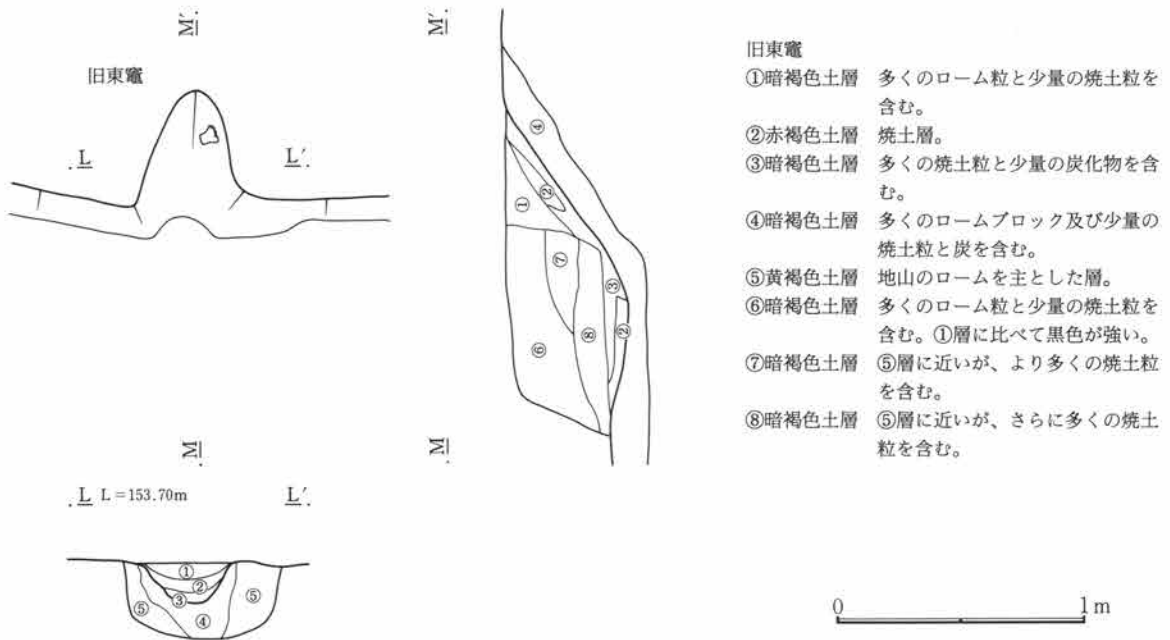
規模 両袖方向115cm、煙道方向105cmである。



第110図 444号住居跡新北竈実測図

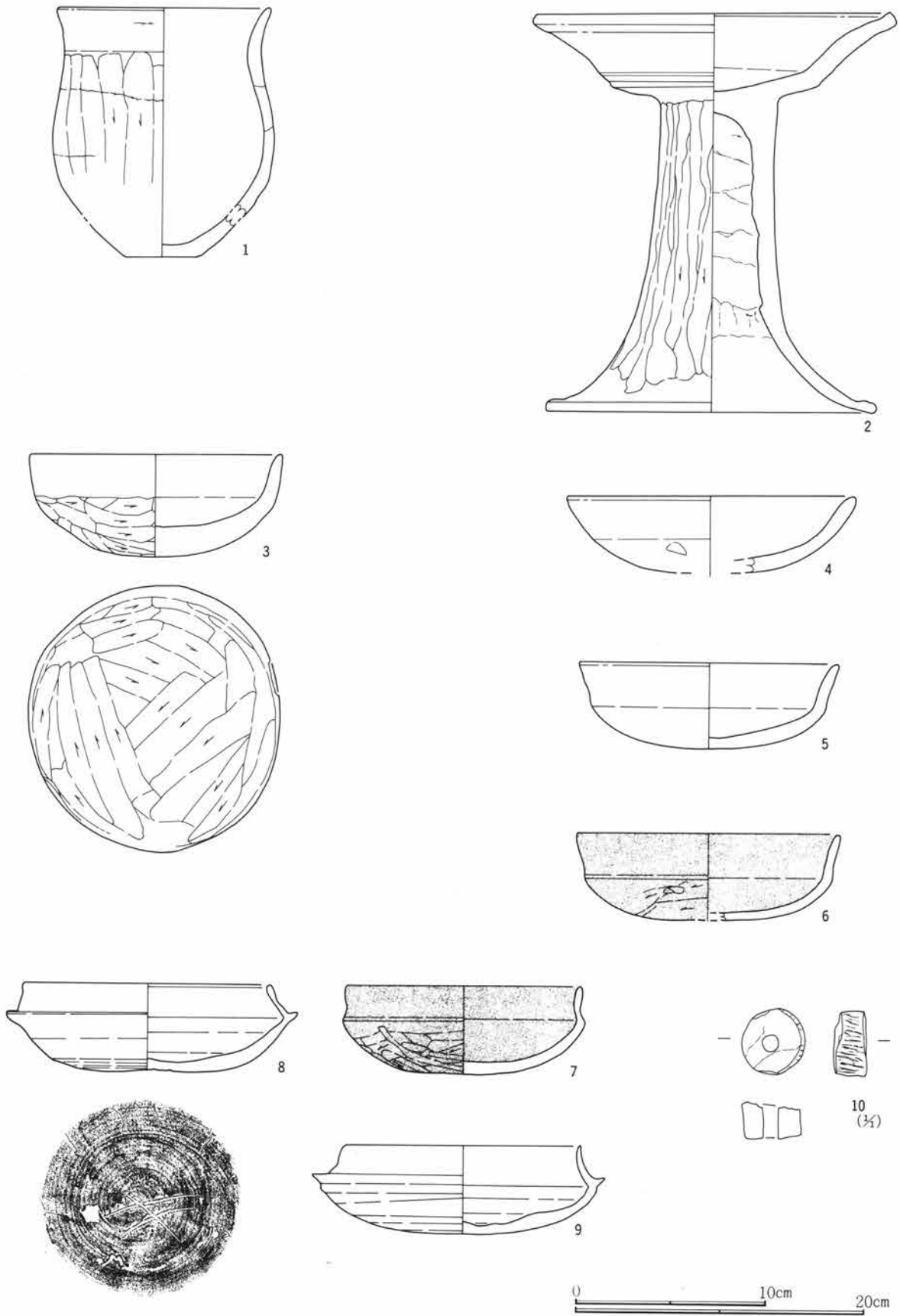
(旧東竈)

概要 住居東壁の南寄りに造られている。床面上に位置する袖部と燃焼部はすべて取り外されている。燃焼部の一部と煙道部が壁面を僅かに掘り込んでいる。煙道部方向の土層断面の観察から燃焼部が削り取られ、一部焼土粒が住居内まで流れ込んでいることがわかる。床面下に位置する燃焼部床下から多くの焼土粒が出土した。



第111図 444号住居跡旧東竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第112図 444号住居跡出土遺物実測図

444号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
112-1 52	土器 小型甕	床面直上 底部% 他%残存	口 14.6 高(18.0) 底 (6.0)	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~6mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削りとナデ。胴外面へら削り。削りは弱い。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面密。
112-2 51	土器 高坏	床面+5 ほぼ完形	口 18.4 高 20.5 底 16.0	①密、1mm以下の小さな砂粒を 多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外側へら削り。内側に多くの輪積痕が残る。坏外側底部へら削り。口縁~内側底部ていねいなナデ。長脚で底部が小さく口縁部が大きく開く坏部を持つ。
112-3 52	土器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 13.0 高 5.2 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部幅の狭い削り。器表面の砂粒の移動少なく粗れは少ない。内面ていねいなナデ。全体に器肉が厚い。
112-4	土器 坏	覆土 破片	口(14.8) 高 一 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面はへら削りと思われるが、表面が剥離しているため、削りの単位不明。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
112-5	土器 坏	床面+31 破片	口(13.4) 高 4.5 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面はへら削りと思われるが、表面が細かく剥離しているため削りの単位不明。口縁部横ナデ。
112-6	土器 坏	床面直上 %残存	口(13.6) 高 一 底 一	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面にぶい橙色	底面へら削りとへらナデ。口縁部横ナデ。底部内側ていねいなナデ。表面が吸炭により黒褐色を呈している。
112-7 52	土器 坏	床面+5 %残存	口 12.2 高 4.5 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面細長いへら削りとへらナデ。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。器肉が薄くほぼ均一な作り。
112-8 52	須恵器 坏	床面+28 口縁部%欠 他完形	口 12.8 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	底部外面中央部へら削り。周辺部回転ナデ。口縁部横ナデ。受部内側が沈線状に低くなる。底部中央へら削りの後に「キ」状の窯印。口唇部は丸い。
112-9 52	須恵器 坏	床面+7 %残存	口 6.3 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	底面は受部から下ほぼ全面左回転へら削り。口縁部横ナデ。受部の口縁端部は、鋭角に作られている。
112-10 70	石製品 白玉	床面直上	径 1.1 孔径 0.25 厚 0.6 重 1.1		側面荒砥削り。上下面に加工痕なし。
11 73	こも編み 石	床面-4	長 11.3 幅 5.5 厚 4.2 重 350		絹雲母石墨片岩。短く肉厚な石である。側面に小さな凹状部が認められる。
12 73	こも編み 石	床面+4	長 11.0 幅 6.0 厚 3.5 重 320		絹雲母石墨片岩。短く肉厚な石である。側面に小さな凹状部が認められる。
13 73	こも編み 石	床面+6	長 13.7 幅 8.3 厚 3.3 重 550		点紋石墨緑泥片岩。扁平で幅広い石である。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
14 73	こも編み 石	床面+10	長 14.0 幅 6.2 厚 3.7 重 400		点紋緑泥片岩。やや不均衡な石である。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈している。
15 73	こも編み 石	床面+9	長 11.5 幅 6.7 厚 3.0 重 320		絹雲母石墨片岩。扁平で短い石である。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
16 73	こも編み 石	床面+9	長 16.0 幅 6.1 厚 2.5 重 320		絹雲母紅簾石墨片岩。扁平な石である。片側の側面が凹状を呈し、他の側面中央部にわずかな凹状部がある。
17 73	こも編み 石	床面直上	長 15.3 幅 5.5 厚 3.0 重 380		絹雲母石墨緑泥片岩。細長い石である。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
18 73	こも編み 石	床面+14	長 15.7 幅 6.4 厚 4.8 重 620		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部が大きく凹状を呈し、他の側面中央部に小さな凹状部がある。
19 73	こも編み 石	床面+17	長 12.7 幅 7.7 厚 5.8 重 750		絹雲母石墨片岩。短く肉厚な石である。側面の一部に打ち欠かれたような凹状部がある。
20 73	こも編み 石	床面+5	長 13.6 幅 7.9 厚 3.0 重 400		点紋絹雲母石墨片岩。扁平な石である。側面の一部が打ち欠かれたような凹状部がある。
21 73	こも編み 石	床面+7	長 13.7 幅 6.7 厚 2.6 重 300		絹雲母石墨片岩。扁平な石である。片側の側面中央部が凹状を呈し、他の側面に小さな凹状部がある。
22 73	こも編み 石	床面+30	長 13.7 幅 6.3 厚 3.8 重 450		点紋絹雲母石墨片岩。中央部の肉厚な石である。側面中央部がわずかに凹状を呈する。
23 73	こも編み 石	床面+6	長 13.2 幅 5.8 厚 3.6 重 350		絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
24 73	こも編み 石	床面直上	長 13.7 幅 5.8 厚 3.3 重 400		絹雲母石墨片岩。片側の側面が凹状を呈し、他の側面にわずかな凹状部がある。
25 73	こも編み 石	床面直上	長 13.2 幅 5.5 厚 4.7 重 400		絹雲母緑泥片岩。4側面中央部がすべて凹状を呈している。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 種	出土状態 残存状況	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴・備考
			長	厚	幅	重		
26 73	こも編み 石	床面+4	長 14.0 厚 4.4	幅 6.5 重 500				網雲母石墨緑泥片岩。中央部が肉厚の石である。側面中央部にわずかな凹面がある。
27 73	こも編み 石	床面+4	長 13.9 厚 4.4	幅 7.6 重 600				点紋絹雲母石墨片岩。やや不均衡な石である。側面中央の一部にわずかな凹面がある。
28 73	こも編み 石	床面+4	長 13.9 厚 3.2	幅 7.0 重 400				網雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部がある。
29 73	こも編み 石	床面直上	長 15.3 厚 3.5	幅 6.4 重 250				緑泥片岩。片側の側面が凹状を呈し、他の側面の一部に小さくわずかに凹面がある。
30 73	こも編み 石	床面+5	長 13.0 厚 3.6	幅 5.2 重 350				緑簾緑泥片岩。両側面中央部に小さな凹状部がある。
31 73	こも編み 石	床面+5	長 14.7 厚 3.1	幅 7.3 重 420				網雲母石墨緑泥片岩。偏平で側面中央部が幅広い石である。側面中央部に小さな凹状部がある。
32 73	こも編み 石	床面-6	長 13.0 厚 2.7	幅 6.4 重 290				網雲母石墨片岩。偏平で側面中央部が幅広い石である。側面中央部に小さな凹状部がある。
33 73	こも編み 石	床面-22	長 13.2 厚 3.5	幅 6.5 重 400				点紋絹雲母石墨片岩。中央部がやや肉厚の石である。両側面中央部に小さな凹状部がある。
34 73	こも編み 石	床面直上	長 14.1 厚 4.0	幅 6.2 重 470				点紋緑泥片岩。中央部がやや肉厚の石である。両側面中央部に小さな凹状部がある。
35 73	こも編み 石	床面直上	長 14.0 厚 3.8	幅 6.3 重 450				点紋緑泥片岩。中央部がやや肉厚の石である。片側の中央部が凹状を呈し、他の側面に小さな凹状部がある。
36 73	こも編み 石	覆土	長 16.8 厚 3.0	幅 6.1 重 500				緑泥片岩。細長い石である。両側面中央部にわずかな凹状部がある。

445号住居跡 (第113～117図、図版18・19・52・53・72・73)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、58-16グリッドに位置する。

概要 住居南東部分で奈良時代の438号住居と重複しており、その部分は床面まで掘られている。438号住居と重複している部分の東壁中央部やや南寄りに竈の痕跡が確認されたため、竈は北新竈のほかに東壁にも旧竈が造られていた。

構造 床面は地山のロームを主とした土で造られており、床下の掘り込みは少なかった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が新旧竈の右側にそれぞれ掘られていた。新貯蔵穴は確認面で覆土の違ひから方形のプランとして想定された。覆土を除去すると上面でやや方形状を呈すが、中位置以下の部分は他の貯蔵穴同様に円形となった。貯蔵穴の西と南側の遺物配置が直線的で方形を意識させるため、貯蔵穴を覆う方形の蓋の存在が推定される。

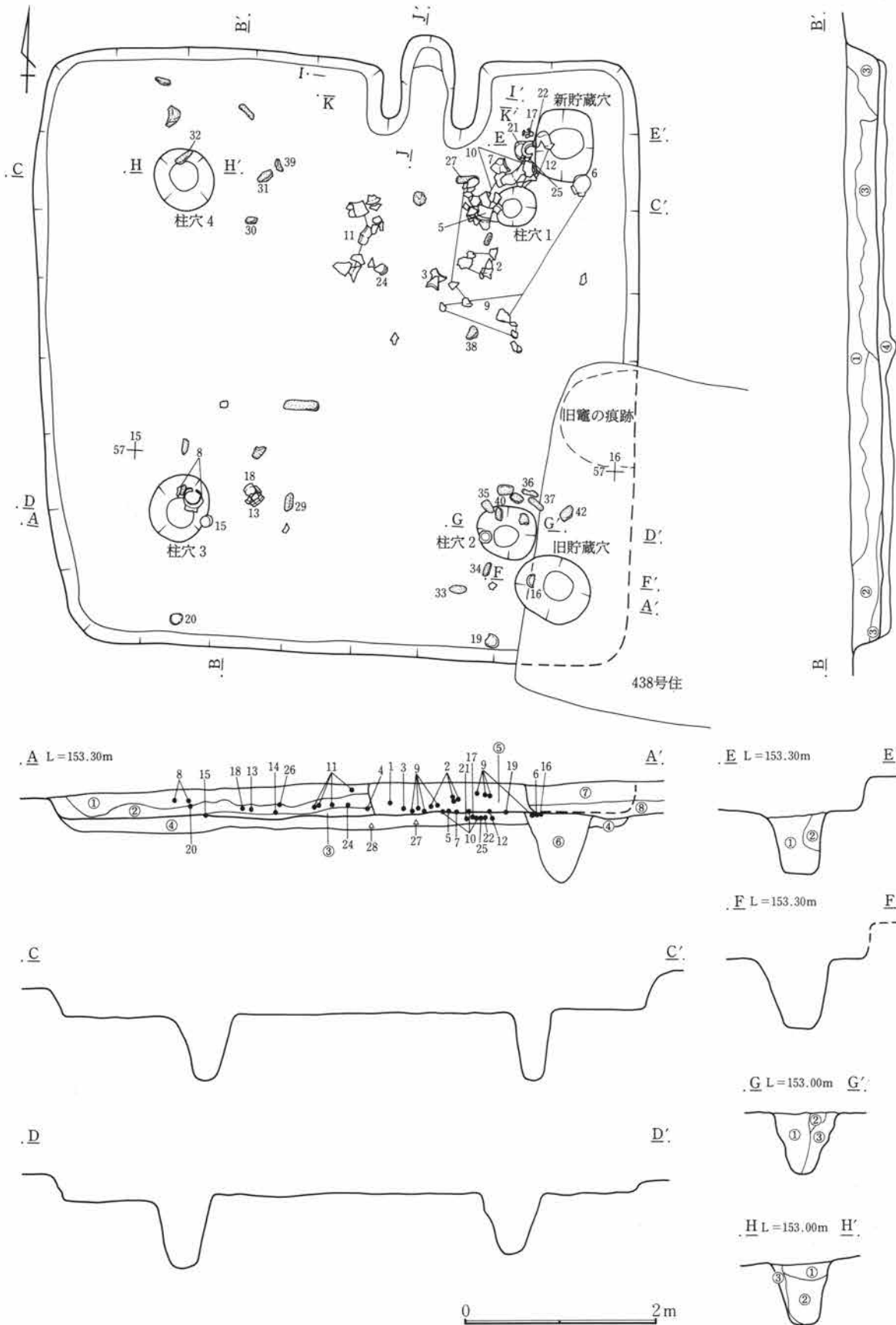
規模 東西6.30m、南北6.18mである。壁高は残りの良い東壁面で38cmである。柱穴1は径42cm深さ71cm、柱穴2は径60cm深さ63cm、柱穴3は径58cm深さ75cm、柱穴4は径62cm深さ69cmである。新貯蔵穴は径60×72cm深さ62cm、旧貯蔵穴は径78cm深さ71cmである。

遺物 竈焚口付近を中心に土師器の甕や坏が多く出土し、竈左側に近い床面部分に置かれた石の上に、3個重なった土師器坏と1個の坏が出土した。また柱穴2付近に多くのこも編み石が出土した。

(新北竈)

概要 住居北壁の東寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られている。燃焼部壁面の一部が焼土粒化し強い赤色を呈し、燃焼部から多くの焼土粒が出土した。

構造 焚口部分の両袖石とその上に載っている天井石、及び燃焼部に支脚石が残存していた。天井石は割れて少し焚口部に移動しているが、他の袖石と支脚石はほぼ使用時の状態を保っていた。さらにその他の燃焼部から細長い石が1つ、また左袖部分に細長い石が4個まとまって出土した。おそらくこれら



第113図 445号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(445号住居跡)

- ①黒褐色土層 多くのローム粒と軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の軽石粒と焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- ④暗黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑤黒褐色土層 攪乱土層。
- ⑥旧貯蔵穴覆土
- ⑦438号住居覆土
- ⑧438号住居床下覆土

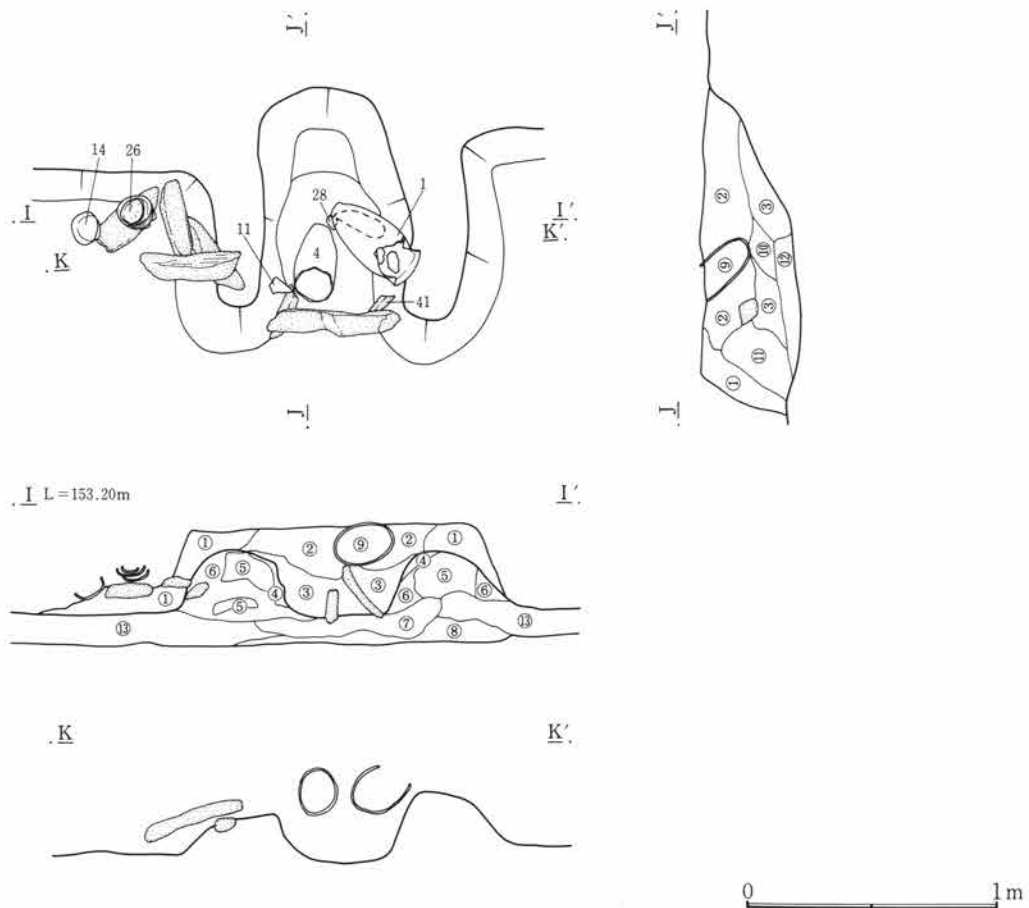
新貯蔵穴

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土と軽石粒を含む。
- ②暗黄褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。
- 柱穴
- ①暗黄褐色土層 多くのロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ②暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ③黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

の多くの石も竈材の一部として使われたものと思われる。

規模 両袖方向126cm、煙道方向112cmである。

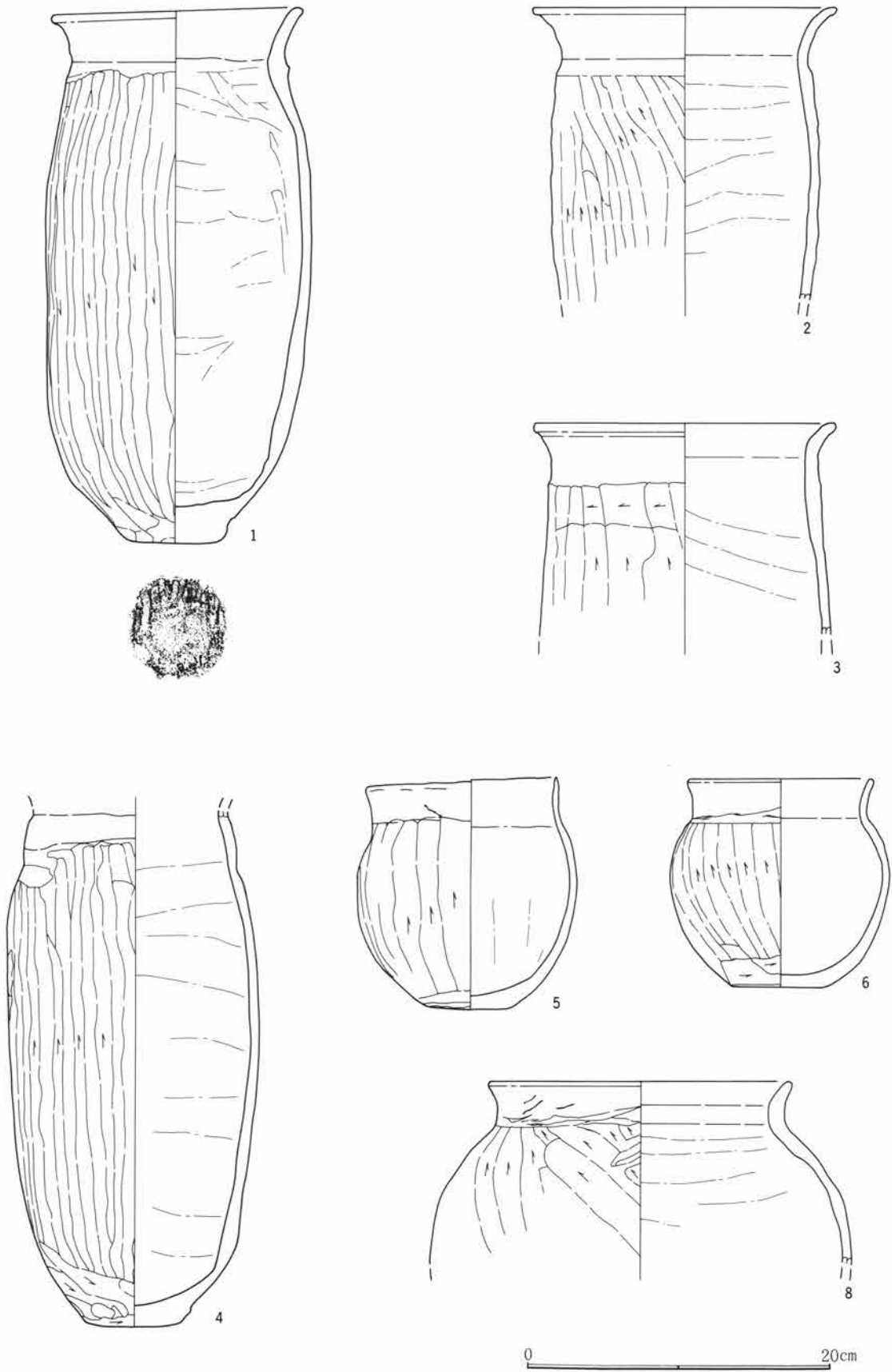
遺物 竈内よりほぼ完形の土師器の甕が2個、焚口部にもたれかかるように出土した。甕の底部は支脚石から外れて燃焼部床面に落ちるといったことはなく、支脚石より高い位置となっており甕の下に竈の埋没土が堆積している。このような状況から、2個の甕は住居廃棄時には使用時の状態を保っていた可能性が想定される。



新北竈

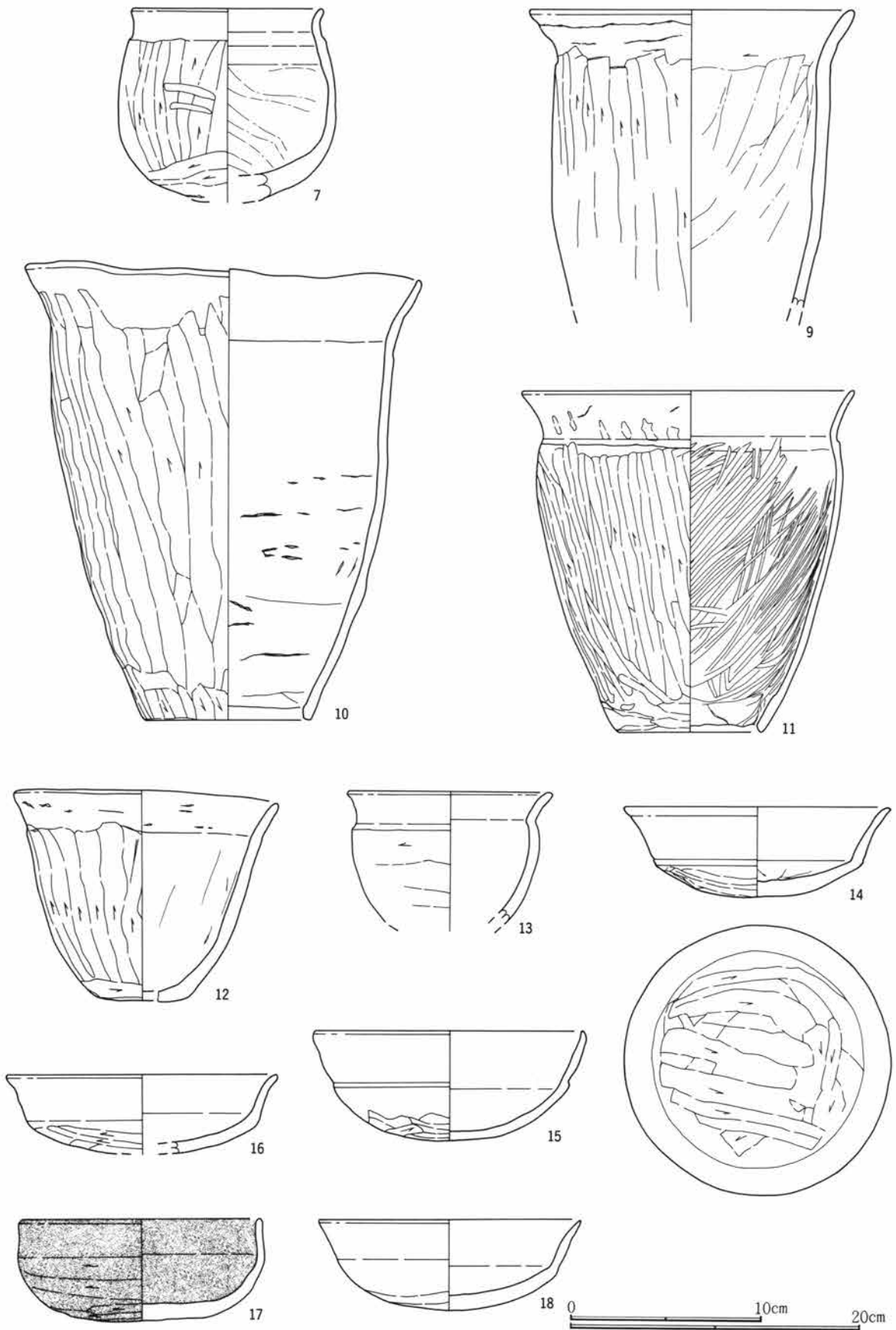
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒・ロームブロックと焼土粒を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒とロームブロックを含む。
- ④赤褐色土層 焼土粒を大量に含む。
- ⑤黄褐色土層 ロームを主とする層。
- ⑥暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒と多くの黒褐色土を含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒と僅かな焼土粒を含む。
- ⑧黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑨暗褐色土層 土師器甕内の層。
- ⑩暗赤褐色土層 焼土粒をブロック状に含む。
- ⑪褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑫暗赤褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑬暗黄褐色土層 ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。

第114図 445号住居跡新北竈実測図

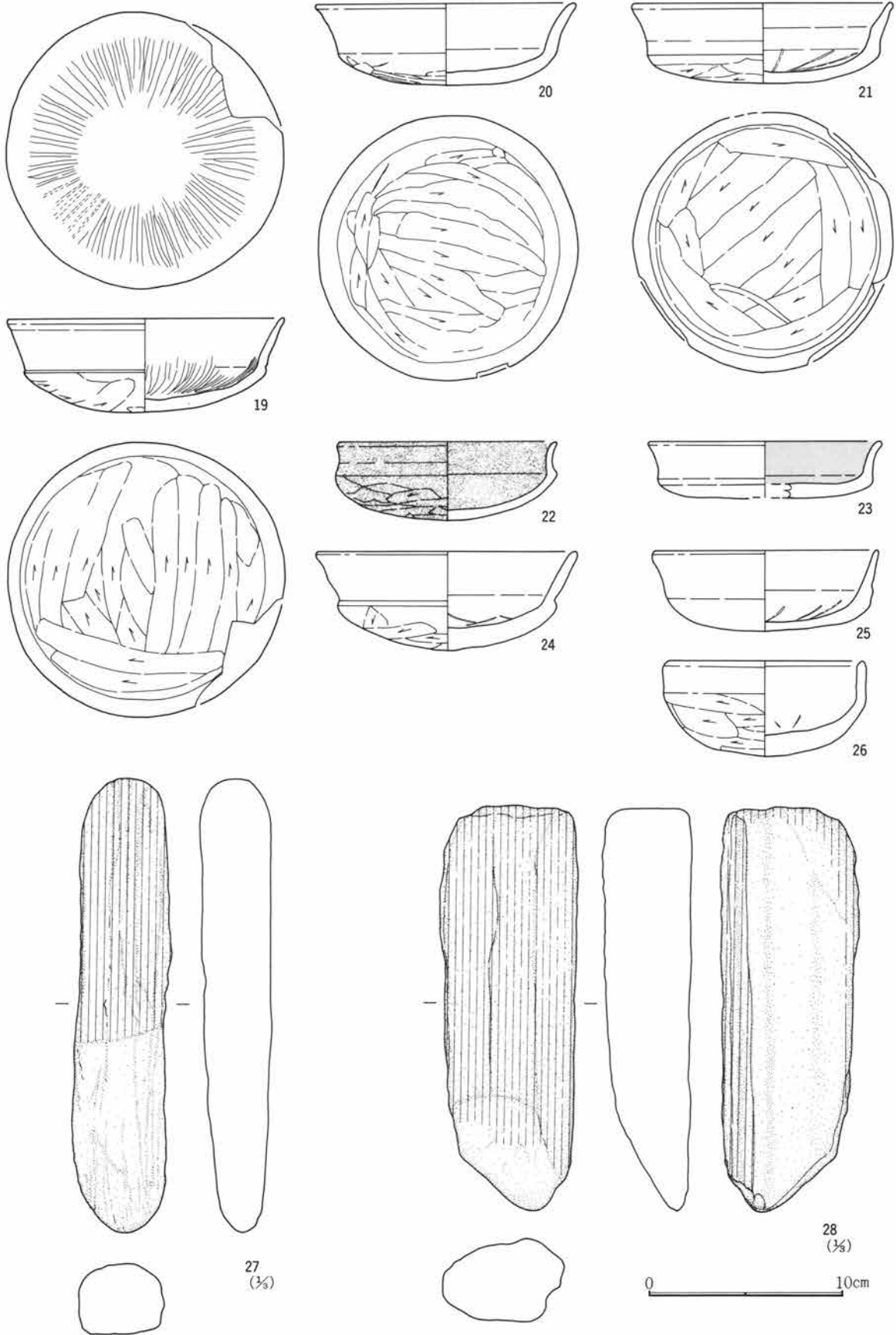


第115図 445号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第116図 445号住居跡出土遺物実測図(2)



第117図 445号住居跡出土遺物実測図(3)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

445号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
115-1 52	土 師 器 甕	竈内+13 口縁%残存 他完形	口(16.1) 高 35.5 底 6.7	①粗、3~6mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。周辺部ヘラナデ。胴外面指ナデ。口縁部横ナデ。内 面ナデにより器表面密。
115-2 52	土 師 器 甕	床面+9 口縁部% 胴上部%	口(20.0) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く、 6mmの片岩粒を少量含む。 ② 酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削りで、器表面に多くの砂粒や小石が目立ち粗い 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
115-3 52	土 師 器 甕	床面+8 %残存	口(19.8) 高 — 底 —	①粗、3~6mmの長石と片岩粒 を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削りで、器表面に多くの砂粒や小石が目立ち粗い 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 10mm前後の小石をわずかに含む。
115-4 52	土 師 器 甕	竈内+8 口縁以外 ほぼ完形	口 — 高 — 底 6.6	①粗、3~6mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、 硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴外面ナデ。下半部ヘラ削り。頸部横ナデ。内 面ナデで器表面密。
115-5 52	土 師 器 小型甕	床面+5 %残存	口 12.7 高 15.3 底 5.4	①粗、3~6mmの長石と片岩粒 を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ナデ。胴部外面の器表面が粗いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面はナデにより器表面密。 胎土の粗い長甕。全体的に歪んでいる。
115-6 52	土 師 器 小型甕	床面直上 口~胴部% 底部完形	口(12.1) 高 13.7 底 6.0	①密、砂粒ほとんど含まず粉状 を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面粉状の坏 と同様な胎土。
116-7 53	土 師 器 小型甕	床面+4 %残存	口(13.1) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。器表面粗れていない。口縁部横ナデ。 内面ていねいなナデにより器表面密。 底部周辺の器肉が特に厚い。
115-8 52	土 師 器 壺	床面+16 口縁部ほぼ 完形・他%	口 20.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を 多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外側ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
116-9	土 師 器 甕	床面直上 %残存	口 22.2 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 硬質 ③にぶい黄橙色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 口縁部外側に多くの輪積痕が残る。
116-10 52	土 師 器 甕	床面+5 ほぼ完形	口 27.1 高 31.5 底 11.5	①やや粗、3~5mmの長石粒を 少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・一部外面黒色	胴下端部ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 外面の器表面も密である。
116-11 52	土 師 器 甕	竈内+27 床面+9 ほぼ完形	口 22.8 高 23.4 底 10.0	①密、砂粒ほとんど含まず、少 量の赤色粒を含む。 ②酸化焰 硬質③橙色	胴外面細長い数多くのヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ヘラ磨き により器表面きわめて密。器肉が薄い。 器形は大きい、砂粒は目立たなく、内外面とも器表面密。
116-12 53	土 師 器 小型甕	新貯蔵穴内 床面直上 ほぼ完形	口 18.4 高 14.6 底 5.6	①粗、1~3mmの砂粒と片岩粒 を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴外面ヘラ削りで器表面に多くの砂粒が目立つ。 口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
116-13 53	土 師 器 小型甕	床面+8 口縁部完形 胴部%残存	口 14.0 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③灰褐色	胴部横方向ヘラ削り。器表面に砂粒が目立ち粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 粗雑な感じの作りである。
116-14 53	土 師 器 坏	床面+5 完形	口 13.5 高 4.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 稜は明瞭でない。底部の器肉が厚い。
116-15 53	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.8 高 5.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面中央部ヘラ削り。周辺部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ていねいなナデ。 口縁部が長い。
116-16 53	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口(13.9) 高 — 底 —	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部ヘラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。 内面ていねいなナデ。
116-17 53	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口(12.5) 高 5.2 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐 色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。 砂粒含まず全体がやや粉状を呈する。
116-18 53	土 師 器 坏	床面+8 ほぼ完形	口 13.5 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	表面全体が磨耗しており、多くの小さな砂粒が浮きあがっている。 ヘラ削りの単位等ほとんど不明。
117-19 53	土 師 器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 14.1 高 4.8 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面に多くの放射状 のヘラ磨き。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
117-20 53	土師器 坏	床面+11 ほぼ完形	口 13.3 高 4.1 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭でない。
117-21 53	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.2 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。内面に12本の放射状のヘラ磨き。
117-22 53	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.2 高 3.9 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色・一部橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は高く明瞭である。
117-23	土師器 坏	覆土 破片	口(11.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	内外表面全体が、わずかに剝離している。口縁部横ナデ。浅い皿状を呈する坏である。
117-24 53	土師器 坏	床面+12 口縁部以 底部完形	口(13.4) 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は明瞭である。底部の器肉が厚く、口縁部が大きく開く器形である。
117-25 53	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.6 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面の大部分は、わずかに剝離している。内面に9本の放射状のヘラ磨き。
117-26 53	土師器 坏	床面+10 完形	口 9.9 高 4.8 底 丸底	①粗、2～4mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。内側底面中央部にヘラの工具痕あり。
117-27 72	石製品 支脚	床面-5	長 23.2 厚 3.5 重 700	① 4.4	上端が火を受けて赤色化している。竈の支脚として使用された石と思われる。絹雲母石墨片岩。
117-28 72	石製品 支脚	竈内-10	長 20.2 幅 7.0 厚 4.5 重 1,050		竈内で支脚石として使用されていた。片岩が火を受けてやや赤色化している。
29 73	こも編み 石	床面直上	長 15.6 幅 7.6 厚 6.3 重 850		絹雲母石墨片岩。断面三角形を呈する石である。側面の一部にわずかな凹状部を持つ。
30 73	こも編み 石	床面直上	長 13.8 幅 7.0 厚 3.0 重 400		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面の中央部に打ち欠かれた小さな凹状部を持つ。
31 73	こも編み 石	床面直上	長 16.8 幅 7.8 厚 3.7 重 720		点紋絹雲母石墨片岩。側面中央部が幅広い石である。わずかな凹状部を持つ。
32 73	こも編み 石	床面-5	長 15.3 幅 6.5 厚 4.5 重 750		緑簾緑泥片岩。断面長方形を呈する石である。側面中央部がわずかに凹状を呈する。
33 73	こも編み 石	床面+8	長 15.1 幅 8.4 厚 6.5 重 1,100		絹雲母石墨緑泥片岩。断面長方形を呈する石である。側面中央部がわずかに凹状を呈する。一部欠損。
34 73	こも編み 石	床面直上	長 15.3 幅 7.2 厚 6.2 重 920		点紋絹雲母石墨片岩。断面三角形を呈する石である。側面中央部がわずかに凹状を呈する。
35 73	こも編み 石	床面直上	長 15.6 幅 8.1 厚 3.9 重 700		点紋絹雲母石墨片岩。やや偏平な石である。側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
36 73	こも編み 石	床面直上	長 15.5 幅 7.6 厚 5.4 重 850		緑簾緑泥片岩。不定形な石である。側面中央部が凹状を呈する。
37 73	こも編み 石	床面直上	長 16.5 幅 7.2 厚 4.6 重 730		点紋絹雲母石墨片岩。中央部が肉厚となる石である。側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
38 73	こも編み 石	床面+7	長 7.0 幅 8.0 厚 3.7 重 600		点紋絹雲母石墨片岩。偏平で短く幅広い石である。両側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
39 73	こも編み 石	床面直上	長 14.1 幅 7.8 厚 5.8 重 800		絹雲母石墨片岩。中央部が肉厚となる石である。片側の側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
40 73	こも編み 石	床面直上	長 14.3 幅 7.3 厚 5.5 重 800		絹雲母石墨片岩。中央部が肉厚となる石である。片側の側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
41 73	こも編み 石	床面-7	長 17.7 幅 8.4 厚 3.0 重 520		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。側面中央部の凹状部はほとんど認められない。
42 73	こも編み 石	床面-4	長 14.0 幅 7.3 厚 5.1 重 650		絹雲母石墨片岩。中央部が肉厚となる石である。片面は凹状を呈し、他の側面中央部に打ち欠かれた凹面あり。

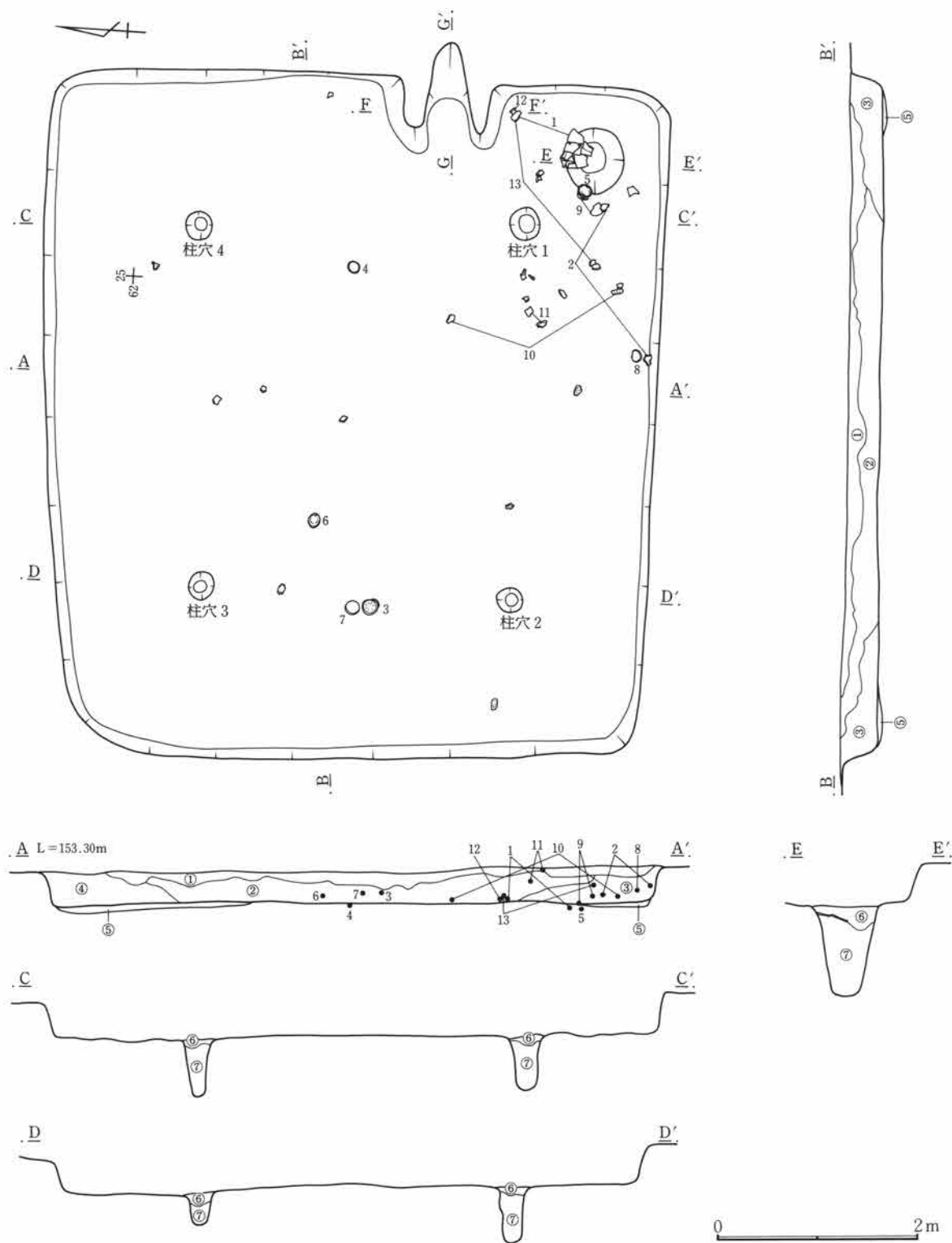
第3章 古墳時代の遺構と遺物

446号住居跡 (第118~120図、図版19・53・54)

位置 本住居跡は、第7次調査区南東部にあり、62-25グリッドに位置する。

概要 他の遺構と重複しない住居であり、壁面の残りと掘り込みが深く残りの良好な住居である。

構造 床面は地山のロームを主とした土で造られており、床下の掘り込みは少なかった。柱穴は4本確認さ



第118図 446号住居跡実測図

(446号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 ②層に近いが、ローム小ブロックを含む量が少ない。
- ④暗褐色土層 ②③層に比較し、より多くのローム小ブロック(1~1.5cm)を含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑥黒褐色土層 ローム粒(3mm前後)を少量含む。
- ⑦暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

れ、貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。この貯蔵穴がほぼ床面の高さまで埋まった状態で、貯蔵穴上から完形の甗が出土した。そのためこの貯蔵穴は住居最終段階で埋められていた可能性も認められる。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西6.67m、南北6.05mである。壁高は残りの良い南壁面で46cmである。柱穴1は径30cm深さ57cm、柱穴2は径28cm深さ55cm、柱穴3は径26cm深さ36cm、柱穴4は径28cm深さ61cmである。貯蔵穴は径56cm深さ90cmでほぼ円形を呈する。

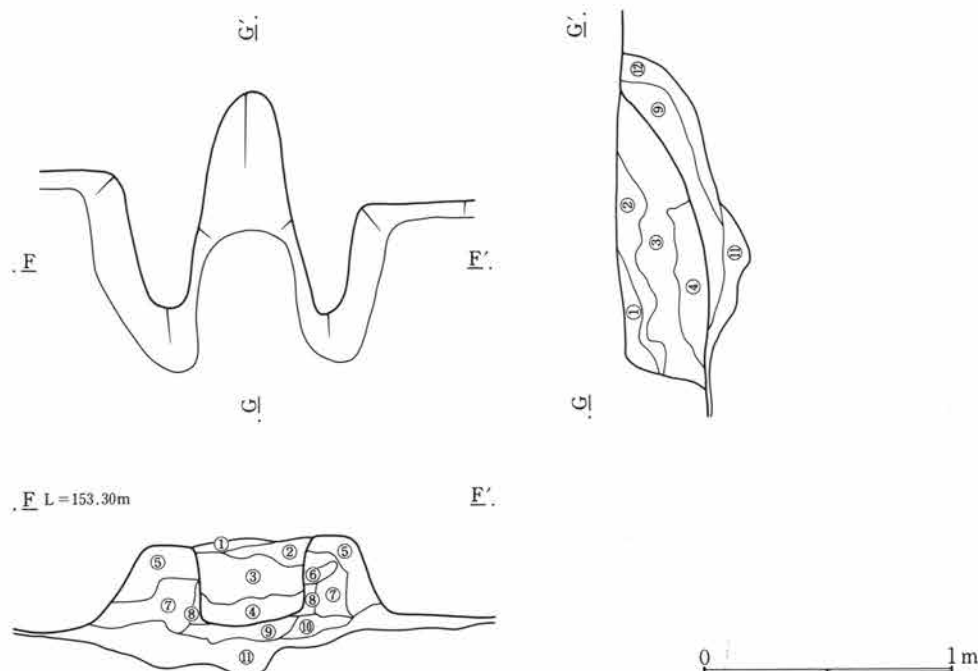
遺物 貯蔵穴付近を中心に土師器の坏や甕が出土した。

(竈)

概要 住居東壁の南寄りに造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られている。壁面の一部が焼土粒化し強い赤色を呈していた。

構造 竈材として使われた多くのロームが残っており、比較的残りの良好な竈であった。袖石や天井石は使用しないで造られた竈と思われる。燃烧部を中心とした竈内より多くの焼土粒が出土した。

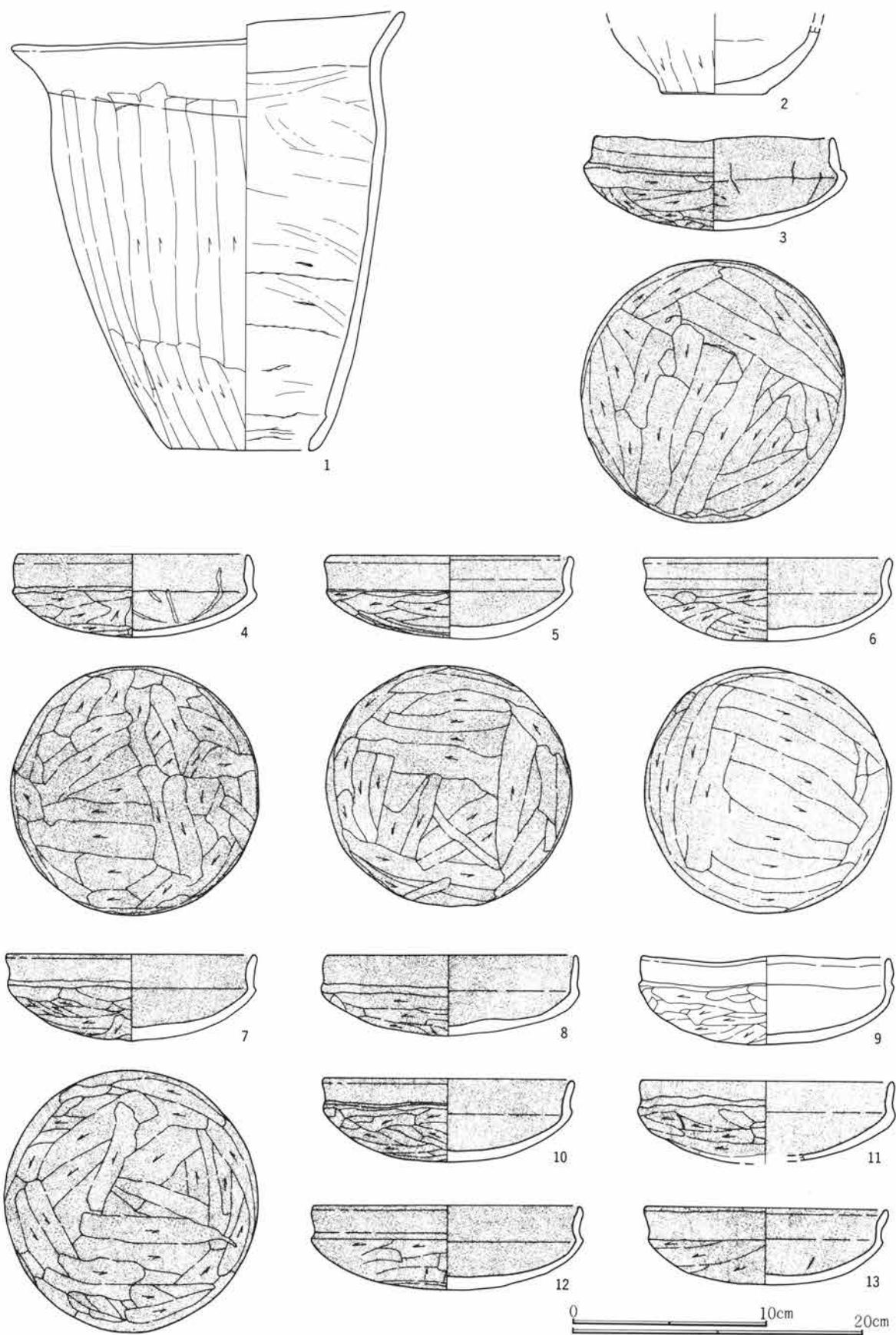
規模 両袖方向108cm、煙道方向112cmである。



竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ②黄褐色土層 ロームブロックを主とした層。
- ③褐色土層 多くのロームブロックと少量の暗褐色土及び焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム小ブロック・焼土粒・灰を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒と部分的に焼土粒を含む。
- ⑦黄褐色土層 ロームブロックを主とした層。
- ⑧赤色土層 焼土層。
- ⑨暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ⑩黒褐色土層 少量のローム粒を含む。
- ⑪黒褐色土層 ⑩層より多くのロームブロックを含む。
- ⑫黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

第119図 446号住居跡竈実測図



第120図 446号住居跡出土遺物実測図

446号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
120-1 53	土 師 器 甗	貯穴内-6 床面+4 ほぼ完形	口 27.0 高 30.2 底 10.0	①粗、3~5mmの長石粒を含むが、片岩粒は不明。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端へら削り。胴外面強いへら削りで多くの粘土と砂粒が移動し粗雑。口縁部横ナデ。内面ナデ。器表面密。内面のナデは横方向である。
120-2	土 師 器 甗	床面+7 %残存	口 — 高 — 底 7.2	①粗、5mm前後の片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色・一部橙色	底面へら削り。胴部外面へら削りで多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデで器表面密。
120-3 53	土 師 器 坏	床面+10 完形	口 12.3 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。4の坏に近い。全体が少し歪んでいる。
120-4 53	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 12.0 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。内面に暗文状のへら磨き。
120-5 53	土 師 器 坏	貯蔵穴内 -6 完形	口 12.4 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。均整のとれた坏である。
120-6 53	土 師 器 坏	床面+6 完形	口 12.7 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・断面橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。均整のとれた坏である。外面は吸炭による黒色か。
120-7 53	土 師 器 坏	床面+9 ほぼ完形	口 13.0 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。
120-8 53	土 師 器 坏	床面+11 %残存	口 13.0 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。
120-9 53	土 師 器 坏	貯内・床直 床面+6 %残存	口(12.9) 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・底面の一部黒褐色	底面は幅の狭いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体的に少し歪んでいる。
120-10 53	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口(13.0) 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面は幅の狭いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。少し歪んでいる。
120-11	土 師 器 坏	床面+22 %残存	口(13.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。口縁部が少し歪んでいる。
120-12	土 師 器 坏	床面+4 %残存	口(13.9) 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。
120-13 54	土 師 器 坏	床面+4 %残存	口(12.5) 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部内面黒色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は鋭角で明瞭である。

448号住居跡 (第121~123図、図版20)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、62-18・19グリッドに位置する。

概要 南西端部で平安時代の449号住居と重複しており、一部の覆土上面と壁面が削り取られている。しかし床面の高さが、449号住居より約17cmほど低いいため壁面下部と床面は残っていた。また住居南側の壁面と床面を26号溝により、東西方向に床面下まで掘り込まれていた。そのため南東コーナー部分の住居範囲は確認できなかった。竈が東壁中央部やや南側に掘られている。

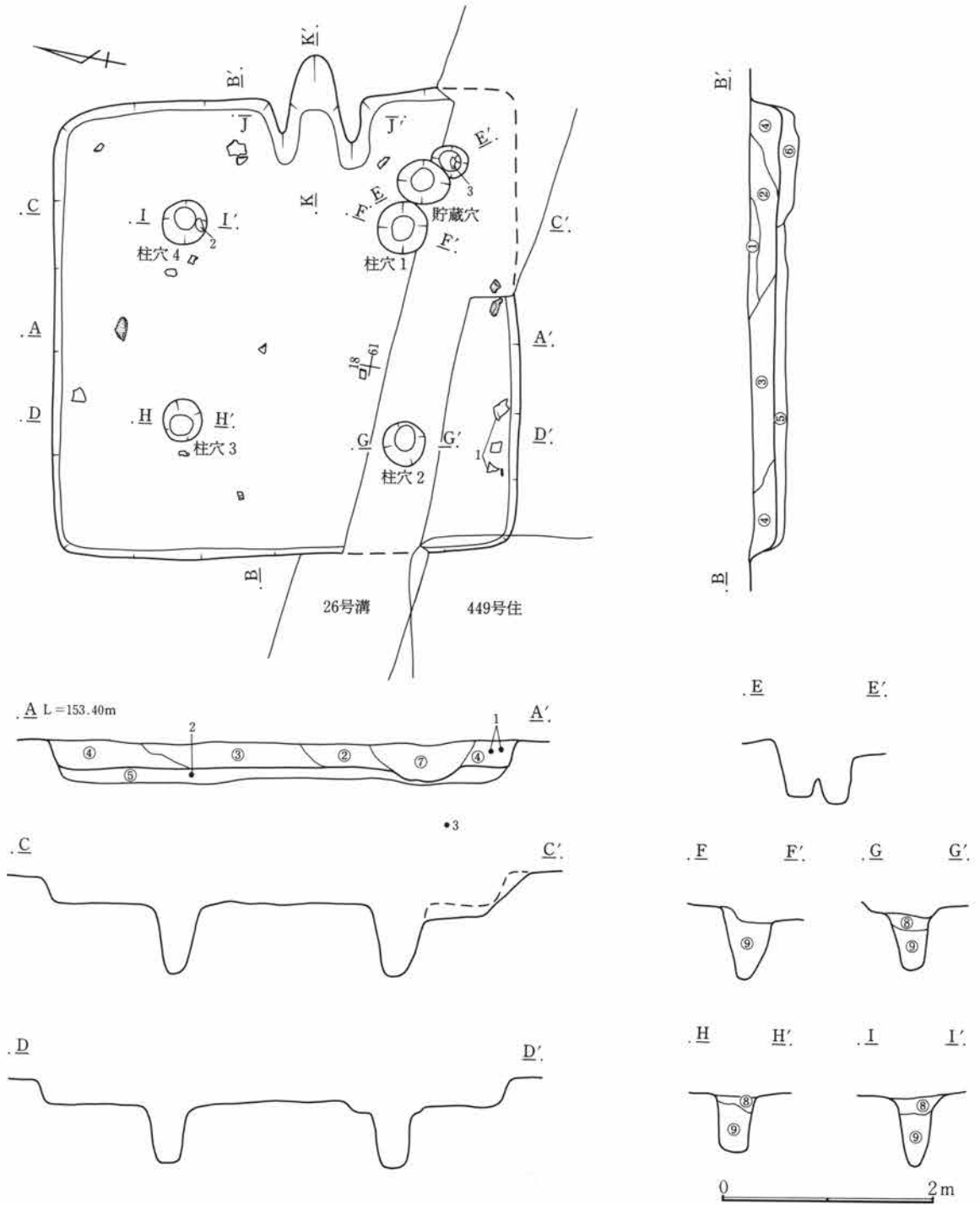
構造 床面はロームを主とした土で固めてあり、柱穴は4本確認された。貯蔵穴と思われる小穴が竈の右側に2個掘られていた。壁寄りの小穴は小さいため柱穴1に近い小穴が貯蔵穴と思われ、そのように扱ったが明確でない。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西4.25m、南北4.40mである。壁高は残りの良い南壁面で28cmである。柱穴1は径48cm深さ68cm、柱穴2は径40cm深さ59cm、柱穴3は径36cm深さ56cm、柱穴4は径43cm深さ69cmである。貯蔵穴は径44cm深さ51cmでほぼ円形を呈する。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

床下 竈左側付近に2基の床下土坑が掘られていた。床面からの深さを数字で示した。

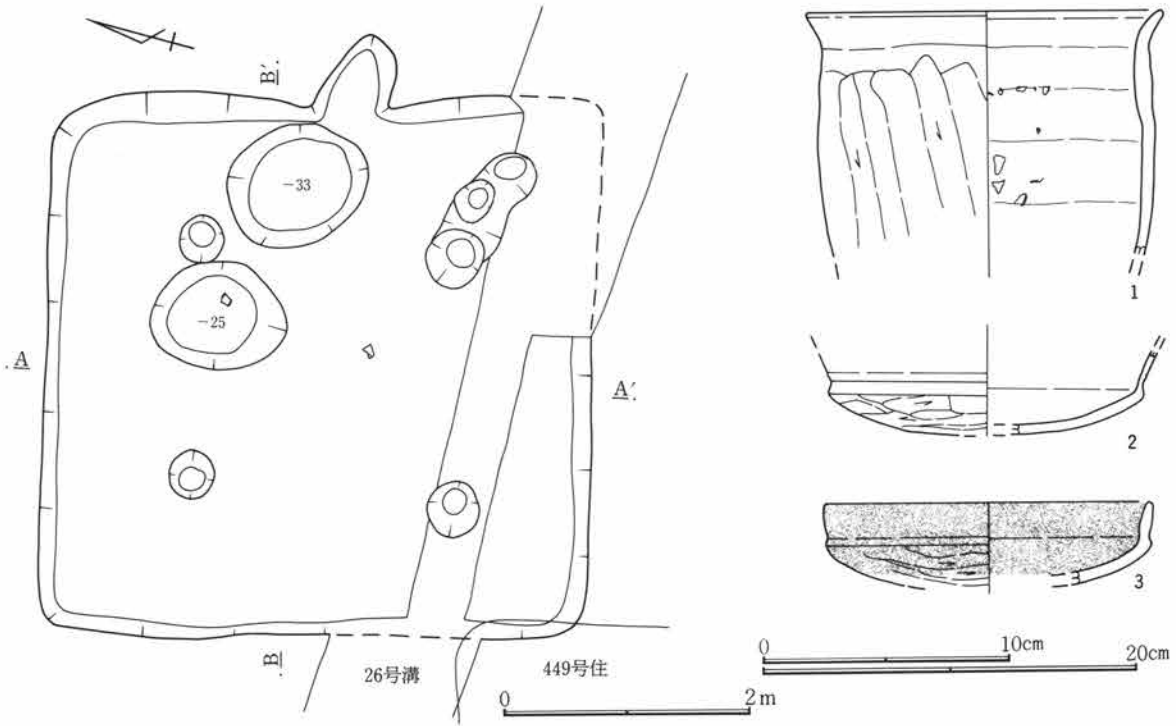
遺物 土師器の甑と多くの坏を出土した。



(448号住居跡)

- | | | | |
|---------|-------------------------------|---------|-------------------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒 (1~2mm) を含む。 | ⑥暗褐色土層 | 多くのローム粒 (1~5mm) とローム小ブロックを含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロック (1~3cm) を含む。 | ⑦26号溝覆土 | 多くのローム粒 (1~3mm) を含む。 |
| ③暗褐色土層 | ②層に近いが、ロームブロックが小さく、含む量も少ない。 | ⑧暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロック (1~3mm) を含む。 |
| ④暗褐色土層 | 多くのローム粒 (1~5mm) を含む。 | ⑨暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロック (1~3mm) を含む。 |
| ⑤暗黄褐色土層 | 地山のロームを主とし、褐色土が混入する。 | | |

第121図 448号住居跡実測図

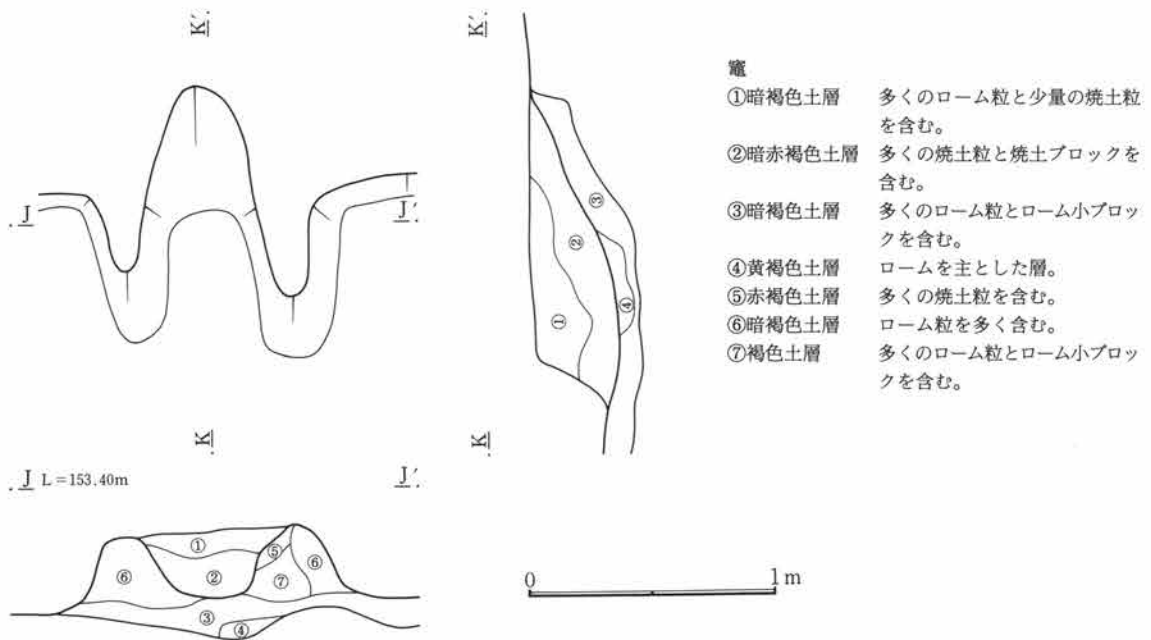


第122図 448号住居跡床下・出土遺物実測図

(竈)

概要 住居東壁の中央部やや南寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。袖石や天井石は全く出土していないため、ロームを主として造られた竈であると思われる。燃焼部付近から多くの焼土粒と焼土ブロックが出土した。

規模 両袖方向98cm、煙道方向105cmである。



- 竈
- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
 - ②暗赤褐色土層 多くの焼土粒と焼土ブロックを含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ④黄褐色土層 ロームを主とした層。
 - ⑤赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
 - ⑥暗褐色土層 ローム粒を多く含む。
 - ⑦褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。

第123図 448号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

448号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
122-1	土師器 甕	床面+17 破片	口(18.9) 高— 底—	①粗、3～5mmの長石粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴部外面へら削りで器表面が粗れている。内面ナデで密。口縁部横ナデ。
122-2	土師器 坏	ピット内 -7 破片	口— 高— 底—	①密、赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面底部にへらの工具痕あり。
122-3	土師器 坏	貯蔵穴内 -53 破片	口(13.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③内面黒褐色・他にぶい黄橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は低いが明瞭である。

456号住居跡 (第124～130図、図版20・21・54・55・74)

位置 本住居跡は、第7次調査区南西部にあり、62-16・17グリッドに位置する。

概要 竈が東壁・北壁・西壁で確認された。北側が最後まで使われていた新竈である。東西の旧竈は床面上に位置する両袖部や燃焼部はすべて取り外されて残っていなかったが、壁面を掘り込んで造られていた燃焼部の一部と煙道部は良好に残っていた。東西の旧竈における新旧関係は確認できなかった。住居南側を東西方向に掘られている26号溝により、一部床下まで掘り抜かれている。

構造 床面はロームブロックを主とした土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴がそれぞれの竈に伴い掘られていたが、北壁の新竈と東壁の旧竈では竈右側に掘られていたが、西壁の旧竈では竈左側に掘られていた。新竈に伴う貯蔵穴の西と南側に土塁状の僅かな高まりが確認された。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西7.34m、南北7.40mである。壁高は残りの良い南壁部分で48cmである。柱穴1は径41cm深さ88cm、柱穴2は径38cm深さ74cm、柱穴3は径52cm深さ45cm、柱穴4は径36cm深さ60cmである。新貯蔵穴は径76cm深さ96cm、旧南東貯蔵穴は径52cm深さ33cm、旧南西貯蔵穴は径88cm深さ65cmであった。

遺物 土師器の甕や坏等が出土した。ほぼ完形の高坏が3個出土しており注目される。

(新北竈)

概要 住居北壁の中央やや東寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。袖石や天井石等は全く出土していないため、ロームを主として造られた竈であると思われる。

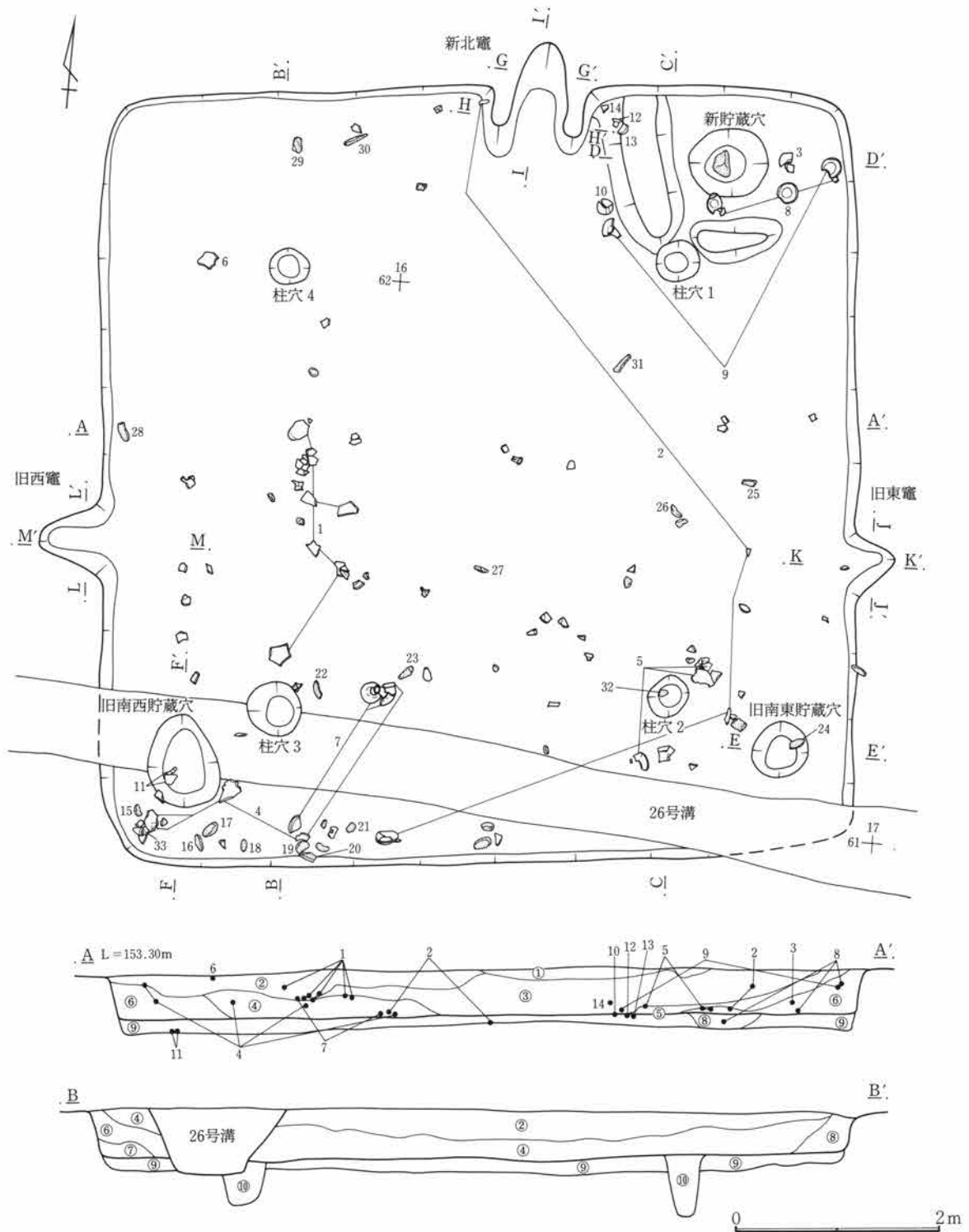
規模 両袖方向116cm、煙道方向106cmである。

(旧東竈)

概要 住居東壁の南寄りに造られている。床面上に位置する袖部と燃焼部はすべて取り外されている。燃焼部の一部と煙道部が壁面を僅かに掘り込んでいる。煙道部方向の土層断面の観察から燃焼部が削り取られ、一部焼土粒が住居内まで流れ込んでいることがわかる。床面下に位置する燃焼部床下から多くの焼土粒が出土した。

(旧西竈)

概要 住居西壁の南寄りに造られている。床面上に位置する袖部と燃焼部はすべて取り外されている。壁面は煙道部として掘り込まれており、燃焼部の大部分は床面上に位置する。煙道部方向からの土層断面の燃焼部が観察により削り取られていることが明らかである。床面下に位置する燃焼部床面から多くの焼土粒が出土した。

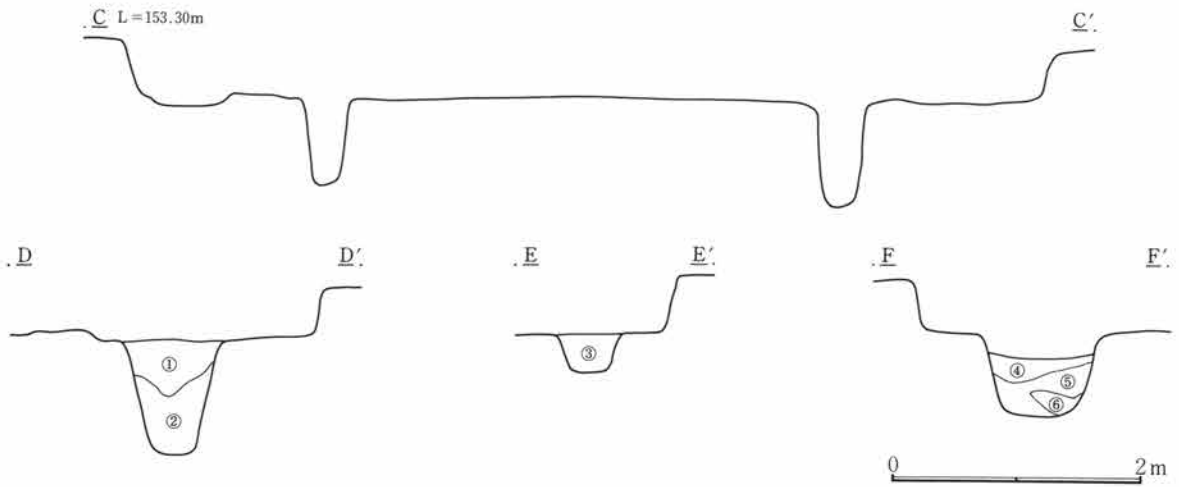


(456号住居跡)

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| ①暗褐色土層 多くのローム粒 (1~3mm) と白色軽石粒を含む。 | ⑥暗褐色土層 多くのローム小ブロックと少量の軽石粒を含む。 |
| ②暗褐色土層 多くのローム粒 (1~5mm) と白色軽石粒を含む。 | ⑦暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含み、やや黒色を帯びる。 |
| ③暗褐色土層 多くのローム粒と黒褐色土ブロック (1~3cm) が混じる。 | ⑧黄褐色土層 多くのローム粒を含む。 |
| ④暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。 | ⑨黄褐色土層 多量のロームブロック (1~5cm) を含む。 |
| ⑤黒褐色土層 多くのローム粒と黒褐色土を含む。 | ⑩柱穴覆土 |

第124図 456号住居跡実測図(1)

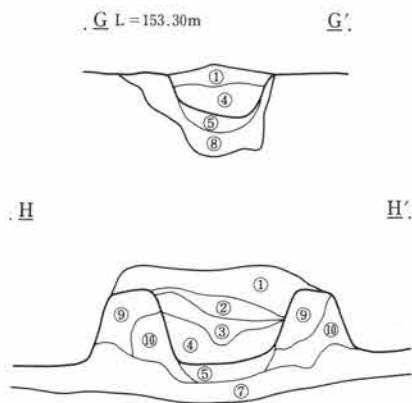
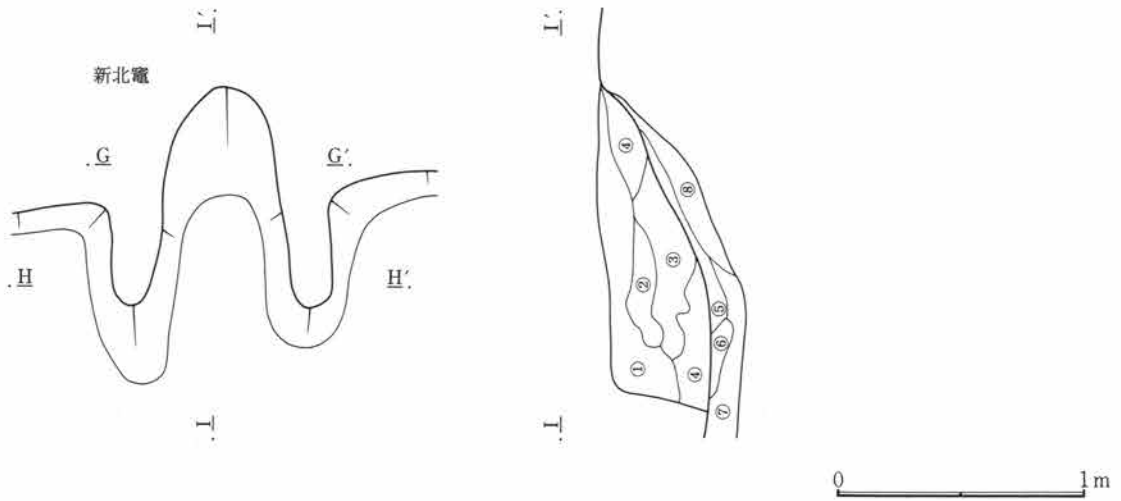
第3章 古墳時代の遺構と遺物



貯蔵穴

- | | | |
|--------|-----------------------------|----------------------------|
| ①暗褐色土層 | ローム粒 (1~5mm) を多く、少量の炭化物を含む。 | 含む。 |
| ②暗褐色土層 | ローム粒 (1mm前後) を多く含む。 | ⑤黒褐色土層 少量のローム粒と炭化物と焼土粒を含む。 |
| ③暗褐色土層 | ローム粒 (1~5mm) を多く含む。 | ⑥黒褐色土層 多くのローム小ブロックを含む。 |
| ④黒褐色土層 | ローム粒 (1mm前後)・焼土粒・炭化物を比較的多く | |

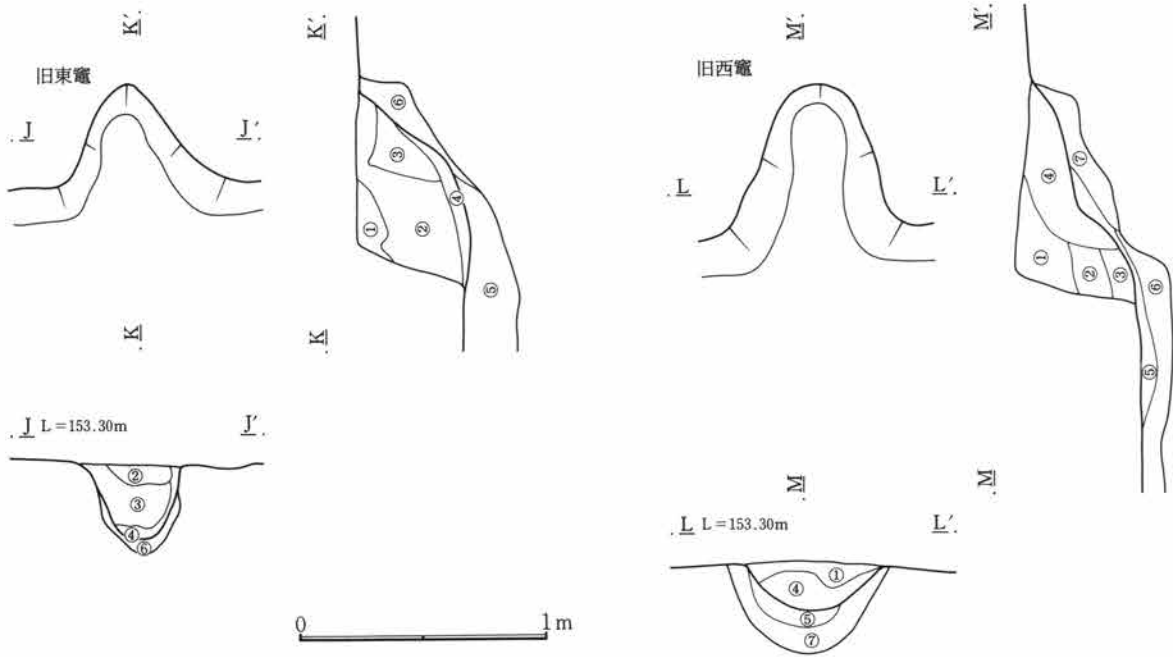
第125図 456号住居跡実測図(2)



新北竈

- | | |
|-----------|-----------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 |
| ③暗褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。 |
| ④暗赤褐色土層 | 多くの焼土粒を含む。 |
| ⑤暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 |
| ⑥暗赤褐色土層 | 多くの焼土粒とローム小ブロックを含む。 |
| ⑦黒褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。 |
| ⑧黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ⑨暗褐色土層 | ロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。 |
| ⑩灰黄褐色粘質土層 | 少量の焼土粒を含む。 |

第126図 456号住居跡新北竈実測図



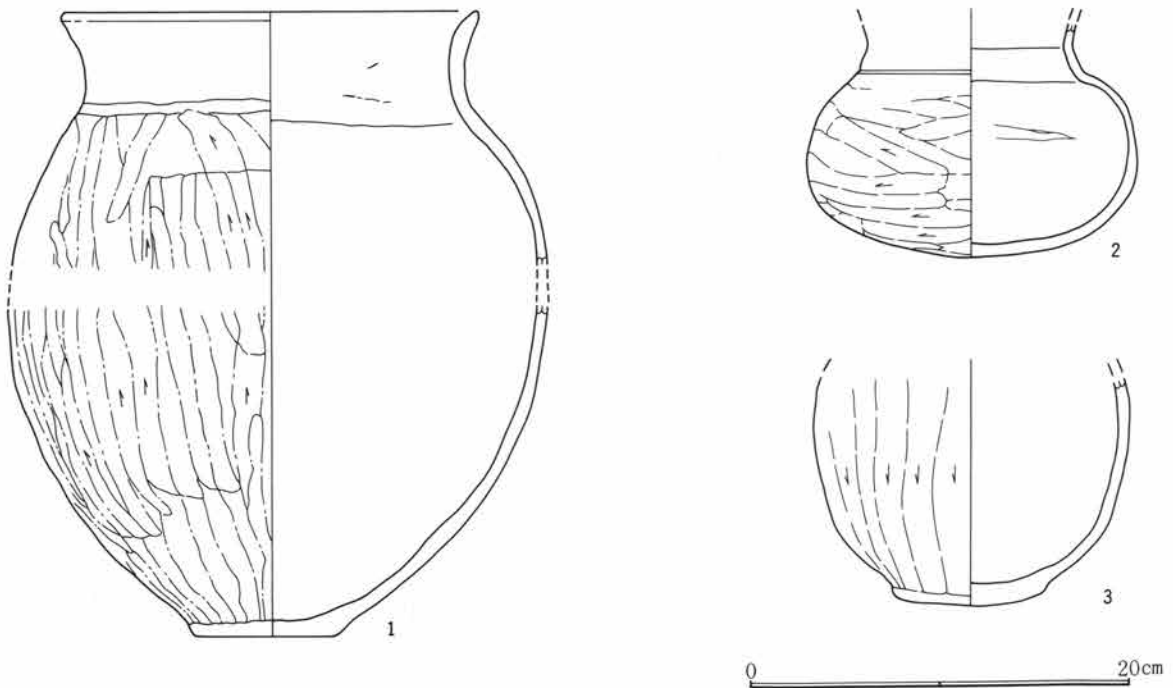
旧東竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ③暗黄褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒と灰を含む。
- ④暗褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
- ⑤暗褐色土層 多量のロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑥黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

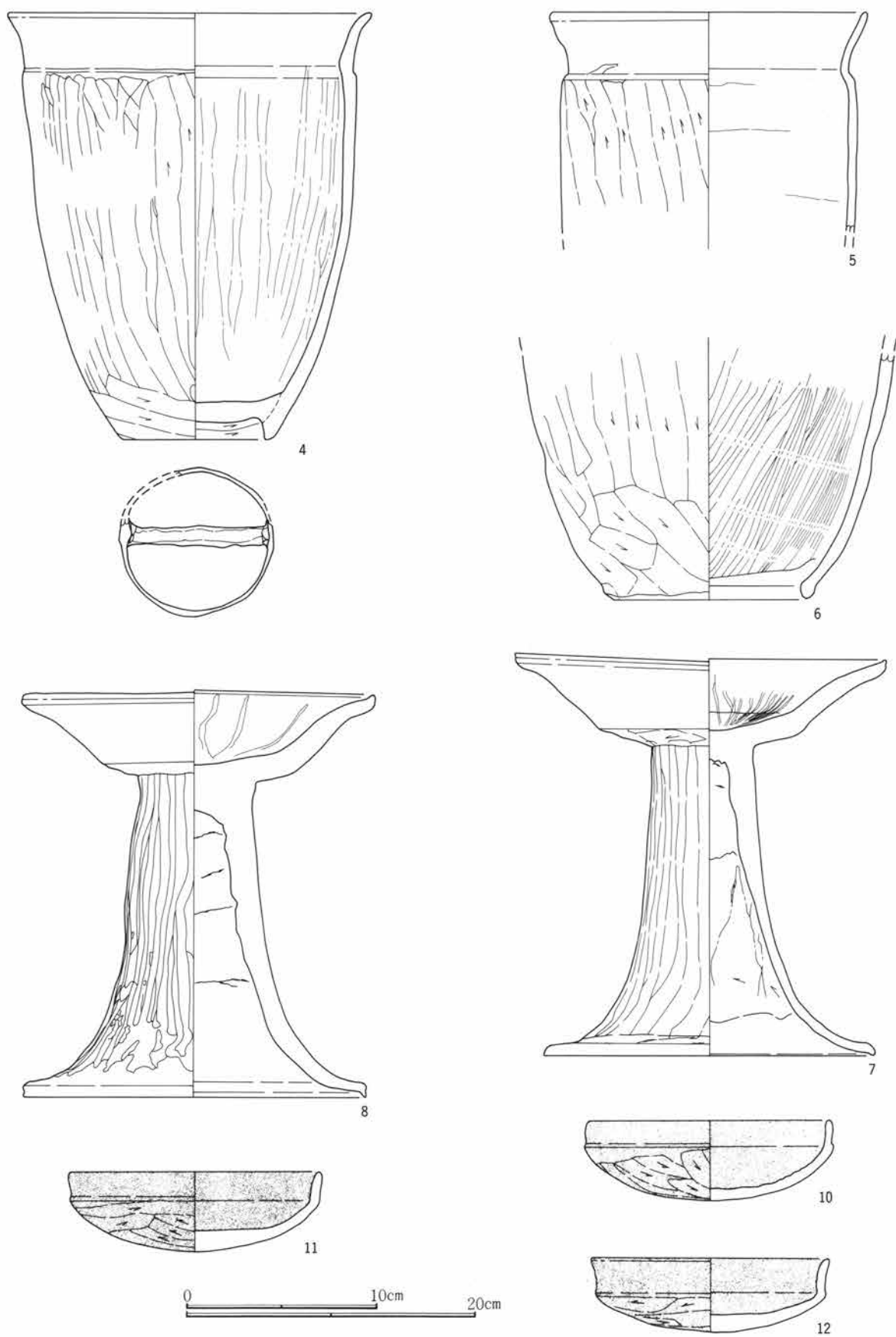
旧西竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②黒褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

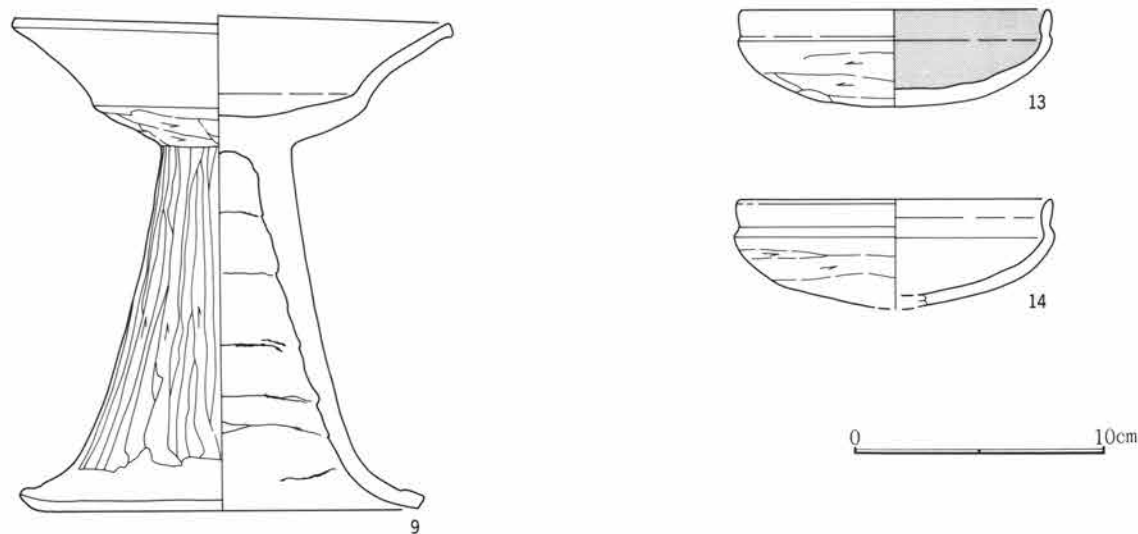
第127図 456号住居跡旧東竈・旧西竈実測図



第128図 456号住居跡出土遺物実測図(1)



第129図 456号住居跡出土遺物実測図(2)



第130図 456号住居跡出土遺物実測図(3)

456号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
128-1 54	土 節 器 壺	床面+17 底部完形 他%残存	口(22.0) 高(33.0) 底 7.5	①粗、1~3mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴部外面ナデで器表面密。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面密。内側器表面の一部が剝離している。
128-2 54	土 節 器 壺	床面+18 口~頸部以 外ほぼ完形	口 — 高 — 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面黒褐色一部橙色	底~胴外面ヘラ削り。頸部~口縁部ヘラ削り。内面ていねいなナデにより器表面密。出土例の少ない壺である。
128-3	土 節 器 甕	床面-6 胴部%残存 底部完形	口 — 高 — 底 丸底	①粗、1~3mmの長石粒を少量1mm内外の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ていねいなナデ。底部は端部を削り出して作っている。胴部外側ヘラ削りにより、砂粒が動き器表面が粗い。内面ナデで器表面密。
129-4 54	土 節 器 甕	床面直上 %残存	口(24.9) 高 29.4 底 10.2	①密、1mm以下の砂粒を多く、片岩粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。底部近くに一本の棧を持つ。
129-5 54	土 節 器 甕	床面+5 %残存	口(21.9) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面ヘラ削りで器表面の砂粒が多く目立つ。口縁部横ナデ。胴部内側ていねいなナデ。器表面密。
129-6	土 節 器 甕	床面+37 %残存	口 — 高 — 底(10.0)	①粗、1~3mmの長石と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。内面密なヘラ磨きで、光沢を持つ。
129-7 54	土 節 器 高 坏	床面直上 完形	口 19.2 高 20.6 底 17.2	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く、3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。内面ヘラ削りにより輪積痕はすべて削り取っている。坏底面ヘラ削り。口縁部~内面横ナデ。坏内側底面に細かなヘラ磨き。
129-8 54	土 節 器 高 坏	床面-7 ほぼ完形	口 18.2 高 21.1 底 17.8	①密、雲母を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラ磨き。内面下半ナデにより輪積痕の多くを消しているが、上部に多くの輪積痕が残る。坏底部ヘラ削り。口縁部ナデ。坏内面に放射状のヘラ磨き。
130-9 55	土 節 器 高 坏	床面+4 %残存	口 17.2 高 19.4 底 16.2	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。内面ナデ。多くの輪積痕が残る。坏底面ヘラ削り。口縁部~坏底面ナデ。口縁部が平に削られている。
129-10 55	土 節 器 坏	床面直上 %残存	口 12.6 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内側黒褐色・断面黄橙色	底部ヘラ削り。稜は明瞭である。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底部の器表面の多くは剝離している。内側表面に黒漆か。
129-11 55	土 節 器 坏	旧南西貯蔵 穴内-13 %残存	口(13.0) 高 4.1 底 丸底	①やや粗、1mm前後の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。稜は弱く明瞭でない。内面はていねいなナデ。
129-12 55	土 節 器 坏	床面直上 %残存	口(12.3) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm前後の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は明瞭でない。内側底部表面に黒漆か。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
130-13 55	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(12.1) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。 底部内側器表面の多くが剝離している。内面は吸炭により黒色 を呈する。断面にも吸炭が及ぶ。
130-14 55	土師器 坏	床面+12 1/2残存	口(12.4) 高 一 底 一	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。底部内面でいねいなナデ。 稜は明瞭で口縁部が短い。
15 74	こも編み 石	床面+32	長 14.6 幅 6.3 厚 3.7 重 500		安山岩。片側の側面中央部が大きく凹状を呈し、他の側面もわ ずかに凹状を呈する。
16 74	こも編み 石	床面+23	長 15.0 幅 6.4 厚 4.2 重 600		石英片岩。片側の側面中央部が大きく凹状を呈し、他の側面も わずかに凹状を呈する。
17 74	こも編み 石	床面+25	長 17.0 幅 8.5 厚 3.5 重 630		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部に小さな凹凸があり、他の側 面中央部は打ち欠かされている。
18 74	こも編み 石	床面+29	長 13.4 幅 5.8 厚 4.7 重 480		緑簾緑泥片岩。小さな石である。両側面とも明瞭な凹状部は認 められない。
19 74	こも編み 石	床面+28	長 14.3 幅 6.4 厚 5.4 重 600		安山岩。断面菱形を呈し、1側面中央部がわずかに凹状を呈す る。
20 74	こも編み 石	床面+14	長 15.1 幅 8.0 厚 3.8 重 700		石墨緑泥片岩。凸状の側面中央部に小さな凹状部があり、他の 側面はゆるやかな凹状を呈する。
21 74	こも編み 石	床面+4	長 15.7 幅 8.9 厚 2.5 重 500		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面に打ち欠か れて小さな凹凸部が数個ある。
22 74	こも編み 石	床面直上	長 15.2 幅 6.3 厚 2.8 重 400		緑簾緑泥片岩。両側面中央部にわずかな凹凸部が数個ある。
23 74	こも編み 石	床面直上	長 15.3 幅 7.7 厚 4.5 重 700		緑簾緑泥片岩。両側面中央部に小さな凹凸部が数個ある。
24 74	こも編み 石	床面直上	長 15.0 幅 8.6 厚 3.2 重 680		緑簾緑泥片岩。両側面中央部にわずかな凹凸部が数個ある。
25 74	こも編み 石	床面直上	長 13.5 幅 6.1 厚 3.5 重 400		点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。
26 74	こも編み 石	床面直上	長 15.4 幅 6.2 厚 5.0 重 520		安山岩。片側の側面中央部が大きく凹状を呈し、他の側面が凸 状を呈している。
27 74	こも編み 石	床面直上	長 13.2 幅 5.1 厚 4.1 重 400		輝緑岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈し、他の側面が 凸状を呈している。
28 74	こも編み 石	床面直上	長 17.5 幅 8.4 厚 4.3 重 870		絹雲母石墨片岩。両側面中央部に、わずかな凹凸部ある。
29 74	こも編み 石	床面直上	長 15.5 幅 8.0 厚 3.2 重 520		安山岩。片側の側面がわずかに凹状を呈し、他の側面中央部は 打ち欠かれた凹状部がある。
30 74	こも編み 石	床面直上	長 17.7 幅 5.7 厚 3.6 重 420		絹雲母石墨片岩。やや不定形の石である。両側面の一部に凹状 部が認められる。
31 74	こも編み 石	床面直上	長 18.3 幅 6.2 厚 4.1 重 800		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部にわずかな凹状部が認められ る。
32 74	こも編み 石	床面-16	長 17.7 幅 5.9 厚 4.8 重 600		絹雲母石墨片岩。両側面全体に小さな凹凸部が認められる。
33 74	こも編み 石	床面+28	長 12.0 幅 5.7 厚 4.6 重 320		礫岩。片側の側面中央部が大きく打ち欠かれて凹状部を持つ。

460号住居跡 (第131～134図、図版21・55・74)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、62・63-22グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集している地区であり、重複関係も複雑である。本住居は南東部分の覆土と壁面の上部を平安時代の495号住居により削り取られ、西壁中央付近の一部壁面と床面に近い覆土を奈良時代の490号住居により削り取られている。2軒の住居により一部分を削り取られているが、本住居の床面が低いいため住居範囲の確認は可能であった。また本住居が同じ古墳時代に属する489号住居の南側を掘り込んで住居の大部分と竈を築いている。新旧関係は489→460→490→495号住居の順である。

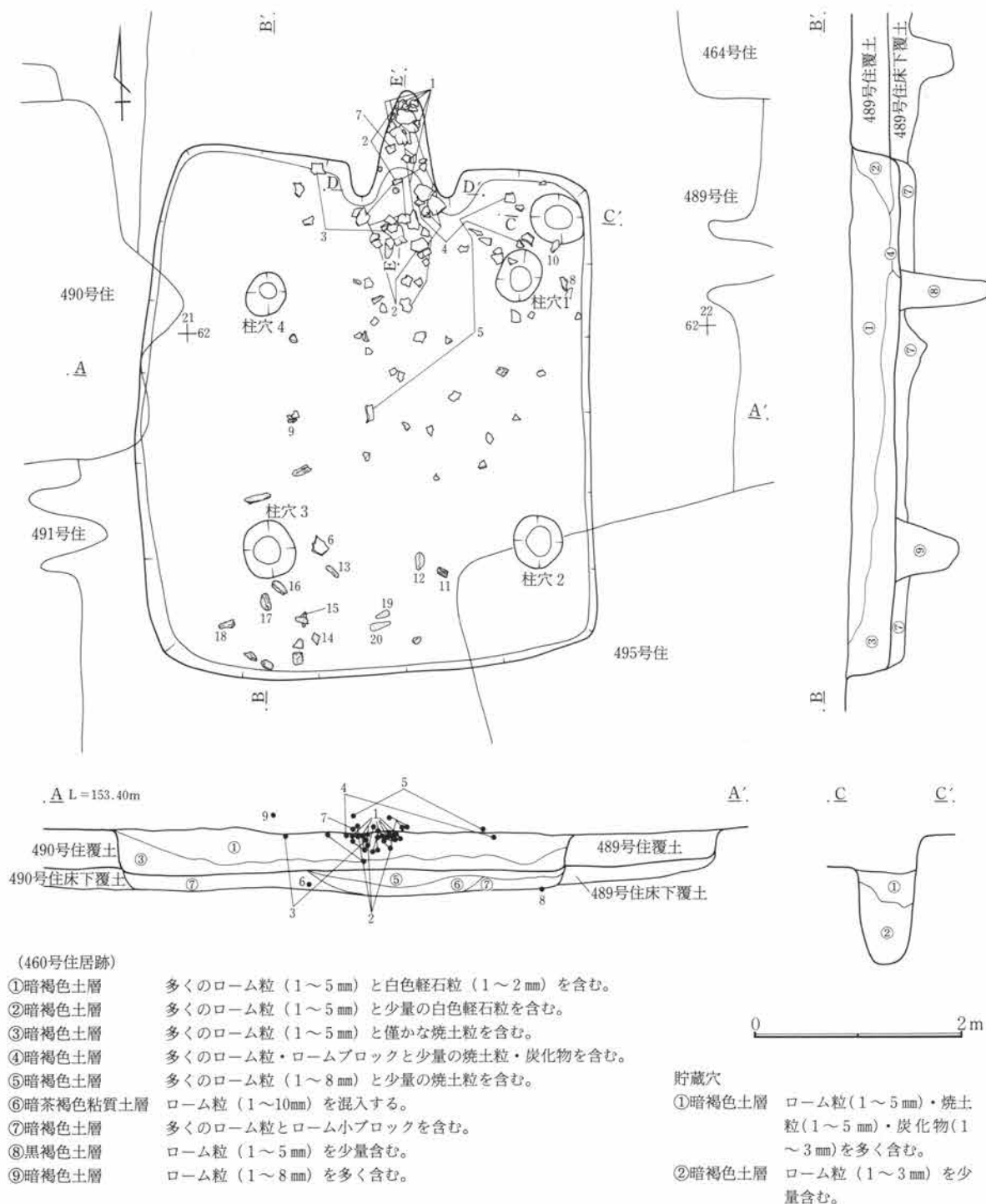
構造 床面はロームを主とした土で造られていたが明瞭でなく、4本の柱穴も床面調査段階では確認できず

に床下調査段階で確認された。貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。壁溝は確認できなかった。

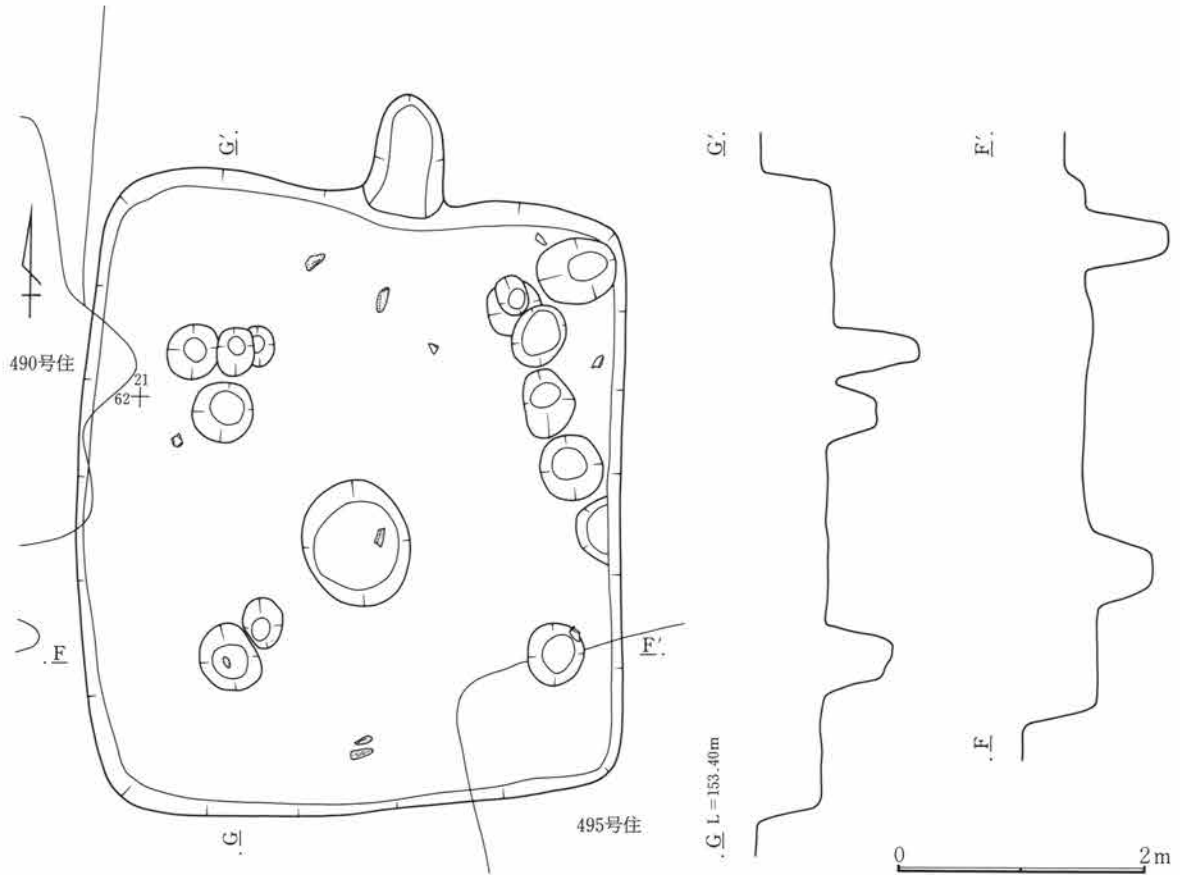
規模 東西4.30m、南北5.0mである。壁高は南壁面で45cmである。柱穴1は径44cm深さ86cm、柱穴2は径48cm深さ77cm、柱穴3は径54cm深さ63cm、柱穴4は径40cm深さ88cmである。貯蔵穴は径52cm深さ86cmでほぼ円形を呈する。

床下 中央部付近に床下土坑が、また柱穴周辺に多くの小穴が掘られていた。

遺物 竈内を中心に多くの土師器の甕が、また南壁に近い床面上より多くのこも編み石が出土した。



第131図 460号住居跡実測図

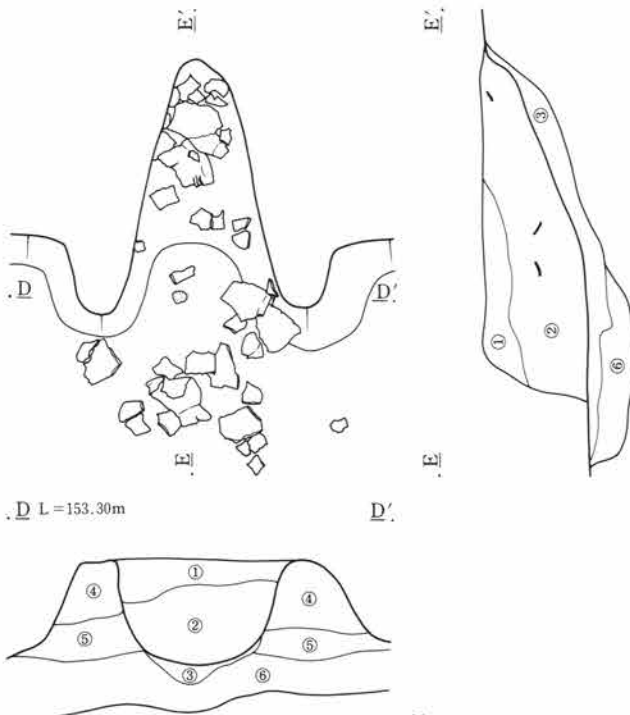


第132図 460号住居跡床下実測図

(竈)

概要 住居北壁の中央部に造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。袖石や天井石は全く出土していないため、ロームを主として造られた竈であると思われる。竈内より多くの甕の破片と燃烧部付近から焼土粒と焼土ブロックが出土した。

規模 残りが悪く明瞭でないが、両袖方向124cm煙道方向110cmである。

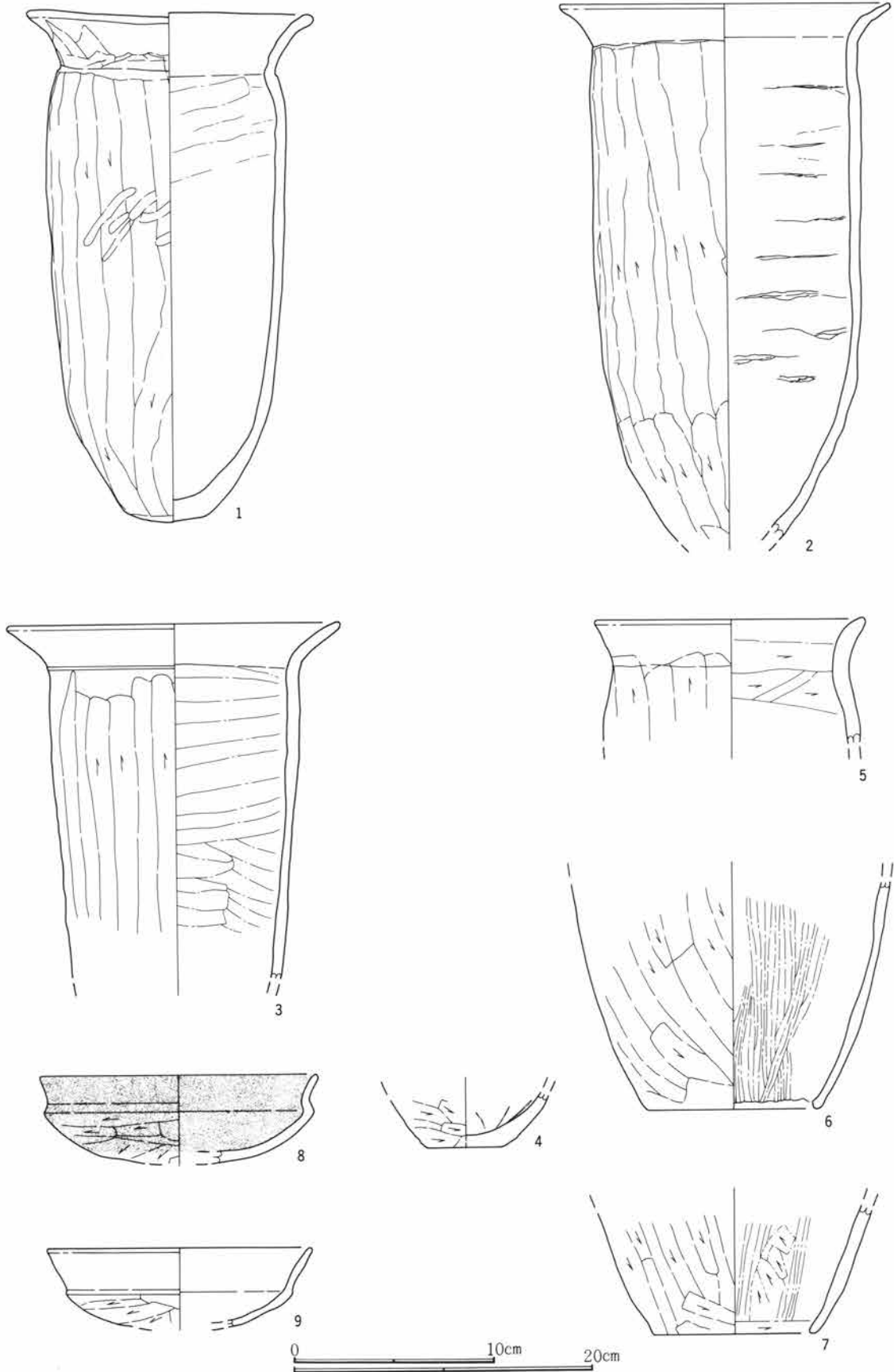


竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒(1~3mm)と白色軽石粒(1~3mm)を含む。
- ②暗褐色土層 多量の焼土粒(1~3mm)・ローム粒(1~5mm)と少量の炭化物を含む。
- ③黒褐色土層 多くの焼土粒と少量の炭化物を含む。
- ④暗褐色土層 ローム粒とローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 ④層より多くのローム粒を含み粘質。
- ⑥暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

0 1m

第133図 460号住居跡竈実測図



第134図 460号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

460号住居跡出土遺物観察表

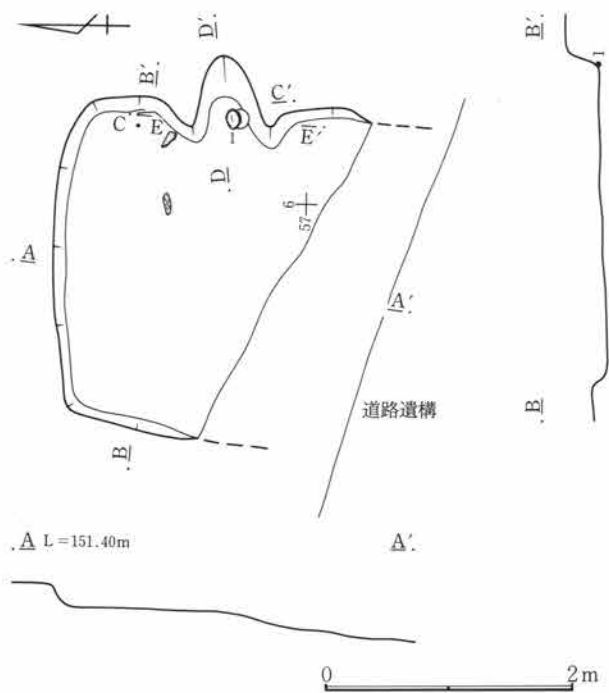
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
134-1 55	土師器 甕	竈内+14 床面+27 ほぼ完形	口 18.7 高 33.9 底 5.7	①粗、3～5mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面ナデ。胴外面強いヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。 口縁部横ナデ。内面横方向でいねいなナデで器表面密。
134-2 55	土師器 甕	竈内+4 %残存	口(21.8) 高 — 底 —	①粗、3～6mmの長石粒を多く 片岩粒わずかに含む②酸化焰、 硬質③にぶい橙色・一部黒褐色	胴外面弱いヘラ削り。大きな砂粒が目立つが砂粒の移動は少ない。 口縁部横ナデ。内面に多くの輪積痕が残る。外側表面に焼 けた粘土が多く付着している。
134-3 55	土師器 甕	竈内+26 床面+27 %残存	口(22.6) 高 — 底 —	①粗、1～2mmの長石粒を多く 片岩粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面ヘラ削りで、多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
134-4	土師器 甕	竈内+32 床面+27 底部完形	口 — 高 — 底 5.0	①粗、5～8mmの長石と片岩粒 を少量含む。②酸化焰、硬質③ 内面と断面橙色・外面黒褐色	底部ナデ。胴部ヘラ削りで表面に砂粒が目立ち粗い。 内面ナデで器表面密。
134-5	土師器 甕	床面+32 %残存	口(18.0) 高 — 底 —	①粗、1～2mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部幅広い長いヘラ削りにより表面に砂粒が目立つ。 口縁部横ナデ。内面横方向のナデで器表面密。
134-6	土師器 甕	床面-18 %残存	口 — 高 — 底(11.3)	①粗、1～3mmの砂粒を多く、 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	外面幅の広いヘラ削りで砂粒が目立ち粗い。胴下端ヘラ削りで 水平。内面ナデ後でいねいなヘラ磨き。
134-7	土師器 甕	床面+34 %残存	口 — 高 — 底(10.7)	①粗、5～10mmの片岩を少量含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	外面左上～右下方向ヘラ削り。底部ヘラ削り。内面でいねいな ナデ。胴下端ヘラ削りで水平。
134-8	土師器 坏	床面-23 %残存	口(13.8) 高 — 底 —	①密、1mm前後の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面浅黄褐色	底部幅広く長いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 明瞭な稜を持つ。
134-9	土師器 坏	床面+48 破片	口(13.1) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底部幅の広いヘラ削り。口縁部横ナデ。内側底部ナデ。 稜は明瞭。
10 74	こも編み 石	床面+51	長 13.0 幅 5.8 厚 3.4 重 320		絹雲母石墨片岩。両側面中央部が凸状を呈し、幅広くなっている。 一部欠損。
11 74	こも編み 石	床面+17	長 10.2 幅 5.2 厚 4.3 重 400		緑泥片岩。短い石である。断面がほぼ方形を呈する。側面の一部 に凹状部が認められる。
12 74	こも編み 石	床面+11	長 16.6 幅 4.8 厚 4.3 重 500		緑泥片岩。断面がほぼ方形を呈する。側面の一部に凹状部が認め られる。側面%欠損。
13 74	こも編み 石	床面直上	長 13.8 幅 5.6 厚 2.9 重 300		点紋緑泥片岩。側面の一部は打ち欠かれて凹状部を呈する。 側面%欠損。
14 74	こも編み 石	床面+8	長 13.8 幅 8.5 厚 4.0 重 1,000		点紋絹雲母石墨片岩。特に大きな石である。両側中央部にわず かな凹状部を持つ。
15 74	こも編み 石	床面直上	長 15.7 幅 7.8 厚 2.0 重 350		緑泥片岩。薄く偏平な石である。片側の側面にわずかな凹状部 を持つ。側面%欠損。
16 74	こも編み 石	床面+7	長 15.5 幅 4.8 厚 4.3 重 500		絹雲母石墨片岩。断面がほぼ方形を呈する。側面の一部に凹状 部が認められる。
17 74	こも編み 石	床面直上	長 16.4 幅 6.9 厚 4.2 重 520		緑泥片岩。両側面に打ち欠かれた凹状部が数箇所認められる。 側面一部欠損。
18 74	こも編み 石	床面+7	長 15.4 幅 5.5 厚 3.2 重 350		絹雲母緑泥片岩。両側面に打ち欠かれた凹状部が数箇所認めら れる。側面%欠損。
19 74	こも編み 石	床面-22	長 14.3 幅 6.3 厚 3.8 重 400		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面にわずかな凹状部を 持つ。
20 74	こも編み 石	床面-16	長 18.8 幅 7.2 厚 4.8 重 950		絹雲母石墨片岩。大きな石である。両側面に小さくわずかな凹 状部を持つ。

471号住居跡 (第135・136図、図版21・22・55)

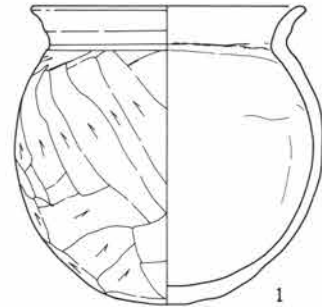
位置 本住居跡は、第7次調査区南西端にあり、58-6・7グリッドに位置する。

概要 住居南側に接して、本住居より低い東西方向に走る道路がある。その道路により住居の南側が削り取
られて、北側2/3しか残っていなかった。調査できた部分も残りが悪い小さな住居である。

構造 南側の床面はほとんど残っていなかった。北側の床面はロームを主とした土で造られていたが、良好
な床面は確認できなかった。柱穴・貯蔵穴・壁溝は掘られていなかった。



規模 東西不明、南北2.6mである。壁高は残りの良い北壁部分で28cmである。
 床下 竈手前の焚口付近に東西方向58cm、南北方向70cm、床面からの深さ18cmの土坑が掘られていた。
 遺物 竈内より完形の小型甕が出土した。



第135図 471号住居跡・出土遺物実測図

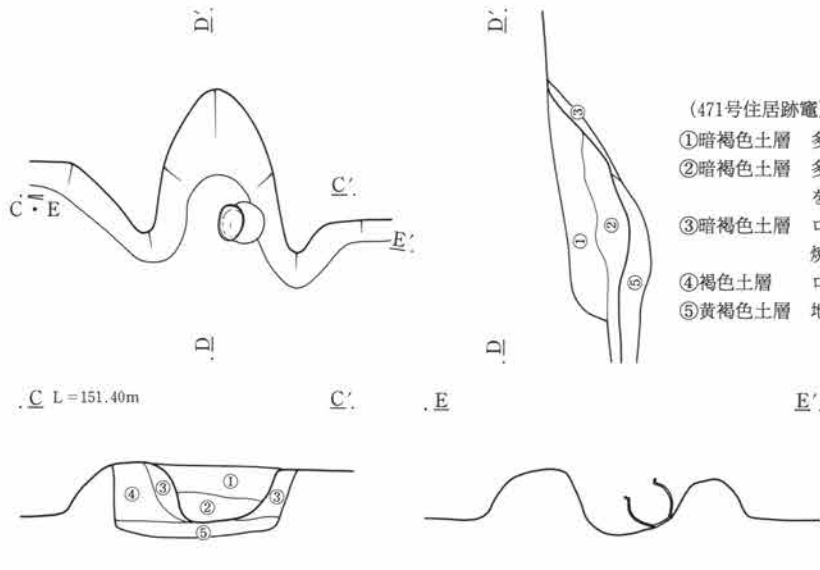
471号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
135-1 55	土 甕 小型甕	竈内直上 完形	口 14.4 高 15.7 底 丸底	①粗、2～3mmの砂粒を多く含 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底部ナデ。胴部へら削りにより器面が粗れている。口縁部横ナデ。胴内面にていねいなナデ。口縁部中央に弱い稜あり。

(竈)

概要 住居東壁に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。袖石や天井石等は全く出土していないため、ロームを主として造られた竈を想定したい。

規模 両袖方向72cm、煙道方向76cmである。



(471号住居跡竈)

- ①暗褐色土層 多くのローム小ブロックと焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くの焼土粒と焼土小ブロックと少量の灰を含む。
- ③暗褐色土層 ロームを主とし、多くの暗褐色土と少量の焼土粒を含む。
- ④褐色土層 ロームを主とし、多くの暗褐色土を含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とする層。

第136図 471号住居跡竈実測図

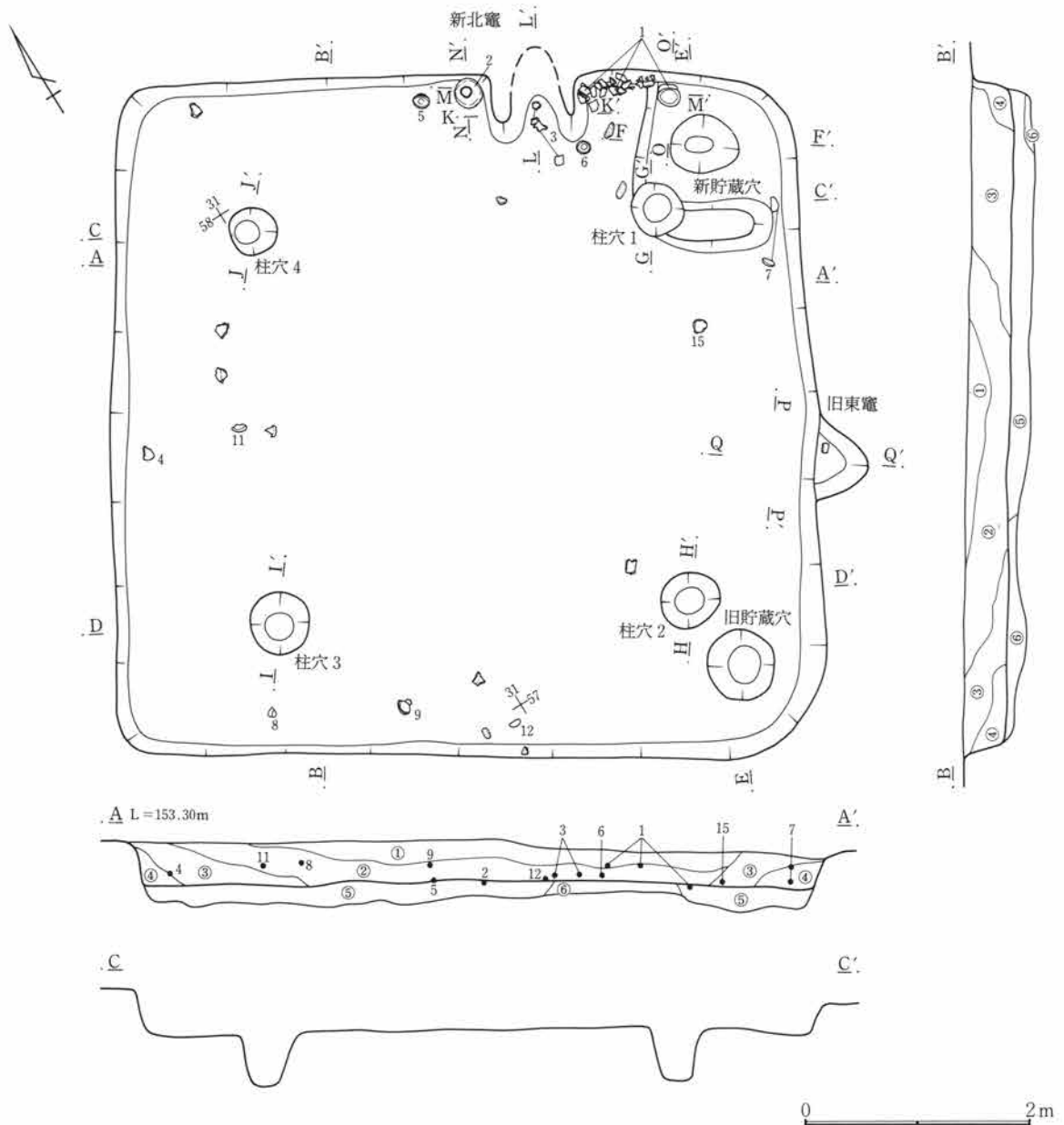
第3章 古墳時代の遺構と遺物

485号住居跡 (第137~142図、図版22・23・55・56・72)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、58-31・32グリッドに位置する。

概要 他の住居と重複していない残りの良好な住居であり、北壁に造られた新竈周辺に多くの遺物が出土した。竈が2基造られており、東壁に位置する竈は床面上に位置する燃烧部や袖部分がすべて取り除かれていたため、東竈が旧竈で北竈が新竈である。

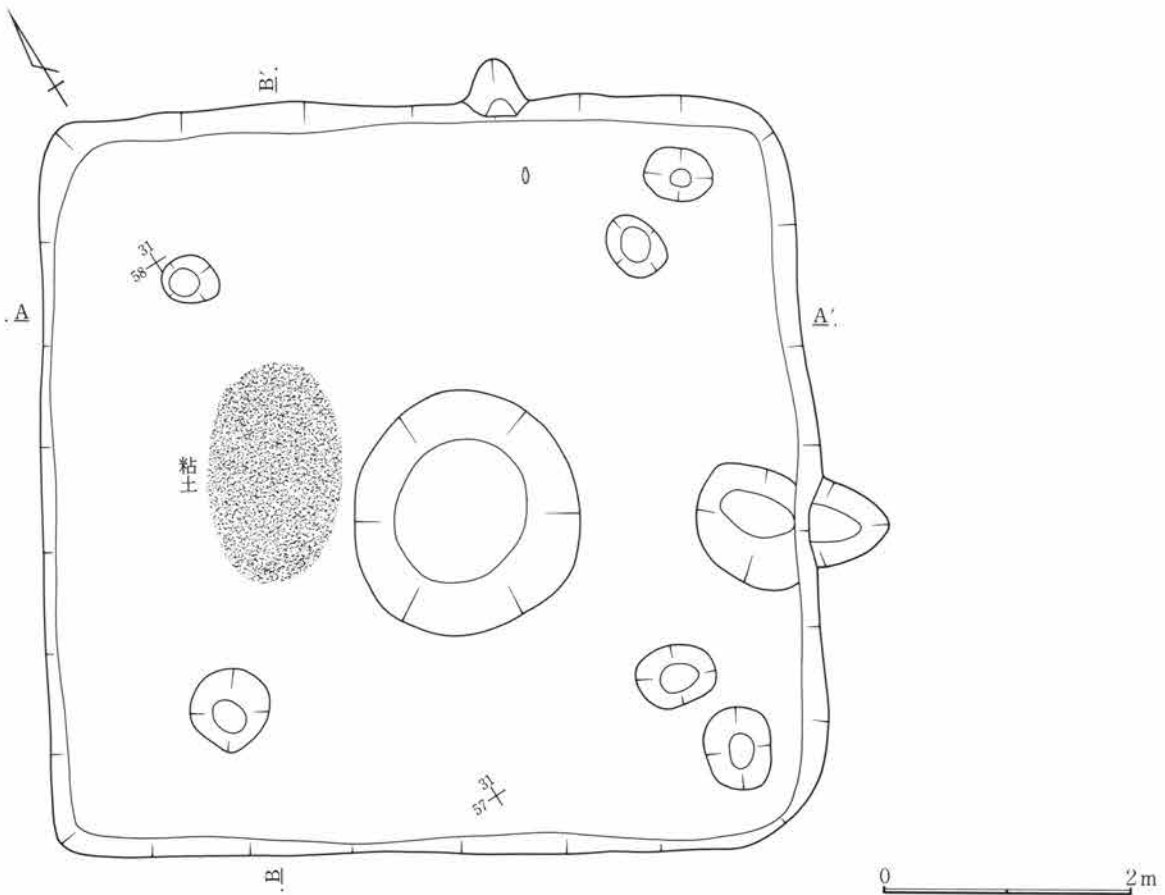
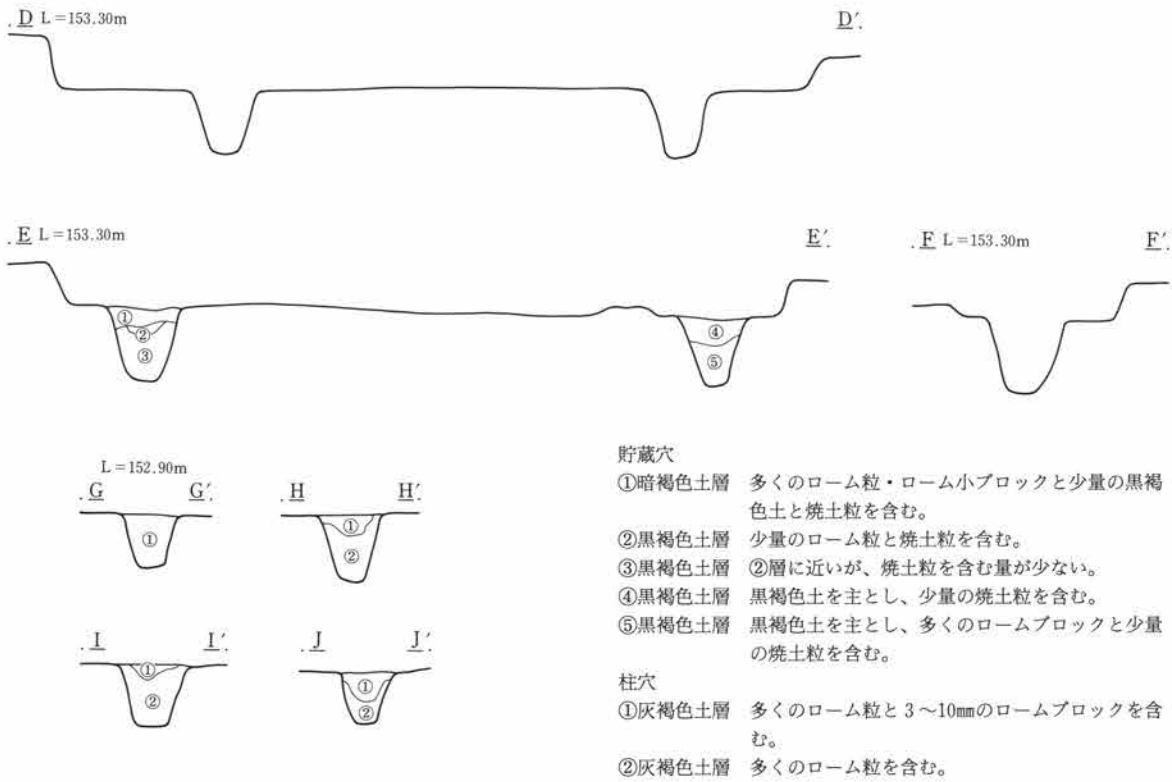
構造 床面はローム小ブロックや暗褐色土の混入した土で造られ、部分的に地山のロームを利用していた。柱穴が4本掘られ、新旧の竈に伴う貯蔵穴が竈右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。東



(485号住居跡)

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| ① 灰褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 | ④ 褐色土層 ロームブロックと灰褐色土の混入層。 |
| ② 灰褐色土層 1~10cmのロームブロックを大量に含む。 | ⑤ 褐色土層 ローム粒・ローム小ブロック・暗褐色土の混入層。 |
| ③ 暗褐色土層 1cm前後のローム小ブロックを均一に多く含む。 | ⑥ 黄褐色土層 地山のロームを主とした層。 |

第137図 485号住居跡実測図(1)



第138図 485号住居跡(2)・床下実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

北コーナーに造られている新貯蔵穴の南側に直線的で僅かな高まりを持つ土盛りが、また貯蔵穴の西側には直線的な段差が認められた。北と東側は壁面で囲まれているため、円形の貯蔵穴を方形の囲いで区画している状態を示している。

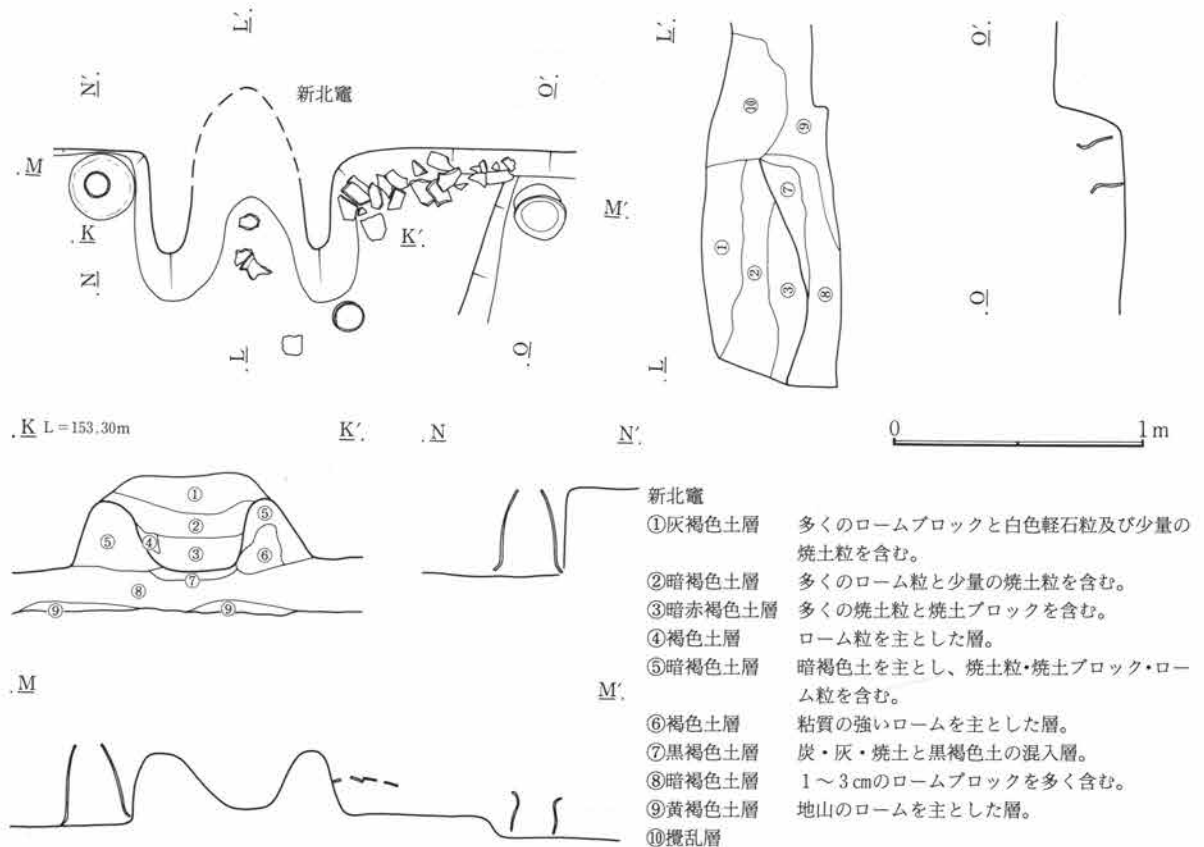
規模 東西6.02m、南北5.58mである。壁高は残りの良い南壁面で36cmである。柱穴1は径48cm深さ45cm、柱穴2は径50cm深さ54cm、柱穴3は径50cm深さ52cm、柱穴4は径44cm深さ52cmである。新貯蔵穴は径60cm深さ64cm、旧貯蔵穴は径62cm深さ61cmでいずれもほぼ円形を呈する。

遺物 竈左側の壁面部分に、口縁部を下にした完形の甕が、また右袖部に割れた甕胴部がまとめて置かれ、その甕の口縁部が貯蔵穴に近い部分に口縁部を上にした状態で置かれたように出土した。壺や甕を乗せる台として使われていたものと思われる。また右袖手前の床面上から完形の土師器の坏が出土した。床面中央部に180×196cm、床面からの深さ19cmの床下土坑が掘られていた。またその床下土坑の西側に灰白色粘土が、薄く敷きつめられたような部分が検出された。

(新北竈)

概要 住居北壁の東寄りに造られている。煙道部左側の一部が攪乱小穴により掘り込まれている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。竈付近にこも編み石に似た石が3石出土しているが、竈に伴うと思われる袖石等は全く出土していない。ロームを多く用いて造られた竈であると思われる。燃烧部奥壁上面が焼土化しており、燃烧部床面付近から多くの焼土粒と焼土ブロックが出土した。

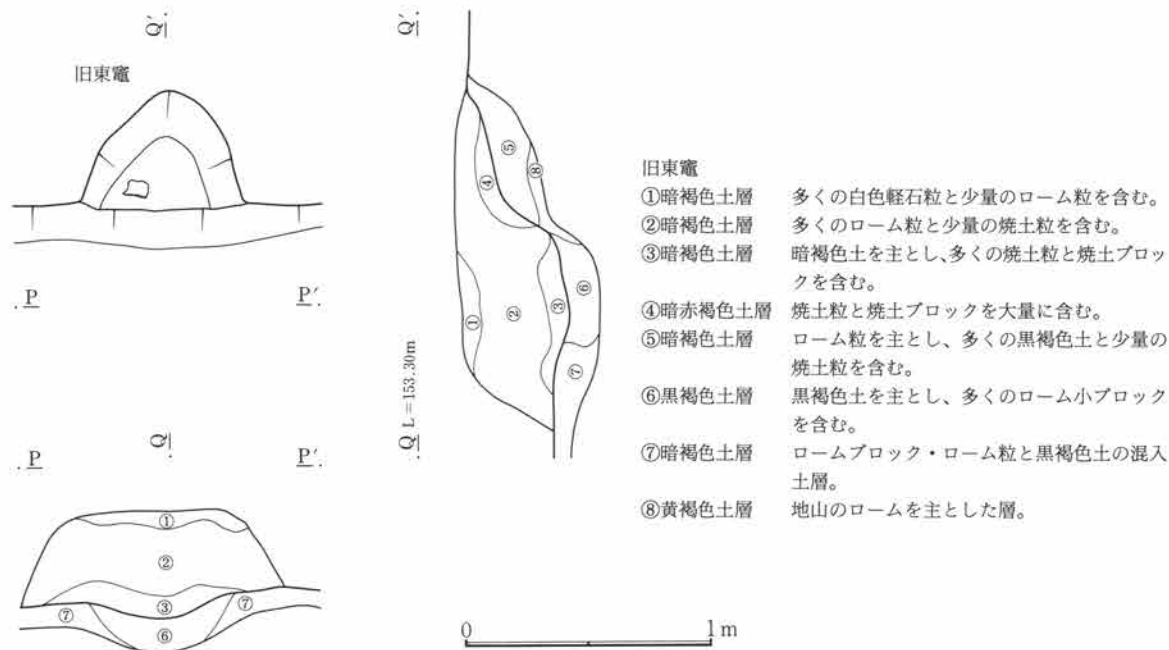
規模 両袖方向90cm、煙道方向88cmである。



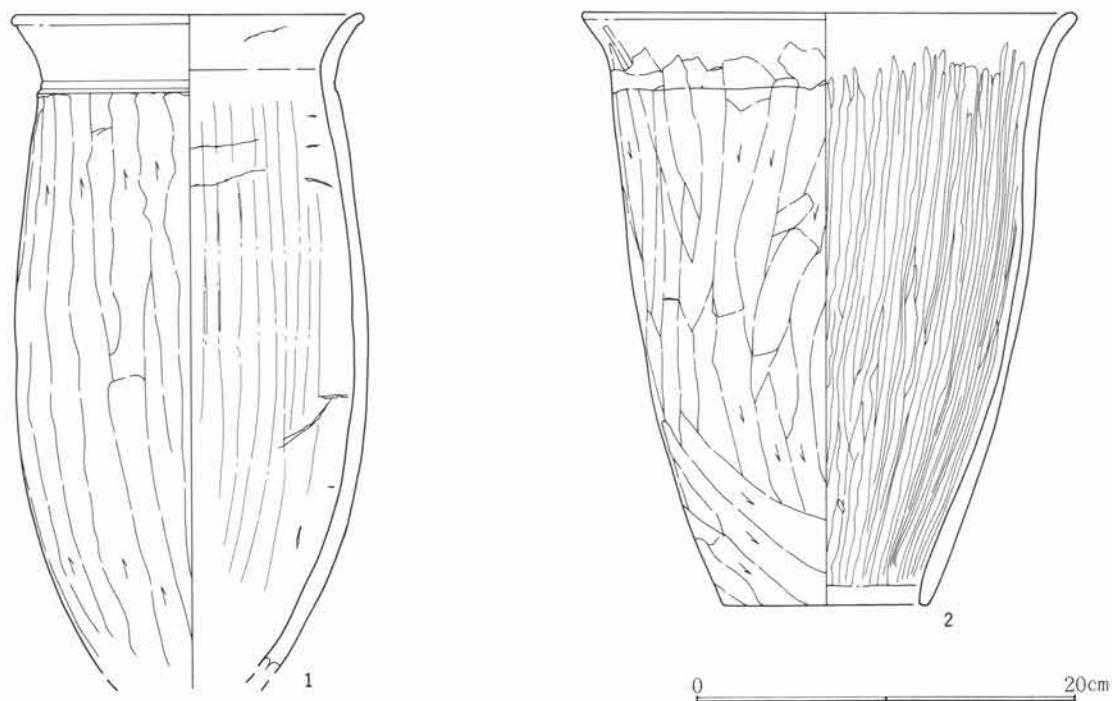
第139図 485号住居跡新北竈実測図

(旧東竈)

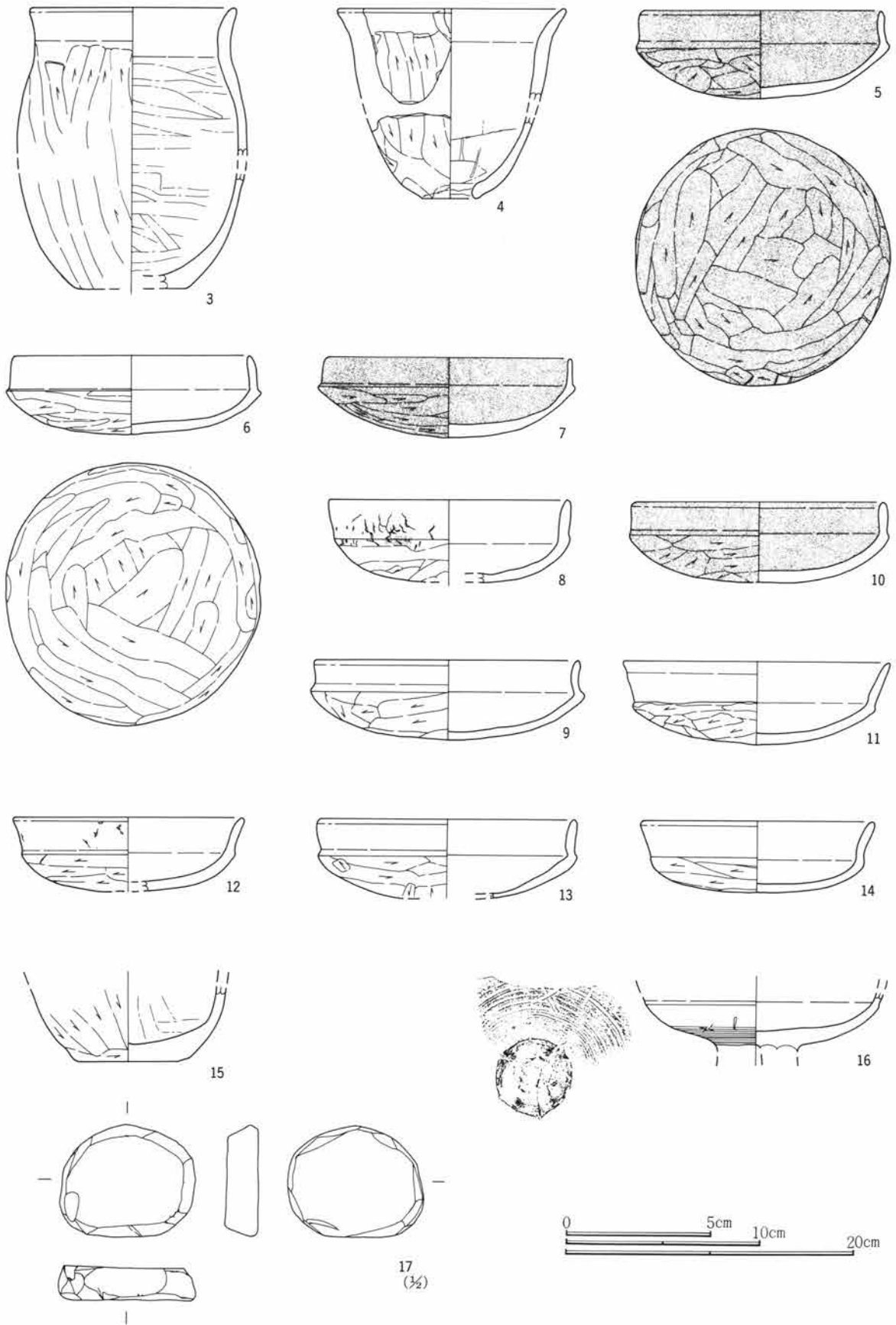
概要 住居東壁のやや南寄りに造られている。床面上に位置する燃烧部の大部分と袖部分は取り外されており、壁面に掘り込まれていた燃烧部の一部と煙道部、及び床面より低い位置に掘り込まれている燃烧部下部が残っていた。煙道部方向の土層断面で煙道部から燃烧部分にかけて存在した焼土粒が、床面上に位置する部分で削り取られていることが読み取れる。



第140図 485号住居跡旧東竈実測図



第141図 485号住居跡出土遺物実測図(1)



第142図 485号住居跡出土遺物実測図(2)

485号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
141-1 55	土器 甕	新北竈+12 床面-5 胴部完形	口 18.2 高 — 底 —	①粗、1~3mmの砂粒を多く、 3~5mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	胴外面強いヘラ削り。ヘラの削り幅が明瞭に残る。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面密。底部欠損。
141-2 56	土器 甕	新北竈直上 完形	口 25.7 高 31.2 底 10.8	①やや粗、3~5mmの長石粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面細かなヘラ削り。口縁部横ナデ。内面密でていねいなヘラ磨き。光沢を持つ。黒斑は全く認められない。胴下端ヘラ削りで水平。
142-3 55	土器 小型甕	新北竈+4 残存	口 14.2 高(19.3) 底(7.6)	①密、2~3mmの砂粒わずかに 含むが、全体的に密。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴部ヘラ削りとヘラナデ。器表面の砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
142-4	土器 小型甕	床面+5 破片	口(15.8) 高(13.0) 底(3.6)	①密、1mm以下の小さな赤色粒 を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。胎土密なためヘラ削り後も器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に粉状を呈する。
142-5 55	土器 甕	床面直上 完形	口 12.4 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。器表面の砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。器肉の厚さが一定した均整のとれた器形である。一部吸炭により黒褐色。
142-6 56	土器 甕	床面+5 完形	口 12.4 高 4.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内側底面黒 色・一部表面橙色・裏面黒褐色	底面ヘラ削り。器表面の砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。内側底面に黒漆か。
142-7 56	土器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 12.6 高 5.1 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内側底面黒 色・一部表面橙色・裏面黒褐色	底面ヘラ削り。器表面の砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。内側底面に黒漆か。
142-8 56	土器 甕	床面+13 残存	口 12.4 高 — 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面細いヘラ削り。砂粒の移動少ない。口縁部横ナデ。底部内面中央部にヘラの工具痕あり。
142-9 56	土器 甕	床面+12 残存	口 13.6 高 4.1 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質。 ③橙色。	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。稜は明瞭である。
142-10 56	土器 甕	覆土 残存	口 13.0 高 4.1 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。稜は比較的明瞭である。全体的に器肉が均一であるが、端部が鋭利でない。
142-11 56	土器 甕	床面+11 残存	口 13.1 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒わずかに 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面単位の細かいヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口唇部はヘラにより、水平に削られている。
142-12 56	土器 甕	床面直上 残存	口(12.2) 高 — 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。底部表面が、わずかに薄く剝離している。
142-13	土器 甕	覆土 残存	口(13.2) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。稜は明瞭である。底部の器肉が薄い。
142-14 56	土器 甕	覆土 残存	口(12.0) 高 3.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒わずかに 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。底部内面ていねいなナデ。器肉の厚さが一定している。
142-15	土器 甕	床面直上 底部完形	口 — 高 — 底 6.8	①粗、3~8mmの長石粒や片岩 粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面橙色・内面灰褐色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削りとヘラナデ。胴~底部内面は、ナデにより器表面密。
142-16	須恵器 高甕	覆土 破片	口 — 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②還元焰、硬質 ③灰白色	坏底部外面カキ目調整。脚部は長脚2段透しと思われ、透しは3方向である。窯印らしき刻目あり。
142-17 72	石材?	覆土	径 3.8/4.8 厚 1.2 重 25.3		表面はすべて砥ぎにより面を作っている。砂岩。色調 橙色。

486号住居跡 (第143~146図、図版23・56・71・72・74)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、56-31グリッドに位置する。

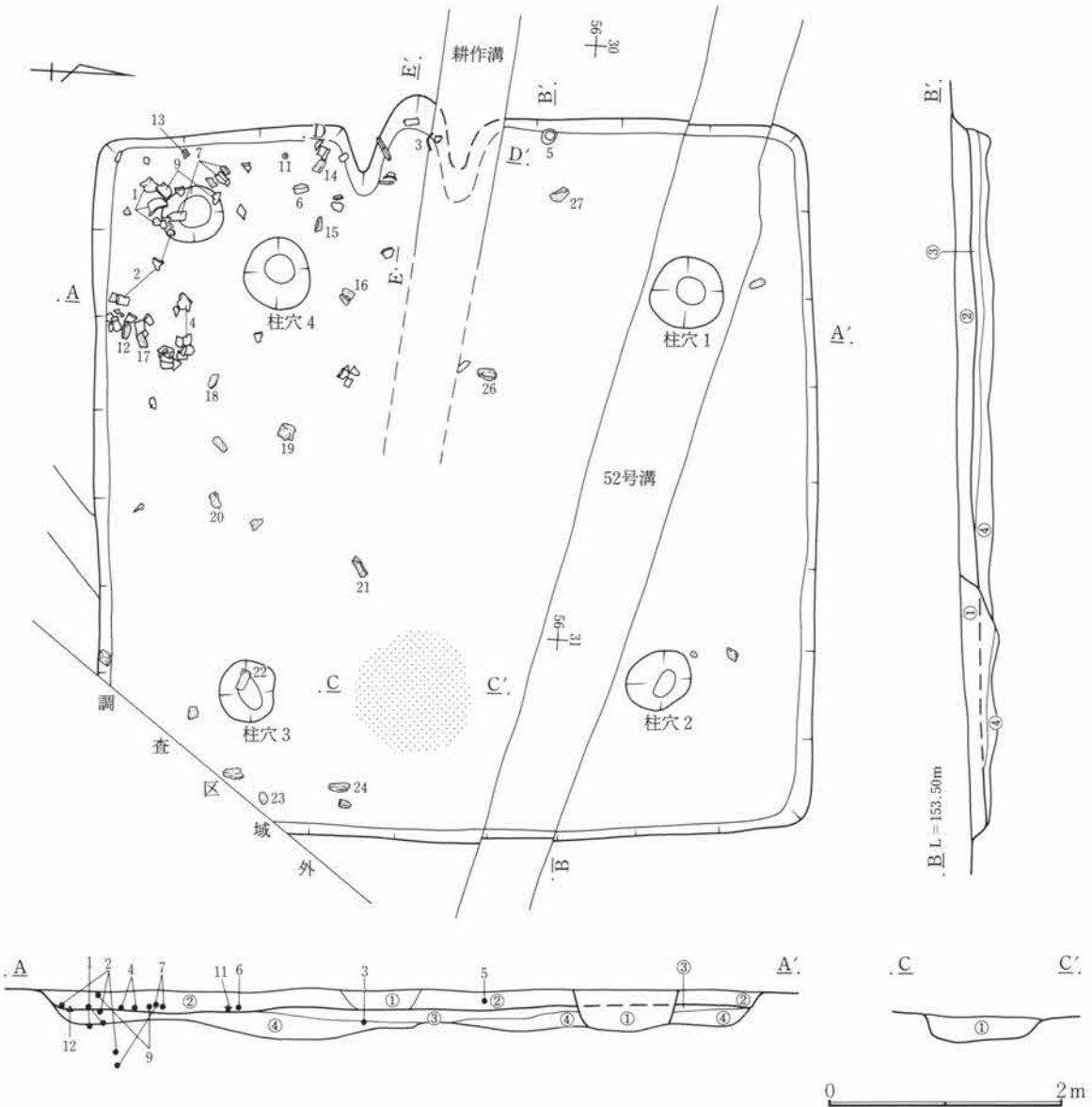
概要 南東コーナー部分が調査範囲外となっている。住居北側を52号溝により床下部分まで掘り込まれており、中央部分も溝が掘られ、竈左袖部分がこの溝により削り取られている。東壁中央部に近い床面下に焼土粒がまとまって出土した。床下土坑と思われる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面の残りは良好でなく、ローム小ブロックや暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られ、竈に伴う貯蔵穴が竈左側に掘られていた。

規模 東西6.02m、南北6.18mである。壁高は西壁面で16cmである。柱穴1は径51cm深さ67cm、柱穴2は径58cm深さ88cm、柱穴3は径52cm深さ51cm、柱穴4は径60cm深さ72cmである。貯蔵穴は径54cm深さ78cmでほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甕や多くの坏と紡錘車や砥石等が出土している。



(486号住居跡)

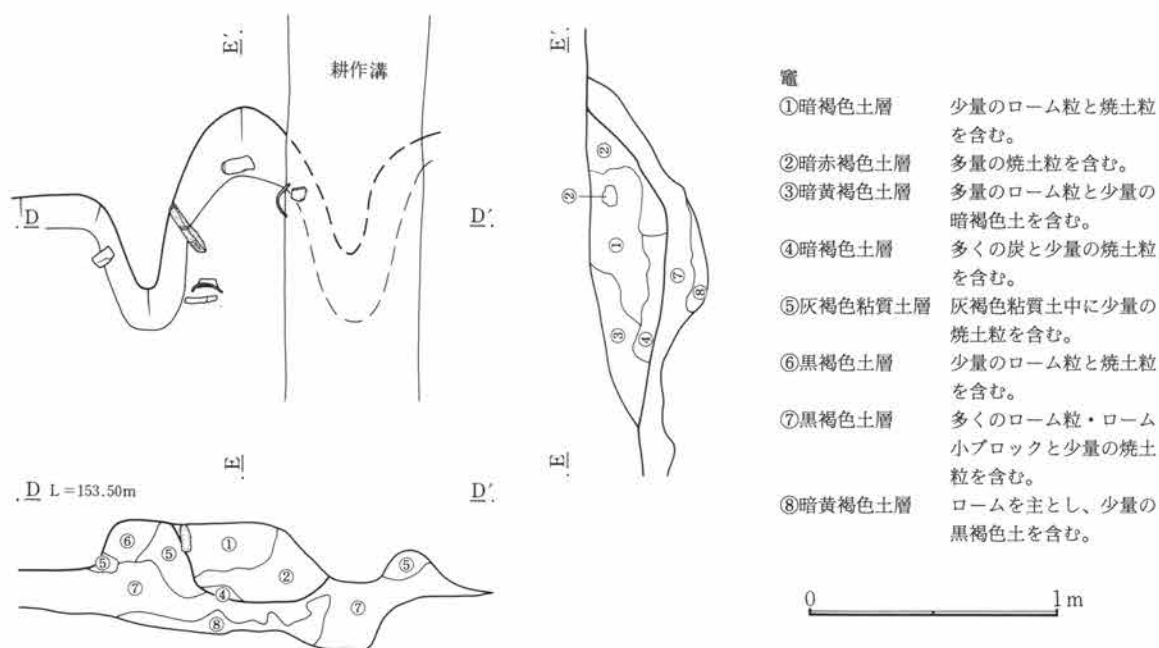
- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| ① 黒褐色土層 溝の覆土 | 焼土 |
| ② 暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。 | ① 暗褐色土層 多くの焼土粒とローム小ブロックを含む。 |
| ③ 暗褐色土層 多くのローム小ブロックと暗褐色土を含む。 | |
| ④ 暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | |

第143図 486号住居跡実測図

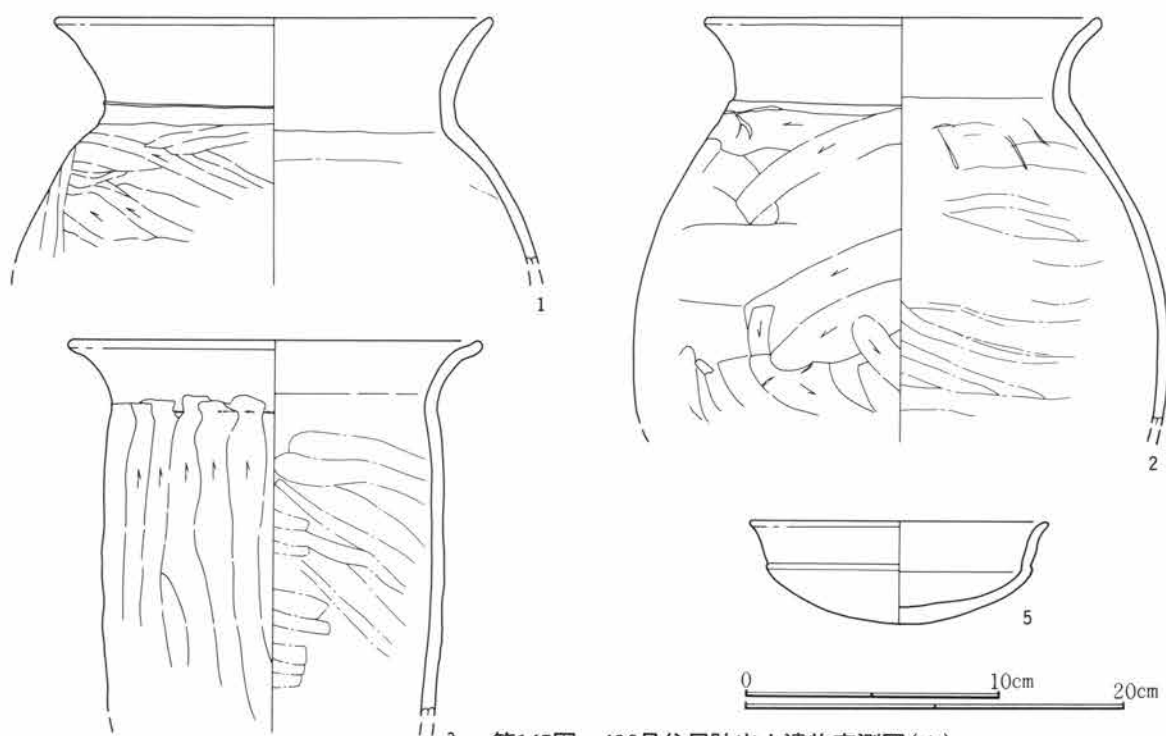
(竈)

概要 住居西壁の南寄りに造られている。左袖から燃焼部の一部を溝により削り取られている。左袖部分に細長い石や土器等も出土しているが、袖石等は認められない。残されている左袖部分に多くの粘質土が使われていたため、ロームと粘土を多く使用して造られた竈であると思われる。燃焼部覆土中より多くの焼土粒が出土した。

規模 両袖方向不明、煙道方向82cmである。

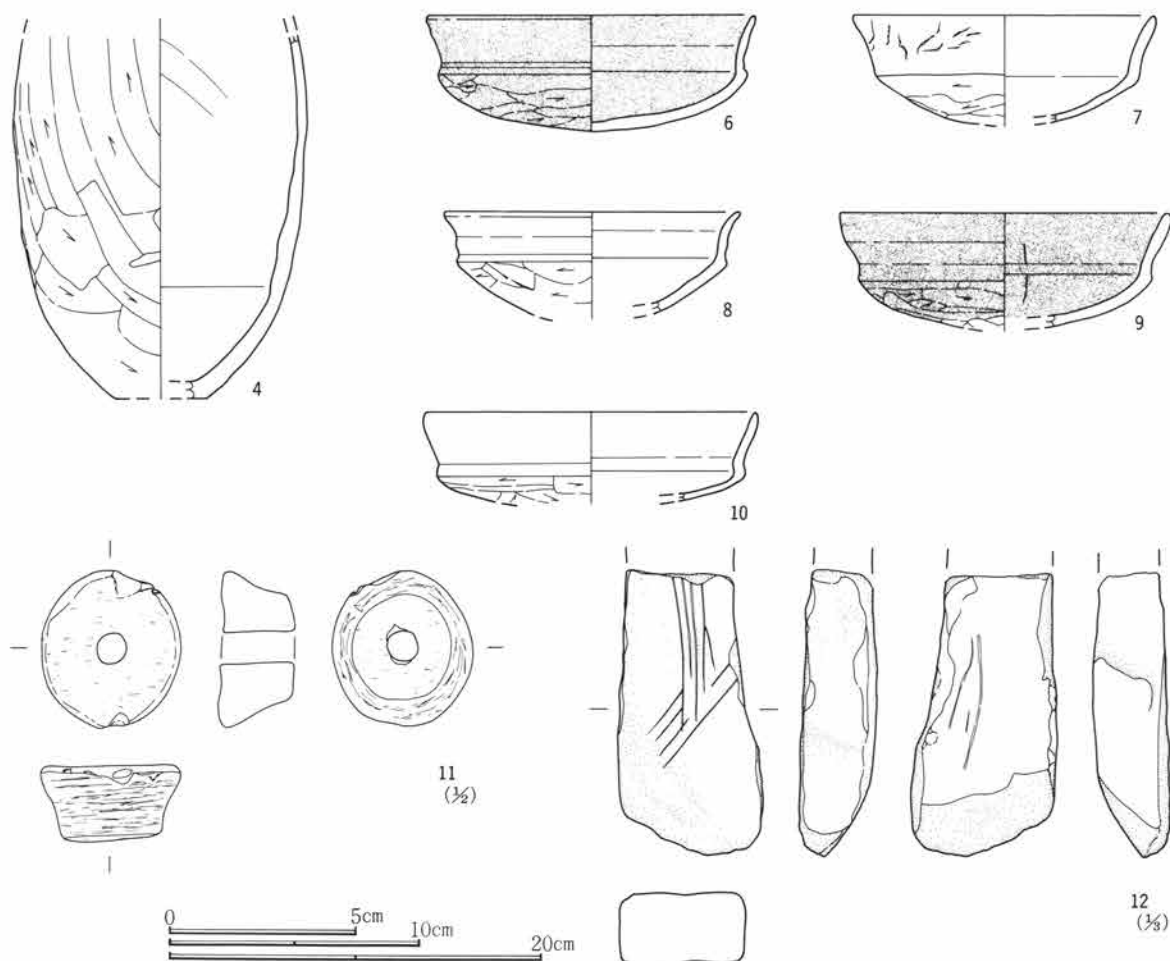


第144図 486号住居跡竈実測図



第145図 486号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第146図 486号住居跡出土遺物実測図(2)

486号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
145-1 56	土器 壺	床面直上 口縁ほぼ完 胴上部%	口 23.0 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を多く、 3~6mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面細かなヘラ削り。口縁部ナデ後弱い横ナデ。 内面ナデで器表面密。黒斑は全く認められない。
145-2 56	土器 壺	ピット-37 床面+4 口縁部%	口 20.8 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず、粉 状を呈する赤色粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	胴外面ヘラ削り。砂粒の移動ほとんどないため器表面密。 口縁部横ナデ。内面ナデ。
145-3	土器 甕	竈内-12 1/2残存	口(21.6) 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。使用時に付着した土が焼成を受け一部残存。 口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。胴外面はヘラ削りにより 多くの砂粒が移動し粗い。
146-4 56	土器 甕	床面直上 胴部%残存 底部欠	口 — 高 — 底 —	①粗、2~3mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面にふい赤褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面 が粗い。内面ナデ。多くの砂粒が浮いた状態になっている。 外面底部周辺吸炭により黒色を呈する。
145-5 56	土器 坏	床面+6 ほぼ完形	口 11.7 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。粉状で一部表面が剥落し削りの単位不明。 口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に粉状を呈する。
146-6 56	土器 坏	床面直上 1/2残存	口 13.0 高 4.6 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。 器肉が薄く均整のとれた作りである。
146-7 56	土器 坏	ピット-49 床面直上	口 12.0	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 1/2残存
146-8 56	土器 坏	覆土 1/2残存	口(11.7)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。幅広く深く削っている。口縁部横ナデ。 内面ナデ。稜は高く明瞭である。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
146-9 56	土器 器 坏	床面直上 %残存	口(13.1) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を多く、 5~8mmの砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。稜は明瞭である。 他の坏と異質である。
146-10	土器 器 坏	覆土 破片	口(13.1)	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。 底部の浅い坏である。
146-11 71	石製品 紡錘車	床面直上 完形	径 3.7/2.6 孔径 0.8 厚 2.0 重 43.0		側面に荒砥削りの痕跡が残る。全体に少し歪んでいる。 滑石片岩
146-12 72	石製品 砥石	床面直上	長 11.1 幅 5.6 厚 2.8 重 200		4側面を砥石として利用している。広面に断面V字状の刻目あり。
13 74	こも編み 石	床面+6	長 15.1 幅 6.0 厚 3.2 重 500		点紋絹雲母石墨片岩。側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
14 74	こも編み 石	床面直上	長 13.7 幅 5.1 厚 3.4 重 300		緑簾緑泥片岩。細く小さな石である。片側の側面は凹状を呈し 他の側面は打ち欠かれてわずかな凹状部を持つ。
15 74	こも編み 石	床面直上	長 12.9 幅 4.5 厚 3.1 重 250		安山岩。細長く小さな石である。片側の側面中央部が凹状を呈 する。
16 74	こも編み 石	床面直上	長 11.2 幅 4.9 厚 4.2 重 380		安山岩。細長く小さな石である。片側の側面中央部が凹状を呈 する。
17 74	こも編み 石	床面直上	長 15.9 幅 6.3 厚 4.7 重 700		輝岩。片側の側面が凹状を呈する。
18 74	こも編み 石	床面直上	長 12.7 幅 6.4 厚 3.4 重 480		絹雲母石墨片岩。偏平で細い石である。片側の側面が凹状を呈 する。
19 74	こも編み 石	床面直上	長 14.3 幅 6.2 厚 4.5 重 550		安山岩。片側の側面が凹状を呈する。
20 74	こも編み 石	床面直上	長 13.6 幅 7.0 厚 2.7 重 320		安山岩。片側の側面中央部に1個所の凹面、他の側面に2個所 の凹面が認められる。
21 74	こも編み 石	床面直上	長 16.3 幅 7.5 厚 4.5 重 700		絹雲母石墨片岩。中央部が肉厚の石である。両側面中央部に小 さな凹面が数箇所認められる。
22 74	こも編み 石	床面+6	長 14.8 幅 6.5 厚 3.3 重 420		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面は凹状を呈 し、他の側面は打ち欠かれて凹状を呈する。
23 74	こも編み 石	床面直上	長 14.3 幅 6.8 厚 4.3 重 500		安山岩。側面中央部で幅の広がる石である。側面中央部にわ ずかな凹状部あり。
24 74	こも編み 石	床面-6	長 16.6 幅 6.1 厚 4.2 重 470		絹雲母石墨片岩。片側の側面に打ち欠かれた凹状部が2箇所認 められる。
25 74	こも編み 石	覆土	長 13.7 幅 6.8 厚 3.9 重 520		石英安山岩。肉厚の小さな石である。両側面中央部に凹面が認 められる。
26 74	こも編み 石	床面直上	長 15.6 幅 7.6 厚 4.3 重 600		絹雲母石墨片岩。両側面中央部に打ち欠かれた小さな凹面が認 められる。
27 74	こも編み 石	床面+4	長 16.9 幅 8.1 厚 3.5 重 550		絹雲母石墨片岩。中央部が幅広い石である。両側面中央部にわ ずかな凹面が認められる。

489号住居跡 (第147~152図、図版23・24・56・57・70)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、63-22グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集している地区であり、重複関係も複雑である。本住居は4軒の住居と重複しており、北東部分の覆土と壁面の上部を平安時代の464号住居により削り取られ、西壁中央付近の一部壁面と床面に近い覆土を奈良時代の490号住居により削り取られ、南東コーナー部分を平安時代の495号住居により削り取られている。また同じ古墳時代に属する新しい460号住居により、南側の約半分が床下部分まで掘り込まれていた。新旧関係は489→460→490→495→464号住居の順である。竈が2基造られており、北壁に位置する竈は床面上に位置する燃焼部や袖部分がすべて取り除かれていたため、北竈が旧竈で東竈が新竈である。

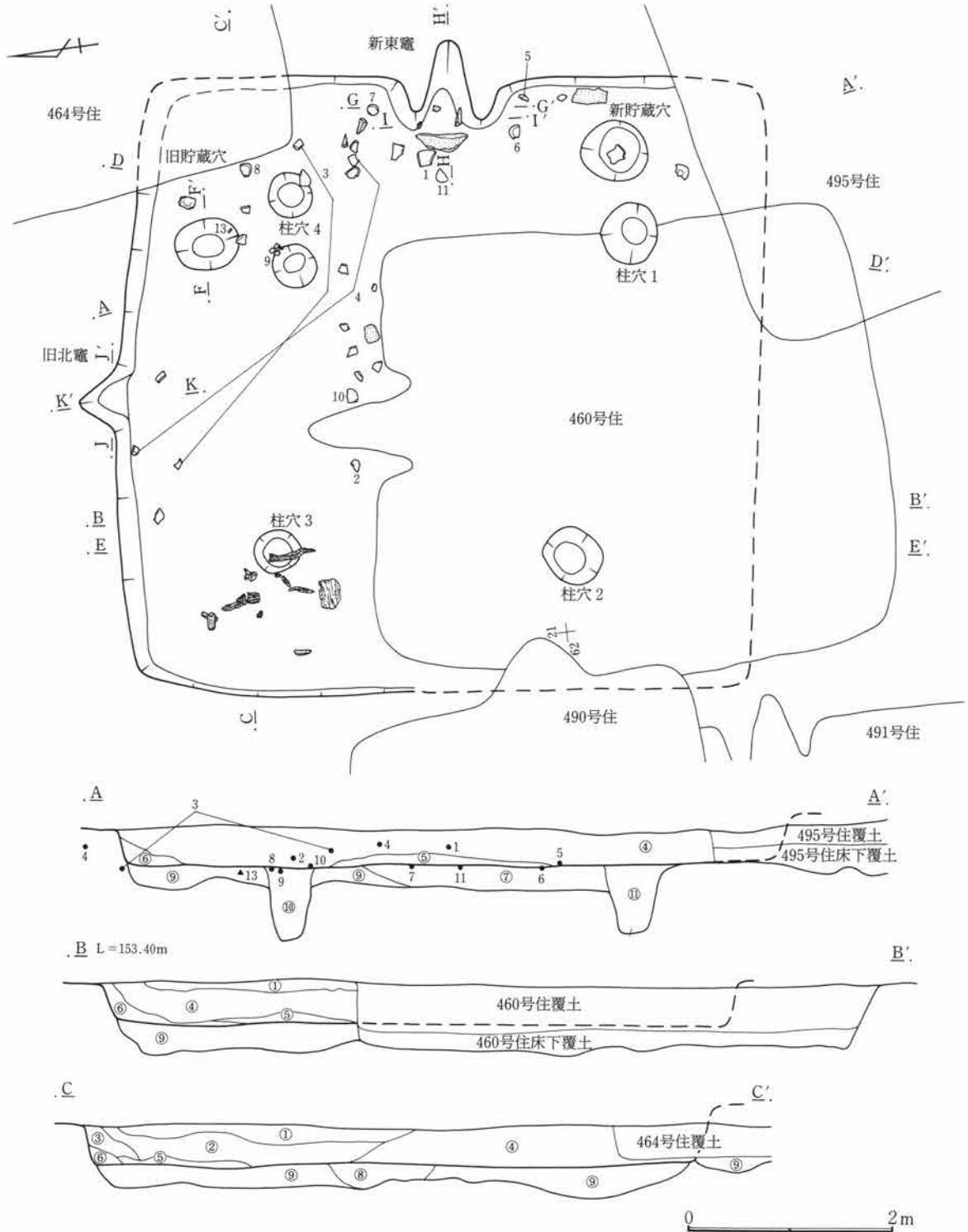
構造 床面はロームを主とした土で造られ、少量の焼土粒と炭が散布していた。柱穴が4本掘られ、新竈に伴う貯蔵穴が竈右側に掘られていたが、旧竈に伴う貯蔵穴は床面調査段階では確認できなかった。床下調査により、それと思われる掘り込みが確認され、旧貯蔵穴と想定して図上に示した。壁溝は確認

第3章 古墳時代の遺構と遺物

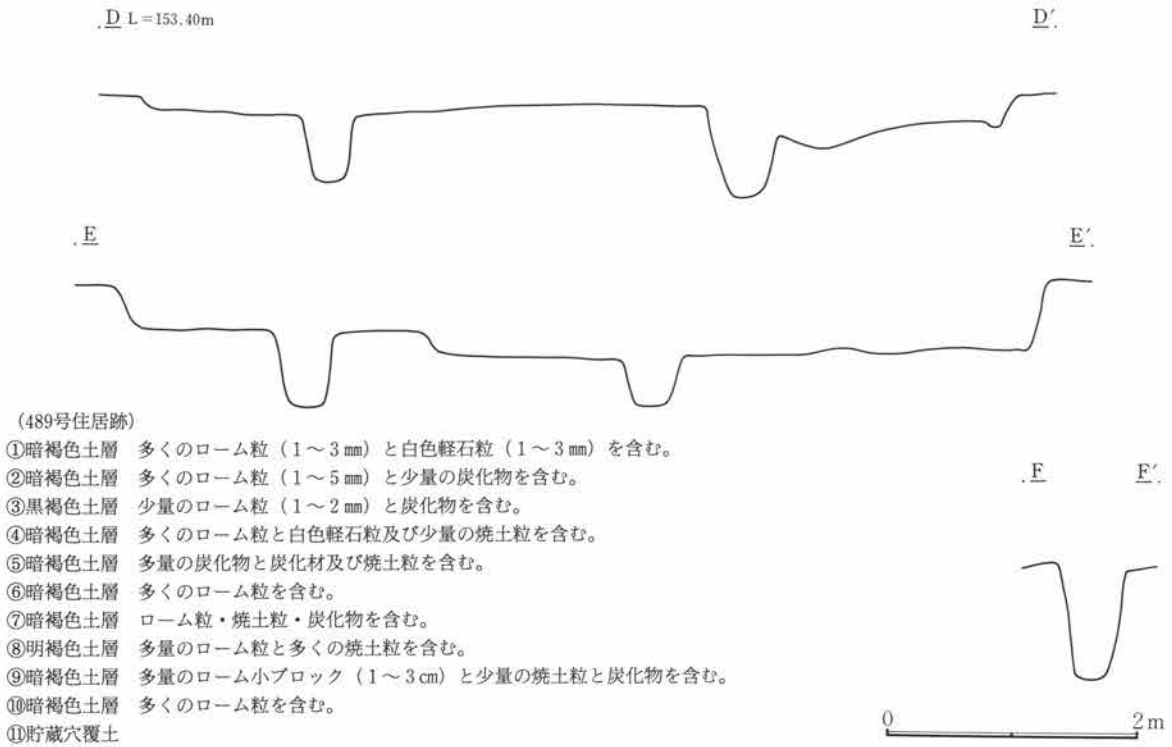
できなかった。また床下調査段階において、柱穴4の西側に柱穴とも思われる小穴が確認された。

規模 東西5.95m、南北は不明である。壁高は残りの良い北壁面で31cmである。柱穴1は径54cm深さ73cm、柱穴2は径56cm深さ65cm、柱穴3は径44cm深さ66cm、柱穴4は径42cm深さ59cmである。新貯蔵穴は径60cm深さ63cm、旧貯蔵穴は径50cm深さ63cmでいずれもほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甕や坏が、また須恵器の甗と鉄鏃が出土している。



第147図 489号住居跡実測図(1)

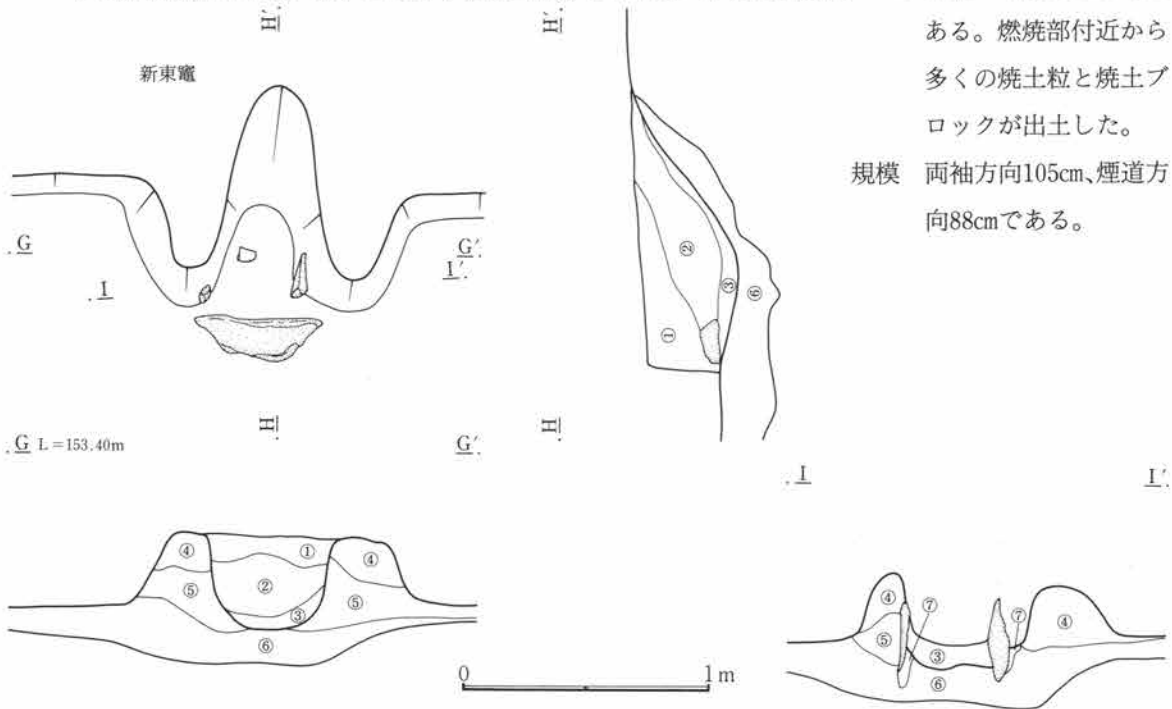


第148図 489号住居跡実測図(2)

(新東竈)

概要 住居東壁の中央部に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。焚口の両袖部分に袖石がほぼ使用時の状態で出土し、焚口部分の床面上に天井石が落下していた。このように焚口部分に石を用い、他の部分はロームを用いて造られた竈である。燃焼部付近から多くの焼土粒と焼土ブロックが出土した。

規模 両袖方向105cm、煙道方向88cmである。



第149図 489号住居跡新東竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

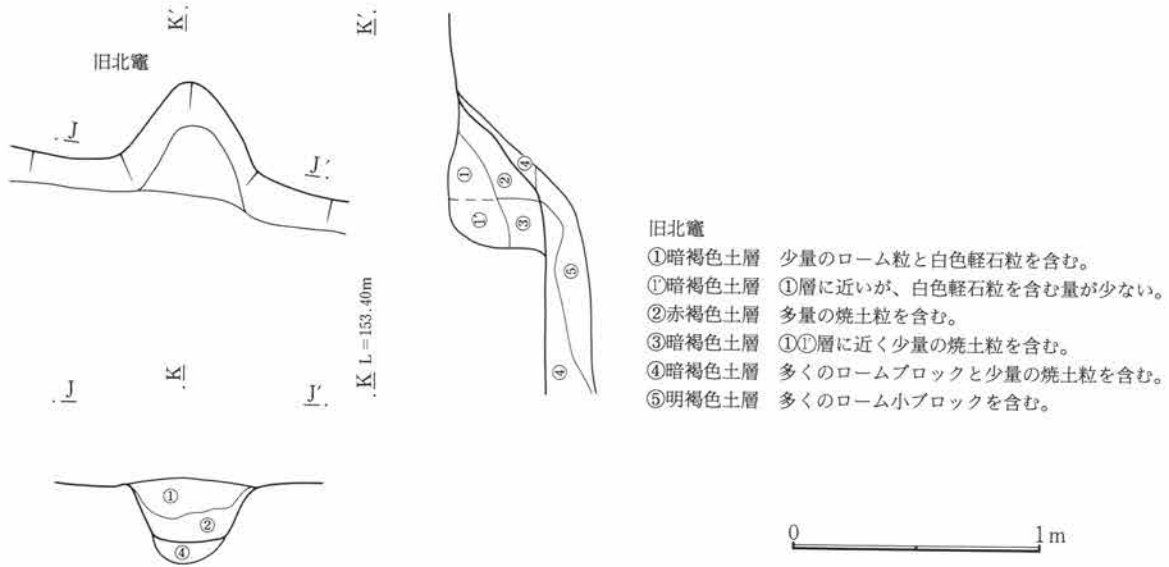
新東竈

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒及び僅かな炭化物を含む。
- ③赤褐色土層 多くの焼土粒・焼土ブロックとロームブロックを含む。
- ④暗褐色土層 暗褐色土中に多くのロームブロックと少量の焼土ブ

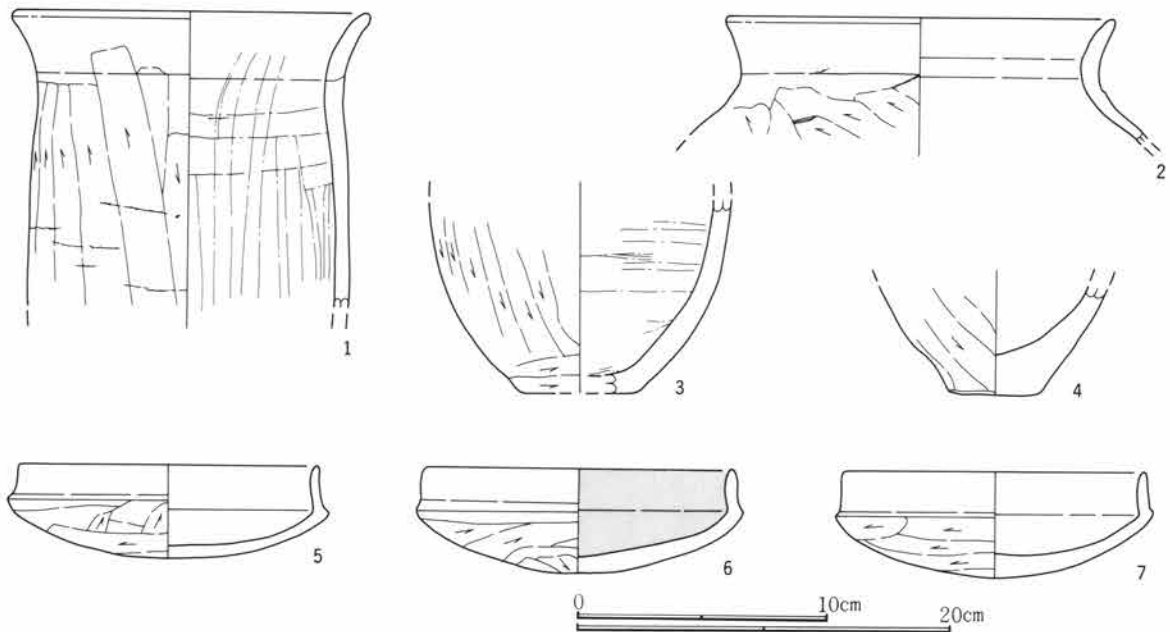
- ロックを含む。
- ⑤暗赤褐色土層 ロームを主とし、ブロック状に焼土粒を含む。
- ⑥暗褐色土層 黒色の強い暗褐色土中に多くのローム小ブロックを含む。
- ⑦暗褐色土層 ローム小ブロックと暗褐色土を含む。

(旧北竈)

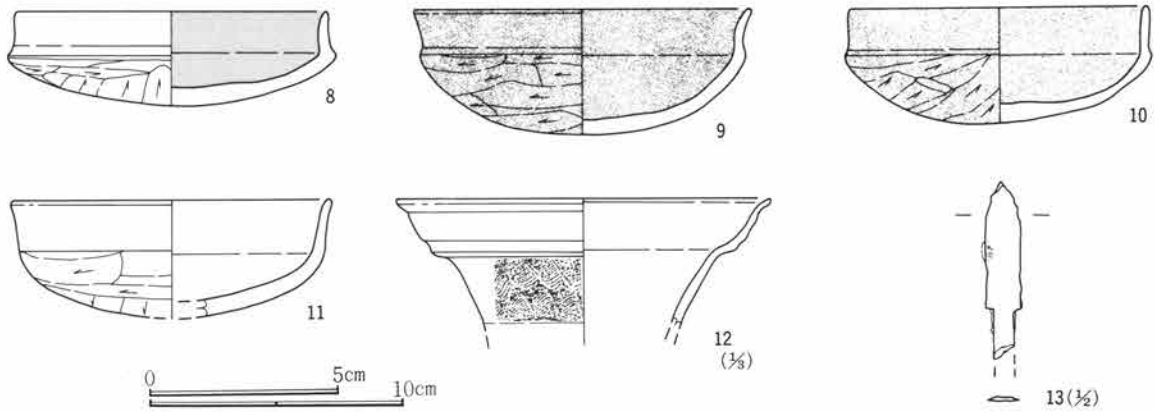
概要 住居北壁の中央部に造られている。床面上に位置する燃烧部や袖部分は取り外されており、壁面に掘り込まれていた燃烧部の一部と煙道部が残っていた。煙道部方向の土層断面で煙道部から燃烧部分にかけて存在した焼土粒が、床面上に位置する部分で削り取られていることが読み取れる。



第150図 489号住居跡旧北竈実測図



第151図 489号住居跡出土遺物実測図(1)



第152図 489号住居跡出土遺物実測図(2)

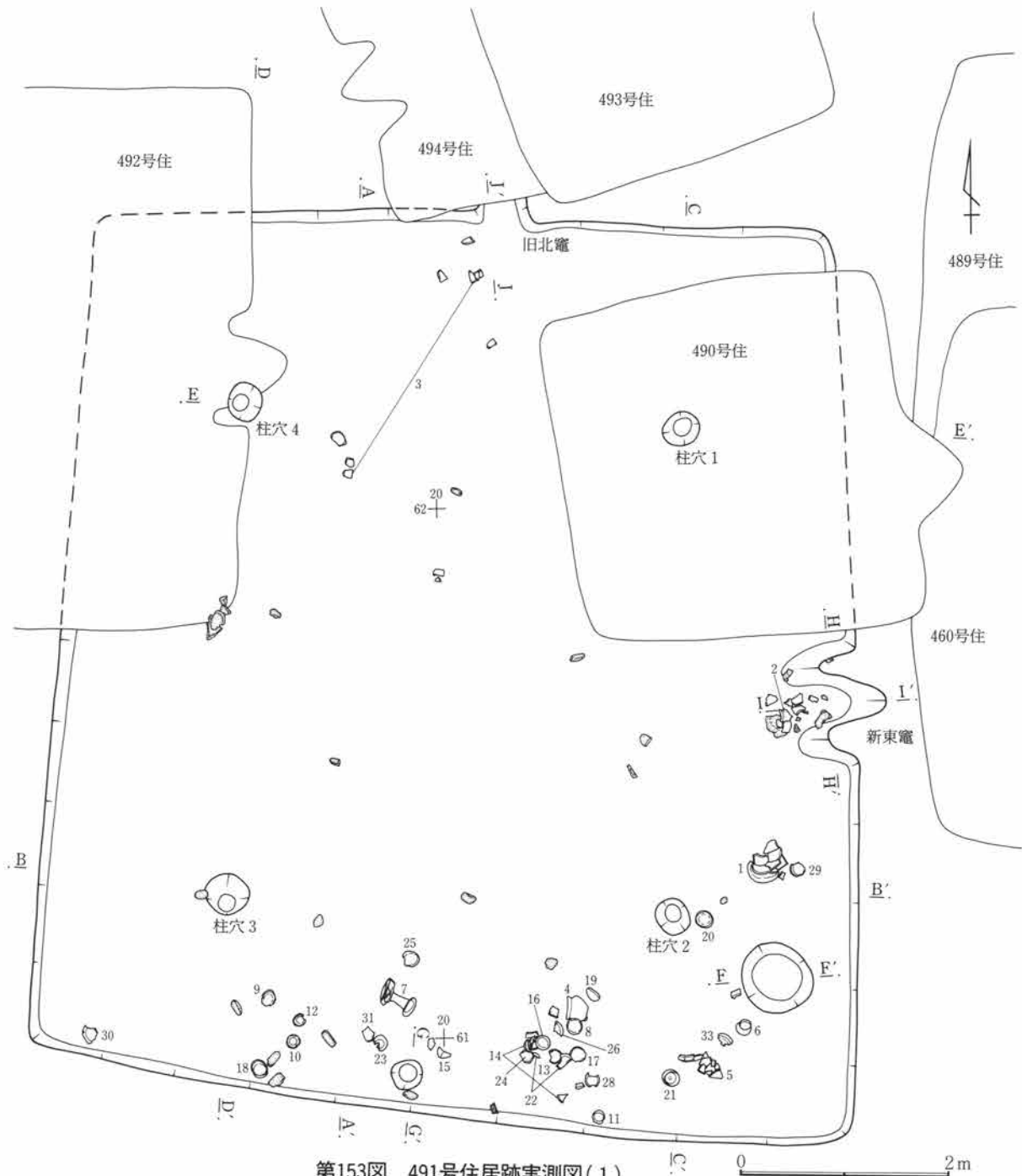
489号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
151-1 56	土器 壺	床面+20 %残存	口 18.6 高 — 底 —	①粗、2~3mmの長石粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り。内面ナデ。口縁部横ナデ。全体に器肉が厚い。
151-2	土器 壺	床面+8 破片	口(20.6) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の砂粒を多く、2~3mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。内面ナデ。口縁部横ナデ。
151-3	土器 壺	床面直上 %残存	口 — 高 — 底 —	①粗、1~2mm砂粒多、5~10mmの片岩少量含②酸化焰、硬質 ③鈍い赤褐色・断面内面鈍橙色	底面へラ削り。胴外面へラ削り。内面ナデ。外面の砂粒の移動少ない。内面の器表面密。
151-4	土器 壺	床面+18 胴下半 底部ほぼ完	口 — 高 — 底 4.9	①粗、2~4mmの長石粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。胴外面へラ削り。内面ナデ。全体に器肉が厚い。
151-5 56	土器 坏	床面+4 %残存	口 11.8 高 3.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
151-6 57	土器 坏	床面直上 %残存	口 12.2 高 4.1 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面橙色	底面へラ削り。砂粒の移動による器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ていねいな磨き後吸炭。内面の黒色は吸炭による。炭素は断面の一部まで及ぶ。
151-7 57	土器 坏	床面直上 %残存	口 12.0 高 4.1 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。底部の多くが、まだら状に剝離している。
152-8 57	土器 坏	床面直上 %残存	口(12.2) 高 3.7 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面橙色	底面へラ削り。砂粒の移動による器表面の粗れは少ない。口縁部横ナデ。内面ていねいな磨き後吸炭。内面の黒色は吸炭による。炭素は断面の一部まで及ぶ。
152-9 57	土器 坏	床面-5 %残存	口 13.4 高 4.9 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内側底面ていねいなナデ。稜は明瞭である。
152-10 57	土器 坏	床面直上 %残存	口 11.8 高 4.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③灰褐色	底面へラ削り。砂粒の移動ほとんどなく器表面密。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
152-11 57	土器 坏	床面直上 破片	口(12.6) 高(4.7) 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。底部の表面が、まだら状に剝離している。
152-12 57	須恵器 臙	覆土 破片	口(14.9) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。 ②還元焰、硬質 ③灰色	頸部に細かい櫛描き波状文。内面に淡い緑色の自然釉をみる。
152-13 70	鉄製品 鉄	床面-7	長 4.8 幅 1.0 厚 0.3 重 2.7		ほぼ柳葉状を呈する鉄鏃であり、鏃身部と角関と基部の一部が残存。鏃身部の断面形は片丸造りである。

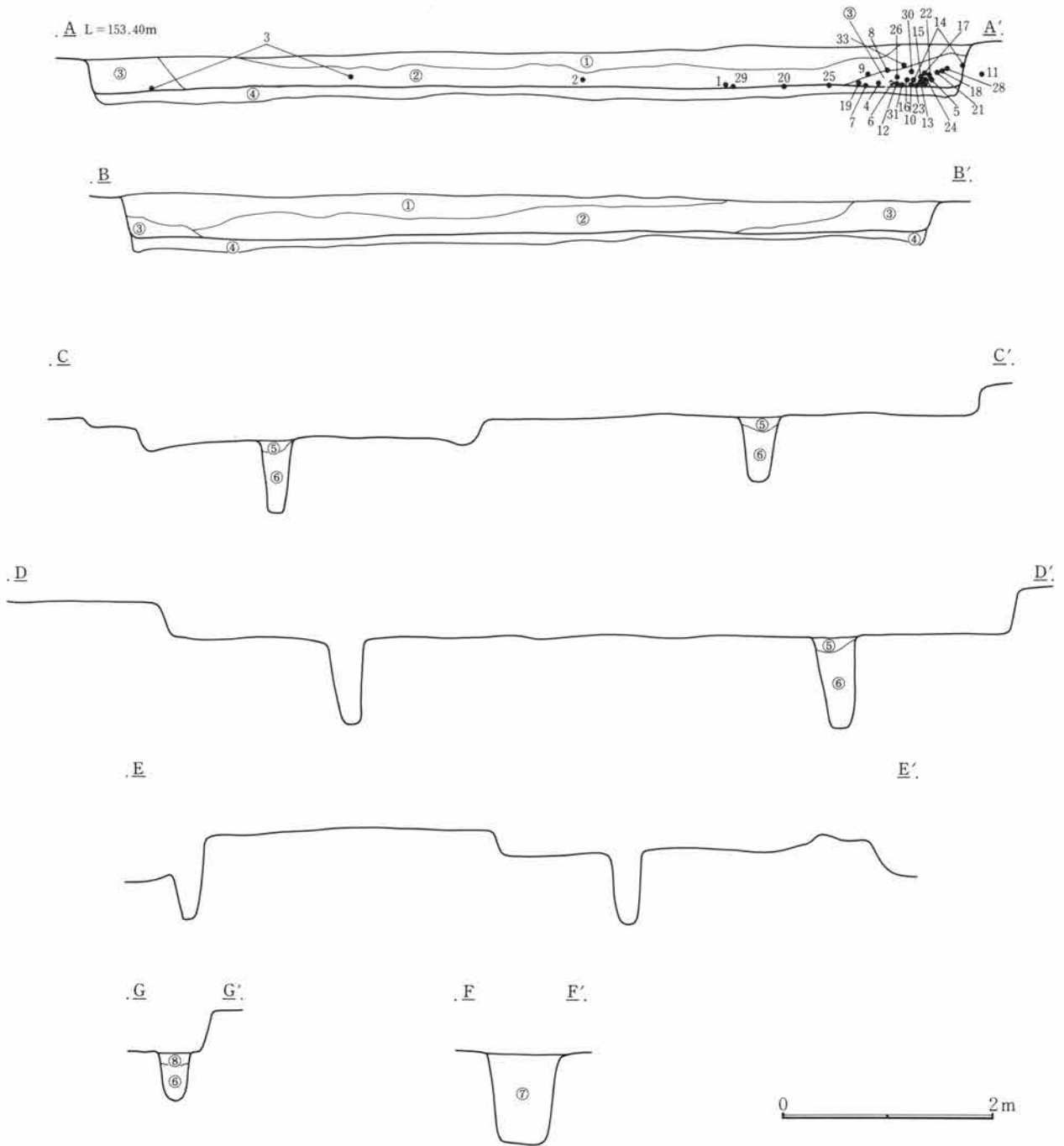
491号住居跡 (第153~158図、図版24・25・57・58)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、62-20・21グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集している地区であり、重複関係も複雑である。本住居は他の3軒と重複している。北東部分で奈良時代の490号住居と重複し、床面下まで掘り込まれている。北西部分では同じ古墳時代の492号住居により、同じように床下部分まで掘り込まれていた。さらに北壁中央部の旧北竈部分で奈良時代の494号住居と一部で重複し、北壁の一部と竈煙道部が削り取られていた。竈が2基造られており、北壁に位置する竈は床面上に位置する燃焼部や袖部分がすべて取り除かれていたため、北竈が旧竈で東竈が新竈である。また南壁中央部付近の床面に出入り口に関する施設の一



第153図 491号住居跡実測図(1)



(491号住居跡)

- | | |
|---|---|
| <p>①暗褐色土層 多くのローム粒 (1~3 mm) と白色軽石粒 (1~3 mm) と少量の焼土粒を含む。</p> <p>②暗褐色土層 多量のローム粒 (1~5 mm) を含み、白色軽石粒は殆ど含まない。</p> <p>③明褐色土層 ②層より多くのローム粒を含む。</p> <p>④黄褐色土層 地山のロームを主とした層。</p> | <p>⑤暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。</p> <p>⑥明褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。</p> <p>⑦暗褐色土層 ローム粒 (1~5 mm) を多く含む。</p> <p>⑧暗褐色土層 ローム粒 (1~5 mm) を多く含み、僅かに焼土粒と炭化物を含む。</p> |
|---|---|

第154図 491号住居跡実測図(2)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

部と思われる小穴が掘られていた。

構造 床面はロームを主とした土で造られ、床下の掘り込みは少なかった。柱穴が4本掘られ新竈に伴う貯蔵穴が竈右側に掘られていたが、旧竈に伴う貯蔵穴は掘られていなかった。壁溝は確認できなかった。

規模 東西7.74m、南北8.40mである。壁高は残りの良い南壁面で41cmである。柱穴1は径32cm深さ89cm、柱穴2は径34cm深さ61cm、柱穴3は径38cm深さ91cm、柱穴4は径37cm深さ85cmである。貯蔵穴は径68cm深さ89cm、出入り口に関する施設と思われる小穴は径28cm深さ45cmでいずれもほぼ円形を呈する。

遺物 南壁面に近い床面上より土師器の甕や坏が、また貯蔵穴付近よりほぼ完形の須恵器の坏が出土している。

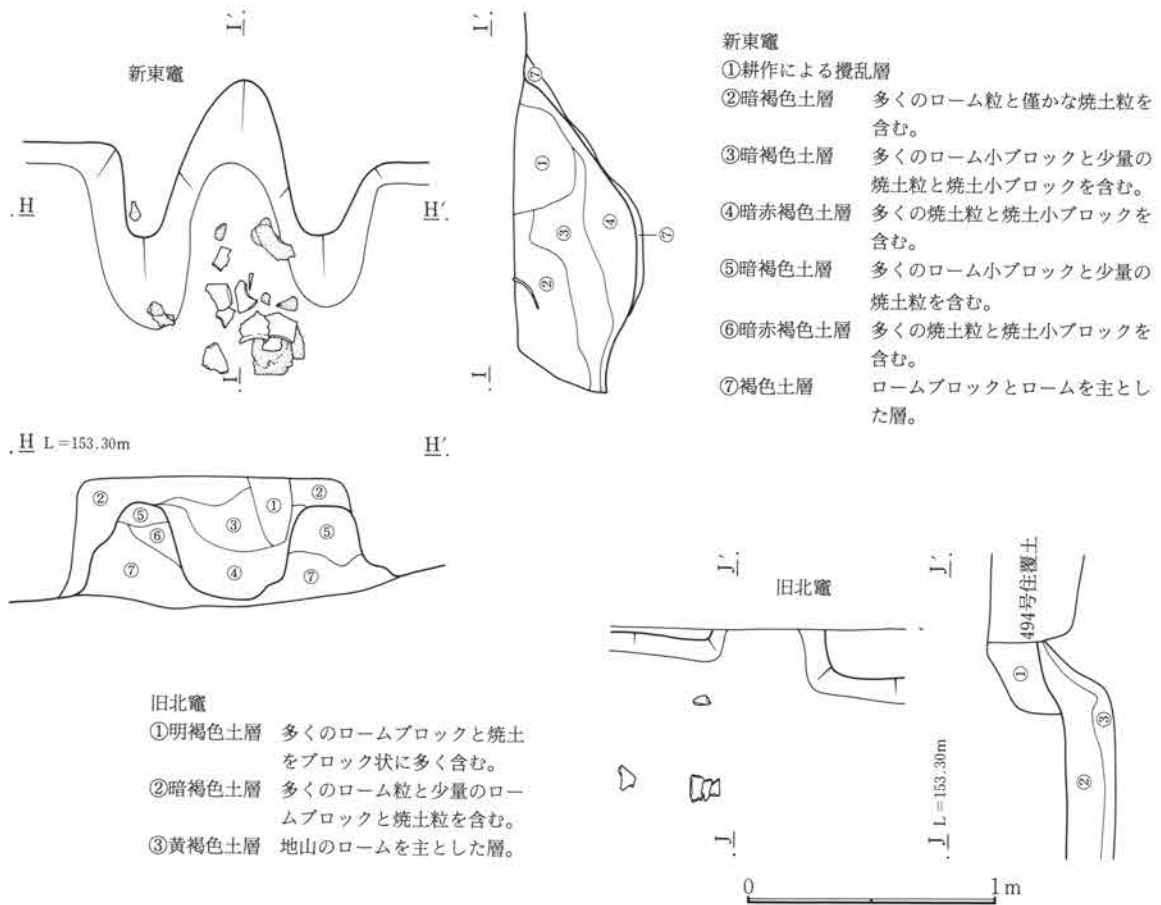
(新東竈)

概要 住居東壁の中央部に造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。焚口の左袖部分と竈内や焚口付近の床面上から火を受けて脆くなった砂岩が数個に割れた状態で出土した。天井石として使われた石と思われる。袖石については不明である。燃烧部付近から多くの焼土粒と焼土ブロックが出土した。

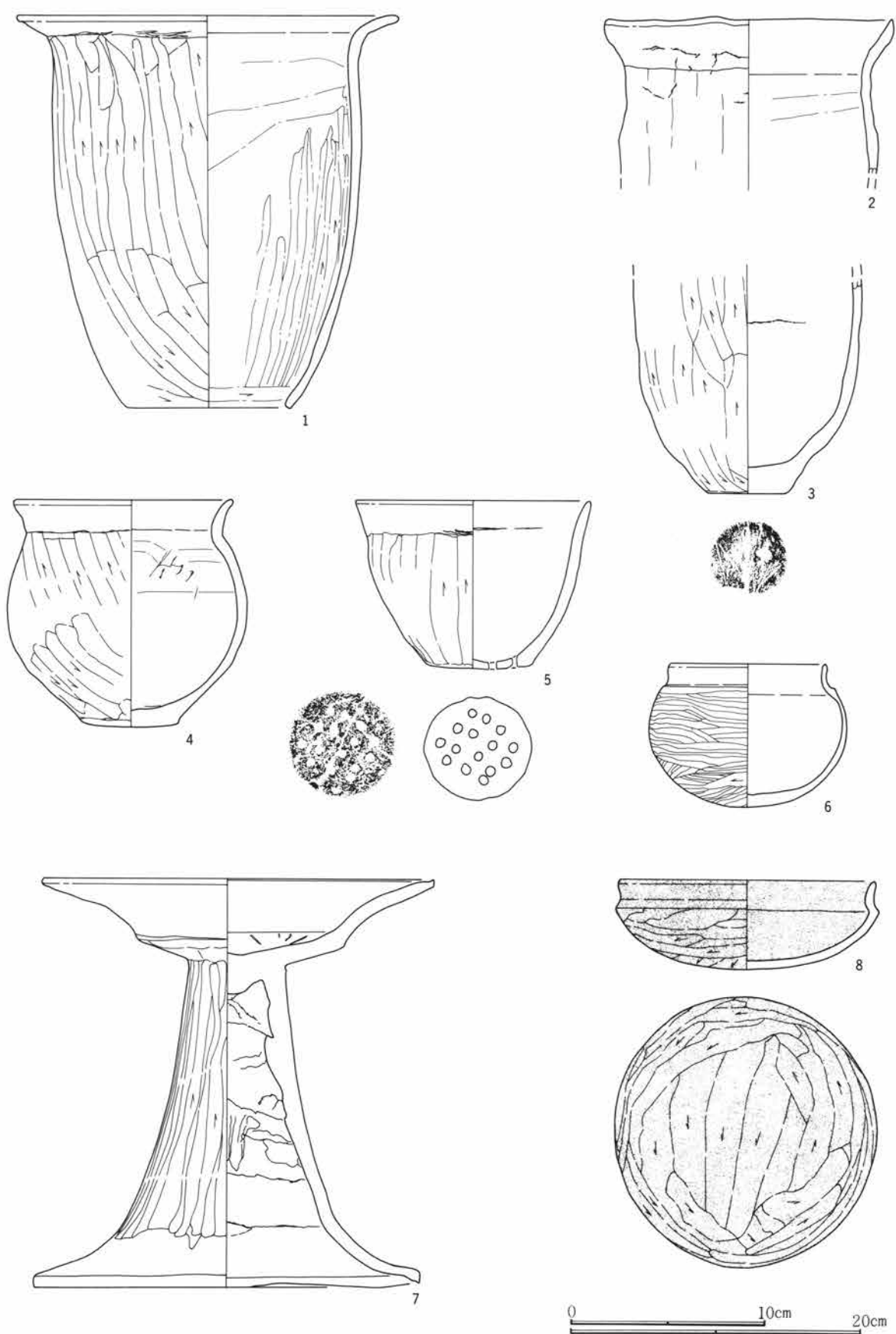
規模 両袖方向108cm、煙道方向102cmである。

(旧北竈)

概要 住居北壁の中央部に造られている。床面上に位置する燃烧部や袖部分は取り外されており、壁面に掘り込まれていた燃烧部の一部が残っていた。煙道部は本住居と重複している494号住居により削り取られて残っていなかった。

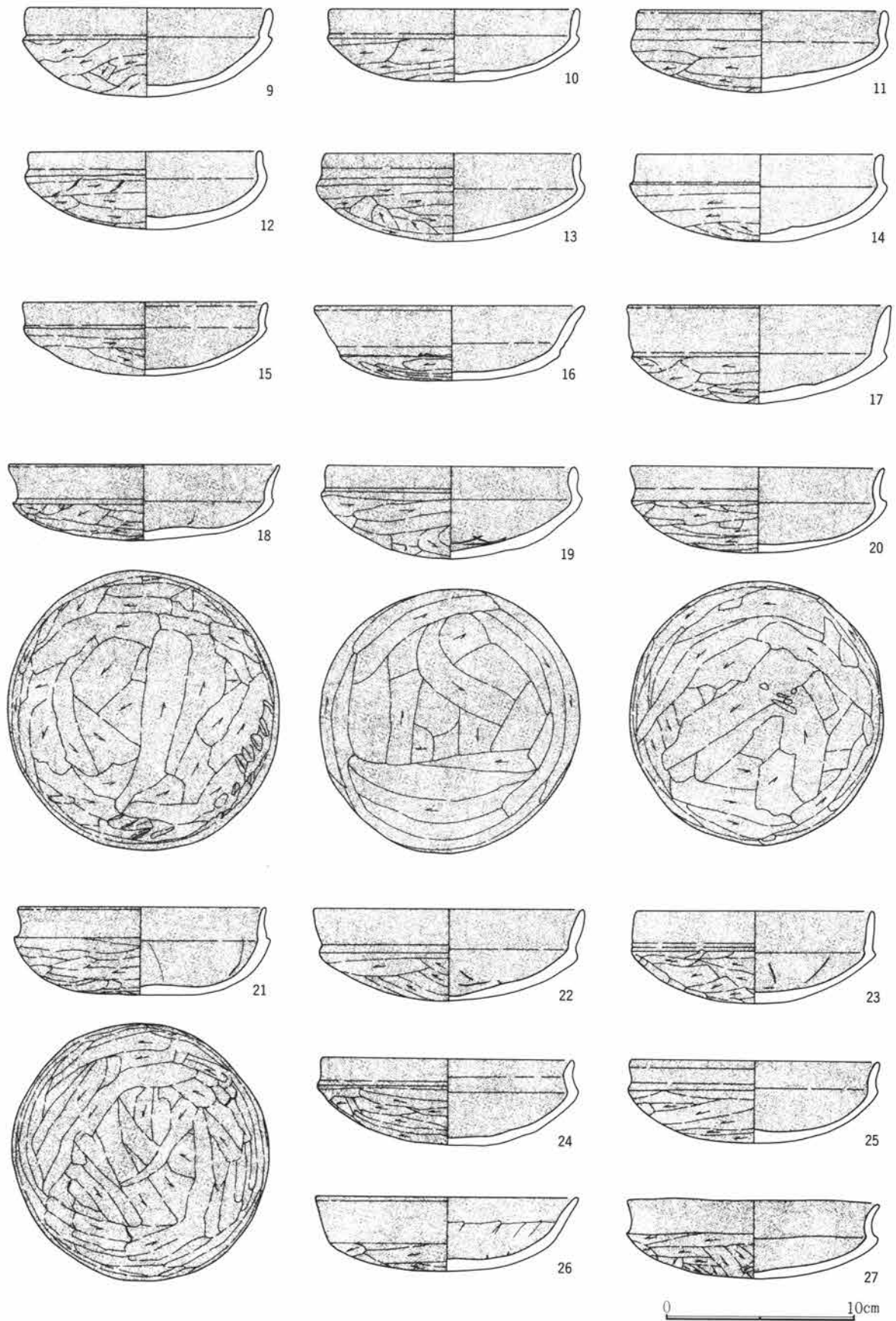


第155図 491号住居跡新東竈・旧北竈実測図

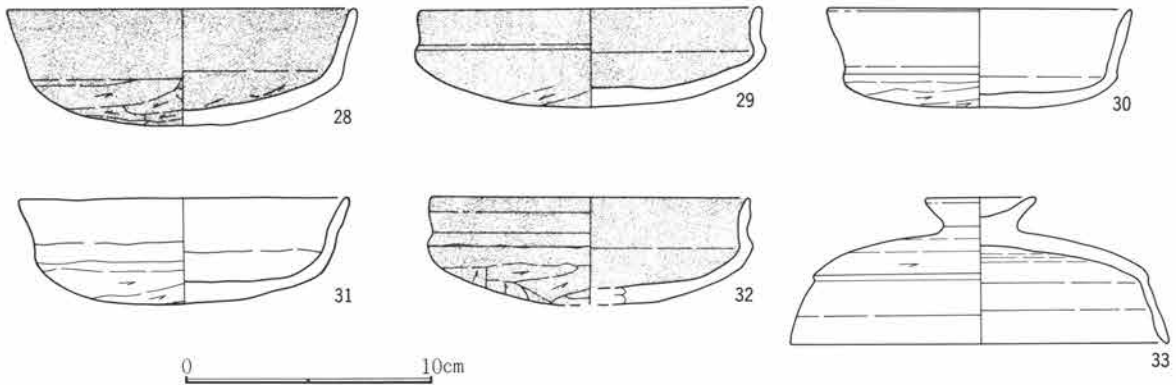


第156図 491号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第157図 491号住居跡出土遺物実測図(2)



第158図 491号住居跡出土遺物実測図(3)

491号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
156-1 57	土 師 器 甕	床面直上 %残存	口 25.5 高 27.1 底(11.4)	①やや粗、1~2mmの砂粒大量に、3~5mmの長石粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面中~下半ヘラ磨きにより密となり光沢を持つ。
156-2	土 師 器 甕	新東甕+8 %残存	口(19.7) 高 — 底 —	①粗、1~3mmの長石粒と、4~10mmの片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	外面ヘラ削りとナデ。ヘラ削りの単位ほとんど不明。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。外面の整形は粗雑である。
156-3	土 師 器 甕	床面直上 %残存 底部完形	口 — 高 — 底 5.2	①粗、2~4mmの長石粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面木葉痕。胴外面ヘラ削りで多くの砂粒が移動し、器表面が粗い。内面ナデで器表面密。
156-4 57	土 師 器 小型甕	床面+4 ほぼ完形	口 15.1 高 15.6 底 6.5	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。内面ナデ。口縁部横ナデ。胴外面は多くの砂粒が移動し粗い。
156-5 57	土 師 器 小型甕	床面+7 %残存 底部完形	口(16.2) 高 16.6 底 7.5	①粗、1~2mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。
156-6 57	土 師 器 小型甕	床面+4 完形	口 10.8 高 9.8 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面~底面ヘラ削り後、全面ヘラ磨き。口縁部横ナデ。内面ナデ。受部は明瞭である。全体的に均整のとれたていねいな作りである。内面黒漆か。
156-7 57	土 師 器 高 杯	床面直上 坏部%残存 脚部完形	口(20.2) 高 21.0 底 20.0	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラ磨き。筒部内面下半ヘラ削り。上半はナデで輪積痕が残る。坏底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。坏部より脚部の底径が大きく、器高も高い。
156-8 57	土 師 器 杯	床面+16 ほぼ完形	口 13.2 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部表面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。稜は高く明瞭である。口縁部が短く底部が深い。
157-9 57	土 師 器 杯	床面+12 ほぼ完形	口 12.6 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の長石粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面浅黄褐色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。稜は高く明瞭である。外面は吸炭により黒褐色を呈する。
157-10 57	土 師 器 杯	床面直上 ほぼ完形	口 12.9 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③外面明赤褐色・内面鈍い橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。稜は高く明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。口唇部の多くは剥れおちている。
157-11 57	土 師 器 杯	床面+11 ほぼ完形	口 12.9 高 4.2 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・表面一部黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。表面の多くがまだら状に剝離している。内面と口縁部外側は黒漆か。
157-12 57	土 師 器 杯	床面+4 ほぼ完形	口 12.1 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・表面一部黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。全体的に少しゆがんでおり、口縁部の長さ稜の高さ等不均一。内面と口縁部外側は黒漆か。
157-13 57	土 師 器 杯	床面+5 %残存	口 13.3 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデ。稜は高いが鋭角でない。底面ヘラ削りにより、多くの砂粒が移動している。内面と口縁部外側は黒漆か。
157-14 58	土 師 器 杯	床面+5 %残存	口 12.8 高 4.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面底部にヘラの工具痕あり。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

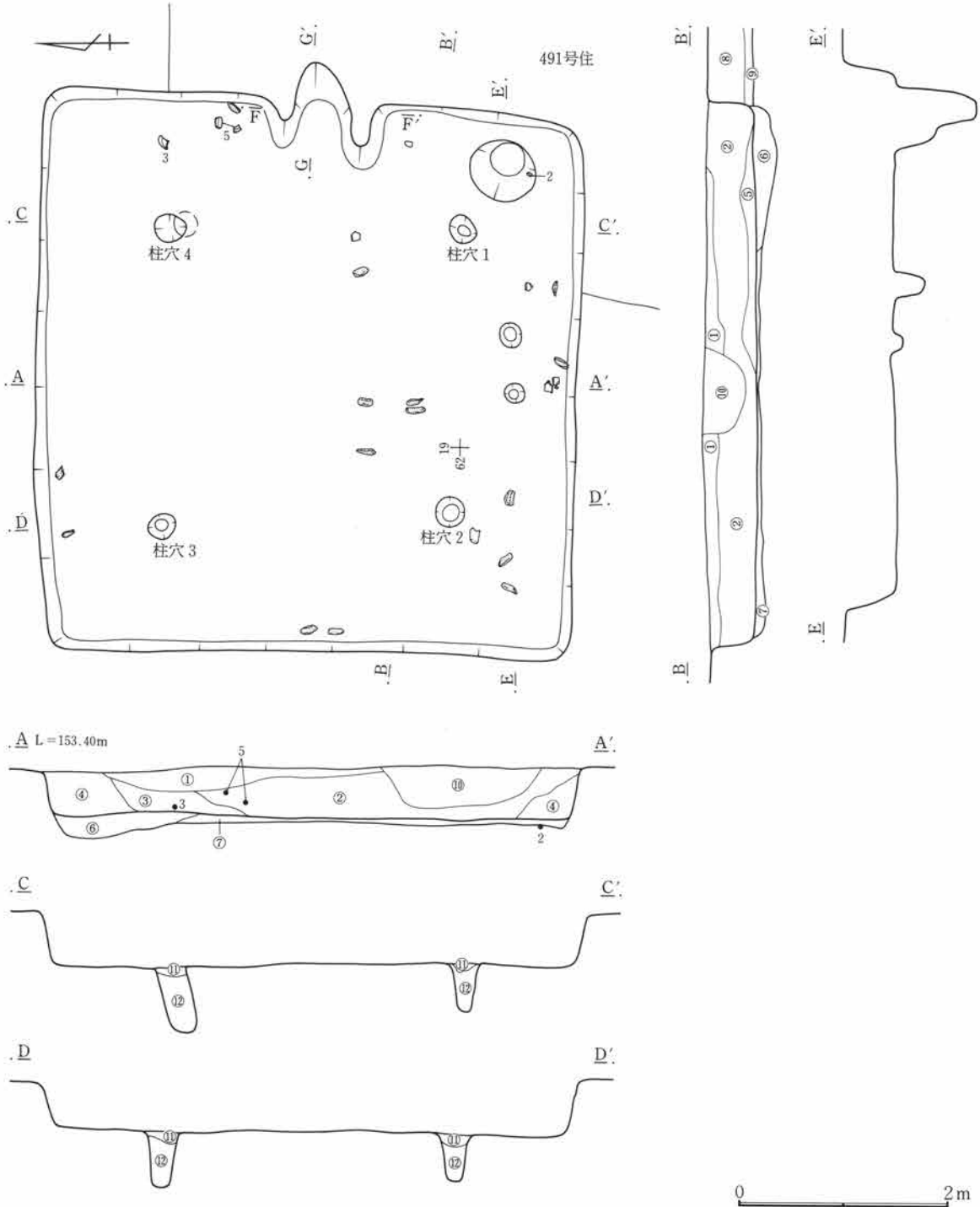
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
157-15 58	土師器 坏	床面+8 %残存	口(12.7) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。外面の一部が剝離している。口縁部が短い。
157-16 57	土師器 坏	床面+6 完形	口 14.0 高 3.9 底 丸底	①密、1~3mmの砂粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	底面細かい数多くのヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部が大きく外傾する。他の坏とやや異質である。26の坏に似ている。
157-17 58	土師器 坏	床面+12 ほぼ完形	口 13.7 高 5.0 底 丸底	①密、1mm前後の長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③赤褐色・外面約半分黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。
157-18 58	土師器 坏	床面+15 ほぼ完形	口 14.0 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である均整のとれた坏である。
157-19 57	土師器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 13.0 高 4.8 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部ナデ。内面横ナデで器表面密。内側底面にヘラの工具痕あり。表面の黒褐色は吸炭による。
157-20 58	土師器 坏	床面直上 完形	口 13.2 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・表面一部黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は鋭角で高く明瞭である。均整のとれた坏である。内面と口縁部外側は黒漆か。
157-21 58	土師器 坏	床面+13 完形	口 12.9 高 4.5 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面にヘラの工具痕あり。稜は高く明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
157-22 58	土師器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 14.0 高 4.8 底 丸底	①密、1mm内外の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・表面一部黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。表面は吸炭により黒褐色を呈する。
157-23 58	土師器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.5 高 4.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質。 ③表面黒褐色・断面橙色。	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面といねいなナデ。稜は鋭角で明瞭である。全体的に均整のとれた坏である。内面と口縁部外側は黒漆か。
157-24 58	土師器 坏	床面+4 %残存	口 13.1 高 4.5 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色・一部橙色。	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
157-25 58	土師器 坏	床面直上 %残存	口 12.9 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面にぶい赤褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。均整のとれた坏である。
157-26 58	土師器 坏	床面+7 %残存	口 13.6 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面底部にヘラの工具痕あり。16の坏に似ている。
157-27 58	土師器 坏	覆土 %残存	口 13.1 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色・表面一部黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く鋭角を呈する。全体的に少しゆがんでいる。内面と口縁部外側は黒漆か。
158-28 58	土師器 坏	床面+16 %残存	口 13.8 高 4.6 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭でない。
158-29	土師器 坏	床面直上 %残存	口(13.6) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削りであるが、表面が剝離しているためヘラ削りの単位不明瞭。口縁部横ナデ。内面底部にヘラの工具痕あり。
158-30 58	土師器 坏	床面+15 %残存	口 12.0 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。底部が浅く、色調と調整が31の坏と共通し、他の坏と異なる。
158-31 58	土師器 坏	床面直上 %残存	口 13.0 高 4.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体が均一でなくゆがんでいる。30の坏に色調、調整が似ている。
158-32	土師器 坏	覆土 破片	口(12.6) 高 — 底 —	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・内面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
158-33 58	須恵器 蓋	床面直上 ほぼ完形	高 4.1 高 5.7 口 14.9	①粗、1mm前後の長石粒を多く含む。②還元焰、硬質 ③灰色	天井部中央に摘が付く。摘の付く周辺部以外の天井部右回転ヘラ削り。稜は鋭角でない。口縁部丸い。

492号住居跡 (第159~161図、図版26・58・70)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、63-19・20グリッドに位置する。

概要 多くの住居が密集している地区である。本住居は同じ古墳時代の491号住居の北西部分を床面下まで掘り込んで、住居の南東部分と竈が造られている。

構造 床面はロームを主とした土で造られ、床下土坑の掘り込みは少なかった。柱穴が4本掘られ、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。南壁中央部に近い床面上に出入り口の施設に



第159図 492号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(492号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒(1~3mm)と白色軽石粒(1~2mm)を含む。
- ②暗褐色土層 多量のロームブロック(1~1.5cm)を含む。白色軽石粒は少ない。
- ③暗褐色土層 ②層に近いが、より多くのロームブロック(1~3cm)を含む。
- ④明褐色土層 ローム粒(1~3mm)を多量に含む。
- ⑤暗褐色土層 ローム粒(1~5mm)と炭化物(1~5mm)を多く含む。
- ⑥明褐色土層 ロームブロック(1~3cm)を多く含む。
- ⑦黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑧491号住居覆土
- ⑨491号住居床下覆土
- ⑩耕作溝覆土
- ⑪暗褐色土層 ローム粒を主とし、少量の焼土粒を含む。
- ⑫明褐色土層 ローム粒を主とする層。

関すると思われる小穴が2個掘られていた。

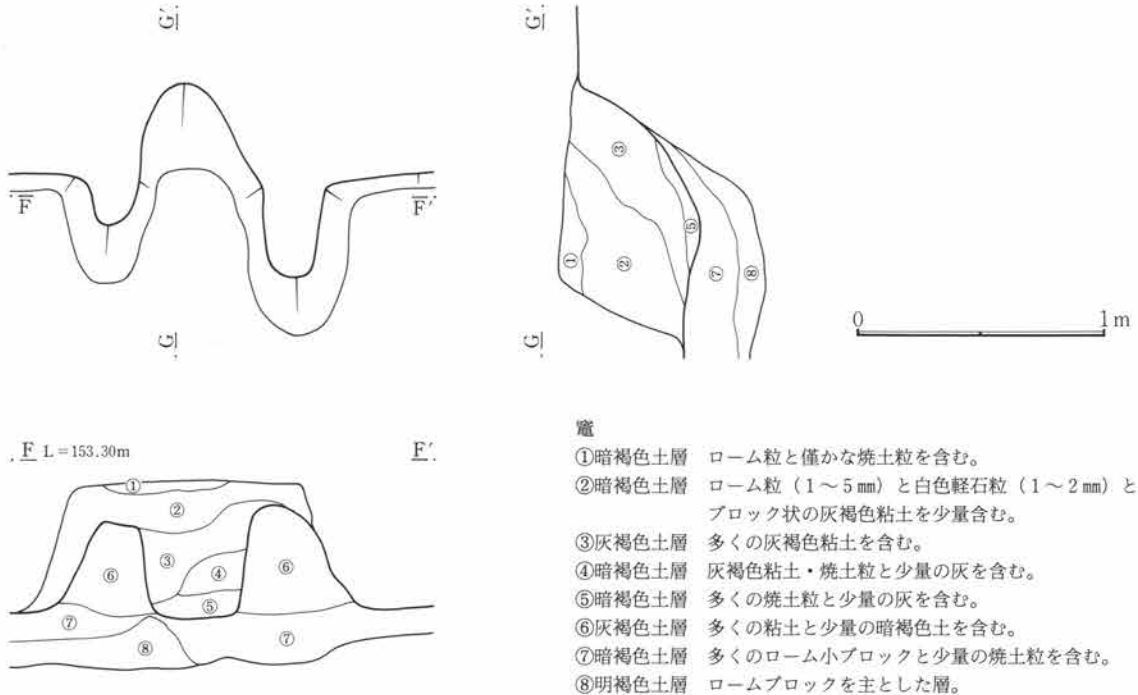
規模 東西5.14m、南北5.12mである。壁高は残りの良い南壁面で50cmである。柱穴1は径23cm深さ42cm、柱穴2は径28cm深さ45cm、柱穴3は径26cm深さ53cm、柱穴4は径30cm深さ61cmである。貯蔵穴は径60cm深さ76cmでほぼ円形を呈する。出入口に関する施設と思われる小穴1は径22cm深さ28cm、小穴2は径18cm深さ12cmである。

遺物 土師器の甕や坏と鉄製品が出土している。またこも編み石も多く出土している。

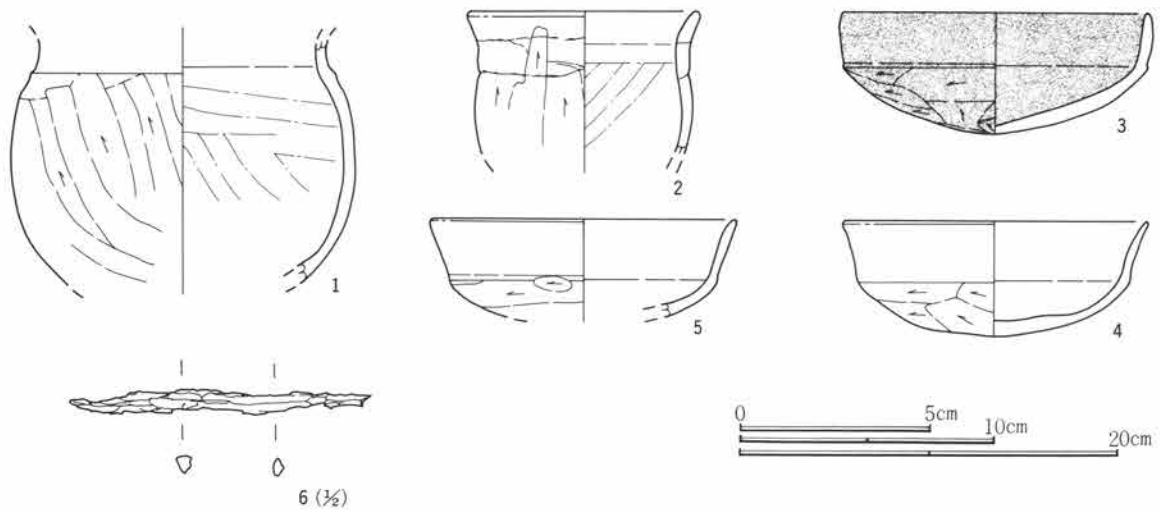
(竈)

概要 住居東壁のほぼ中央部に造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。竈が軟質な491号住居の覆土を掘り込んで造られているため、多くの灰褐色粘土を持ち込んで造られている。他のこのような例ではこの粘土が焼けて多くの焼土粒が出土する例が多いが、この竈では出土した焼土粒は多くなかった。竈内や竈周辺より石は出土していないため、石を用いることなく造られた竈と思われる。

規模 両袖方向111cm、煙道方向102cmである。



第160図 492号住居跡竈実測図



第161図 492号住居跡出土遺物実測図

492号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
161-1	土師器 小型甕	覆土 3/4残存	口 — 高 — 底 —	①密、2~3mmの片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	外面へら削りとへらナデ。口縁部横ナデ。内面胴部ナデにより器表面密。
161-2	土師器 小型甕	貯蔵穴内 -6 破片	口(12.2) 高 — 底 —	①粗、1mm前後の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	胴部へら削り。口縁部横ナデ。胴部内側ナデ。
161-3 58	土師器 坏	床面+10 3/4残存	口(12.2) 高 4.8 底 丸底	①密、1mm前後の長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質③内面黒色断面橙色・外面にぶい橙色	底面へら削り。多くの砂粒の移動が目立つ。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。稜は明瞭である。内面黒漆か。
161-4 58	土師器 坏	覆土 3/4残存	口 12.1 高 4.5 底 丸底	①密、粉状を呈する。②酸化焰、硬質③橙色	底面へら削り。器表面が磨耗しており削りの単位不明。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。
161-5 58	土師器 坏	床面+16 3/4残存	口(12.2) 高 — 底 —	①密、粉状を呈する。②酸化焰、硬質③橙色	4の坏と同様に粉状を呈し、削りの単位不明。口縁部横ナデ内面ていねいなナデ。
161-6 70	鉄製品	耕作溝内 覆土	長 8.0 幅 0.5 厚 0.4 重 3.4		名称と用途不明。錆化がはげしく残りが悪い。

500号住居跡 (第162~165図、図版26・27・59)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、55-23グリッドに位置する。

概要 他の住居と重複していないが、確認面からの掘り込みが浅く、良好な状態での発掘はできなかった。東側に近接して同じ古墳時代の501号住居がある。竈が東壁南寄り確認された。

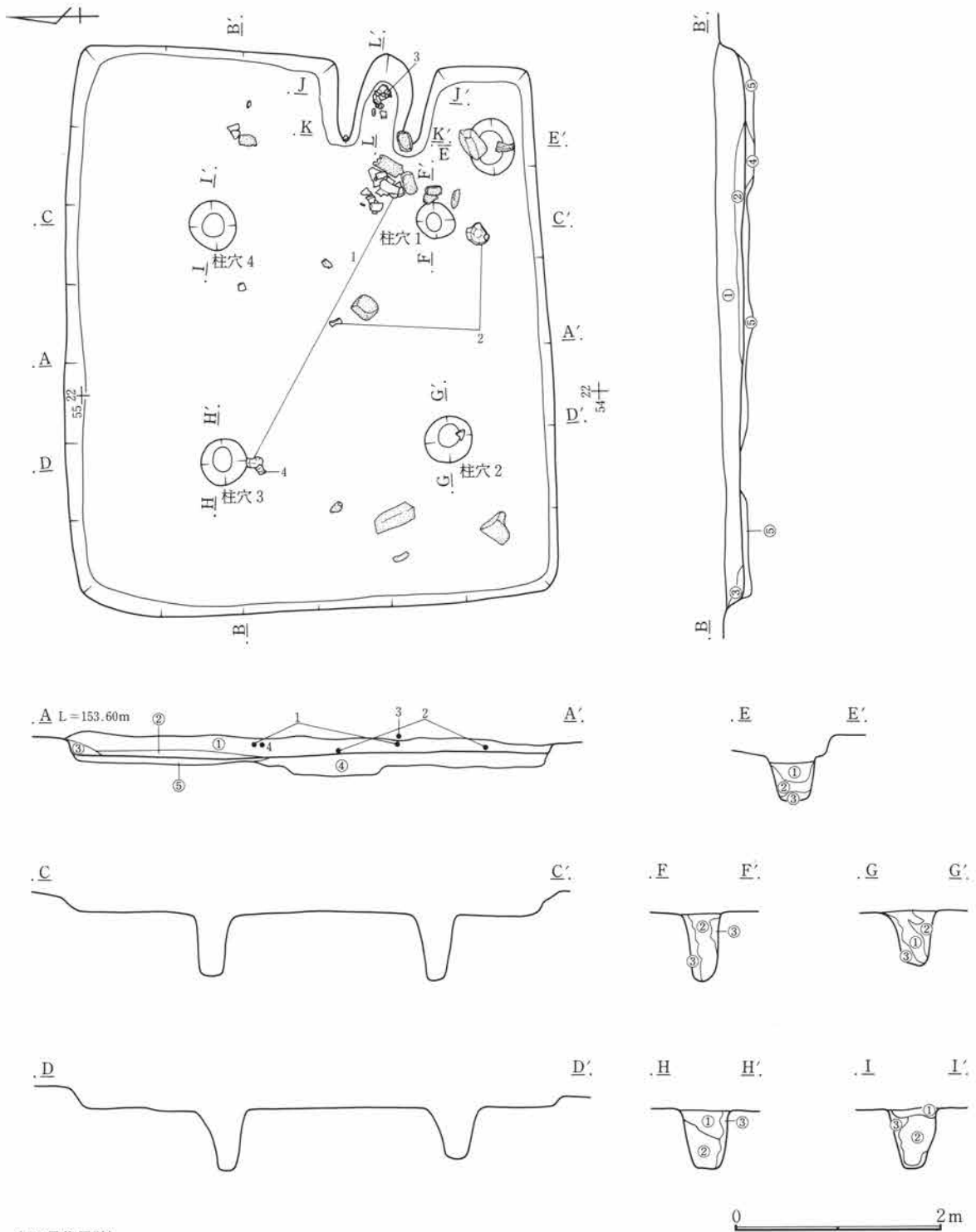
構造 床面は一部暗褐色土で造られていたが、多くはロームを主とした土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西5.35m、南北4.70mである。壁高は残りの良い西壁部分で21cmである。柱穴1は径38cm深さ65cm、柱穴2は径45cm深さ51cm、柱穴3は径44cm深さ58cm、柱穴4は径46cm深さ58cmである。貯蔵穴は径44cm深さ44cmでほぼ円形を呈している。

床下 竈焚口付近と住居中央部に床下土坑が掘られていた。床面からの深さは図上に数値で示した。

遺物 土師器の甕や坏が出土している。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



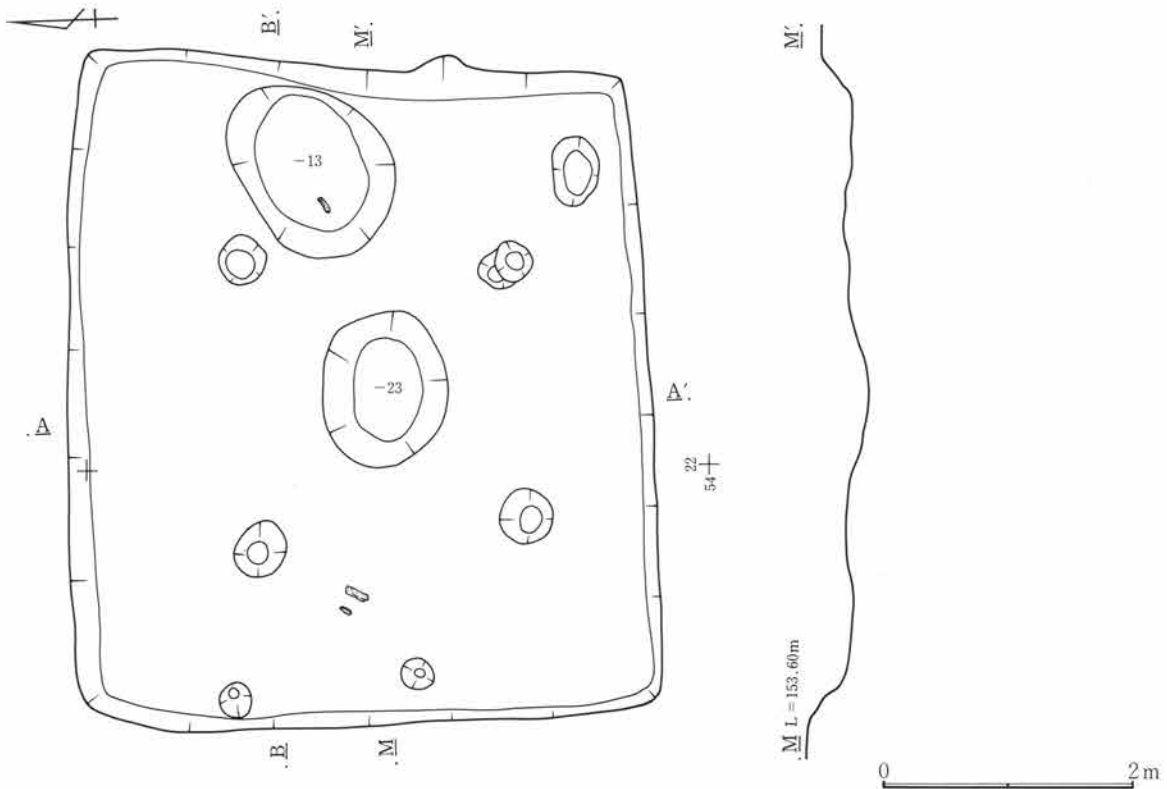
(500号住居跡)

- ①黒褐色土層 黒褐色土中にローム粒は殆ど含まず、1mm内外の白色軽石粒を多く含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む。
- ④暗褐色土層 暗褐色土を主とし、多くのローム粒を含む。
- ⑤黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

柱穴

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と暗褐色土の混入土層。
- ②暗褐色土層 ①層に近いが、より多くのローム粒を含む。
- ③褐色土層 ローム粒とローム小ブロックを主とした層。

第162図 500号住居跡実測図

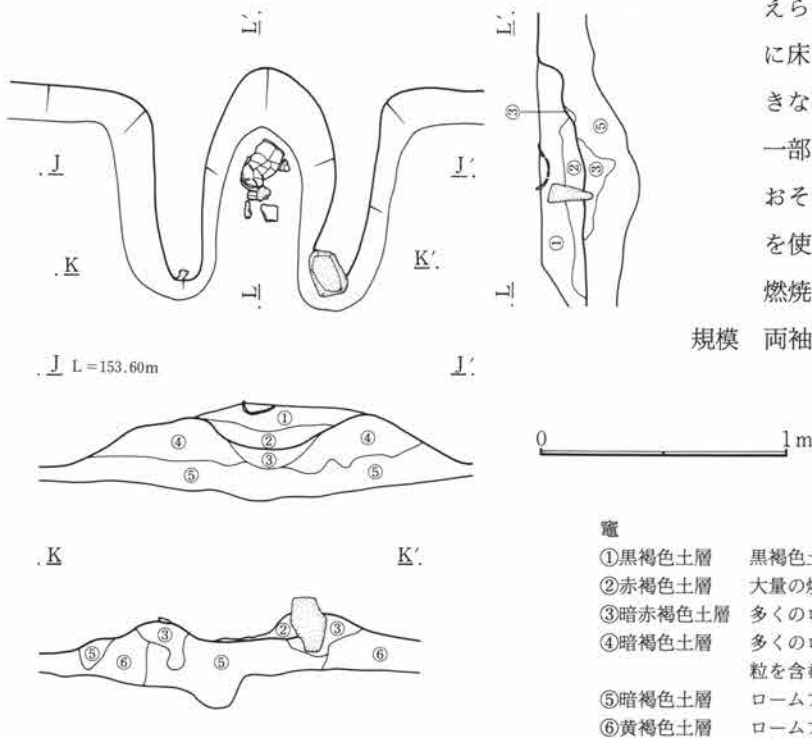


第163図 500号住居跡床下実測図

(竈)

概要 住居東壁の南寄りに造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。右袖に上部を欠損した袖石が、また燃烧部中央煙道部寄りに支脚石が据えられた状態で出土した。また竈周辺に床面から少し高い位置であるが、大きな石が多く出土している。それらの一部は竈に使用された可能性も高く、おそらくこの竈は両袖部と天井部に石を使用して造られたものと思われる。燃烧部から多くの焼土粒が出土した。

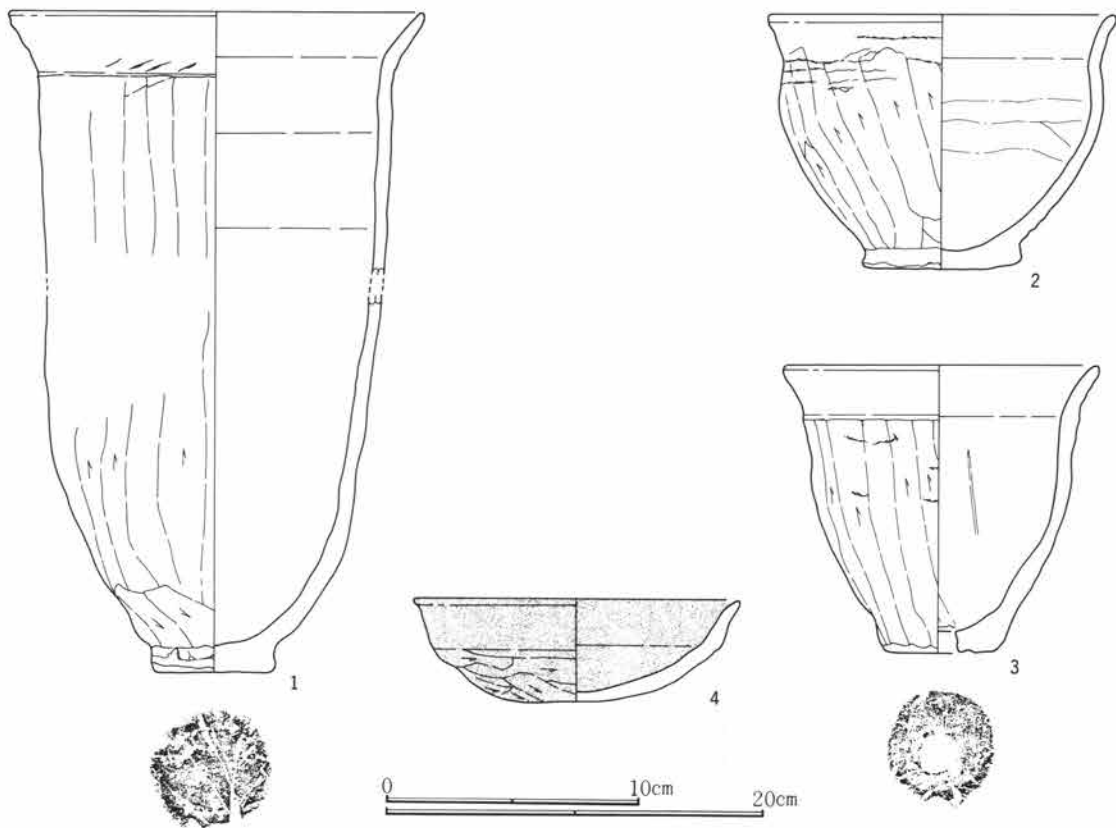
規模 両袖方向110cm、煙道方向95cmである。



竈

- ①黒褐色土層 黒褐色土中に少量の白色軽石粒と焼土粒を含む。
- ②赤褐色土層 大量の焼土粒と少量の黒褐色土を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。
- ④暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックと少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒と黒褐色土の混入層。
- ⑥黄褐色土層 ロームブロックを主とした層。

第164図 500号住居跡竈実測図



第165図 500号住居跡出土遺物実測図

500号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
165-1 59	土器 甕	床面+8 胴部%残存	口(22.0) 高(34.7) 底 6.2	①粗、10mm前後の砂粒と片岩を わずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	胴外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ナデ。 底面木葉痕。
165-2 59	土器 小型甕	床面直上 口縁%残存 胴部%残存	口(18.3) 高 13.4 底 8.5	①粗、1~2mmの砂粒と片岩粒 を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胴部表面はへら削りで器表面の砂粒が移動し粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
165-3 59	土器 小型甕	竈内+16 口~胴部% 底部完形	口(16.6) 高 15.1 底 5.7	①粗、1~2mmの多くの砂粒と 5~7mmの少量の片岩粒を含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胴部へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 底部に小穴を開け甕としている。
165-4 59	土器 坏	床面+8 %残存	口 12.9 高 4.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③暗褐色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部と底部との境 の稜は認められない。

501号住居跡 (第166~169図、図版27・59)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、54・55-24グリッドに位置する。

概要 床下調査により4本の柱穴の西側にさらに4本の柱穴が確認された。その4本は旧柱穴と思われる。本住居では柱の建て替えが行われていたものと思われる。柱穴3の部分に本住居の床面まで掘り込んで造られた後世の墓壇が発掘された。墓壇の中からは人骨が出土した。

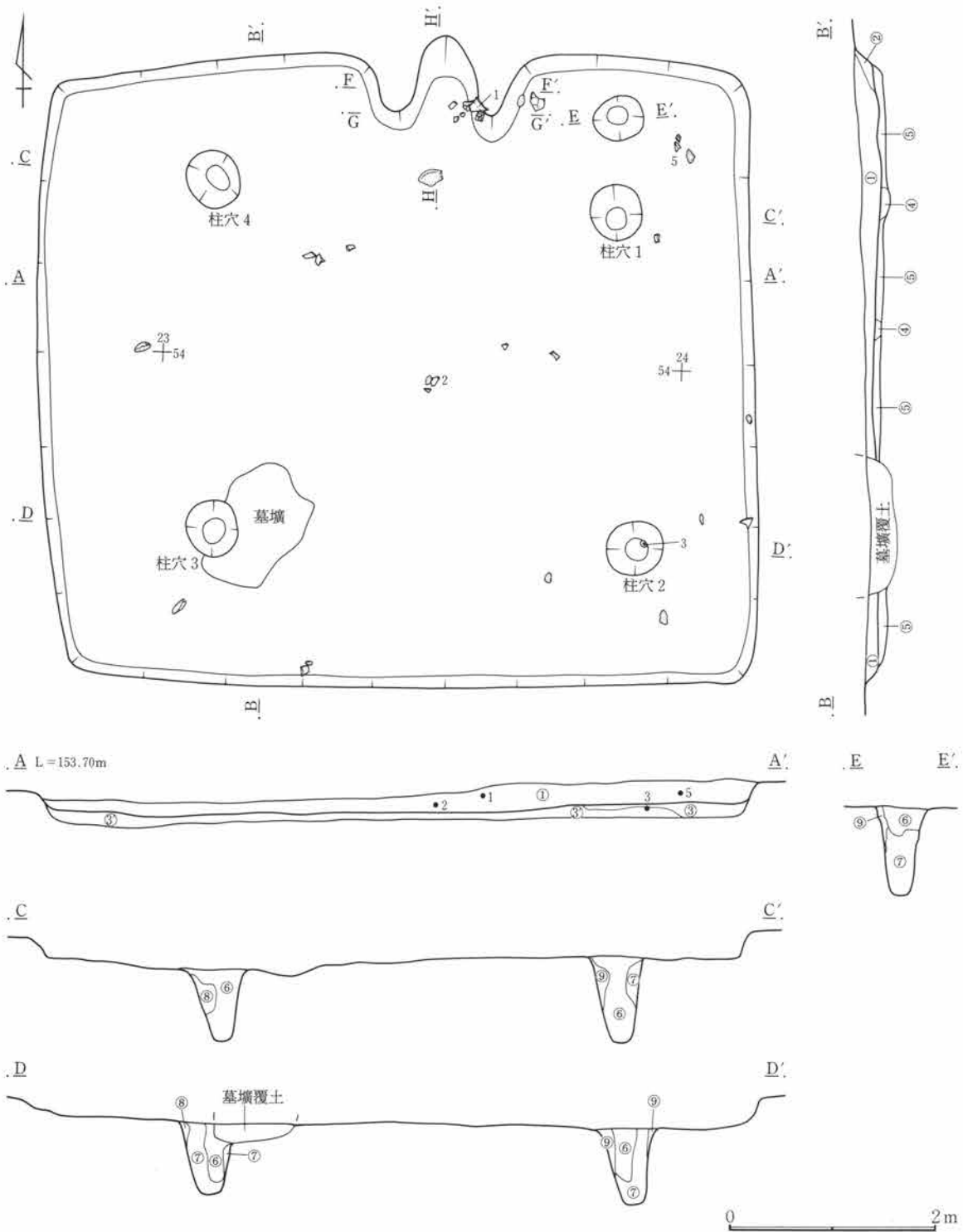
構造 床面の多くは、ロームを主とした土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が竈の右側に掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西6.90m、南北6.0mである。壁高は残りの良い東壁部分で27cmである。柱穴1は径50cm深さ83cm、柱穴2は径52cm深さ82cm、柱穴3は径50cm深さ73cm、柱穴4は径50cm深さ78cmである。旧柱穴の上面

は削られて不明であるため深さで示す。旧柱穴1は深さ33cm、旧柱穴2は深さ31cm、旧柱穴3は深さ50cm、旧柱穴4は深さ51cmである。貯蔵穴は径50cm深さ81cmでほぼ円形を呈している。

床下 竈焚口付近に灰褐色粘土をブロック状に含む床下土坑が、また南壁中央部に接した床面に小穴が掘られていた。床面からの深さは図上に数値で示した。

遺物 土師器の甕や坏が、また須恵器の坏や甕の破片も出土している。

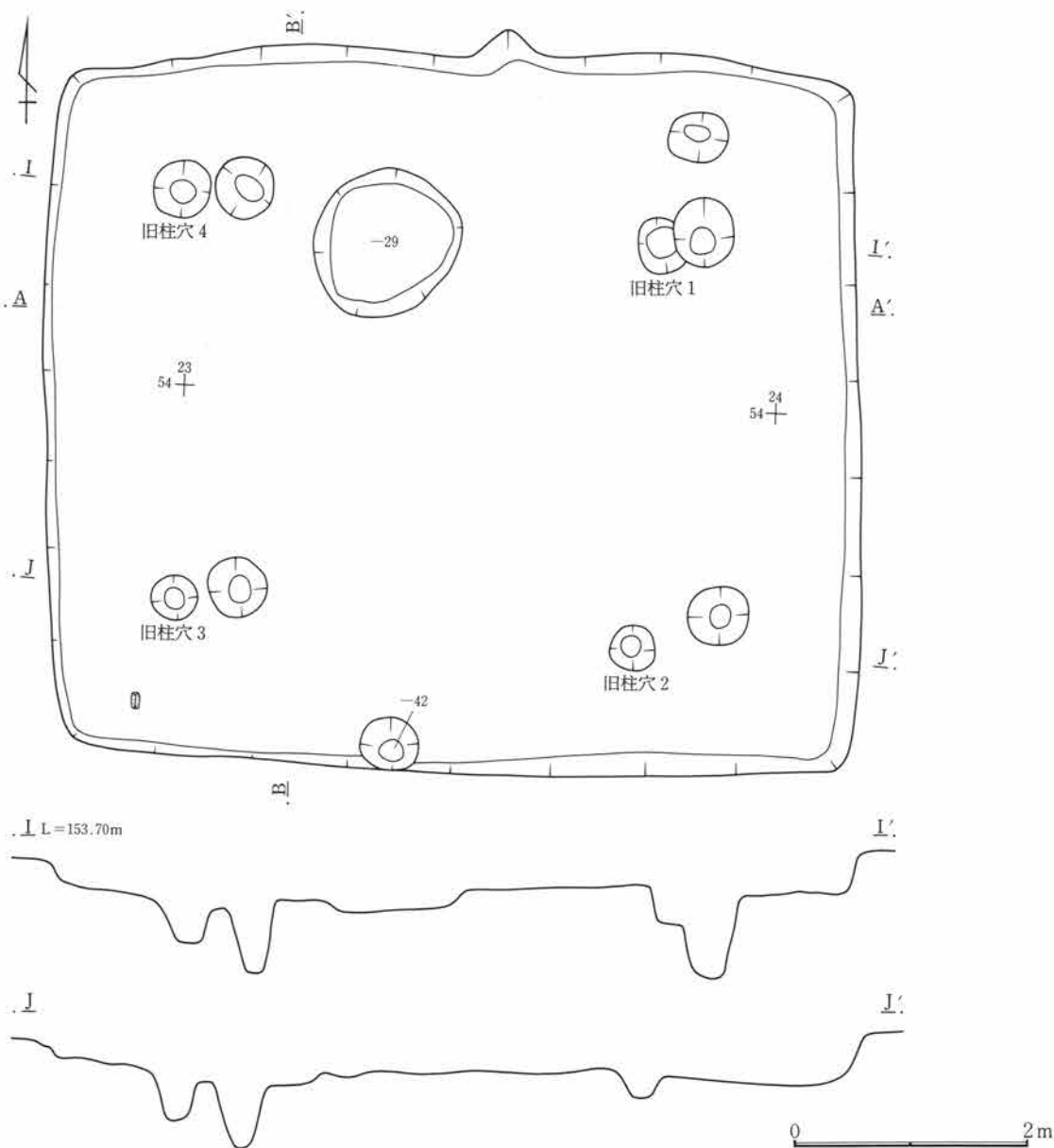


第166図 501号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(501号住居跡)

- | | | | |
|--------|----------------------------------|--------|-------------------------------|
| ①黒褐色土層 | 黒褐色土を主とし、少量のローム粒と1mm内外の白色軽石粒を含む。 | ⑤黄褐色土層 | ローム粒を主とし、少量の黒褐色土を含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の黒褐色土を含む。 | ⑥暗褐色土層 | 黒褐色土・ローム粒・ローム小ブロックの混入土層。 |
| ③暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑦暗褐色土層 | ①層に近いが、より多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 |
| ③暗褐色土層 | ③層に近いが、より多くのロームブロックを含む。 | ⑧暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 |
| ④暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑨褐色土層 | ローム粒とローム小ブロックを主とした層。 |

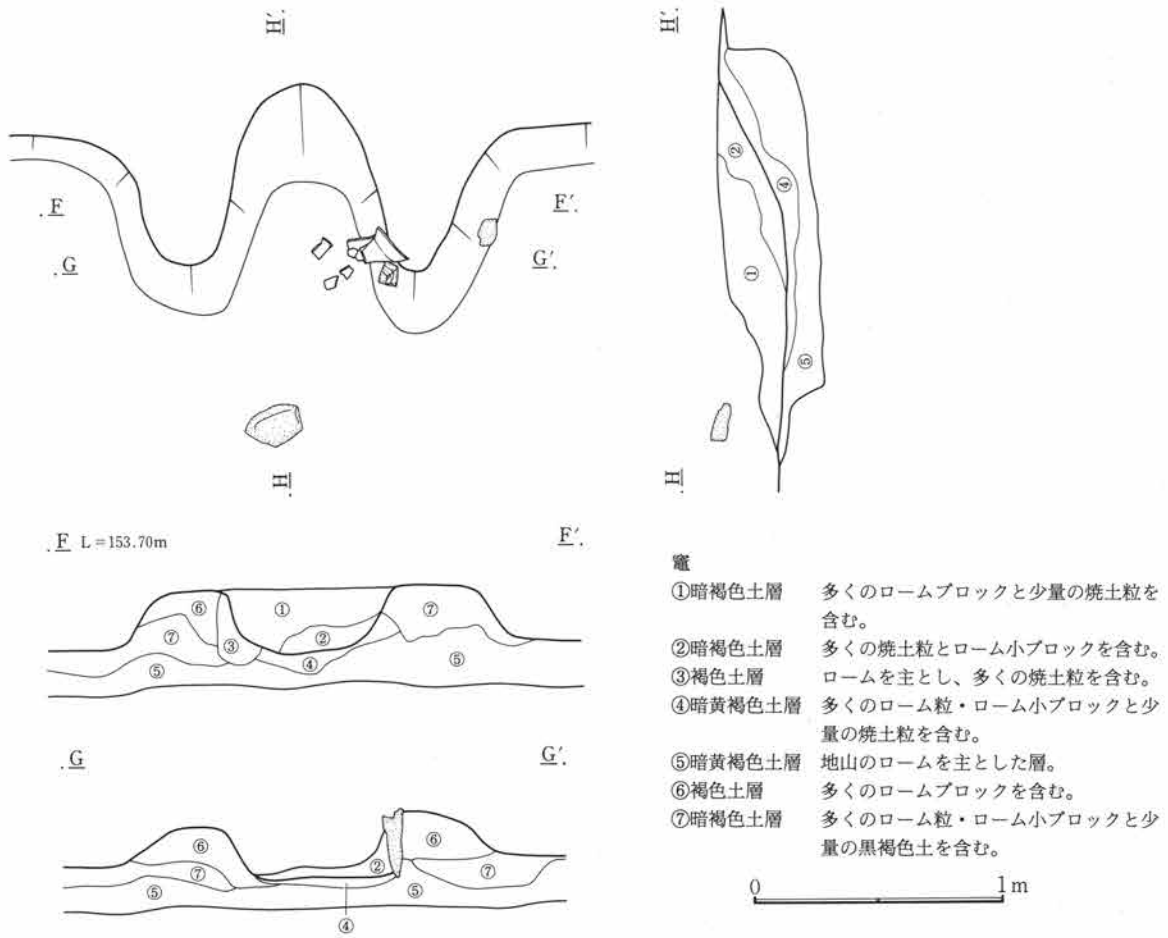


第167図 501号住居跡床下実測図

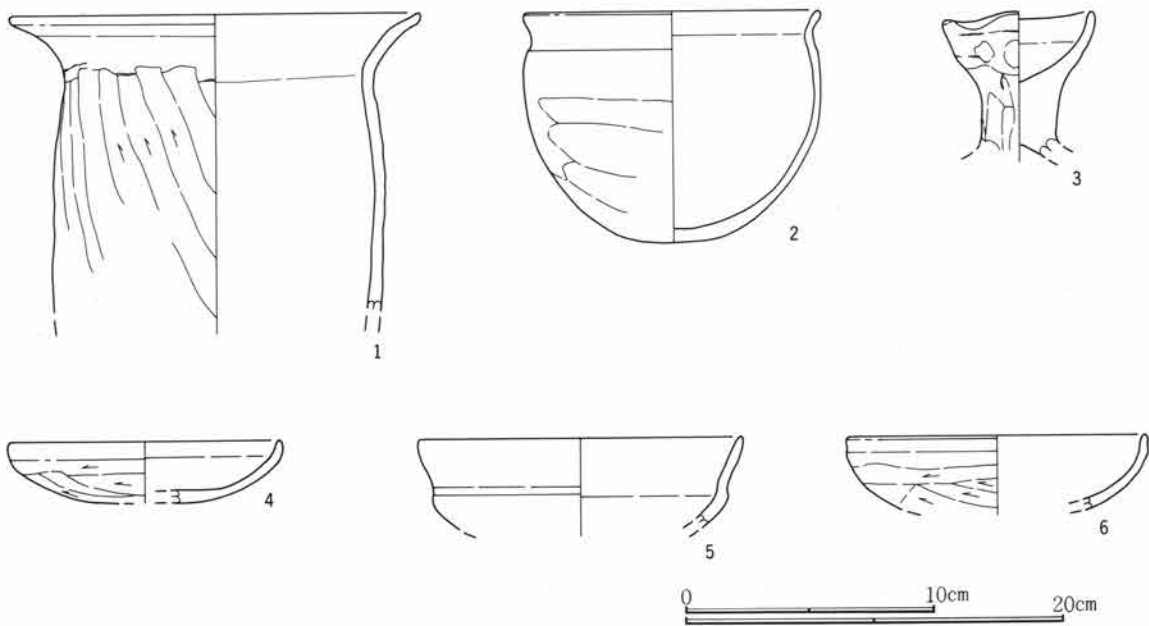
(竈)

概要 住居北壁のやや東寄りに造られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。右袖に細長い袖石が据えられた状態で出土した。また焚口手前の覆土中に大きく横に長い割れた石が出土している。層位的に天井石には疑問が残り、左袖石も残されていないが、この竈は両袖部と天井部に石を使用して造られた可能性を示す。燃焼部から多くの焼土粒が出土した。

規模 両袖方向138cm、煙道方向96cmである。



第168図 501号住居跡竈実測図



第169図 501号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

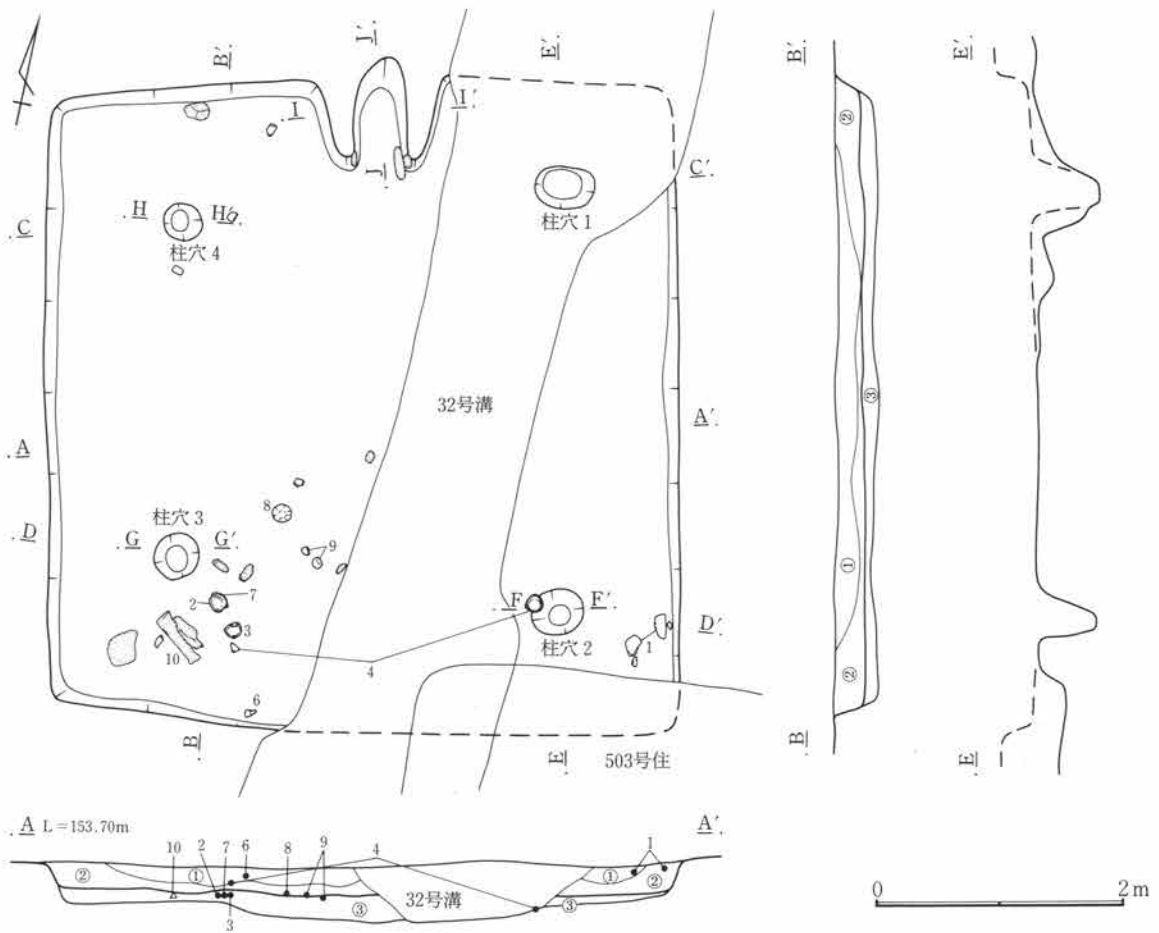
501号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
169-1 59	土師器 甕	竈内+15 %残存	口(21.6) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く、 3mm前後の片岩粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へラ削りにより多くの砂粒が移動し、器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面には多く砂粒が浮き出しており粗い。
169-2 59	土師器 小型甕	床面+6 口~胴部均 底部完形	口(14.6) 高12.1 底6.0	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。胴外面へラ削り。砂粒の移動ほとんどなく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデ。 均整のとれた甕である。
169-3 59	土師器 手捏土器	床面直上 %残存	口(6.0) 高— 底—	①粗、2~3mmの砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③におい黄橙色	手捏土器である。脚部表面に多くの指紋が残る。 坏外面に輪積痕が残り、内面ナデ。
169-4	土師器 坏	覆土 %残存	口(10.8) 高— 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 浅く口径の小さな坏である。
169-5	土師器 坏	床面+18 破片	口(12.8) 高— 底—	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。 胎土が粉状を呈し、指に付着する。
169-6	土師器 坏	覆土 破片	口(11.8) 高— 底丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 口径の小さな坏である。

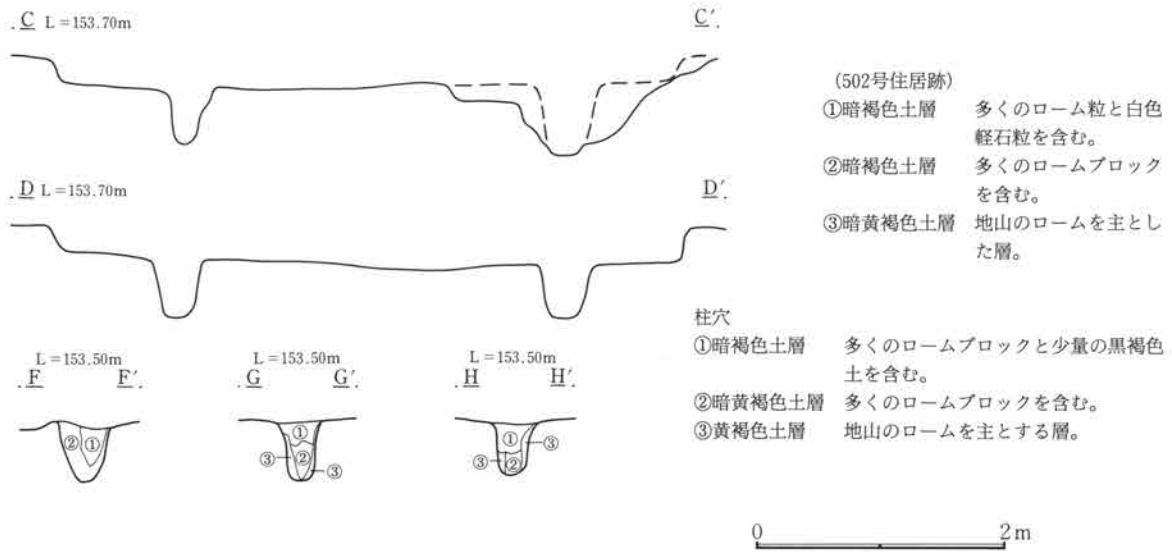
502号住居跡 (第170~173図、図版27・59・72)

位置 本住居跡は、第7次調査区南東部にあり、57-26グリッドに位置する。

概要 奈良時代の503号住居と南東部分で重複しており、その部分は床下まで掘られていた。また南北方向に



第170図 502号住居跡実測図(1)



第171図 502号住居跡実測図(2)

長い32号溝(道路と思われる)により東側を床面下まで削り取られている。そのため北東と南東コーナーの住居範囲は確認できなかった。

構造 床面はロームを主とした土で造られ、床下の掘り込みは少なかった。柱穴が4本掘られていたが、南東コーナーの柱穴2は位置が少し不自然である。貯蔵穴は想定される部分が32号溝により掘られており、確認出来なかった。壁溝は掘られていなかった。

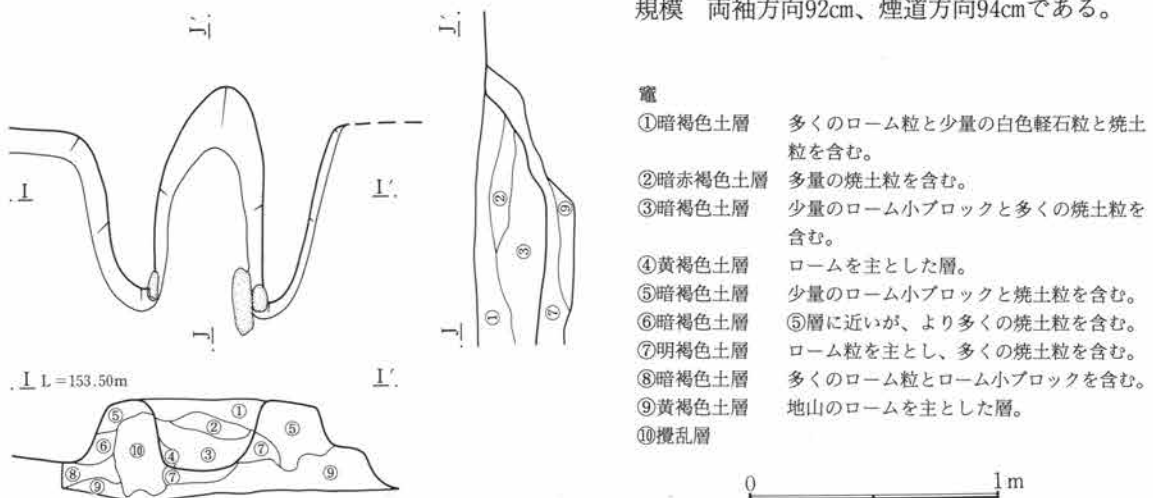
規模 東西5.04m、南北5.03mである。壁高は残りの良い西壁面で25cmである。柱穴1は径48cm深さ57cm、柱穴2は径42cm深さ52cm、柱穴3は径37cm深さ52cm、柱穴4は径32cm深さ47cmである。

遺物 南壁に近い床面上に土師器の甕や坏が出土した。

(竈)

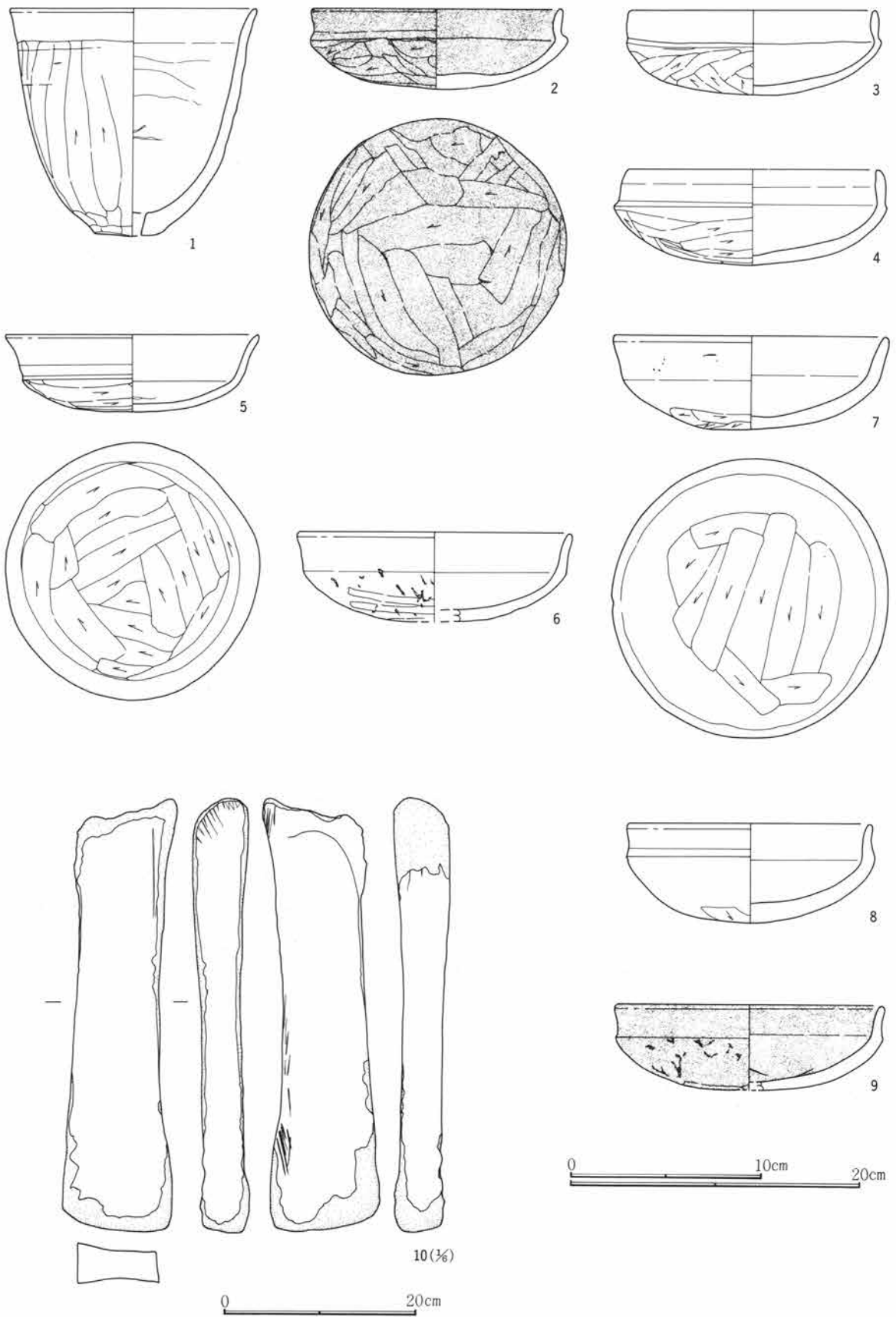
概要 住居北壁のほぼ中央部に造られている。焚口部分と燃烧部の多くは床面上に位置し、燃烧部の一部と煙道部が壁面を掘り込んで造られている。焚口部に砂岩の袖石がほぼ使用時の状態で据えられていた。また右袖内側の燃烧部床面より天井石に使われたと思われる砂岩の細長い石が出土した。天井石としては長さが短いので、一部欠損したものと思われる。竈内の焼土粒は覆土上面から多く出土した。

規模 両袖方向92cm、煙道方向94cmである。



第172図 502号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第173図 502号住居跡出土遺物実測図

502号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
173-1 59	土師器 小型甕	床面+14 %残存	口 17.0 高 15.5 底 4.7	①粗、3～6mmの長石粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③明黄橙色	底面へラ削り。胴外面へラナデ。内面ナデ。口縁部横ナデ。胴外面に輪積の痕跡が残る。
173-2 59	土師器 坏	床面直上 完形	口 12.8 高 4.1 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。②酸化焰、硬質③外面黒褐色・断面橙色	底面へラ削り。砂粒の移動少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。稜は高く明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
173-3 59	土師器 坏	床面直上 %残存	口 12.8 高 4.4 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜の部分は歪んでいる。
173-4 59	土師器 坏	ピット内 -16 %残存	口 13.0 高 4.9 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面幅の広いへラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。少し歪んでいる。
173-5 59	土師器 坏	覆土 完形	口 13.1 高 4.0 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。やや粉状を呈する。②酸化焰、硬質③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。器肉が薄く、口縁部が外反する。
173-6 59	土師器 坏	床面+9 %残存	口(14.0) 高 — 底 —	①粗、2～3mmの砂粒を含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	底面の一部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。
173-7 59	土師器 坏	床面-4 完形	口 12.0 高 4.8 底 丸底	①粗、2～3mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	底面中央部浅いへラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に器肉が厚い。
173-8 59	土師器 坏	床面直上 %残存	口 12.6 高 5.1 底 丸底	①粗、2～3mmの砂粒を多く、片岩粒も含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色・一部黒褐色	底面中央部でわずかなへラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。全体に器肉が厚い。
173-9 59	土師器 坏	床面+6 %残存	口 13.8 高 — 底 —	①やや粗、1～2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	底面中央部一部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。6～8の坏に近い。
173-10 72	石製品 砥石	床面-4	長 44.6 幅 11.3 厚 5.6 重 2,400		4側面を砥石として使用している。端部にV字状の刻目あり。砥面中央部が凹状を呈する。砂岩。

504号住居跡 (第174・175図、図版28・59・60・74)

位置 本住居跡は、第8次調査区南端にあり、54・55-28グリッドに位置する。

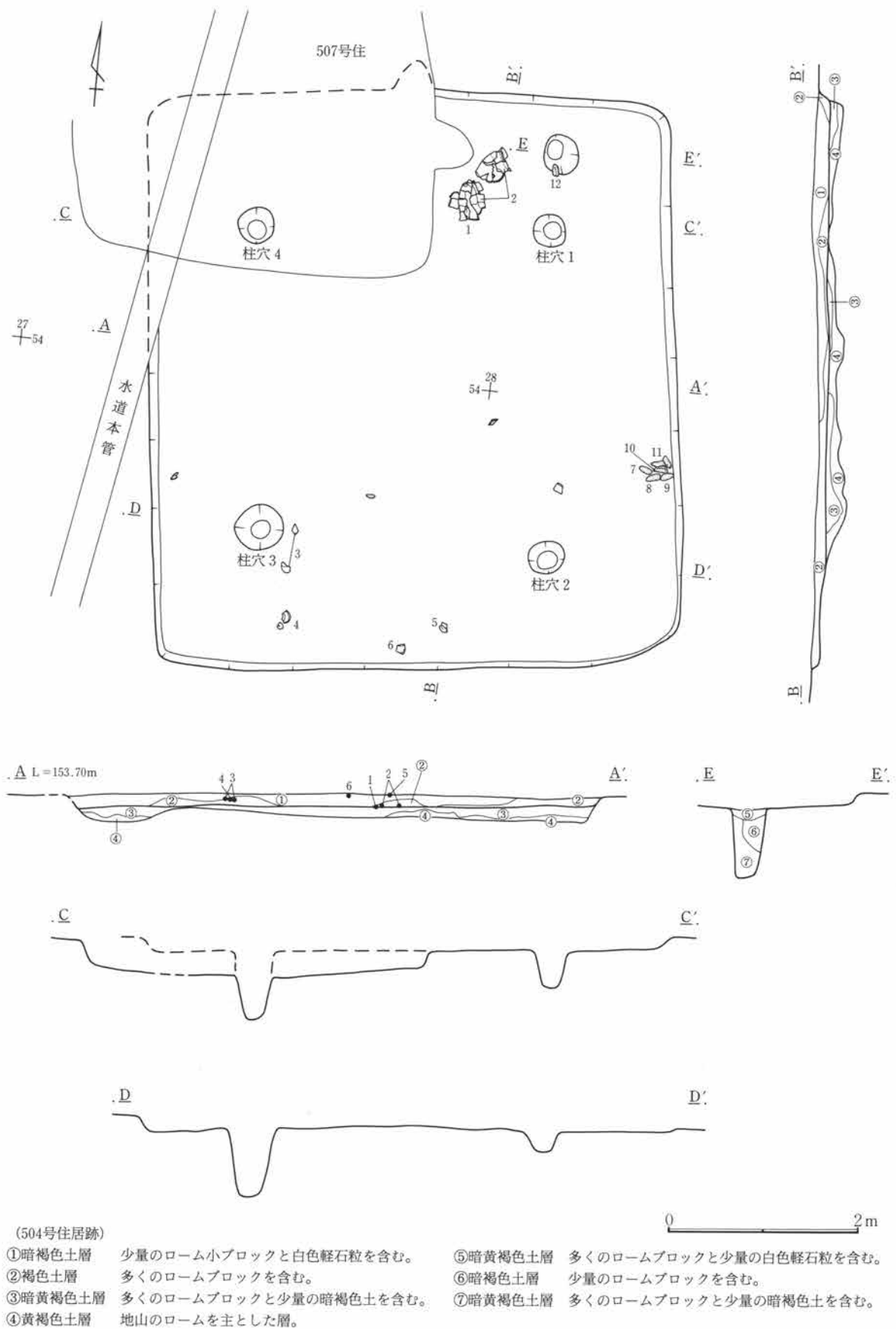
概要 奈良時代の507号住居と北西部分で重複しており、その部分は床下まで掘られていた。そのため北壁に造られていた本住居の竈も削り取られ、右袖の僅かな痕跡を残すのみとなっていた。また南北方向に走る水道管によって、507号住居との重複部分を含む北西部分を床面下まで削り取られていた。そのため北西コーナーの住居範囲は確認できなかった。

構造 床面はロームブロックを主とし、少量の暗褐色土で造られていた。柱穴が4本掘られ、貯蔵穴が北東コーナーの竈右側に掘られていた。

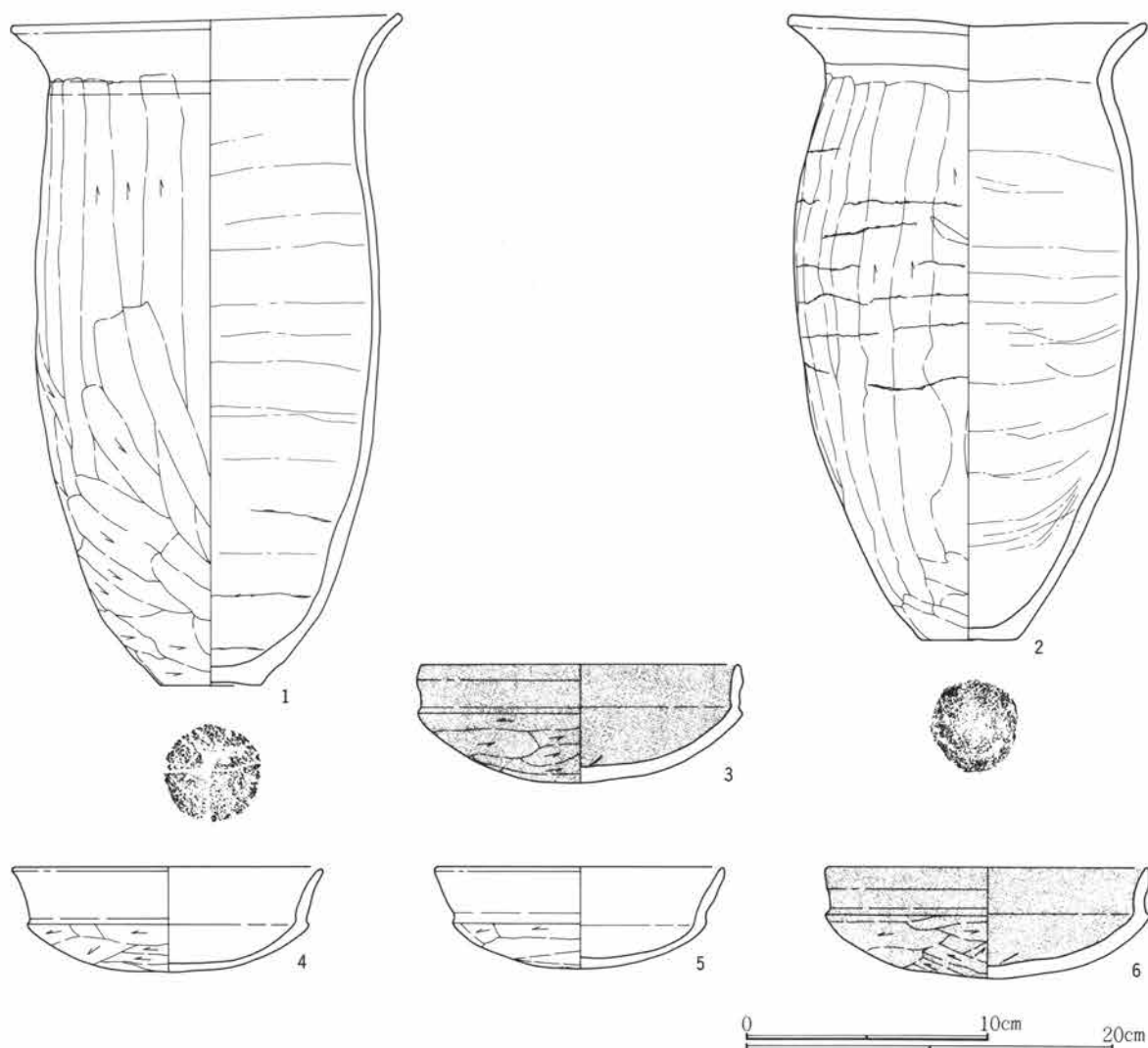
規模 東西5.58m、南北5.95mである。壁高は残りの良い南壁面で21cmである。柱穴1は径35cm深さ39cm、柱穴2は径38cm深さ23cm、柱穴3は径50cm深さ69cm、柱穴4は径38cm深さ69cmである。貯蔵穴は径38cm深さ74cmでほぼ円形を呈している。

遺物 竈焚口付近にほぼ完形の土師器甕が2個、南壁に近い床面上に土師器の坏が出土している。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第174図 504号住居跡実測図



第175図 504号住居跡出土遺物実測図

504号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
175-1 60	土 甗 甗	床面直上 ほぼ完形	口 20.9 高 35.2 底 5.6	①粗、1~2mmの長石粒を大量に、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明赤褐色	胴外面へら削り。多くの砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面でいねいなナデにより器表面密。底面木葉痕。器肉が全体に薄い。
175-2 60	土 甗 甗	床面直上 口縁部 他ほぼ完形	口 19.2 高 33.6 底 5.2	①粗、3~5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面弱いへら削り。多くの輪積痕が残る。口縁部ナデ。内面横方向ナデにより器表面密。底面木葉痕。胴外面に粘土が焼けて付着している。
175-3 59	土 甗 坏	床面+6 %残存	口(13.0) 高 4.7 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・内面の一部黒色	底面へら削り。砂粒の動きほとんどない。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底面中央部にへらの工具痕あり。内面と口縁部外側に黒漆か。
175-4 59	土 甗 坏	床面+7 %残存	口 12.4 高 4.2 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。胎土が粉状を呈する。5の坏に近い。
175-5 59	土 甗 坏	床面+11 %残存	口(11.7) 高 4.2 底 丸底	①密、少量の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。胎土が粉状を呈する。4の坏に近い。
175-6	土 甗 坏	床面+10 %残存	口(13.0) 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へら削り。砂粒の動きほとんどない。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面底部中央にへらの工具痕あり。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
7 74	こも編み 石	床面直上	長 16.8 幅 7.9 厚 3.0 重 580		点紋絹雲母石墨緑泥片岩。偏平な石である。両側面中央部に小さな凹状部を数個持つ。
8 74	こも編み 石	床面直上	長 17.5 幅 7.7 厚 4.4 重 650		絹雲母石墨片岩。やや不均衡な石である。両側面中央部に小さな凹状部が数個認められる。
9 74	こも編み 石	床面直上	長 15.3 幅 8.1 厚 2.3 重 350		点紋絹雲母石墨片岩。偏平で幅広い石である。両側面中央部に打ち欠かれた凹状部が数個認められる。
10 74	こも編み 石	床面直上	長 14.4 幅 6.0 厚 5.0 重 550		点紋絹雲母石墨片岩。断面方形を呈し、側面中央部が凹状を呈する。
11 74	こも編み 石	床面直上	長 15.8 幅 6.7 厚 3.0 重 350		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
12 74	こも編み 石	床面-8	長 14.5 幅 5.7 厚 5.4 重 600		絹雲母石墨片岩。断面台形を呈し、側面中央部に小さな凹状面が多く認められる。

506号住居跡（第176～179図、図版28・60・74）

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、58・59-26グリッドに位置する。

概要 奈良時代の516号住居と重複している。西壁に竈を持つ516号住居により、北東部分を床下まで掘り込まれている。竈が北壁中央部に東西に並ぶように2基造られており、東側部分の竈は床面上に位置する両袖部分が、すべて取り外されているため旧竈であり、床面上に両袖と燃焼部の残っている西側の竈が造り替えられた新しい竈である。32号溝により、住居東側を南北方向に覆土上面から一部床下部分まで掘り込まれていた。

構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土の混入した土で造られ、床下には明確な土坑は掘られていなかった。柱穴は床面調査段階では明確に確認できなかったが、床下調査により4本確認された。旧竈の右側に床面からの深さ85cmの楕円形を呈する小穴が掘られていたが、貯蔵穴に相当する施設なのか不明である。この住居は貯蔵穴を持たない可能性が高い。

規模 東西7.46m、南北7.52mである。壁高は残りの良い西壁面で34cmである。柱穴1は径60cm深さ87cm、柱穴2は径58cm深さ89cm、柱穴3は径66cm深さ84cm、柱穴4は径68cm深さ89cmであり、いずれもほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甑や坏が出土している。

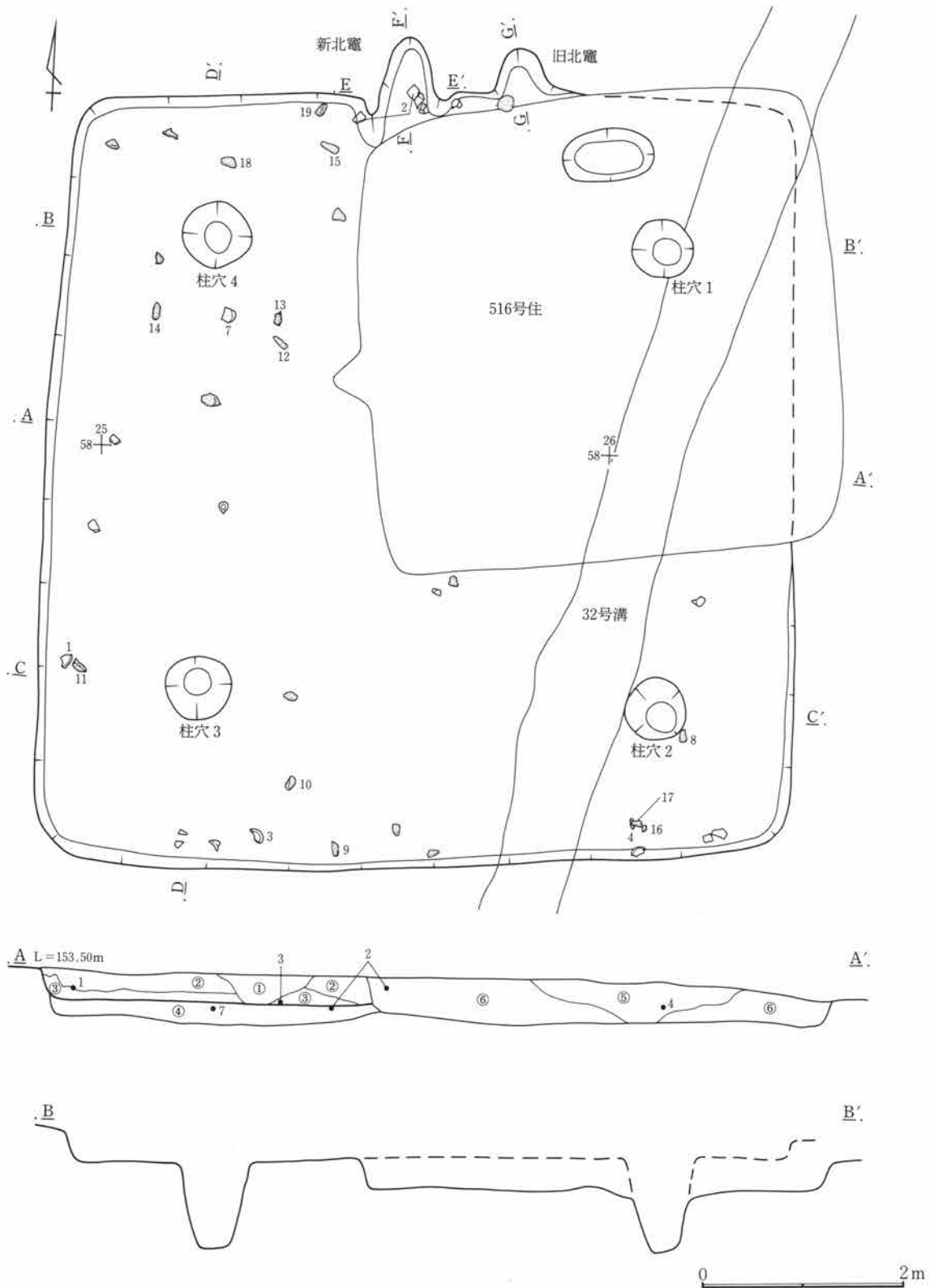
（新北竈）

概要 住居北壁の中央部に造られている。右袖部の多くと左袖の一部を516号住居により削り取られている。焚口部分と燃焼部の多くは床面上に位置し、燃焼部の一部と煙道部が壁面を掘り込んでいる。燃焼部で右壁面に近い部分から細長い石が、ほぼ直立した状態で1石出土した。外に石は出土していないことから、支脚石の可能性も認められるが明らかでない。外に袖石や天井石等は出土しなかった。燃焼部付近から多くの焼土粒と焼土ブロックが出土した。

規模 両袖方向95cm、煙道方向102cmである。

（旧北竈）

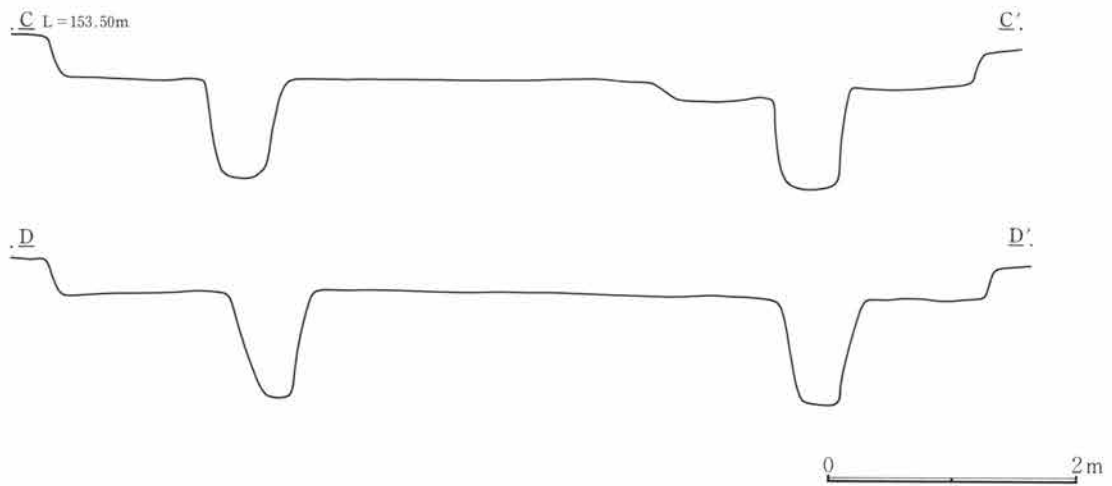
概要 住居北壁で新竈の右側に造られていた。床面上に位置する袖部と燃焼部はすべて取り除かれており、壁面を掘り込んで造られていた煙道部と燃焼部の一部が残っていた。壁面に近い左袖部分に大きな石が1つ出土したが、袖石や天井石としては不自然であり用途は不明である。



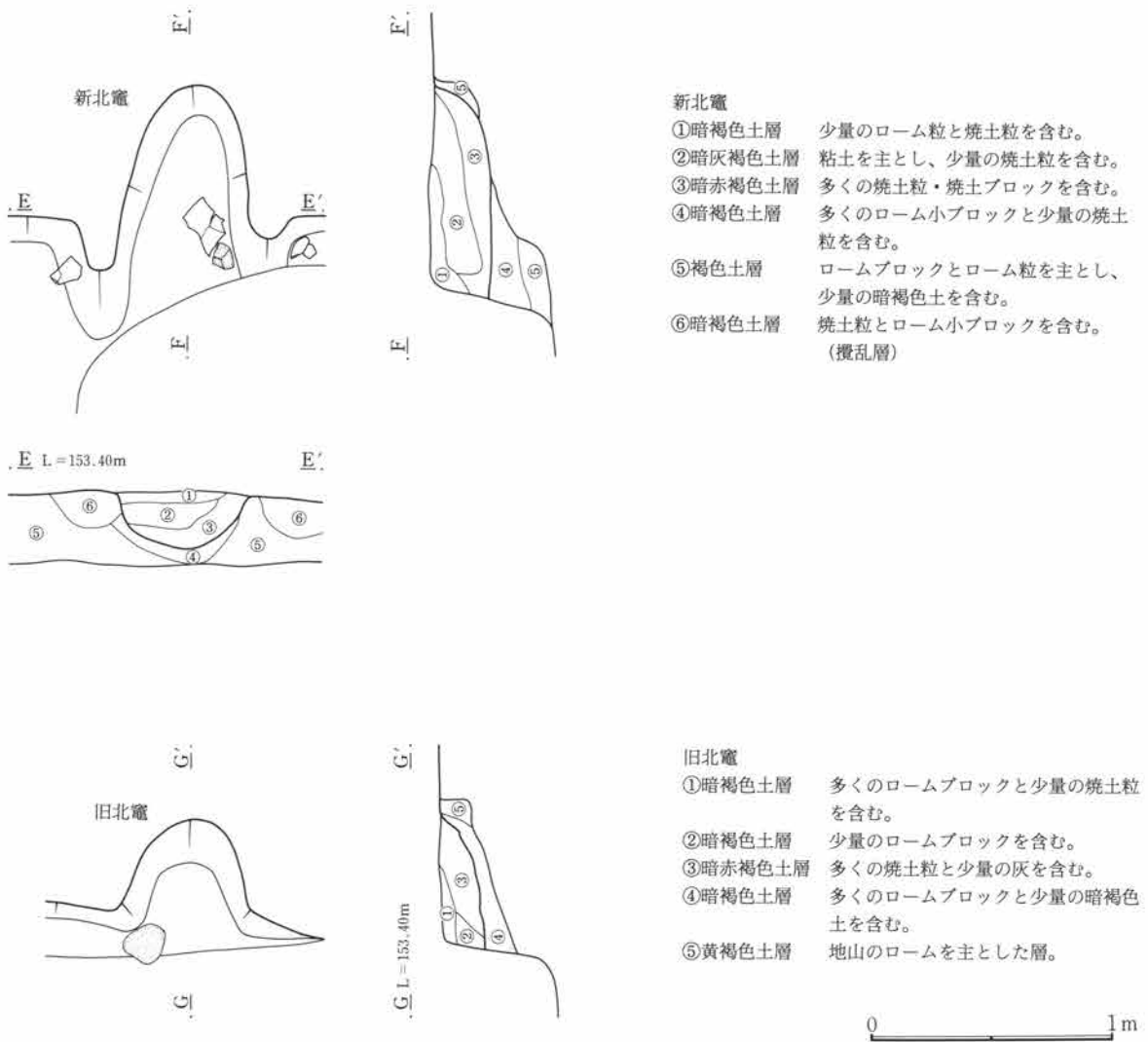
- (506号住居跡)
- ①耕作溝覆土
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
 - ④褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。
 - ⑤32号溝覆土
 - ⑥516号住居覆土

第176図 506号住居跡実測図(1)

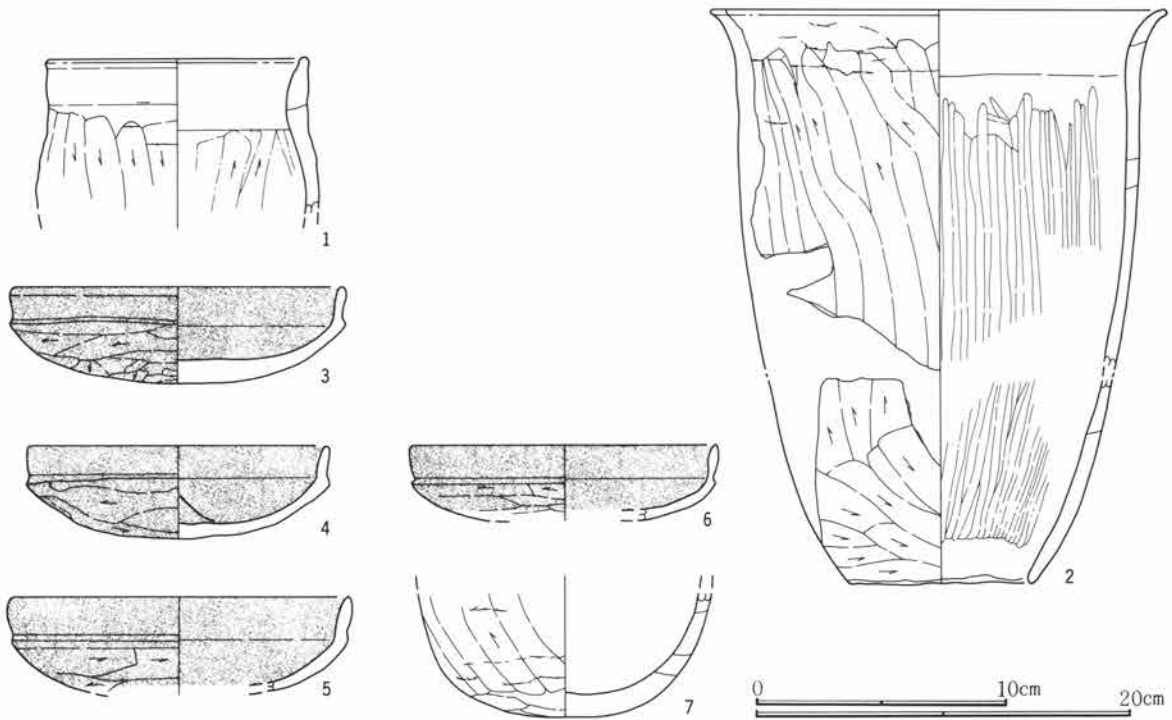
第3章 古墳時代の遺構と遺物



第177図 506号住居跡実測図(2)



第178図 506号住居跡新北竈・旧北竈実測図



第179図 506号住居跡出土遺物実測図

506号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
179-1 60	土 師 器 小 型 甕	床面直上 %残存	口 14.0 高 — 底 —	①粗、1~2mmの砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③明褐色	胴部外面へラ削り。内面ナデ。口縁部横ナデ。
179-2	土 師 器 甕	新北竈内 -5 %残存	口(24.0) 高(33.0) 底(9.8)	①やや密、1mm前後の長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へラ削り。内面へラナデで器表面を密にし光沢を持つ。口縁部横ナデ。黒斑もなく、器肉も均一で全体にいいねいな作り。
179-3 60	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口 13.2 高 3.8 底 丸底	①密、砂粒をほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③橙色・内面一部黒色・外面一部黒褐色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
179-4 60	土 師 器 坏	床面-5 %残存	口(12.0) 高 3.6 底 丸底	①密、砂粒をほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面褐色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
179-5	土 師 器 坏	覆土 破片	口(13.5) 高 — 底 —	①密、砂粒をほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色 断面にぶい黄橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。表面の黒褐色は吸炭と思われる。
179-6	土 師 器 坏	覆土 破片	口(12.4) 高 — 底 —	①密、砂粒をほとんど含まず。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。
179-7	土 師 器 小 型 甕	床面-6 胴~底部%残存	口 — 高 — 底 丸底	①粗、2~3mmの片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面灰黄褐色・外面にぶい赤褐色	底面~胴外面へラ削り。削りは浅い。外面の器表面は粗い。内面ナデにより密。
8 74	こも編み 石	床面-7	長 13.5 幅 6.3 厚 4.0 重 520		点紋絹雲母石墨片岩。側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
9 74	こも編み 石	床面直上	長 14.8 幅 6.9 厚 5.5 重 520		絹雲母石墨片岩。やや不定形の石である。2側面の中央部に凹状部が認められる。
10 74	こも編み 石	床面直上	長 14.3 幅 7.7 厚 5.0 重 700		緑簾片岩。両側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
11 74	こも編み 石	床面+15	長 16.1 幅 6.4 厚 5.0 重 680		絹雲母石墨片岩。側面中央部にわずかな凹状部を複数持つ。
12 74	こも編み 石	床面+14	長 17.0 幅 6.4 厚 3.5 重 420		絹雲母石墨片岩。両側面とも2個所大きく打ち欠かれた凹状部を持つ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

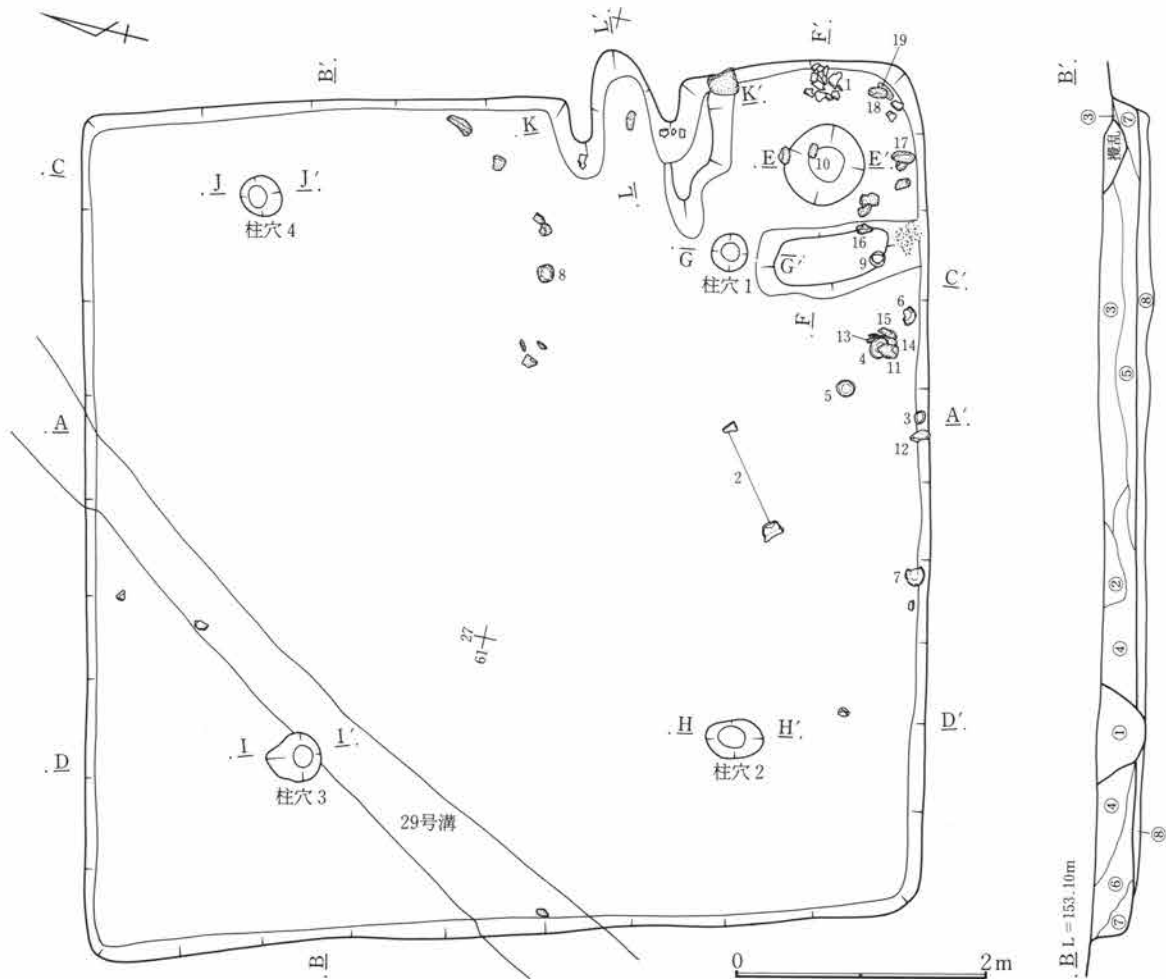
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土	②焼成	③色調	成・整形技法の特徴・備考
13 74	こも編み 石	床面+6	長 15.5 厚 3.5	幅 8.1	重 550		点紋緑泥片岩。偏平な石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
14 74	こも編み 石	床面直上	長 16.0 厚 3.7	幅 7.3	重 550		絹雲母石墨緑泥片岩。偏平な石である。両側面にわずかな凹状部が認められる。
15 74	こも編み 石	床面直上	長 14.9 厚 3.3	幅 7.2	重 350		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側に2箇所打ち欠かれた凹状部を持つ。
16 74	こも編み 石	床面-18	長 15.4 厚 4.2	幅 7.1	重 550		絹雲母石墨緑泥片岩。片側の側面に小さな凹状部を持つ。
17 74	こも編み 石	床面-18	長 14.5 厚 4.9	幅 6.0	重 550		点紋絹雲母石墨片岩。不定形な石である。側面に数個の凹状部を持つ。
18 74	こも編み 石	床面-16	長 13.4 厚 3.5	幅 8.7	重 530		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面が大きく凹状を呈している。
19 74	こも編み 石	床面-11	長 14.5 厚 3.2	幅 6.5	重 400		絹雲母石墨片岩。両側面にわずかな凹状部が認められる。

508号住居跡 (第180～183図、図版28・29・60・75)

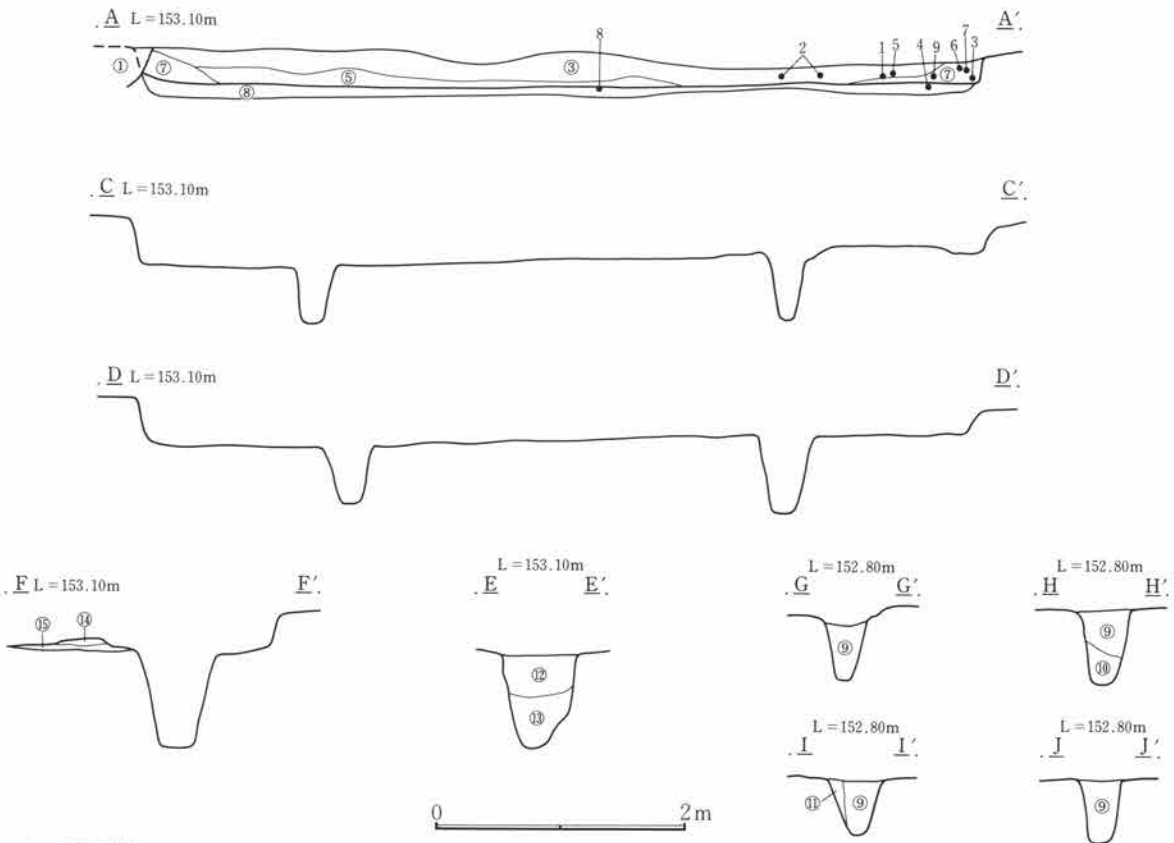
位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、61・62-28グリッドに位置する。

概要 29号溝により本住居の一部床面まで掘り込まれている。

構造 床面は多くのロームブロックを主とした土で造られていた。柱穴が4本掘られていたが、柱穴4は少し位置が外れていた。竈が東壁の南寄りに造られ、竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。壁面部以外で



第180図 508号住居跡実測図(1)



(508号住居跡)

- | | | |
|---------|--------|--------------------------|
| ①29号溝覆土 | ⑨暗褐色土層 | 多くのローム小ブロック (1~2mm) を含む。 |
| ②30号溝覆土 | ⑩暗褐色土層 | ⑨層より多くのローム小ブロックを含む。 |
| ③暗褐色土層 | ⑪明褐色土層 | ロームを主とした層。 |
| ④暗褐色土層 | ⑫暗褐色土層 | 多くのローム粒 (1~3mm) を含む。 |
| ⑤暗褐色土層 | ⑬暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 |
| ⑥明褐色土層 | ⑭黄褐色土層 | ロームを主とし、堅く踏み固めてある。 |
| ⑦明褐色土層 | ⑮明褐色土層 | ③層に近いが、暗褐色土を含む。 |
| ⑧明褐色土層 | | |

第181図 508号住居跡実測図(2)

貯蔵穴西と北側の床面上に、貯蔵穴を囲うようにL字状の踏み固めた床面より約8cm前後高い土盛りが確認された。円い貯蔵穴を直角の壁面とL字状の土盛りにより、方形に囲っているようである。貯蔵穴の蓋として方形の蓋の施設を想定したい。

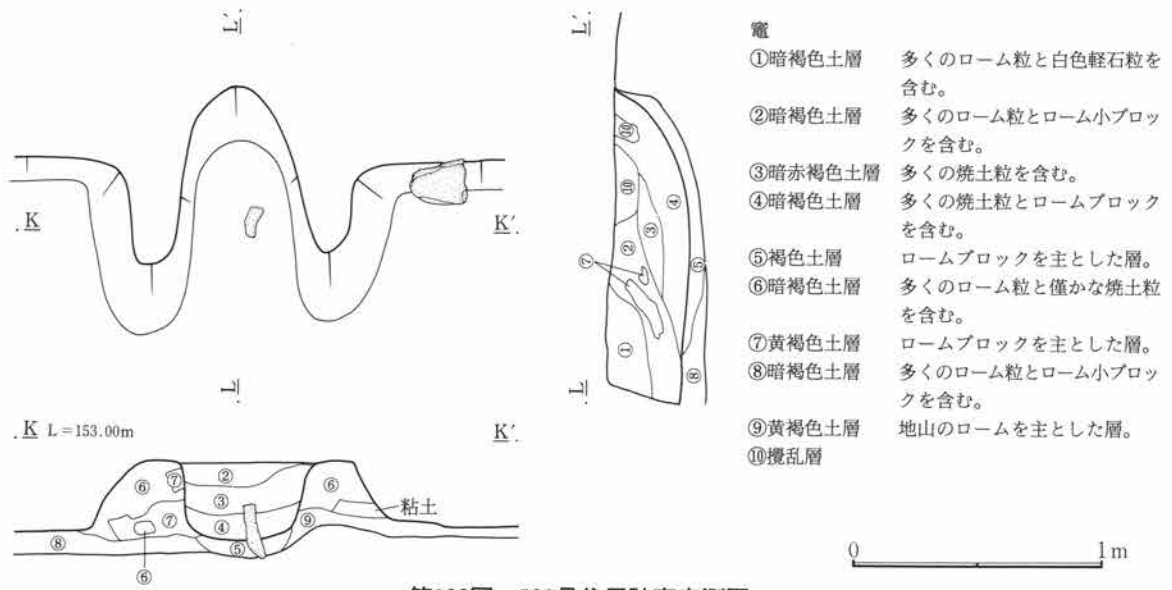
規模 東西6.62m、南北6.76mである。壁高は残りの良い北壁部分で34cmである。柱穴1は径30cm深さ52cm、柱穴2は径42cm深さ49cm、柱穴3は径40cm深さ45cm、柱穴4は径32cm深さ53cmである。貯蔵穴は径60cm深さ76cmでほぼ円形を呈する。

遺物 貯蔵穴周辺に土師器の甕と坏が出土した。

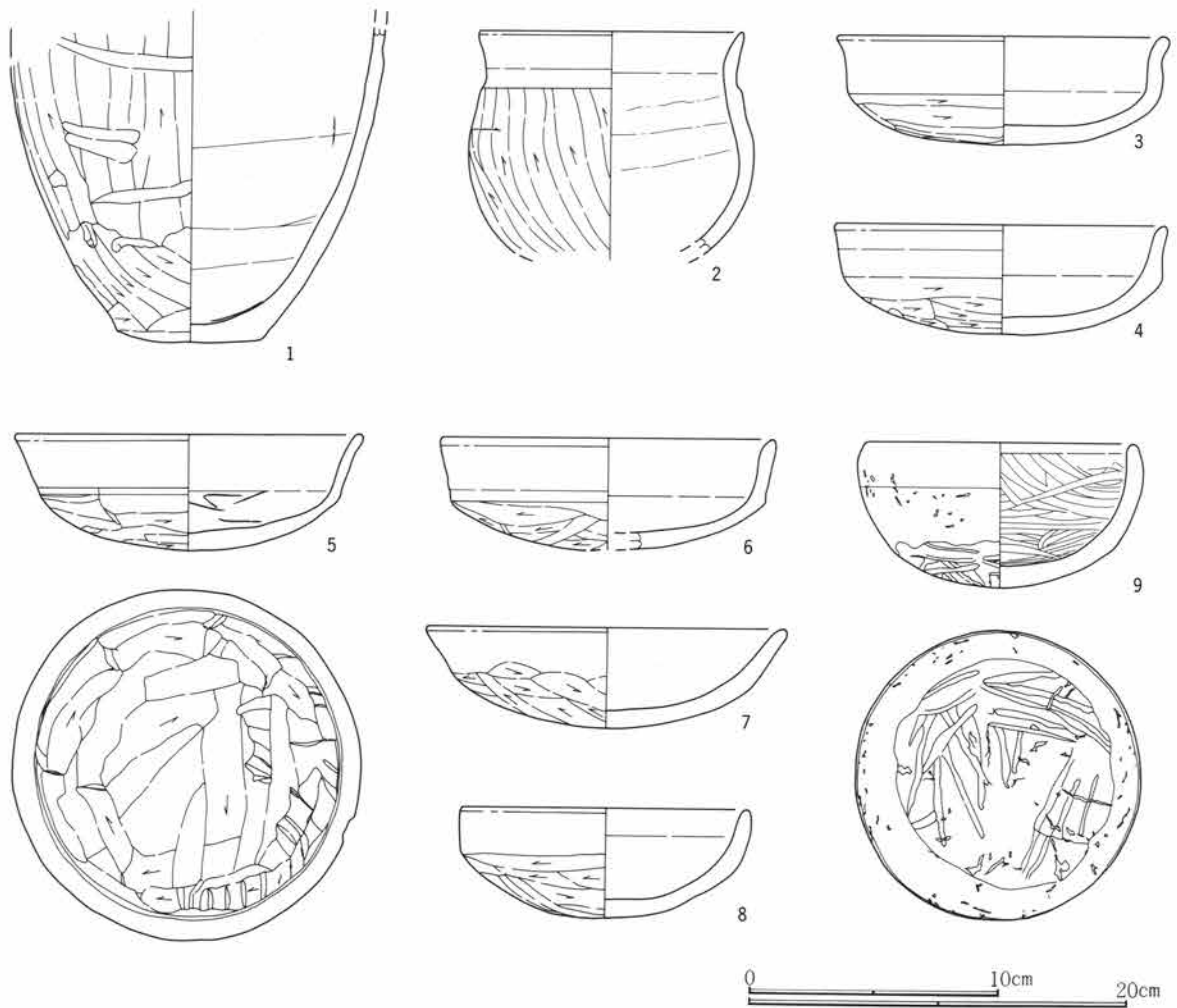
(竈)

概要 住居東壁南寄りに造られている。袖部分や燃烧部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃烧部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。竈内からは袖石は確認されなかったが、燃烧部ほぼ中央部に支脚石と思われる石が、ほぼ直立した状態で出土した。ロームを多く用いて造られた竈であると思われ、燃烧部から多くの焼土粒が出土した。

規模 両袖方向78cm、煙道方向89cmである。



第182図 508号住居跡竈実測図



第183図 508号住居跡出土遺物実測図

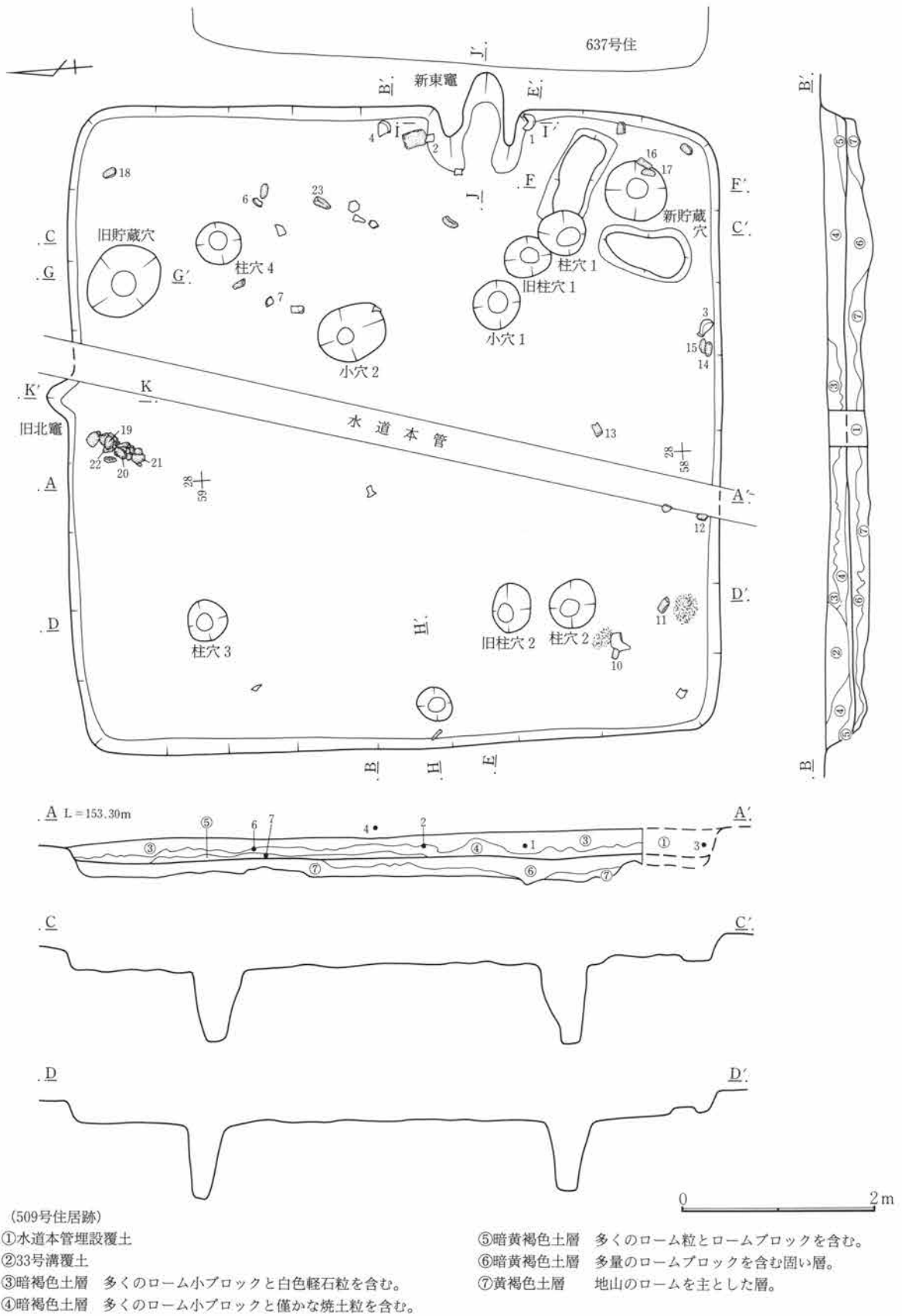
508号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
183-1 60	土器 甕	床面+12 胴~底部 ほぼ完形	口 — 高 — 底 7.8	①粗、4~6mmの長石粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面にふい褐色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削りで多くの砂粒が目立つ。 内面ナデで器表面密。
183-2 60	土器 小型甕	床面+10 1/2残存	口(14.0) 高 — 底 —	①密、多くの赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで、内外面とも器表面密。
183-3 60	土器 杯	床面+9 ほぼ完形	口 13.0 高 4.3 底 丸底	①密、多くの赤色粒と2mm前後 の長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内外面ともまだら状 に表面が剝離している。
183-4 60	土器 杯	床面直上 ほぼ完形	口 13.2 高 4.3 底 丸底	①密、多くの赤色粒と2mm前後 の長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質③にふい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内外面ともまだら状 に表面が剝離している。
183-5 60	土器 杯	床面+12 完形	口 13.8 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の多くの赤色粒 を含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 稜は低く部分的に明瞭でない。
183-6 60	土器 杯	床面+17 1/2残存	口 13.2 高 (4.4) 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内外面とも器表面は 密である。 3、4の杯にほぼ同じ。
183-7 60	土器 杯	床面+15 1/2残存	口 14.2 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。 浅く皿状を呈する。
183-8 60	土器 杯	床面直上 完形	口 11.4 高 4.4 底 丸底	①密、1mm前後の多くの赤色粒 を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜はなく口縁部と底 部との境はヘラ削りと、横ナデで区別。
183-9 60	土器 杯	床面+10 完形	口 10.6 高 5.7 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい黄橙色	底面中央部ヘラ削り。一部ヘラ磨き。周辺部ナデ。口縁部横ナ デ。内面口縁部を中心にヘラ磨き。
10 75	こも編み 石	床面直上	長 13.3 幅 7.8 厚 3.9 重 500		絹雲母緑泥片岩。扁平の幅広い石である。両側面中央部に わずかな凹状部を持つ。
11 75	こも編み 石	床面直上	長 16.2 幅 8.3 厚 6.5 重 1,300		緑簾緑泥片岩。厚い石である。2側面中央部が大きく凹状を呈 している。
12 75	こも編み 石	床面+8	長 13.7 幅 6.3 厚 5.4 重 700		緑簾緑泥片岩。厚い石である。断面は方形を呈し、2側面中央 部が凹状を呈している。
13 75	こも編み 石	床面直上	長 13.8 幅 7.0 厚 5.6 重 670		絹雲母緑泥片岩。両側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
14 75	こも編み 石	床面直上	長 16.1 幅 7.5 厚 5.0 重 580		砂岩。片側の側面中央部が打ち欠かれて大きな凹状部を持つ。
15 75	こも編み 石	床面直上	長 19.7 幅 8.2 厚 5.5 重 1,250		緑簾緑泥片岩。両側面中央部が大きく凹状を呈している。
16 75	こも編み 石	床面+8	長 13.4 幅 7.6 厚 5.7 重 800		緑簾緑泥片岩。厚い石である。側面中央部に明瞭な凹状部は認 められない。
17 75	こも編み 石	床面+17	長 17.0 幅 8.1 厚 5.0 重 850		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面が大きく凹状を呈し、他の側 面に小さな凹状部を数個持つ。
18 75	こも編み 石	床面+17	長 16.5 幅 8.3 厚 5.5 重 900		絹雲母石墨片岩。断面三角形を呈し、中央部が厚い。側面にわ ずかな凹状部が認められる。
19 75	こも編み 石	床面+15	長 16.7 幅 8.8 厚 4.7 重 980		絹雲母石墨片岩。幅広い石である。両側面中央部にわずかな凹 状部が認められる。

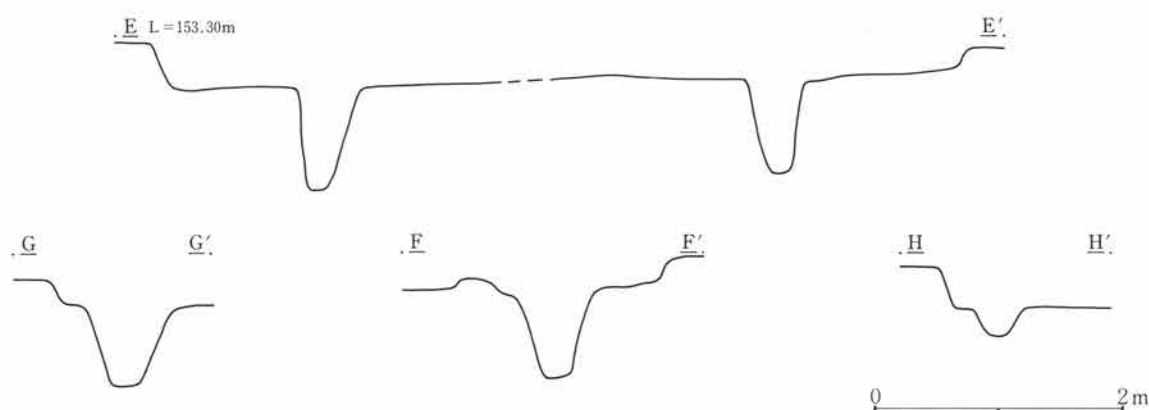
509号住居跡 (第184~186図、図版29・60・70・75)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、59-28・29グリッドに位置する。

概要 遺構確認面が低いため、図上では重複していないが、覆土上面においては古墳時代の637号住居と竈の部分で重複しており、煙道部が637号住居の西壁と覆土上面を一部掘り込んで造られていたものと思われる。新旧関係は637→509号住居である。水道管が本住居の中央部を細長く南北方向に掘り抜いている。



第184図 509号住居跡実測図(1)



第185図 509号住居跡実測図(2)

構造 床面は多くのロームブロックを主とした土で造られていた。柱穴が4本掘られており、床下調査により、柱穴1と2の内側に旧柱穴と思われる掘り込みが確認された。またその他に用途不明の小穴が竈手前付近に2個掘られていた。新竈が東壁の南寄りにまた旧竈が北壁ほぼ中央部に造られ、それぞれの竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。新竈に伴う貯蔵穴西と北側の床面上に貯蔵穴を囲うようにL字状の踏み固めた、床面より9～12cm程高い土盛りが確認された。円い貯蔵穴を直角の壁面とL字状の土盛りにより方形に囲っているようである。この土盛りは旧貯蔵穴では確認できなかった。508号住居同様に方形の蓋の施設を想定したい。南東コーナー部分の床面上から2箇所、粘土の出土が認められた。西壁中央部に近い床面に、径35cm深さ28cmの小穴が確認された。出入り口に関する施設であると考えたい。

規模 東西6.55m、南北6.72mである。壁高は残りの良い西壁部分で32cmである。柱穴1は径48cm深さ77cm、柱穴2は径48cm深さ74cm、柱穴3は径41cm深さ83cm、柱穴4は径46cm深さ75cm、旧柱穴1は径42cm深さ68cm、旧柱穴2は径48cm深さ82cmである。新貯蔵穴は径64cm深さ65cm、旧貯蔵穴は径72cm深さ67cmでほぼ円形を呈する。また小穴1は径50cm深さ62cm、小穴2は径58cm深さ45cmであった。

遺物 東側の床面上より土師器の甕や坏が、旧竈の左袖部分より多くのこも編み石が出土した。

(新東竈)

概要 住居東壁南寄りに造られている。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃焼部の一部が壁面を、また煙道部は637号住居の覆土上面を僅かに掘り込んで造られていた。竈内からは袖石や支脚石は確認されなかった。左袖部分に長さ24cm程の大きな石が出土しており、竈の天井石等に使われていた可能性も考えられるが明らかでない。ロームを多く用いて造られた竈であると思われ、燃焼部から多くの焼土粒が出土した。

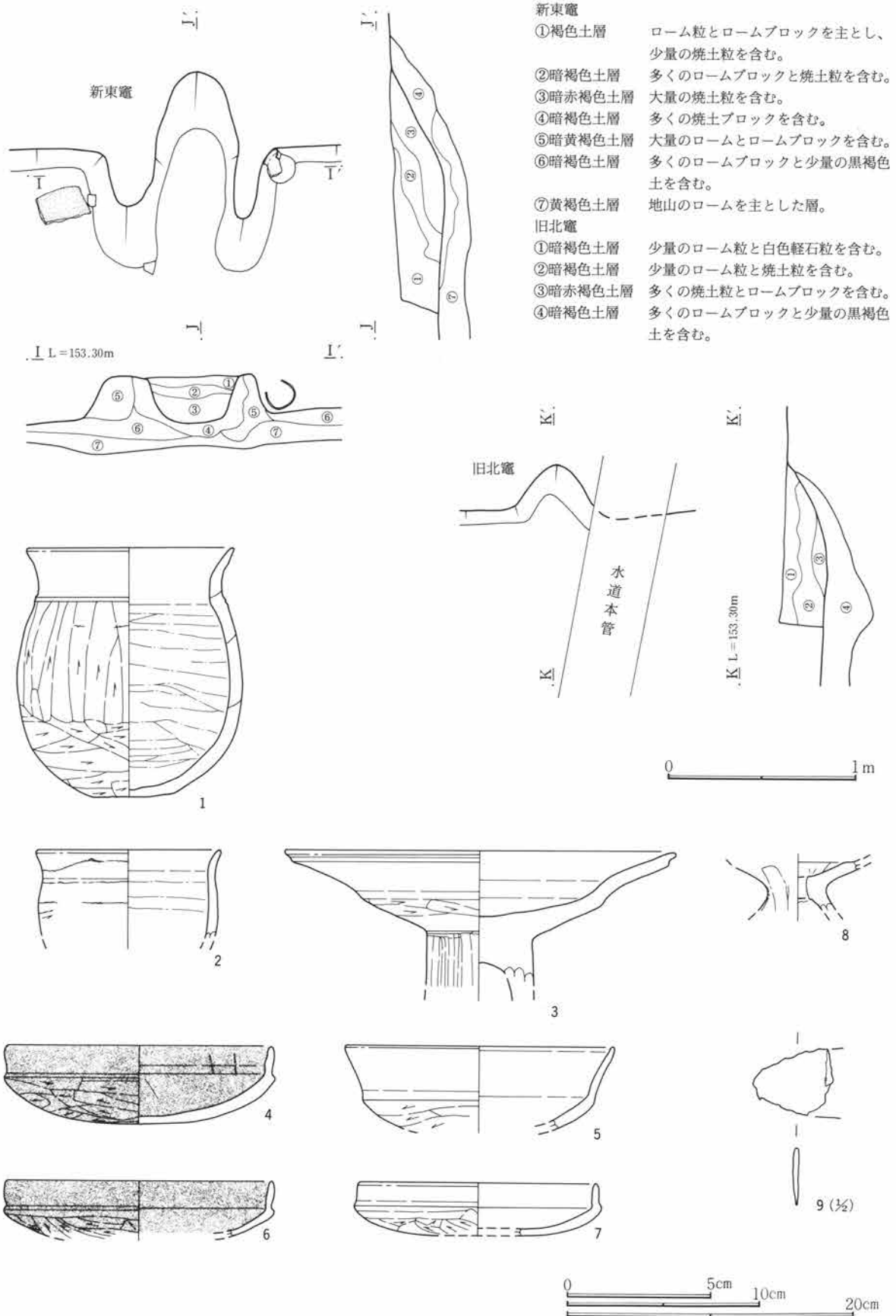
規模 両袖方向78cm、煙道方向89cmである。

(旧北竈)

概要 住居北壁の中央部に造られている。床面上の袖部や燃焼部はすべて取り除かれていた。壁面を掘り込まれて造られている煙道部の覆土も多くが残っていない、住居の覆土同様な土で埋まっていた。

床面 下に位置する燃焼部下部で焼土粒が少量出土し、また床面上に位置する袖部や燃焼部付近から少量の焼土粒が出土している。これらの焼土粒は壁面を掘り込んで造られた煙道部からの流れ込みと考えられる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第186図 509号住居跡新東竈・旧北竈・出土遺物実測図

509号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
186-1 60	土器 小型甕	新東竈内 +11 %残存	口 14.5 高 17.3 底 6.0	①粗、1mm内外の長石粒と砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③明赤褐色	底面と胴部ヘラ削りで器表面に砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面にていねいなナデにより器表面密。
186-2	土器 小型甕	新東竈内 +11 %残存	口(12.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴部外面に多くの輪積痕。表面はナデ。口縁部横ナデ。胴部内面はていねいなナデにより器表面密。
186-3 60	土器 高坏	床面+12 坏部%残存	口 20.4 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒を含む。②酸化焰、硬質③橙色	脚部表面目の細いヘラナデ。坏部底部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁端部に一条の沈線を持つ。
186-4 60	土器 坏	床面+29 %残存	口(13.8) 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。稜は弱く低い。口縁部横ナデ。内面にていねいなナデにより器表面密。
186-5	土器 坏	掘り方覆土 破片	口(14.0) 高 — 底 —	①密、1mm以下の小さな砂粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質③橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部内側にわずかな沈線を持つ。内面ナデ。内側器表面がわずかに剝離している。
186-6	土器 坏	床面+8 破片	口(14.0) 高 — 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面橙色	底部が浅く口縁部も短い。底面ヘラ削り。稜は明瞭。口縁部横ナデ。内面にていねいなナデ。内面と口縁部外側は黒漆か。
186-7	土器 坏	床面直上 破片	口(12.4) 高 — 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面橙色	底部が浅く口縁部も短い。底面ヘラ削り。稜は明瞭。口縁部横ナデ。内面はていねいなナデ。
186-8	土器 器台	覆土	口 — 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質③橙色	器台の小さな破片である。脚部表面ヘラナデ。脚部内側のナデは粗雑。内面にていねいなナデ。
186-9 70	鉄製品 鎌	覆土	長 (2.8) 幅 2.2 厚 0.2 重 6.0		鉄鎌の先端部か。残りが悪い。
10 75	こも編み 石	床面+4	長 15.0 幅 5.5 厚 3.5 重 420		緑簾緑泥片岩。断面台形を呈する。側面中央部にわずかに凹状部が認められる。
11 75	こも編み 石	床面+14	長 13.0 幅 7.1 厚 3.0 重 400		絹雲母緑泥石墨片岩。幅広く短く偏平な石である。側面にわずかな凹状部が認められる。
12 75	こも編み 石	床面+5	長 12.4 幅 6.7 厚 3.2 重 300		点紋絹雲母石墨片岩。幅広く短く偏平な石である。側面の一部に打ち欠かれた凹状部を持つ。
13 75	こも編み 石	床面+5	長 13.9 幅 7.0 厚 5.0 重 750		緑簾緑泥片岩。断面台形を呈する。すべての側面中央部が凹状を呈する。
14 75	こも編み 石	床面+11	長 15.3 幅 6.7 厚 4.0 重 500		絹雲母緑泥石墨片岩。やや偏平な石である。片側の側面中央部が凹状を呈する。
15 75	こも編み 石	床面+11	長 16.2 幅 5.5 厚 2.3 重 300		緑簾緑泥片岩。薄く偏平な石である。片側の側面中央部に打ち欠かれたような凹状部を持つ。
16 75	こも編み 石	床面+10	長 12.3 幅 7.2 厚 3.0 重 300		絹雲母石墨片岩。幅広く短く偏平な石である。片側の側面が大きく凹状を呈する。
17 75	こも編み 石	床面+7	長 12.9 幅 6.7 厚 3.0 重 350		絹雲母石墨片岩。幅広く短く偏平な石である。両側面中央部に小さな数個の凹状部を持つ。
18 75	こも編み 石	床面+11	長 15.7 幅 7.0 厚 2.7 重 400		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面にわずかな凹状部を持つ。
19 75	こも編み 石	床面+15	長 17.3 幅 7.0 厚 4.9 重 700		緑簾緑泥片岩。中央部の肉厚な石である。片側の側面中央部に凹状部を持つ。
20 75	こも編み 石	床面+13	長 14.8 幅 6.5 厚 3.5 重 470		絹雲母石墨片岩。一部が欠けている石である。片側の側面中央部に凹状部を持つ。
21 75	こも編み 石	床面+10	長 16.3 幅 8.9 厚 3.6 重 700		絹雲母緑泥石墨片岩。偏平で幅広い石である。片側の側面に打ち欠かれた凹状部を持つ。
22 75	こも編み 石	床面+9	長 14.7 幅 6.8 厚 3.2 重 450		緑簾緑泥片岩。偏平な石である。片側の側面に1箇所打ち欠かれた凹状部を持つ。
23 75	こも編み 石	床面-7	長 15.8 幅 7.0 厚 4.9 重 650		絹雲母石墨片岩。断面三角形を呈する石である。両側面にわずかな凹状部を持つ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

510号住居跡 (第187~190図、図版29・30・61・75)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、57-22グリッドに位置する。

概要 住居北西端部を土坑により床面近くまで掘り込まれている。

構造 床面は多くのロームブロックと少量の黒褐色土の混入した土で造られていた。小さな住居であり、柱穴や壁溝は掘られていなかった。貯蔵穴が竈右側に掘られていた。

規模 東西3.80m、南北3.82mである。壁高は残りの良い東壁部分で20cmである。貯蔵穴は径58cm深さ53cmでほぼ円形を呈する。

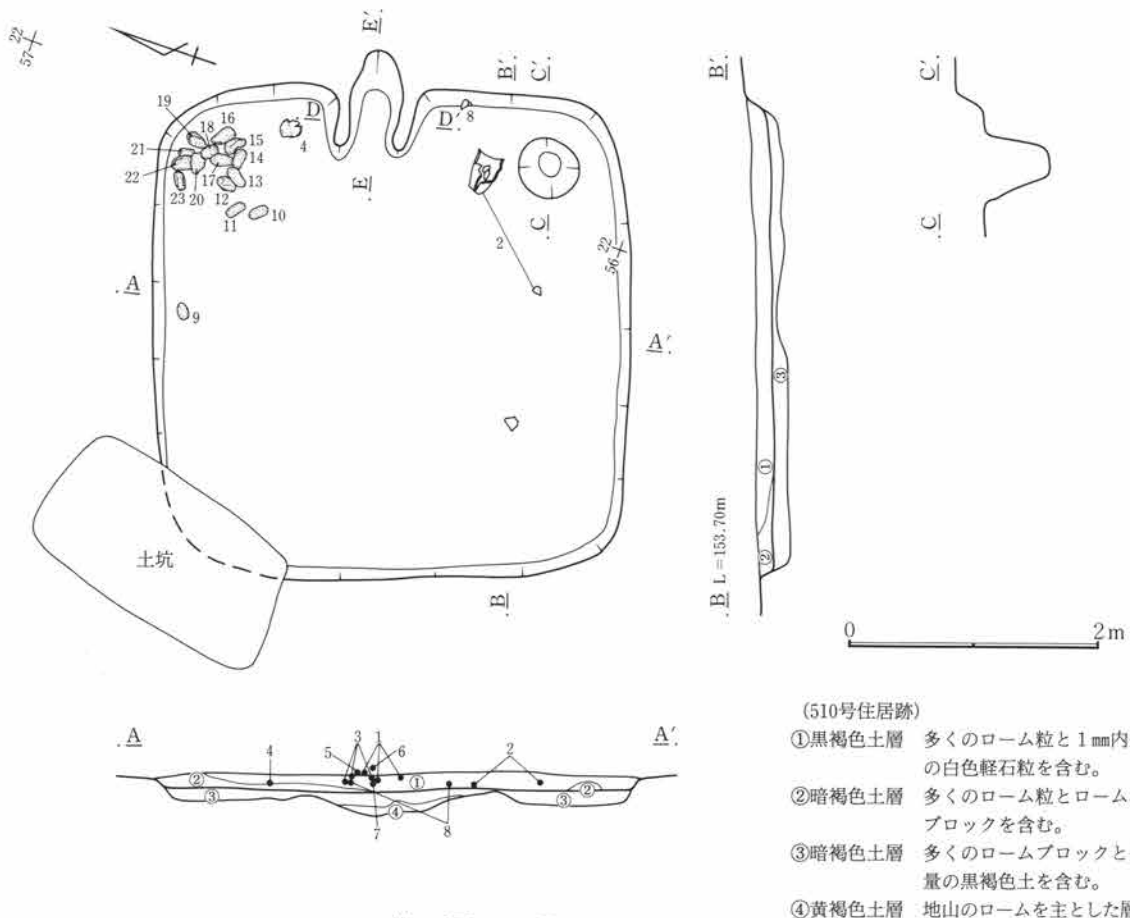
遺物 北東コーナーに長さ8×18cm前後のこも編み石と思われる石が14個まとまって出土し、竈内よりほぼ完形の土器器甕と小型甕や3個の坏が、また天井石と思われる大きな石や細長い3個の石がまとまって投げ込まれたように出土した。

床下 壁面周辺が深く掘られており、床面中央部に径120cm床面からの深さ22cmの床下土坑が掘られていた。また貯蔵穴のほかにも多くの小穴が確認された。

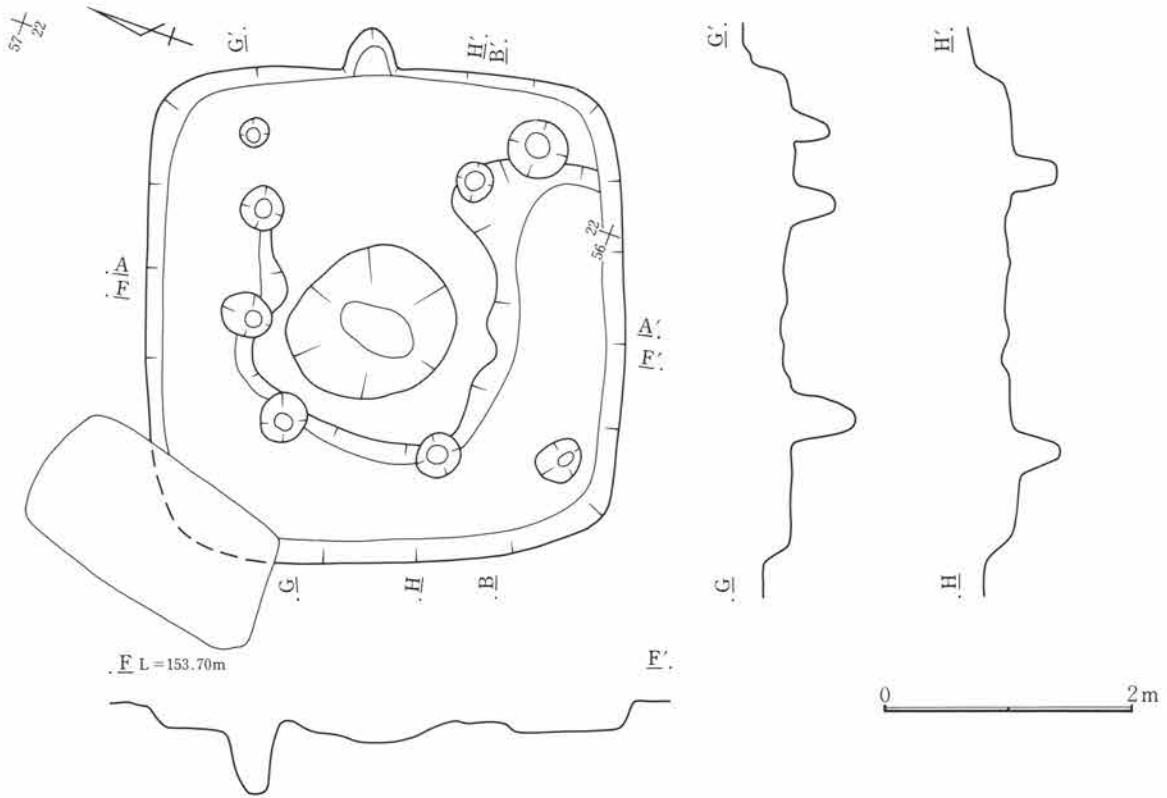
(竈)

概要 住居東壁中央部に造られている。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。竈内からは袖石は確認されなかったが、天井石と思われる石が竈内より出土している。

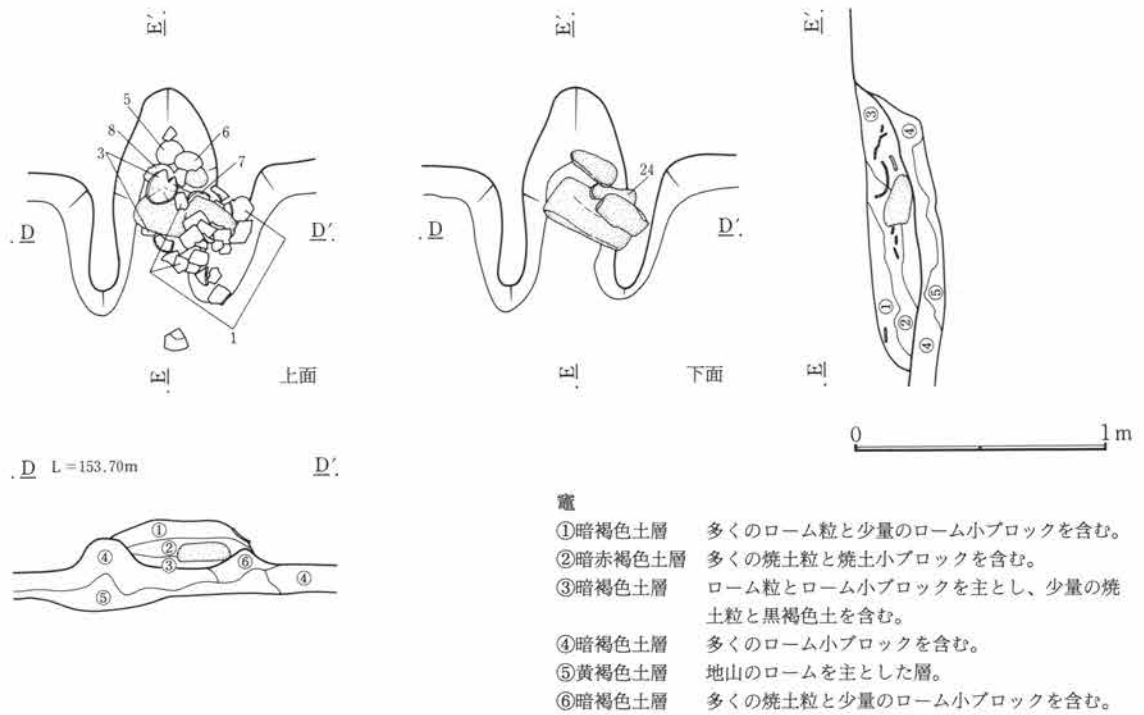
規模 両袖方向78cm、煙道方向89cmである。



第187図 510号住居跡実測図

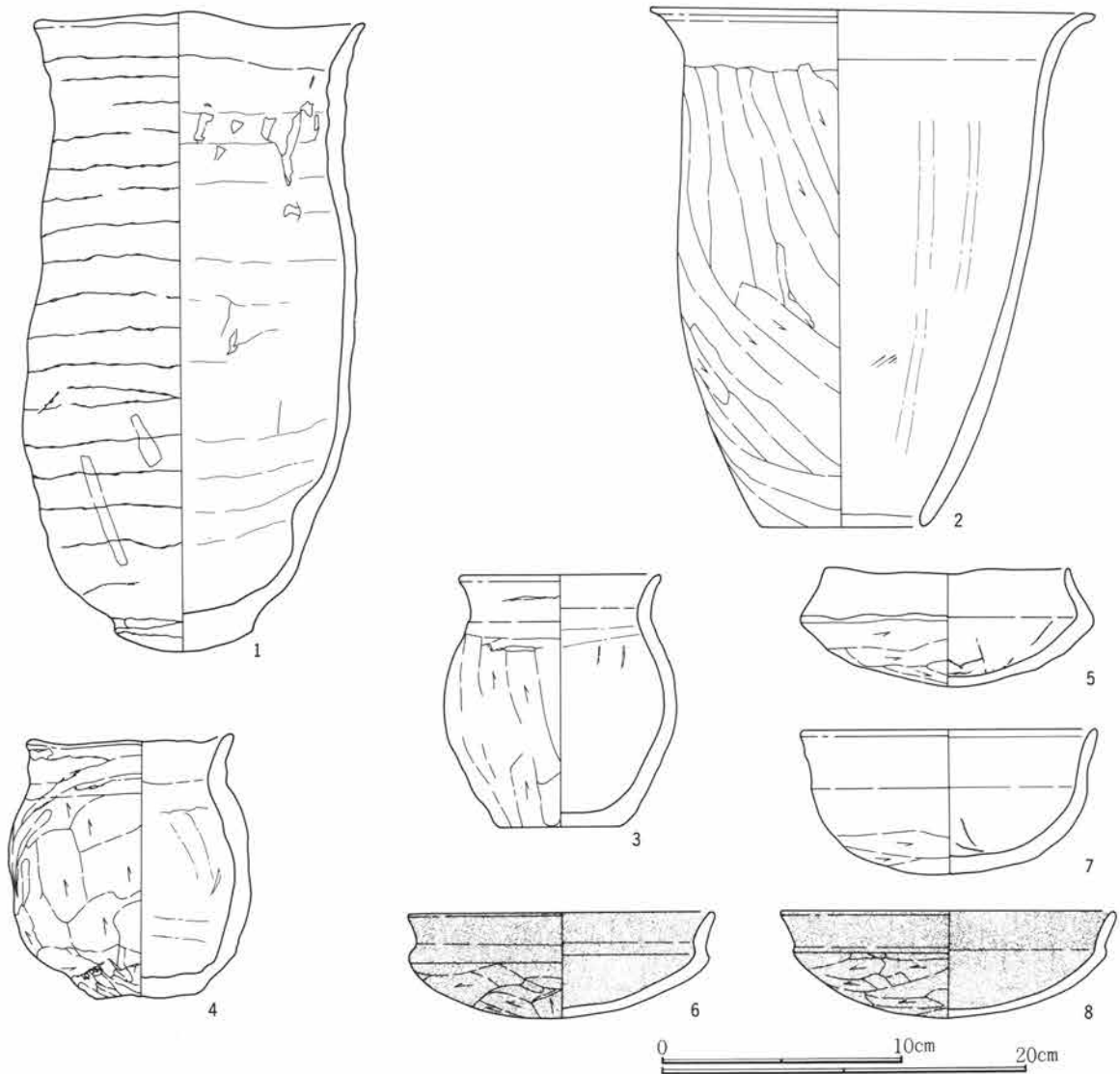


第188図 510号住居跡床下実測図



第189図 510号住居跡竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第190図 510号住居跡出土遺物実測図

510号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
190-1 61	土器 甕	竈内+6 %残存	口(18.2) 高 34.5 底 7.5	①粗、5~8mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。②酸化焰、 硬質 ③上部橙色・下部黒褐色	底面はナデで丸味を持つ。胴外面弱いナデで多くの輪積痕が残 る。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 全体に至みがひどく雑な作りである。
190-2 61	土器 甕	床面直上 口~胴上% 胴下~底完	口(23.8) 高 28.0 底 8.9	①やや粗、2~3mmの長石粒や 赤色粒を多く含む、片岩粒含ま ず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下半ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部ナデ。 内面ナデにより器表面密。ナデの単位ほとんど不明。 器肉の薄い甕である。胴下端ヘラ削りにより水平。
190-3 61	土器 小型甕	竈内+6 口~胴部% 底部完形	口(10.9) 高 13.8 底 7.1	①粗、3~5mmの長石粒と片岩 粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。胴部ヘラ削り。砂粒の移動は認められるが、粗 れは少ない。口縁部横ナデ。内面ナデ。
190-4 61	土器 小型甕	床面+5 ほぼ完形	口 11.1 高 14.4 底 6.6	①粗、赤色粒・長石粒・片岩粒 を含む。 ③酸化焰、硬質 ③灰褐色	底面ヘラ削りとナデ。胴外面ヘラ削り。口縁部ナデ。 内面ナデ。無骨な作りである。 器肉が厚く重量感がある甕である。
190-5 61	土器 甕	竈内+11 %残存	口(10.0) 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒 を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内面にヘラの工具痕 あり。小さな甕である。 全体が少し歪んでいる。

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
190-6 61	土師器 坏	竈内+14 %残存	口 12.6 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色・断面明黄褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。均整のとれた坏である。
190-7 61	土師器 坏	竈内+8 口縁部 底部%残存	口(12.1) 高 5.9 底 丸底	①粗、4~6mmの片岩粒を含む。②酸化焰、硬質 ③内面にふい黄橙色・外面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。胎土や整形が異質である。手捏に近い感じの作りである。
190-8 61	土師器 坏	竈内+7 床面直上 %残存	口 13.7 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を含む。②酸化焰、硬質 ③表面橙色・外面黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。均整のとれた坏である。表面全体に黒褐色を呈する。
9 75	こも編み 石	床面+4	長 15.2 幅 7.6 厚 4.0 重 480		緑簾緑泥片岩。両側面中央部に小さな凹凸部が数個認められる。
10 75	こも編み 石	床面直上	長 17.7 幅 8.4 厚 6.0 重 1,020		点紋緑泥片岩。中央部の厚い不定形な石である。側面に明瞭な凹凸部は認められない。
11 75	こも編み 石	床面直上	長 16.9 幅 6.5 厚 4.0 重 620		絹雲母石墨片岩。両側面に明瞭な凹凸部は認められない。
12 75	こも編み 石	床面+4	長 16.5 幅 8.2 厚 4.4 重 650		点紋絹雲母石墨片岩。両側面に小さな凹凸部が数多く認められる。
13 75	こも編み 石	床面+4	長 18.7 幅 8.4 厚 3.3 重 750		絹雲母緑泥片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈し、他の側面に小さな凹凸部が数多く認められる。
14 75	こも編み 石	床面+4	長 18.0 幅 8.4 厚 5.7 重 1,120		点紋絹雲母石墨片岩。中央部の厚い石である。側面にわずかな凹凸部が数多く認められる。
15 75	こも編み 石	床面+5	長 17.5 幅 9.1 厚 5.0 重 1,050		点紋絹雲母緑泥片岩。片側の側面がゆるやかな凹状を呈し、他の側面に小さな凹凸部が数個認められる。
16 75	こも編み 石	床面+4	長 18.3 幅 8.2 厚 5.0 重 820		絹雲母石墨片岩。両側面中央部に小さな凹凸部が多く認められる。
17 75	こも編み 石	床面+4	長 15.9 幅 8.4 厚 5.2 重 900		緑簾緑泥片岩。やや不定形を呈する石である。片側の側面中央部に凹凸部が認められる。
18 75	こも編み 石	床面+4	長 15.6 幅 8.9 厚 5.0 重 800		緑簾緑泥片岩。片側の側面が凸状を呈し、他の側面は打ち欠かれて凹状を持つ。
19 75	こも編み 石	床面+6	長 19.7 幅 8.2 厚 4.5 重 1,020		絹雲母石墨片岩。両側面中央部が、わずかに凹状を呈している。
20 75	こも編み 石	床面+4	長 17.6 幅 9.0 厚 4.0 重 850		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面中央部に小さな凹凸部が数個認められる。
21 75	こも編み 石	床面+5	長 16.8 幅 9.3 厚 3.7 重 700		緑簾緑泥片岩。側面中央部が幅広い石である。両側面とも明瞭な凹凸部は認められない。
22 75	こも編み 石	床面+5	長 17.3 幅 8.7 厚 3.2 重 820		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。
23 75	こも編み 石	床面+5	長 17.6 幅 7.2 厚 5.5 重 800		絹雲母石墨片岩。断面菱形を呈する。側面中央部に大小の凹凸部が認められる。
24 75	こも編み 石	床面+5	長 20.2 幅 7.3 厚 5.0 重 1,320		点紋緑泥片岩。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。

518号住居跡（第191～193図、図版30・61）

位置 本住居跡は、第7次調査区南西部にあり、65-13グリッドに位置する。

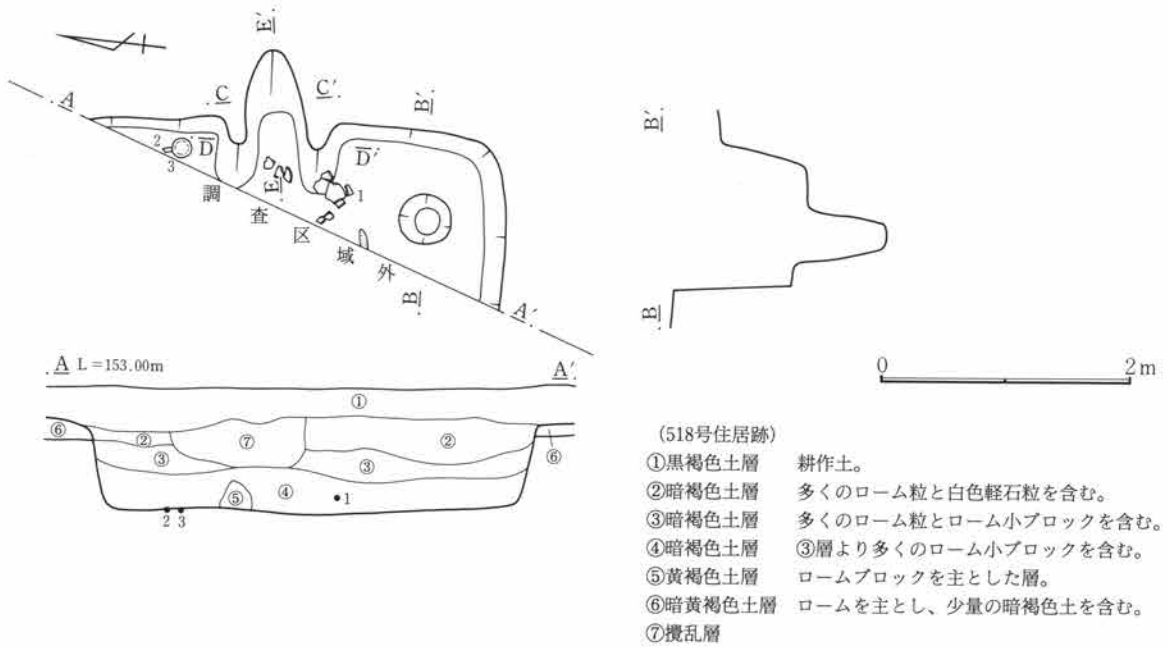
概要 住居の大部分が調査区域外のため、竈を含む南東部分の一部のみの調査である。

構造 床面はロームブロックを主とした土で造られ、床下は深く掘られていなかった。柱穴と壁溝は不明、貯蔵穴と思われる小穴が竈の右側に掘られていた。

規模 東西南北共に不明である。壁高は南東コーナー部分で62cmである。貯蔵穴は径40cm深さ71cmである。

遺物 竈左袖付近の床面上から土師器の坏と高坏、竈内や右袖付近から土師器の甕の口縁部から胴部にかけての大きな破片が出土した。

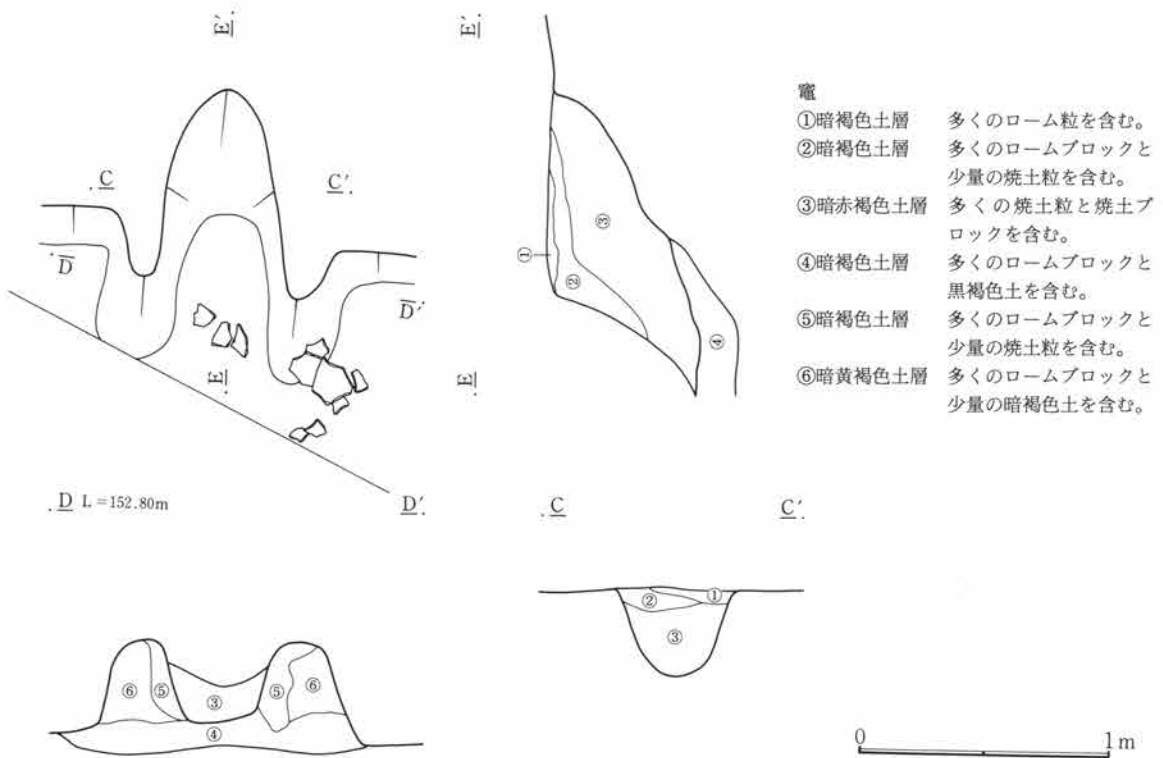
第3章 古墳時代の遺構と遺物



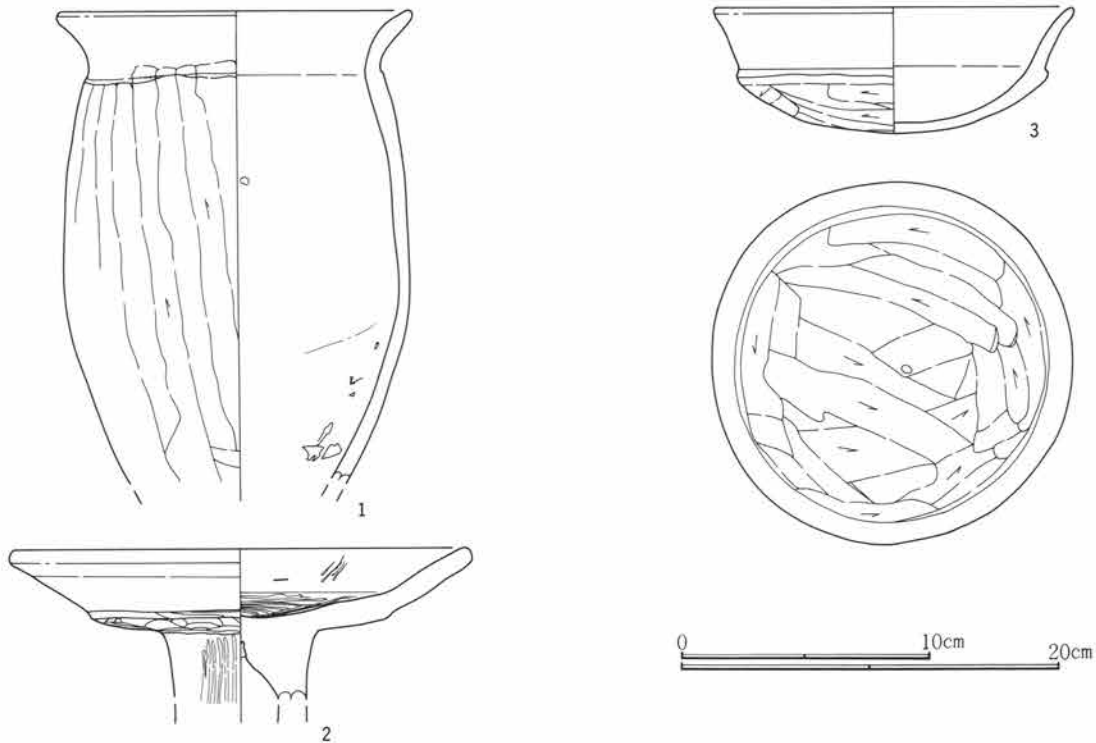
第191図 518号住居跡実測図

(竈)

概要 住居東壁に造られている。袖部分や燃烧部の多くが床面上に造られ、竈内からは袖石や天井石は全く出土していない。ロームを多く用いて造られた竈である。燃烧部を中心に多くの焼土粒が出土した。
規模 両袖方向96cm、煙道方向112cmである。



第192図 518号住居跡竈実測図



第193図 518号住居跡出土遺物実測図

518号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
193-1 61	土師器 甕	竈内+10 %残存	口(18.4) 高— 底—	①粗、3~5mmの長石粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③橙色	胴外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
193-2 61	土師器 高坏	床面直上 坏部%残存	口(18.2) 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質③橙色	坏底部ナデ。ナデによる凹凸面が多い。口縁部横ナデ。内面ナデ。坏内側底面~全面にわたるへら磨き。
193-3 61	土師器 坏	床面直上 完形	口 14.0 高 4.9 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色、底面一部黒褐色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は高く明瞭である。

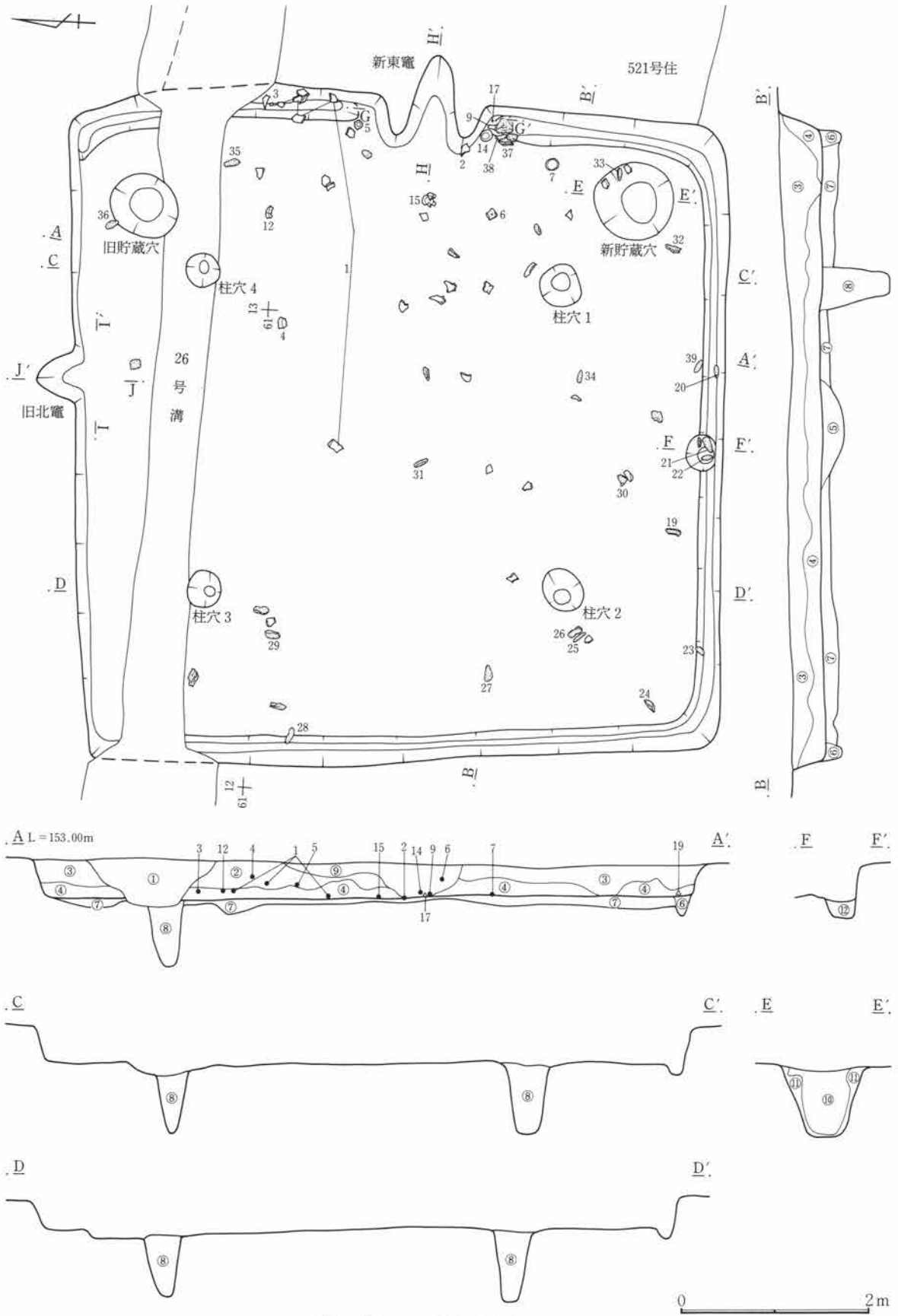
520号住居跡 (第194~199図、図版30・31・61・62・70・72・75)

位置 本住居跡は、第7次調査区南西部にあり、61-13グリッドに位置する。

概要 住居北側を26号溝により東西方向に床下まで掘り込まれている。住居東側は同じ古墳時代の521号住居と重複しており、本住居が新しくまた床面も低いいため521号住居を床面下まで掘り込んでいる。

竈が521号住居と重複している東壁と北壁で2基確認され、北壁の竈は床面上の袖部や燃焼部はすべて取り除かれており、東側の竈には床面上に袖部や燃焼部が築かれているため東竈が新しい。

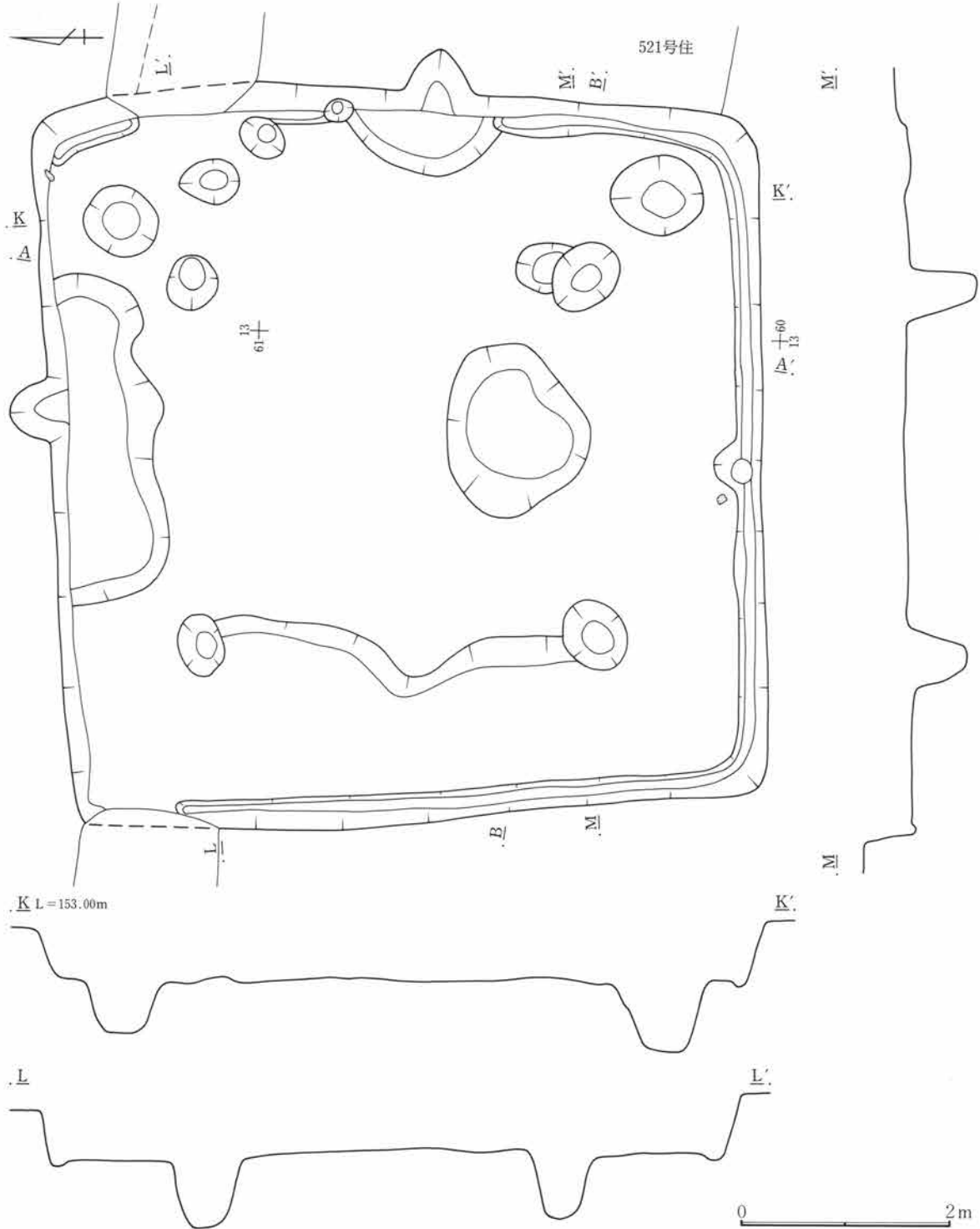
2軒の重複関係はこのように発掘段階で考えられたが、竈の土層断面図や写真の観察から、竈上層が521号住居の覆土の可能性もあり、また古い住居を掘り込んで新しい住居の竈が造られる時は、その部分の土が軟質なため多くの場合粘土が用いられるが、この住居には用いられていない。これらのことから520号住居の竈が521号住居の覆土を掘り込んで造られていたとは、断言できない要素も一部認められる。



第194図 520号住居跡実測図

(520号住居跡)

- | | | | |
|---------|----------------------------------|---------|----------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む固い層。
(26号溝覆土) | ⑦黄褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑧柱穴覆土 | |
| ③暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。 | ⑨攪乱土層 | |
| ④暗黄褐色土層 | 多くのロームブロックと僅かな焼土と灰を含む。 | ⑩暗褐色土層 | 多くのローム粒とロームブロックを含む。 |
| ⑤暗褐色土層 | 暗褐色土中に焼土粒と灰を含む。 | ⑪暗黄褐色土層 | ロームブロックを主とする固い層。 |
| ⑥暗黄褐色土層 | 多くのローム粒と少量の暗褐色土を含む。 | ⑫褐色土層 | 多くのロームブロックを含む。 |



第195図 520号住居跡床下実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

構造 床面はロームブロックを主とした土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が新旧の竈に伴うように南東コーナーと北東コーナーに掘られていた。壁溝が北壁以外の所で確認された。

規模 東西7.0m、南北6.9mである。壁高は残りの良い東壁部分で43cmである。柱穴1は径38cm深さ74cm、柱穴2は径43cm深さ73cm、柱穴3は径48cm深さ78cm、柱穴4は径38cm深さ70cmである。新貯蔵穴は径85cm深さ74cm、旧貯蔵穴は径73cm深さ62cmでいずれもほぼ円形を呈する。

遺物 竈周辺を中心に土師器の甕や坏が出土し、竈右袖部より紡錘車が、また覆土中より石製模造品の剣形が出土している。

床下 柱穴のほかに多くの小穴や複雑な掘り込みが確認された。南側中央部に東西方向165cm南北方向122cmの床下土坑が掘られていた。

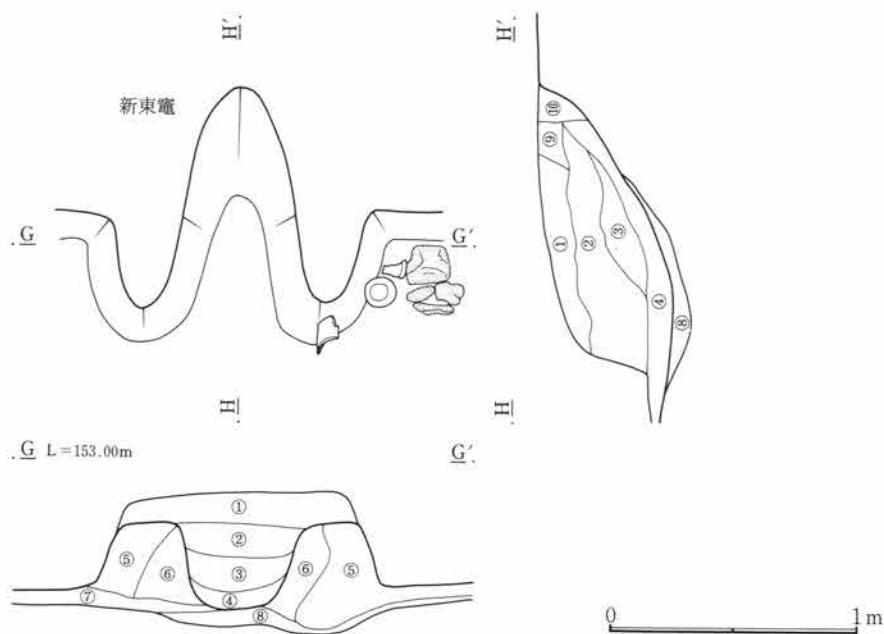
(新東竈)

概要 521号住居と重複している住居東壁に造られている。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、竈内からは袖石や天井石は全く出土していない。

規模 両袖方向115cm、煙道方向105cmである。

(旧北竈)

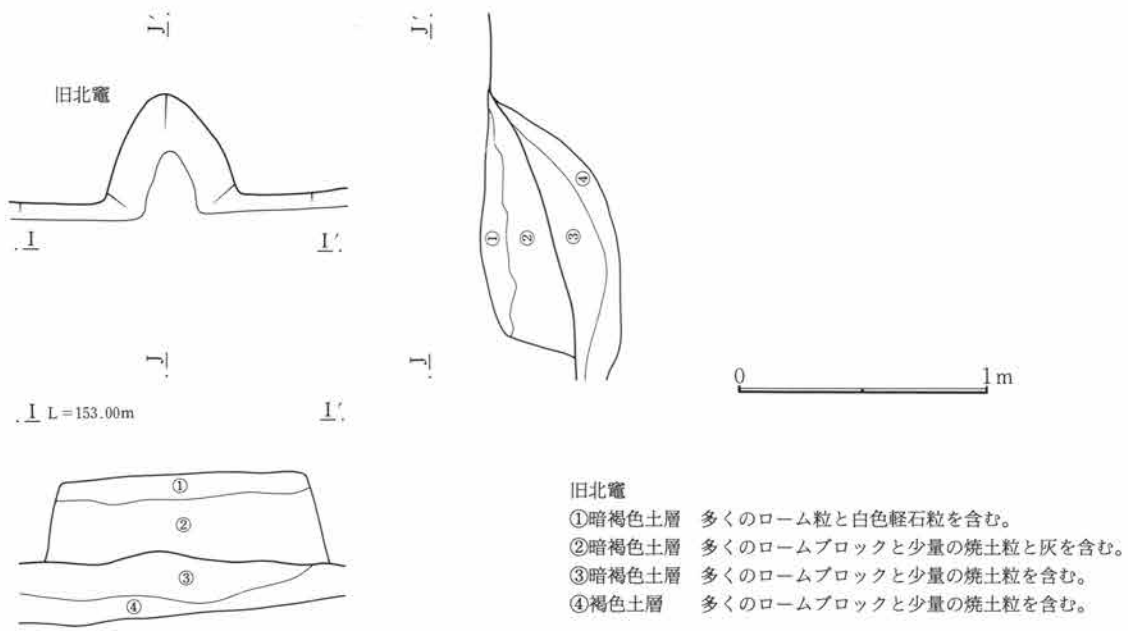
概要 住居北壁の中央部に造られている。床面上の袖部や燃焼部はすべて取り除かれていた。床面下に位置する燃焼部下部で焼土粒が少量出土し、また床面上に位置する袖部や燃焼部付近から焼土粒が出土している。これらの焼土粒は壁面を掘り込んで造られた煙道部からの流れ込みと考えられる。



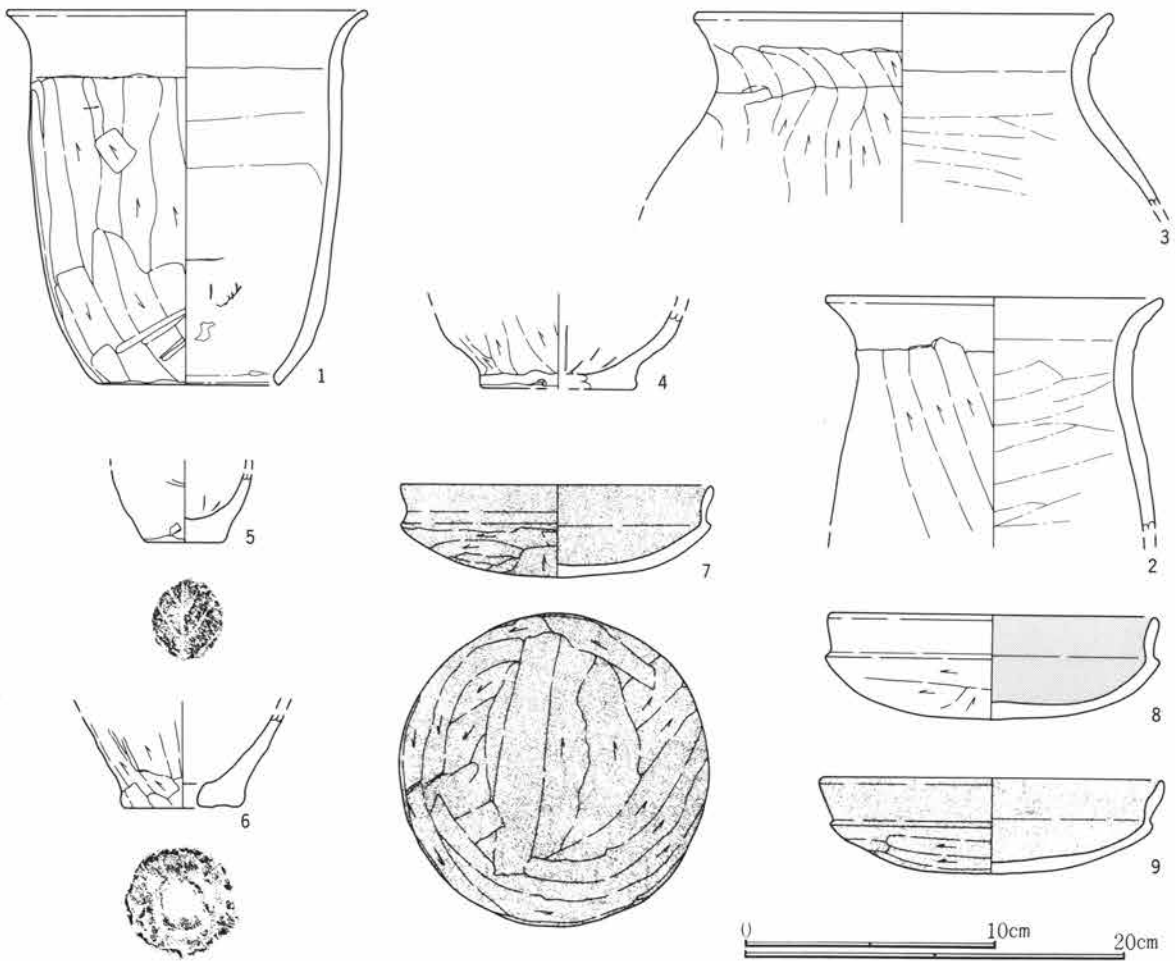
新東竈

- | | | | |
|---------|--------------------------|---------|-----------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。 | ⑤暗黄褐色土層 | ロームブロックと暗褐色土の混入層。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのロームブロックと焼土粒及び少量の灰を含む。 | ⑥暗黄褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。 |
| ③暗赤褐色土層 | 多くの焼土粒とロームブロック及び少量の灰を含む。 | ⑦黒褐色土層 | 多くのロームブロックと灰を含む。 |
| ④暗褐色土層 | ロームブロックと暗褐色土と僅かな焼土粒を含む。 | ⑧黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| | | ⑨暗褐色土層 | ①層に近いが、多くの焼土粒を含む。 |
| | | ⑩攪乱層 | |

第196図 520号住居跡新東竈実測図

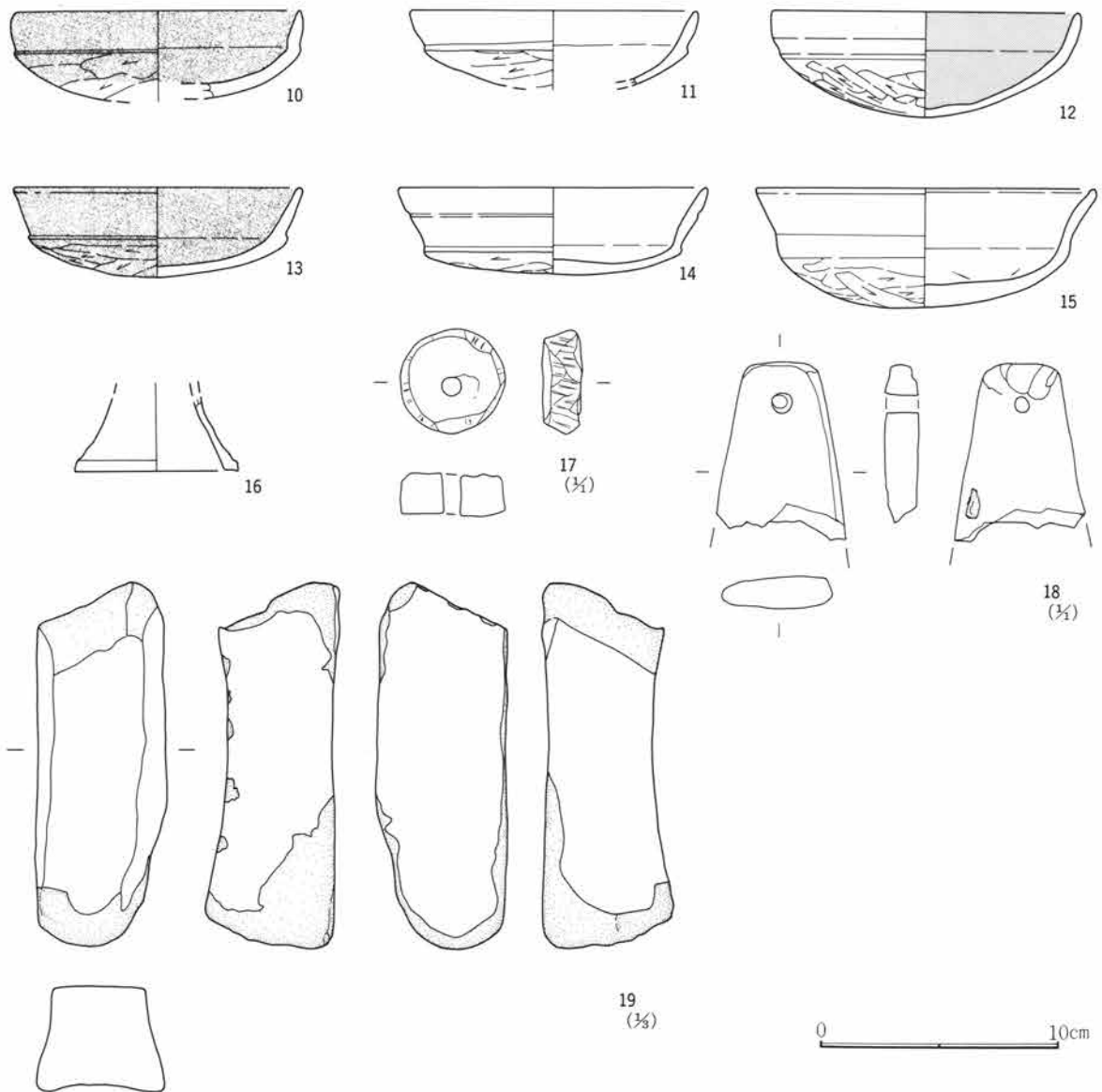


第197図 520号住居跡旧北竈実測図



第198図 520号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第199図 520号住居跡出土遺物実測図(2)

520号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
198-1 61	土 師器 小型 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$ 胴~底部 $\frac{1}{2}$	口(19.0) 高 19.6 底 9.7	①粗、3~6mmの長石粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	胴部外側へら削りで多くの砂粒が移動し、器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面密。
198-2	土 師器 甕	新東竈直上 破片	口(17.8) 高 — 底 —	①粗、1~4mmの砂粒多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外面へら削りで多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。
198-3	土 師器 壺	床面+8 $\frac{1}{2}$ 残存	口(22.0) 高 — 底 —	①粗、2~4mmの砂粒多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	肩~口縁部下位まで深いへら削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。内外面とも器表面密。
198-4	土 師器 甕	床面+20 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底 (8.0)	①粗、2~4mmの砂粒多く含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	底面へら削り後ナデ。胴部外面へら削り。内面ナデ。胴部外面はへら削りによりささら状を呈する。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
198-5	土器 小型甕	床面+14 胴下~底部 完形	口 ー 高 ー 底 4.0	①密、1mm前後の砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。胴部内外面ナデ。内面底部にヘラの工具痕あり。
198-6	土器 甕	床面+20 胴下半% 底部完形	口 ー 高 ー 底 6.2	①粗、1~4mmの砂粒を大量に 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。胴外面深いヘラ削りで、多くの砂粒が動き器表面 が粗い。内面ていねいなナデで器表面密。
198-7 61	土器 坏	床面+4 ほぼ完形	口 12.2 高 3.6 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。削りの単位明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ。 稜は高く明瞭である。
198-8 61	土器 坏	覆土 %残存	口(10.8) 高 4.1 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。 内面は吸炭により黒色を呈し、断面の一部まで吸炭が及ぶ。
198-9	土器 坏	新東甕+4 口縁部破片 底部%残存	口(13.5) 高 3.7 底 丸底	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面にぶい橙色・外面明褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。
199-10 61	土器 坏	覆土 %残存	口 12.0 高 ー 底 ー	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。砂粒の移動ほとんどないため器表面比較的密。 口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。
199-11 61	土器 坏	覆土 %残存	口 10.0 高 ー 底 ー	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。 全体的に少しゆがんでいる。
199-12 62	土器 坏	床面+8 %残存	口(13.0) 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色・内面黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。底部と口縁部との境 は沈線で区別している。内面は吸炭により黒色を呈する。 炭素は断面にも及ぶ。
199-13	土器 坏	覆土 %残存	口(12.1) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の小さな砂粒を 含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。
199-14 62	土器 坏	新東甕+6 完形	口 13.0 高 3.6 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭で端部は鋭 角を持つ。口縁部中段に一条の沈線を持つ。内面に一部表面剥 離あり。
199-15 62	土器 坏	床面直上 %残存	口 14.4 高 5.0 底 丸底	①密、砂粒はほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。内側底面に放射状の ヘラの工具痕あり。口縁部内側に弱い沈線あり。
199-16	須恵器 高坏	覆土 破片	口 ー 高 ー 底 (6.9)	①密 ②還元焰、硬質 ③断面にぶい赤橙色外面灰褐色	脚端部にわずかな段を持つ。小さな高坏の脚部と思われる。
199-17 70	石製品 白玉	新東甕+5	径 1.5 孔径 0.25 厚 0.6 重 2		滑石片岩。側面が荒砥削り。上下面は自然面。
199-18 70	石製品 剣形模造 品	覆土	長 ー 幅 ー 厚 0.5 重 3.1		滑石片岩。表面はていねいに磨かれている。
199-19 72	石製品 砥石	床面+5	長 ー 幅 5.5 厚 4.4 重 600		4側面を砥石として使用している。 石英粗面岩。
20 75	こも編み 石	床面+6	長 15.0 幅 8.0 厚 2.8 重 450		絹雲母石墨片岩。偏平で幅広い石である。両側面中央部に凹状 部が認められる。
21 75	こも編み 石	床面直上	長 17.8 幅 8.5 厚 4.8 重 900		石英安山岩。両側面に明瞭な凹状部は認められない。
22 75	こも編み 石	床面直上	長 14.6 幅 6.2 厚 3.5 重 420		絹雲母石墨片岩。両側面にわずかな凹状部が数個認められる。
23 75	こも編み 石	床面直上	長 12.4 幅 5.5 厚 3.5 重 350		安山岩。片側の側面中央部がわずかに凹状を呈し、他の側面中 央部は打ち欠かれた凹状部を持つ。
24 75	こも編み 石	床面直上	長 16.7 幅 8.4 厚 4.0 重 850		緑簾緑泥片岩。片側の側面中央部に小さな凹状部が数個認めら れる。
25 75	こも編み 石	床面直上	長 15.4 幅 2.0 厚 4.3 重 350		点紋絹雲母石墨片岩。細長い石である。両側面中央部に小さな 凹状部が数個認められる。
26 75	こも編み 石	床面直上	長 15.1 幅 8.0 厚 4.3 重 580		絹雲母緑泥石墨片岩。両側面中央部は大きく凹状に打ち欠かれ ている。
27 75	こも編み 石	床面-4	長 17.1 幅 8.5 厚 3.5 重 600		安山岩。両側面にわずかな凹状部が認められる。
28 75	こも編み 石	床面-6	長 13.3 幅 6.6 厚 3.0 重 420		絹雲母石墨片岩。片側の側面が凸状を呈し、他の側面に小さな 凹状部が認められる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴・備考
29 75	こも編み 石	床面-6	長 15.3 厚 4.3	幅 8.2 重 720			安山岩。片側の側面に段があり、凹状部が認められる。
30 75	こも編み 石	床面+4	長 18.3 厚 2.9	幅 7.2 重 400			点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈している。
31 75	こも編み 石	床面+18	長 14.3 厚 4.4	幅 6.0 重 520			絹雲母緑泥石墨片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈している。
32 75	こも編み 石	床面+29	長 15.2 厚 5.5	幅 5.8 重 670			安山岩。2側面の中央部が凹状を呈している。一部欠損。
33 75	こも編み 石	床面+24	長 13.2 厚 4.5	幅 5.4 重 450			緑泥片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈している。
34 75	こも編み 石	床面+4	長 16.6 厚 4.6	幅 7.7 重 720			点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部とも明瞭な凹状部は認められない。
35 75	こも編み 石	床面直上	長 14.3 厚 5.0	幅 7.0 重 650			絹雲母石墨片岩。片側の側面にわずかな凹状部が認められる。
36 75	こも編み 石	床面直上	長 18.0 厚 7.0	幅 6.7 重 1,050			安山岩。2側面の中央部が大きく凹状を呈している。
37 75	こも編み 石	床面直上	長 17.8 厚 3.7	幅 5.0 重 320			緑泥片岩。細長い石である。片側の側面中央部が凹状を呈している。
38 75	こも編み 石	床面直上	長 13.0 厚 3.8	幅 6.3 重 400			絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が凹状を呈し、他の側面に小さな凹状部が数個認められる。
39 75	こも編み 石	床面直上	長 16.7 厚 8.8	幅 6.5 重 480			絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が凹状を呈し、他の側面に小さな凹状部が数個認められる。

521号住居跡（第200～203図、図版31・62・76）

位置 本住居跡は、第7次調査区南西部にあり、61-14グリッドに位置する。

概要 住居北壁部分を26号溝により東西方向に床下まで掘り込まれている。西側は同じ古墳時代の520号住居と重複しており、新しい520号住居により本住居の東側は床面下まで掘り込まれている。

竈が東壁中央部に造られており、袖石や天井部に使われた土師器甕や石等が残っていた。520号住居の説明で触れたようにこの新旧関係の一部に疑問もある。

構造 床面は地山のロームとロームブロックを主とした土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が竈右側に掘られていた。壁溝は確認されなかった。

規模 東西不明、南北5.4mである。壁高は残りの良い南壁部分で22cmである。柱穴1は径40cm深さ42cm、柱穴2は径32cm深さ53cm、柱穴3は径31cm深さ76cm、柱穴4は径43cm深さ64cmである。貯蔵穴は径52cm深さ62cmでほぼ円形を呈する。

遺物 竈左袖部に近い壁面にほぼ完形の甕が、北東コーナーに近い床面よりほぼ完形の高坏が2個、その他にも土師器の甕や坏が多く出土している。

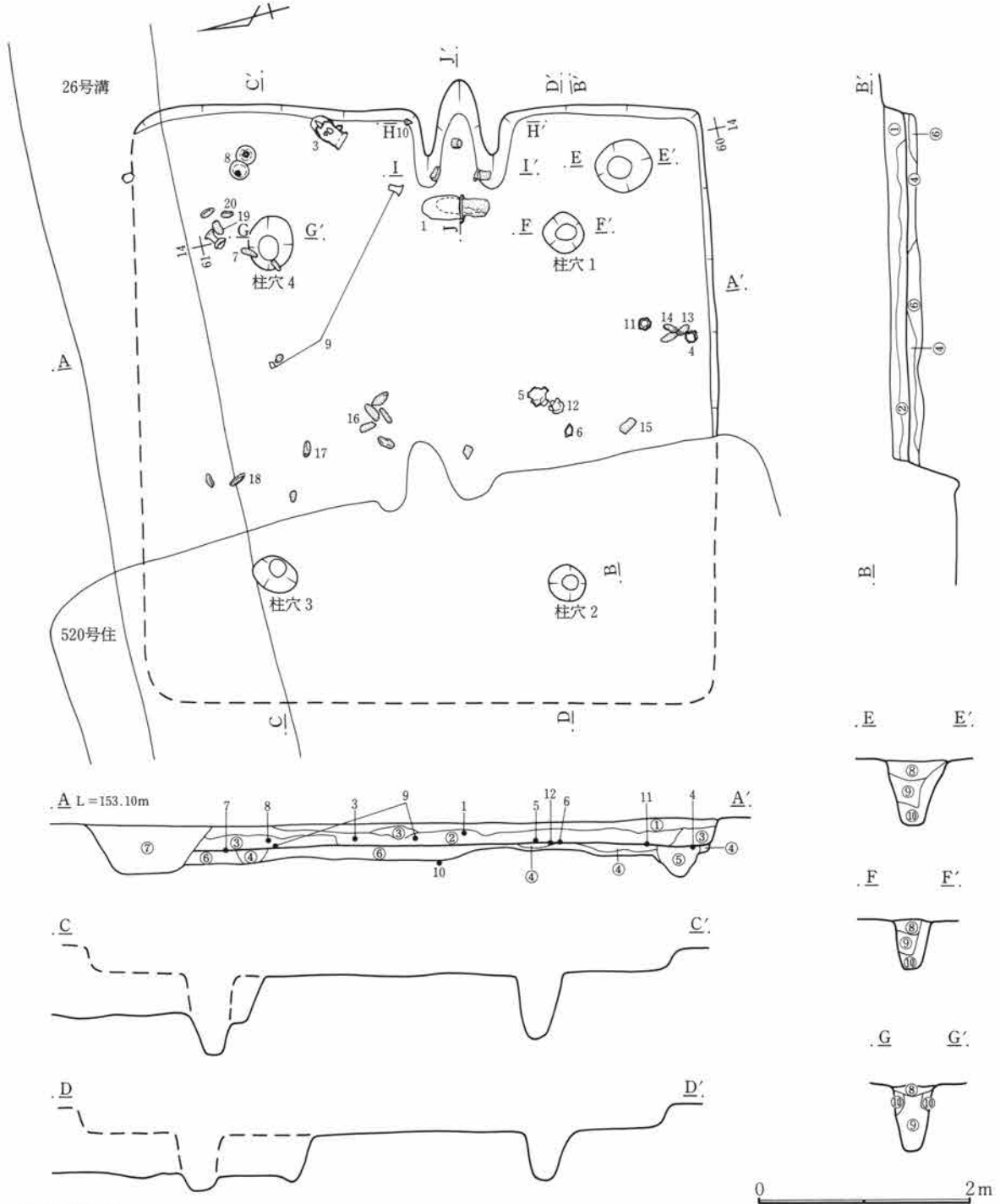
（竈）

概要 住居東壁に造られている。煙道部は壁面を掘り込んでいるが、燃烧部や袖部分は床面上に造られている。非常に焼土粒が多く、燃烧部を中心として大量に出土した。

構造 焚口の両袖部に細長い石が、また燃烧中央部に支脚石が据えられた状態で出土した。焚口手前の床面上には長胴の土師器甕の中に細長い石が奥深くまで差し込まれた状態で出土した。甕又は石だけでは

天井部に掛ける場合、長さが足りないため組み合わせて焚口天井部に使用したものか。これらの石と多くのロームを用いて竈は造られていた。

規模 両袖方向92cm、煙道方向102cmである。

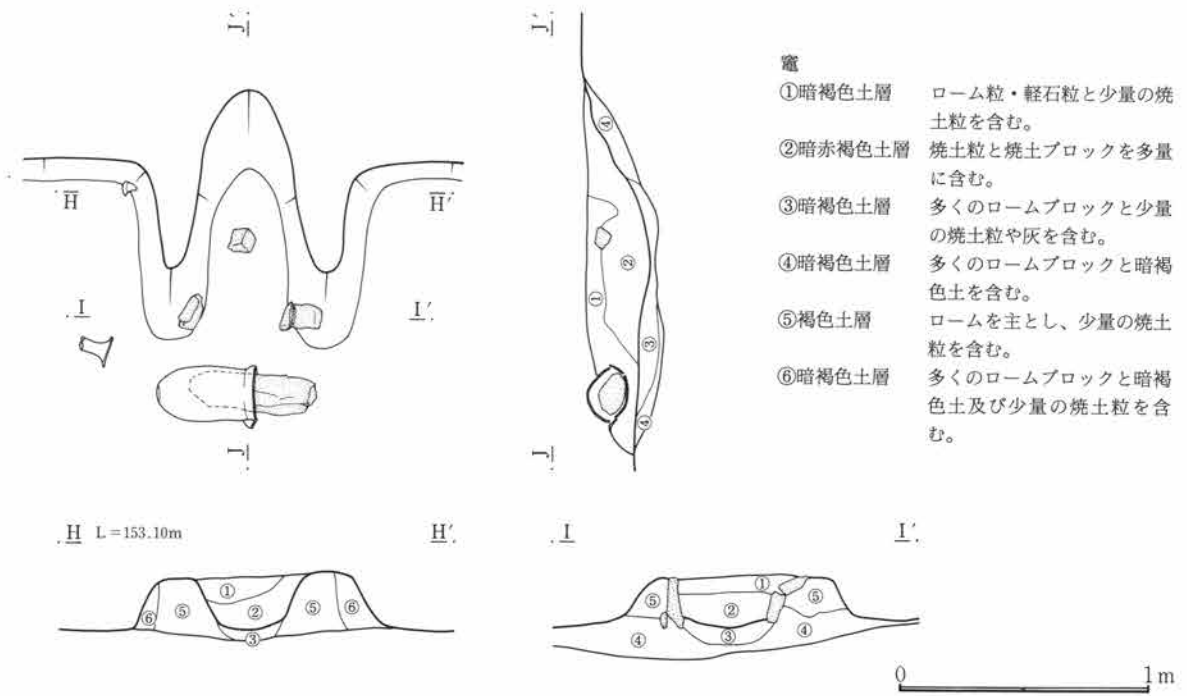


(521号住居跡)

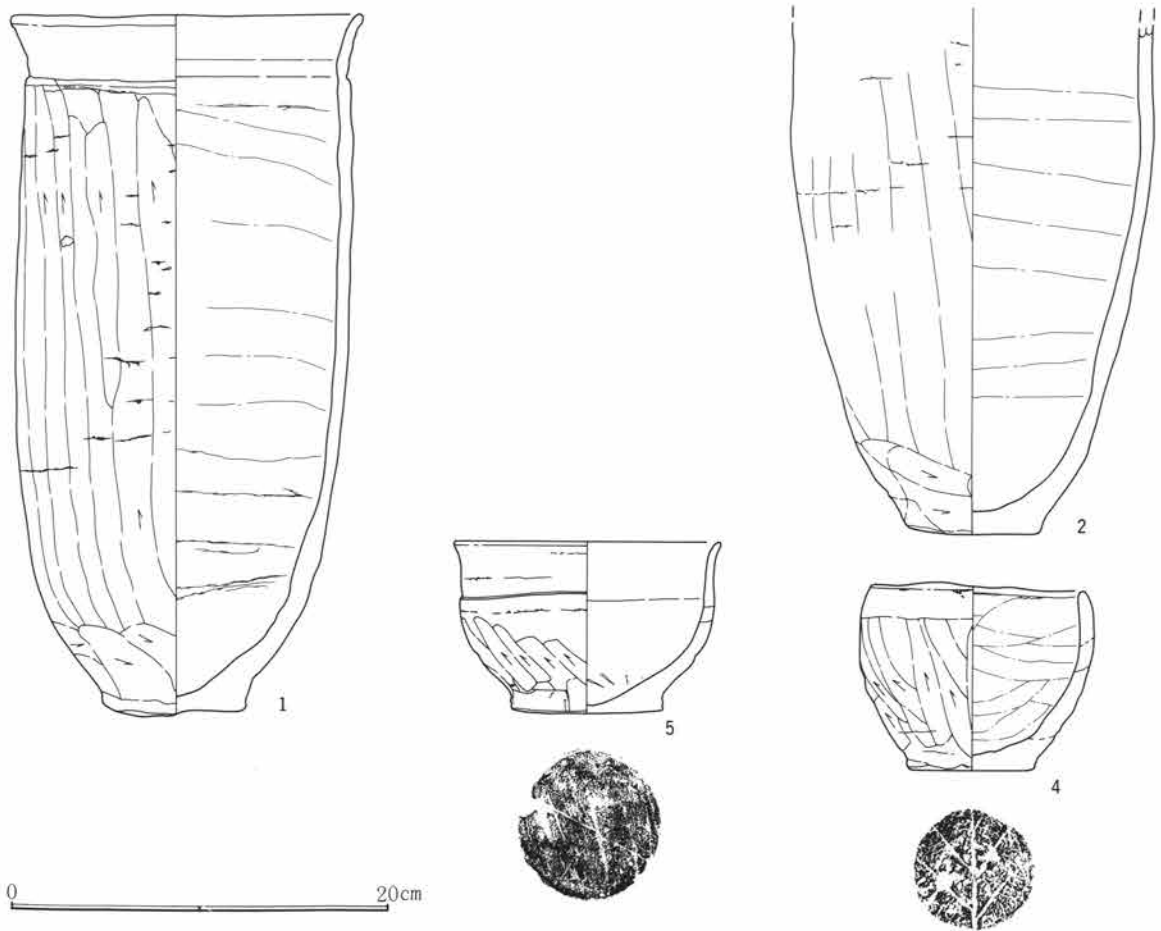
- | | | | |
|---------|----------------------|---------|------------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 | ⑥黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。 | ⑦26号溝覆土 | |
| ③暗黄褐色土層 | 多量のロームブロックを含む。 | ⑧暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の黒褐色土を含む。 |
| ④暗黄褐色土層 | 多くのローム粒と少量の暗褐色土を含む。 | ⑨暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量のロームブロックを含む。 |
| ⑤暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 | ⑩暗褐色土層 | 多くのロームブロックを含む。 |

第200図 521号住居跡実測図

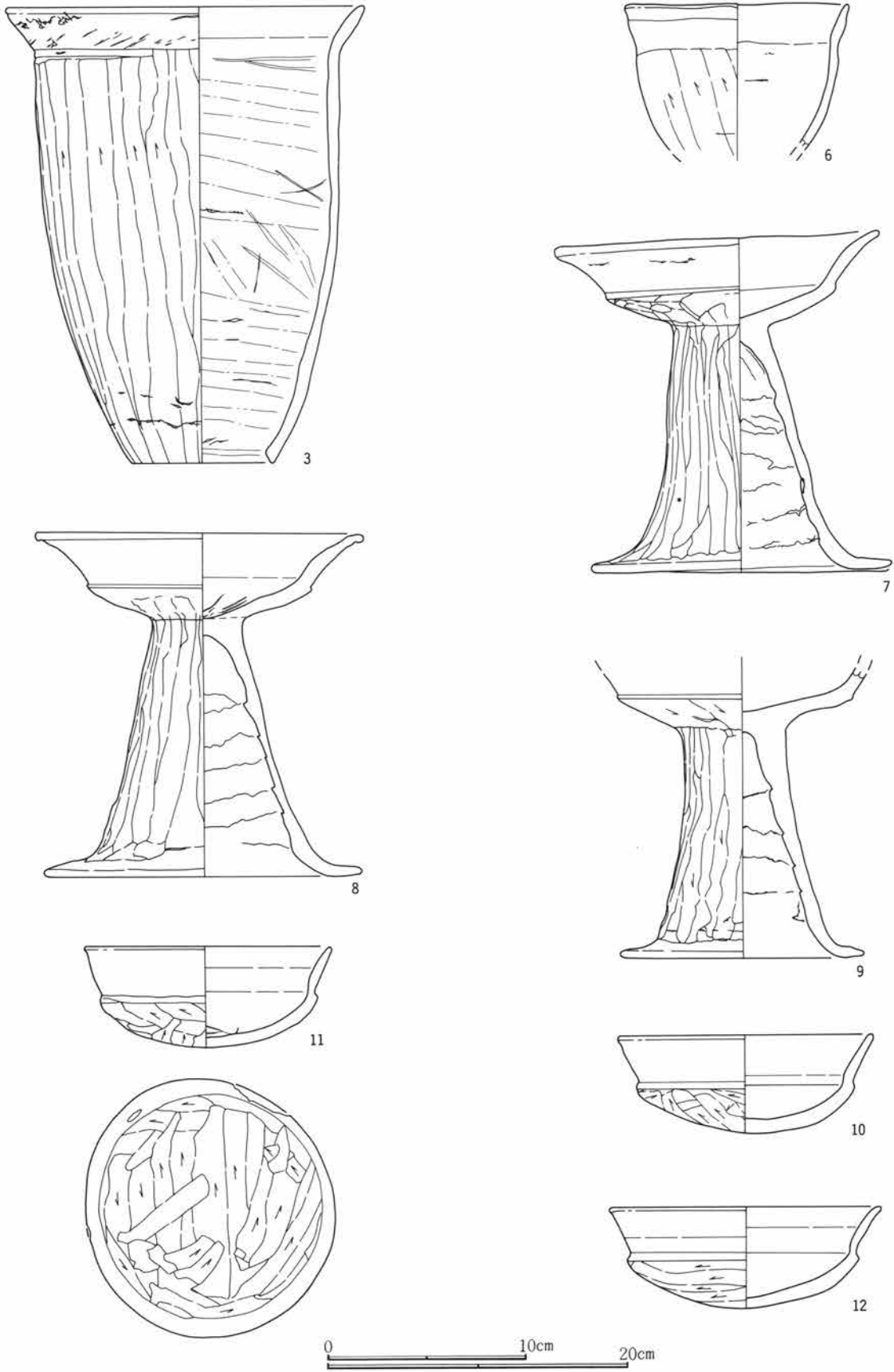
第3章 古墳時代の遺構と遺物



第201図 521号住居跡竈実測図



第202図 521号住居跡出土遺物実測図(1)



第203図 521号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

521号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
202-1 62	土器 甕	竈内+9 完形	口 18.4 高 37.0 底 7.4	①粗、3～6mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。口縁部 横ナデ。口唇部丸く仕上げる。内面ナデ。口縁部がほとんど外 反しない。内外面にわずかに輪積痕が残る。
202-2 62	土器 甕	覆土 胴部残存 底部完形	口 — 高 — 底 7.0	①粗、2～8mmの砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。内面横ナデ。内面に輪積痕が 残る。10mm以上の小石も含む。
202-3 62	土器 甕	床面+5 口～胴上1/2 胴下半完形	口(23.6) 高 30.2 底 9.6	①粗、3～6mmの長石粒と片岩 粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。口縁部にヘラの当たった痕 跡あり。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 わずかに黒斑が認められる。
202-4 62	土器 小型甕	床面-4 口縁部残 他完形	口 11.3 高 9.9 底 6.7	①粗、1～5mmの砂粒と雲母を 多く含む。 ②酸化焰、硬質③にぶい赤褐色	底面木葉痕。胴部外側ヘラナデ。口縁部横ナデ。胴部内面指ナ デで器表面密。
202-5 62	土器 小型甕	床面+4 残存	口 14.2 高 9.0 底 8.2	①粗、2～3mmの砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・内側底面黒色	底面ヘラ削り。底部の台は削り出して作っている。胴下部ヘラ 削り、上部ナデ。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデで器表面 密。内側底面黒漆か。
203-6 62	土器 小型甕	床面直上 残存	口(14.8) 高 — 底 —	①密、2～6mmの長石粒と片岩 粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部外側ヘラ削り。多くの砂粒が目立ち器表面が粗い。 口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。内面にも砂粒目立つ。
203-7 62	土器 高坏	床面-5 坏部残存 脚部完形	口(16.2) 高 16.4 底 14.8	①やや粗、3～5mmの片岩粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラナデ。内面ナデで、多くの輪積痕が残る。 坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。坏内面ナデ。
203-8 62	土器 高坏	床面+4 ほぼ完形	口 16.1 高 17.0 底 16.0	①やや粗、1mm前後の長石粒を 多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。内面に多くの輪積痕が残る。坏底面ヘラ削り。 口縁部横ナデ。脚部の器肉が薄い。坏底面が薄くなり、脚部上 面を底面としている。
203-9 62	土器 高坏	竈内+5 床面直上 脚部完形	口 — 高 — 底 12.1	①粗、1～2mmの長石粒を多く 3～4mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラナデ。下端部横ナデ。脚部内側に明瞭な輪積痕が 残る。坏底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。
203-10 62	土器 坏	床面-19 残存	口 12.7 高 4.8 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず、や や粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデ。内面底部 中央にヘラの工具痕あり。稜は明瞭である。
203-11 62	土器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.3 高 5.0 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁は長く外傾する。 稜は明瞭である。
203-12 62	土器 坏	床面直上 残存	口 13.5 高 5.0 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内側底面ていねいなナデ。 稜は高く明瞭である。
13 76	こも編み 石	床面-6	長 13.8 幅 8.5 厚 5.0 重 850		緑簾緑泥片岩。大きな石である。欠損。
14 76	こも編み 石	床面-5	長 14.9 幅 6.8 厚 4.3 重 620		絹雲母石墨片岩。両側面中央部に小さな複数の凹状部を持つ。
15 76	こも編み 石	床面直上	長 18.8 幅 9.3 厚 4.1 重 1,100		緑簾緑泥片岩。片側の側面に小さな複数の凹状部を持つ。
16 76	こも編み 石	床面直上	長 17.4 幅 7.1 厚 4.4 重 820		点紋絹雲母石墨片岩。両側面の中央部に小さな複数の凹状部 を持つ。
17 76	こも編み 石	床面-4	長 17.0 幅 9.0 厚 4.4 重 1,000		絹雲母緑泥片岩。両側面が凸状を呈し、側面中央部が幅広い。
18 76	こも編み 石	床面-5	長 17.5 幅 6.4 厚 6.7 重 1,000		絹雲母石墨片岩。やや異質の石である。断面ほぼ円形を呈する。
19 76	こも編み 石	床面直上	長 15.1 幅 8.8 厚 2.7 重 500		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面中央部に小さな 複数の凹状部を持つ。
20 76	こも編み 石	床面直上	長 14.0 幅 8.5 厚 4.1 重 700		絹雲母石墨片岩。両側面が凸状を呈し、側面中央部が幅広い。

523号住居跡 (第204～206図、図版31・63・76)

位置 本住居跡は、第7次調査区南西端にあり、59-14グリッドに位置する。

概要 北壁中央部で奈良時代の522号住居と、南西部で古墳時代の524号住居と重複している。いずれの住居
とも本住居跡より新しく、床面の掘り込みも本住居の床面より深いため重複部分は掘り込まれていた。

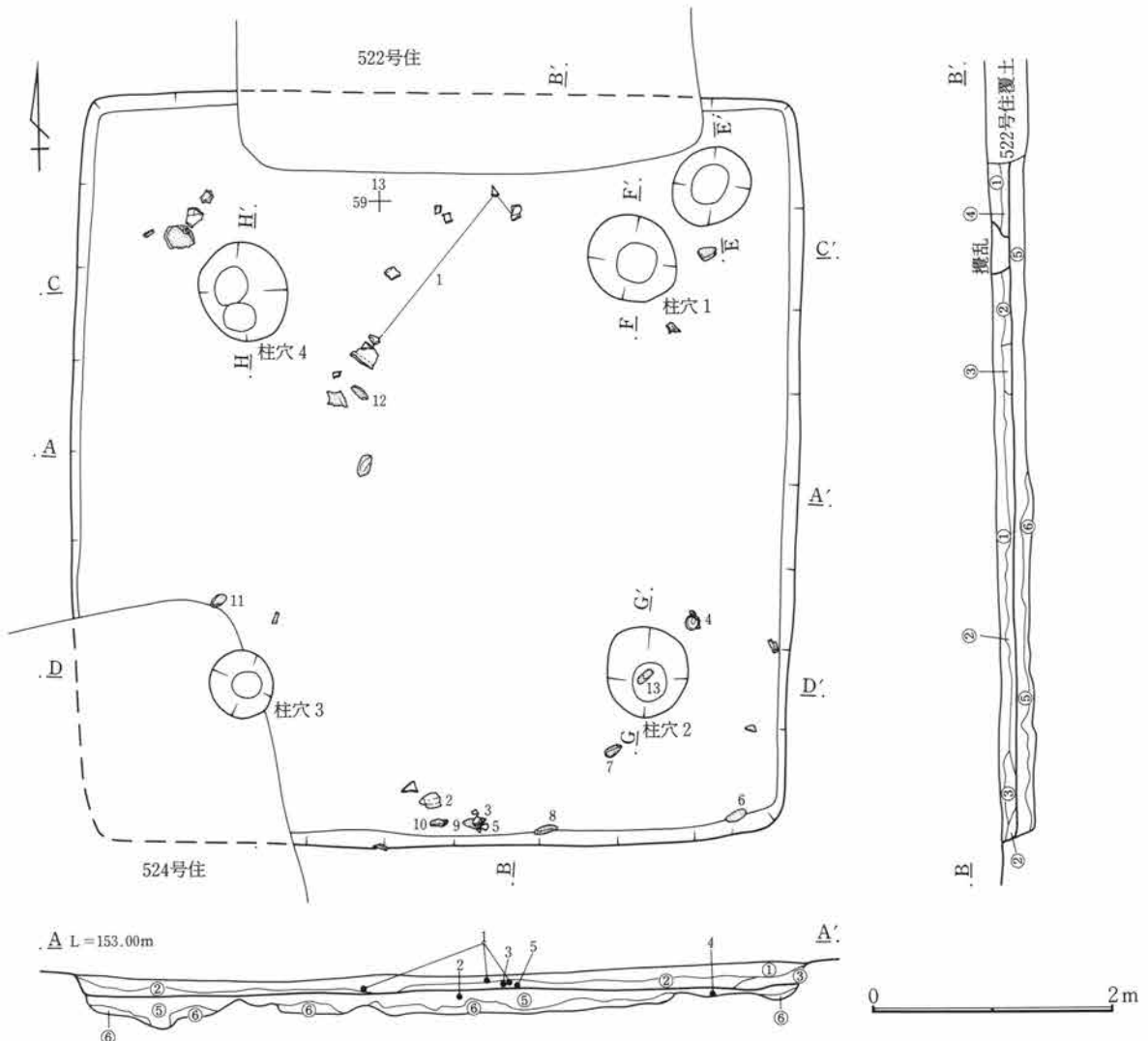
竈は検出されなかったが、522号住居により削り取られた住居北壁部分に焼土粒が出土していることと、北東コーナーに貯蔵穴と思われる掘り込みが確認されていることにより、北壁部分に造られていたと考えられる。

構造 床面はロームを主とした土で固めてあった。柱穴は4本確認され、貯蔵穴が北東コーナーに掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西6.0m、南北6.1mである。壁高は残りの良い東壁面で28cmである。柱穴1は径73cm深さ84cm、柱穴2は径72cm深さ80cm、柱穴3は径54cm深さ98cm、柱穴4は径76cm深さ85cmである。貯蔵穴は径70cm深さ42cmでほぼ円形を呈する。

床下 床下中央部に南北方向に長い200×145cmで深さ19cmの床下土坑が掘られていた。

遺物 出土量は少なく、土師器の甕・甑や坏とも編み石が8個出土している。

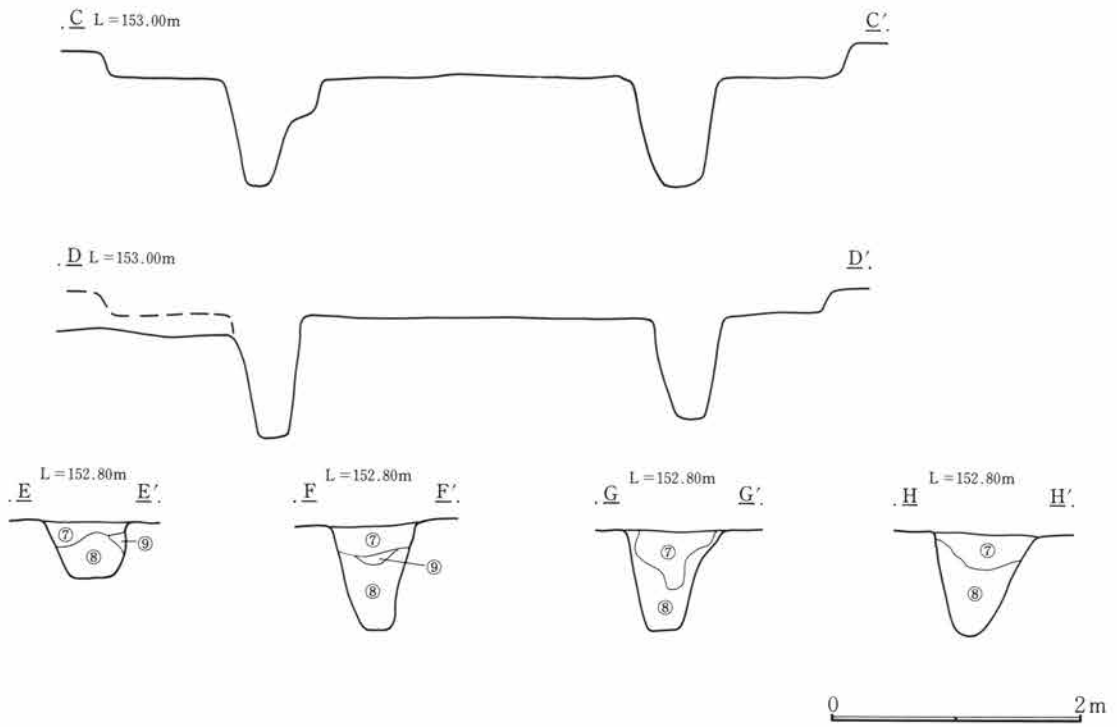


(523号住居跡)

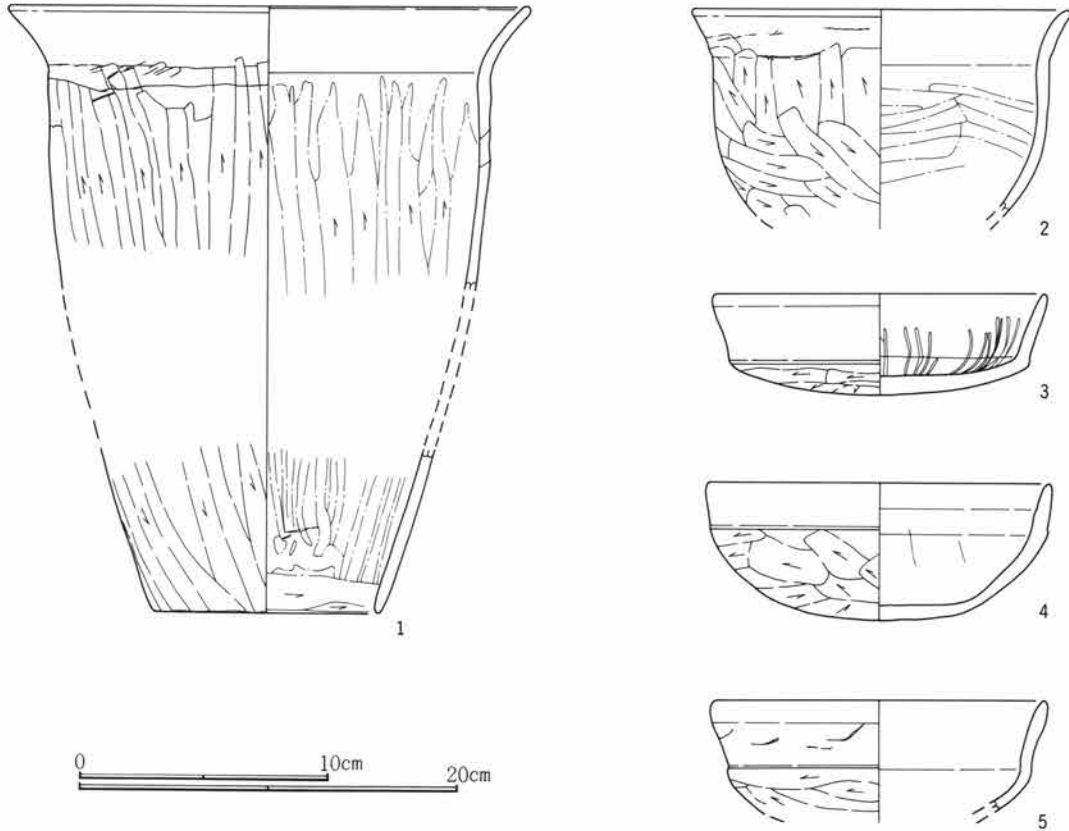
- | | | | |
|---------|-------------------------|--------|---------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くのローム粒と少量の白色軽石粒を含む。 | ⑥黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ②暗黄褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑦暗褐色土層 | 多くのロームと少量の黒褐色土を含む。 |
| ③暗黄褐色土層 | ローム粒を主とする層。 | ⑧暗褐色土層 | 多くのロームブロックとローム粒を含む。 |
| ④暗黄褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。 | ⑨黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ⑤黄褐色土層 | ロームブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | | |

第204図 523号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第205図 523号住居跡実測図(2)



第206図 523号住居跡出土遺物実測図

523号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
206-1 63	土師器 甗	床面+5 1/4残存	口(27.8) 高(32.0) 底(12.0)	①密、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	外面胴部ヘラナデ。口縁部横ナデ。内面胴部磨き。胴部下端ヘラ削り。
206-2	土師器 鉢	床面-4 1/4残存	口(20.0) 高— 底—	①やや粗、1mm以下の赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	外側胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内側胴部ナデにより器表面密。
206-3 63	土師器 坏	床面+5 1/4残存	口(13.2) 高3.9 底丸底	①非常に密、砂粒ほとんど含まず。②酸化焰、硬質③にふい黄橙色	底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面底部から口縁部にかけて数多くの放射状ヘラ磨き。
206-4 63	土師器 坏	床面-4 1/4残存	口13.6 高5.4 底丸底	①粗、1mm以下の赤色粒と砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にふい黄橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部内側中央に弱い沈線。内側内面中央にヘラの工具痕が多く残る。
206-5	土師器 坏	床面+5 1/4残存	口(13.1) 高— 底—	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。口縁部外側にわずかな稜線を持つ。
6 76	こも編み 石	床面+12	長 15.8 幅 6.7 厚 3.5 重 500		緑泥片岩。均整のとれた石である。両側面に明瞭な凹状部は認められない。
7 76	こも編み 石	床面-4	長 15.6 幅 7.8 厚 3.9 重 480		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面に打ち欠かれたような凹状部が認められる。
8 76	こも編み 石	床面直上	長 15.3 幅 6.5 厚 4.3 重 580		絹雲母石墨片岩。片側の側面にわずかに打ち欠かれたような凹状部が認められる。
9 76	こも編み 石	床面直上	長 17.1 幅 7.0 厚 3.2 重 500		絹雲母石墨片岩。片側の側面に大きく打ち欠かれた凹状部が認められる。
10 76	こも編み 石	床面直上	長 14.0 幅 6.5 厚 3.8 重 400		点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
11 76	こも編み 石	床面-8	長 14.1 幅 9.0 厚 3.6 重 520		点紋絹雲母石墨片岩。偏平で中央部が幅広い石である。両側面にわずかな凹状部が認められる。
12 76	こも編み 石	床面直上	長 15.4 幅 5.9 厚 3.5 重 350		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が大きく凹状を呈している。
13 76	こも編み 石	床面-37	長 13.7 幅 6.5 厚 3.5 重 350		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。

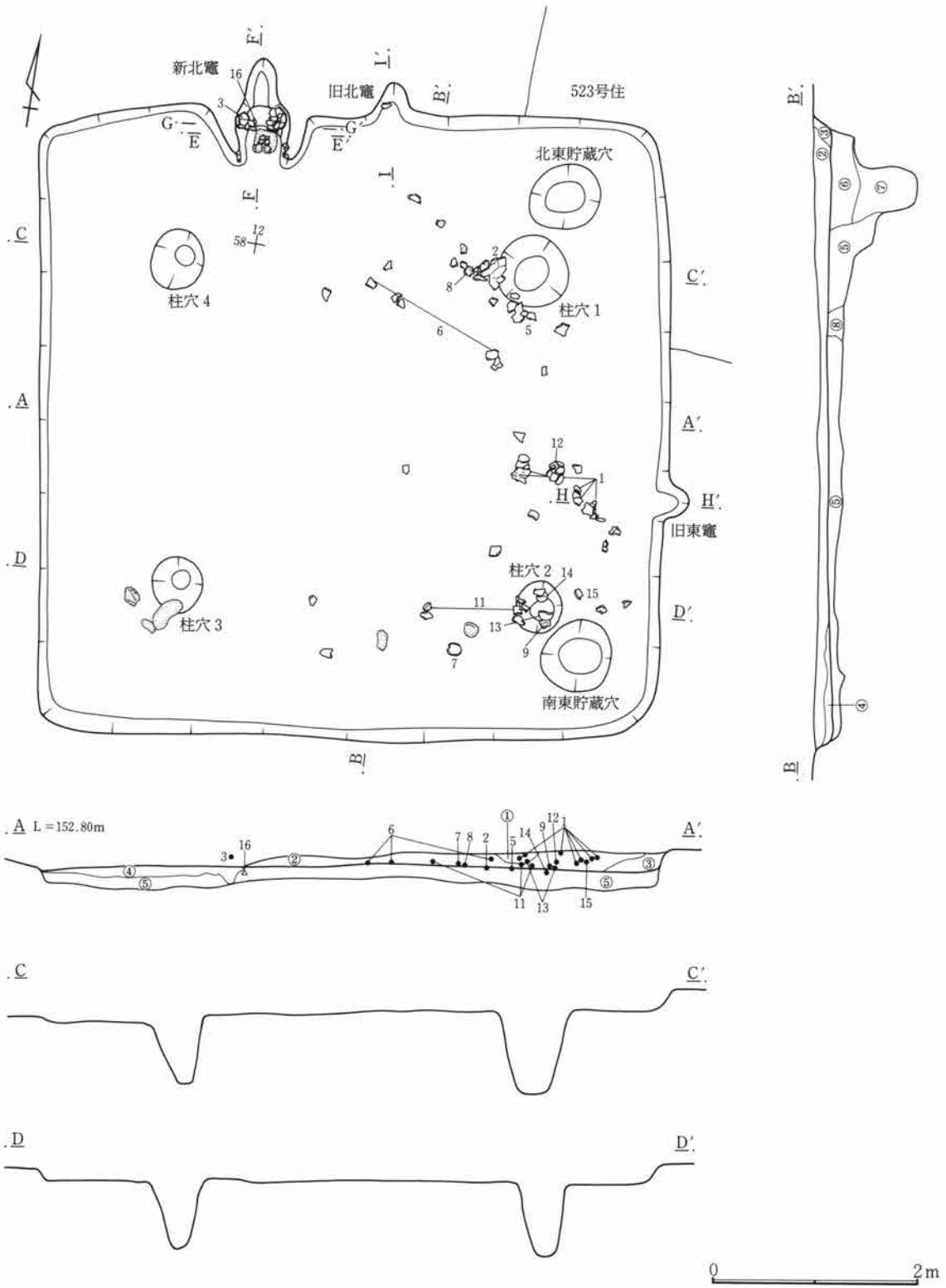
524号住居跡 (第207~212図、図版32・63・72)

位置 本住居跡は、第7次調査区南西部にあり、58-13グリッドに位置する。

概要 確認面から床面までの掘り込みが浅く残りの悪い住居であった。北東コーナーで同じ古墳時代の523号住居と重複している。本住居が新しく床面も深いため、523号住居の南西部分を床面下まで掘り込んでいる。竈が東壁で1基、北壁で2基の計3基確認され、北壁西寄りの竈に袖部と袖石や多くの遺物が残っていることにより、この竈が最も新しい。2基の旧竈はいずれも壁面に掘り込まれた煙道部は残っていたが、床面上の袖部や燃焼部は取り除かれていた。旧竈の中での新旧関係は明確でないが、東竈における焼土粒の残りが北竈の旧竈より多く出土し、一部が住居内まで認められるため東竈が新しいものと思われる。そのため竈は北壁中央部(旧北竈)→東壁(旧東竈)→北壁西寄り(新北竈)の順で造り変えられたものと思われる。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が混入した土で固めてあった。柱穴は4本確認されたが、床下調査段階において南東の柱穴2の内側に同じような掘り込みが確認されたため、柱穴の掘り直しがあった可能性もある。貯蔵穴が南東コーナーと北東コーナーに掘られており、それぞれ旧東竈と旧北竈に伴うと思われるが、新北竈に伴う貯蔵穴は確認できない。北壁で西側に偏って造られる竈には竈左側の住居北西コーナーに貯蔵穴が掘られる例が多いが、この住居には掘られていなかった。床下調査段階で2基の旧竈の右袖付近に貯蔵穴に似た掘り込みが確認されており、貯蔵穴になることも考えられる

第3章 古墳時代の遺構と遺物



(524号住居跡)

- | | | | |
|--------|----------------------------|--------|------------------------|
| ①黒褐色土層 | 桑の耕作土。 | ⑤暗褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の黒褐色土を含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。 | ⑥暗褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。 |
| ③暗褐色土層 | 多くのローム粒とロームブロックと少量の焼土粒を含む。 | ⑦褐色土層 | 多くのロームブロックと僅かな焼土と灰を混入。 |
| ④暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑧黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |

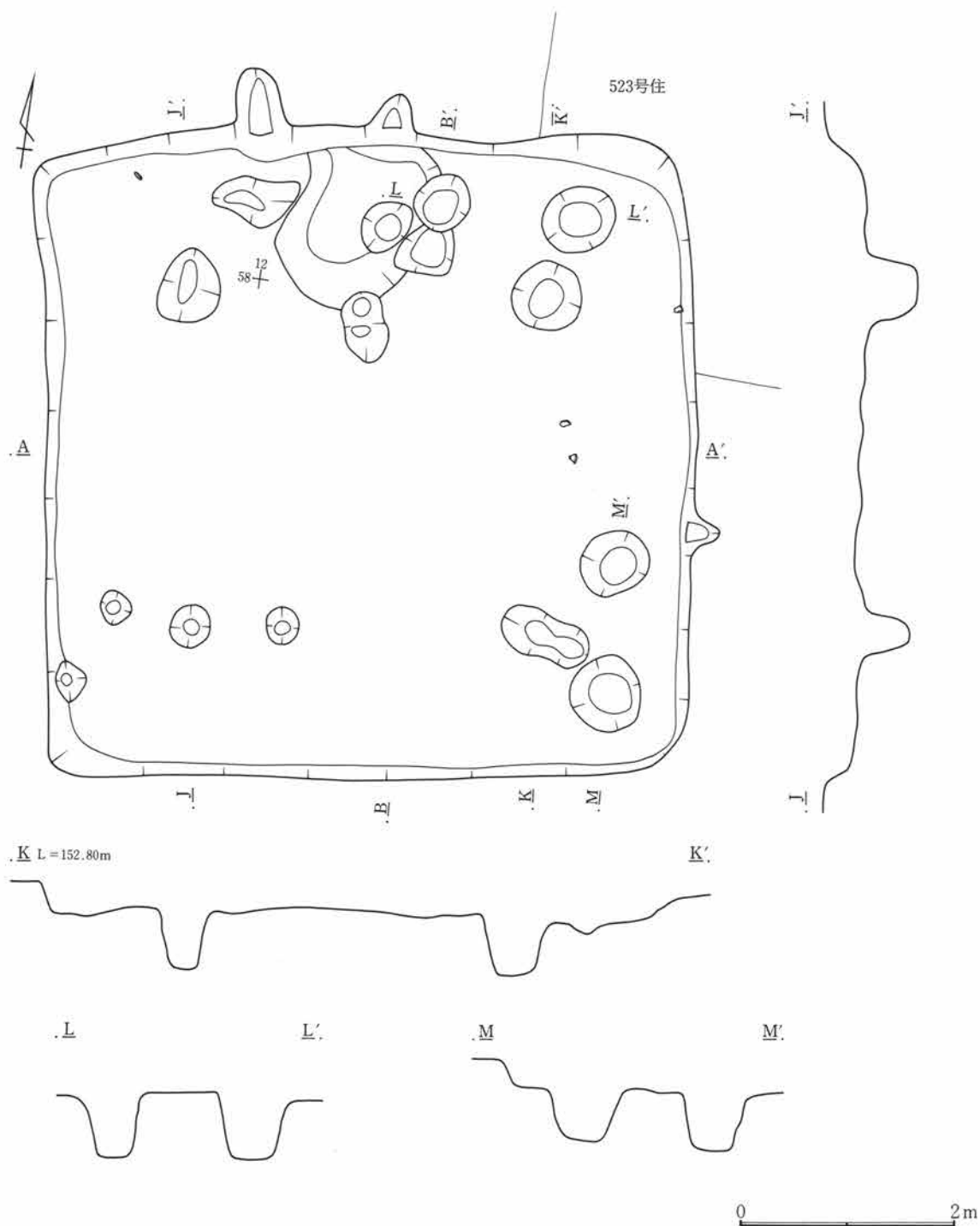
第207図 524号住居跡実測図

が不明である。壁溝は確認できなかった。

規模 東西6.1m、南北6.0mである。壁高は残りの良い東壁部分で21cmである。柱穴1は径68cm深さ79cm、柱穴2は径46cm深さ70cm、柱穴3は径51cm深さ66cm、柱穴4は径50cm深さ70cmである。北東貯蔵穴は径68cm深さ81cm、南東貯蔵穴は径70cm深さ64cmでいずれもほぼ円形を呈する。

遺物 竈内や東側床面より、土師器の甕や坏が出土している。

床下 柱穴のほかに多くの小穴や複雑な掘り込みが確認された。床下土坑は掘られていなかった。



第208図 524号住居跡床下実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

(新北竈)

概要 住居北壁の西寄りに造られている。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、焚口部分の袖石2石がほぼ使用時の位置を保って据えられていた。焚口部分に天井石が割れて落ちたような状態で残っていた。また燃焼部中央のやや左寄りに支脚石が据えられた状態で出土し、土師器の甕も多く出土した。

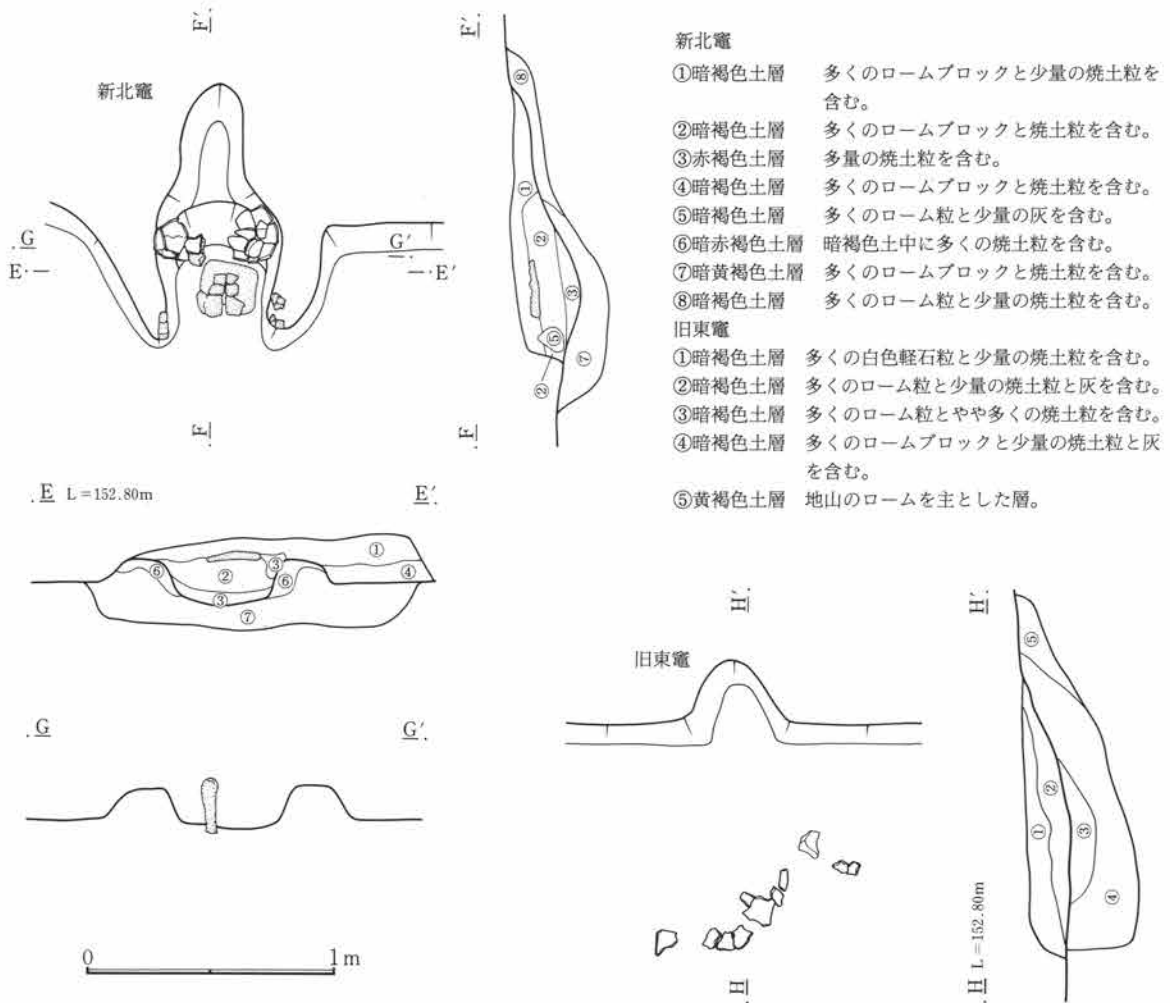
規模 両袖方向96cm、煙道方向105cmである。

(旧東竈)

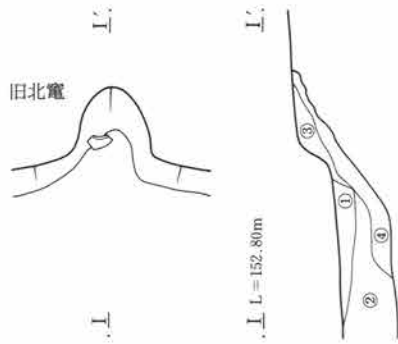
概要 住居東壁の南寄りに造られている。発掘段階において袖部が残っている可能性があり調査を進めたが、調査の結果、床面上に位置する燃焼部付近では焼土粒が殆ど残ってなく、床面下に位置する燃焼部下部で焼土粒が少量出土し、また床面上に位置する袖部や燃焼部付近からの焼土粒の出土は少なく、袖部は取り除かれて残っていなかった。このことは煙道部方向の土層断面の観察からも確認され、床面上に残る焼土粒は壁面を掘り込んで造られた煙道部からの流れ込みと考えられる。

(旧北竈)

概要 住居北壁の中央部に造られている。発掘段階において床面上に位置する袖部や燃焼部が取り除かれていることは明らかであった。調査の結果、壁面を掘り込んで造られていた煙道部と床面下に位置する燃焼部付近で焼土粒が出土した。



第209図 524号住居跡新北竈・旧東竈実測図

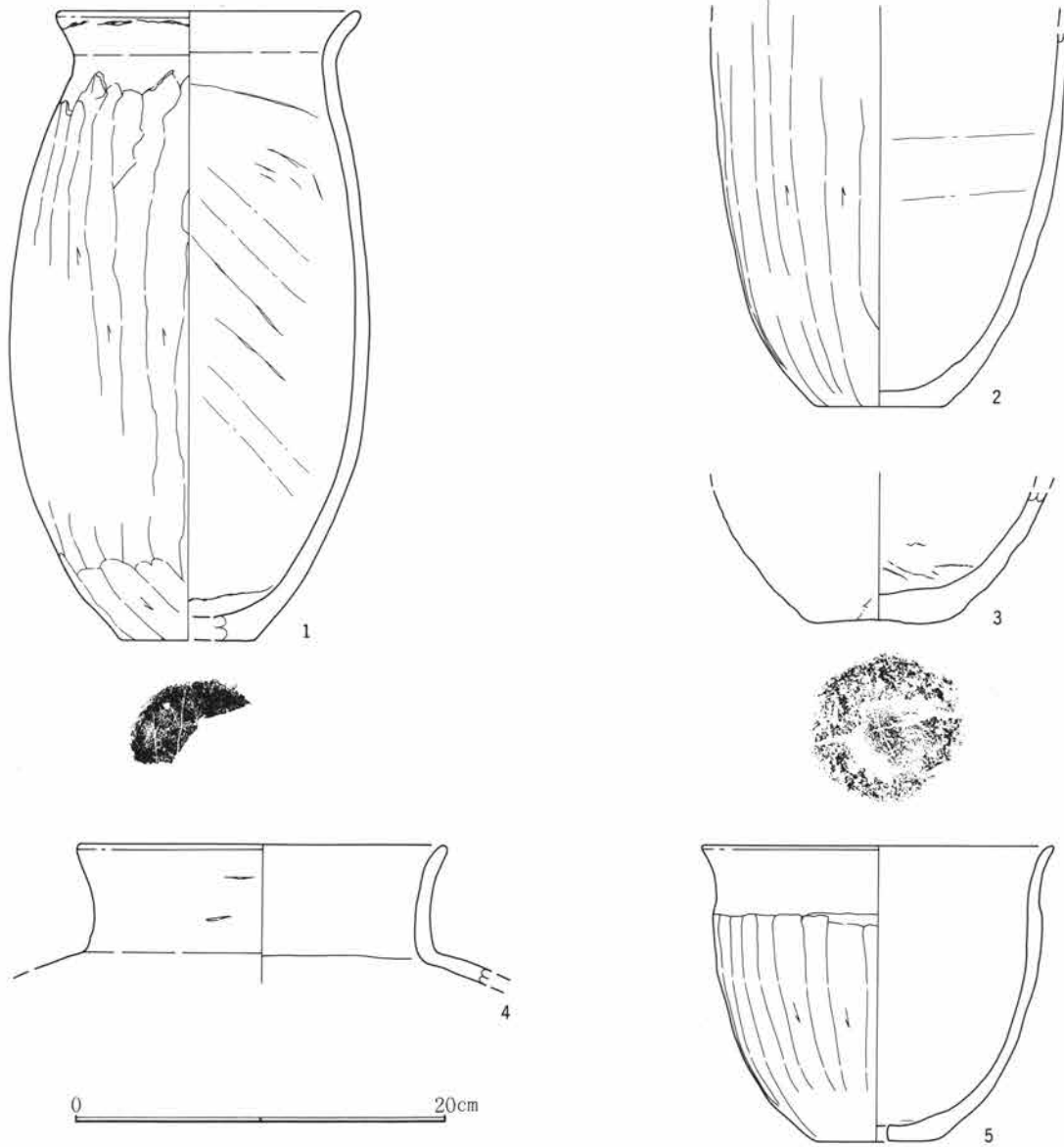


旧北竈

- ①暗褐色土層 多くのロームブロックと焼土粒を含む。
- ②暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の黒褐色土を含む。
- ③暗赤褐色土層 多くの焼土粒を含む。
- ④黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

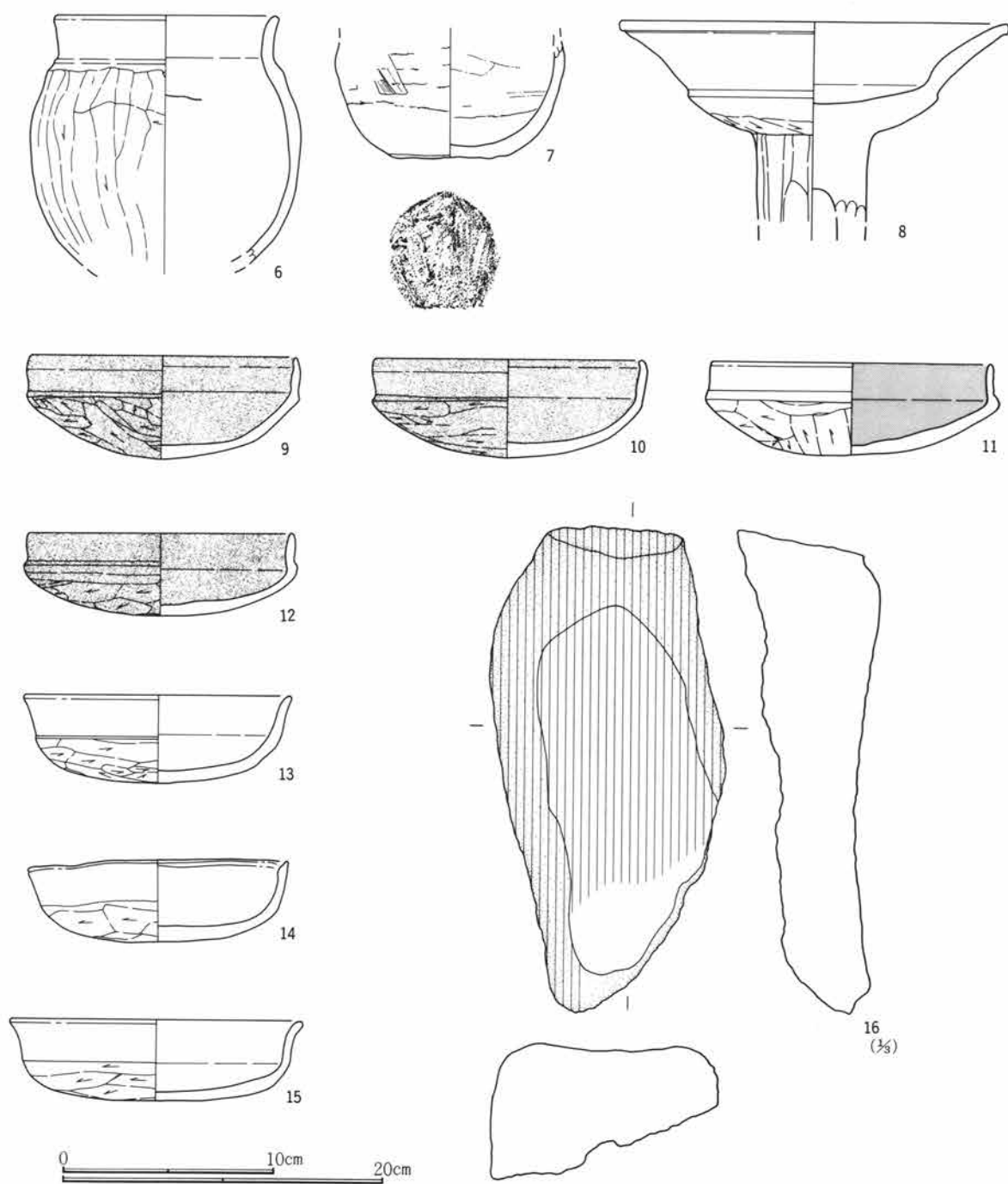


第210図 524号住居跡旧北竈実測図



第211図 524号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第212図 524号住居跡出土遺物実測図(2)

524号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
211-1 63	土師器 甕	旧東竈+4 床面+8 %残存	口 16.0 高 34.0 底 (7.1)	①粗、3~6mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③上%橙色下%黒褐色内面橙色	底面木葉痕。胴外面強いヘラ削り。頸部~口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
211-2 63	土師器 甕	床面直上 %残存	口 - 高 - 底 7.0	①粗、1~2mmの砂粒多く3~5mmの長石と片岩粒少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面ナデ、凹凸が多い。胴外面ヘラ削り。削りは浅く器表面が粗れているため削りの単位不明瞭。内面ナデで器表面密。

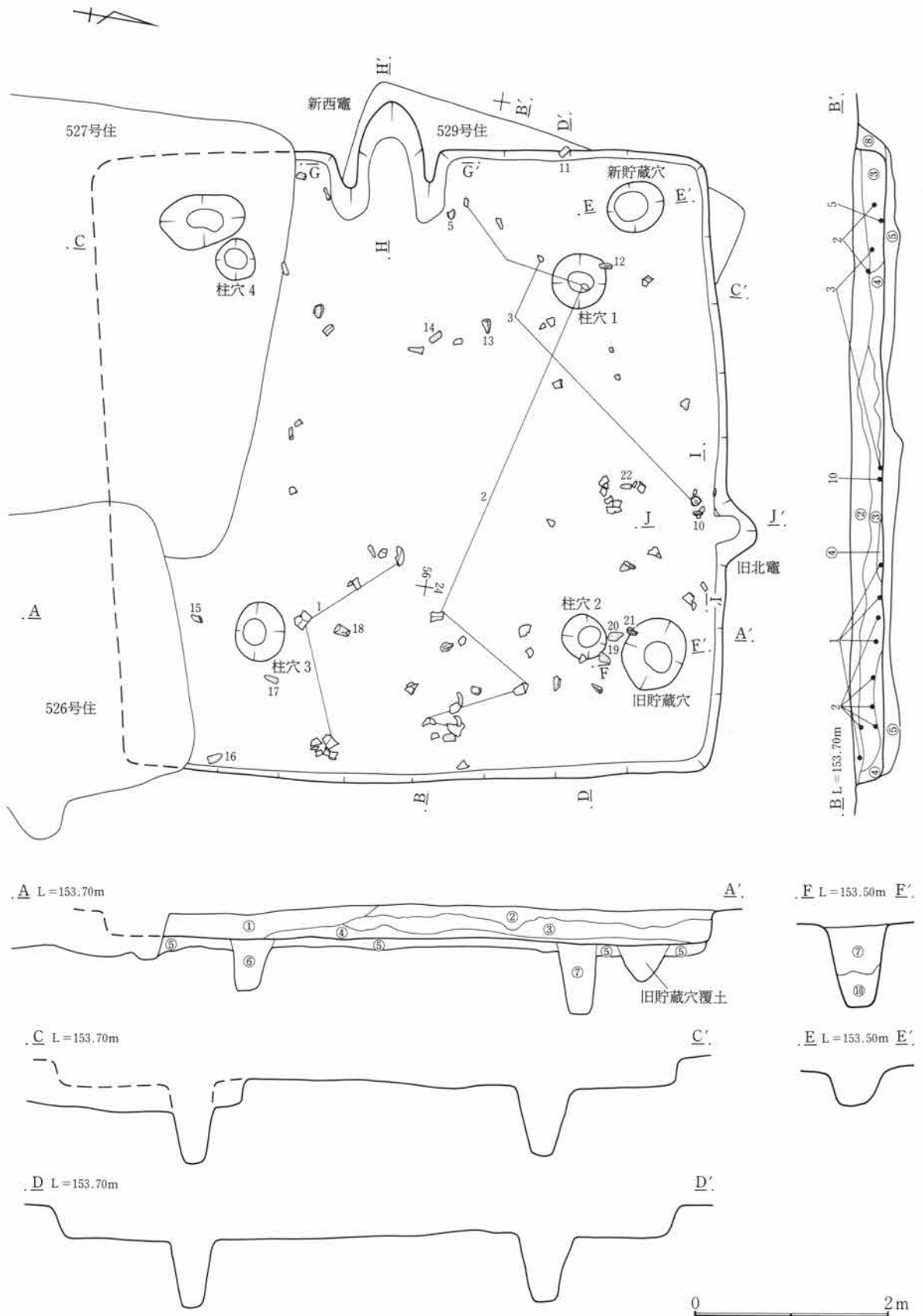
挿図番号 図版番号	土器種別 器	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
211-3 63	土器 甕	新北竈+7 胴下半～ 底部完形	口 — 高 — 底 7.6	①粗、5～8mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	底面～胴外面に焼けた土が多く付着している。底面木葉痕。内 面ナデ。
211-4	土器 壺	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(19.8) 高 — 底 —	①粗、3～5mmの長石と片岩粒 を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	口縁部横ナデ。
211-5 63	土器 小型甕	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 19.0 高 14.9 底 (6.4)	①粗、3～5mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。削りは深くヘラの単位明瞭。 口縁部横ナデ。内面ナデ。
212-6	土器 小型甕	床面直上 口縁部破片 胴部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.5) 高 — 底 —	①粗、2～4mmの長石粒と片岩 粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明黄褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。胴部外面は多くの 砂粒が移動し粗い。
212-7 63	土器 小型甕	床面直上 胴下半 $\frac{1}{2}$ 底部完形	口 — 高 — 底 6.2	①粗、3～5mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄橙色	底面ヘラ削り。胴部に多くの輪積痕が残る。わずかにヘラ削り。 内面ナデで器表面密。
212-8 63	土器 高坏	床面直上 坏部 $\frac{1}{2}$ 残存	口(18.0) 高 — 底 —	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラ削り、ヘラナデ。坏底部ヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデ。
212-9 63	土器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.3 高 4.7 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色 断面にふい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部上端が内傾す る。10の坏に近い。
212-10 63	土器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.5 高 4.5 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③表面黒褐色 断面にふい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。口縁部上端が内傾す る。9の坏に近い。
212-11 63	土器 坏	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.8 高 4.2 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・ 断面黄褐色・外面にふい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。9・10の坏と異なり、口縁上端 は内傾しない。内面は吸炭により黒色を呈する。
212-12 63	土器 坏	床面+4 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.4) 高 3.8 底 丸底	①密、赤色粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭である。
212-13 63	土器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.4 高 4.0 底 丸底	①密、赤色粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面細いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は底い。 14・15の坏に似ている。
212-14 63	土器 坏	ピット-5 $\frac{1}{2}$ 残存	口 12.0 高 3.2 底 丸底	①密、赤色粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底部周辺ヘラ削り。中央部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。口 唇部内側に一条の沈線あり。13・15の坏に似ている。
212-15 63	土器 坏	床面+7 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.4) 高 3.8 底 丸底	①密、赤色粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は明瞭でない。 13・14の坏に似ている。
212-16 72	石製品 砥石	竈内-7	長 — 幅 10.5 厚 6.3 重 1,400		平面の1箇所を砥石として使用。破損後、竈の支脚として使用 されたものと思われる。表面に火を受け赤色を帯びている。

528号住居跡 (第213～217図、図版32・33・63・64・76)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、56・57-24グリッドに位置する。

概要 4軒が重複する住居の中の一軒であり、最も大きい住居である。南西部分を奈良時代の527号住居により、南東部分を平安時代の526号住居によりそれぞれ床下部分まで掘り取られている。そのため南側の住居範囲は確認できなかった。また北西部分に位置する529号住居の大部分を本住居が床下部分まで掘り込んでおり、覆土中に新竈も築いている。そのため529号住居は殆ど残っていない。このような切り合い関係から新旧関係は529→528→527→526号住居となる。

竈は北壁と西壁に築かれており、北竈は床面上の袖部や燃焼部の取り除かれた旧竈であり、壁面を掘り込んで煙道部が残っていた。西竈は古墳時代の529号住居の覆土中に造られ、両袖や燃焼部も床面上に残っており新竈である。



第213図 528号住居跡実測図

(528号住居跡)

- | | | | |
|---------|--------------------------|-----------|--------------------------|
| ①暗褐色土層 | 多くの白色軽石粒と少量のローム小ブロックを含む。 | ⑥暗褐色土層 | 少量のロームブロックを含む。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム小ブロックと白色軽石粒を含む。 | ⑦暗黄褐色土層 | 多くのローム小ブロックを含む。 |
| ③暗褐色土層 | 多くのロームブロックと少量の焼土粒を含む。 | ⑧529号住居覆土 | |
| ④暗黄褐色土層 | 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒と炭を含む。 | ⑨暗褐色土層 | 多くのローム小ブロックと少量の焼土粒・灰を含む。 |
| ⑤黄褐色土層 | 地山のロームを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑩暗褐色土層 | 多くのローム粒とロームブロックを含む。 |

構造 床面は地山のロームを主とした土と少量の暗褐色土で造られていた。柱穴は4本確認されたが、床面調査段階において、南側の2柱穴は良好な状態で検出できずに床下調査段階で確認された。貯蔵穴が北西コーナーと北東コーナーに掘られており、それぞれ新西竈と旧北竈に伴うと思われる。また新竈の左側に位置する南西コーナーに、床面からの深さ81cmの貯蔵穴とも思われる掘り込みが認められた。

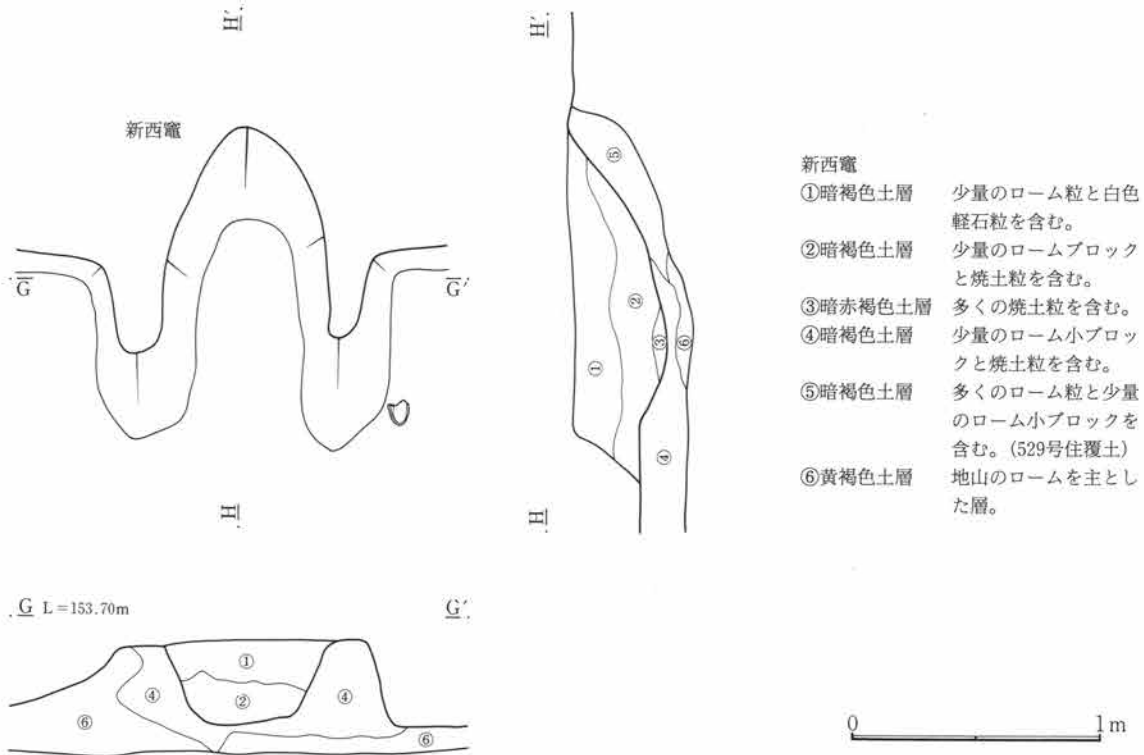
規模 東西6.32m、南北方向不明である。壁高は残りの良い北壁部分で32cmである。柱穴1は径56cm深さ71cm、柱穴2は径46cm深さ65cm、柱穴3は径52cm深さ52cm、柱穴4は径42cm深さ80cmである。新貯蔵穴は径57cm深さ39cm、旧貯蔵穴は径64cm深さ91cmでいずれもほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甕や坏が、また須恵器の高坏も出土している。甕の破片も多く、700片以上出土している。

(新西竈)

概要 住居西壁に造られており、古墳時代の529号住居覆土を掘り込んで煙道部や燃烧部の一部が造られ、袖部分や燃烧部の多くが床面上に造られている。他の住居の覆土を掘り込んで造られる竈の場合、粘土を使う例が多いが、この竈は全く使用されていない。また大量のロームを用いて築いた状態も示していない。焼土粒の出土も少なく、少し異質な竈である。

規模 両袖方向118cm、煙道方向125cmである。



第214図 528号住居跡新西竈実測図

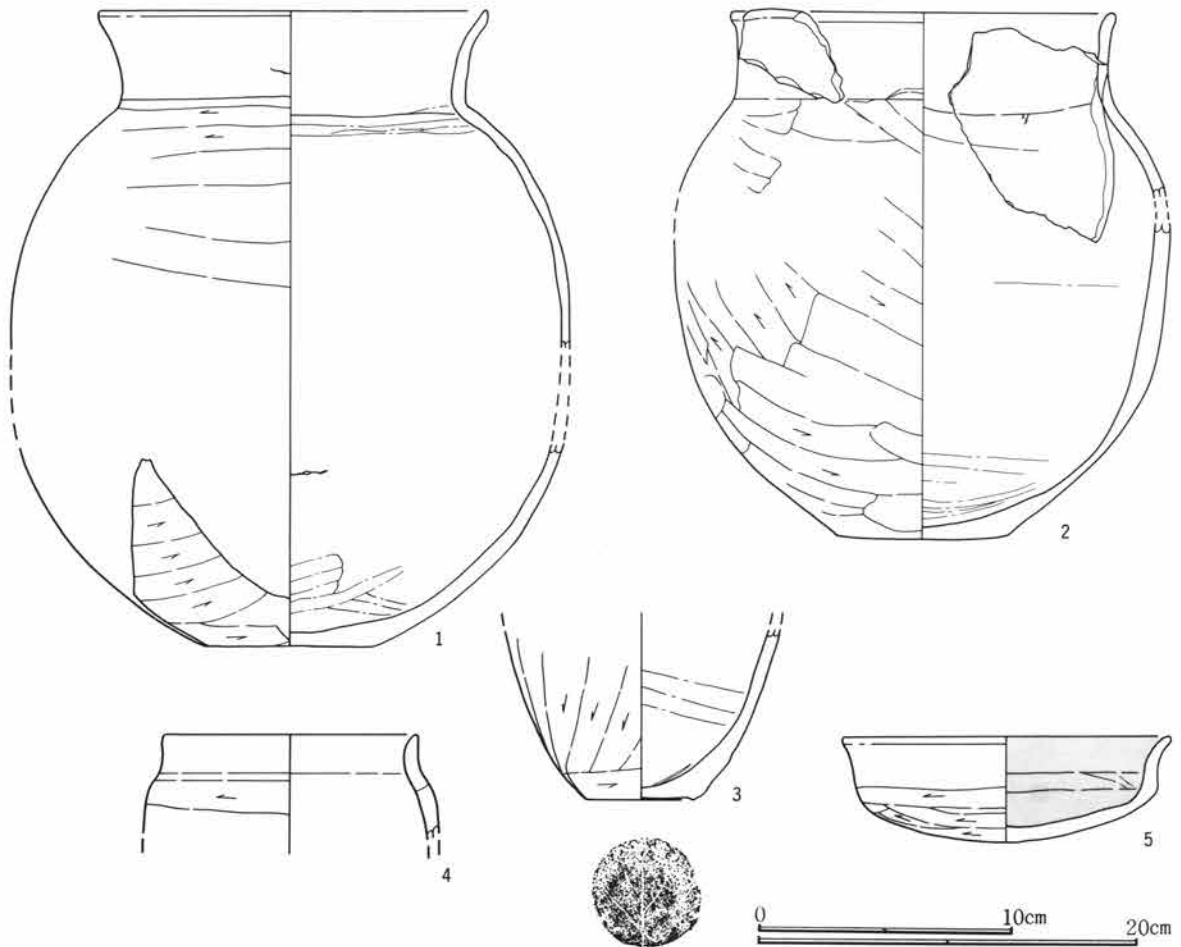
(旧北竈)

概要 住居北壁の東寄りに造られている。壁面を掘り込んだ煙道部以外の床面上に位置する燃烧部や袖部は

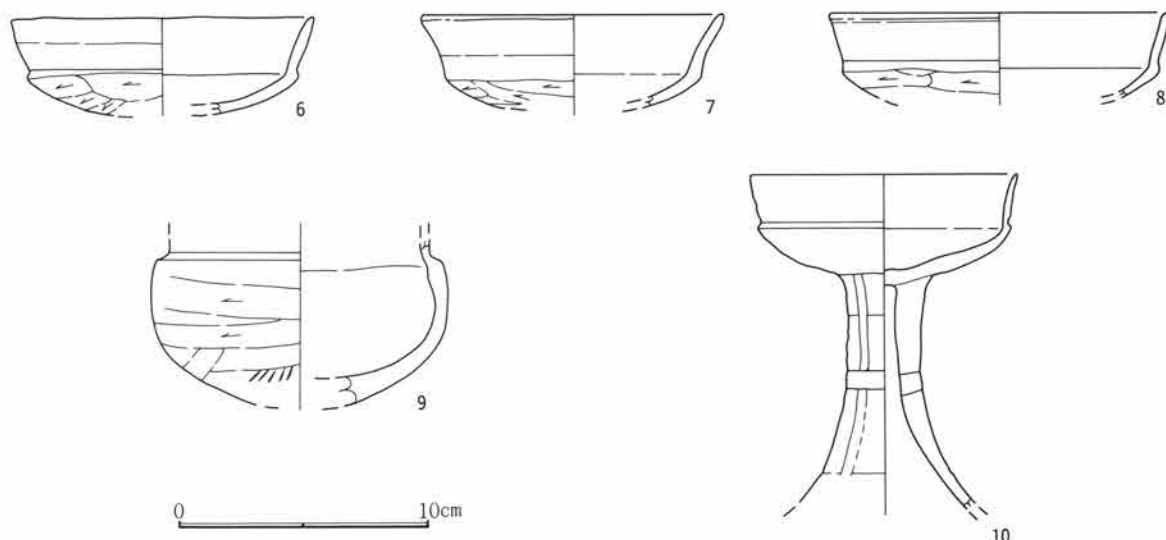
すべて取り除かれていた。壁面に残る煙道部に焼土粒が残されていたが、床面上に位置する燃烧部周辺からの焼土粒の出土は僅かであった。



第215図 528号住居跡旧北竈実測図



第216図 528号住居跡出土遺物実測図(1)



第217図 528号住居跡出土遺物実測図(2)

525号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
216-1 63	土器 壺	床面+4 口~胴上% 胴~底%	口(20.6) 高(33.5) 底 8.8	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴外面ヘラ削り。砂粒の移動が少なく器表面密。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
216-2 64	土器 壺	床面+4 口~胴破片 胴下~底完	口(20.2) 高(27.8) 底 9.0	①粗、2~3mmの長石粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴外面ヘラ削り。砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。口縁部は小さな2個の破片から復元。
216-3 64	土器 甕	旧北竈直上 床面+11 底部完形	口 - 高 - 底 5.8	①粗、1~2mmの砂粒多く含む ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し粗い。内面ナデで器表面密であるが砂粒は目立つ。
216-4	土器 小型甕 破片	覆土 破片	口(13.5) 高 - 底 -	①粗、2~3mmの砂粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒褐色・外面橙色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。8~10mmの大きな片岩粒を含む。
216-5 63	土器 坏	新西竈直上 %残存	口 13.0 高 4.1 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面にぶい黄橙色	底面ヘラ削り。削りの単位は不明瞭。口縁部横ナデ。内部底面ヘラ磨き後吸炭。内面の黒色は吸炭による。炭素の吸着は断面深くまで及ぶ。
217-6	土器 坏	覆土 %残存	口(12.0) 高 - 底 -	①きわめて密、粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。色調が安定し黒斑は全くなし。
217-7	土器 坏	覆土 %残存	口(12.0) 高 - 底 -	①密、赤色粒を多く含み、粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。色調が安定し黒斑は全くなし。
217-8	土器 坏	覆土 %残存	口(13.6) 高 - 底 -	①密、赤色粒を多く含み、粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。稜は高く明瞭である。色調が安定し黒斑は全くなし。
217-9	土器 坏	覆土 %残存	口 - 高 - 底 -	①密、赤色粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。内面ナデ。器表面は内外面とも密。
217-10 63	須恵器 高坏	旧北竈直上 坏部%残存 脚部%残存	口 10.5 高 - 底 -	①密、砂粒含まず。 ②還元焰、硬質 ③表面灰色・断面にぶい赤褐色	長脚2段透しの無蓋高坏である。透しは3方向である。脚部内面にしぼり目なし。ロクロは右回転。
11 76	こも編み 石	床面+9	長 13.8 幅 8.2 厚 3.5 重 500		点紋絹雲母緑泥石墨片岩。両側面が凸状を呈し、側面中央部が幅広い。
12 76	こも編み 石	床面直上	長 14.7 幅 6.7 厚 3.5 重 500		緑簾緑泥石片岩。片側の側面中央部が凹状を呈する。
13 76	こも編み 石	床面+6	長 14.9 幅 5.5 厚 4.2 重 550		点紋緑泥石片岩。断面菱形を呈する。側面中央部に小さな複数の凹状部を持つ。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
			長	幅	重		
14 76	こも編み 石	床面直上	長 14.5 厚 4.3	幅 7.7	重 600		絹雲母緑泥片岩。やや不均衡な石である。側面中央部が凹状を呈する。
15 76	こも編み 石	床面+9	長 15.2 厚 4.5	幅 5.5	重 420		絹雲母石墨片岩。細い石である。断面やや菱形を呈する。
16 76	こも編み 石	床面直上	長 14.0 厚 4.2	幅 6.0	重 680		点紋緑泥片岩。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。一部に火を受けている。
17 76	こも編み 石	床面直上	長 14.4 厚 4.0	幅 6.8	重 500		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部は凹状を呈し、他の側面は凸状を呈している。
18 76	こも編み 石	床面+6	長 16.0 厚 4.8	幅 8.0	重 980		点紋緑泥片岩。両側面中央部わずかに凹状を呈する。全体に火を受けて赤色を帯びている。
19 76	こも編み 石	床面-4	長 13.6 厚 2.2	幅 8.3	重 380		点紋緑泥片岩。偏平で中央部の幅広い石である。片側の側面中央部に打ち欠かれた凹状部あり。
20 76	こも編み 石	床面-7	長 15.4 厚 2.8	幅 7.9	重 400		絹雲母石墨片岩。両側面中央部に小さな複数の凹状部あり。
21 76	こも編み 石	床面-10	長 14.6 厚 3.8	幅 7.0	重 570		緑簾緑泥片岩。両側面中央部に小さな複数の凹状部あり。
22 76	こも編み 石	床面直上	長 14.5 厚 4.6	幅 5.7	重 600		絹雲母石墨緑泥片岩。断面やや三角形を呈し、両側面中央部に小さな複数の凹状部あり。

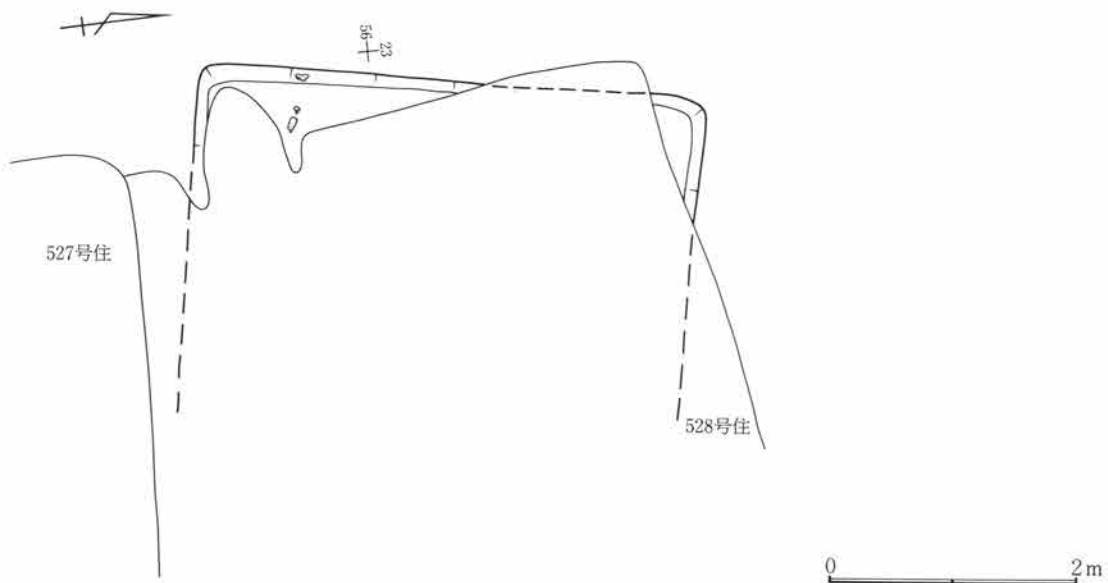
529号住居跡 (第218図、図版33)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、56・57-24グリッドに位置する。

概要 住居の大部分を古墳時代の528号住居により削り取られ、西端部分が僅かに残っていた。528号住居の床面は本住居とほぼ同じであるが、床下部分で本住居より深いため、本住居の規模や竈等についての情報はつかめなかった。土層については、528号住居に記載してある。

住居内より少量の石は出土したが、土器類は全く出土していない。そのため時期は特定できない。しかし本住居を掘り込んでいる古墳時代の528号住居より古いことは明らかであり、また528号住居中から出土する遺物はすべて古墳時代に属するものであることや、当遺跡では古墳時代以前の住居は縄文時代であること等の状況から、本住居を古墳時代のものと考え取り扱った。

規模 東西不明、南北4.05mである。壁高は32cmである。



第218図 529号住居跡実測図

533号住居跡 (第219・220図、図版33・64)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、59-20グリッドに位置する。

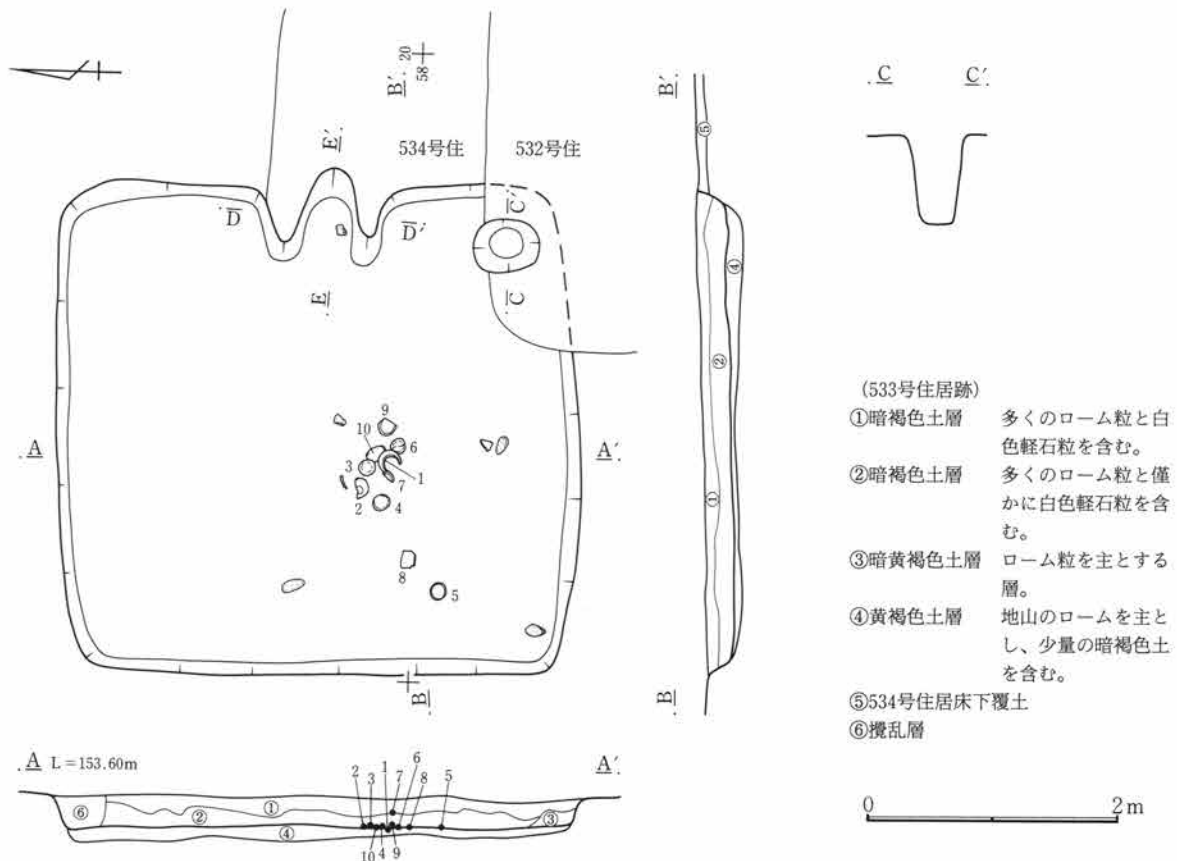
概要 3軒重複中の1軒である。南東部分の竈部分を含む覆土上面を平安時代の534号住居により削られている。しかし534号住居の床面が本住居跡より20cm近く高いため、竈や壁面の多くは残っていた。また南東コーナーを平安時代の532号住居と重複しており、この住居により534号住居と本住居の壁面と床面が削り取られている。そのため本住居の南東コーナー部分の壁面と床面は残っていなかった。

構造 床面はロームブロックと黒褐色土が混入した土で造られていた。柱穴は掘られていなかった。貯蔵穴は床面調査段階では確認されなかったが、床下調査により532号住居と重複している南東コーナーに掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西3.87m、南北4.18mである。壁高は残りの良い北壁部分で25cmである。貯蔵穴は径43cm深さ65cmでほぼ円形を呈する。

遺物 床面中央部付近より、まとめて土師器の甕や坏が多く出土した。

床下 床下土坑より小穴が7個掘られていたが、柱穴と思える小穴や床下土坑等は掘られていなかった。



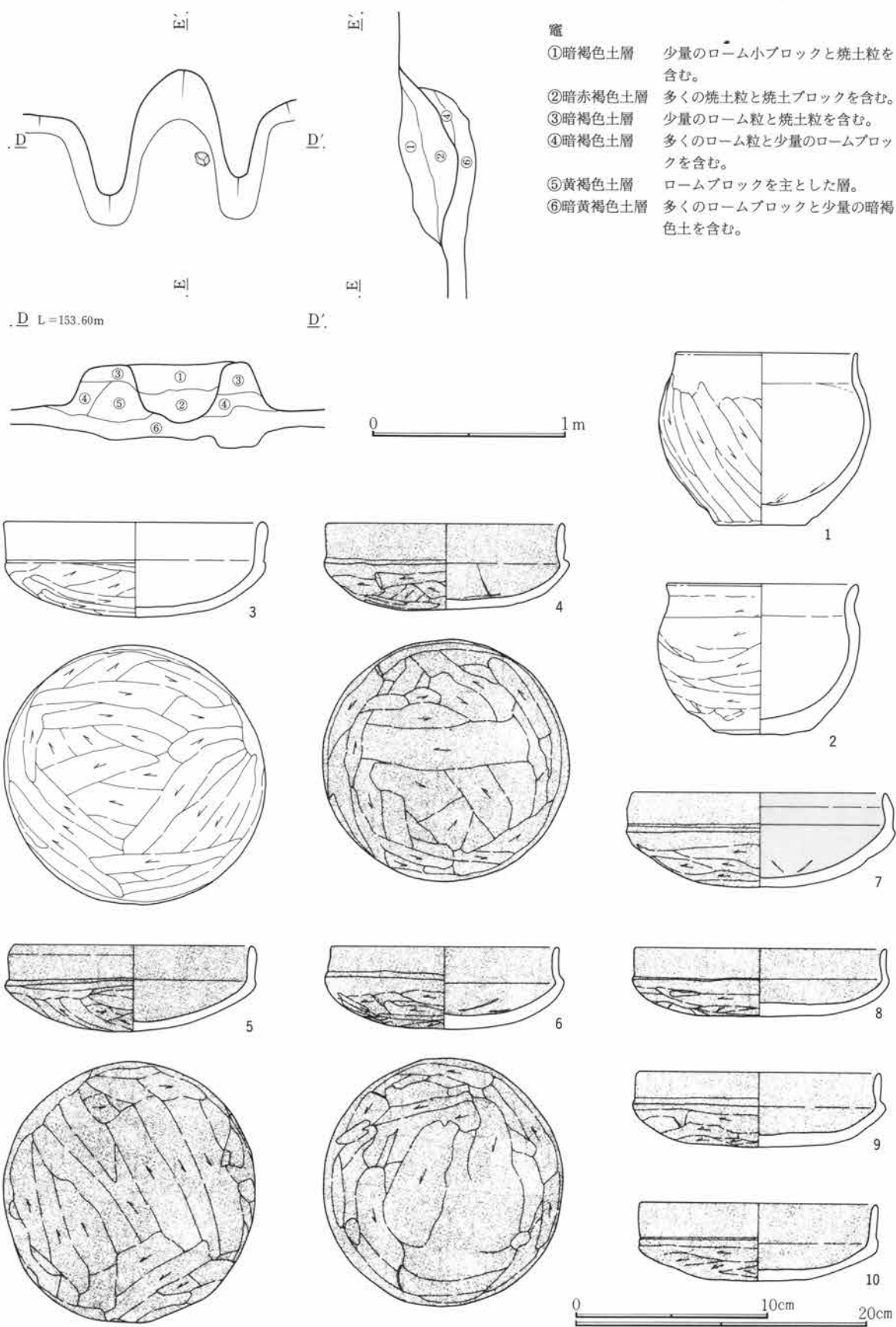
第219図 533号住居跡実測図

(竈)

概要 534号住居と重複している東壁部分に造られている。袖部分や燃烧部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃烧部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。燃烧部より小さな石が1個出土したが、袖石や天井石は出土しなかった。ロームを主として造られた竈と思われる。

規模 両袖方向98cm、煙道方向81cmである。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第220図 533号住居跡竈・出土遺物実測図

535号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器 種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
220-1 64	土 師 器 小 型 甕	床面直上 ほぼ完形	口 12.4 高 11.8 底 6.3	①密、1mm前後の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ナデと弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデで器表面密。底部が厚い。少しゆがんでいる。
220-2 64	土 師 器 小 型 甕	床面直上 %残存	口 13.0 高 10.3 底 6.8	①粗、3～8mmの片岩粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面ナデと弱いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデで器表面密。全体に器表面が粗く雑なつくりである。
220-3 64	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.5 高 4.8 底 丸底	①やや粗、1mm前後の長石粒を 少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 稜はほとんどなく、底部と口縁部の境に一条の沈線あり。
220-4 64	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.2 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒 を少量含む。 ②酸化焰・硬質 ③橙色、一部黒色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 内面と口縁部外側は黒漆か。
220-5 64	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 12.4 高 4.4 底 丸底	①密、砂粒はほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデにより器表 面密。稜は高く明瞭である。内面は黒漆か。
220-6 64	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 11.8 高 4.2 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・ 底面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 稜は明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
220-7 64	土 師 器 坏	床面+13 %残存	口(13.0) 高 4.8 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒色・ 外面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。口縁部内 側にわずかな稜を持つ。内面の黒色は吸炭による。
220-8 64	土 師 器 坏	床面直上 %残存	口(13.0) 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 稜は低いが明瞭である。浅い坏である。
220-9	土 師 器 坏	床面直上 口縁部破片 底部ほぼ完	口(12.4) 高 3.8 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒 を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面黒褐色・断面と外面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 稜は低いが明瞭である。浅い坏である。内面の黒褐色は吸炭に よる。
220-10	土 師 器 坏	床面直上 口縁部破片 底部ほぼ完	口(12.2) 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の小さな赤色粒 を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。稜はなく 一条の沈線で、口縁部と底部を区別している。 内面の黒褐色は吸炭か。

580号住居跡 (第221～223図、図版33・34・64)

位置 本住居跡は、第9次調査区東北部にあり、53-18グリッドに位置する。

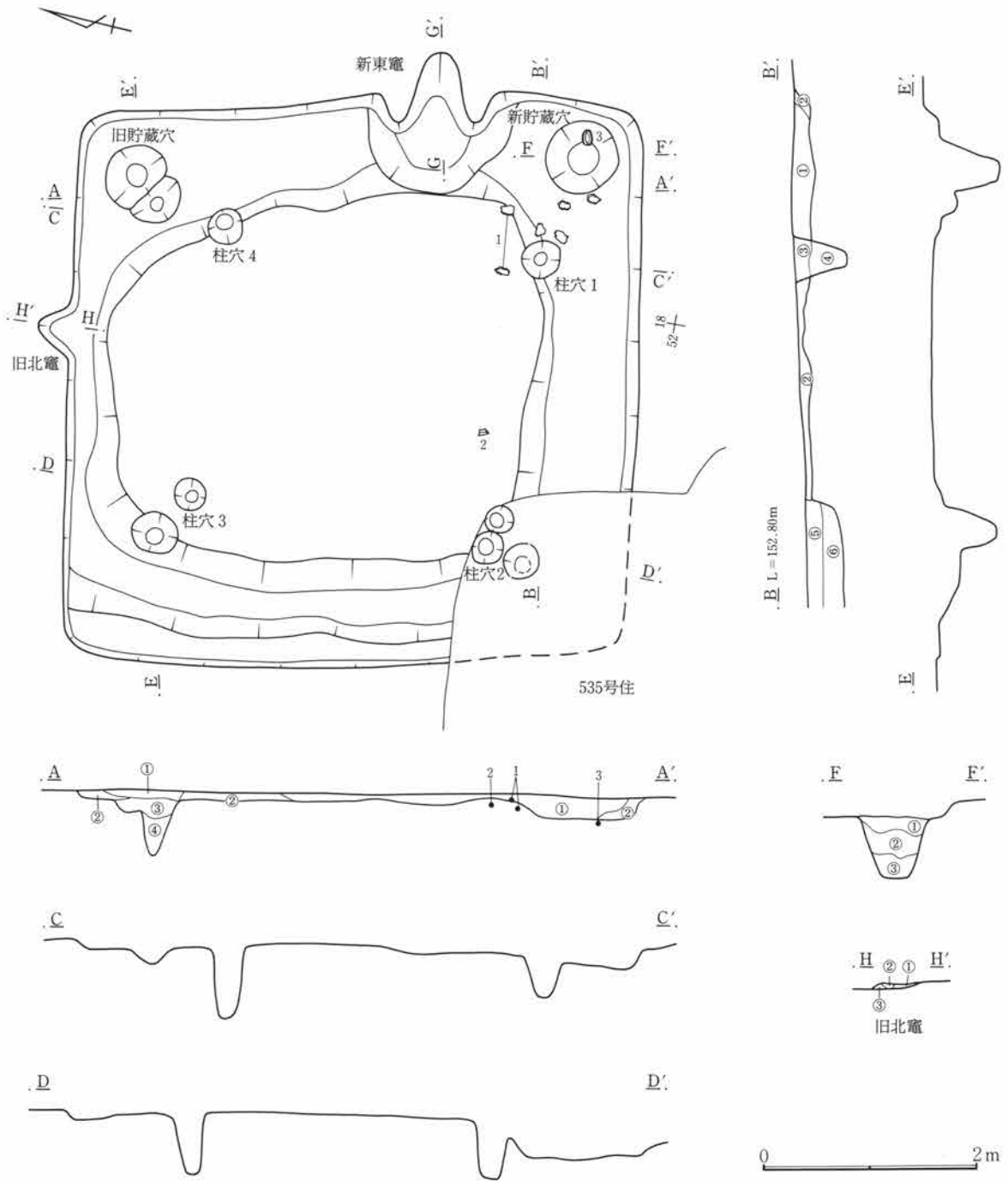
概要 住居は南東部分で平安時代の535号住居と重複しており、535号住居により床下まで深く掘り取られていた。住居の残りが悪く床面の多くは残っていないため、住居平面図は床下平面図を兼ねて作成した。竈は北壁と東壁に築かれており、北竈は床面上の袖部や燃焼部の取り除かれた旧竈であり、壁面を掘り込んでいた煙道部が残っていた。東竈の残りも良好でなかった。

構造 柱穴と思われる掘り込みが8本確認されたが、どの小穴が柱穴になるのか明らかでない。床下中央部を掘り残す他の住居例では、柱穴が掘り残された縁辺部に掘られている例が多いため、その部分の小穴を柱穴として扱った。しかし住居プランと柱穴の配置がずれている。これは柱穴の認定が間違っているためか、あるいは住居の残りが悪い場合住居プランの認定に間違いがあったものと思われるが、いずれとも確認できなかった。貯蔵穴が北東コーナーと南東コーナーに掘られており、それぞれ新東竈と旧北竈に伴うと思われる。

規模 東西5.25m、南北5.30mである。壁高は北壁部分で3cmである。柱穴1は径32cm深さ52cm、柱穴2は径30cm深さ68cm、柱穴3は径30cm深さ65cm、柱穴4は径30cm深さ72cmである。新貯蔵穴は径66cm深さ77cm、旧貯蔵穴は径60cm深さ68cmでいずれもほぼ円形を呈する。

遺物 土師器の甕と坏が出土しているが、破片を含めて出土量は少ない。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



- (580号住居跡)
- ①暗褐色土層 2～3mmの軽石粒を多く、焼土粒を少量含む。
 - ②黄褐色土層 多量のローム小ブロックと暗褐色土の混入層。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒・ローム小ブロックと少量の炭化物を含む。
 - ④黄褐色土層 ローム粒とローム小ブロックを主とした層。
 - ⑤535号住居覆土
 - ⑥535号住居床下覆土

- 新貯蔵穴
- ①茶褐色土層 茶褐色土中に多くのローム粒を含む軟質土。
 - ②茶褐色土層 5～10mmのロームブロックを多く含む。
 - ③黄褐色土層 ローム粒とロームブロックを主とした層。
- 旧北竈
- ①明褐色土層 少量の焼土粒を含む。
 - ②暗褐色土層 多くのローム粒と少量の軽石粒を含む。
 - ③暗褐色土層 多くのローム粒を含む粘性の強い層。

第221図 580号住居跡・旧北竈実測図

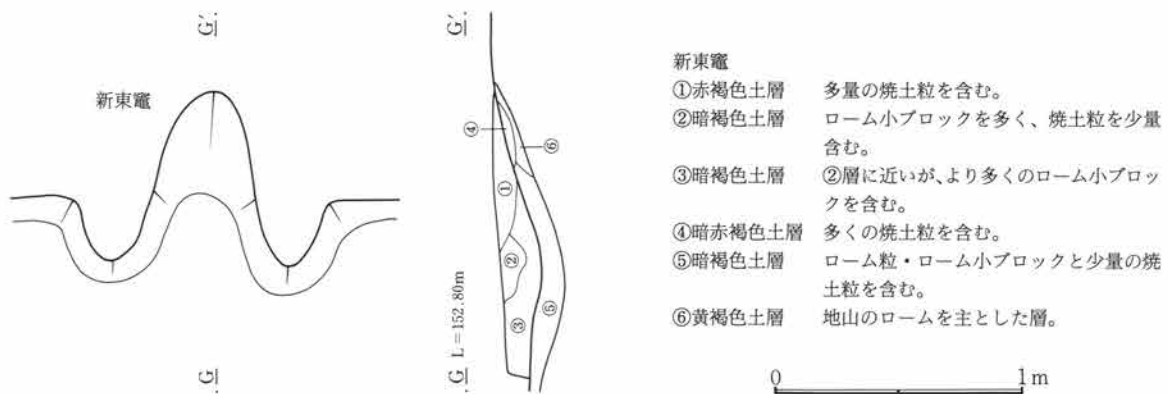
(新東竈)

概要 住居東壁に造られており、壁面を掘り込んで煙道部や燃焼部の一部が造られ、袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られていた。残りが悪く、良好な袖や遺物の出土はなかった。また竈内より石も出土していない。煙道部付近に多くの焼土粒が確認された。

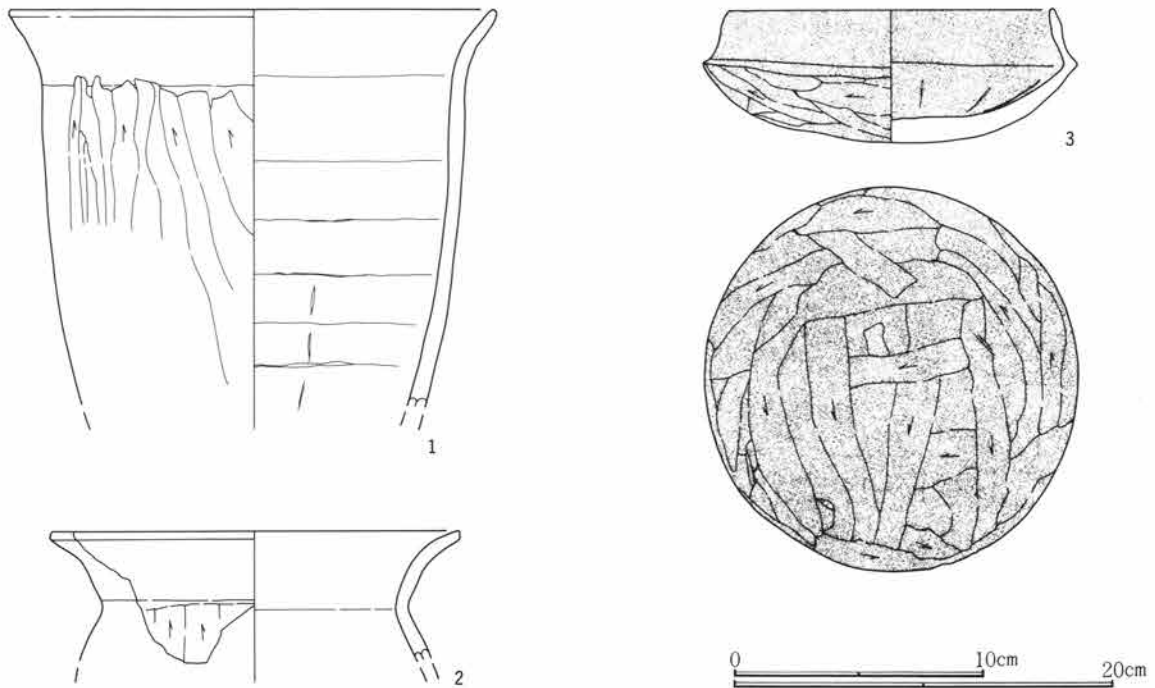
規模 両袖方向82cm、煙道方向100cmである。

(旧北竈)

概要 住居北壁の東寄りに造られている。壁面を掘り込んだ煙道部以外の床面上に位置する燃焼部や袖部はすべて取り除かれていた。壁面に残る煙道部に焼土粒が残されていたが、床面上に位置する燃焼部周辺からの焼土粒の出土は認められなかった。



第222図 580号住居跡新東竈実測図



第223図 580号住居跡出土遺物実測図

580号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
223-1 64	土師器 甌	床面-13 1/2残存	口(25.8) 高— 底—	①粗、1~2mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。砂粒の移動は少ない。口縁部横ナデ。 内面ナデ。内面に輪積痕が残る。
223-2	土師器 甌	床面-9 破片	口(21.8) 高— 底—	①粗、1~2mmの砂粒を多く含 む。②酸化焰、硬質 ③橙色	胴部ヘラ削り。口縁部横ナデ。口唇部はほぼ平に削られている。 内面ナデで器表面密。口縁部の小さな破片である。
223-3 64	土師器 坏	新貯蔵穴内 -27 完形	口12.8 高5.3 底丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。削りの単位は明瞭。口縁部横ナデ。内面横ナデ。 内側底面上に放射状のヘラの工具痕9箇所あり。 稜は高く明瞭である。

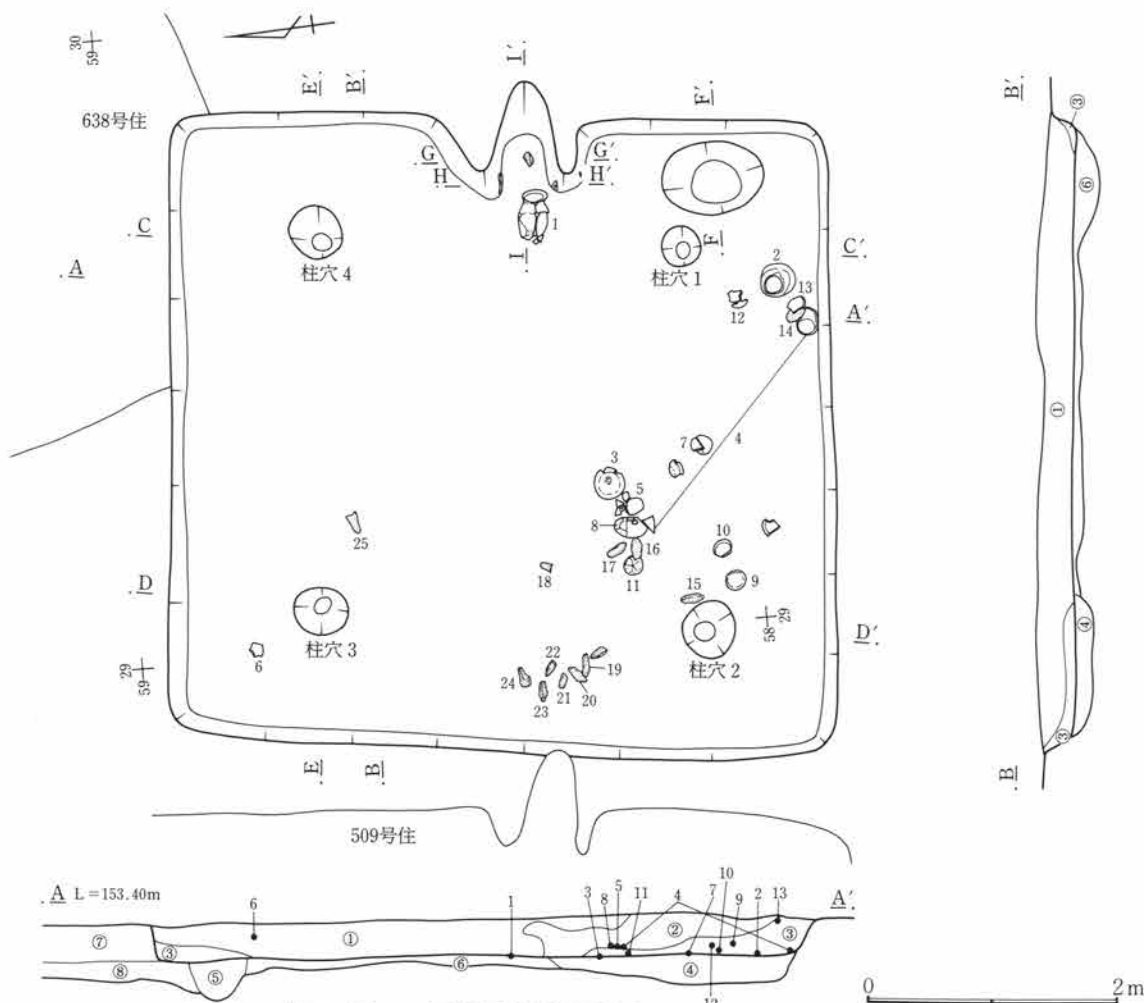
637号住居跡(第224~228図、図版34・64・65・76)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、59-30グリッドに位置する。

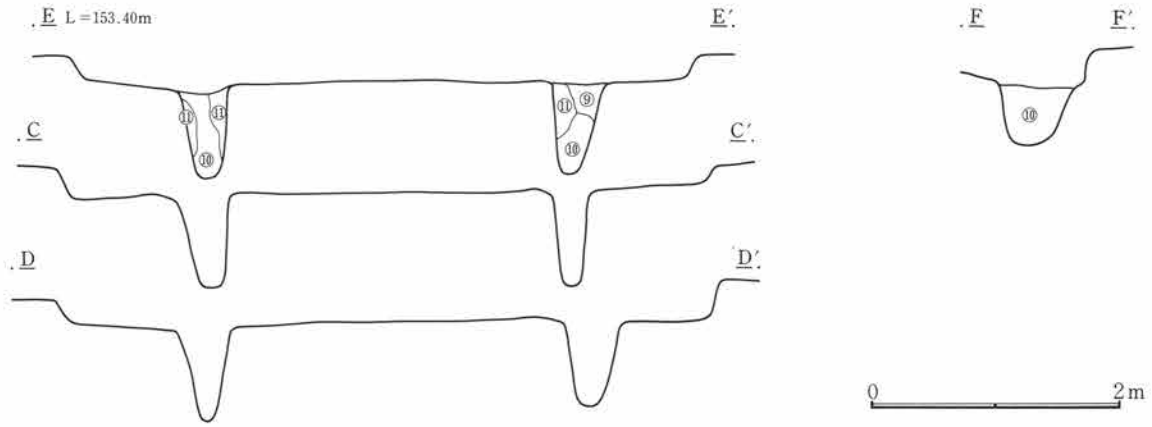
概要 3軒重複の住居である。本住居は北東部分で古墳時代中期の638号住居の南西部分を掘り込んでいる。また西壁中央部付近で古墳時代の509号住居の竈により、壁面と覆土の一部が掘り込まれており、本住居の床面上覆土から焼土粒が検出された。新旧関係は638→637→509号住居である。

構造 床面はロームブロックを主とし、少量の黒褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、竈が東壁のほぼ中央部に造られ、竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西5.02m、南北5.28mである。壁高は残りの良い南壁部分で38cmである。柱穴1は径32cm深さ70cm、



第224図 637号住居跡実測図(1)



(637号住居跡)

- | | |
|--------------------------------------|-------------------------------|
| ①黒褐色土層 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。 | ⑥褐色土層 ロームブロックを主とし、少量の黒褐色土を含む。 |
| ②黒褐色土層 ①層に近いが、より多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑦638号住居覆土 |
| ③黒褐色土層 ①層に近いが、白色軽石粒を殆ど含まず。 | ⑧638号住居床下覆土 |
| ④茶褐色土層 黒褐色土中にローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑨黒褐色土層 黒褐色土を主とし、少量のローム粒を含む。 |
| ⑤暗褐色土層 黒褐色土中にロームブロックを含む。 | ⑩暗褐色土層 多くの黒褐色土と少量のローム粒を含む。 |
| (638号住小穴3覆土) | ⑪褐色土層 ローム粒を主とし、少量の黒褐色土を含む。 |

第225図 637号住居跡実測図(2)

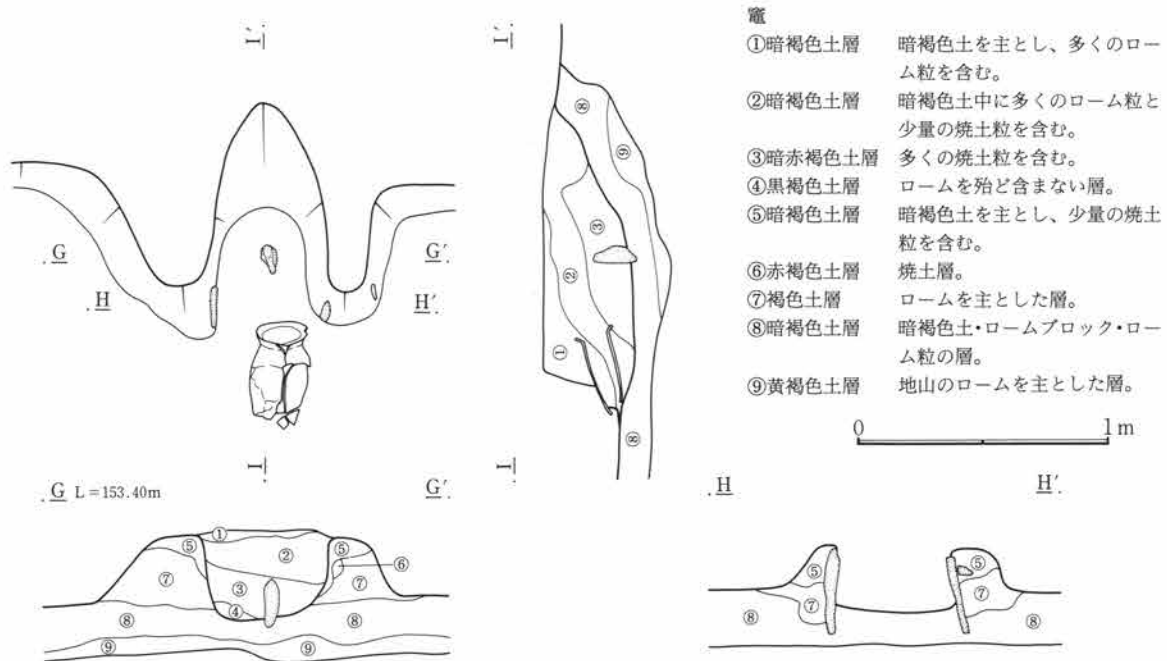
柱穴2 は径44cm深さ65cm、柱穴3 は径44cm深さ77cm、柱穴4 は径44cm深さ73cmである。貯蔵穴は径60cm深さ49cmでほぼ円形を呈する。

遺物 南側の床面上から土師器の甕や坏が多く出土している。

床下 4柱穴の内側に東西150×南北180cm床面からの深さ10cmの床下土坑が掘られていた。

(竈)

概要 住居東壁ほぼ中央部に造られている。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。竈内からは両袖石と支脚石がほぼ使用時の状況で確認された。

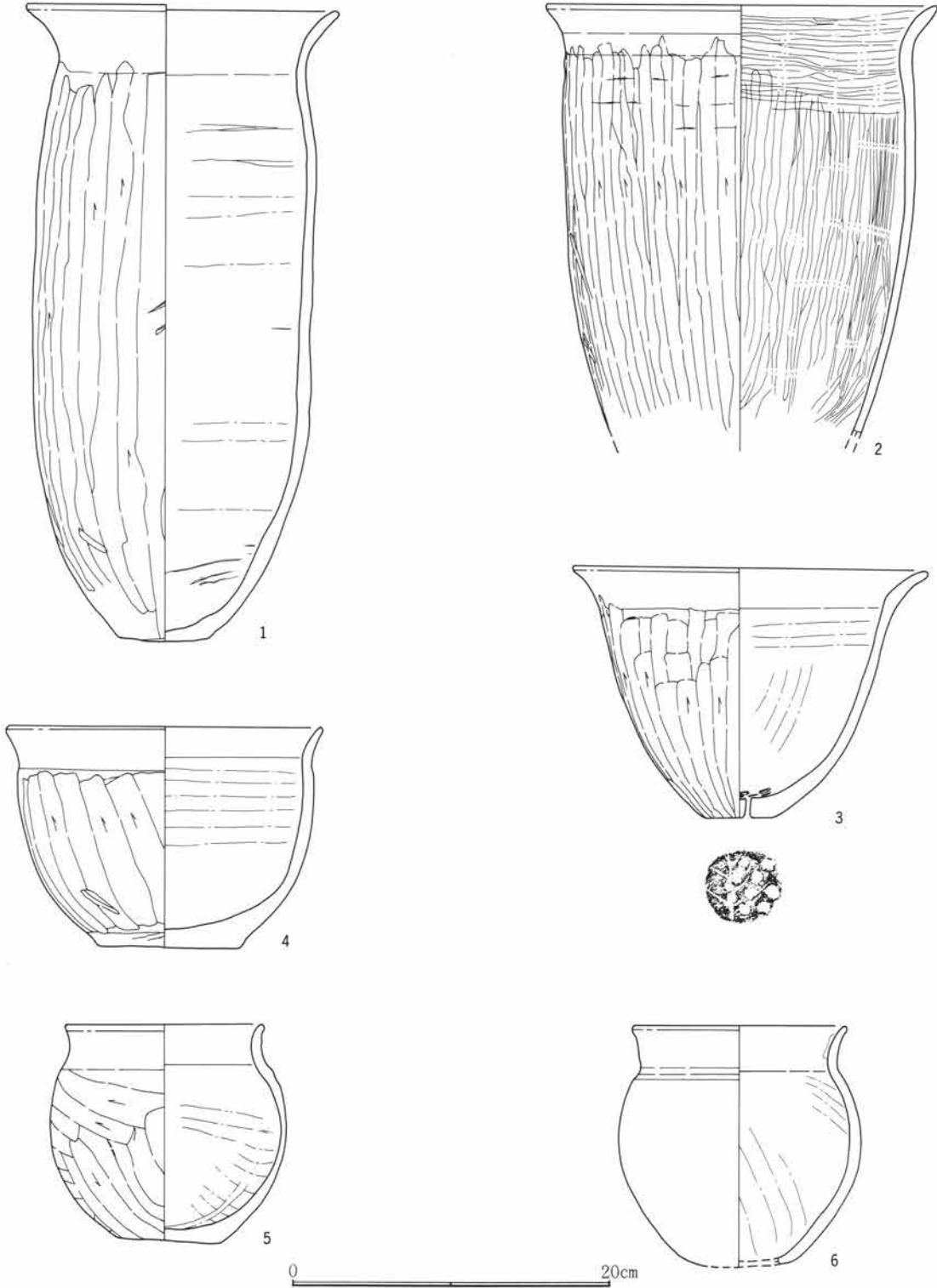


第226図 637号住居跡竈実測図

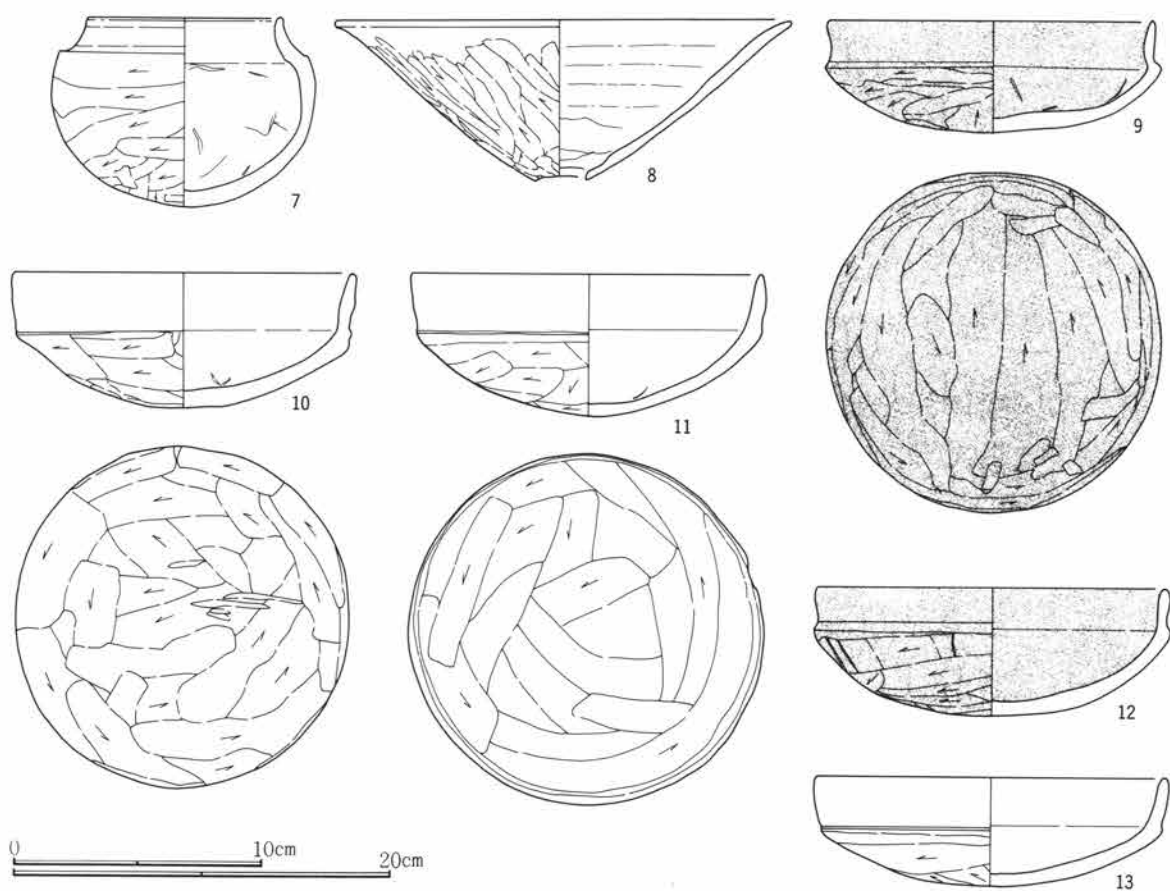
第3章 古墳時代の遺構と遺物

天井石は出土していないが、焚口床面上に長さ40cm弱でほぼ完形の長胴の土師器甕が出土した。この甕は燃焼部から崩れ落ちた状態でなく、焚口床面上に置かれたように出土しているため、燃焼部で使われた甕のほか、天井部に使われていた甕の可能性も考えたい。

規模 両袖方向93cm、煙道方向113cmである。



第227図 637号住居跡出土遺物実測図(1)



第228図 637号住居跡出土遺物実測図(2)

637号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
227-1 64	土器 甕	竈内+4 ほぼ完形	口 19.2 高 39.6 底 5.5	①粗、3~5mmの長石粒と少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒色	底面へら削り。胴外面へら削り。多くの砂粒が目立つ。口縁部ナデ。内面ナデにより器表面密。外側表面の一部に焼けた粘土が付着している。
227-2 64	土器 甕	床面+7 胴下半以外 ほぼ完形	口 24.2 高 — 底 —	①粗、3~5mmの長石粒と少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へらナデ。口縁部横ナデ。内面ほぼ全面磨きで、その部分は光沢を持つ。ていねいなつくりである。
227-3 65	土器 小型甕	床面+5 ほぼ完形	口 21.8 高 15.6 底 4.8	①やや粗、1~3mmの長石粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面木葉痕。胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底面に9個の小穴が穿孔されている。
227-4 65	土器 小型甕	床面+11 口~胴部 底部完形	口(19.6) 高 13.8 底 8.8	①粗、2~6mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へらナデ。胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部の器肉が厚い。
227-5 65	土器 小型甕	床面+12 残存	口 12.4 高 13.3 底 (6.2)	①粗、2~6mmの長石粒を多く片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ナデ。胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
227-6 65	土器 小型甕	床面+18 残存	口(13.4) 高(14.9) 底 (6.0)	①粗、2~4mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胴外面は表面が剝離しているため不明。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。底部の器肉が薄い。
228-7 65	土器 小型壺	床面+6 ほぼ完形	口 10.2 高 9.9 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内面に多くのへらの工具痕あり。
228-8 65	土器 小型甕	床面+12 残存	口 24.0 高 8.4 底 2.8	①密、雲母を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。特異な形の甕である。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
228-9 65	土 師 器 坏	床面+15 完形	口 12.9 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面黒褐色・断面橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。稜は鋭角で高く明瞭である。内面と口縁部外側は黒漆か。
228-10 65	土 師 器 坏	床面+10 完形	口 13.5 高 5.3 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内面にへらの工具痕あり。
228-11 65	土 師 器 坏	床面+6 完形	口 14.0 高 5.6 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
228-12 65	土 師 器 坏	床面+13 %残存	口(14.0) 高 5.1 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒を多く、雲母を含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
228-13 65	土 師 器 坏	床面+32 %残存	口(14.0) 高 4.3 底 丸底	①密、1mm前後の砂粒多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器内の厚さがほぼ一定している。
14 76	こも編み 石	床面+9	長 17.4 幅 7.8 厚 3.7 重 600		安山岩。両側面中央部が凸状を呈し、幅広い。
15 76	こも編み 石	床面+17	長 15.7 幅 5.0 厚 4.5 重 530		緑簾緑泥片岩。断面やや三角形を呈し、側面中央の一部に凹状部が認められる。
16 76	こも編み 石	床面+19	長 15.0 幅 7.2 厚 4.0 重 550		点紋緑泥片岩。中央部が肉厚の石である。片側の側面中央部に打ち欠かれたような凹状部あり。
17 76	こも編み 石	床面+16	長 15.8 幅 7.0 厚 3.8 重 620		点紋緑泥片岩。側面中央部がわずかに凹状を呈する。
18 76	こも編み 石	床面+10	長 14.2 幅 6.0 厚 4.0 重 400		絹雲母石墨片岩。両側面中央部に小さな複数の凹状部を持つ。
19 76	こも編み 石	床面+20	長 16.4 幅 6.3 厚 3.3 重 620		点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部に小さな複数の凹状部を持つ。
20 76	こも編み 石	床面+11	長 17.5 幅 4.9 厚 4.9 重 580		緑簾緑泥片岩。やや不均衡な石である。
21 76	こも編み 石	床面+5	長 12.4 幅 6.7 厚 2.1 重 220		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。側面中央部に打ち欠かれたような凹状部を持つ。
22 76	こも編み 石	床面+11	長 12.8 幅 6.5 厚 4.2 重 470		絹雲母石墨片岩。中央の厚い石である。片側の側面に明瞭な打ち欠かれた凹状部あり。
23 76	こも編み 石	床面+22	長 15.7 幅 6.0 厚 3.5 重 500		緑簾緑泥片岩。細長い石である。両側面とも凹状部は認められない。
24 76	こも編み 石	床面+11	長 15.0 幅 7.7 厚 4.3 重 580		緑簾緑泥片岩。中央部の幅広い石である。両側面中央部にわずかな凹状部を持つ。
25 76	こも編み 石	床面直上	長 15.8 幅 6.3 厚 2.5 重 320		緑簾緑泥片岩。偏平な石である。両側面中央部に小さな複数の凹状部を持つ。

638号住居跡(第229・230図、図版35・65)

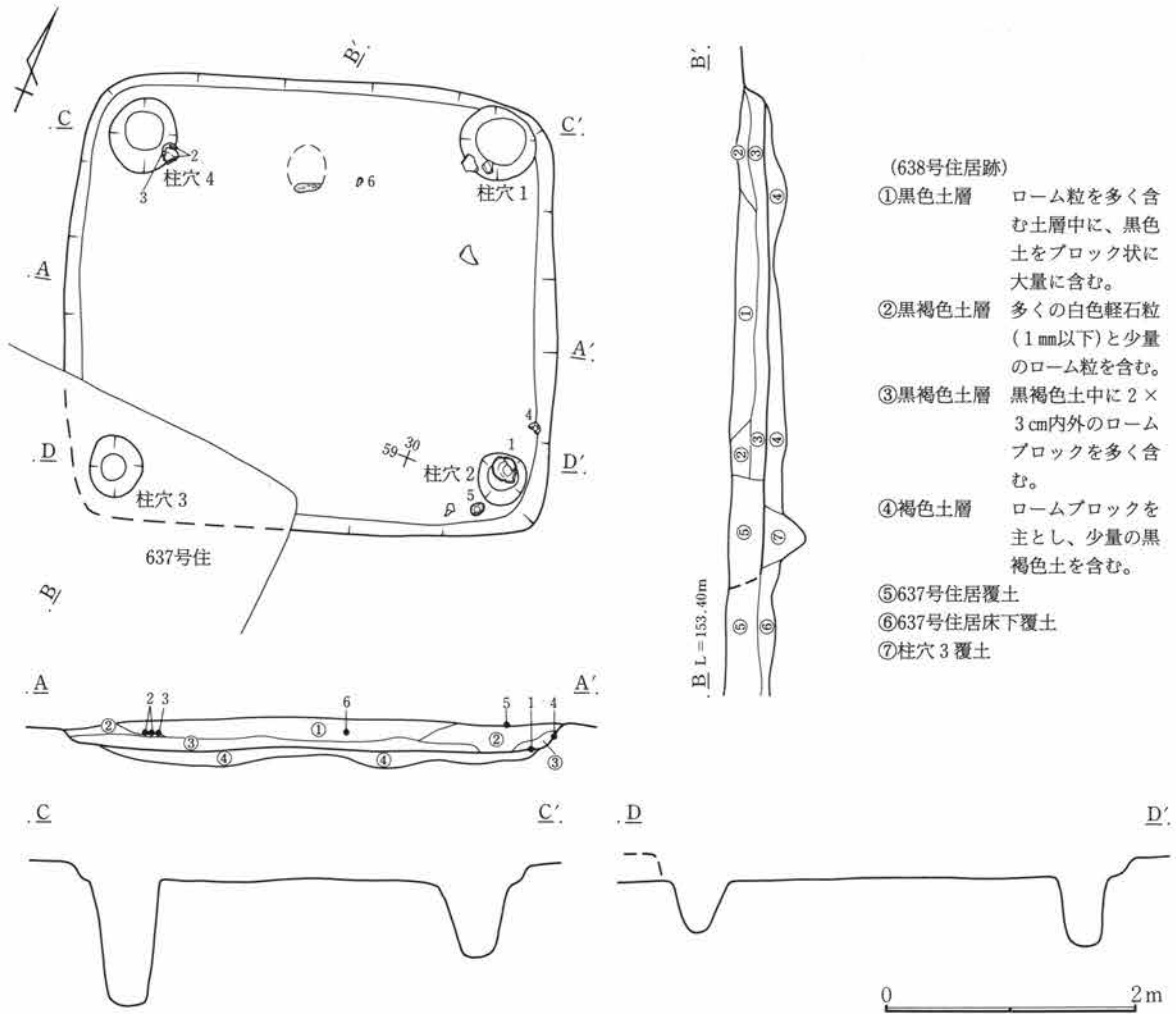
位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、60-30グリッドに位置する。

概要 本住居は南西部分で古墳時代後期の637号住居と重複しており、637号住居により重複部分を掘り取られている。残りが悪く明確な炉は確認できなかったが、床面中央部北側に炉石と思われる石が出土しているため、この位置に炉が造られていた可能性がある。柱穴と思われる掘り込みが床下調査により、四隅の壁面コーナー部分から4本確認された。住居を埋めている覆土は他の古墳時代後期の住居と異なり、褐色の殆ど混入しない黒色であり、極めて異質である。

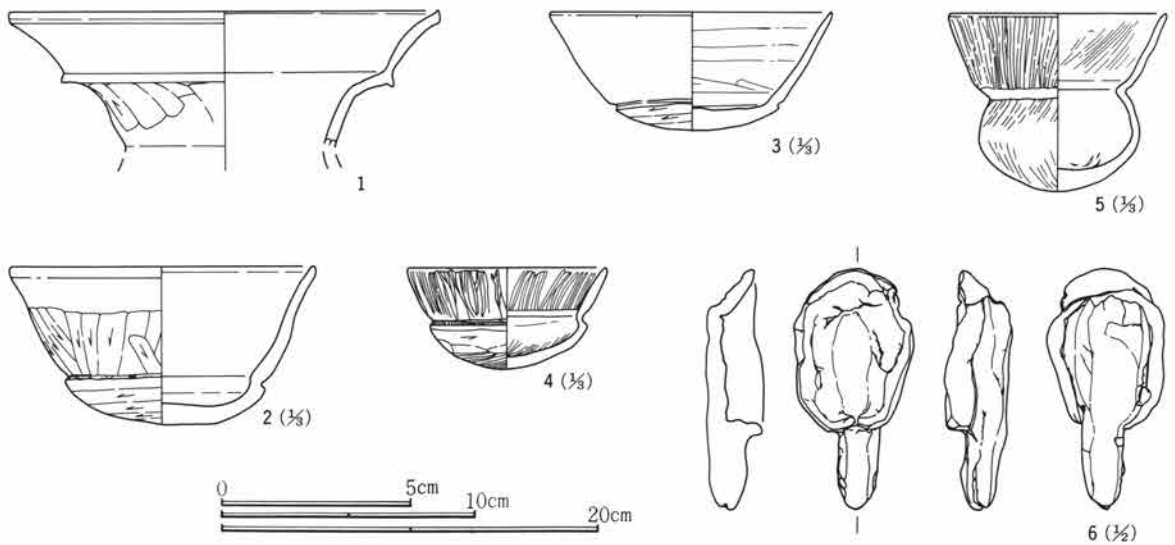
構造 床面はロームブロックを主とし、少量の黒褐色土の混入した土で造られていたが、明確な床面の検出はできなかった。柱穴が4本掘られており、炉の存在が想定される。

規模 東西3.90m、南北3.58mである。壁高は残りの良い西壁部分で21cmである。柱穴1は径62cm深さ63cm、柱穴2は径40cm深さ52cm、柱穴3は径48cm深さ43cm、柱穴4は径58cm深さ100cmである。

遺物 床面や覆土中より二重口縁の壺や柑が、また炉に近接して匙が出土している。



第229図 638号住居跡実測図



第230図 638号住居跡出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

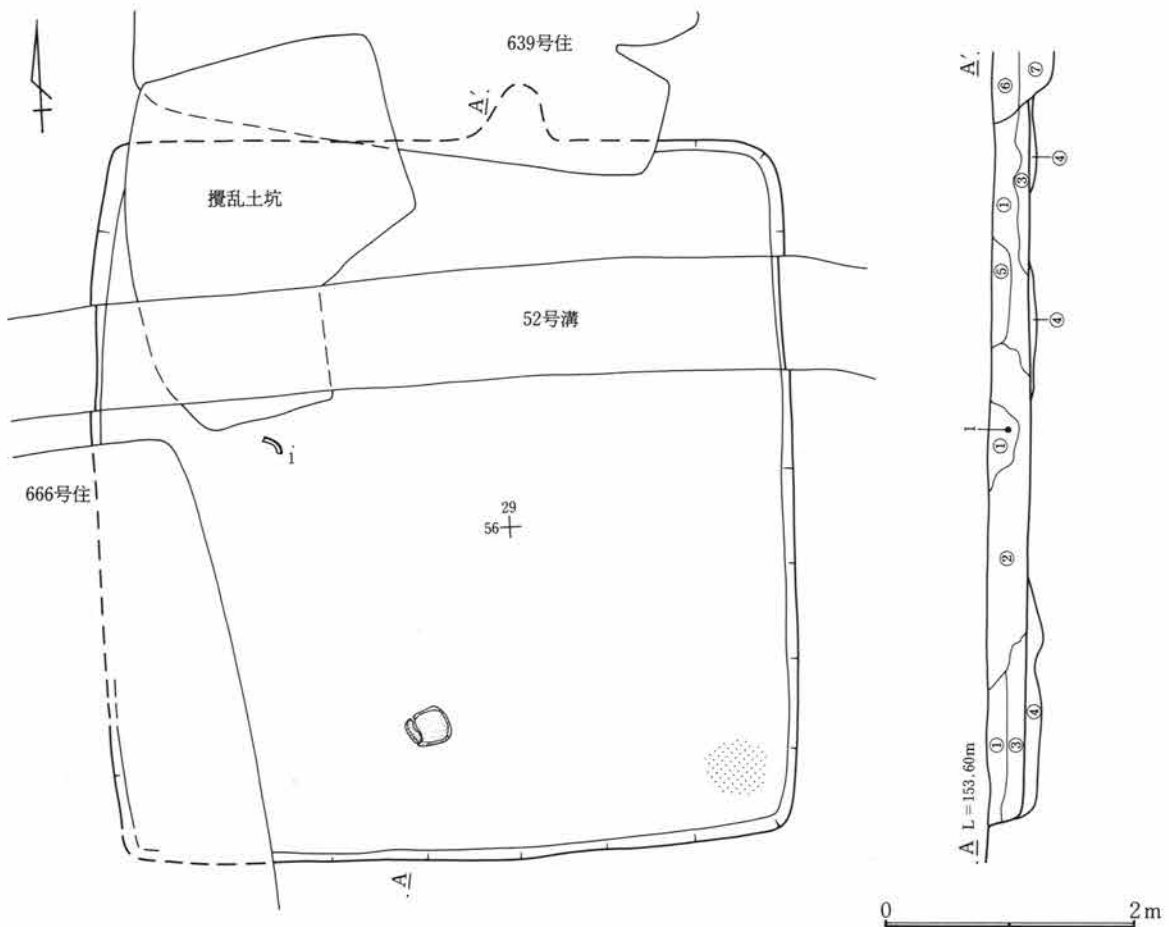
638号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
230-1 65	土 師 器 壺	床面直上 口縁部%	口 23.0 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	複合口縁壺の口縁部である。内外面ともナデにより器表面密。砂粒は目立たない。
230-2 65	土 師 器 埴	床面+13 %残存	口 12.2 高 6.2 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	小型で丸底である。底部と口縁部との境に深い沈線あり。底部は浅い。底面へら削り。口縁部下段へら削り。内面ナデ。外面に一部へら磨きが認められる。
230-3 65	土 師 器 埴	床面+14 %残存	口 11.3 高 4.6 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	小型で丸底である。底部と口縁部との境に深い沈線あり。底部は浅い。底面へら削り。口縁部へ内面ナデ。
230-4 65	土 師 器 埴	床面+8 ほぼ完形	口 8.0 高 3.9 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	小型で丸底である。底面へら削り。口縁部へ内側底面ナデ。表面全体にへら磨き。頸部にへらの工具痕あり。
230-5 65	土 師 器 埴	床面+20 %残存	口 8.5 高 7.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③底部内側以 外赤色・底部内面にぶい黄橙色	小型で丸底である。底部内面以外へら磨き。底部内面ナデで、へらの工具痕が残る。底部内面以外全面に塗彩されている。
230-6 65	土 師 器 匙	床面+13 完形	長 6.3 幅 3.2 高 1.7	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	へら等の工具は用いずに粘土紐を重ねて製作。外側に粘土紐の単位が明瞭である。雑な作りである。

640号住居跡(第231~233図、図版35・66)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、56・57-29・30グリッドに位置する。

概要 3軒重複の住居であり、3軒中最も古い住居である。本住居は南西部分を古墳時代の666号住居に、北

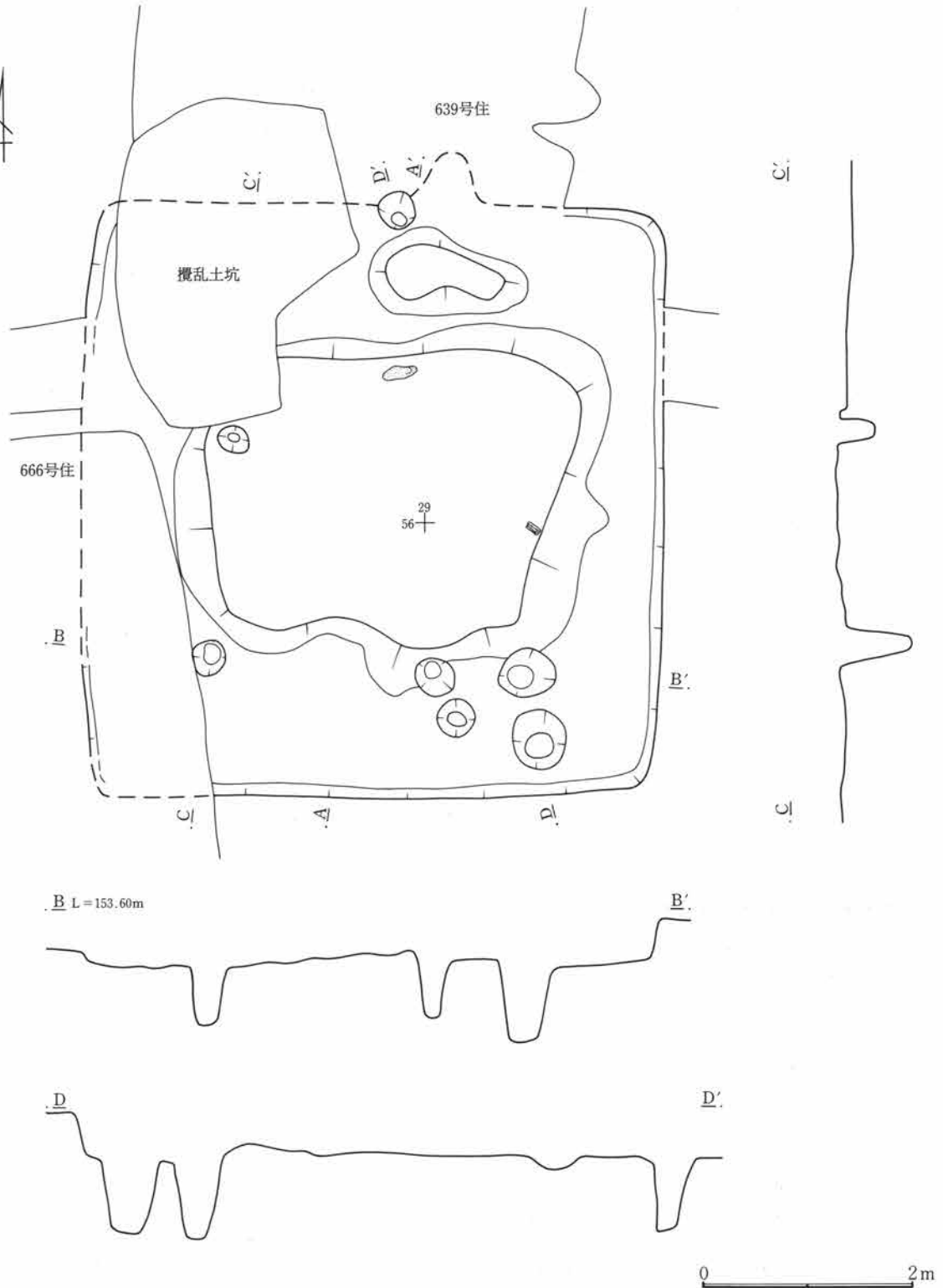


第231図 640号住居跡実測図

(640号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのロームブロックと白色軽石粒及び少量の焼土粒を含む。
- ②黒褐色土層 多くのローム粒とロームブロック及び少量の灰を含む。
- ③暗褐色土層 多くのロームブロックと少量の焼土粒と灰を含む。

- ④暗褐色土層 大きなロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ⑤52号溝覆土
- ⑥639号住居覆土
- ⑦639号住居床下覆土



第232図 640号住居跡床下実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

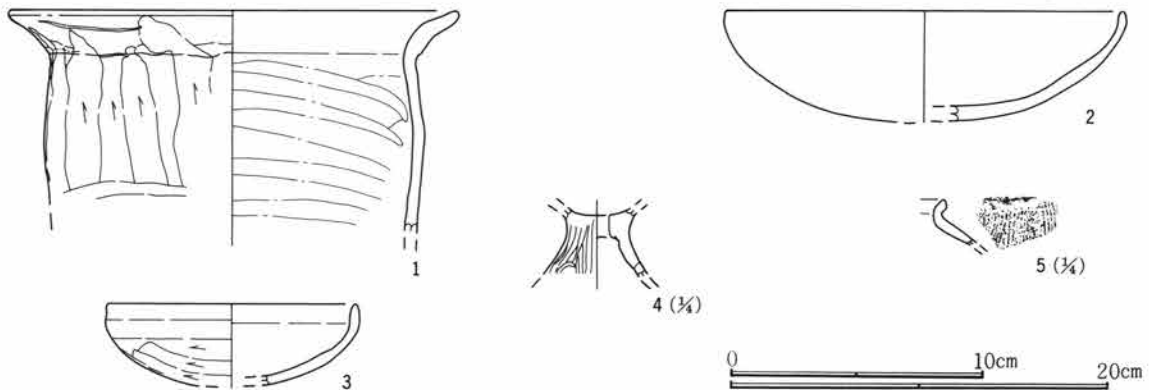
壁部分を奈良時代の639号住居により、床下部分まで掘り込まれていた。また北西部分を攪乱土坑により深く掘り抜かれ、北側覆土上面を52号溝により削られている。このように残りが悪い住居であり、竈も削り取られたためか残っていない。床下調査により639号住居に削り取られた北壁部分で、燃焼部の多くに認められる床面下の掘り込みや、覆土中に焼土粒が認められたことから、この部分に竈を想定した。また重複関係から古墳時代として扱ったが、出土遺物では明確ではない。南東コーナーの床面上に焼土粒がまとまって出土し、また覆土の中に少量の焼土粒が認められた。

構造 床面中央部はほぼ地山のロームを床面として使用しており、壁面に近い部分はロームブロックを主とし、少量の暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴は床面調査段階では確認できなかった。床下調査により南側の2柱穴らしき掘り込みが認められたが、北側の2柱穴は確認できなかった。また貯蔵穴も不明である。

規模 東西5.55m、南北5.65mである。壁高は残りの良い南壁部分で31cmである。

遺物 小破片として土師器の坏や甕が多く出土しているが、図示できたものは少なかった。また図示した土器も小破片が多く、時期的に古墳時代前期と奈良時代の土器のため、住居に伴う可能性は低い。

床下 中央部の床下部分は殆ど掘られてなく、壁面に近い部分が深く掘られていた。



第233図 640号住居跡出土遺物実測図

640号住居跡出土遺物観察表

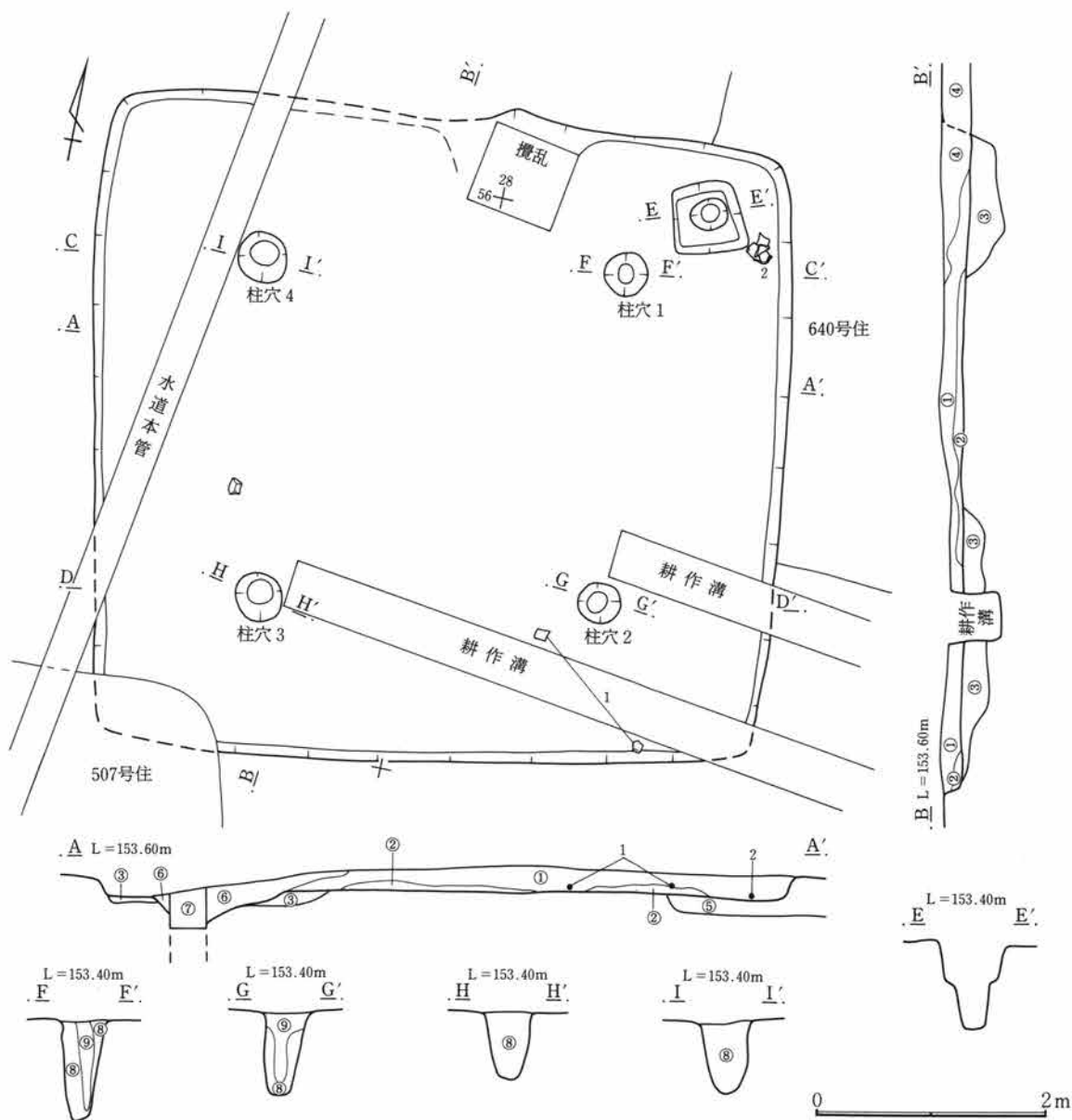
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
233-1 66	土師器 甕	床面+11 1/2残存	口(23.8) 高— 底—	①粗、3~5mmの片岩粒と長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。ヘラ削りは一部が口縁部まで及ぶ。
233-2 66	土師器 坏	覆土 破片	口(15.8) 高— 底—	①密、1mm以下の小さな砂粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、削りの単位不明。口縁部横ナデ。口径の大きな丸底の坏である。
233-3 66	土師器 坏	覆土 1/2残存	口(10.0) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口径の小さな丸底の坏である。
233-4 66	土師器 器台	覆土 破片	口— 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	脚外面ヘラ磨き。坏底面ナデ。脚内面ナデ。円形の透しは3方向。他の住居からの混入品。
233-5	土師器 甕	覆土 破片	口— 高— 底—	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄橙色	肩部刷毛目。口縁部は短く、口唇部は鋭角をなす。石田川期のS字状甕の小破片である。

666号住居跡(第234~237図、図版35・66)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、56-28・29グリッドに位置する。

概要 3軒重複の住居である。本住居は南西部分を奈良時代の507号住居により床下部分まで掘り込まれ、北東部分で古墳時代の640号住居の南西部分の覆土と床面を掘り抜いている。新旧関係は640→666→507号住居である。竈は北壁に造られていたが、道路建設に伴う測量の引照点の埋設に伴い壊されていた。その部分に多くの焼土粒が分布していた。

構造 床面中央部はほぼ地山のロームを床面として使用しており、壁面に近い部分はロームブロックを主と

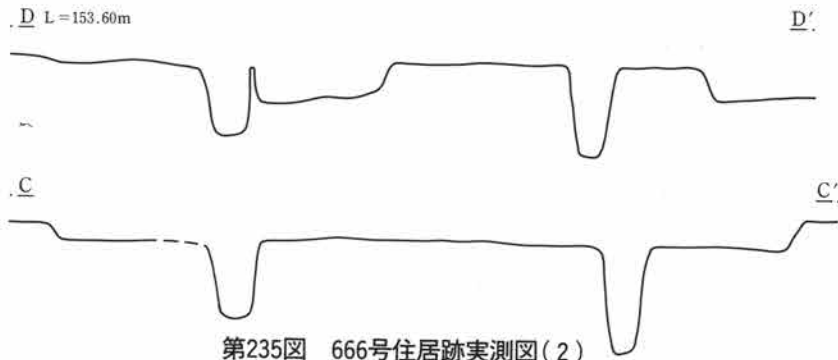


(666号住居跡)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ②黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ③褐色土層 多くのロームブロックと少量の暗褐色土を含む。
- ④暗褐色土層 破壊された竈材のローム・粘質土・焼土粒を含む。
- ⑤640号住居覆土
- ⑥34号溝覆土
- ⑦水道管埋設に伴う攪乱層
- ⑧暗黄褐色土層 多くのロームブロックを含む。
- ⑨暗褐色土層 暗褐色土中に多くのローム小ブロックを含む。

第234図 666号住居跡実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第235図 666号住居跡実測図(2)



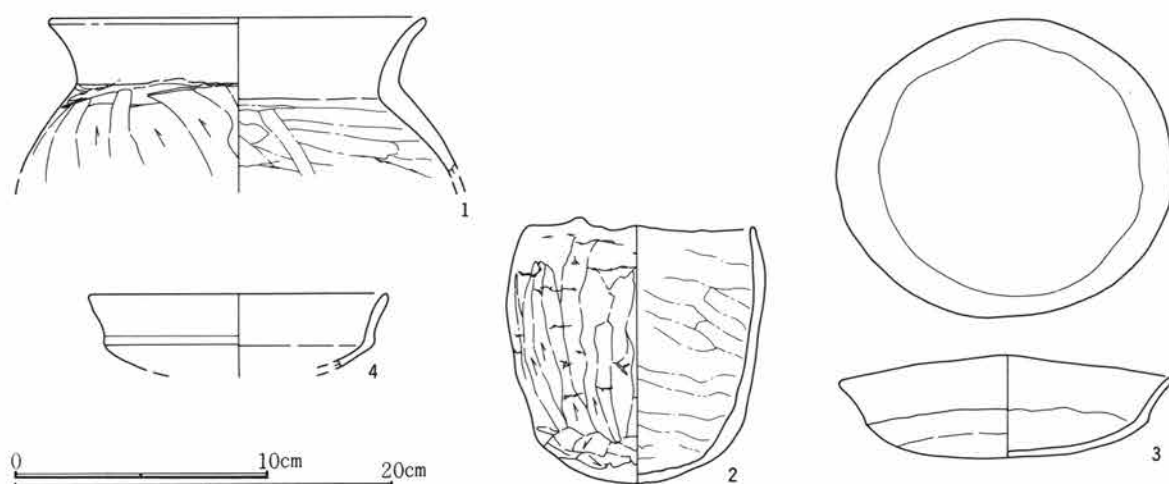
第236図 666号住居跡床下実測図

し、少量の暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。貯蔵穴の大部分は640号住居の覆土中に造られていたため、明確な形は明らかでないが、確認面の段階では上部が方形を呈している。中位置から下の部分は円形を呈していた。

規模 東西6.02m、南北5.38mである。壁高は残りの良い南壁部分で20cmである。柱穴1は径38cm深さ97cm、柱穴2は径38cm深さ75cm、柱穴3は径42cm深さ59cm、柱穴4は径42cm深さ67cmである。貯蔵穴は上面で60×60cmと方形を呈し、中位置の部分で径34cm深さ71cmであった。

遺物 土師器の甕や坏が出土しているが、出土量は破片が多く、図示できるものは少なかった。

床下 4柱穴に囲まれた床下部分は殆ど掘られてなく、壁面に近い部分が深く掘られていた。また西壁部分に一段高い部分が認められるが、この部分は溝や水道管の付設等により、多くの攪乱を受けているため良好な状態ではなく不明確なところも多い。



第237図 666号住居跡出土遺物実測図

666号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量 (cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
237-1 66	土師器 壺	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(19.6) 高— 底—	①密、3~6mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
237-2 66	土師器 小型甕	床面-9 $\frac{1}{2}$ 残存	口(12.1) 高13.9 底丸底	①やや粗、3~5mmの長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄橙色	ヘラ削り等はほとんど行わずに、輪積後ナデで形を作り上げている。外面に輪積痕。内面ナデにより器表面密。全体が歪んでおり、口縁部も凹凸状を呈し水平でない。
237-3 66	土師器 坏	覆土 ほぼ完形	口13.1 高4.1 底丸底	①密、粉状を呈する。赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削りであるが、削りの単位不明。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。ひどく歪んでいる坏である。
237-4	土師器 坏	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	口(11.8) 高— 底—	①密、粉状を呈する。赤色粒を多く含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

669号住居跡(第238~245図、図版35・36・66・67・74)

位置 本住居跡は、第9次調査区の東北部にあり、56-18グリッドに位置する。

概要 住居が放棄された段階で、住居中央部で床面より10~20cmほど高い覆土上面に多くの土器が投げ込まれたような状態で出土した。それらの多くは復元後図化できるものが多く、床面近くより出土した遺物と区別できるように色を変え平面図で図示した。竈煙道部付近に長方形の小さな土坑が掘られており、竈の煙道部が壊されていた。

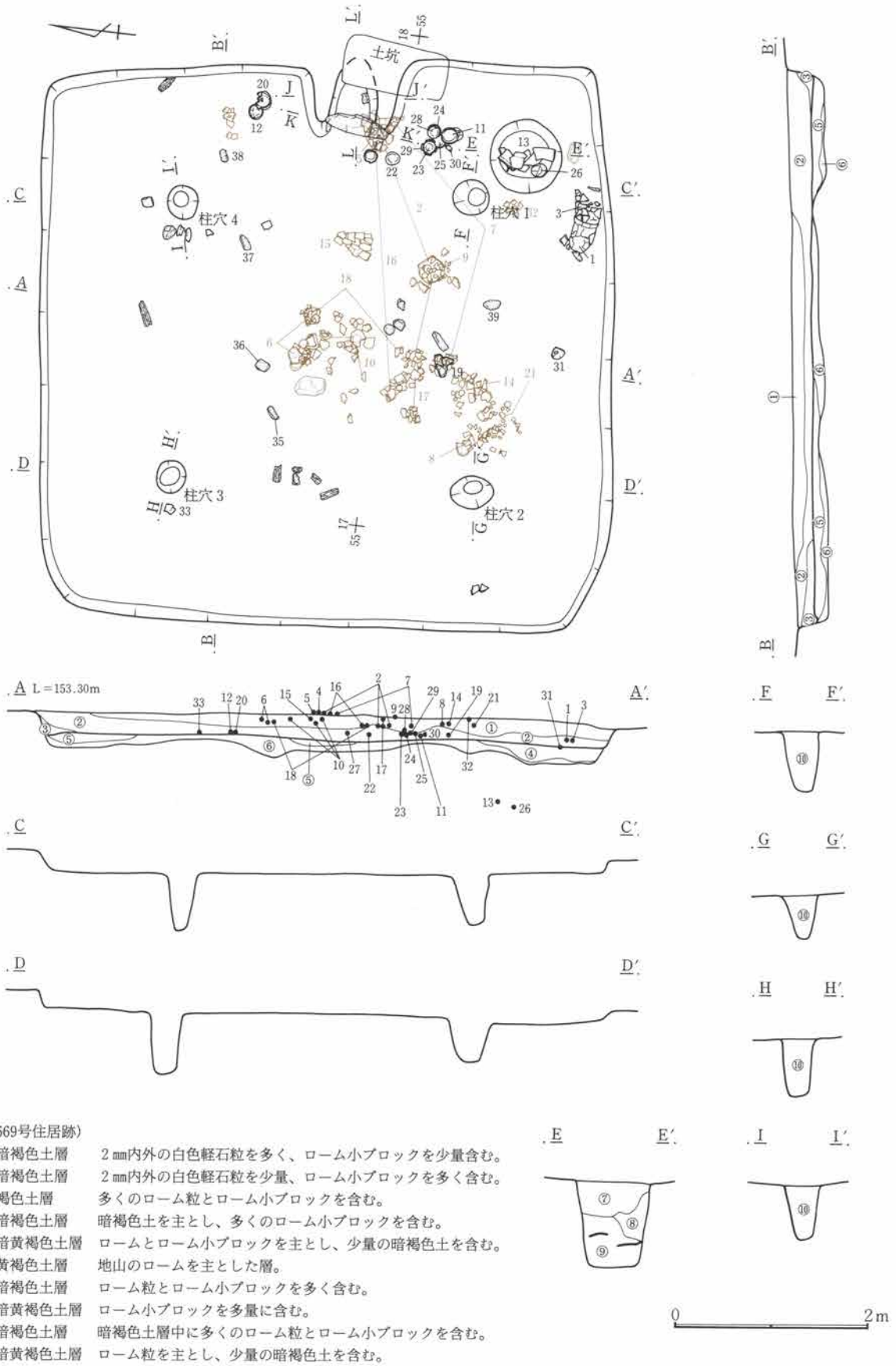
構造 床面はロームブロックを主とし、少量の暗褐色土の混入した土で造られていたが、床面中央部では地山のロームを一部床面として使用していた。柱穴が4本掘られており、竈が東壁ほぼ中央に掘られていた。竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。

規模 東西5.64m、南北5.90mである。壁高は残りの良い北壁面で23cmである。柱穴1は径40cm深さ51cm、柱穴2は径42cm深さ51cm、柱穴3は径28cm深さ63cm、柱穴4は径32cm深さ57cmである。貯蔵穴は径76cm深さ87cmでほぼ円形を呈する。

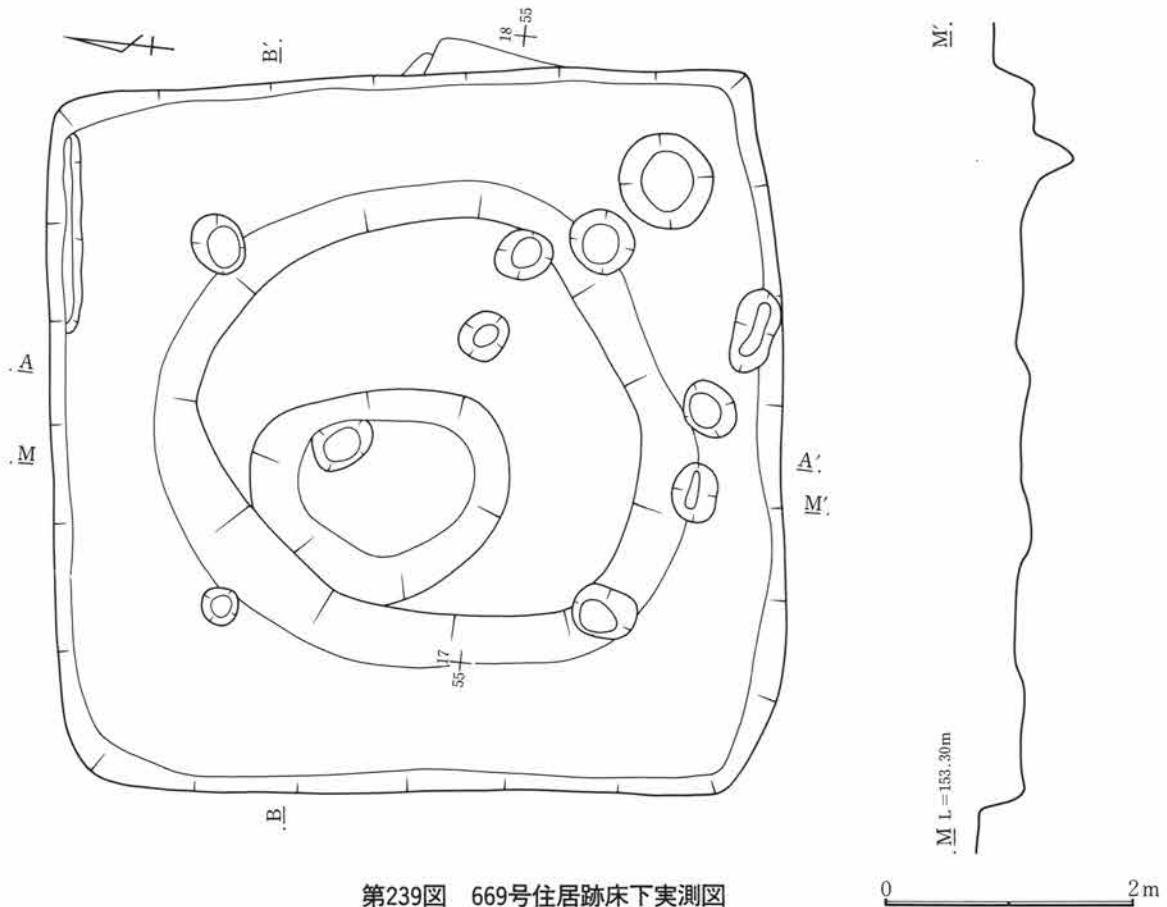
遺物 覆土上面を中心に、多くの土師器の甕や坏が出土している。

床下 床下は床面中央部を掘り残し、壁面に近い周辺部を深く掘り込んでいた。中央部に203×145cm床面からの深さ14cmの床下土坑が掘られていた。他にも多くの小穴が掘られていた。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第238図 669号住居跡実測図

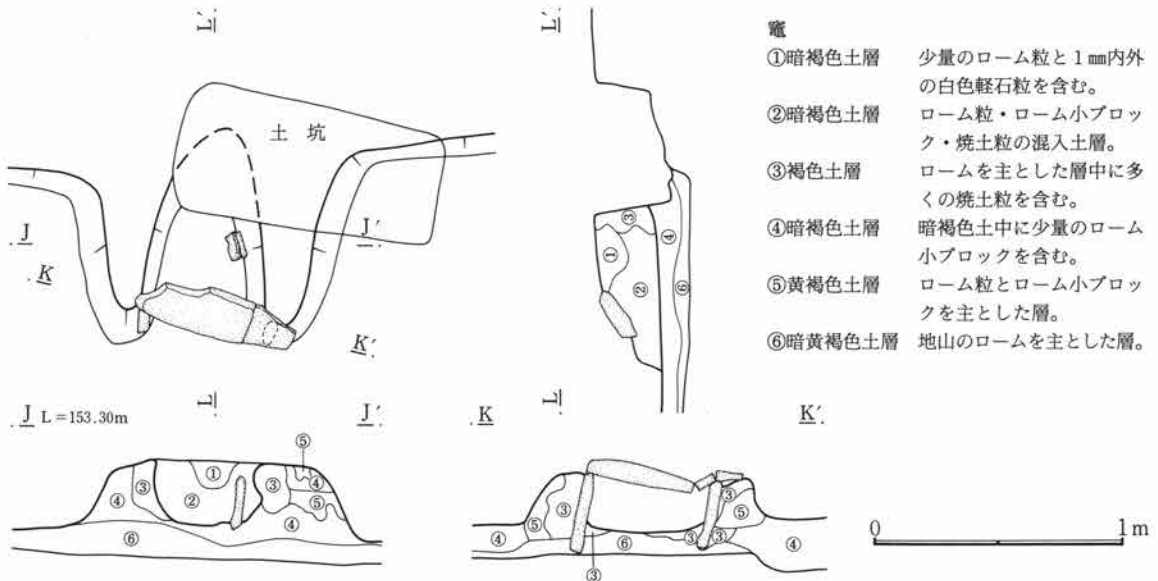


第239図 669号住居跡床下実測図

(竈)

概要 住居東壁ほぼ中央部に造られている。袖部分に2石がその上に割れてはいるが、天井石が載せられた状態で出土した。また燃焼部中央右よりに細長い石が、燃焼部床面に差し込まれたような状態で出土した。支脚石としての機能を想定したい。袖部は多くのロームが用いて造られており、燃焼部に近い部分が焼けて焼土化していた。

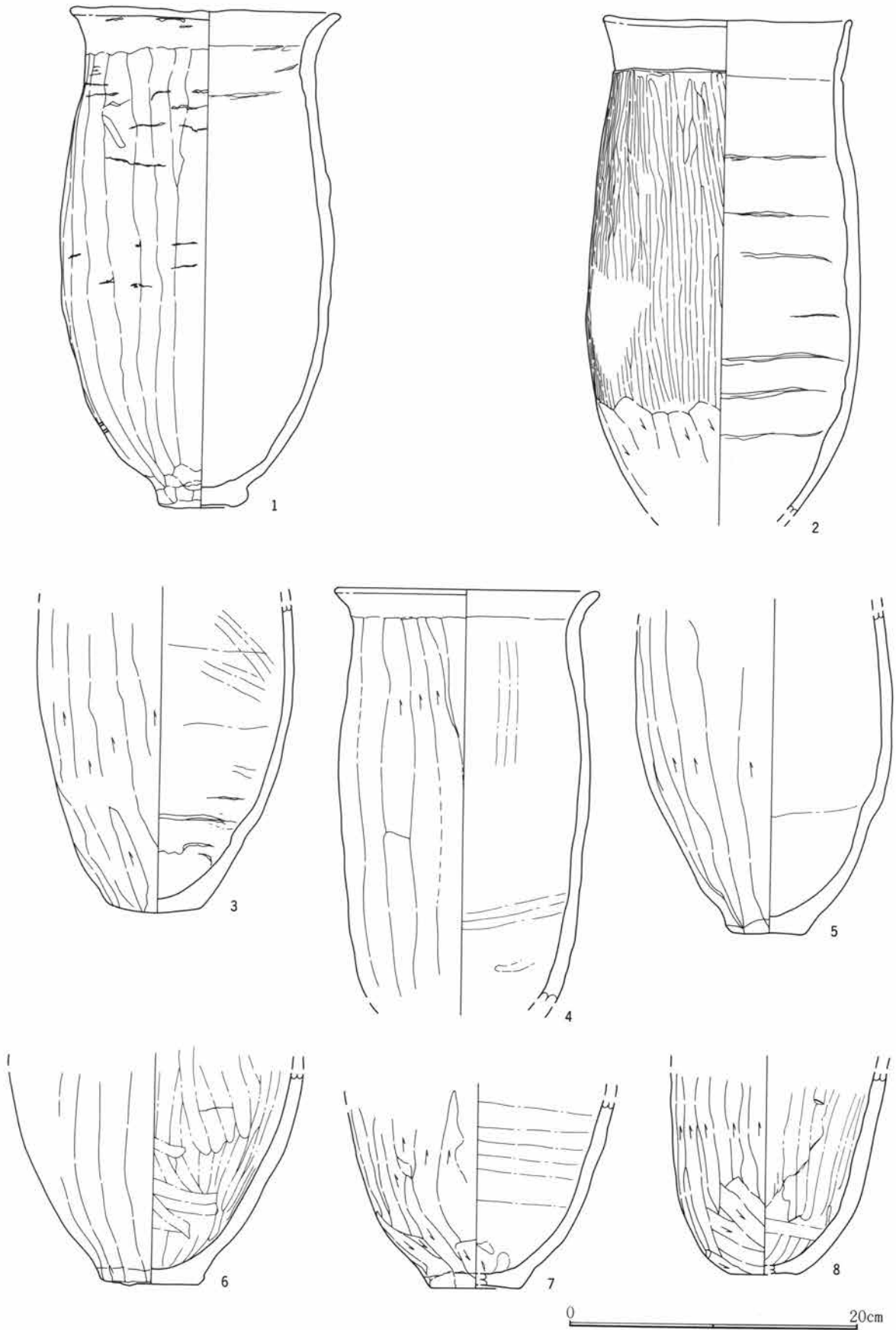
規模 両袖方向105cm、煙道方向106cmである。



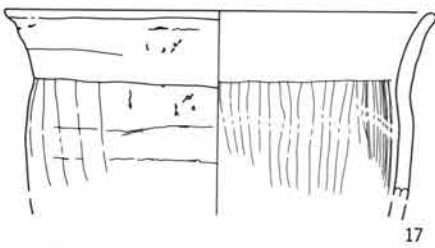
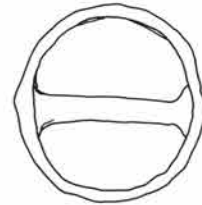
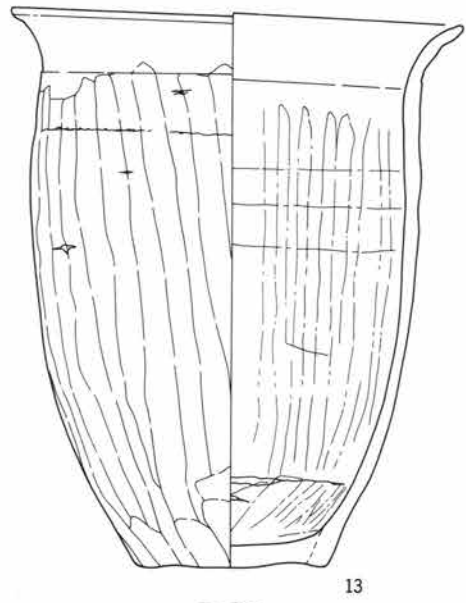
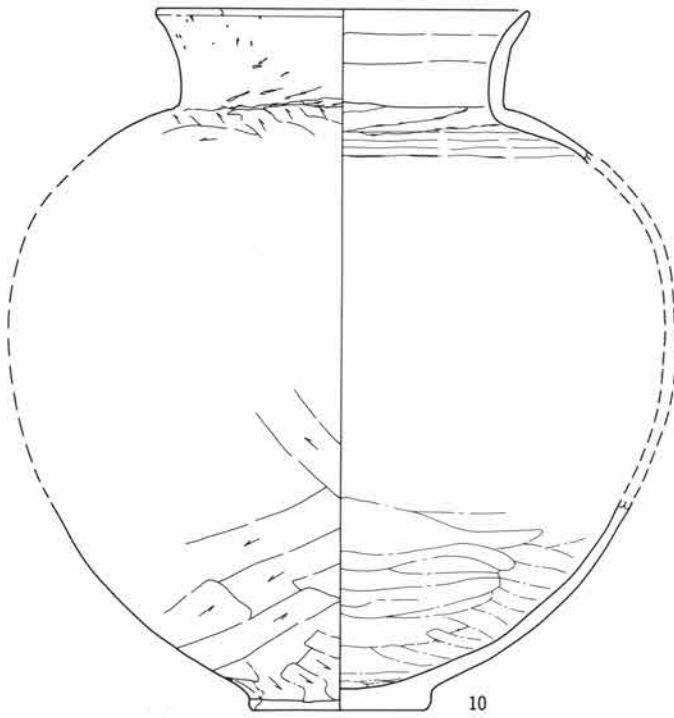
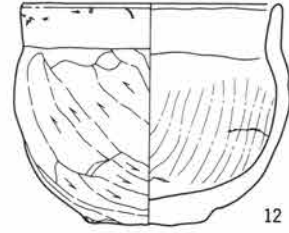
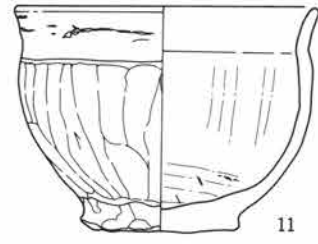
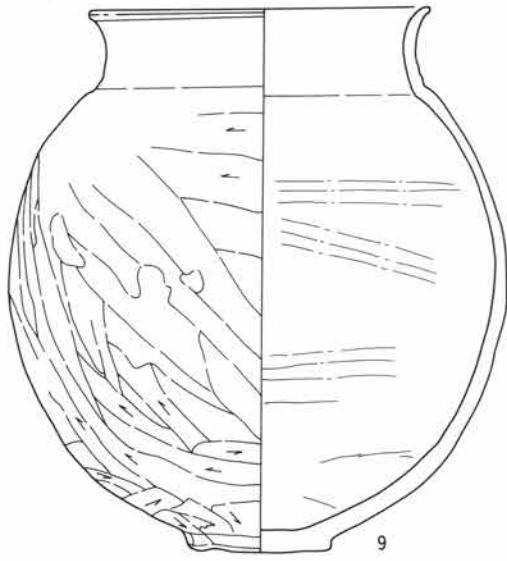
第240図 669号住居跡竈実測図

- 竈**
- ①暗褐色土層 少量のローム粒と1mm内外の白色軽石粒を含む。
 - ②暗褐色土層 ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒の混入土層。
 - ③褐色土層 ロームを主とした層中に多くの焼土粒を含む。
 - ④暗褐色土層 暗褐色土中に少量のローム小ブロックを含む。
 - ⑤黄褐色土層 ローム粒とローム小ブロックを主とした層。
 - ⑥暗黄褐色土層 地山のロームを主とした層。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



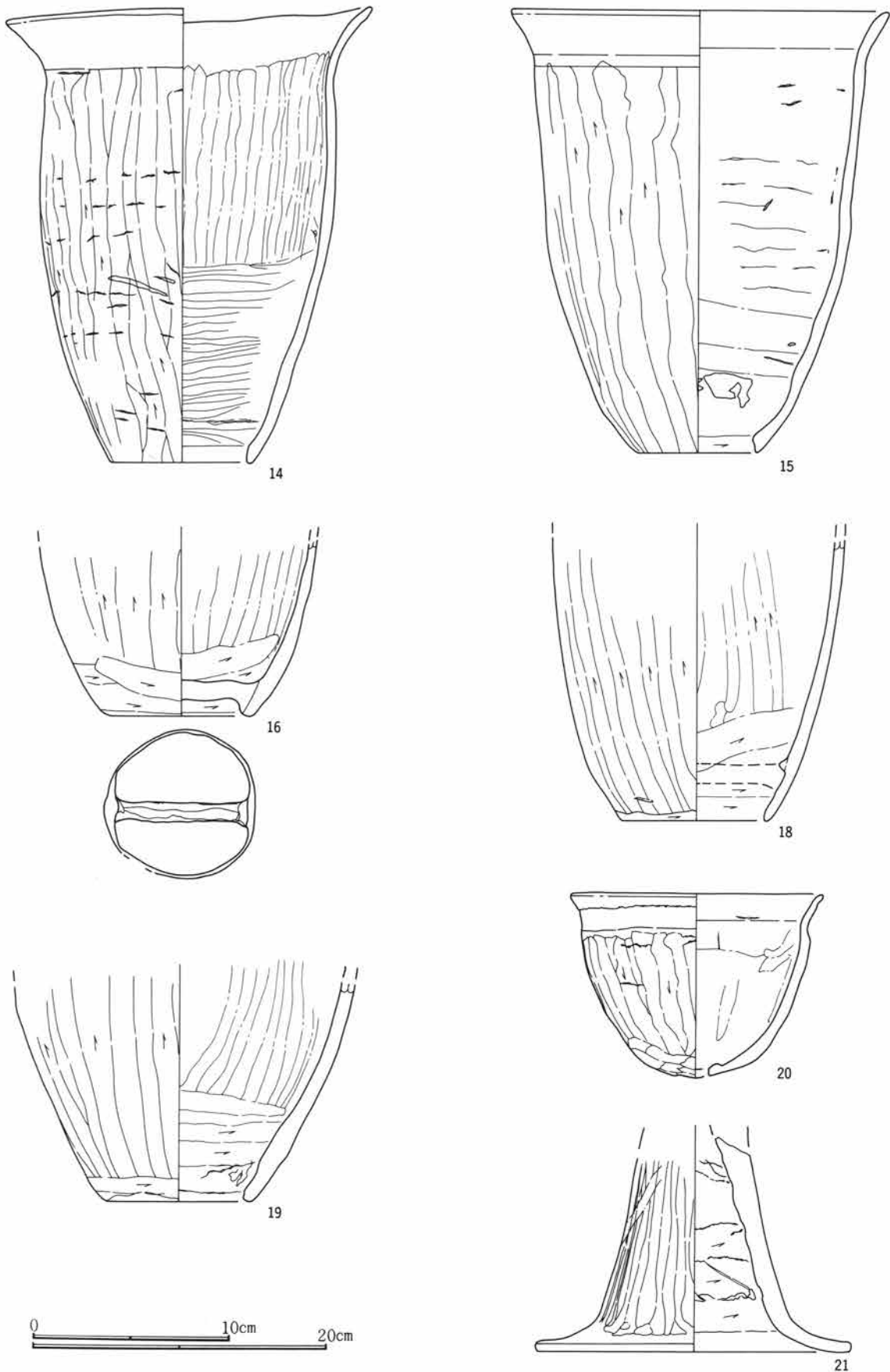
第241図 669号住居跡出土遺物実測図(1)



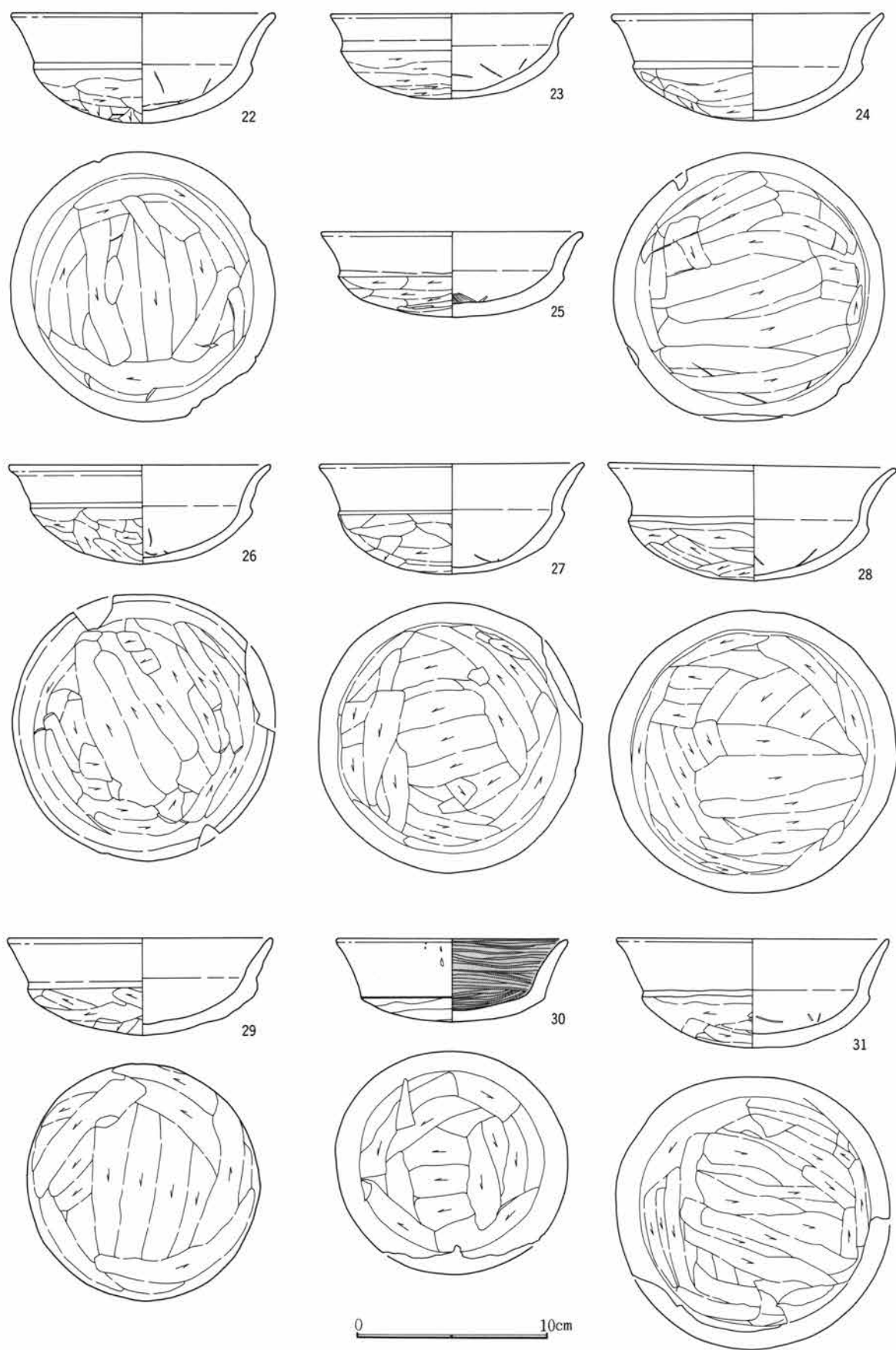
0 20cm

第242図 669号住居跡出土遺物実測図(2)

第3章 古墳時代の遺構と遺物

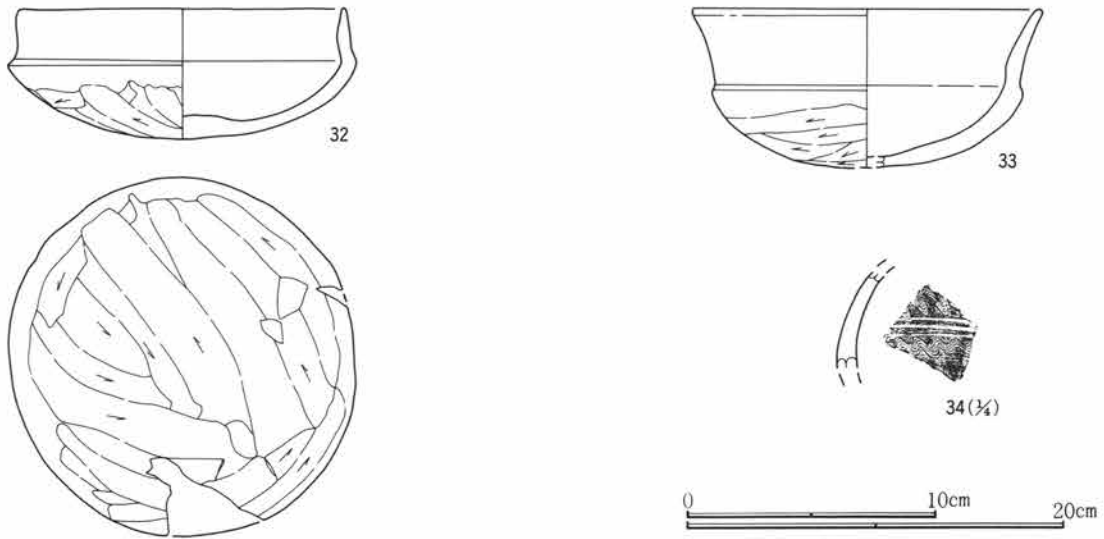


第243図 669号住居跡出土遺物実測図(3)



第244図 669号住居跡出土遺物実測図(4)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第245図 669号住居跡出土遺物実測図(5)

669号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
241-1 66	土 師器 甕	床面直上 ほぼ完形	口 18.3 高 34.5 底 6.3	①粗、3～5mmの砂粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③上半半橙色・下半半黒褐色	底面ナデ。中央部が凹状を呈する。胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴外面に焼けた粘土が少し付着している。
241-2 66	土 師器 甕	床面+11 1/2残存	口 17.1 高 — 底 —	①粗、3～6mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴外面細かいへらナデ。口縁部横ナデ。内面ていねいなナデにより器表面密。胴外面のへらナデは異質である。
241-3 66	土 師器 甕	床面直上 胴部1/2残存 底部完形	口 — 高 — 底 6.4	①粗、3～6mmの石英粒と片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③外面黒褐色・内面橙色	底部へ胴外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が特に粗い。内面ナデにより器表面密。外面は吸炭により黒褐色を呈している。
241-4	土 師器 甕	床面+24 口縁部破片 胴部1/2残存	口(20.0) 高 — 底 —	①特に粗、3～6mmの長石粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	胴外面へら削り。多くの砂粒が移動し器表面が特に粗い。内面にも大きな砂粒が目立つ。
241-5 66	土 師器 甕	床面+24 胴～底部1/2	口 — 高 — 底 (5.0)	①特に粗、3～6mmの砂粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③外面黒褐色・内面橙色	底面へら削り。胴外面へら削りで多くの砂粒が移動し器表面が特に粗い。内面ナデ。胴内面にも多くの砂粒が目立つ。
241-6 67	土 師器 甕	床面+13 胴下半1/2 底部完形	口 — 高 — 底 6.8	①粗、3～4mmの砂粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄褐色	底面へら削り。胴外面へら削りで多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデで器表面密。
241-7	土 師器 甕	床面+11 胴下半1/2 底部1/2残存	口 — 高 — 底 (6.4)	①粗、2～3mmの長石粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③表面黒褐色・断面橙色	胴外面へら削りで多くの砂粒が移動し器表面が粗い。内面ナデにより器表面密。底面木葉痕。
241-8	土 師器 甕	床面+12 1/2残存	口 — 高 — 底 (4.6)	①粗、3～5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい黄褐色	底面へら削り。胴外面へらナデ。器表面は比較的密。内面はナデにより器表面密。
242-9 67	土 師器 壺	床面+20 口～底部1/2	口 17.7 高 28.9 底 (7.5)	①やや粗、2～5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色・一部黒褐色	底面へら削り。胴外面ていねいなへら削りで器表面密。口縁部横ナデ。端部が肉厚となり丸味を持つ。内面ナデで器表面密。均整のとれたていねいな壺である。
242-10 67	土 師器 壺	床面+12 口縁部1/2 胴下～底1/2	口 (9.8) 高(37.0) 底 9.2	①やや粗、2～3mmの長石粒を多く、片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色	底面ほぼ水平にへら削り。胴外面へら削り。内面ナデにより器表面密。雲母を含む。
242-11 67	土 師器 小型甕	床面直上 完形	口 15.9 高 11.9 底 8.0	①粗、2～4mmの長石粒を多く片岩粒を少量含む。②酸化焰、硬質③橙色・一部黒褐色	底面へら削りでほぼ水平。胴外面へら削りで多くの砂粒が移動し器表面が特に粗い。口縁部横ナデ。内面ナデ。置くと安定する器である。
242-12	土 師器 小型甕	床面直上 口縁部1/2 胴～底完形	口(13.0) 高 11.7 底 6.0	①密、少量の3mm前後の片岩粒を含む。②酸化焰、硬質③黒褐色	底面へら削り。胴外面へら削り。器表面はほぼ密である。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。少し全体が歪んでいる。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
242-13 66	土 師 器 甗	貯蔵穴内 -65 ほぼ完形	口 23.6 高 29.4 底 10.0	①粗、2~4mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③明黄褐色	胴下端ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデ。内外面に輪積痕が残る。底部に1本の棧を持つ。 内外面に吸炭による黒斑が目立つ。
243-14 67	土 師 器 甗	床面+12 %残存	口 24.8 高 30.8 底 9.6	①やや粗、3~5mmの長石粒を 少量、片岩粒をわずかに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面下半磨き、上半ナデで器表面密。
243-15 67	土 師 器 甗	床面+18 %残存	口(25.4) 高 29.9 底(8.2)	①やや粗、3~5mmの長石粒を 多く、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③黄褐色	胴下端ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナ デにより器表面密。 胴外面は器表面が粗い。
243-16 67	土 師 器 甗	床面+11 胴部%残存	口 — 高 — 底(9.6)	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削りで端部は細い。胴外面ヘラ削り。内面下部ヘラ 削り。上部ナデ。棧が1本作られている。 棧は底面より少し高い位置につけられている。
242-17	土 師 器 甗	床面+11 口縁部% 残存	口(22.8) 高 — 底 —	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ後でいねいなヘラ磨 きで器表面密。 胴外面に輪積痕が一部残る。
243-18	土 師 器 甗	床面+11 胴下半% 残存	口 — 高 — 底(10.0)	①密、1mm以下の赤色粒を少量 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面強いヘラ削りであるが、砂粒の移動少 ない。内面胴下部に棧の欠損した痕跡が残る。 1本の棧を持つ甗であり、棧は底面より高い位置に付く。
243-19	土 師 器 甗	床面直上 胴下半% 残存	口 — 高 — 底(10.0)	①粗、3~5mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴下端ヘラ削り。胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面 が粗い。内面ナデにより器表面密。
243-20 67	土 師 器 小型甗	床面直上 ほぼ完形	口 17.2 高 12.4 底 丸底	①粗、2~3mmの長石粒を多く 片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。胴外面強いヘラ削り。口縁部横ナデ。 内面ナデにより器表面密。底部に穿孔あり。
243-21 67	土 師 器 高 坏	床面+12 脚部%残存 下端部破片	口 — 高 — 底(16.0)	①密、1mm以下の小さな砂粒を 多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面ヘラナデ。内面下半ヘラ削り。上半ナデ。 輪積痕が残る。
244-22 68	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 13.6 高 5.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 棧は高く明瞭である。 口縁部は長く大きく外反する。
244-23 67	土 師 器 坏	床面直上 完形	口 12.6 高 4.3 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 内面にヘラの工具痕あり。 硬く焼けて叩くと金属音がする。
244-24 68	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.8 高 5.4 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 棧は高く明瞭である。 口縁部は長く大きく外反する。
244-25 68	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.6 高 4.4 底 丸底	①密、1mm以下の赤色粒を多く 含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り後ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
244-26 68	土 師 器 坏	貯蔵穴内 -70 ほぼ完形	口 13.5 高 5.0 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 棧は高く明瞭である。内側底面にヘラの工具痕あり。 口縁部が長く大きく外反する。
244-27 68	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.5 高 5.6 底 丸底	①密、2~3mmの長石粒をわず かに含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 口縁部は長く大きく外反する。 棧は明瞭である。
244-28 68	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 14.7 高 5.9 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。 棧は高く明瞭である。内側底面にヘラの工具痕あり。 口縁部が長く大きく外反する。
244-29 68	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 13.5 高 5.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 棧は高く明瞭である。
244-30 68	土 師 器 坏	床面直上 ほぼ完形	口 12.0 高 4.3 底 丸底	①密、1~3mmの長石粒と片岩 粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面黒色・外面・断面鈍い橙 色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面全面ヘラ磨き後吸炭により 黒色を呈する。黒光りしている。
244-31 68	土 師 器 坏	床面-9 口縁部% 底部完形	口 14.0 高 5.5 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	底面ヘラ削り。口縁部ナデ。内面ナデで器表面密。 内側底面にヘラの工具痕8箇所あり。 口縁部が長く大きく外反する。
245-32 68	土 師 器 坏	床面+19 %残存	口 13.0 高 5.1 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含 む。 ②酸化焰、硬質 ③外面黒褐色・断面橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。 棧は鋭利で高く明瞭である。

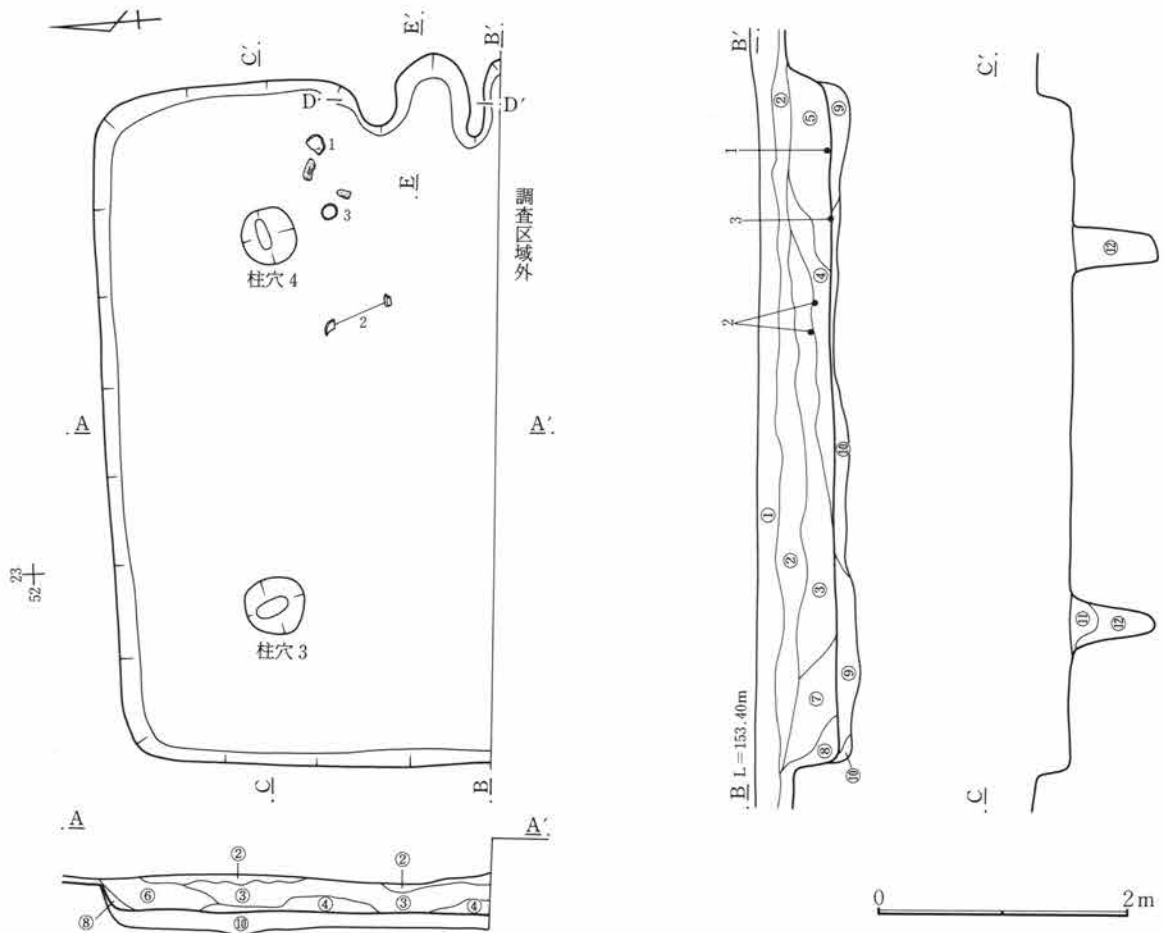
第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
245-33	土師器 坏	床面直上 1/2残存	口(14.0) 高(6.2) 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は鋭利で高く明瞭である。口縁部が大きく外反する。
245-34	須恵器 甕 破片	覆土 破片	高(5.0)	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③灰黄色	2段の櫛描き波状文と3本の沈線あり。
35 74	こも編み 石	床面直上	長 14.0 幅 7.0 厚 3.4 重 500		緑簾緑泥片岩。両側面中央部に小さな凹状部を数個持つ。
36 74	こも編み 石	床面-9	長 13.4 幅 8.6 厚 4.9 重 780		絹雲母石墨緑泥片岩。片側の側面中央部が凹状を呈し、他の側面中央部に小さな凹状部あり。
37 74	こも編み 石	床面+9	長 15.4 幅 7.3 厚 4.3 重 720		緑簾緑泥片岩。残っている側面中央部に小さな凹状部を2個持つ。一部欠損。
38 74	こも編み 石	床面直上	長 12.7 幅 7.4 厚 4.2 重 600		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が大きく凹状を呈し、他の側面は剝離により段を持つ。
39 74	こも編み 石	床面直上	長 17.7 幅 9.2 厚 3.0 重 720		絹雲母石墨片岩。扁平な石である。側面中央部が幅広くなっている。火を受けて表面の一部が剝離。

677号住居跡(第246・247図、図版37・68)

位置 本住居跡は、第9次調査区東端にあり、52-24グリッドに位置する。

概要 住居南側が調査範囲外であり、竈より南側は調査できなかった。床面は床面下の掘り込みが少なく、地山のロームを床面として使用している部分も多かった。竈が東壁面に、柱穴は2本確認できた。



第246図 677号住居跡実測図

(677号住居跡)

- ①暗褐色土層 3mm内外の白色軽石粒を多量に含む。
- ②暗褐色土層 多くのローム粒と白色軽石粒を含む。
- ③暗褐色土層 多くのローム粒とロームブロックと少量の炭を含む。
- ④暗褐色土層 ③の土層中に少量の焼土粒を含む。
- ⑤暗褐色土層 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。
- ⑥暗褐色土層 ロームと暗褐色土がほぼ均一に混入した層。
- ⑦暗褐色土層 3mm内外のロームブロックを多く含む。
- ⑧暗黄褐色土層 ローム粒を主とした層。
- ⑨暗黄褐色土層 ロームとロームブロックを主とした層。
- ⑩黄褐色土層 地山のロームを主とした層。
- ⑪暗褐色土層 多くのローム粒と少量の炭を含む。
- ⑫暗黄褐色土層 多くのローム小ブロックと暗褐色土の混入層。

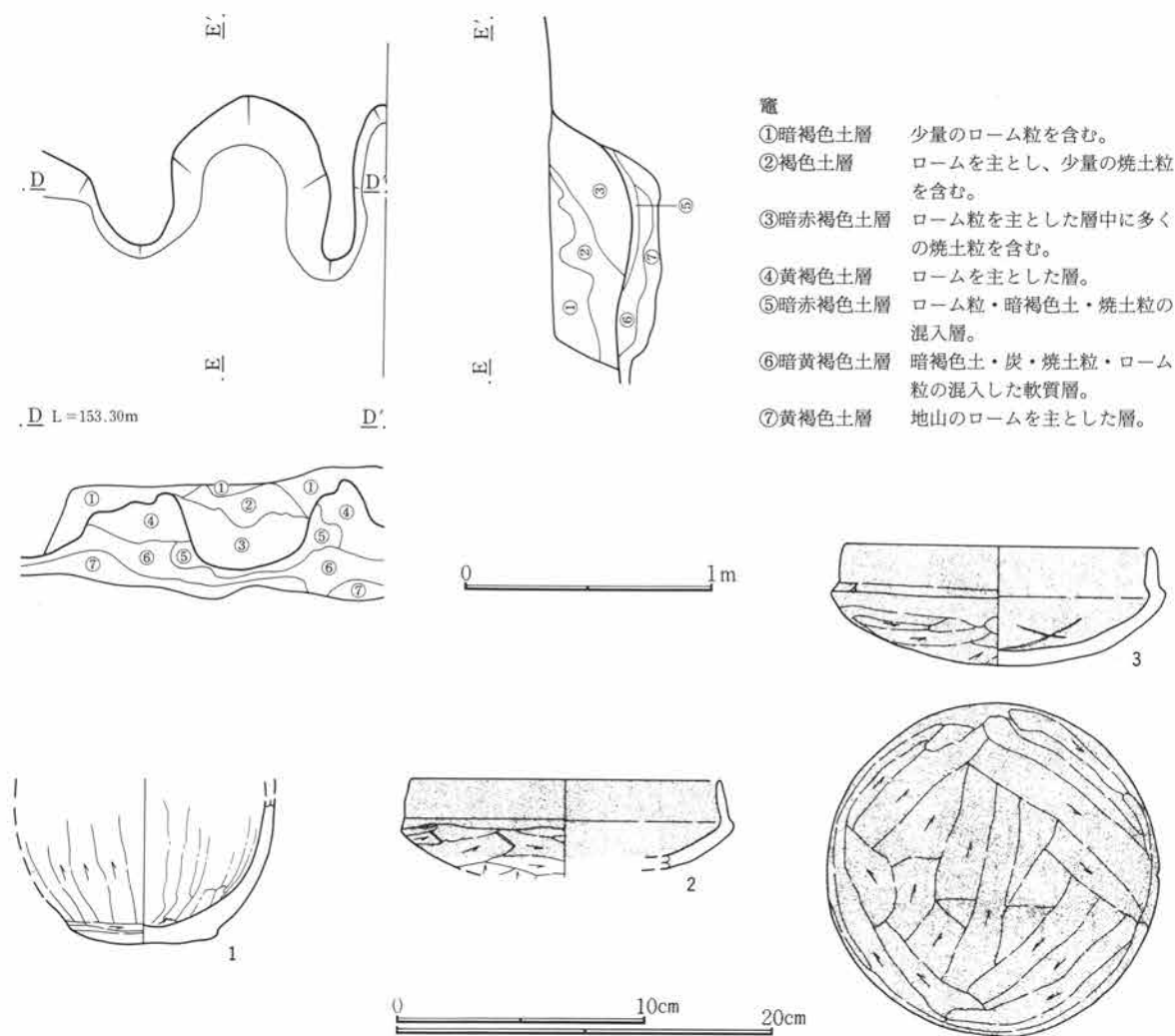
規模 東西5.4m、南北は不明である。壁高は北壁部分で27cmである。柱穴1と2は不明、柱穴3は径46cm深さ68cm、柱穴4は径42cm深さ67cmである。

遺物 土師器の甕や坏が出土しているが、破片も含めて出土量は少ない。

(竈)

概要 住居東壁中央部に造られている。袖部分や燃烧部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃烧部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。竈内からは多くのロームがまとまって出土し、焼土粒も多く出土した。袖石は使われてなくロームを主として造られた竈である。

規模 両袖方向108cm、煙道方向75cmである。



第247図 677号住居跡竈・出土遺物実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

677号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
247-1 68	土師器 甕	床面+8 胴下半 底部完形	口— 高— 底7.7	①粗、3~4mmの長石粒を少量含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面へラ削り。胴外面へラ削りで器表面が粗い。内面はナデにより器表面密。
247-2 68	土師器 坏	床面+17 残存	口12.4 高— 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質③にぶい橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。浅い坏である。
247-3 68	土師器 坏	床面+4 完形	口12.1 高4.8 底丸底	①密、5mm前後の片岩粒をわずかに含む。②酸化焰、硬質③橙色・一部黒色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。表面全体に黒漆と思われる痕跡が残る。

678号住居跡(第248~253図、図版37・38・68・69・71・76)

位置 本住居跡は、第9次調査区の東端にあり、54-22・23グリッドに位置する。

概要 南側を両側に側溝を持つ道路遺構により、床面部分まで掘り込まれている。住居範囲は床下調査により確認できた。

構造 床面はロームブロックを主とし、少量の暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、竈が東壁と北壁のほぼ中央部に造られていたが、北壁面に造られていた竈は東竈と異なり、床面上に位置する燃焼部や袖部はすべて取り除かれていた。そのため東竈が最後まで使われていた新竈であり、北竈が旧竈であった。東竈の右側に貯蔵穴が、また北竈の右側にも貯蔵穴と思われる小穴が2個掘られていた。どちらが貯蔵穴になるのか、また両方とも貯蔵穴であったならば、新旧関係があるのかまた同時に使われていたことも考えられるが、その点についての確認はできなかった。

規模 東西6.78m、南北6.46mである。壁高は残りの良い北東コーナーで42cmである。柱穴1は径52cm深さ91cm、柱穴2は径58cm深さ98cm、柱穴3は径62cm深さ89cm、柱穴4は径54cm深さ84cmである。新貯蔵穴は径64cm深さ91cmで、旧貯蔵穴(1)は径62cm深さ93cm・(2)は径56×74cmの楕円形を呈し深さ65cmである。

遺物 柱穴1に接し、ほぼ完形の土師器の甕と高坏が、また床面中央部分より多くのこも編み石が出土している。他に坏や甕が、また流れ込みとして石田川期の甕の小破片が出土している。

床下 床下には多くの小穴が掘られており、床面中央やや南よりに111×122cm床面からの深さ28cmの浅い床下土坑も掘られていた。

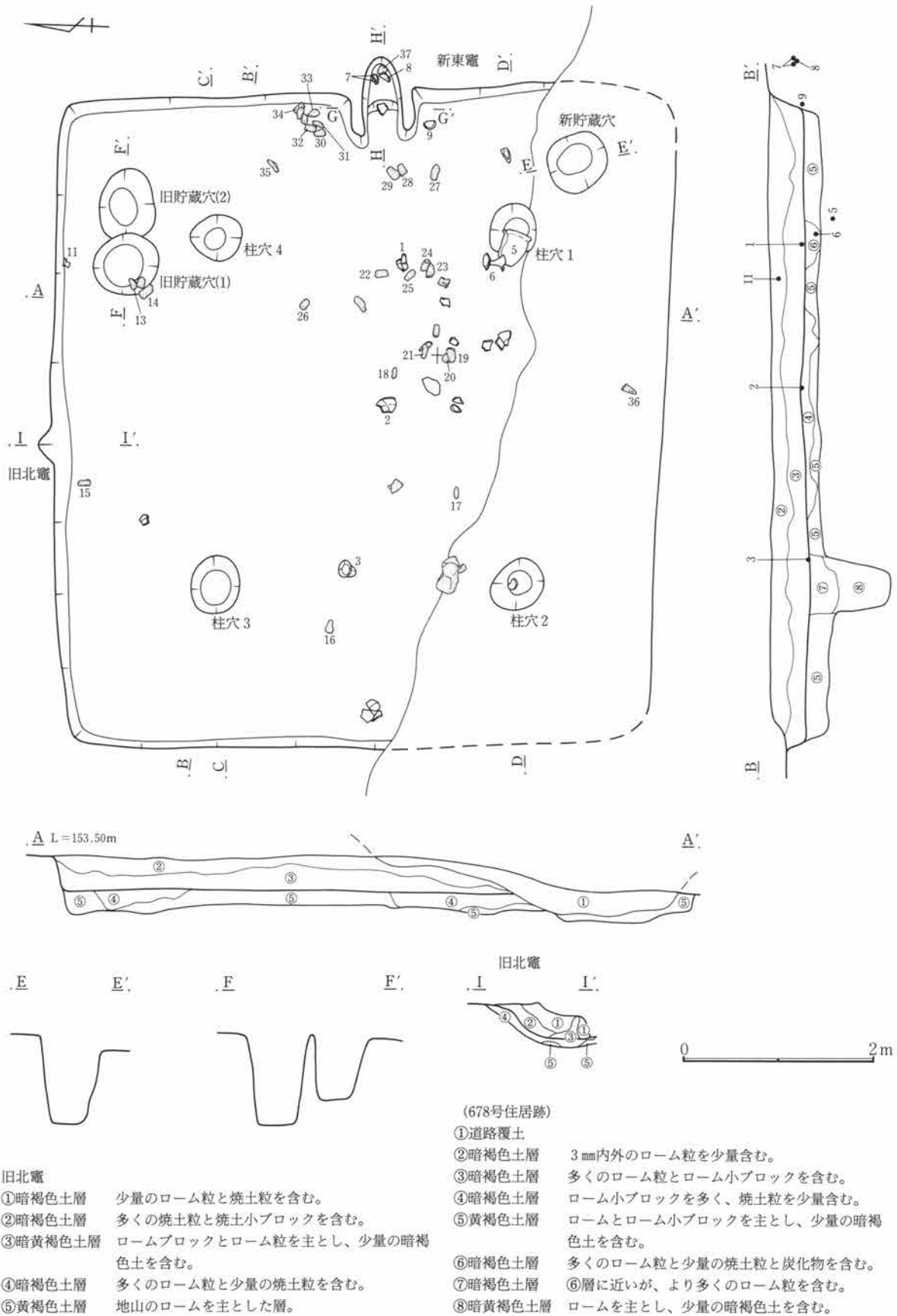
(新東竈)

概要 住居東壁ほぼ中央部に造られている。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。竈内からは煙道部に1個の石と3個の土師器坏の破片が出土したが、袖石や天井石等は出土していない。ロームを主として使用し造られた竈である。

規模 両袖方向76cm、煙道方向98cmである。

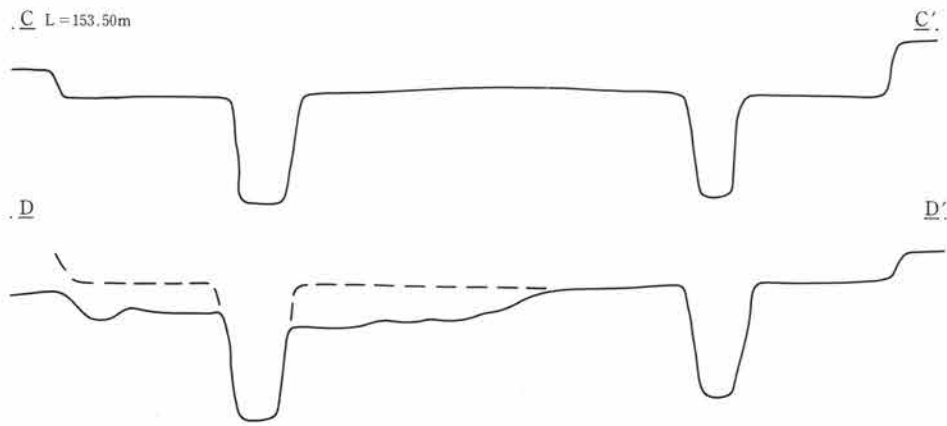
(旧北竈)

概要 住居北壁ほぼ中央部に造られている。床面上に位置する燃焼部や両袖部はすべて取り除かれており、壁面に掘り込まれた煙道部から焼土粒が多く出土した。

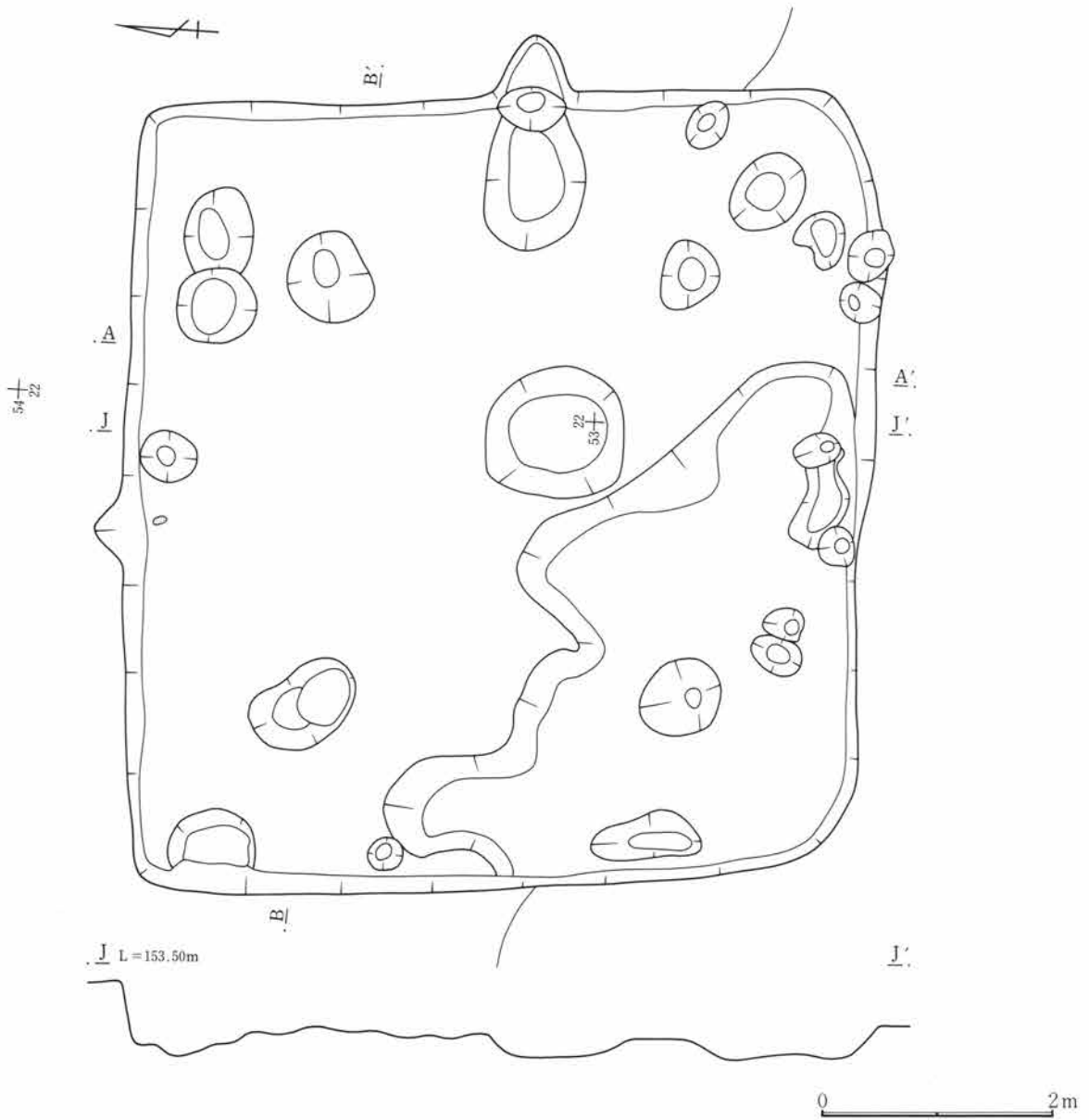


第248図 678号住居跡(1)・旧北竈実測図

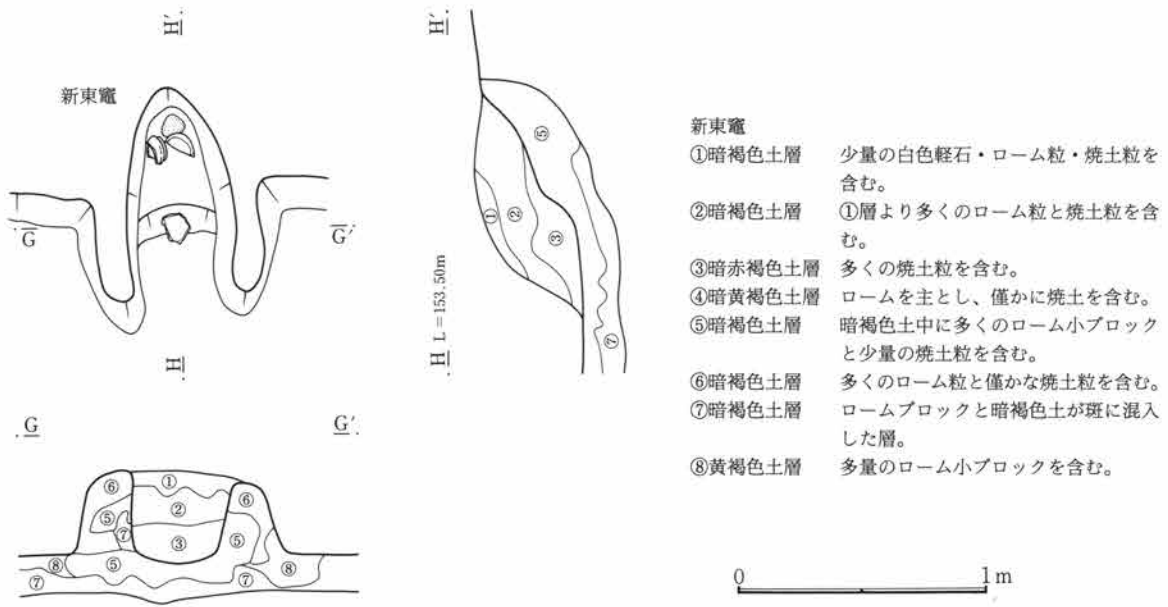
第3章 古墳時代の遺構と遺物



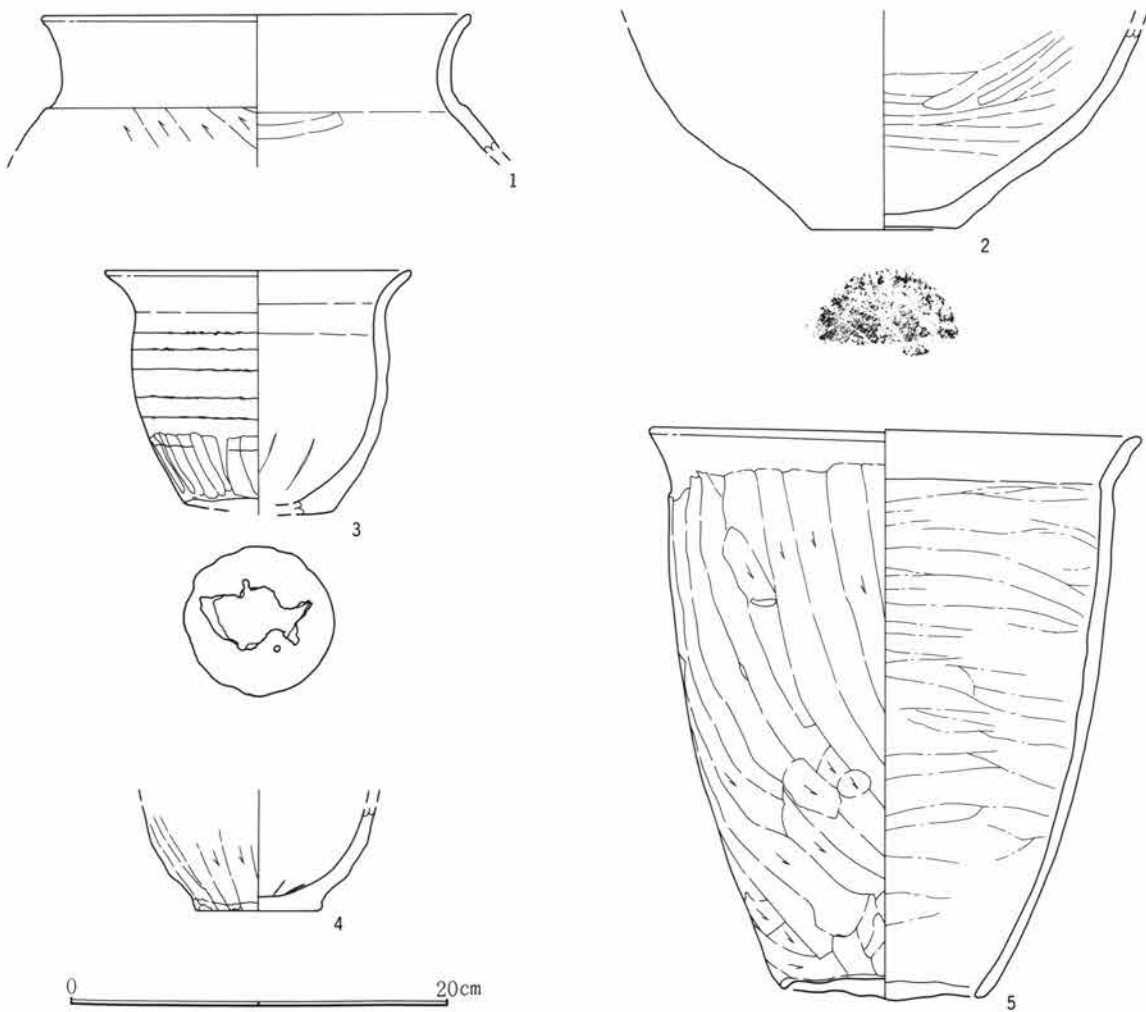
第249図 678号住居跡実測図(2)



第250図 678号住居跡床下実測図

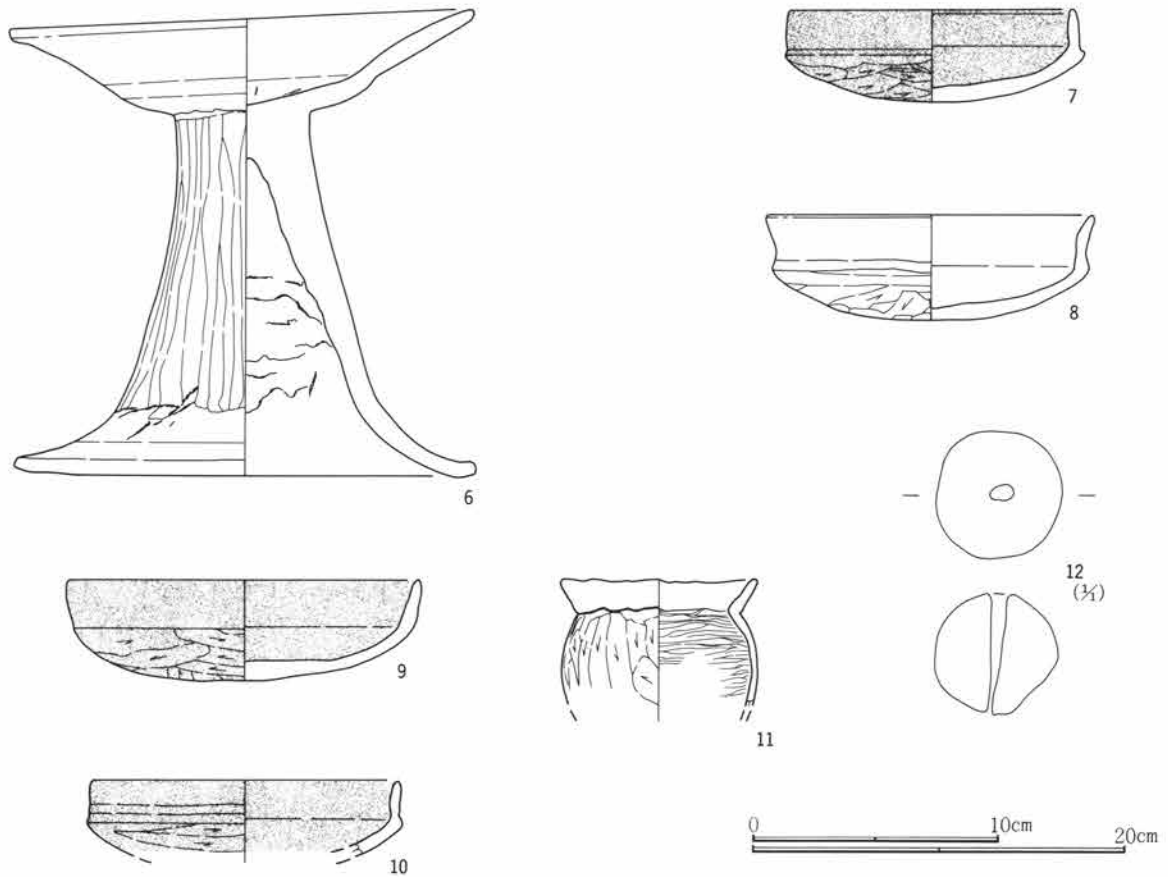


第251図 678号住居跡新東竈実測図



第252図 678号住居跡出土遺物実測図(1)

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第253図 678号住居跡出土遺物実測図(2)

678号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
252-1	土 師器 甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$	口(22.7) 高 — 底 —	①粗、2~3mmの砂粒を大量に含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
252-2	土 師器 壺	床面直上 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底(7.7)	①粗、3~6mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面橙色・外面黒褐色	胴外面弱い不定方向へら削りとナデでへら削りの単位不明瞭。内面ナデで器表面密。底面木葉痕。
252-3 68	土 師器 小型甕	床面直上 底部以外 ほぼ完形	口 16.2 高 12.6 底 8.0	①粗、1mm前後の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。胴外面下半へらナデ。中~上半弱いナデで多くの輪積痕が残る。内面ナデで器表面密。底部が薄く中央欠損。残存部に4個の小穴が確認される。器表面も全体的に粗い。
252-4	土 師器 小型甕	覆土 胴下半~底 $\frac{1}{2}$ 残存	口 — 高 — 底(6.5)	①粗、3~5mmの長石粒と片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい赤褐色	底面へら削り。胴外面へら削りにより多くの砂粒が移動し、器表面が非常に粗い。内面ナデにより器表面密。内側底面にへらの工具痕あり。
252-5 68	土 師器 甕	ピット内 -30 ほぼ完形	口 25.6 高 31.2 底 10.8	①粗、4~6mmの片岩粒と長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色・一部黒褐色	胴下端へら削り。一部割れており凹凸を呈する。胴外面強いへら削り。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
253-6 69	土 師器 高 杯	ピット内 -12 $\frac{1}{2}$ 残存	口(18.4) 高 18.0 底 18.4	①密、雲母を含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚外面へら磨き。内面ナデで輪積痕がわずかに残る。杯底部へら削り。口縁部ナデ。内面にへらの工具痕あり。
253-7 68	土 師器 杯	竈内+11 $\frac{1}{2}$ 残存	口 11.3 高 3.6 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい黄褐色	底面へら削り。口縁部横ナデ。口唇部が内傾している。内面ナデにより器表面密。
253-8 68	土 師器 杯	竈内+11 $\frac{1}{2}$ 残存	口(13.0) 高 4.2 底 丸底	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。

第3章 古墳時代の遺構と遺物

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
253-9 68	土器 器 坏	床面直上 %残存	口 14.0 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③表面にふい褐色・断面にふい橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は明瞭でない。
253-10	土器 器 坏	覆土 破片	口(12.1) 高 一 底 一	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③内面黒褐色・断面褐色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。坏の小破片である。内面の黒褐色は黒漆か。
253-11 69	土器 器 小型甕	床面直上 %残存	口(10.2) 高 一 底 一	①密、砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質③表面橙色・内面黒色	胴外面へラナデ。口縁部横ナデ。内面は全面へラ磨き。へラ磨き後吸炭により黒色を呈し光沢を持つ。
253-12 71	土製品 土 玉	覆土	径 1.6 孔径 0.3 重 4.2		①密 ②酸化焰、硬質 ③にふい橙色 全体に歪んでいる。中央の穴は平行でない。
13 76	こも編み 石	床面直上	長 14.5 幅 7.9 厚 4.7 重 700		点紋絹雲母石墨片岩。不定形な石である。片側の側面が凸状を呈し、他の側面は凹状を呈する。
14 76	こも編み 石	床面直上	長 15.9 幅 7.1 厚 2.5 重 500		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面がわずかに凹状を呈する。
15 76	こも編み 石	床面+19	長 14.3 幅 7.6 厚 3.5 重 600		点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部が凹状を呈する。
16 76	こも編み 石	床面直上	長 13.6 幅 3.8 厚 5.2 重 720		緑簾緑泥片岩。中央部の厚い石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
17 76	こも編み 石	床面+4	長 18.2 幅 6.9 厚 3.2 重 500		点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央部が打ち欠かれた凹状部を持つ。
18 76	こも編み 石	床面直上	長 12.5 幅 5.6 厚 5.3 重 500		点紋絹雲母石墨片岩。小さな石である。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
19 76	こも編み 石	床面+25	長 16.8 幅 7.8 厚 2.9 重 800		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が凹状を呈し、他の側面中央部は凸状を呈する。表面は少し打ち欠かれている。
20 76	こも編み 石	床面直上	長 11.0 幅 7.9 厚 3.3 重 480		点紋絹雲母石墨片岩。約%ほど欠損していると思われるが、この状態で使用されている。
21 76	こも編み 石	床面直上	長 15.4 幅 7.7 厚 3.5 重 500		絹雲母石墨片岩。両側面とも明瞭な凹状部は認められない。
22 76	こも編み 石	床面直上	長 14.1 幅 7.3 厚 3.4 重 450		緑簾緑泥片岩。両側面中央部に明瞭な凹状部を持つ。
23 76	こも編み 石	床面直上	長 15.7 幅 6.7 厚 3.7 重 600		点紋絹雲母緑泥片岩。両側面中央部に明瞭な凹状部は認められないが、小さな凹凸部がある。
24 76	こも編み 石	床面直上	長 14.5 幅 8.4 厚 2.8 重 420		絹雲母石墨片岩。偏平な石である。片側の側面に打ち欠かれた凹状部あり。
25 76	こも編み 石	床面直上	長 13.8 幅 8.0 厚 4.1 重 600		絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が凹状を呈している。
26 76	こも編み 石	床面+12	長 17.0 幅 8.3 厚 3.4 重 550		絹雲母石墨片岩。両側面の中央部に凹状部が認められる。
27 76	こも編み 石	床面直上	長 14.9 幅 8.3 厚 2.9 重 500		絹雲母石墨片岩。偏平で幅広い石である。両側面中央部にわずかな凹状部が数個認められる。
28 76	こも編み 石	床面直上	長 13.0 幅 8.4 厚 4.4 重 700		石墨緑泥片岩。偏平で幅広い石である。両側面中央部にわずかな凹状部が数個認められる。
29 76	こも編み 石	床面直上	長 13.8 幅 7.7 厚 4.9 重 600		点紋絹雲母石墨片岩。片側の側面中央部が凹状を呈し、他の側面は凸状を呈している。
30 76	こも編み 石	床面+8	長 14.9 幅 8.1 厚 3.9 重 730		絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部が数個認められる。
31 76	こも編み 石	床面+11	長 14.9 幅 8.4 厚 3.7 重 800		緑泥片岩。片側中央部が打ち欠かれて凹状部が数個認められる。
32 76	こも編み 石	床面+5	長 15.7 幅 6.7 厚 4.0 重 580		絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
33 76	こも編み 石	床面+12	長 17.0 幅 6.5 厚 4.1 重 600		絹雲母石墨片岩。両側面中央部にわずかな凹状部が認められる。
34 76	こも編み 石	床面+5	長 15.6 幅 8.2 厚 4.2 重 630		絹雲母石墨片岩。両側面中央部に明瞭な凹状部が認められる。
35 76	こも編み 石	床面直上	長 14.1 幅 4.3 厚 4.3 重 450		緑泥片岩。細長い石である。1側面中央部が凹状を呈している。
36 76	こも編み 石	床面-23	長 14.1 幅 6.9 厚 3.8 重 580		点紋絹雲母石墨片岩。両側面中央に小さな凹状部が数個認められる。
37 76	こも編み 石	床面+17	長 13.4 幅 7.6 厚 3.7 重 650		緑簾緑泥片岩。両側面中央にわずかな凹状部が数個認められる。

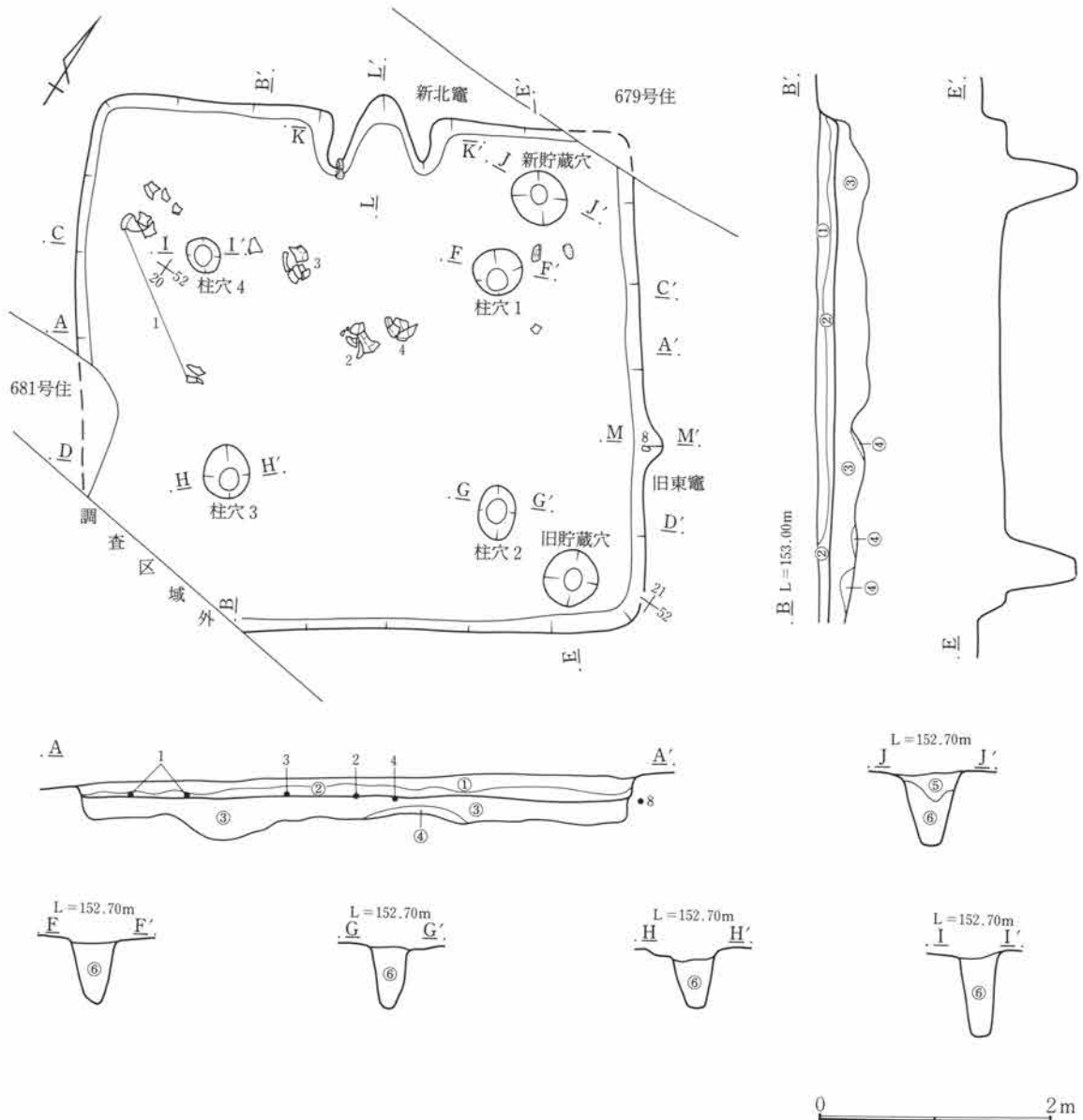
第3章 古墳時代の遺構と遺物

680号住居跡(第254~258図、図版38・69)

位置 本住居跡は、第9次調査区東部にあり、52・53-21グリッドに位置する。

概要 南西コーナー部分は調査範囲外であり、さらに3軒重複の住居中の一軒である。本住居は西壁の南寄りの一部を古墳時代の681号住居により、また北東コーナーを平安時代の679号住居により深く床面下まで掘り込まれている。新旧関係は680→681→679号住居である。

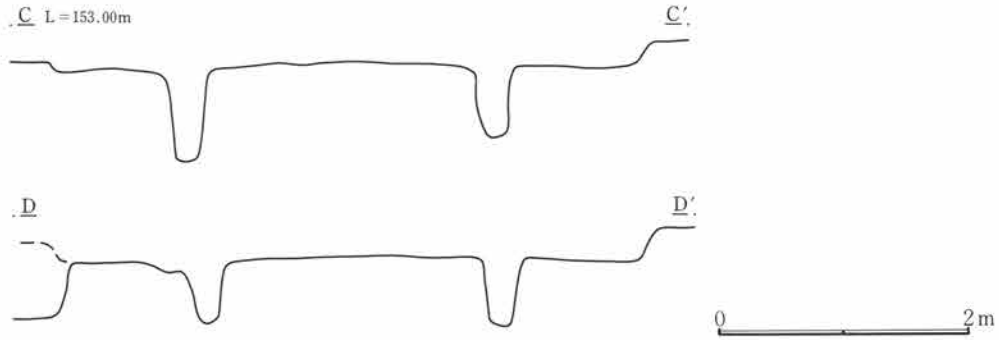
構造 床面はローム粒とロームブロックを主とし、少量の黒褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘られており、新竈が北壁のほぼ中央部に、また旧竈が東壁やや南寄りに造られていた。それぞれの竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。



(680号住居跡)

- | | | | |
|---------|-------------------------------|---------|------------------------|
| ①暗褐色土層 | 少量の白色軽石粒とローム粒を含む。 | ④黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ②暗褐色土層 | 多くのローム粒と僅かな炭化物を含む。 | ⑤暗褐色土層 | ローム粒を少量含む。 |
| ③暗黄褐色土層 | ローム粒とローム小ブロックを主とし、少量の暗褐色土を含む。 | ⑥暗黄褐色土層 | ローム粒とローム小ブロックをほぼ均一に含む。 |

第254図 680号住居跡実測図(1)



第255図 680号住居跡実測図(2)

規模 東西4.82m、南北4.28mである。壁高は残りの良い南壁部分で14cmである。柱穴1は径36cm深さ58cm、柱穴2は径32cm深さ55cm、柱穴3は径38cm深さ52cm、柱穴4は径28cm深さ52cmである。新貯蔵穴は径50cm深さ65cm、旧貯蔵穴は径46cm深さ66cmでほぼ円形を呈する。

遺物 北側の床面上を中心に土師器の甕が、また覆土中より土師器の坏が出土している。

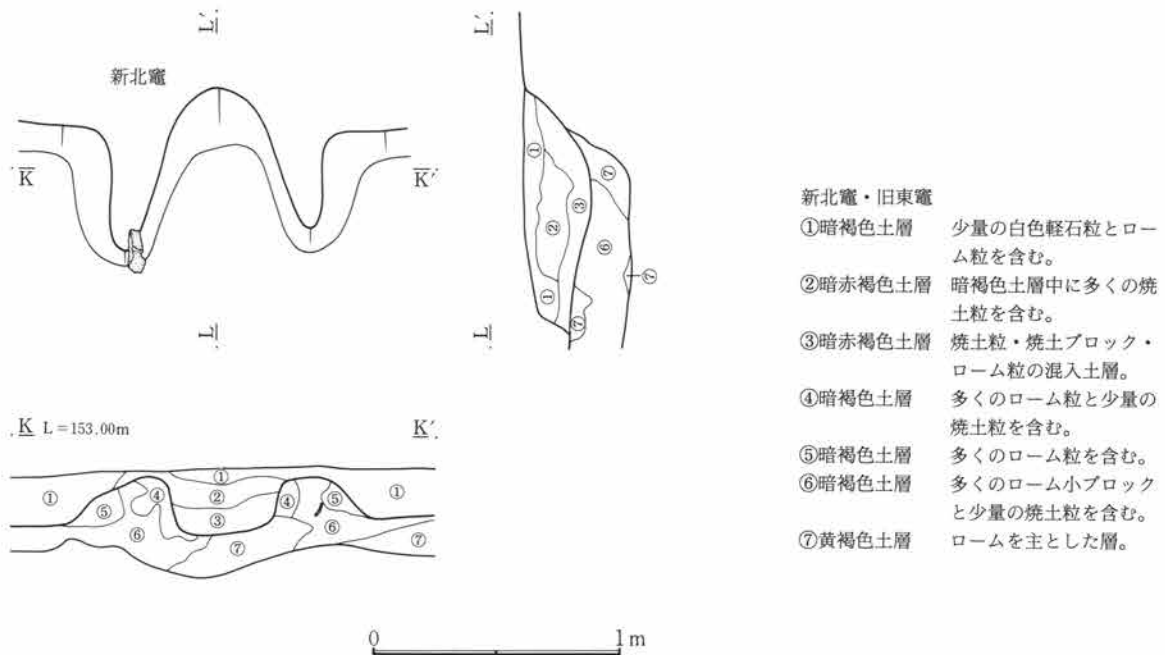
(新北竈)

概要 住居北壁ほぼ中央部に造られている。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。左袖部分に石が1個置かれたように出土したが、他に石は出土しなかった。

規模 両袖方向108cm、煙道方向74cmである。

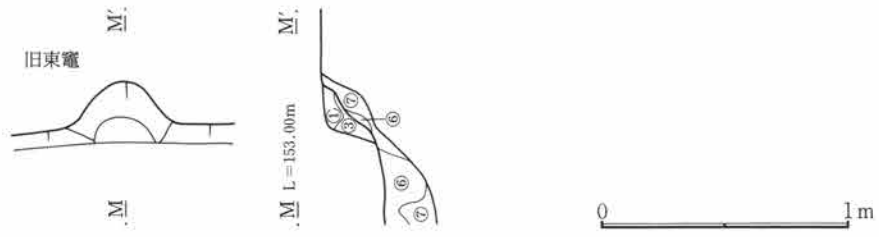
(旧東竈)

概要 東壁南寄りの壁面に、床面上に位置する燃焼部や袖部分はすべて取り外されていたが、壁面を掘り込んで造られた煙道の一部が確認された。残された煙道部から僅かな焼土粒の出土が認められた。

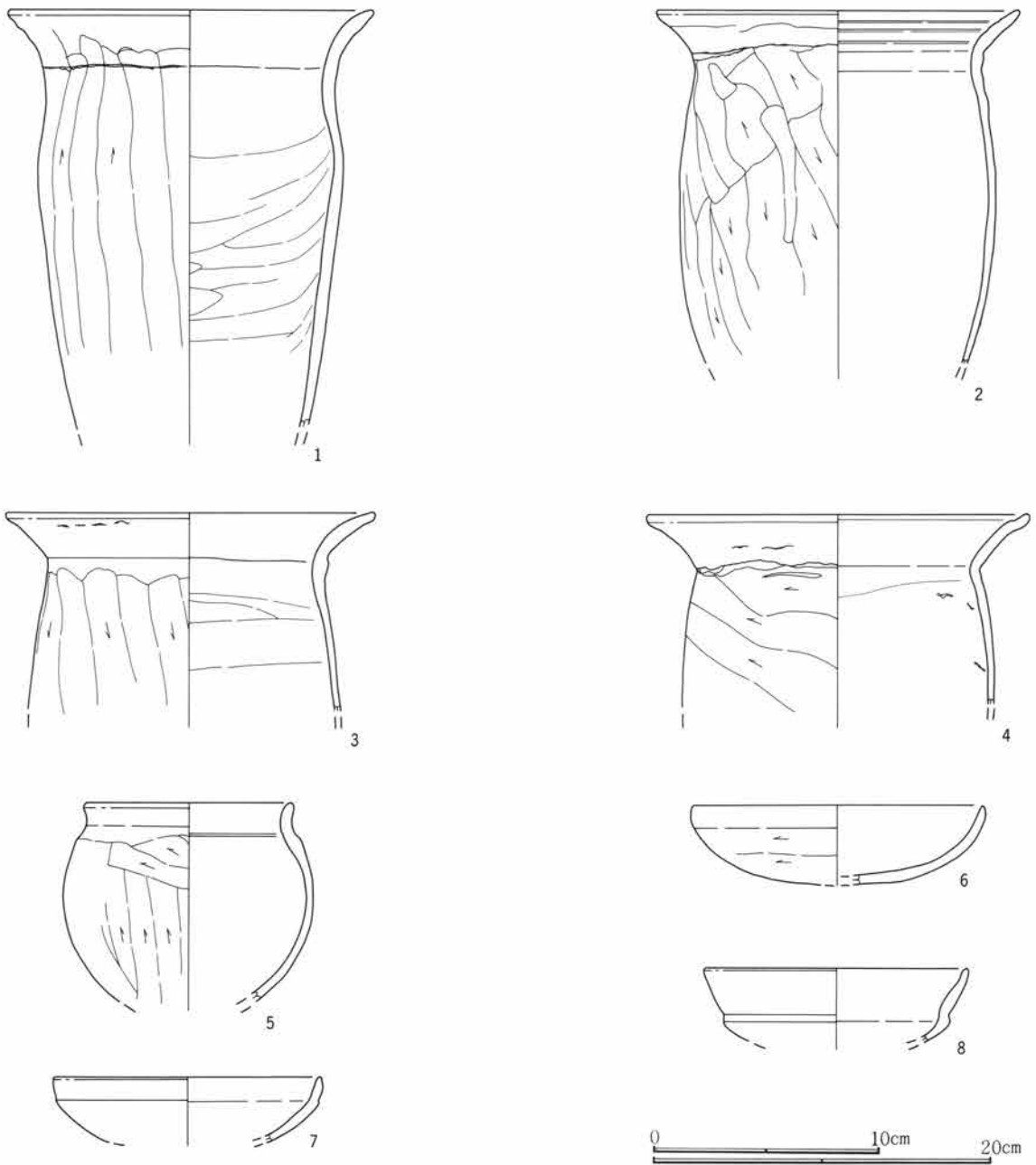


第256図 680号住居跡新北竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第257図 680号住居跡旧北竈実測図



第258図 680号住居跡出土遺物実測図

680号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
258-1 69	土師器 甕	床面直上 口縁部 胴部残存	口 21.4 高 — 底 —	①粗、3~5mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面強いヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。ヘラ削りが一部口縁部まで及ぶ。
258-2 69	土師器 甕	床面直上 口縁ほぼ完 胴部残存	口 21.4 高 — 底 —	①やや粗、1~3mmの長石粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削りにより器肉を薄く削っている。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部内側に3本の沈線あり。器肉の薄い甕である。
258-3 69	土師器 甕	床面直上 口~胴上	口 21.8 高 — 底 —	①やや粗、1~2mmの砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面強いヘラ削りで多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。胴部の器肉が薄い。
258-4	土師器 甕	床面直上 口縁部 胴上部	口(12.6) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。②酸化焰、硬質 ③浅黄橙色	胴外面強いヘラ削りで器肉を薄く削っている。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
258-5	土師器 小型甕 破片	覆土 破片	口(12.1) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を大量に含む。②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が移動し器表面が粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。小さな甕の小破片である。
258-6	土師器 坏 破片	覆土 破片	口(11.7) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部が短い。
258-7	土師器 坏 破片	覆土 破片	口(11.7) 高 — 底 —	①密、砂粒ほとんど含まず。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削りであるが、胎土が粉状を呈し削りの単位不明。内面ナデにより器表面密。
258-8	土師器 坏 破片	旧東竈内 床面直上 破片	口(11.5) 高 — 底 —	①密、粉状を呈する。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面はヘラ削りであるが、胎土が粉状を呈し削りの単位不明。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。坏の小さな破片である。

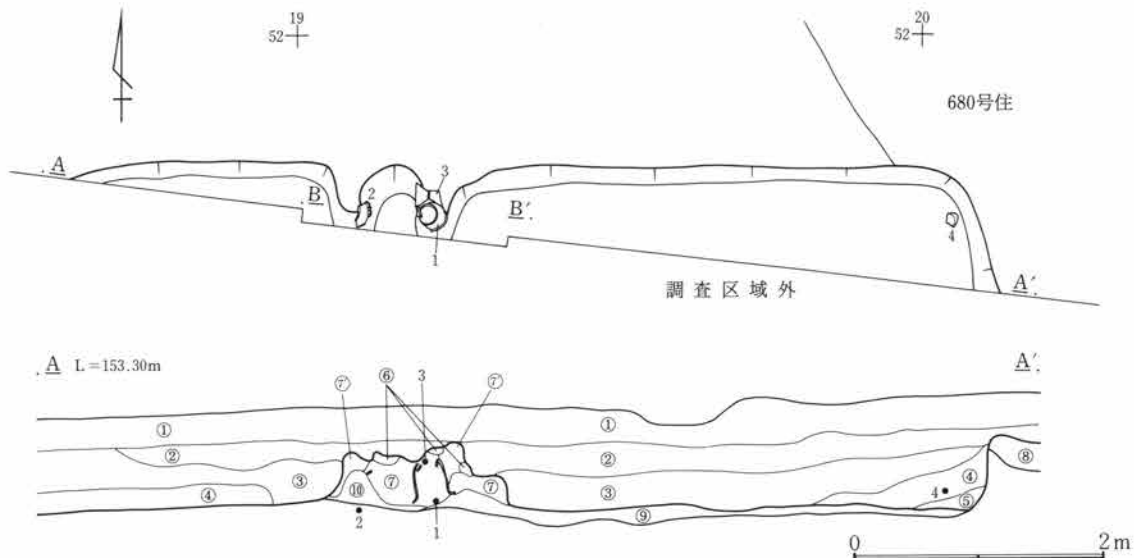
681号住居跡(第259~262図、図版38・39・69・70)

位置 本住居跡は、第9次調査区東端にあり、52-20グリッドに位置する。

概要 住居南側の大部分が調査範囲外であり、竈を含む北側の一部分が調査できただけである。また同じ古墳時代の680号住居と北東部分で重複しており、680号住居の南西部分を一部床下まで掘り込んでおり、本住居が新しい。竈が北壁に造られており、柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。

規模 東西南北とも不明である。壁高は北壁部分で42cmである。

遺物 竈の袖材として土師器の甕が3個使用されていた。また北東コーナー部分や覆土中より、土師器の坏や刀子の破片が出土している。



第259図 681号住居跡実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物

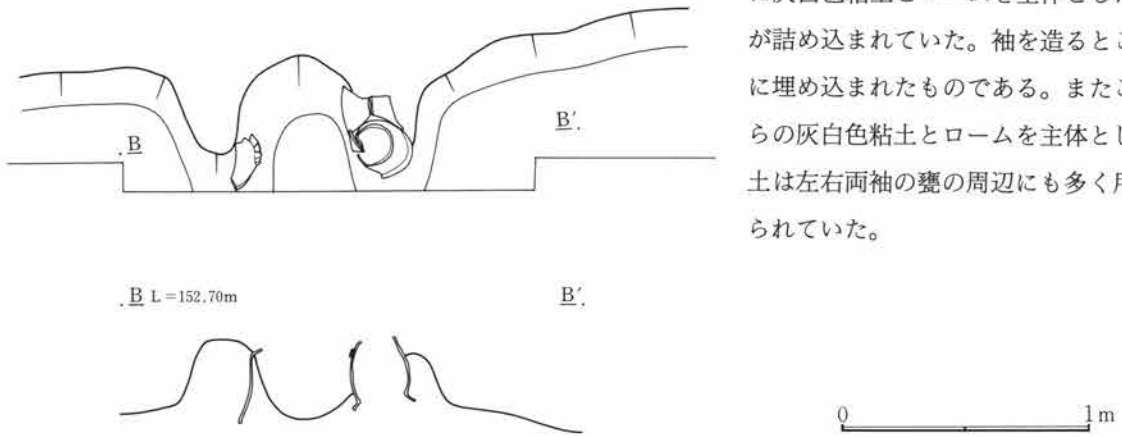
(681号住居跡)

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|-------------------------------|
| ①黒褐色土層 | 耕作土。0.2~0.5cmの白色軽石粒を多く含む軟質土。 | ⑦暗褐色土層 | 黒色土層中に多くのローム粒を含むが、焼土粒は含まず。 |
| ②黒褐色土層 | ①層にほぼ同じ。固く締まっている。 | ⑧褐色土層 | ロームを主とし、多くの黒褐色土を含む。(680号住居覆土) |
| ③暗褐色土層 | 少量のローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑨黄褐色土層 | 地山のロームを主とした層。 |
| ④暗褐色土層 | 多くのローム粒とローム小ブロックを含む。 | ⑩灰白色土層 | 灰白色粘土を主とした層。 |
| ⑤黒褐色土層 | 多くのローム粒を含む。 | | |
| ⑥灰白色土層 | 灰白色粘土を多く含む。多くの黒色土を混入する。 | | |
| ⑦暗褐色土層 | 黒色土層中に多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。 | | |

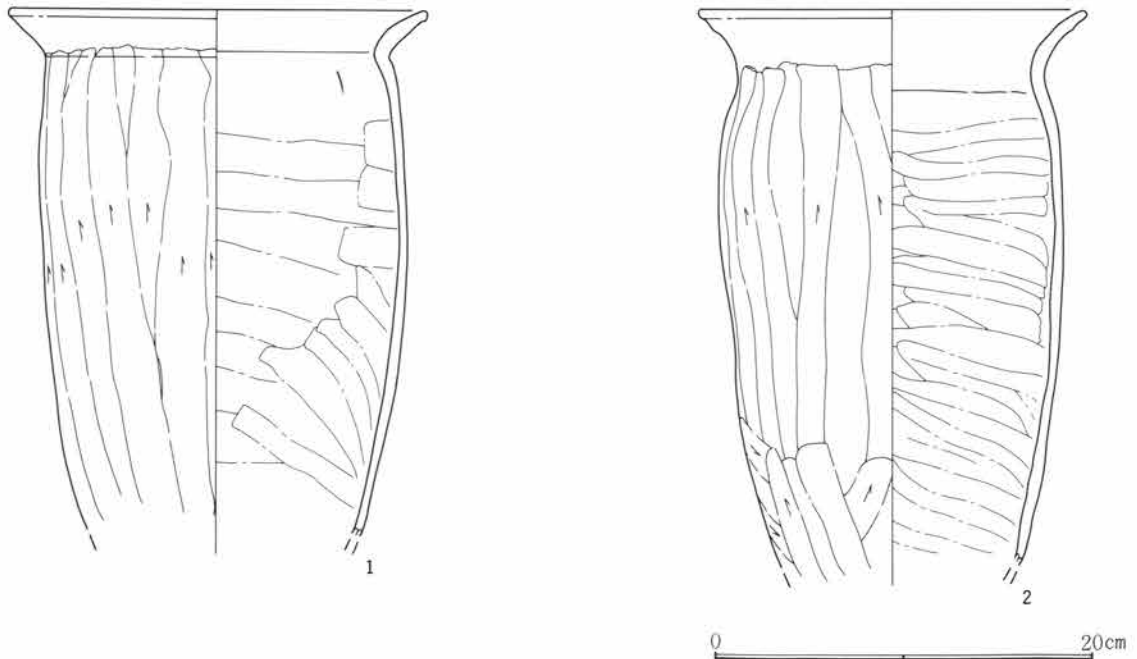
(竈)

概要 竈が北壁に造られており、両袖の手前部分は調査区域外であったが、多くの部分は調査できた。袖部分や燃焼部の多くが床面上に造られ、煙道部と燃焼部の一部が壁面を掘り込んで造られていた。右袖の芯材として、底部以外ほぼ完形の土師器甕が口縁部を下にして使われていた。左袖部には口縁部から胴底部までの1/2の土師器甕が右袖とは逆に口縁部を上にして使われていた。この甕は1/2のため中

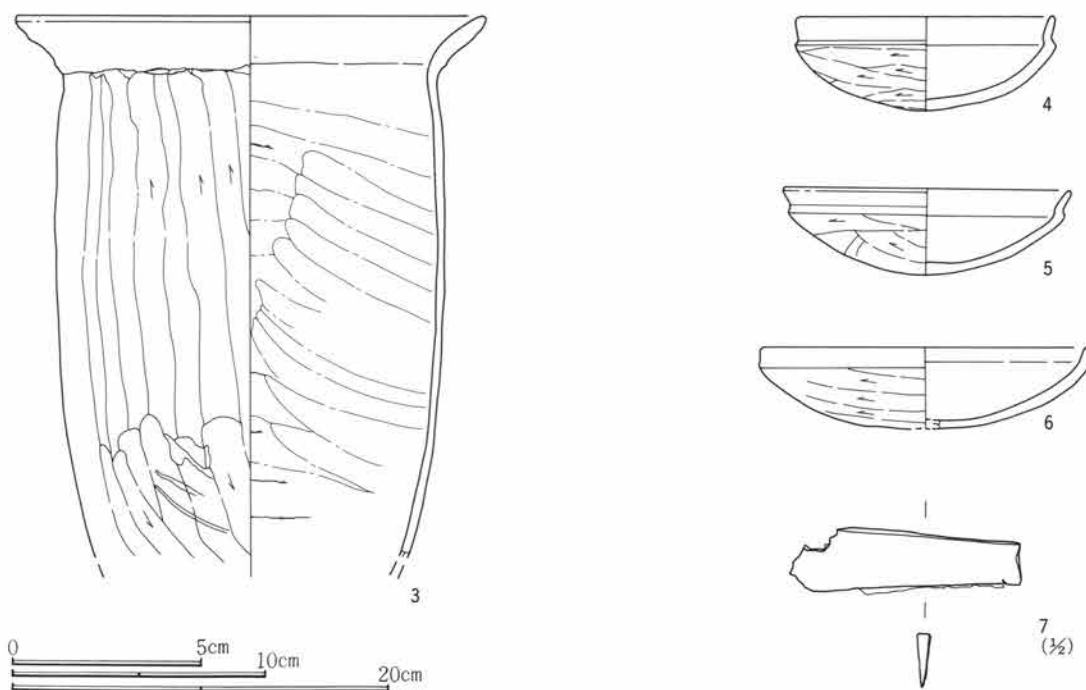
に灰白色粘土とロームを主体とした土が詰め込まれていた。袖を造るところに埋め込まれたものである。またこれらの灰白色粘土とロームを主体とした土は左右両袖の甕の周辺にも多く用いられていた。



第260図 681号住居跡竈実測図



第261図 681号住居跡出土遺物実測図(1)



第262図 681号住居跡出土遺物実測図(2)

681号住居跡出土遺物観察表

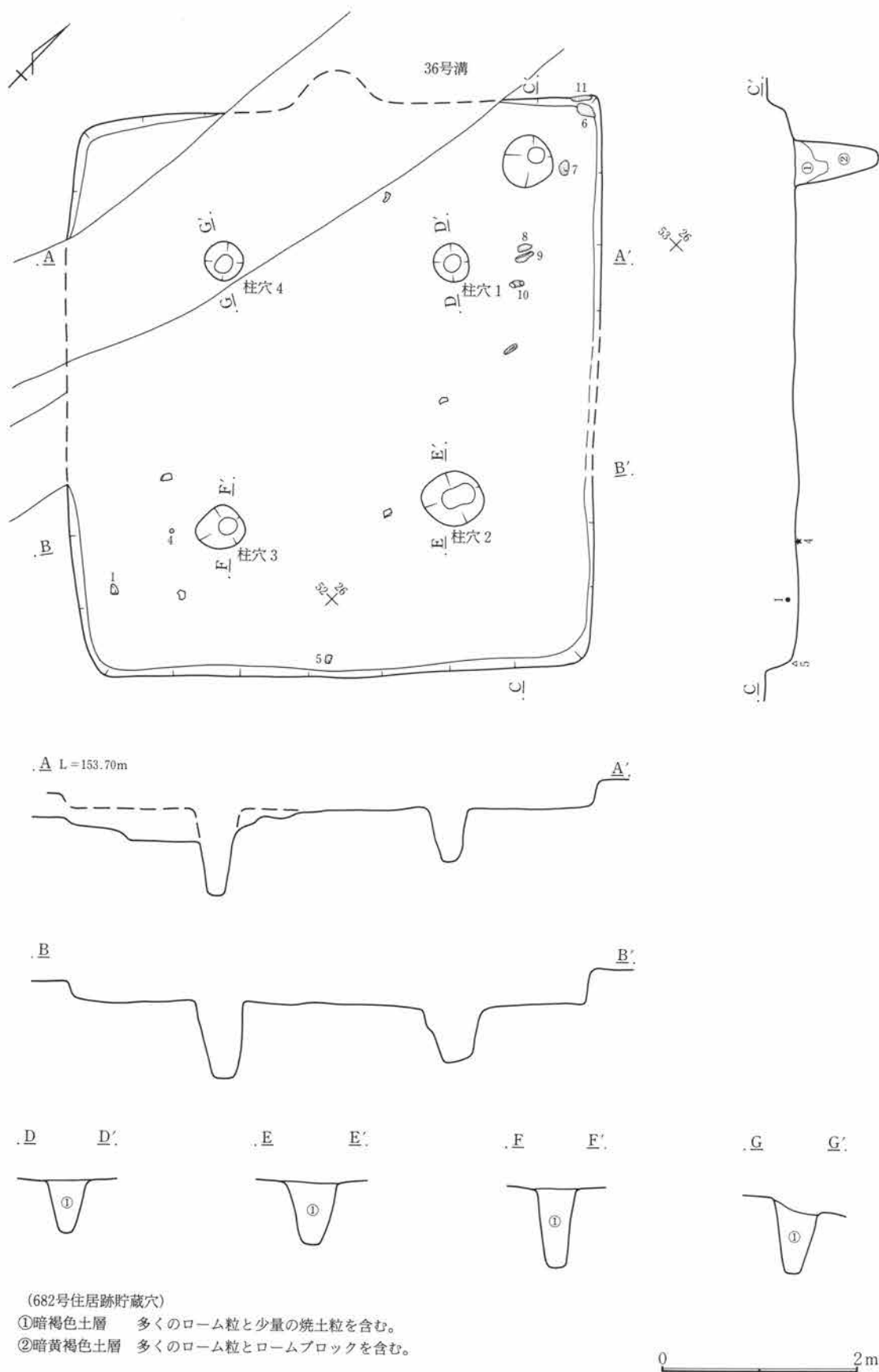
挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
261-1 69	土 師 器 甕	竈内+5 口~胴下部 ほぼ完形	口 22.0 高 — 底 —	①やや粗、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面~口縁 橙色・胴外面にぶい橙色	胴外面強いヘラ削りで削りの単位が明瞭。砂粒が移動しやや粗い。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。
261-2 69	土 師 器 甕	竈内直上 1/2残存	口(20.4) 高 — 底 —	①粗、1~2mmの長石粒を多く 3~5mmの片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胴下半の一部に焼けた粘土が付着。
262-3 69	土 師 器 甕	竈内+37 口~胴下半 1/2残存	口(24.8) 高 — 底 —	①粗、3~5mm長石粒と片岩粒 を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③にぶい橙色・一部黒褐色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデで器表面密。
262-4 69	土 師 器 坏	床面+12 1/2残存	口 10.1 高 3.7 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部の短い小さな坏である。
262-5 69	土 師 器 坏	覆土 1/4残存	口(11.3) 高 3.4 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部の短い小さな坏である。
262-6 69	土 師 器 坏	覆土 1/4残存	口(12.9) 高 — 底 —	①密、1mm以下の砂粒を少量含 む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。口縁部が特に短く、直立気味に立ち上がる。
262-7 70	鉄 製 品 刀 子	覆土	長 6.0 幅 1.7 厚 0.4 重 7.1		刀子の破片である。棟や刃部が良く残っている。砥ぎ減りにより先端部が細くなっている。

682号住居跡(第263・264図、図版39・69・71・72)

位置 本住居跡は、第8次調査区南部にあり、53-26グリッドに位置する。

概要 36号溝により北側部分を東西方向に、また東壁中央部を電柱の敷設により削られ、電柱を支える線が住居の南東部分に埋められていた。このように多くの部分が壊されており、残りの悪い住居であった。竈も残っていなかったが、貯蔵穴と思われる掘り込みが北東コーナーに掘られていたため、36号溝により削り取られた北壁中央部分に竈が築かれていたものと思われる。

構造 床面は多くのロームブロックを主とし、多くの暗褐色土の混入した土で造られていた。柱穴が4本掘



(682号住居跡貯蔵穴)

- ①暗褐色土層 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- ②暗黄褐色土層 多くのローム粒とロームブロックを含む。

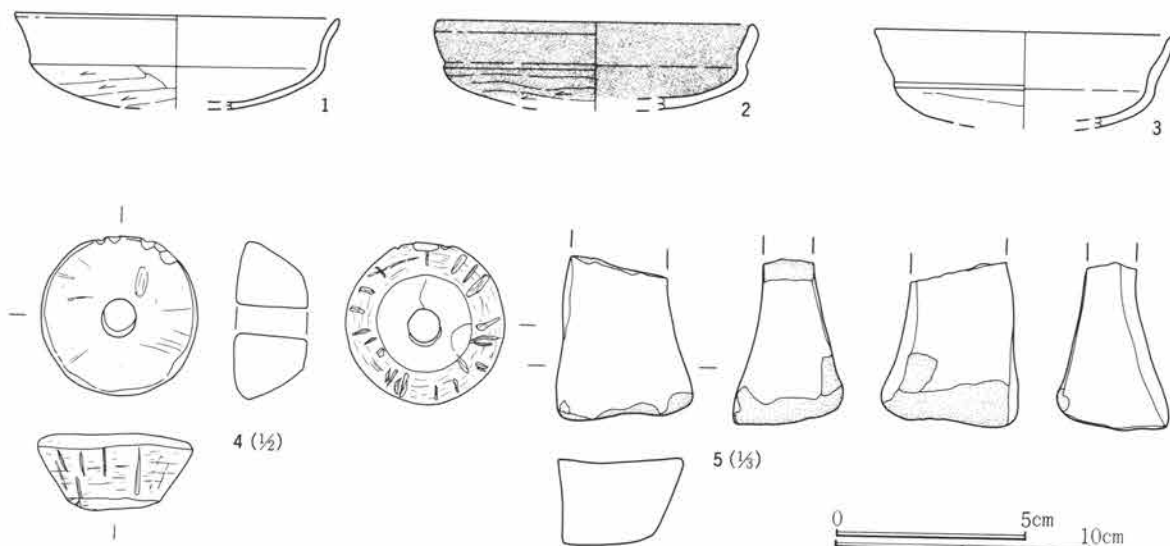
第263図 682号住居跡実測図

られ、北東コーナーに貯蔵穴が掘られていた。壁溝は掘られていなかった。

規模 東西5.4m、南北5.65mである。壁高は残りの良い東壁部分で36cmである。柱穴1は径38cm深さ49cm、柱穴2は径53cm深さ59cm、柱穴3は径48cm深さ82cm、柱穴4は径39cm深さ86cmである。貯蔵穴は径52cm深さ80cmでほぼ円形を呈する。

遺物 南東の床面付近より土師器の坏と石製紡錘車が、また覆土中より砥石が出土している。

床下 多くの小穴が掘られていたが、床下土坑は掘られていなかった。



第264図 682号住居跡出土遺物実測図

682号住居跡岩土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
264-1 69	土師器 坏	床面+9 1/2残存	口(12.8) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。胎土がやや粉状を呈する。
264-2	土師器 坏	覆土 破片	口(13.1) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③内面黒色・断面にぶい黄橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内面と口縁部外側は黒漆か。
264-3	土師器 坏	覆土 破片	口(11.9) 高— 底—	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。小さな坏の破片である。
264-4 71	石製品 紡錘車	床面直上 完形	径 4.2/2.5 孔径 0.8 厚 2.0 重 46.6		側面に鑿と思われる大きな工具痕があり装飾の一種と思われる。表面全体が目の細かい砥石で磨かれている。蚊紋岩。
264-5	石製品 砥石	床面直上	長 (6.4) 幅 5.4 厚 3.2 重 150		4側面を砥石としている。底面は自然面である。石英粗面岩。
6	こも編み 石	床面+14	長 15.0 幅 6.0 厚 3.5 重 350		緑泥片岩。両側面中央部がわずかに凹状を呈する。一部欠損。
7	こも編み 石	床面+17	長 16.5 幅 8.5 厚 3.5 重 630		点紋絹雲母石墨片岩。偏平な石である。両側面中央部に凹状部はほとんど認められない。
8	こも編み 石	床面+9	長 17.5 幅 6.9 厚 3.5 重 550		緑簾緑泥片岩。やや偏平な石である。両側面中央部に凹状部はほとんど認められない。
9	こも編み 石	床面+9	長 16.0 幅 5.5 厚 3.8 重 420		点紋絹雲母石墨片岩。小さな石である。不均衡である。
10	こも編み 石	床面+12	長 14.5 幅 6.9 厚 2.9 重 320		絹雲母石墨片岩。小さな石である。両側面中央部に小さな凹状部がわずかに認められる。上下端部が一部欠損。
11	こも編み 石	床面+28	長 15.1 幅 6.1 厚 2.6 重 350		点紋緑泥片岩。偏平な石である。両側面中央部に小さな凹状部あり。一部欠損。

683号住居跡(第265・266図、図版39・40)

位置 本住居跡は、第9次調査区東端部にあり、53・54-20グリッドに位置する。

概要 極めて残りの悪い住居であり、床面は殆ど残っていなかった。床面調査段階で貯蔵穴は確認できたが、柱穴は床下調査段階でしか確認できなかった。竈の残りも極めて悪かった。住居南西コーナーを平安時代の670号住居により床下まで掘り込まれ、北側は両側に側溝を持つ道路遺構により床下部分まで掘り込まれていた。

構造 床面は明瞭でなかったが、多くのロームブロックと暗褐色土を主とした土で造られていたようである。柱穴が4本、竈が東壁の南寄りに造られ、竈の右側に貯蔵穴が掘られていた。

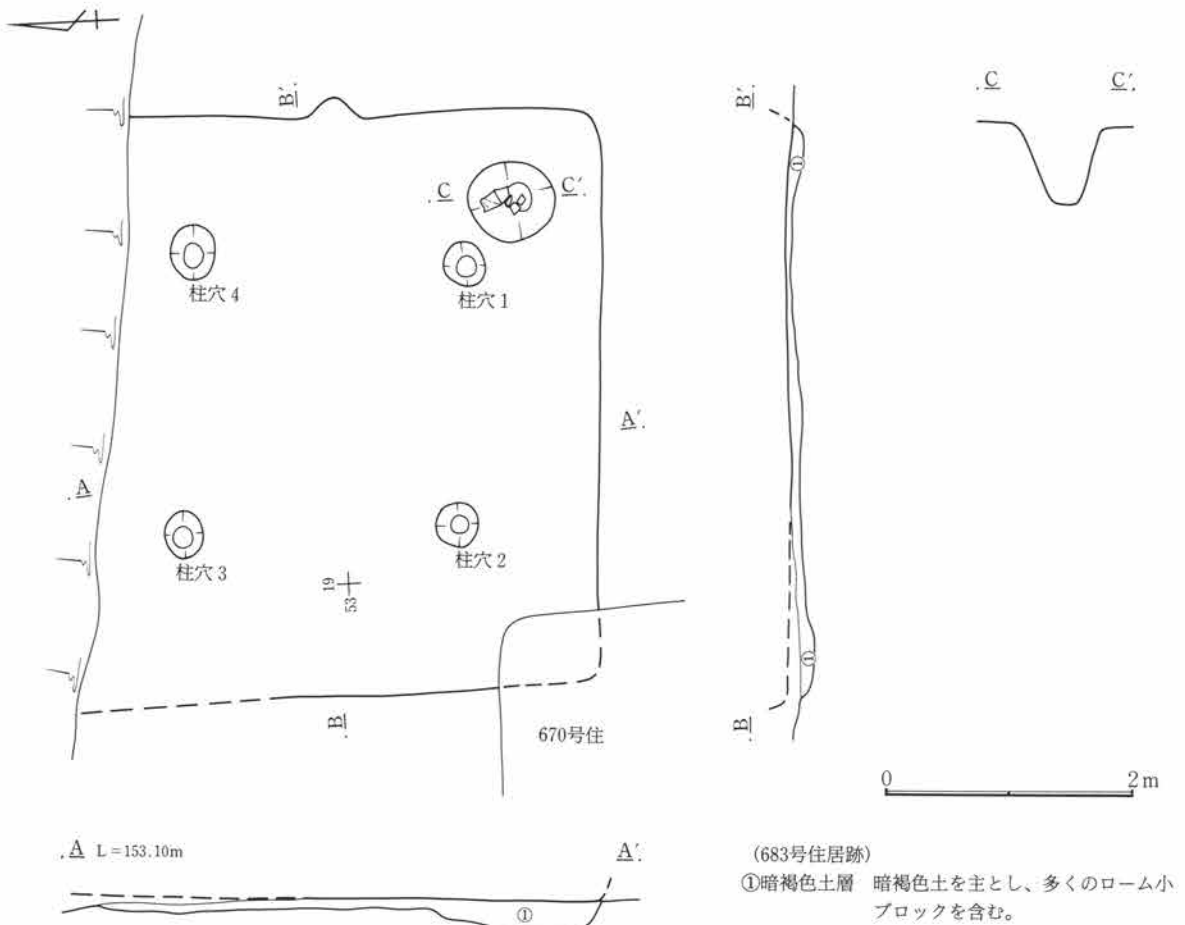
規模 東西4.56m、南北は不明である。壁高は殆ど無し。柱穴1は径34cm深さ54cm、柱穴2は径36cm深さ70cm、柱穴3は径30cm深さ68cm、柱穴4は径34cm深さ55cmである。貯蔵穴は径54cm深さ62cmでほぼ円形を呈する。

遺物 覆土中より、少量の土師器の甕や坏の破片が出土している。図示できたのは坏1個であった。

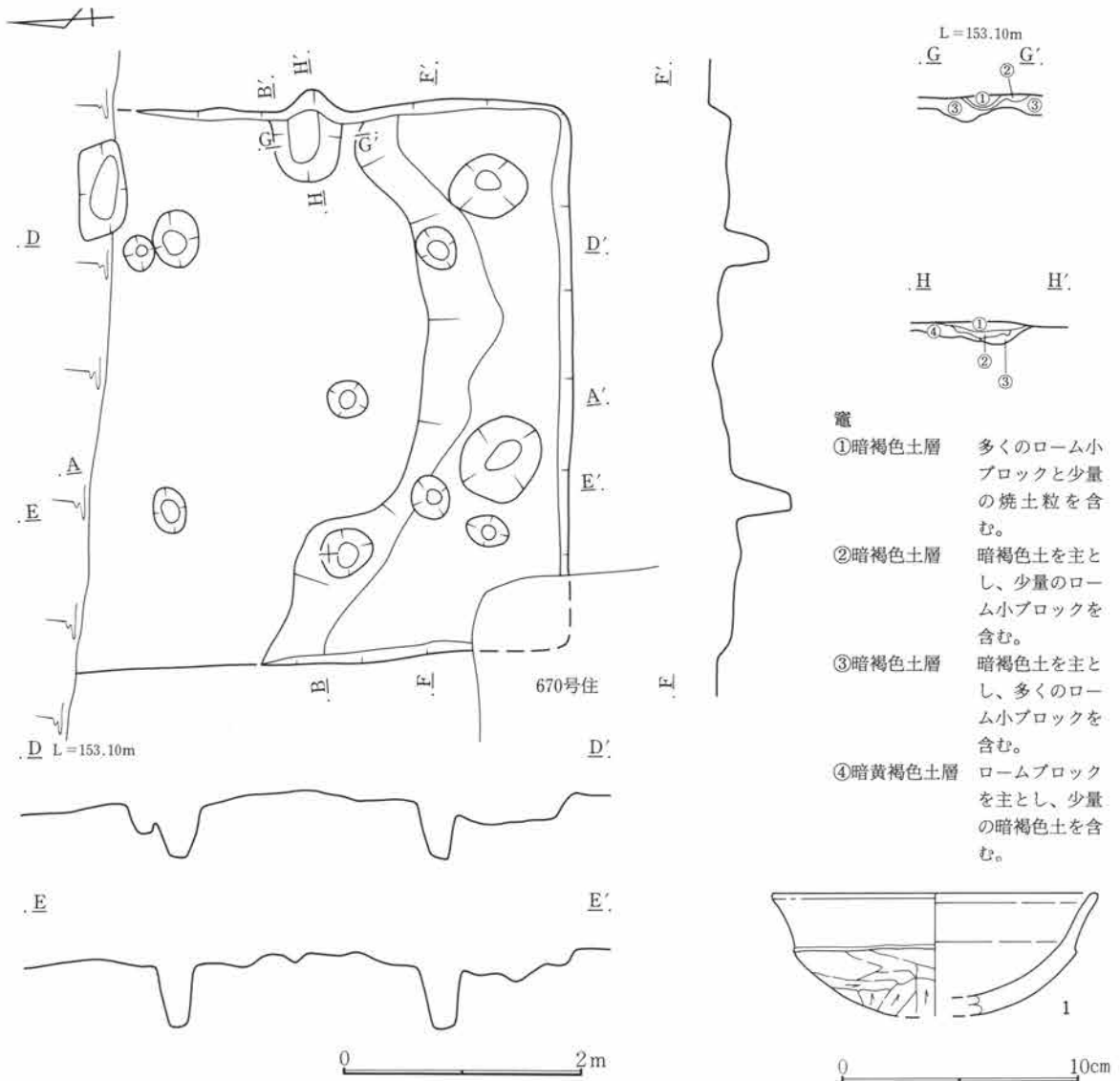
床下 床下調査の結果、多くの小穴が確認された。

(竈)

概要 住居東壁に造られていたが、残りが悪く燃焼下部と煙道部の一部が残っていたのみであり、袖部は全く残っていなかった。焼土粒の出土も僅かであった。



第265図 683号住居跡実測図



第266図 683号住居跡床下・竈・出土遺物実測図

683号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
266-1	土師器 環	覆土 1/4残存	口(13.6) 高— 底丸底	①密、1mm以下の砂粒を少量含む。②酸化焰、硬質 ③橙色	底面へラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。稜は低いが明瞭である。器肉の厚い環である。

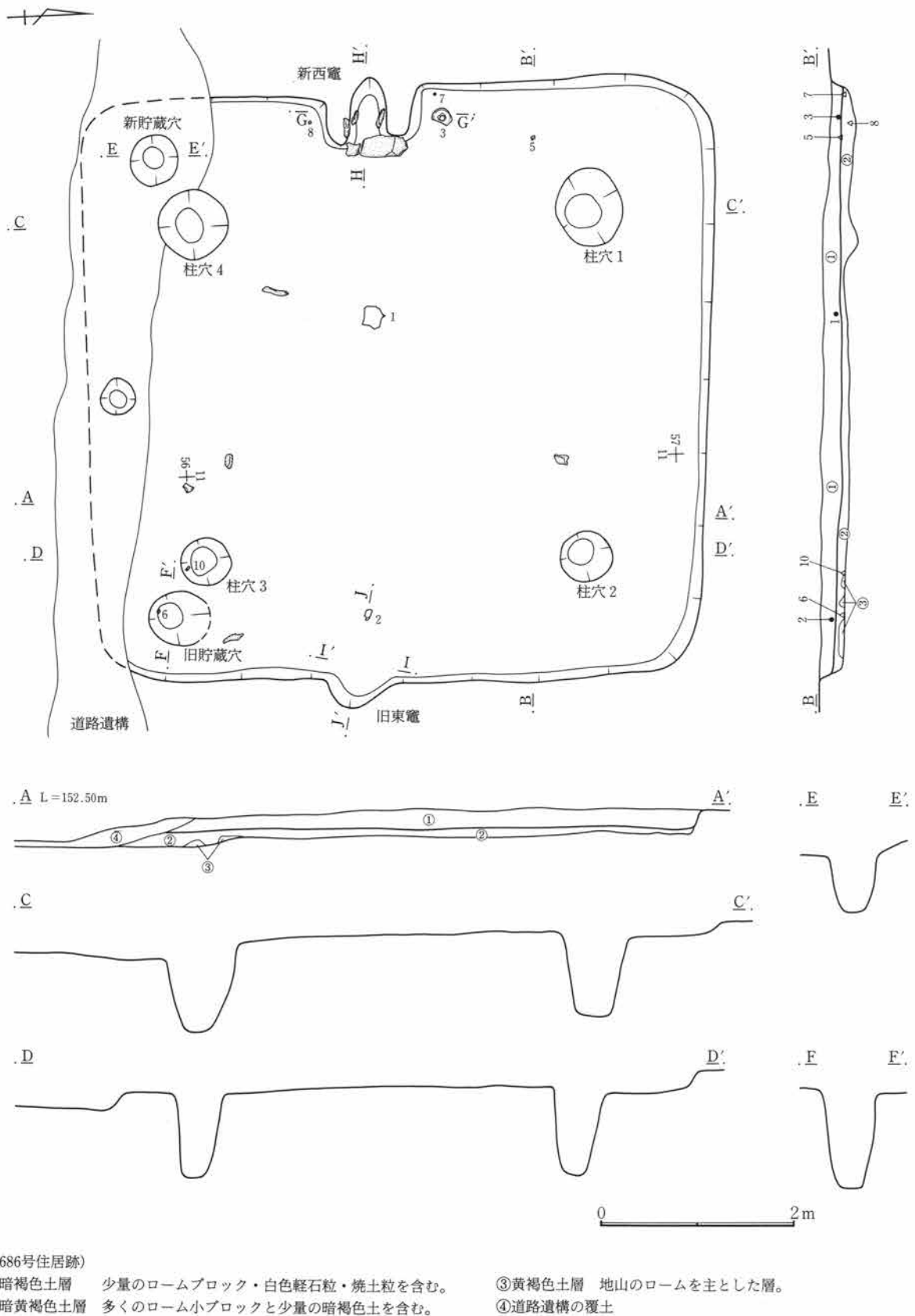
686号住居跡 (第267~269図、図版40・69・70・71)

位置 本住居跡は、第7次調査区南部にあり、57-11・12グリッドに位置する。

概要 南側の低くなるなだらかな傾斜面に位置し、覆土上面の多くは削り取られ残りは悪かった。南側を両側に側溝を持つ道路遺構により、床面下まで掘り込まれている。南側の住居範囲は確認できなかった。

構造 床面は多くのローム小ブロックと暗褐色土を主とした土で造られていた。柱穴は床面調査段階では明確に確認できず、床下調査により4本確認された。竈が西壁と東壁に造られていたが、東壁面の竈は、西竈と異なり床面上に位置する燃烧部や袖部はすべて取り除かれていた。そのため西竈が最後まで使われていた新竈であり、東竈が旧竈であった。新竈の左側と旧竈の右側に貯蔵穴が確認された。

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第267図 686号住居跡実測図

規模 東西6.06m、南北は壁面のカーブや柱穴の位置から推定6.5mである。壁高は残りの良い北東コーナー部分で20cmである。柱穴1は径66cm深さ83cm、柱穴2は径56cm深さ89cm、柱穴3は径50cm深さ90cm、柱穴4は径70cm深さ101cmである。旧貯蔵穴は径54cm深さ101cm、新貯蔵穴は径48cm深さ84cmであった。

遺物 7個の滑石製品や未製品が、また土師器の甕や坏が出土している。竈周辺より出土している滑石製品が注目される。

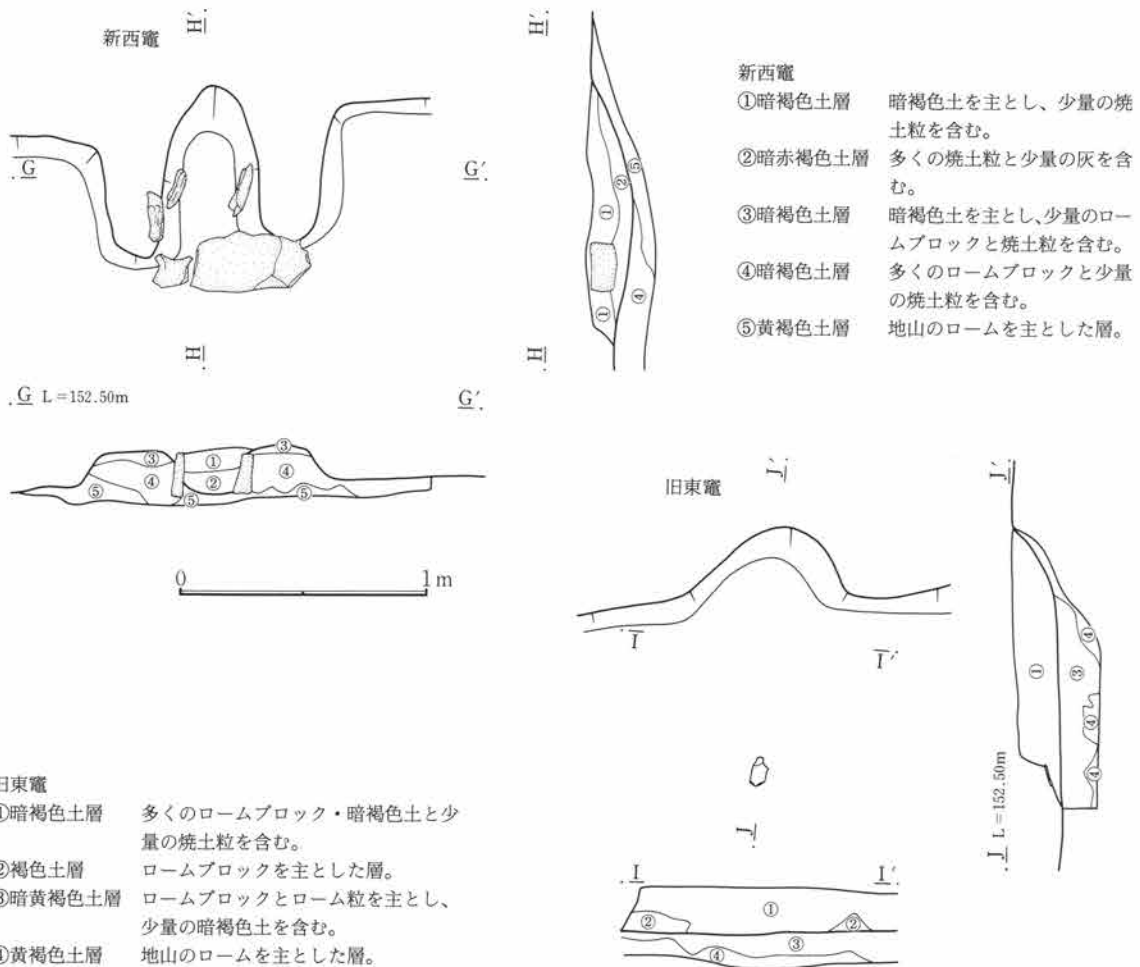
(新西竈)

概要 住居西壁南寄りに造られている。両袖石がほぼ使用時の状態で、また天井石が焚口部の床面上に落ちた状態で出土した。本来燃焼部や煙道部はもっと大きく造られていたものと思われるが、上部の多くが攪乱により削り取られていたため残りは良好でなかった。このようにこの竈はロームを多く用いて焚口部に袖石と天井石を用いて造られた竈である。燃焼部から多くの焼土粒が出土した。

規模 両袖方向106cm、煙道方向70cmである。

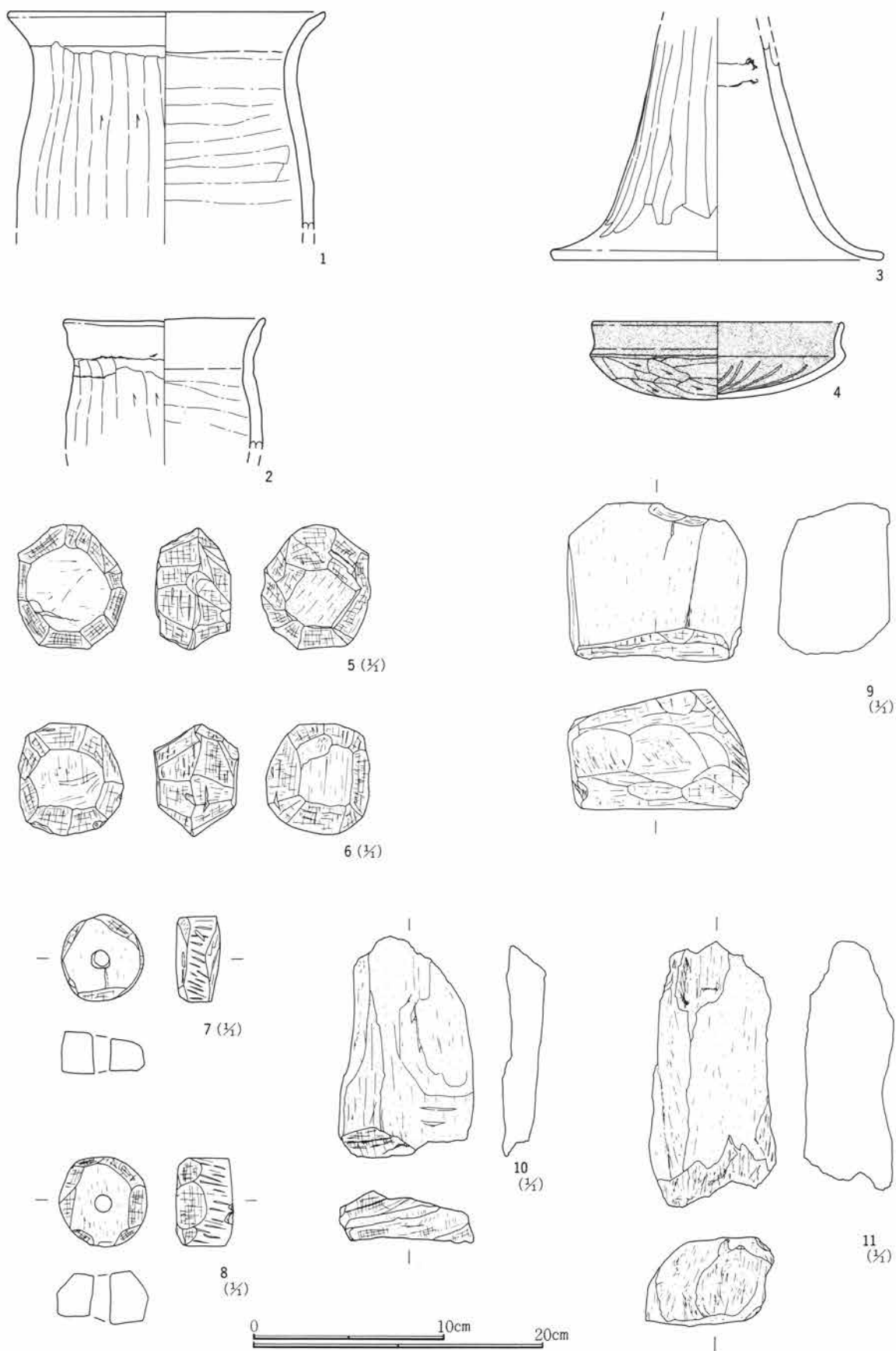
(旧東竈)

概要 住居東壁南寄りに造られている。床面上の袖部や燃焼部はすべて取り除かれていた。壁面を掘り込まれて造られている煙道部の覆土も多くが残っていないが、焼土粒は多く含むが、住居の覆土に近い土で埋まっていた。燃焼部の位置する床面下からも焼土粒の出土は少なかった。



第268図 686号住居跡新西竈・旧東竈実測図

第3章 古墳時代の遺構と遺物



第269図 686号住居跡出土遺物実測図

686号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	土器種別 器種	出土状態 残存状況	法量(cm) (g)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴・備考
269-1	土器 甕	床面直上 口縁部破片 胴部 $\frac{3}{4}$ 残存	口(21.6) 高 — 底 —	①粗、3~6mmの長石粒と片岩粒を少量含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	胴外面ヘラ削り。多くの砂粒が目立つ。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。器肉の厚い甕である。
269-2 69	土器 小型甕	旧東竈内 +8 口~胴上 $\frac{1}{2}$	口(13.8) 高 — 底 —	①粗、3~5mmの長石粒と少量の片岩粒を含む。 ②酸化焰、硬質 ③にふい赤褐色	胴外面ヘラナデ。一部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密であるが大きな砂粒が目立つ。全体に歪んでいる。
269-3	土器 高杯	床面直上 脚部 $\frac{3}{4}$ 残存	口 — 高 — 底 16.8	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③橙色	脚部外面ヘラナデ。内面はナデにより輪積痕をていねいに消している。黒斑は全く認められない。
269-4 69	土器 杯	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$ 底部ほぼ完	口(12.8) 高 4.0 底 丸底	①密、1mm以下の砂粒を多く含む。 ②酸化焰、硬質 ③内面一部黒色・他にふい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデにより器表面密。内側底面に放射状のヘラ磨き。均整がとれて、歪みのない杯であり口縁部も水平。
269-5 71	石製品	床面直上	長 21 幅 1.8 厚 1.3 重 6.7		側面は鑿を用いて削る。上下面は自然面。なつめ玉の未製品か。滑石片岩。
269-6 71	石製品	床面直上	長 1.9 幅 1.8 厚 1.4 重 6.5		側面荒砥削り。上下面は自然面。なつめ玉の未製品か。滑石片岩。
269-7 70	石製品 白玉	床面-5	径 1.4 孔径 0.3 厚 0.7 重 2.3		側面荒砥削り。上下面は自然面で凹凸が多い。滑石片岩。
269-8 70	石製品 白玉	床面-9	径 1.5 孔径 0.25 厚 0.95 重 3.5		側面上端鑿、他の側面荒砥削り。上下面は自然面で凹凸が多い。滑石片岩。
269-9 70	石製品	覆土	長 2.7 幅 3.1 厚 2.0 重 26.6		上下の側面鉄製工具を用いた削りと思われる。他の面は自然面。滑石片岩。未製品。
269-10 70	石製品	ピット内 -6	長 3.7 幅 2.3 厚 0.8 重 8.5		左下端部鑿を用いた削り。他は加工痕なし。滑石片岩。剥片。
269-11 70	石製品	覆土	長 4.5 幅 2.2 厚 1.5 重 20.5		加工痕なし。滑石片岩。剥片。

第4章 調査成果の整理とまとめ

第1節 住居の時期決定について

住居の年代や時期の決定は、多くの場合住居の形態や竈の有無と住居内より出土する土器等をもって決められている。その中でも時期決定に出土土器の占める割合は大きい。本遺跡の古墳時代の住居の整理作業を進める中で、時期決定に用いるための土器編年作業が必要となり土器の検討を行った。矢田遺跡周辺より出土する土器の中で、この地域に多く出土する土師器の模倣坏に注目しこの坏を土器変遷の軸として須恵器の坏と土師器の甕・高坏等を参考にしながら時期決定を行った。矢田遺跡の古墳時代の住居は137軒が未整理のため不確実な要素も多く、今後土器に対する考え方の変更も充分考えられるが、整理途中段階に於ける模倣坏の土器変遷について基本的な考え方の該要を記す。次年度以降に古墳時代の住居の整理が終了する段階で土器全体について検討してみたい。

前提 模倣坏は基本的に須恵器の坏身や坏蓋の変化に対応している。

模倣坏の稜から上の口縁部は、時期が新しくなるにつれて短く(低く)なる。

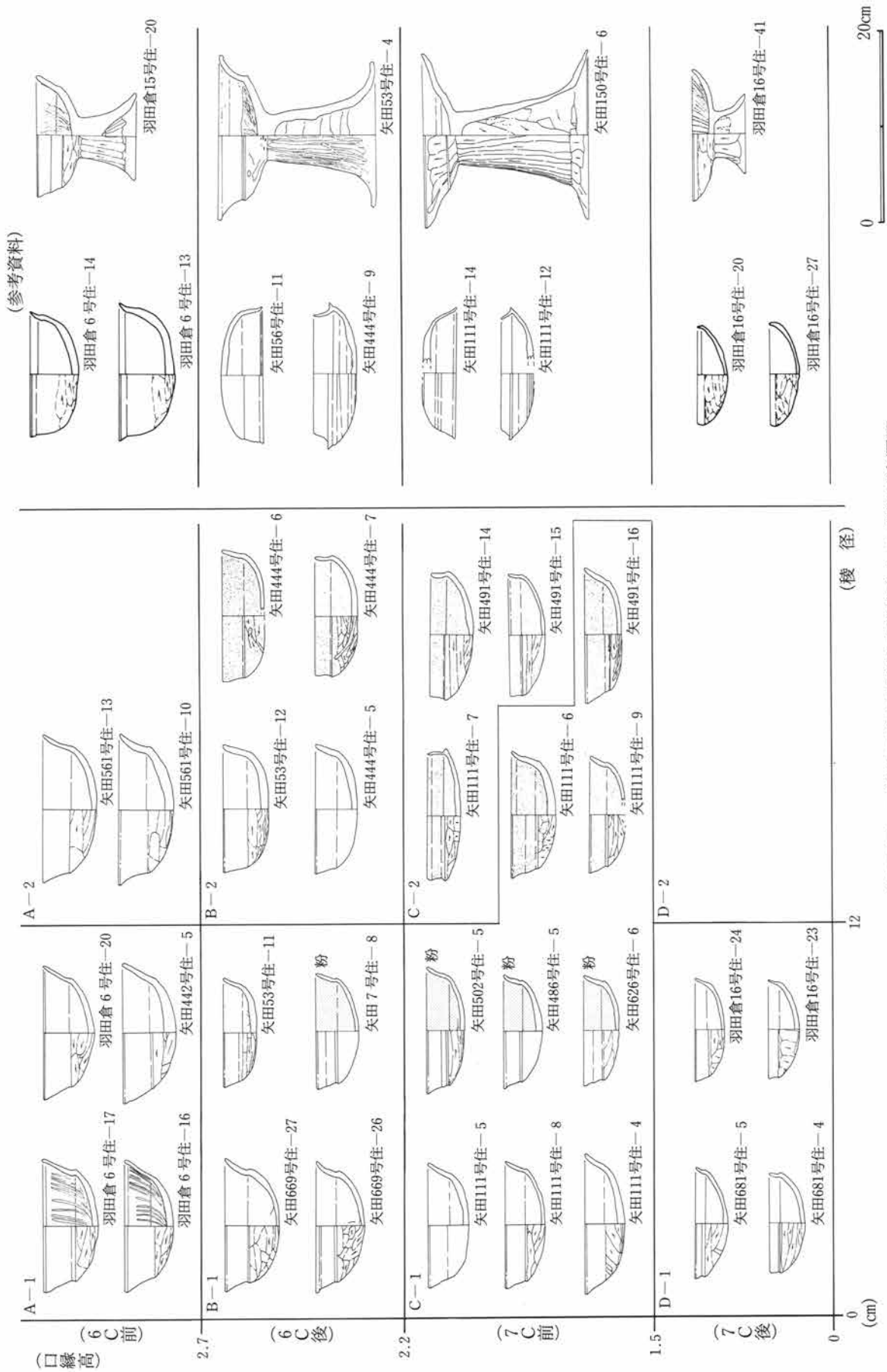
方法 模倣坏の口径は様々であるが、稜の部分の径で見ると12cmを境に大きく2つのグループに分かれる。

この口縁部の高さと同径の大きさから6つのグループに分けて、数値の大小・硬質や粉状の胎土の違いまた漆の塗布の有無や色調による黒褐色・橙色・黄橙色等の色調の違いさらにヘラ削りの有無等から時期の区分を行う。

以下に6グループに分けた特色について概要をまとめた。

各時期の模倣坏の特色

2.7 cm	A-1 (6C前)	<ul style="list-style-type: none"> ●口縁部が高く、外側に大きく開く。 ●放射状のヘラ磨きの行なわれる坏が多い。 ●胎土は固く一部の製品は赤褐色。 	A-2 (6C前)	<ul style="list-style-type: none"> ●A-1の坏の大型品である。 ●放射状のヘラ磨きはほとんどない。 ●胎土や色調もA-1にほぼ同じ。 ●A-1の坏同様に一部に黒斑あり。
	B-1 (6C後)	<ul style="list-style-type: none"> ●A-1の坏の系譜を引く坏。 ●胎土が粉状を呈し、黄橙色の坏の出現。(胎土が手に付着し、黒斑はない。) ●有段口縁坏の出現。 	B-2 (6C後)	<ul style="list-style-type: none"> ●TK10型式に近い模倣坏出現。 ●有段口縁坏の出現。 ●黒色土器の出現。(口縁部外側と内側全面に漆の塗布あり、坏身と坏蓋が存在)
2.3 cm	C-1 (7C前)	<ul style="list-style-type: none"> ●TK43型式に近い模倣坏出現。 ●B-1の段階に出現した胎土が粉状で黄橙色の坏は引き続き存在。 ●有段口縁の坏が引き続き存在。 	C-2 (7C前)	<ul style="list-style-type: none"> ●TK43型式に近い模倣坏出現。 ●黒色土器が多数を占め、その中で坏身が特に多い。 ●黒色土器の坏蓋の稜径は12cm以下となり、この領域の中には入らない。
1.5 cm	D-1 (7C後)	<ul style="list-style-type: none"> ●この段階の坏は模倣坏からしだいに半球形の坏へと移行してゆく。 ●口縁部の非常に短い模倣坏が存在。 ●胎土が粉状を呈する坏は基本的に存在しない。 	D-2 (7C後)	<ul style="list-style-type: none"> ●C-2の坏の一部がこの数値内に残るが、基本的にこの領域内に模倣坏は存在しない。
0 cm				



第270図 口縁部の高さと同径を基準とした模倣変遷図

住居規模一覧表

住居No.	時期	グリップド	規模EW×SN(m)	面積(m ²)	壁高(cm)	主軸方向	竈			貯蔵穴			柱穴	柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		
							位置	天井	袖	数	形状	径(cm)		深さ(cm)	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ
5	6 C後	37・38-35・36	2.80×2.80	7.75	27	N-59°-E	東	-	-	2	円形楕円	30 62×48	26 41	-	-	-	-	-	-	-	-	
6	7 C前	36-35・36	5.68×5.80	31.44	21	N-91°-E	東	-	○	1	円形	45	78	4	34	72	44	56	38	72	40	72
7	6 C後	33-37・38	5.82×5.78	33.44	25	N-85°-E	東・北	石	○	2	円形	70 52	64 53	4	52	57	62	57	58	57	45	60
34	7 C前	31-37・38	—×4.80	—	18	N-26°-W	北	石	-	1	円形	45	78	4	42	60	44	64	50	78	46	64
38	6 C後	31・32-34	6.96×6.45	43.56	43	N-26°-W	北・東	-	-	2	円形	58 48	90 84	4	48	79	54	88	44	78	53	78
39	6 C後	34-35	6.12×6.22	(38.0)	32	N-81°-E	東	-	○	1	円形	66	112	4	50	64	50	54	44	58	53	53
41	7 C前	35・36-34・35	5.4×5.4 4.8×4.9	28.88	27	N-5°-W	北・東	-	-	2	円形	52 50	80 74	4	42	62	48	58	48	68	43	72
44	7 C前	33-33・34	7.2×7.1 6.1	47.25	68	N-15°-W	東・北・東	-	○	3	円形	52 68 62	56 86 61	4	54	84	64	76	64	62	62	94
45	7 C前	32-37	5.1×5.15	25.63	38	N-86°-E	東	-	○	1	円形	65	54	4	44	70	54	62	43	62	52	75
49	6 C後	31-32・33	5.2×5.3	27.44	40	N-74°-E	東	長壁	-	1	円形	50	48	4	36	56	32	72	48	78	36	62
53	6 C後	46-32	6.5×6.2	40.13	41	N-15°-E	北	-	-	1	円形	62	82	4	52	80	55	81	48	72	58	72
56	6 C後	46-34	7.4×—	—	30	N-91°-E	東	石	-	1	楕円	132×86	85	2	50	66	53	52	-	-	-	-
58	6 C後	42-30・31	5.62×—	—	35	N-16°-W	-	-	-	-	-	-	-	4	50	98	52	88	48	78	48	71
59	6 C後	42-33	7.1×(7.2)	(50.88)	40	N-92°-E	東	石	-	2	円形	78 76	102 96	4	66	88	65	86	62	76	62	102
62	6 C後	43-35	5.58×5.62	31.31	31	N-94°-E	東	-	-	1	円形	56	80	4	53	87	52	87	52	73	56	98
65	6 C後	45-40	(4.3)×4.4	—	25	N-4°-W	北	-	-	1	円形	105	28	4	30	86	36	57	43	53	46	59
67	6~7C	51-27	2.7×3.08	7.88	-	N-82°-E	東	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
68	6 C後	53-30	7.3×(6.5)	—	52	N-91°-E	東	-	-	1	円形	66	88	4	56	60	52	25	54	44	56	68
100	6 C後	35-33	3.3×3.3	9.94	30	N-101°-E	東	-	-	1	方形	42×44	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-
102	6 C後	36-33	4.55×4.34	19.25	25	N-37°-W	北	石	-	-	-	-	-	4	36	30	40	49	-	-	38	37
104	7 C前	37-32・33	4.45×4.65	20.69	44	N-85°-E	東	-	-	1	円形	70	85	4	40	58	46	56	49	68	39	61

第1節 住居の時期決定について

住居 No.	時期	グ リ ッ ド	規模E×W×S×N(m)	面積(m ²)	壁高 (cm)	主軸方向	電		周溝	貯 蔵 穴			柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)			
							位置	天井		軸	数	形 状	径(cm)	深さ(cm)	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ
106	6 C後	32・33-33	6.5 × 6.3	—	34	N-24°-W	—	—	—	2	円形	52 53	(75) 65	43	55	60	53	52	52	(85)		
111	7 C前	39・40-34	5.45 × 5.25	28.56	26	N-89°-E	—	—	—	1	円形	78	58	48	—	—	43	72	56	62		
150	7 C前	53-28・29	(7.0) × 6.9	—	42	N-98°-W	石	石	—	2	円形	76 68	76 73	4	55	78	58	58	78	96		
152	6 C後	46・47-28・29	5.8 × 6.0 4.6 × 4.8	34.44	37	N-98°-W	石	石	—	3	円形	58 46 52	86 81 73	4	55	79	62	73	68	73		
153	7 C前	45-29	4.36 × 4.06	17.06	34	N-66°-E	石	—	—	1	円形	46	43	4	38	35	40	37	38	67	42	
155	6 C後	52-29	— × 4.6	—	25	N-88°-E	—	—	—	—	—	—	—	2	45	48	48	45	—	—	—	
432	7 C前	60-12	4.52 × 4.42	19.0	40	N-55°-E	—	石	—	1	円形	50	64	4	45	42	44	56	33	66	38	37
433	7 C前	60-9・10	6.1 × 6.08	36.1	51	N-81°-E	石	石	○	2	円形	72 79	83 88	4	58	82	54	85	62	88	58	70
437	6~7C	59-16・17	4.45 × 4.54	19.5	25	N-82°-E	—	—	—	1	円形	70	86	4	40	48	42	46	38	20	30	43
441	6~7C	56-19	— × 4.52	—	5	N-8°-W	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
442	6 C前	59-21	6.38 × 6.30	38.75	38	N-82°-E	—	石	—	1	円形	58	82	4	48	80	40	61	38	75	52	79
443	6 C後	60-24・25	5.58 × 5.52	31.06	57	N-94°-E	—	—	—	1	円形	82	71	4	42	67	43	63	42	65	40	62
444	6 C後	58-24・25	7.05 × 7.30	50.38	60	N-1°-W	—	—	—	2	円形	68 67	74 69	4	56	62	55	64	59	60	60	69
445	6 C後	58-16	6.30 × 6.18	38.31	38	N-2°-W	石	石	—	2	上面方形 下面円形	60×72 78	62 71	4	42	71	60	63	58	75	62	69
446	7 C前	62-25	6.67 × 6.05	39.31	46	N-90°-E	—	—	—	1	円形	56	90	4	30	57	28	55	26	36	28	61
448	7 C前	62-18・19	4.25 × 4.40	18.56	28	N-80°-E	—	—	—	1	円形	44	51	4	48	68	40	59	36	56	43	69
456	7 C前	62-16・17	7.34 × 7.40	54.13	48	N-6°-W	—	—	—	3	円形	76 52 88	96 33 65	4	41	88	38	74	52	45	36	60
460	6 C後	62・63-22	4.3 × 5.0	20.56	45	N-1°-E	—	—	—	1	円形	52	86	4	44	86	48	77	54	63	40	88
471	6 C後	58-6・7	— × 2.6	—	28	N-90°-E	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
485	7 C前	58-31・32	6.02 × 5.88	35.06	36	N-31°-E	—	—	—	2	円形	60 62	64 61	4	48	45	50	54	50	52	44	52
486	7 C前	56-31	6.02 × 6.18	36.06	16	N-95°-W	—	—	—	1	円形	54	78	4	51	67	58	88	52	51	60	72

第4章 調査の成果と整理について

住居 No.	時期	グリ ッド	規模E×N(m)	面積(m ²)	壁高 (cm)	主軸方向	竈			周溝	貯 蔵 穴		柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)			
							位置	天井	袖		数	形 状	径(cm)	深さ(cm)	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ
489	6 C後	63-22	5.95×—	—	31	N-96°-E	東・北	石	—	—	2	円形	60 50	63 63	54	73	56	65	44	66	42	59
491	6 C後	62-20・21	7.74×8.40	62.38	41	N-91°-E	東・北	石	—	—	1	円形	68	89	34	61	38	91	37	85	32	89
492	6 C後	63-19・20	5.14×5.12	26.26	50	N-90°-E	東	—	—	—	1	円形	60	76	23	42	28	45	26	53	30	61
500	6 C後	55-23	5.35×4.70	23.56	21	N-86°-E	東	石	—	—	1	円形	44	44	38	65	45	51	44	58	46	58
501	7 C後	54・55-24	6.90×6.00	40.38	27	N-3°-W	北	石	—	—	1	円形	50	81	50	83 33	52	82 31	50	73 50	50	78 51
502	7 C前	57-26	5.04×5.03	25.06	25	N-12°-W	北	石	—	—	—	—	—	—	4	48	42	52	37	52	32	47
504	7 C前	54・55-28	5.58×5.95	32.88	21	N-8°-W	北	—	—	—	1	円形	38	74	35	39	38	23	50	69	38	69
506	7 C前	58・59-26	7.46×7.52	55.25	34	N-1°-W	北・北	—	—	—	—	—	—	—	4	60	87	58	89	66	84	89
508	6 C後	61・62-28	6.62×6.76	44.38	34	N-77°-E	東	—	—	—	1	円形	60	76	30	52	42	49	40	45	32	53
509	7 C前	59-28・29	6.55×6.72	43.44	32	N-93°-E	東・北	—	—	—	1	円形	72	67	48	77	48	74	41	83	46	75
510	6 C後	57-22	3.80×3.82	14.0	20	N-72°-E	東	石	—	—	1	円形	58	53	—	—	—	—	—	—	—	—
518	6 C後	65-13	—	—	62	N-86°-E	東	—	—	—	1	円形	40	71	—	—	—	—	—	—	—	—
520	7 C前	61-13	7.0×6.9	46.94	43	N-88°-E	東・北	—	—	○	2	円形	85 73	74 62	38	74	43	73	48	78	38	70
521	6 C後	61-14	—×5.4	—	22	N-100°-E	東	石 長襖	—	—	1	円形	52	62	40	42	32	53	31	76	43	64
523	6 C後	59-14	6.0×6.1	36.56	28	N-3°-E	北?	—	—	—	1	円形	70	42	73	84	72	80	54	98	76	85
524	6 C後	58-13	6.1×6.0	36.06	21	N-10°-W	北・東・北	石	—	—	2	円形	68 70	81 64	68	79	46	70	51	66	50	70
528	6 C後	56・57-24	6.32×—	—	32	N-100°-W	西・北	—	—	—	2	円形	57 64	39 91	56	71	46	65	52	52	42	80
529	6 C後	56・57-24	—×4.05	—	32	N-81°-W	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
533	7 C前	59-20	3.87×4.18	15.5	25	N-89°-E	東	—	—	—	1	円形	43	65	—	—	—	—	—	—	—	—
580	6 C後	53-18	5.25×5.30	27.56	3	N-81°-E	東・北	—	—	—	2	円形	66 60	77 68	32	52	30	68	30	65	30	72
637	6 C後	59-30	5.02×5.28	26.44	38	N-94°-E	東	—	—	—	1	円形	60	49	32	70	44	65	44	77	44	73

第1節 住居の時期決定について

住居 No	時期	グリッド	規模E×W×S×N(m)	面積(m ²)	壁高 (cm)	主軸方向	電			貯蔵穴			柱穴	柱穴1 (cm)		柱穴2 (cm)		柱穴3 (cm)		柱穴4 (cm)		
							位置	天井	袖	数	形状	径(cm)		深さ(cm)	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径	深さ
638	4 C	60-30	3.90×3.58	13.13	21	N-20°-W	-	-	-	-	-	4	62	63	40	52	48	43	58	100	-	
640	7 C前	56-57-29-30	5.55×5.65	31.25	31	N-1°-E	北?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
666	7 C前	56-28-29	6.02×5.38	32.31	20	N-10°-W	北	-	-	-	1	上部方形 中位下円形	60×60 34	71	38	75	42	59	42	67	-	
669	6 C後	56-18	5.64×5.90	32.63	23	N-83°-E	東	石	石	-	1	円形	76	87	42	51	28	63	32	57	-	
677	7 C前	52-24	5.4×---	---	27	N-90°-E	東	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	46	68	42	67	
678	7 C前	54-22-23	6.78×6.46	43.49	42	N-88°-E	東・北	-	-	-	3	円形 円形 楕円	64 62 56×74	91	52	98	62	89	54	84	-	
680	7 C後	52-53-21	4.82×4.28	20.5	14	N-34°-W	北・東	-	-	-	2	円形	50 46	65 60	36	58	32	55	38	28	52	
681	7 C後	52-20	---	---	42	N-1°-E	北	-	長壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
682	7 C前	53-26	5.4×5.65	30.19	36	N-43°-W	北?	-	-	-	1	円形	52	80	38	49	53	48	82	39	86	
683	6 C後	53-54-20	4.56×---	---	-	N-92°-E	東	-	-	-	1	円形	54	62	34	54	36	70	30	68	34	55
686	7 C前	57-11-12	6.06×(6.5)	(37.5)	20	N-85°-W	西・東	石	石	-	2	円形	48 54	84 101	66	83	56	89	50	70	101	

〈注〉 規 模 () は推定、電 新田関係のはつきりしているものについては左より新→旧
 新田関係の不明のものについてはその限りでない。
 貯蔵穴 上より新→旧

第4章 調査の成果の整理について

住居No.	遺物												非版組総数	版組			出土総数	時期												
	土師器						須恵器							その他	土器	鉄器			石											
	環	高環	脚	口縁	底	斐	環	高環	脚	口縁	底	環蓋								体	つまみ	口縁	底	斐	口縁	底	羽蓋	口縁	底	
580	4	11							1	1														3	65	6C後				
637	48	87	7	2	49	417	20		4	3														12	25	687	6C後			
638					5	22	2						1											6	41	4	C			
640	29	70	3		24	196	4		3															5	387	7	C前			
666	50	57		3	29	282	2		2	2														4	438	7	C前			
669	59	1	8	8	84	1,115	12		39	4														5	39	1,421	6	C後		
677	3	5	9	2	2	66			4	2														3	102	7	C前			
678	31	68	3	3	41	241	2		6	19	2													25	37	499	7	C前		
680	13	8			8	147	5																	8	194	7	C後			
681	7	5			3	53																		6	1	7	75	7	C後	
682	11	3			20	146	6		9	1														8	11	228	7	C前		
683	3				10	124																		1	1	139	6	C後		
686	35	2		1	6	87			2															4	7	11	147	7	C前	
計	1,906	2,488	127	108	1,554	14,351	269	8	34	27	222	163	29	0	7	5	11	1	43	595	30	33	24	1	171	22,207	622	10,300	932	23,139

第2節 ま と め

鑷川流域に発達した河岸段丘上、特に矢田遺跡の立地する上位段丘上は県内でも有数の遺跡地帯とされていた。今回の関越道上越線の建設に伴う発掘調査は、その遺跡地帯に長大なトレンチが設定されたと言え、考古学的資料に関する情報量を飛躍的に増大させ、多くの成果が報告されつつある。

矢田遺跡の調査対象面積は約90,000㎡におよび、発掘調査は昭和61年度より開始され、平成3年度まで土地問題の未解決により引き続き調査が出来なかったこと等の理由により、一時中断はあるものの都合6年度にわたって行われた。膨大な遺跡のため全て発掘が終了してからの整理事業では、発掘終了後さらに多くの年数が必要となるため、整理事業は平成元年度より調査と平行して行うこととした。調査途中のため最も住居軒数の多い平安時代の住居から整理を開始することとし、平成元年度より『矢田遺跡』『矢田遺跡II』『矢田遺跡III』と毎年一冊報告書を刊行し平成3年度で平安時代の住居271軒の報告が終了した。発掘調査のすべて終了した平成4年度以降は旧石器時代と縄文時代を主な整理対象とし、さらに古墳時代の住居の一部54軒を整理し『矢田遺跡IV』を刊行した。本年度は昨年度に引き続き古墳時代の住居74軒を整理対象とした。古墳時代の住居は137軒が未整理であり奈良時代の173軒は未着手である。中・近世の遺構や古墳～平安時代の溝・土坑・掘立柱建物跡等は次年度以降の整理となる。整理途中段階であるが住居数では約半数の整理が終了しており、次第に多くのことがあきらかになってきた。集落全体の時期的展開を含めたより総合的な分析を今後整理の進行と共に起こっていききたい。

本報告では、古墳時代に住居74軒を対象とし、昨年度の54軒を加えると128軒の住居の整理が終了している。それらの住居は調査区北側の地区であり全体像を語ることは出来ないが、これまでの成果から予測を含めて集落の展開についてまとめてみたい。

古墳時代の住居が造られ始めたのは古墳時代前期の4世紀からであり、現在のところ整理事業の終了した調査区で5軒確認されている。残りの住居の整理に伴いこの時期の住居軒数が増加する可能性もあるが、調査時の所見からはほぼこの5軒に限定されるようである。その5軒もまとまってつくられているわけではなく直線距離にして約280mの間に散在的に造られている。古墳時代中期の5世紀代になってもこの地区での住居は2軒しか確認されていない。この2軒は前期の住居の造られていた地区の範囲内に近接して造られていた。前～中期の住居は現在のところ合計わずか7軒である。

後期の6世紀前半代では前～中期同様散在的に僅か4軒確認されているのみである。このように僅かな住居しか造られなかった矢田遺跡で、6世紀後半になると60軒近い住居が一気に造られるようになる。それらの住居は整理対象とした地区の全域から検出されており、地区による偏りは認められない。

7世紀前半代になると50軒近い住居が引き続き6世紀後半代と同じように整理対象としたほぼ全域より検出されている。7世紀後半代の住居は現状では軒数が少ない。それは発掘終了時における時期判断により一部が奈良時代として扱われた可能性もあり、7世紀後半代の住居の軒数や分布状況は明確でない。

このように矢田遺跡では6世紀後半代から住居が大量に造られていることが明らかになりつつある。今後の順調な整理事業と遺跡の研究を期待したい。

最後に、関係各機関はもとより、酷暑や厳寒の中で実際の調査に従事した発掘作業員及び遺構・遺物の整理事業に携わった整理補助員等多くの方々への協力に感謝してまとめとしたい。

発掘報告書抄録

フリガナ	ヤタイセキ
書名	矢田遺跡V
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第24集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第171集
編著者名	中沢 悟
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦1994年3月25日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢田	タノグンヨシイ 多野郡吉井 マチオニアザキ 町大字矢田	103632	10005— 00124	361427	1385945	19860401— 19900827 19911105— 19911126	90,000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田	集落	古墳時代前期 古墳時代後期	竪穴住居跡1 竪穴住居跡73	小型丸底坏 土師器甕 土師器坏	古墳時代後期～奈良・平安時代を中心 とした集落址 今回は古墳時代の遺 物、遺構を報告

写 真 图 版



矢田遺跡全景航空写真（合成）（上が東）



第 3 次調査区北西部住居群 (南から)



第 7 次調査区南東部・第 9 次調査区北東部住居群 (北西から)



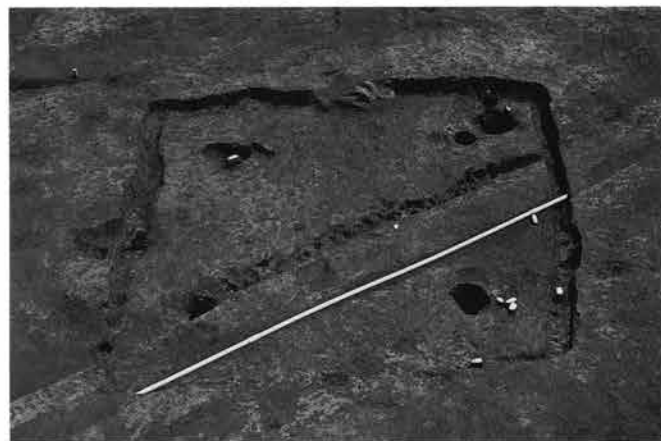
5号住居跡全景（西から）



5号住居跡竈（西から）



5号住居跡床下全景（西から）



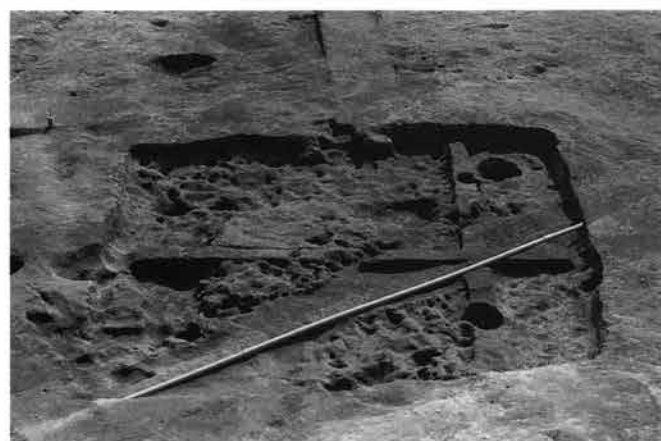
6号住居跡全景（西から）



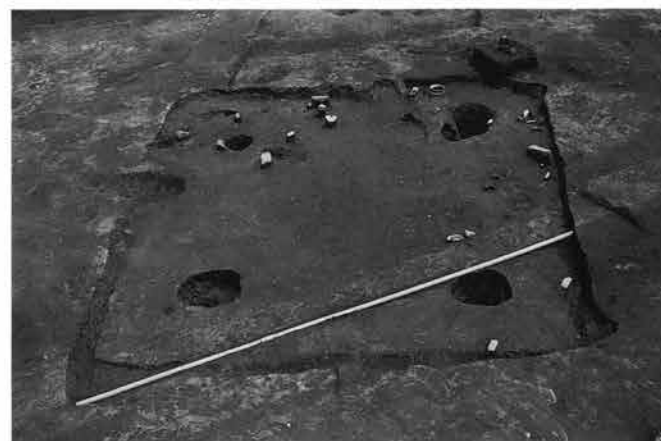
6号住居跡貯蔵穴付近（西から）



6号住居跡竈（西から）



6号住居跡床下全景（西から）



7号住居跡全景（西から）

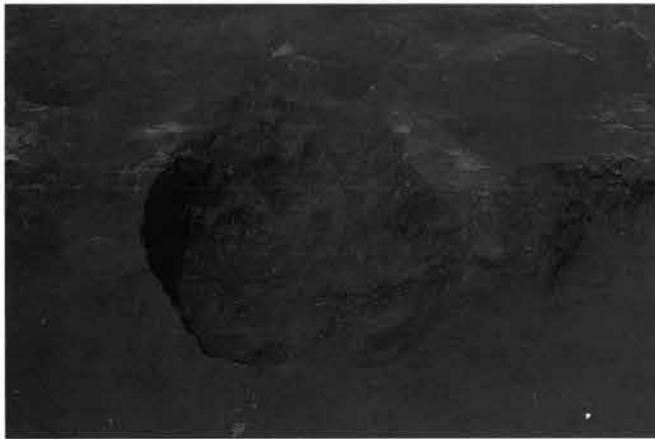
図版 4



7号住居跡新東竈付近 (西から)



7号住居跡新東竈 (西から)



7号住居跡旧北竈 (南から)



34号住居跡全景 (西から)



34号住居跡竈 (南から)



34号住居跡床下全景 (西から)



38号住居跡全景 (西から)



38号住居跡南壁面付近遺物出土状況 (北から)



38号住居跡貯蔵穴周辺 (北から)



38号住居跡旧東竈 (西から)



38号住居跡床下全景 (西から)



39号住居跡全景 (西から)



39号住居跡貯蔵穴付近 (西から)



39号住居跡竈(1) (西から)



39号住居跡竈(2) (西から)



41号住居跡全景 (西から)



41号住居跡南側床面遺物出土状況（北から）



41号住居跡新北竈（南から）



41号住居跡旧東竈（西から）



41号住居跡床下全景（西から）



44号住居跡全景（西から）



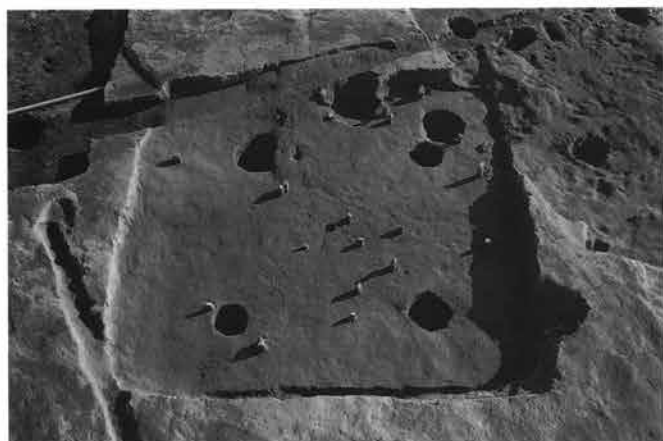
44号住居跡新東竈（北西から）



44号住居跡旧東竈（西から）



44号住居跡旧北竈（南から）



45号住居跡全景（西から）



45号住居跡竈（西から）



49号住居跡全景（西から）



49号住居跡北東コーナー遺物出土状況（南西から）



49号住居跡南東コーナー遺物出土状況（西から）



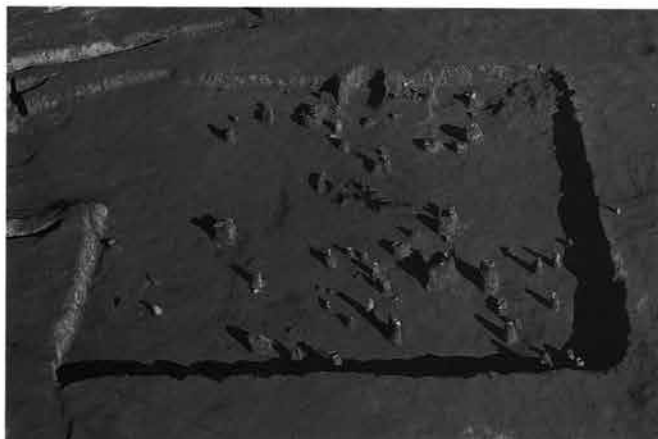
49号住居跡竈（西から）



49号住居跡竈（東から）



49号住居跡床下全景（西から）



53号住居跡全景（南から）



53号住居跡全景（遺物除去後）（南から）



53号住居跡竈（南から）



56号住居跡全景（西から）



56号住居跡竈付近（西から）



56号住居跡床下セクション（西から）



58号住居跡全景（西から）



59号住居跡全景（西から）



59号住居跡遺物出土状況（北から）



59号住居跡竈（西から）



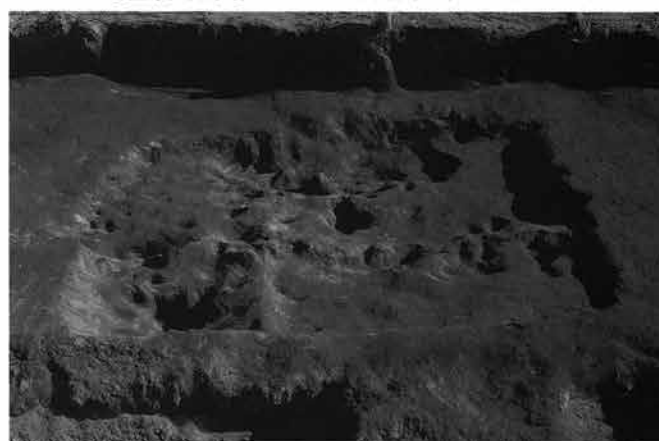
62号住居跡全景（西から）



62号住居跡南東コーナー遺物出土状況（西から）



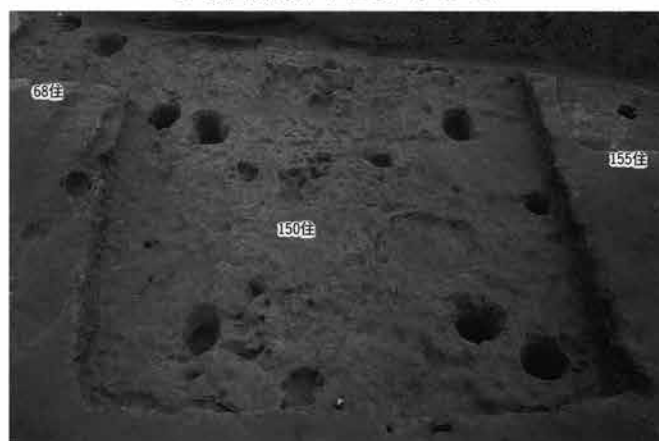
65号住居跡全景（西から）



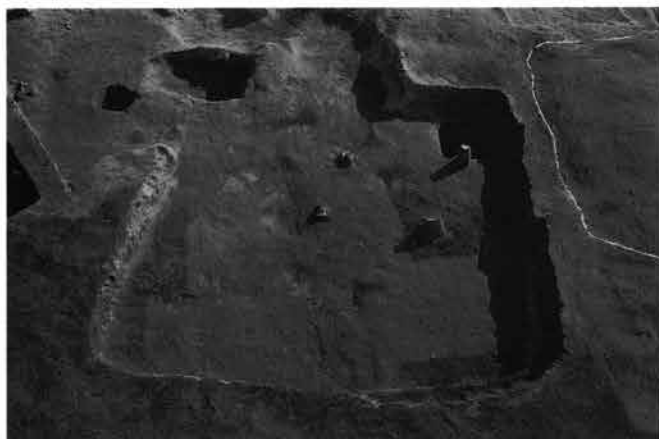
67号住居跡床下全景（西から）



68号住居跡東側床下全景（西から）



68号住居跡西側床下全景（西から）



100号住居跡全景（西から）



100号住居跡セクション（南から）



100号住居跡床下全景（西から）



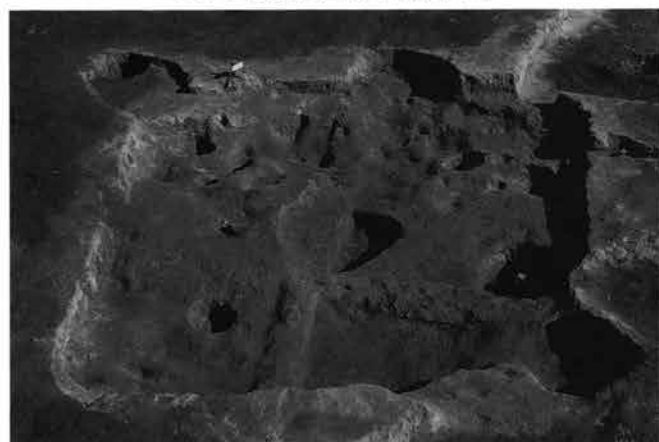
102号住居跡全景（西から）



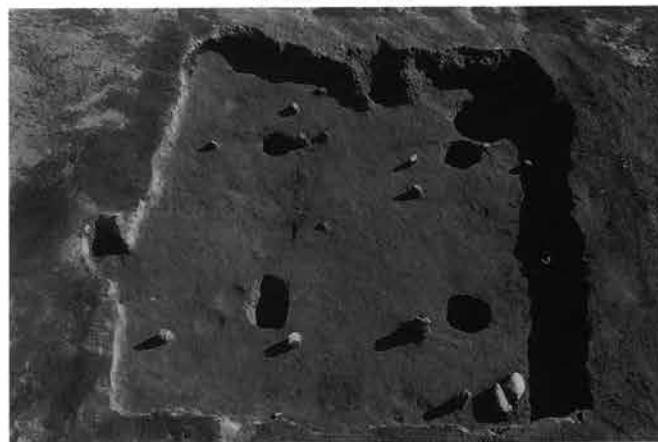
102号住居跡竈周辺（南から）



102号住居跡竈（南から）



102号住居跡床下全景（西から）



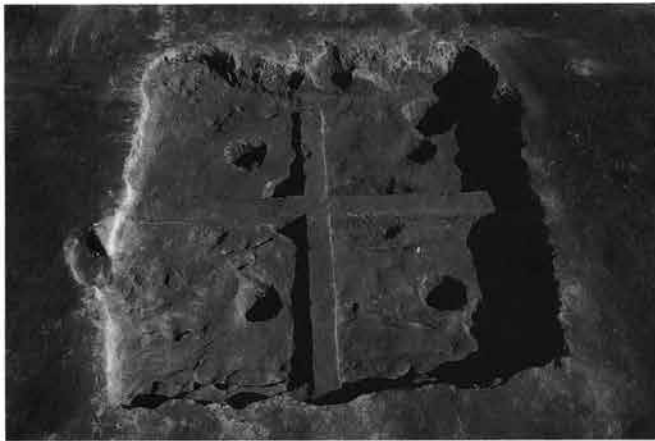
104号住居跡全景（西から）



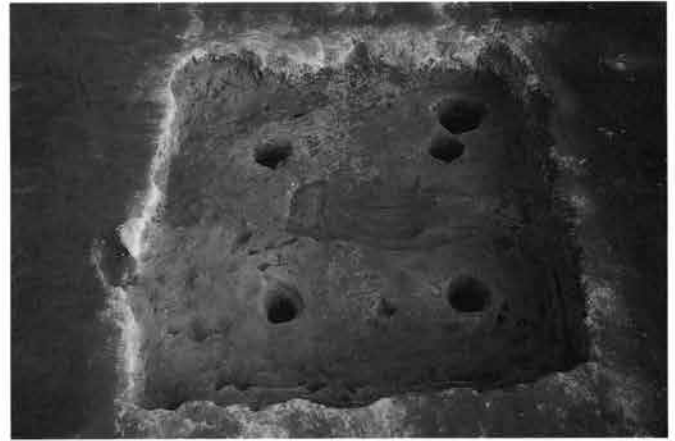
104号住居跡竈(1) (西から)



104号住居跡竈(2) (南西から)



104号住居跡床下セクション (西から)



104号住居跡床下全景 (西から)



106号住居跡全景 (西から)



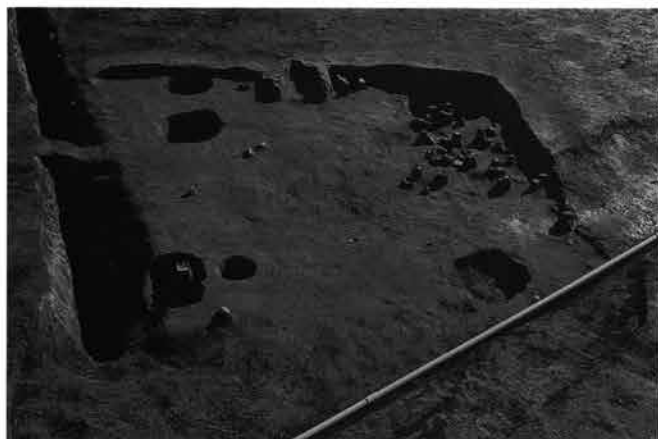
106号住居跡南壁付近遺物出土状況 (北から)



106号住居跡貯蔵穴付近 (西から)



106号住居跡床下全景 (西から)



111号住居跡全景（西から）



111号住居跡竈（西から）



150号住居跡全景（北から）



150号住居跡北西コーナー遺物出土状況（北から）



150号住居跡南西コーナー遺物出土状況（北東から）



150号住居跡南壁付近遺物出土状況（北から）



150号住居跡新西竈(1)（東から）



150号住居跡新西竈(2)（東から）



150号住居跡新西竈（東から）



150号住居跡新西竈（西から）



150号住居跡床下全景（西から）



152号住居跡全景（東から）



152号住居跡新西竈（東から）



152号住居跡新西竈（南から）



152号住居跡新西竈（西から）



152号住居跡旧北竈（南から）



152号住居跡床下全景 (西から)



153号住居跡全景 (西から)



153号住居跡北東コーナー遺物出土状況 (南東から)



153号住居跡竈 (西から)



153号住居跡床下全景 (西から)



155号住居跡床下全景 (西から)



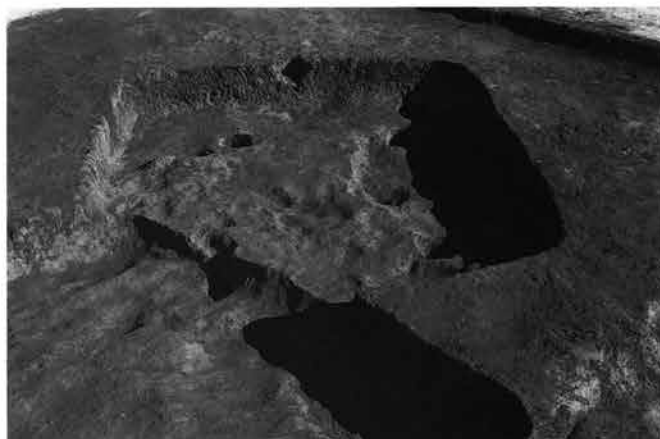
155号住居跡南西コーナー遺物出土状況 (西から)



432号住居跡全景 (西から)



432号住居跡竈セクション (西から)



432号住居跡床下全景 (西から)



433号住居跡全景 (西から)



433号住居跡新東竈 (西から)



433号住居跡新東竈掘り方 (西から)



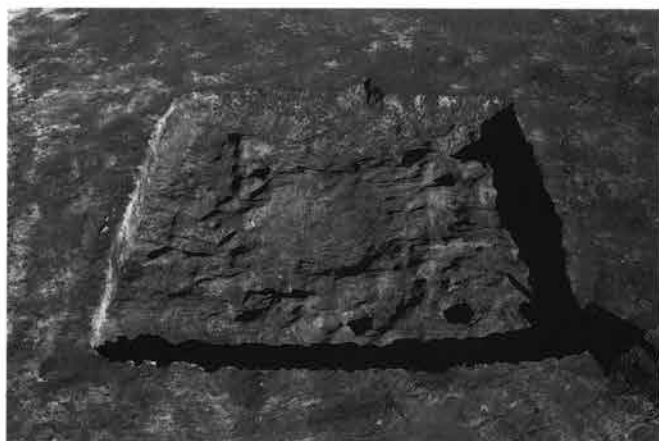
433号住居跡旧北竈 (南から)



433号住居跡床下全景 (西から)



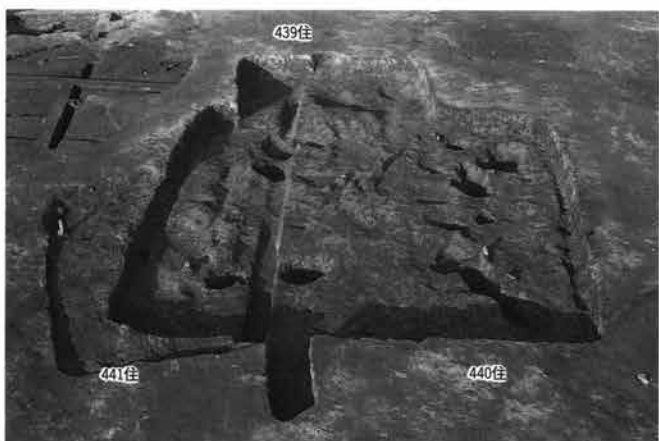
437号住居跡全景 (西から)



437号住居跡床下全景（西から）



441号住居跡全景（西から）



441号住居跡床下全景（南から）



442号住居跡全景（西から）



442号住居跡貯蔵穴周辺遺物出土状況（北から）



442号住居跡竈（西から）



442号住居跡竈掘り方（北西から）



442号住居跡床下全景（西から）



443号住居跡全景（西から）



443号住居跡西壁付近遺物出土状況（北から）



443号住居跡竈左側遺物出土状況（北西から）



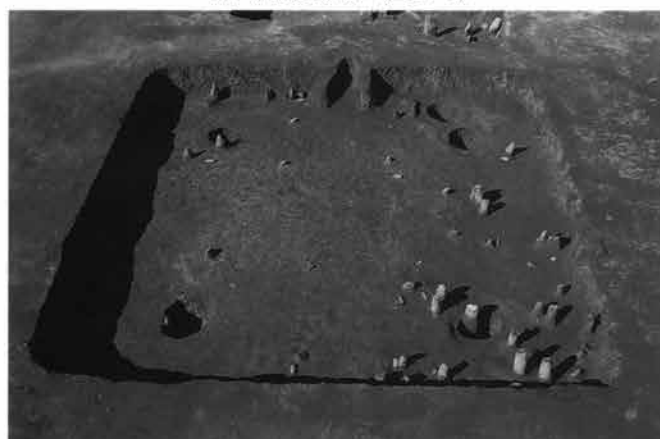
443号住居跡竈右側遺物出土状況（南から）



443号住居跡竈（西から）



443号住居跡床下全景（西から）



444号住居跡全景（南から）



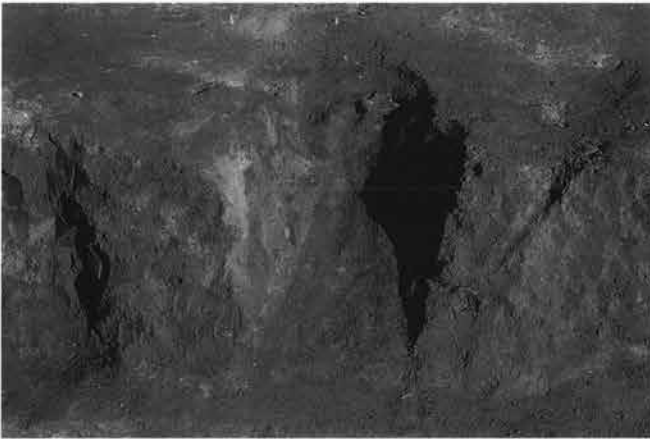
444号住居跡南壁中央部に近い床面上の小穴（東側）（北から）



444号住居跡新北竈（南から）



444号住居跡新北竈掘り方セクション（南から）



444号住居跡旧東竈（西から）



444号住居跡床下全景（南から）



445号住居跡全景（南から）



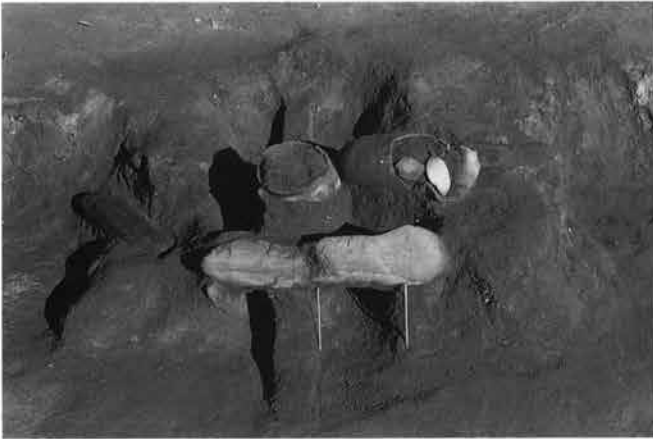
445号住居跡新北竈付近遺物出土状況（西から）



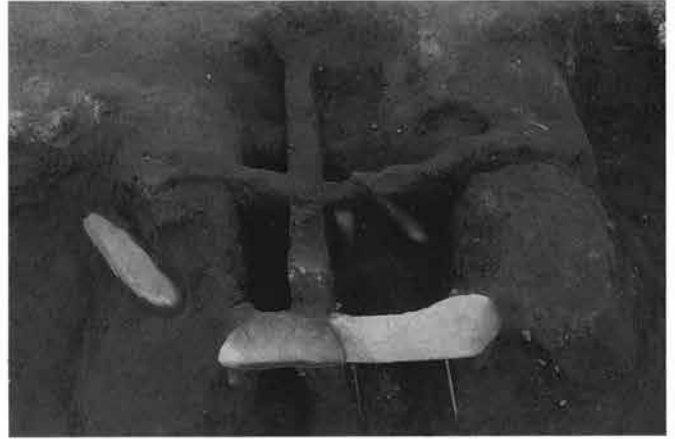
445号住居跡新北竈付近遺物出土状況（東から）



445号住居跡新北竈全景（南から）



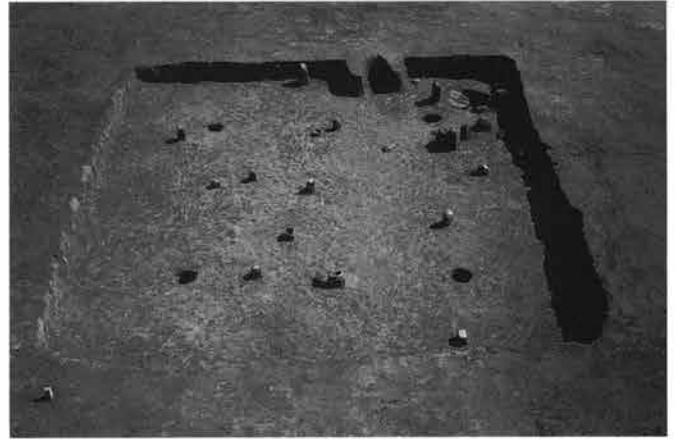
445号住居跡新北竈セクション(1) (南から)



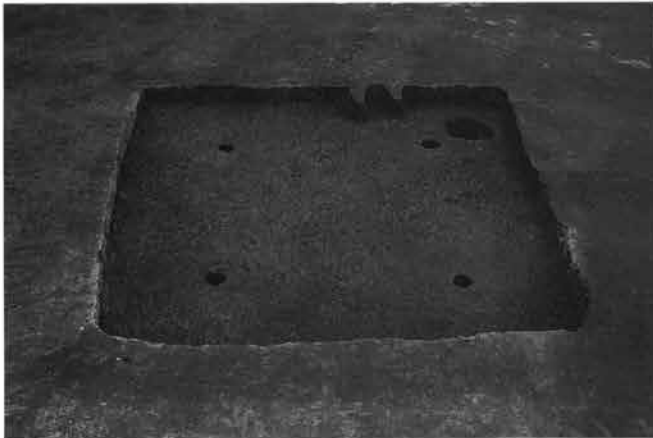
445号住居跡新北竈セクション(2) (南から)



445号住居跡床下全景 (南から)



446号住居跡全景 (西から)



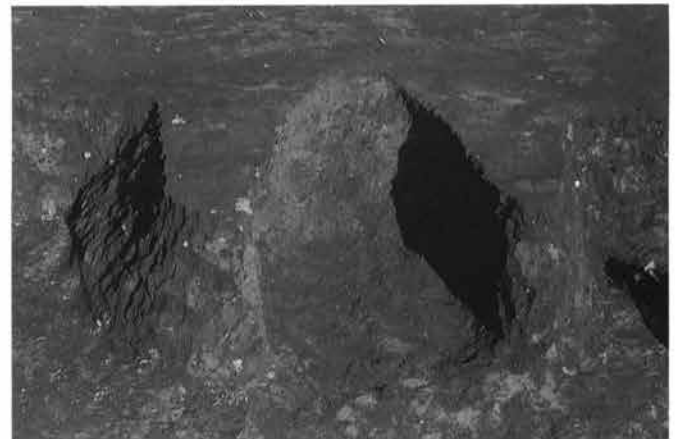
446号住居跡全景 (遺物除去後) (西から)



446号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況 (東から)



446号住居跡南壁周辺 (西から)



446号住居跡竈 (西から)



448号住居跡全景（西から）



448号住居跡竈セクション（西から）



448号住居跡床下全景（西から）



456号住居跡全景（南から）



456号住居跡全景（遺物除去後）（南から）



456号住居跡新北竈周辺遺物出土状況（西から）



456号住居跡南壁周辺遺物出土状況（西から）



456号住居跡新北竈（南から）



456号住居跡旧東竈（西から）



456号住居跡床下全景（南から）



460号住居跡全景（南から）



460号住居跡全景（遺物除去後）（南から）



460号住居跡竈全景（南から）



460号住居跡床下全景（南から）



471号住居跡全景（西から）



471号住居跡竈全景（西から）



471号住居跡床下全景（西から）



485号住居跡全景（南から）



485号住居跡新北竈全景（南から）



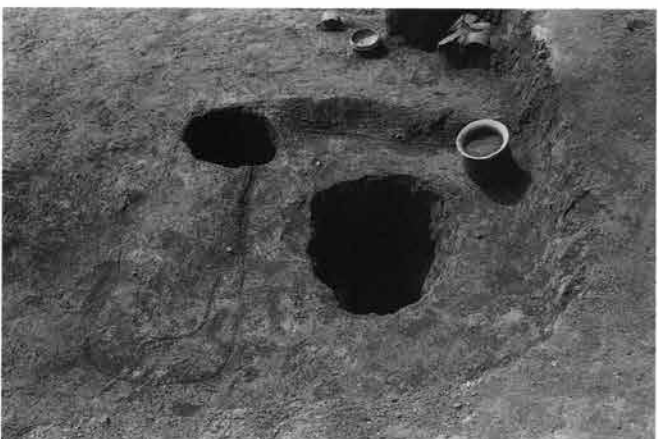
485号住居跡新北竈周辺遺物出土状況（南西から）



485号住居跡新北竈付近遺物出土状況（南東から）



485号住居跡旧東竈セクション（西から）



485号住居跡貯蔵穴（東から）



485号住居跡床下全景（南から）



486号住居跡全景（北から）



486号住居跡竈付近遺物出土状況（東から）



486号住居跡竈全景（東から）



486号住居跡床下全景（北から）



489号住居跡全景（西から）



489号住居跡新東竈（西から）



489号住居跡旧北竈（南から）



491号住居跡重複関係全景



491号住居跡全景（西から）



491号住居跡南床面遺物出土状況（東から）



491号住居跡南床面遺物出土状況（西から）



491号住居跡南床面東側遺物出土状況（北から）



491号住居跡南床面東側遺物出土状況（西から）



491号住居跡南床面中央部遺物出土状況（南から）



491号住居跡貯蔵穴南東遺物出土状況（南から）



491号住居跡新東竈（西から）



491号住居跡新東竈（西から）



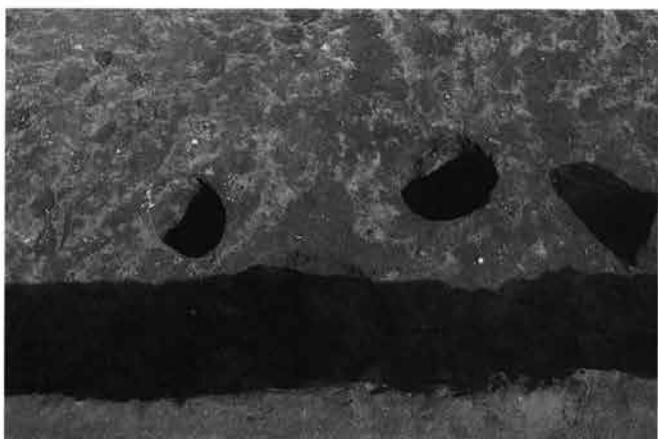
491号住居跡旧北竈（南から）



492号住居跡全景（西から）



492号住居跡南床面付近（西から）



492号住居跡出入口施設と思われる小穴（南から）



492号住居跡竈（西から）



492号住居跡床下全景（西から）



500号住居跡全景（西から）



500号住居跡竈（1）（西から）



500号住居跡竈（2）（西から）



500号住居跡床下全景（西から）



501号住居跡全景（南から）



501号住居跡セクション（西から）



501号住居跡竈（南から）



501号住居跡床下全景（南から）



502号住居跡全景（南から）



502号住居跡南西床面（西から）



502号住居跡竈（南から）



504号住居跡全景（南から）



504号住居跡竈手前遺物出土状況（南から）



504号住居跡床下全景（南から）



506号住居跡全景（南から）



506号住居跡新北竈（南から）



506号住居跡床下全景（南から）



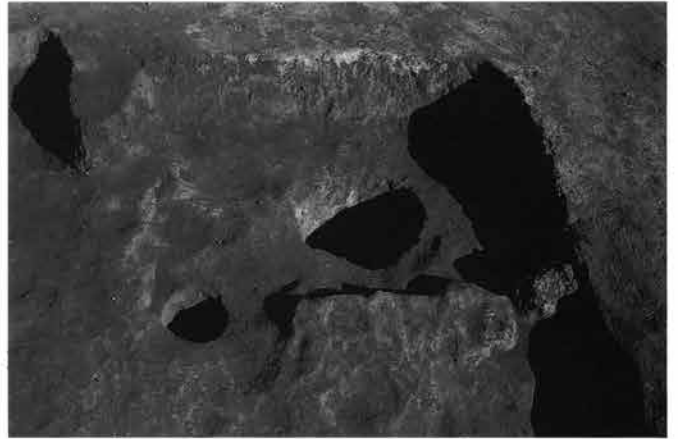
508号住居跡全景（西から）



508号住居跡南側床面遺物出土状況（西から）



508号住居跡貯蔵穴付近遺物出土状況（西から）



580号住居跡貯蔵穴（西から）



508号住居跡竈（西から）



509号住居跡全景（西から）



509号住居跡新東竈（西から）



509号住居跡旧北竈セクション（西から）



509号住居跡床下全景（西から）



510号住居跡全景（西から）



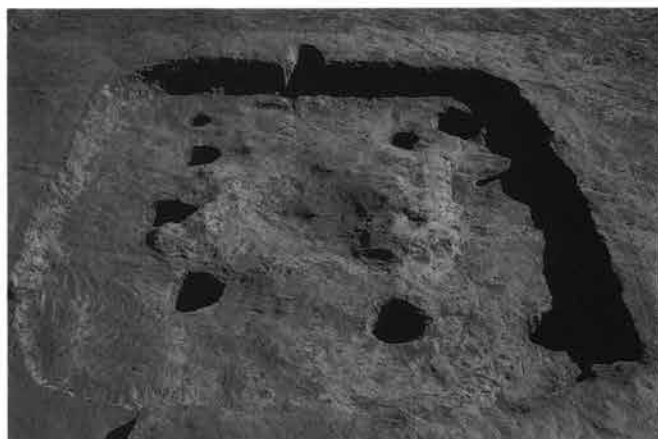
510号住居跡東床面遺物出土状況（北から）



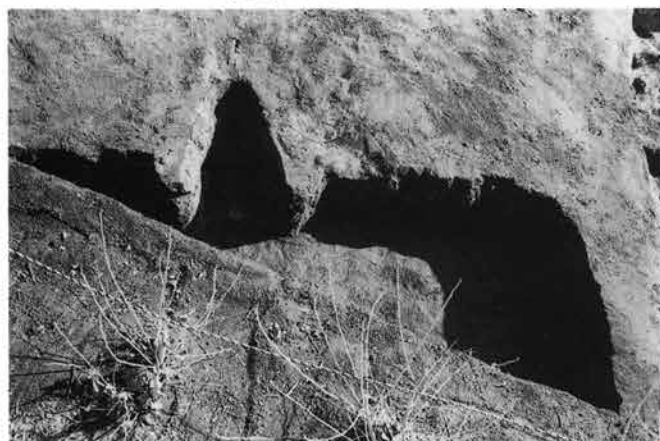
510号住居跡竈(1)（西から）



510号住居跡竈(2)（西から）



510号住居跡床下全景（西から）



518号住居跡全景（西から）



518号住居跡竈左袖付近遺物出土状況（東から）



518号住居跡竈（西から）



520号住居跡全景（西から）



520号住居跡旧北竈（南から）



520号住居跡新東竈掘り方セクション（西から）



520号住居跡床下全景（西から）



521号住居跡全景（西から）



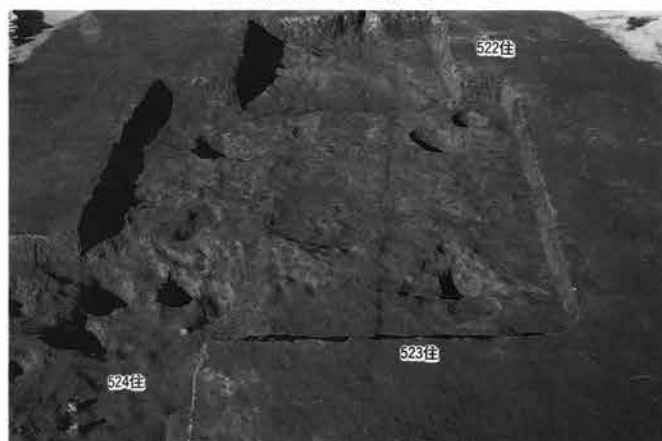
521号住居跡竈（西から）



521号住居跡床下全景（西から）



523号住居跡全景（南から）



523号住居跡床下全景（南から）



524号住居跡全景（西から）



524号住居跡全景（遺物除去後）（西から）



524号住居跡新北竈（1）（南から）



524号住居跡新北竈（2）（南から）



524号住居跡旧北竈（南から）



524号住居跡床下全景（西から）



528号住居跡全景（1）（東から）



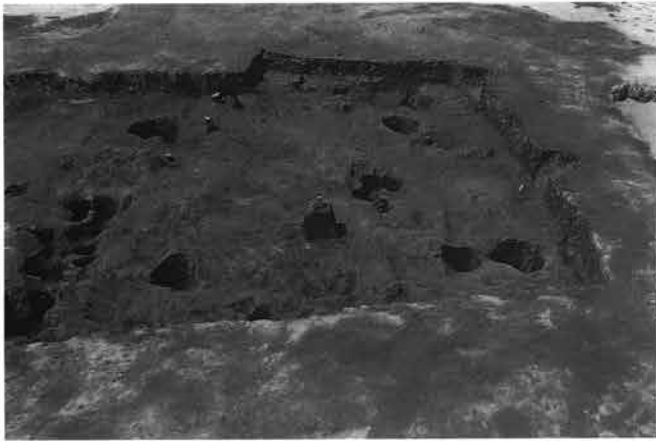
528号住居跡全景（2）（東から）



528号住居跡新西竈（東から）



528号住居跡旧北竈（南から）



528号住居跡床下全景（東から）



529号住居跡床下全景（南から）



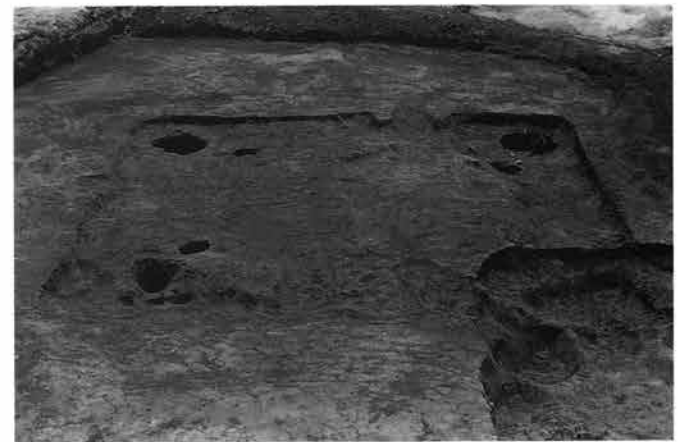
533号住居跡全景（西から）



533号住居跡竈（西から）



533号住居跡床下全景（西から）



580号住居跡床下全景（西から）



580号住居跡貯蔵穴付近（西から）



580号住居跡新東竈（西から）



580号住居跡旧北竈（南から）



637号住居跡全景（1）（西から）



637号住居跡全景（2）（南から）



637号住居跡南西床面部分遺物出土状況（東から）



637号住居跡竈（西から）



637号住居跡床下全景（西から）



638号住居跡床下全景（西から）



640号住居跡全景（南から）



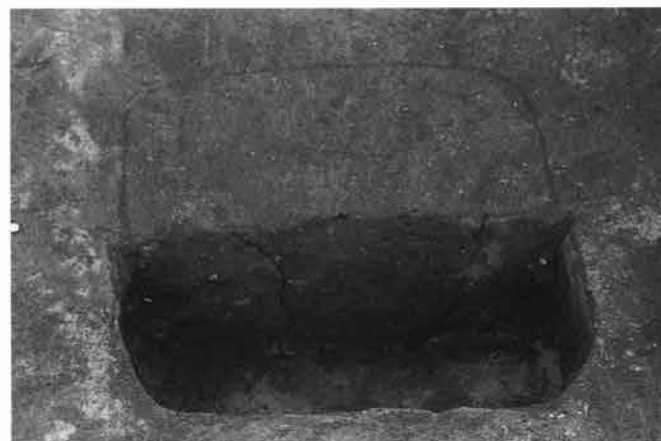
640号住居跡セクション（西から）



640号住居跡床下全景（南から）



666号住居跡全景（南から）



666号住居跡貯蔵穴セクション（南から）



666号住居跡床下全景（南から）



669号住居跡全景(1)（南から）



669号住居跡全景(2) (南から)



669号住居跡全景(3) (西から)



669号住居跡貯蔵穴付近 (西から)



669号住居跡東側床面遺物出土状況 (北から)



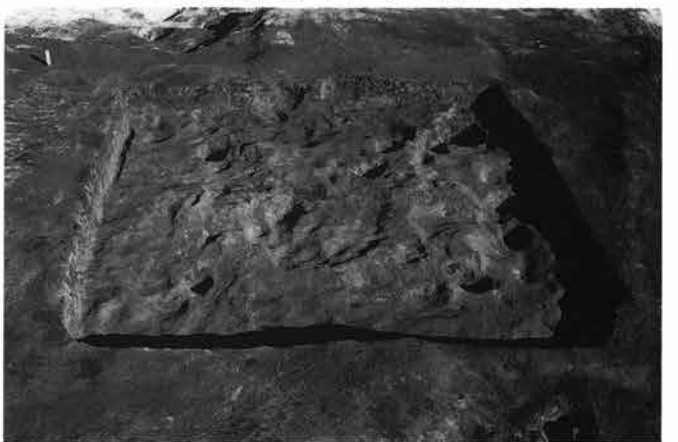
669号住居跡竈 (西から)



669号住居跡竈セクション (西から)



669号住居跡竈 (東から)



669号住居跡床下全景 (西から)



677号住居跡全景（西から）



667号住居跡竈付近（北から）



667号住居跡竈（西から）



667号住居跡床下全景（西から）



678号住居跡全景（西から）



678号住居跡柱穴1付近遺物出土状況（南から）



678号住居跡新東竈（西から）



678号住居跡新東竈掘り方セクション（西から）



678号住居跡旧北竈掘り方セクション (西から)



678号住居跡床下全景 (西から)



680号住居跡全景 (南から)



680号住居跡新北竈セクション (南から)



680号住居跡新北竈セクション (西から)



680号住居跡旧東竈セクション (南から)



680号住居跡床下全景 (南から)



681号住居跡全景 (西から)



681号住居跡竈(1) (北から)



681号住居跡竈(2) (南から)



681号住居跡竈掘り方 (西から)



682号住居跡全景 (東から)



682号住居跡セクション (東から)



682号住居跡床下セクション (南から)



682号住居跡床下全景 (東から)



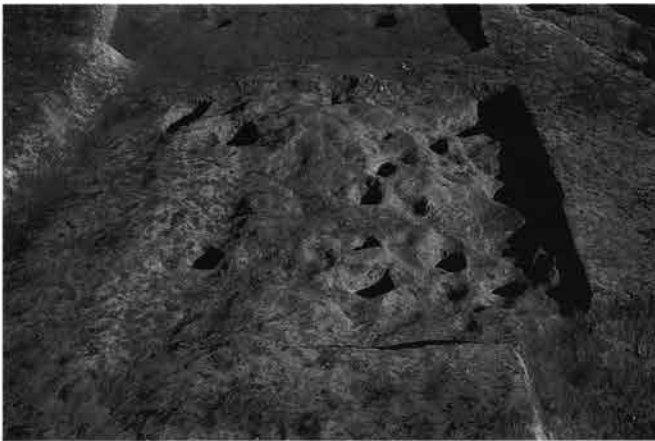
683号住居跡全景 (西から)



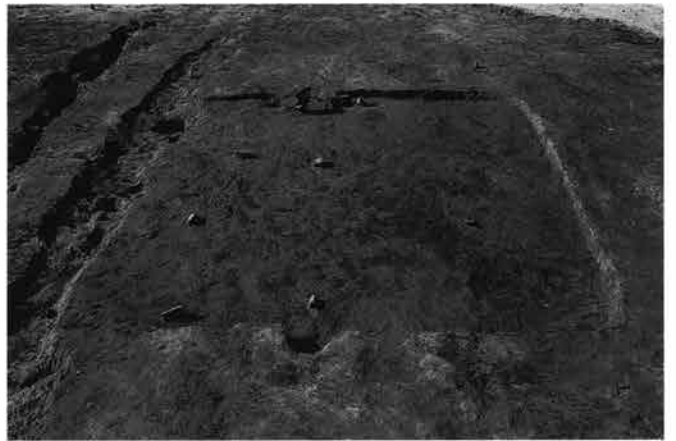
683号住居跡貯蔵穴遺物出土状況（東から）



683号住居跡竈（西から）



683号住居跡床下全景（西から）



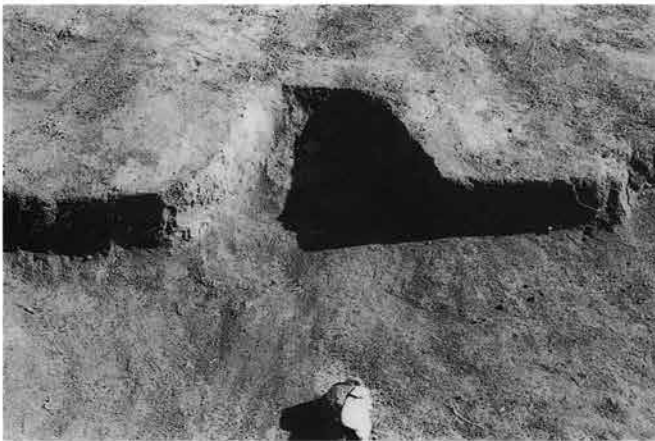
686号住居跡全景（東から）



686号住居跡新西竈セクション（東から）



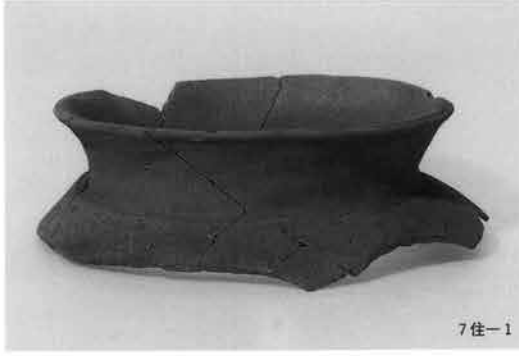
686号住居跡新西竈（西から）



686号住居跡旧東竈（西から）



686号住居跡床下全景（東から）









49住-4



49住-6



49住-7



49住-3



49住-9



49住-10



53住-1



53住-2



53住-5



53住-6

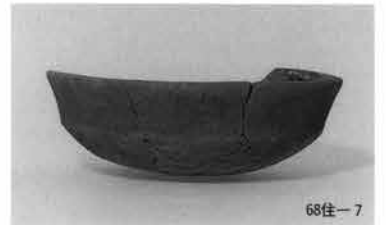


53住-3



53住-4







100住-1



104住-1



102住-1



102住-2



104住-2



106住-4



106住-1



106住-5



111住-1



106住-6



106住-8



111住-4



106住-7



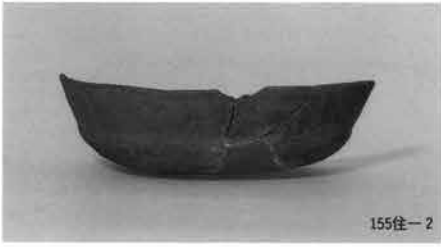
106住-9



111住-5





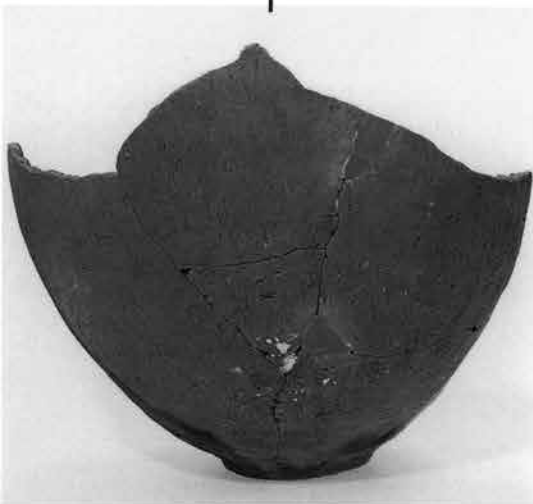






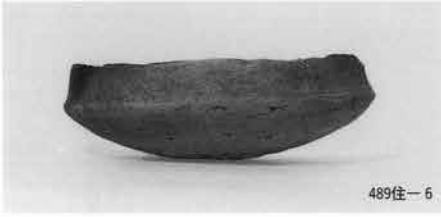


图版54











491住-14



491住-15



491住-16



491住-17



491住-18



491住-19



491住-20



491住-21



491住-22



491住-23



491住-24



491住-25



491住-26



491住-27



491住-28



491住-30



491住-31



491住-33



492住-3



492住-4



492住-5



500住-2

501住-2

501住-3

500住-3

501住-1

500住-1

500住-4

502住-3

502住-1

502住-2

502住-4

502住-7

502住-5

502住-6

504住-3

502住-8

502住-9

504住-4

504住-5









523住-1



523住-3



523住-4



524住-1



524住-2



524住-5



524住-9



524住-10



524住-8



524住-11



524住-12



524住-13



524住-14



524住-3



524住-15



524住-7



528住-1





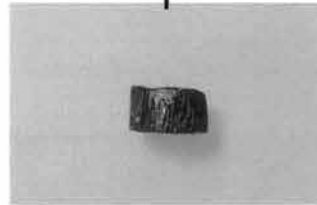
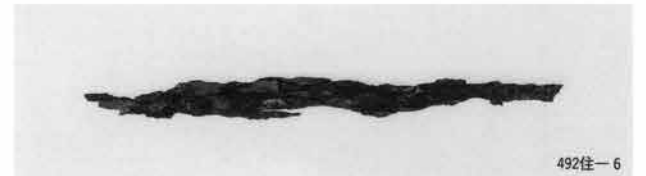
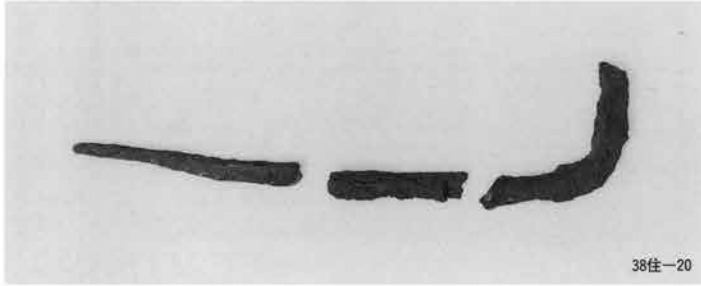
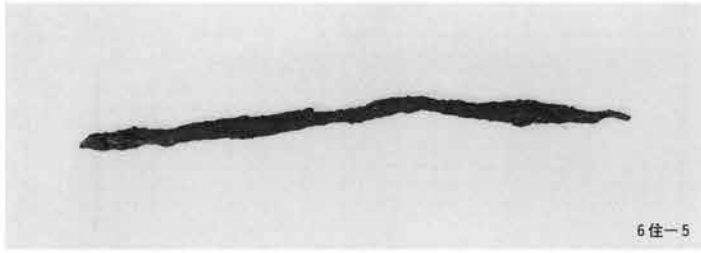


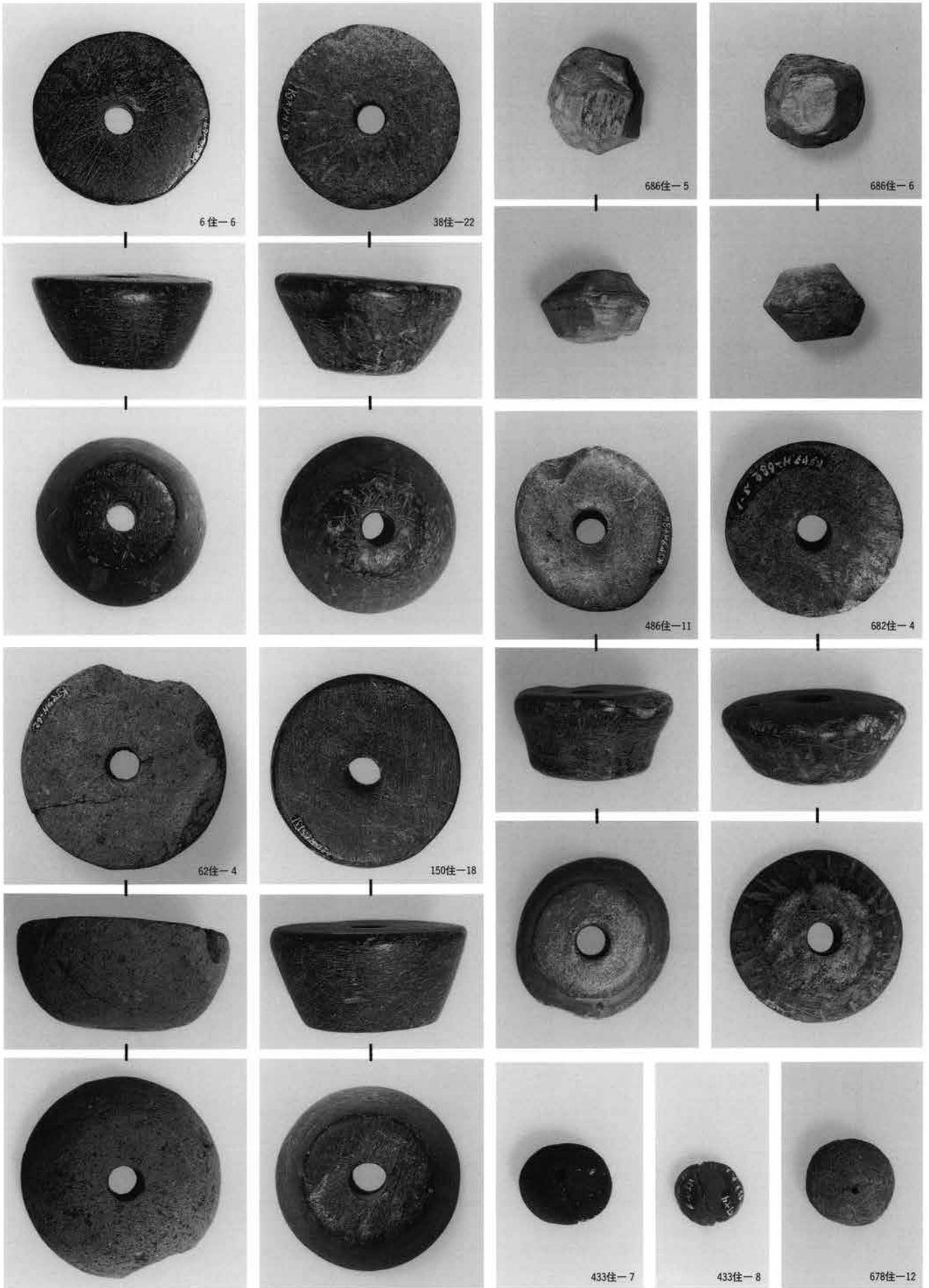


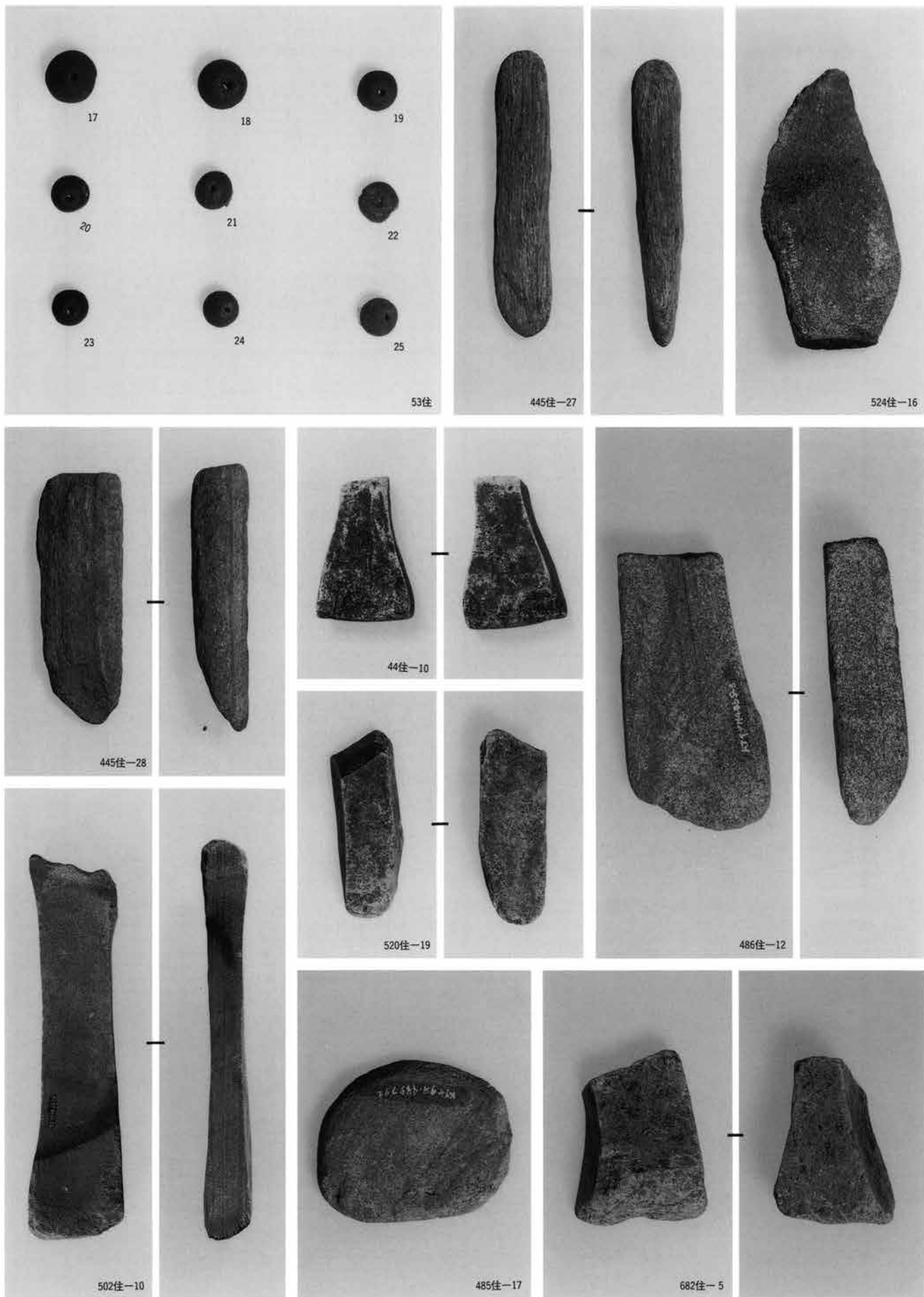
图版68

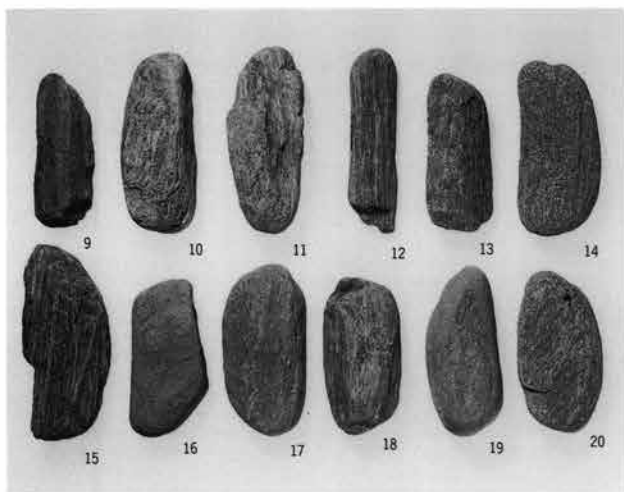




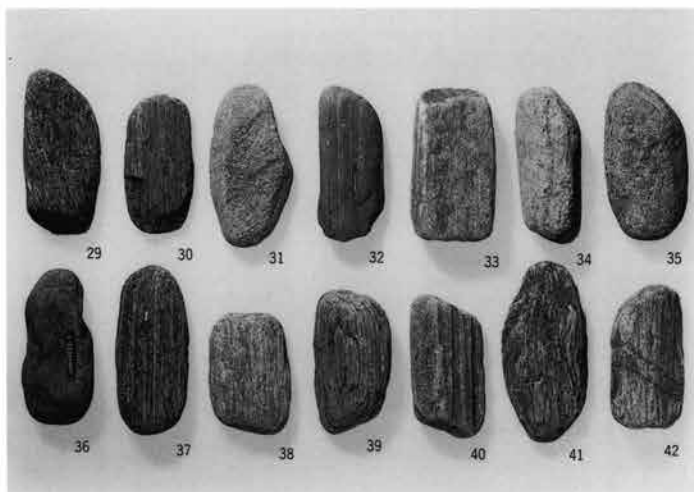




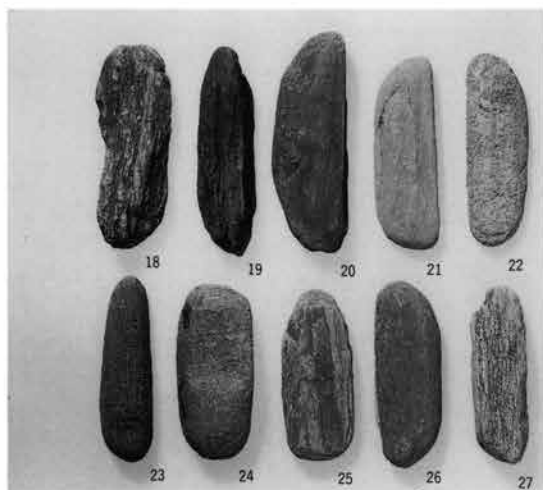




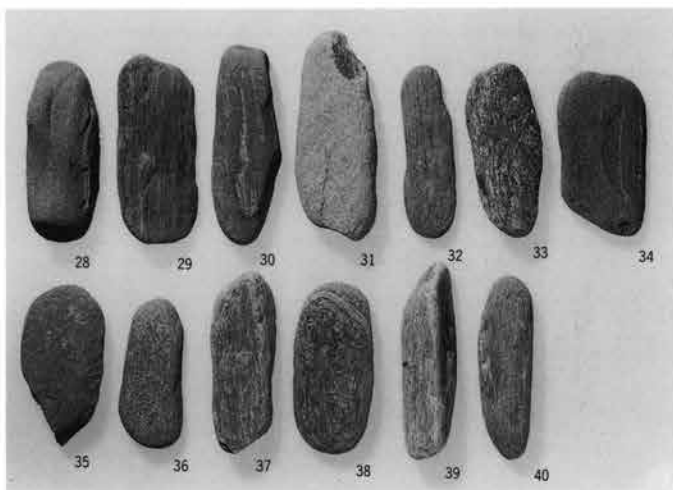
442住



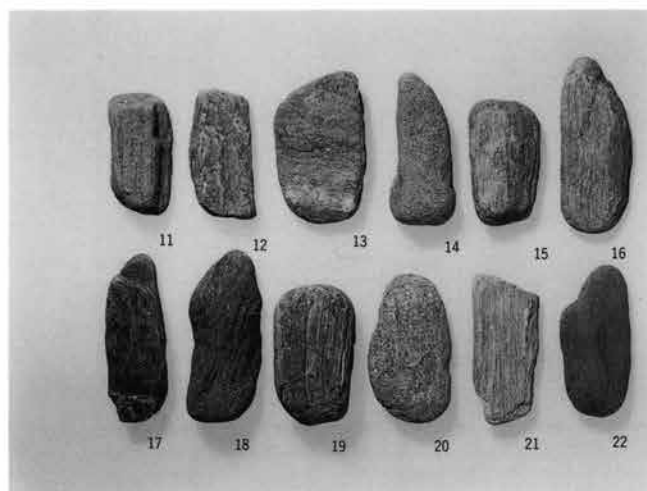
445住



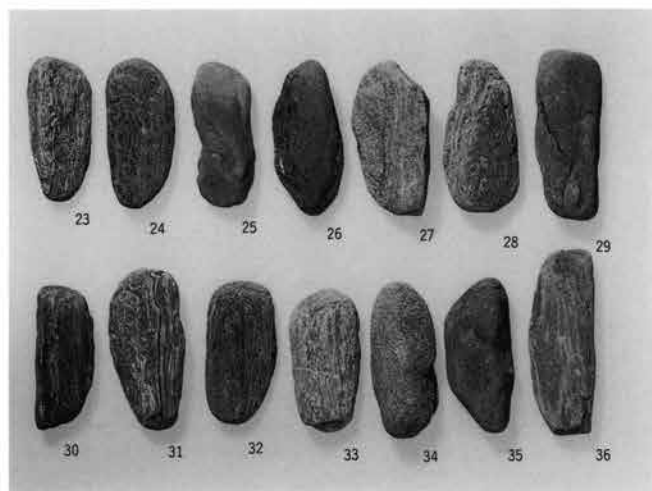
443住



443住



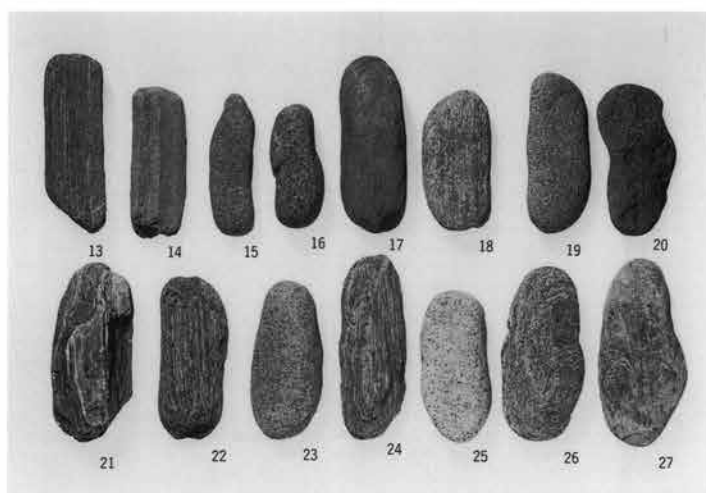
444住



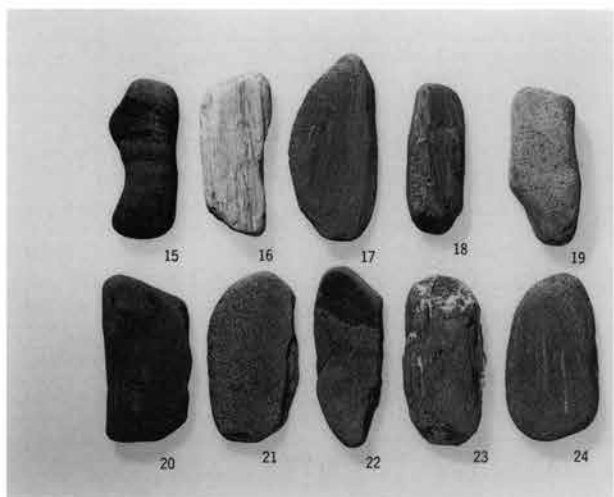
444住



460住



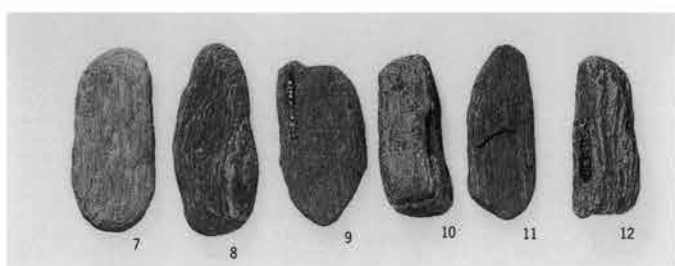
486住



456住



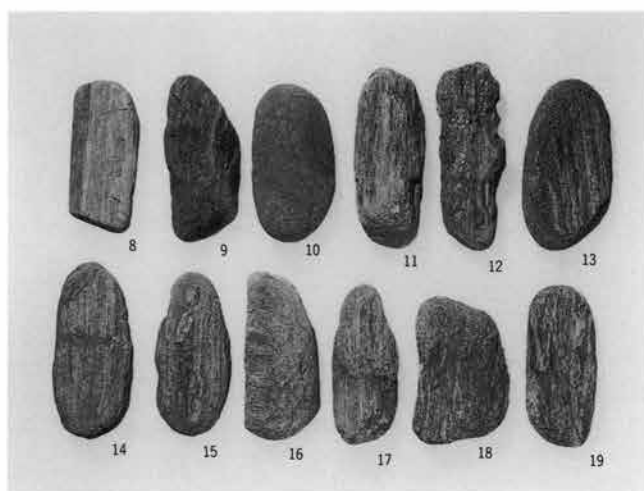
456住



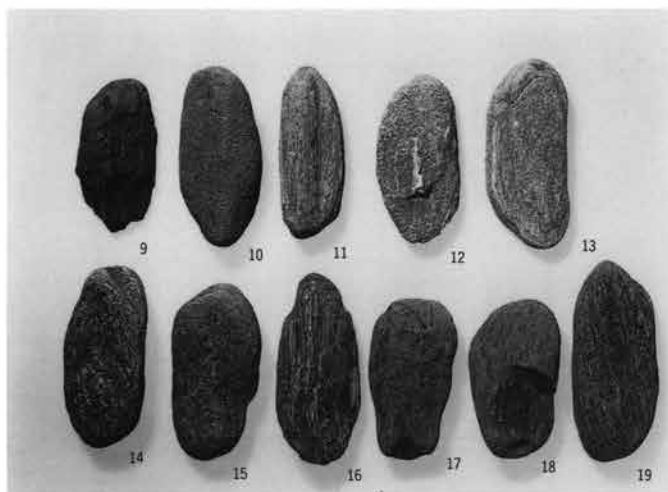
504住



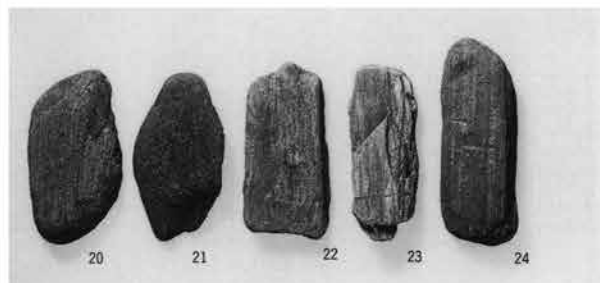
669住



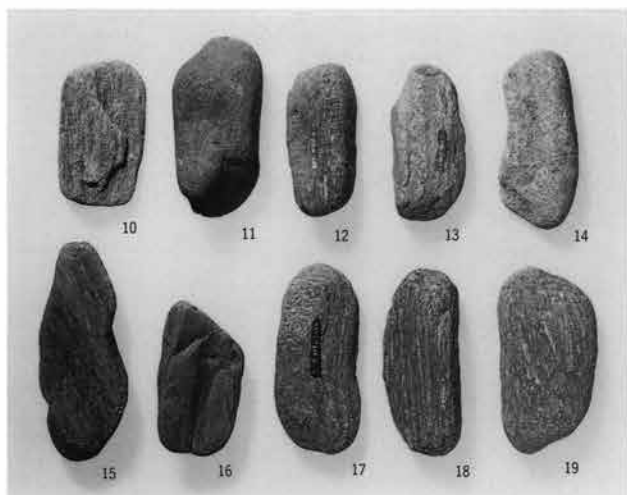
506住



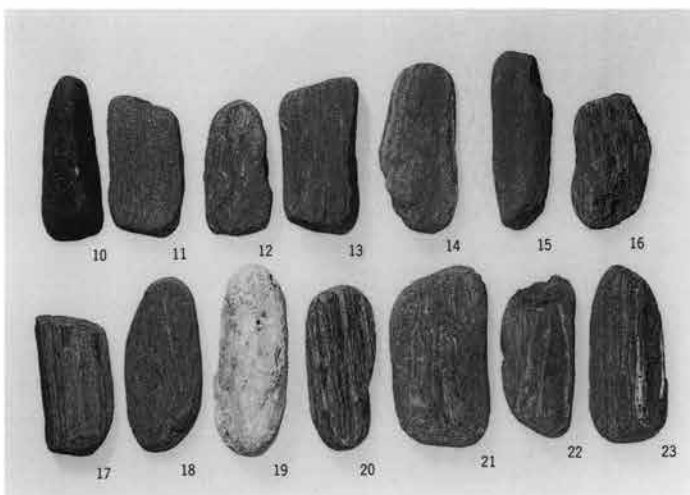
510住



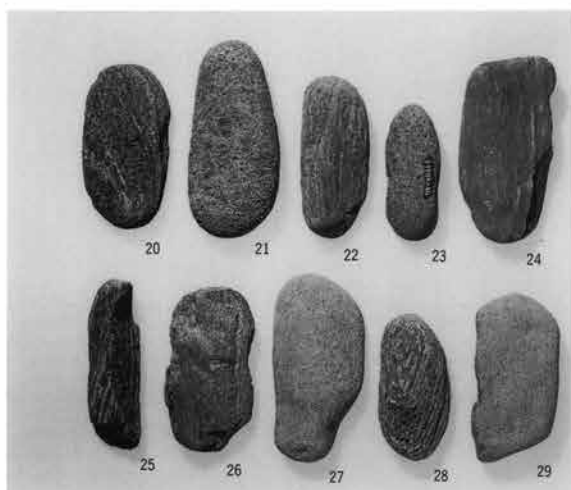
510住



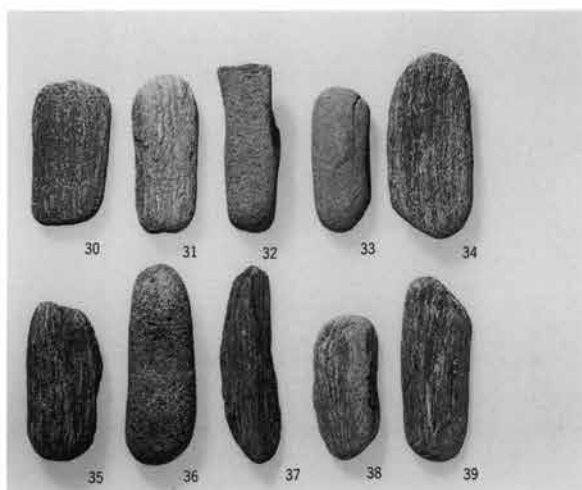
508住



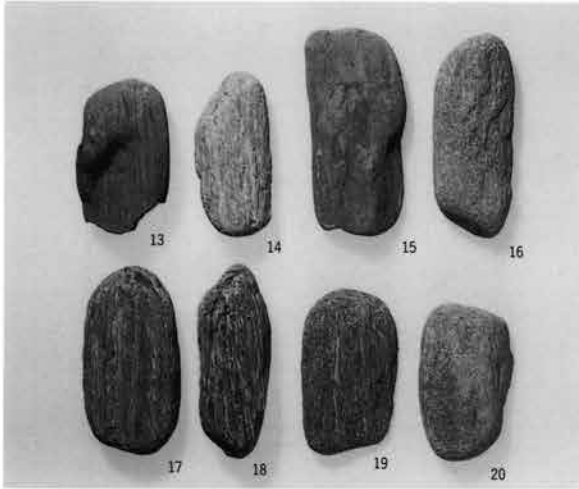
509住



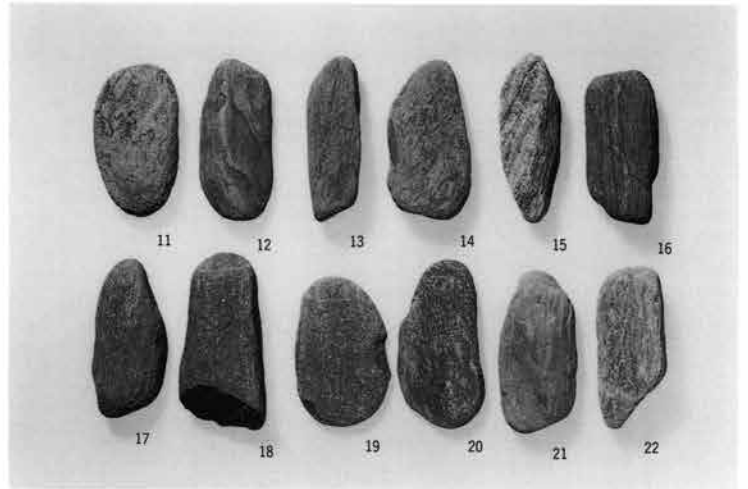
520住



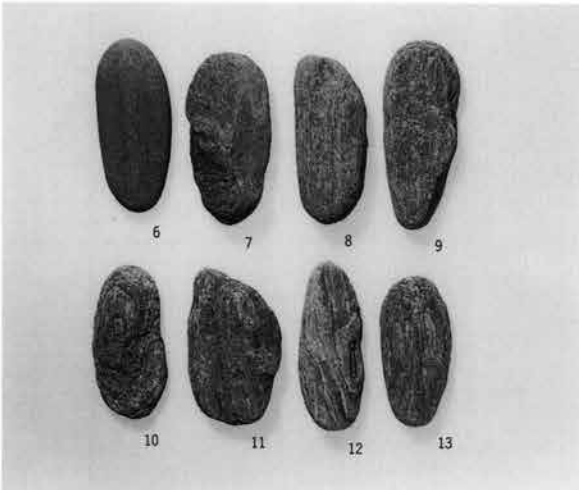
520住



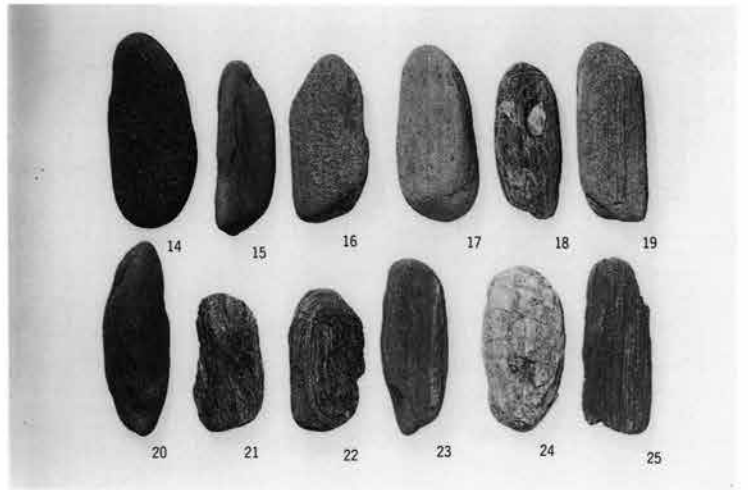
521住



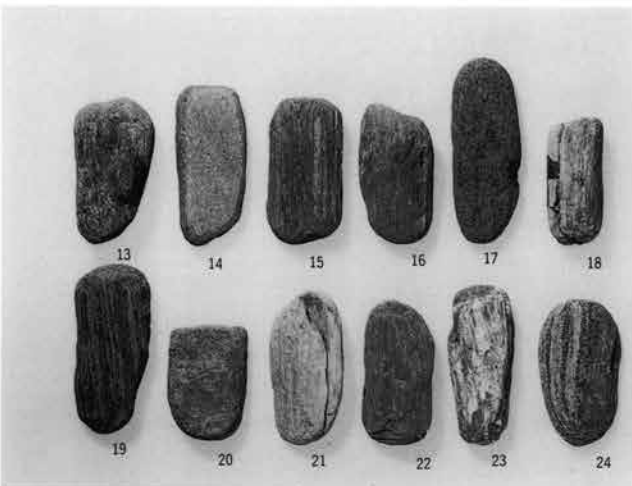
528住



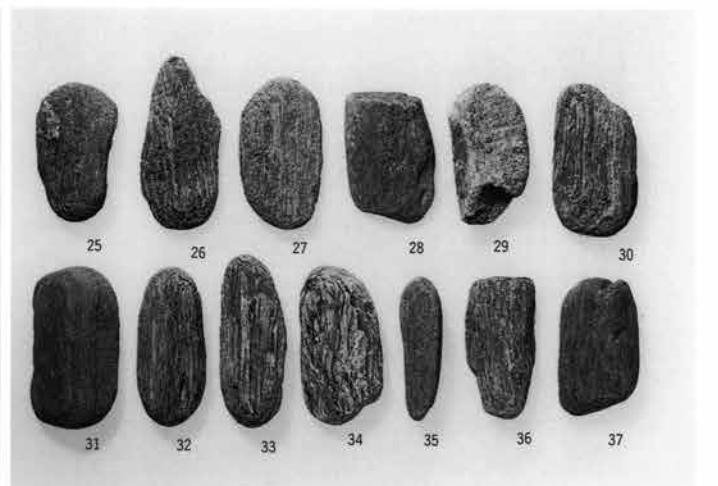
523住



637住



678住



678住

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第171集

矢田遺跡 V 関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第24集

平成6年3月18日 印刷

平成6年3月25日 発行

編集/群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行/群馬県考古資料普及会
勢多郡北橘村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷/朝日印刷工業株式会社



矢田遺跡遺構分布図(1/1000)